
俺は闇、幼馴染は光の勇者様

焼き芋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は闇、幼馴染は光の勇者様

【Nコード】

N5428Q

【作者名】

焼き芋

【あらすじ】

平凡な高校二年生の俺は完璧すぎる幼なじみの彼女といつもと変わらず下校していた。いつもごちゃごちゃしているがそれなりに普通だった生活は彼女が俺を巻き込んだせいで異世界へと移ってしまう。「勇者様は?」「こいつです」当然俺は逃げるに決まってる
これからドタバタ生活が始まるらしい

1話 巻き込まれたら逃げましょう(前書き)

《読むにあたっての注意 2011 7/29 更新》

この作品は誤字・脱字が多く、加えて駄文である事より相当読み辛いものになっております。

所々のシーンが他の作品と似てしまってる場合があります。

それに対して嫌な気分になる方はお読みしないほうが良いと思います。

それでも構わないという方は読んでくれると嬉しいです。

1話 巻き込まれたら逃げましょう

なんとも平凡な高校二年生。

それが俺。かげやまてつや景山徹夜である。

成績は普通。運動神経は…まあ、いいほうだろう。

ルックスは他人からは良いほうだと言われるが自分は微妙だと思う。いつもへそまで伸ばした黒髪を後ろで縛っている。

そんな平凡な高校生の俺には少し近くに変な人間がいる。

変といつても変態なのではない。あまりにも完璧すぎるから変なのだ。

「徹夜、一緒に帰る？」

この声の人が変な人だ。

幼なじみの内藤ないとう みつき美月。

スポーツ万能、成績優秀、ルックスは最高（街を歩いてるだけでスカウトが多数）。

人間関係は良すぎるぐらい。全てにおいて万能である。そして

「その前にあの人が呼んでるけど」

小柄な美少年が美月みつきを呼んでいた。

美月の最高すぎるルックスは…

「好きです！付き合ってください！」

…学校中をファンだらけにしている。

「ごめんなさい」

切り捨てごめんですな。

「なんでダメですか。理由を教えてください」
それでもすこしは粘る美少年。それをみてにつこり笑った美月は

「私には好きな人がいるの」

こんな事を言つて断るのだ。正直誰が好きなのか俺にもわからない。この発言は美月のファンクラブ（男女合わせて）の人たちを刺激し、この学校では日々影でファンクラブの人間が怪しい人間を消している。

俺も消されかけたときがある。誤解は解いたし、闇討ちしてこようとしてきた奴はこの世から消してやった。

「じゃあ。徹夜帰ろう」

「・・・はあ」

正直なんで俺といつも帰っているのかわからない。

好きな人がいるのならその人のところにいっていればいいのに…。

美月みつきと帰っているのは帰ろうと誘われるからだ。

仲が悪い友達ではなくただの幼なじみ、断る理由がないのだ。

「できー。今日もまた先生にほめられちゃったんだよねー」

「ふうん、よかったな」

年は同じだが違うクラスの美月。いつも帰るときにはこうやって報告してきている。

いつも二人で帰ってるから地味におれは有名になってしまっている。友達が言うには俺もカッコイイらしいのだが（さっきも言ったように俺は微妙だと思ふ美月といるとかすんで見えるそつだ。

たぶんその友達は美月と一緒にいる俺を妬んでいて、離れさせるように言ったのだろう。

俺はモテなくてもいいし断る理由がないから一緒にいるだけなので

関係ないのだ。

「お前の好きな人って誰よ？」

なんとなく気になったから聞いてみました。

正直失礼な人ですね俺って。

「ふえ！？そりゆあ・・・いつも近くにいる人かな・・・」

少し顔を赤くしている美月。言葉もおかしくなってる。

「近くにいる人・・・？誰だ？」

よくわからないので首を傾げる俺。

「・・・ハア・・・なんだかなあ」

よくわからないが睨んできている美月^{みつき}。

・・・なぜ？

「まあ、頑張ればいいんじゃないやね？俺のことなんてほっといてそっちいけよ」

そうそう、俺の近くにいる事はまちがいなのだ。

「・・・(ムスッ)」

いきなり頬を膨らませて俺のほっぺをつねり始める。

「むぎゆがああああアッ！！やめろ！」

正直こいつは握力も筋力も強いからまじめに痛い。

前に横腹を軽くつつかれたときは骨にひびが入ったほどだ。

俺でなければポツキリと骨折していただろう・・・俺も怪物なんじゃね？

「あのね。鈍い事は犯罪だよ？」

そんな犯罪があつたことは俺は初耳だ。
そして俺は鈍い・・・のか・・・？

「はいはい、ごめんごめん」
てきとくに謝って頭をポフポフとやさしくやつとく。

「・・・むう、正直には謝ってない」
そついいながらもなぜか嬉しそうな美月の顔。
なぜそんな顔をするんだろうか？

『クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス
スロスロスロス』
はじまりましたファンクラブの嫉妬の嵐。
いつもこれが続くわけだが、いい加減物理的にファンクラブを潰そ
うと思う。

「クロス・・・ウアアア」
やっぱり今回も襲つてきますファンクラブ一同。

「らアツ!!」
最初の一匹に蹴りを打ち込めば
そいつは後ろのも巻き込んで10?ほど吹っ飛んでいく・・・やっ
ぱり俺も化け物じゃね?
とりあえず迫ってくるファンクラブソビみたい一同を物理的に処理。

「えっ!?なにこれ!?!」
後ろでいきなり光りだした。それに美月は驚いてるようだ。
なんだッ!?とおもい振り返ると美月の足元みつきには..
金色に光る魔法陣が・・・え!?マジで!?!

「え？ひゃあ！」

どどん魔法陣のなかにゆっくりと吸い込まれてく。

美月はたばたと手をうごかし空をきつてい^{ガシッ}「・・・俺の袖をつか^{そで}んだ。

「やらせるかッ！」

とっさに俺はそれを引きちぎる。

フフ・・・面倒事に巻き込まれるのはごめんなのだよ！フハハハ^ガ
a・・・手首をつかまれた。

「いいいいやあああああああつああ！！！」

どんなに抵抗しても吸い込んでくる魔法陣と手を離さない美月。

もう・・・無理だ。魔法陣のなかに俺と美月は消えていった。

???

ここはどこだろうか？

あたり一面真っ白の部屋で、目の前にはフードをかぶった大人たちが10名以上。

そしてその真ん中の前に立っているのは、同い年ぐらいの金髪の美少年。

よく見ると美少年もフードをかぶった大人たちもこっちを見てポカ^ンとしている。

「・・・勇者様が二人？」

は？何言ってるのこの人？と、心の中でおもっていると...

「勇者様はどちらですか？」

再び美少年がそんな事を聞いてきた。

「ハハアーン！！」
「……（ドヤ顔）よくある勇者に召喚されたって
いうノリですな。」

「こういう時はやる事は一つだ！」

「こいつです」

当然。美月に押しつけさ！

まあ全てにおいて完璧な美月だもん。それに魔法陣は美月の下に
あったもん。

「ええっ！？私に押し付けな……」

「そうですか！あなたですか、歓迎します、

勇者様、この国は……え〜つと、なんて言うの？（俺の美少年
の声マネ 完璧です）」

まあ、途中で仮面がはがれたけど別にいいでしょう。

「……この国はサラスムです」

美少年がビククリしながらも一応答えてくれる。

「……（ジー）」

その間も美月はあまり怖くない……てか可愛い目でにらんでくる。

「説明しろよ！お前誰だよ！何で召喚したんだよ！とりあえず茶だ
せよ！魔王何代目だよ！」

「ハヤクして欲しいこっちは疲れてるんだ。」

「ええ……私はこの国の第二王子のラウスです。」

「さっきあなたもいったとおり魔王が現れたんです……あれ、魔王
現れたの知ってる？」

いいから早くして欲しい。

「魔王の軍と人間と獣人と竜の連合軍で応戦しているのですが・・・倒す方法が見つからないので古代の魔法を使い勇者様を呼び出して・・・。

まあ、だから・・・倒してくださいと」

「・・・美月ホンッ・・・頑張れ」

美月の方に手を置いてガンバレの一言。

「えええっ!?!?」

それに驚く美月。

これから異世界の物語が始まるのだった。

1話 巻き込まれたら逃げましょう(後書き)

2011 7/17 訂正しました

2話 巻き込まれたら諦めるのがよし(前書き)

前回までのあらすじ

美月のファンクラブ一同という名のゾンビの軍団を相手にしているとつぜん美月が魔法陣に飲み込まれていく

当然俺は逃げようとしたが

美月の魔の手により巻き込まれていったのだった!!

2話 巻き込まれたら諦めるのがよし

いきなりの勇者宣言。当然、俺はお決まりのパターン丸投げだ。そしてあの白い部屋から王の間というところに連れてこられた。なにかやるようだね・・・めんどくさ　0　0、；
そこには腰をひんまげたご老人と数人の高そうなピカピカの衣装をきた中年ども。
ふむ、お偉いさんか。

「ではあのグレイグがもってる水晶に触ってください。魔力量と光の力がどれだけあるかわかります」
王子がそんな事を言いながら腰をひん曲げた老人を指差した。
グレイグって言うのか。とりあえずは、俺が先に歩いて行って触れる。

何事もすごいほうは後にやらせたほうが盛り上がる。
触ると水晶が紫色に光り出した、結構な量の光だ。

「おお！」「これはツ！！」とかお偉いさんが騒いでる。
次は白く光り出した。・・・ほぼ光っていない。

「・・・」「うぜえなこいつら

「おぬしは・・・魔力はトツプクラスでも光の力がないのお・・・」
グレイグという老人がそんな事を言ってきた。

おお、俺魔力トツプクラスなんだ！なんかちょっと嬉しい。
も、もしかや美月に勝てるのでは！

そんな事を思っている。次に美月がその水晶に触った。

ピカアアアアアアアアアアアアアアアア（紫色の光）

俺の光軽く超えてますが・・・

ピカアアアアアアアアアアアア（白色の光）

・・・ふ、期待した俺が馬鹿だったね。周りのお偉いさんたちも大

はしゃぎ・・・死ね

「おお、最初にやった少年の言うとおりこの少女が勇者かッ!」
今まで黙ってた20歳後半の王様みたいな人が大きな声で言っている。

まあ、面倒ごとに巻き込まれなさそうでもよかった。

「だが、あの少年もすごい量の魔力だったな。ふむ丁度いいから勇者のお供に・・・」

ああ!面倒な事にしないでッ!!

慌てて否定しようとする俺。隣では美月がめっちゃ嬉しそうなんだけど・・・

「私・・・あの子ハンサムだし・・・近くにおいておきたいわ」

初めて口を開く20歳前半の王妃様。ああッ!!そっちもめんどくせえ!!

「・・・レミア。一応私・・・お前の夫なのだが・・・」

「・・・(ジ)」

黙って見つめる王妃様。

「レミア・・・」

「・・・(ジ)」

黙ってる見つめ続ける王妃様(見つめるといっても睨むのに近い)。

「スマン・・・許そう・・・」

よええッ!!王様弱いよ!!

「いやいやいや、俺は嫌ですから!!」

相手がこの国の王妃様なのを忘れて大声で否定する。

王様は「ナイスだ!!」とも言わんばかりに親指をうえに突き出してグツッてやっている。

王妃様は慌てて出てこようとする兵を手で出てこないよう指示してから口を開く。

「なぜ？」

ええ？そんな事を聞くの??

「そりゃ俺の好みじゃ」

ちよつと失礼だが本当のことを言わせてもらおう。

「……(ジー)」

また睨んでくる王妃様。

「(ジー)」

それに負けじと俺もにらみ返す。

「……(ポッ)」

頬を赤くして目をそらす王妃様。

「めんどくせええええええええ!!」

つい大声を出してしまう俺。そしてぶすぶすとして俺の頬をつねってくる美月。

ちなみにさつきから王子は美月をぽけっとながら見続けている。
……めんどくせえ。

「と、とりあえず勇者様とそこの若者を宝物庫まで連れて行きましょ」

おお、グレイグが収めてくれた！ナイスだ！！ナイスだよグレイグ！！

歩いていき階段を登るとそこには大きな扉がある。

そこに入ると金や宝石などでピカピカと部屋中が光っている・

・・・うああ、すげえ

そこからおおくに入っていくと扉があった。古くて頑丈そうなものだ。

「ではこの中に入ったら何かを一つお選びください

運命は決まっております。これがいいなとおもったものが貴方にふさわしいものです

・・・まあ、その若者も選んできなさい」

まあ、勇者は俺じゃないからな一応美月がいるかぎり俺を追い出すということはないだろうが、・・・ふむ、いろいろと情報と資金集めしとかないと・・・。

部屋の中に入っていくそこにはブレスレットや指輪などたくさんのものがあった。

剣なども置いてあるし特別なものなのだろうか。

「んゝ、私これにしよう！！」

美月が選んだのは金色のブレスレット。天使の羽のようなものや十字架などが彫つてある。ふむ、そういうのでいいのか。

それをつけるときなり美月がポーとし始めた。微妙に体の周りが光っている・・・めんどくさそうだな。

「美月？」

「・・・」

「美月どうしたんだ？」

「・・・」

「みつぎッッッ！ー！！」

「はうあッ！！な、なんか白い服着た金髪の少女と話してたの・・・」

「ふ、ふう〜ん」

正直「何言ってるんだこいつ？」とおもったけど勇者として召喚されたこいつだ。

なんでもありだろう。

「む〜、いいのがないなあ・・・」

本当になにもいいものがない・・・あまりにも興味が出なくて不自然なくらいだ。

「はア・・・」

ため息をつきながら壁に手をつく。

(ゴゴゴゴゴツ！！) え？なに？

見てみると俺が手を置いたところの壁がへこんでいてなにかのスイツチみたいだ

そしてその壁が開いていた。中にはもう一つの小部屋。

「ふむ、隠し部屋・・・面白そうだ」

なぜか気を引かれた。不自然なくらいに気になって・・・。そっちに行くしか考えられなかった。

「待つてよ〜・・・」

美月が追いかけてくる。

その部屋の中には特に何もなく、真ん中にポツンと俺の腰あたりまでの高さの四角柱が突き出している。

そしてそこには布がおいてあり、その上に一つだけ黒い指輪が置いてあった。

これといってめずらしいものでもなく目立った飾りがあるわけでもない。

だけど…

「これにしよう」

自然とこれが欲しくなった。

他の金色や銀色のものよりもこいつのほうが数段魅力的に感じたのだ。

「うーん・・・似合いそうだからいいじゃない？」

そういう問題ではないんだけどな。

そうおもいながらも指輪を右手の人差し指につけてみる。別におかしな場所じゃないよな・・・？

つけた瞬間に俺の意識が暗闇に飲み込まれた

2話 巻き込まれたら諦めるのがよし（後書き）

なぜかそんなキャラにしようと思ったわけではないのに

王妃様がゲテモノに・・・ッ！！！！

こゝ、これは・・・！！！！

徹夜さんの言葉を借りるとですな

めんどくせえ・・・ですな！！

2011 7/17 訂正しました

3話 面倒だけど決心が大事（前書き）

前回までのあらすじ

この世界に着てからはめんどくさいことばかり

ゲテモノ王妃はいるは・・・

ゲテモノ王子はいるは・・・

なんかとても気になる黒い指輪があったので

装着！してみた・・・

3話 面倒だけど決心が大事

俺が闇の中にいた。

「ここはどこだ・・・?」

当然答えてくれるものがあるはずもない。つい言葉に出してしまっただけだ。

ここはお前の心の中だよ

なんか言葉が頭に響いてきた。

それに驚いている間に視界に変化があり、目の前に黒い髪の可愛い少女が立っている。

「お前は・・・誰?」

頭の中にこんな少女がいるなんて・・・ツ!!

お、俺はここまで変態だったのかッ!!!!!!

・・・いや、変態とかそういうことじゃないから

あれ?俺の心でもっていた事なのに、何故にバレバレ?

さつきも言ったとおりここはお前の心の中だ、簡単にわかる

ふむふむ、これで謎解明。

てか、それよりも早く誰だがいえよコンチクショ〜(なげやり)。

私は黒い指輪に封じられていた精霊とでも思ってくれ

へー、ソウナンド(棒読み)。

・・・話を進めよう。お前は力と知識が欲しいか?

力?知識?なにそれ?力って何の力だ?知識って何の知識だ?

…説明頼む。

…めんどくせえ

おお、なんか仲間なきがする。

力はお前の中に眠っている力を引き出す。知識は私が知ってる限りのものをお前に与える

魔法などのものだ。ただし、一つ条件…いや、お願いがある
お願い？無理なものじゃなかったらやりませんが、できるかぎりのものでおねがいね。

だって、めんどくさいの嫌じゃん。

心配しなくてもいい、私はここに何百年も前から置きっぱなしで
ね。いい加減飽きているのだよ。だから私に外の世界を見せて欲しい
い

おお、そんなことでいいのなら。

「交渉成立だ」

そう言葉で言いながら手を伸ばす。

その手を黒い髪のかわいい少女は一瞬見たあとに、同じように手を
伸ばす。

「ありがとう」

少女の声はじめて心ではなく耳に響いてきた気がした。
その瞬間に闇の中から俺の意識は出ようとしている。

「あれ？力ちからってどうやって使うの？」

「心配せんでいい。最初は私が手伝おう、感覚を覚えたら私が手伝
わなくても使えるようになる」

その言葉を最後におれは元の場所に戻った。

「起きないときには気合をこめた魂の一発」

なんか無駄に熱そうな言葉を言いながら拳を振りかぶっている美月。ちなみに俺はこの時点で復活した。

「(ビュン!!!)(うおおおおおお!!!)」

慌ててかわす俺。風を切る音が顔の横を通り過ぎていった。

「おお！魂の一撃でおきた(?!)」

俺がおきたことに喜んでる美月。

いま・・・お前何しようとしたよ？

「・・・」

無表情でずっと美月を見つめていると...

「・・・ごめん(サツ)」

顔を背けて謝ってくれた。

なんか微妙に顔が赤くなってるのは何故だ。

「ふむ、ちよつと試すか」

なんとなく力とやらを試してみたいな、念じるんだっけかな？
うおおおおお！出てきておくれえ〜！

出る、とでも一言念じれば出すのに無駄に暑苦しくやらないで欲しい
その声が聞こえるとともに、自分の足元の影が動いたように見えた。だが、影ではない。それは影ではなく真っ黒な闇だった。それが部屋全体に広がるようになる。

「うわあっ!!」
いきなりの事に驚いて美月が声をあげている。

だが美月には何も起きない。
闇が行こうとしないのもあるし（たぶんこれは俺の気持ちのせいだろう）。

闇が出ると一緒に美月のほうでは光が壁のように美月を覆っている。闇は光に少しでも触れると消える。

「ふむ、闇と光は対極の存在、か・・・」
やっぱりこれはさっきまで考えてた事を実行しなければならないだろう。

一人になるのは寂しいが仕方ない。

「美月」
闇が完全に光に消されたのを確認してから口を開く。

「なに？」
すこしおどおどしながらも聞いてくれる。

「俺、二日後朝早くにはこの城を一人で抜け出すから」

「ええっ!?なんで?私も行くッ!」
「ふむ、私も行くとききましたか。」

「さっきの闇を見ただろ？」

俺は闇、そしてお前は光。しかも勇者様と来た、勇者様ご一行に闇なんかいらぬさ

光は闇を打ち消すし、俺が本気で攻撃するときには光を闇が食う場合だってあるだろう

おれはお前の足手まといになるだけだ。

ある約束もあるしこの世界を旅してみようと思うんだ。

ついでに元の世界に戻る方法も捜しておくさ」

美月は最初は納得いかないって感じだったが俺が口を開くたびに、その気持ちが無くなっている。

「また、あえるかな？」

「会えるさ、すぐに出発するわけでもないし、もしもお前がやばい時には駆けつけてやる」

まあ、やばいときなんてほとんどないだろうけどな

「うん・・・」

「まあ、魔王討伐頑張れや」

頭をぼふぼふしながら応援しとく。

「じゃあ、外に出ようか」

美月を引き連れてこの隠し部屋から出る。

この隠し部屋は知識のなかに闇の使い方も混じっていたので、それを使って無理やり閉じておく。

そのまま武器の宝物庫を出るとそこには王子とグレイグ（だっけか？）がいた。

「ふむ。無事に済んだようだ」

グレイグ（だよな？）が口を開く。

ああ、と返事をして歩き出す。さっきから王子が美月しか見ていないあとで消すか？

いや、王子だからやめとこう。うん？そういえば王妃様20代前半に見えたけど、こいつ第二王子だからありえない歳では・・・？まあ、そんなところはおいといて資金集めだ。ここは宝物庫だ。

「おっと・・・」

わざと転んだフリをして金貨の山にざっくりと手を差し込む。

闇は便利だ。本当にできるのか知らなかったけど闇は物を食い、それを内部で保存できる。

闇を使い金貨を300枚程度ごっそりともらっていく。当然、金貨の山はへこんださ。

「えっと・・・今盗ったよね？」

王子があからさまに疑いの目を向けてくる。

「すまん・・・つい」

俺は謝りながら服の中に手を差し込む。

そこから出したのは・・・金貨五枚。

「・・・」

うお、めっちゃすごい目で見てくるんですけど・・・

めんどくせえなこいつ。

「嘘だよ、ほら」

もう一枚金貨を取り出す。

「はぁ・・・別にいでしょっ」

めっちゃあきらめながらも見逃してくれる、いい人かもな。

そういつて宝物庫を出るとグレイグはやる事がなくなったのか一人でいなくなった。

食堂に向かうそうだ。当然めっちゃくちや豪華らしい。

その間に俺は王子からこの世界の事を聞きだす。

この世界は二つ大陸があり南は魔界と呼ばれる魔王の占める国。

北が人間や獣人、竜などのすむ、今俺達がいる大陸だ。そしてその南と北の大陸で戦争中。

北の大陸には人間の3つの大国と少数の小国。そして竜と獣人など
のいる大国。

そして俺らのいるのは三つの大国の一つのサラスムという国だそう
だ。

あとさりげなく聞いてみたが、闇のようなものを使えるのは魔王と
魔族と知能の高い魔物

あとは人間と魔族の間に生まれたハーフだ。

この国は逃げてきた魔族などを保護しているようなので何人かは居
るらしい。

この国での魔族は特定のデータを持つてる人なら大丈夫、そのほか
はだめとなってるらしいね。

他の国ではハーフなら王都にも入っていいという許可を出されるら
しいが魔族はだめらしいんだわ。

ふむ、俺はどこまでも邪道ですな。

ふむ、あとはこの勇者様ご一行に男が入らないようにしなくては…

ふう、めんどくさい事がたくさんだ。

3話 面倒だけど決心が大事（後書き）

美月をしおらしく、しおらしくと言ったのですが
本当にしおらしくできたのかが不明
むっ、やっぱり難しいですね。こつこつのは

2011 7/17 訂正しました

4話 この日は疲れることばかり（前書き）

前回までのあらすじ

俺は闇の力を手に入れ

美月は光を手に入れていた

それを見た俺がある決心をする

4話 この日は疲れることばかり

今日は一日たった次の日だ。

昨日はいきなり召喚されてびびったけど、まあ、頑張るしかないだろう。

資金もゲット、衣服は、なんかもっていた引きずりそうなほど長いコートに闇を貼り付けて固定。

これを着て意識すれば闇にまぎれる事もできるし普通の剣などの攻撃も防げる。

やっぱり便利だな、闇。

そういえばこの日もめんどくさいことばかりだった。

王妃と王様の前で勇者ご一行についてお願いしたときだが…

「……なのでできたらほぼ女の方でお願いできませんか？」

絶対に美月と一緒に男がいたらへんなことを考えるだろう。

当然美月にボコられてその男は死ぬだろうが…

「……ふむ、そういうことならいいでしょう」

王が口を開く前に王妃が許可をくれた。

王様は「わ、私が言う事では……」とボソボソいつている。相変わらず弱いな王様。

「ただし、条件があります」

え？条件？

それってなんですか？俺に関係ないようお願いします。

「あなたにあとで私の部屋に来て欲しいです」

ああ…なんて俺に関係ありすぎるんだらうか。

めんどくせえ事やってくれんな、この野郎！

王様はもう黙ってるだけだし…まあ、とりあえずわかりましたの一言。

うああ、めっちゃ嬉しそうなんだけど…。

まあ、行ってあげたさ。

「失礼しま〜す」

ドアを入れて中を見る。

そこにはタオルのようなもの一枚というきわどい格好の王妃様が…

「失礼しました〜（ボタンッ）」

よし、とりあえず落ち着け。

ここはスタンガンでも手に入れよう。あ、スタンガンこの世界にないか。

じゃあ、火系の魔法で焼こうか…あ、王妃殺したら国レベルで大変な犯罪者に…。

どうすれば…ッ！！

「ちよっ！？さっきのはシャワー浴びたばかりだったから！！」

この世界にシャワーがあるの正直驚きだ。

すべてアナログのようなものと…想像では井戸から水だしてバシヤーかとおもったよ。

「少し待ってなさい」

は〜い、と微妙な返事で終わらせておこう。あ、スタンガンのかわりに雷系の魔法があるのか。

おお〜、やっぱり魔法便利だな〜。む、俺使えるのかな？雷属性の魔法。

たぶん…使えないな

おお〜黒い子が返事してくれたぜ。それは嬉しいんだが、その内容はとても嬉しくないぜ。

「入りなさい」

ああ、地獄だ。超めんどくせえよ。

とりあえずドアを開け入る。

「今から王妃という事は忘れてください。簡単なお願いがあります」
うう、これは・・・ヤバイ気もするし、やばくない気もする・・・

(汗)

もう！！いやだあ！！めんどくせえよ！！

「異世界のことを教えてくれませんか？

子供に聞かせる物語とか・・・」

え？、いまなんて？おお！超ビビッタよ俺。

最初から言っただけだ。

ふむ、今度子供の施設をまわったりするんですか。納得です。

これから何時間かは王妃様にお話しをして終った。

なんか微妙に王妃様の顔赤かったんだけど・・・気のせいだよな。

ん？俺じゃなくて美月を呼べばよかったんじゃね？

あ、勇者様は忙しいからだよな！そうに決まってる！

それから部屋を出た後は食堂などにいつてみた。

知ってるものがないのでいろいろとチャレンジしてみた。

美味しい物もあればもっと美味しいものもあつたり（結局全部美味しい）

暇だったのでケーキをやっていた（当然許可なし）

そのコック長みたいなのがいつ追い出そうかとすごい目で見えてきたんだけど

ケーキのパン生地を焼いたところでそれが興味の目に変わっていた

あっちの世界にあつた食材はあまりないようだから似てるのを使ってやってみた

ふむ、選んだものは正解だった。パン生地もふわつとしつとりしていて良くできている

それで午前の時間は終わった。当然ケーキは作った半分は俺が闇で回収しといた

・・・コック数名に作り方教えていて疲れた・・・

最後の日とかいいながら美月とは朝しかあつていない・・・
うとう、あとで殴られそう。

まあ、それはおいといてとりあえず城から抜け出す事にした。
どんな噂が流れてるかしんないけどお偉いさんが俺に美月の事を聞きまくっている

そのなかには「恋人なのか？」というものもあつた。

ちがうと返事したら「ふむ、では何故勇者様は赤くなって黙っておられたのか・・・？」

こんなこと言つてた。はあ、めんどくせえよ。

それはそれとして城から出てみた（何回言ってるんだ俺は？）
メイドさんにこの城以外の王都のことを教えてもらった。

その中にはおれがイケメンなんだかんだというものも入ってたんだけど、気にしないでおこう。

とてもいい雰囲気でみんな楽しそうにしているところだった。

ふむ、俺の用事済ませて戻ろうかな。

むう、もう城についてしまったなあ。

用事もすんだから帰ってきたわけだが。

むう、本当に疲れるめんどくせえことばかりだよ・・・
はあ、疲れますな。

やっぱりさあ、何を考えてんのかしらんけどお偉いさんが俺を見ると近づいてくんだよね。

ホント困るんだけどなあ。

当然ほつといて逃げるんだけど今日はずっと起きてた。めっちゃ眠い。

たぶん日付が変わって6時間後くらいかな。

「よし、いくか」

この時間でも十分暗いのだがあと一時間すると一気に明るくなるから急いだほうがいい。

それにまだおきてないだろうがもう少したつとこの城の使用人たちもおきてくる。

自分の部屋を出てできるだけ音を立てないようにし、出来るだけ人に見られないように廊下を進んでいく。

自分の靴をはいてこの城の門にはあとまっすぐ行けばいいということころだ。

「…徹夜」

ふむ、昨日の朝にあった幼なじみの声が聞こえた。

「やあ、美月。お前にしては早いな」

振り返る先にはあの幼なじみ。

ふむ、そういえば、忘れてたものがあつたな。

「…いきなりだけどプレゼントやるよ」

ポケットから取り出したのは銀色のネックレス。

ハートなどの飾りが付いており小さい宝石が付いてた。正直高かつ

たよ、まあ、俺の金じゃないから問題はない。

それを美月の首につけてあげる。

「…ありがと」

少し頬を赤くして礼を言ってくれる。

「シャキツとしろよ、これから勇者様なんだから」
ちよつと笑いながらこんな事をいってみたり、正直何を言っているのかわからない。

「……うん」

むうう！！何を言っているんだ！！??

「……頑張つて旅してね。これ……私からのプレゼント」
少し頬を赤くしたかとおもうと顔を俺の顔に近づけてきた。

その瞬間俺の頬あたりになりか柔らかいものがあつたのがわかったえ！！??ええええ！！!!???な、なに!!?いまの!?

「じゃあね、徹夜。また会えるように頑張つてね。私も頑張るから」
そういつて少し赤面の美月は回り右をして走つていつてしまった。
おれは……
ポーツとしていた。

「い、いいいいかん!!しゃ、シャキツとしなくては!!」
そう自分を駆り立てて城の脱出に動く。
コートにつけた闇で暗闇にまぎれてたから見つからなかったが、もし誰かに見られたら……
なんでロボツトダンスで進んでいるんだ?とおもう事間違いなしだろつ。

ほんとつかれたよ城を出るまでに36回も転んだよ。
50?もないのになあ……

4話 この日は疲れることばかり（後書き）

うう、最初のヒロインの美月が

4話にして消えてしまった

それよりも道が分かれたというべきか・・・ッ!!
俺的に好きだったんだけどもな!!

2011 7/17 訂正しました

5話 どうなるかは時と運しだい(前書き)

前回のあらすじ

俺はある決断をし、準備を終えると
幼馴染の勇者様、美月に別れを終え
城を出たのだった

ふむ、どこに行こうか迷っちゃうな。
ゲームセンターでも行くか！・・・無いよね

5話 どうなるかは時と運しだい

俺は今フードをかぶって人ごみの中を歩いたりしています。とても目立つちゃうんだけど俺的にあまり顔は出さないほうがよさそうです。

この王都を出るまであまり顔を見せるつもりはありません。王妃とか王とかには黙って出てきちゃったからさ、搜索されたら面倒なのよね。

そういえば、俺は仕事と泊まる場所が必要なわけだ。だからギルドに入ろうとおもった。

城の使用者さんに聞いた話だと、ほぼラノベのモンハン（モンキーハンター略してモンハン）のハンターズギルドと同じだという事がわかったんだよ。

俺が入ろうとおもうのは、『スカイ・バード空を飛ぶ鳥』あたりがいいんだってさ。性格のいい人も多くてこの大陸でトップ3に入るほどの大きさなんだってさ。

ギルドの場所も教えてもらったので行ったのさ。

「……」

ぶおお、俺が入った瞬間のこの沈黙はすごいな。

とりあえず登録だな、というわけで登録できそうな人のとこにいったみた。

今の俺フードに魔法かけてるから見えるとしても不自然に唇から下だけですな。

「ギルドに登録したいのだが……」

受付（？）のようなとこに立っているおねえさんに話しかける。

「はいはい、この紙に書きちゃって」

ふむ、ギルドとかもこういうのなのか…む、本名はやるべきなのか？

偽名にするべきか？どっちだろおなあ…。

「・・・おい、その怪しいの」

なんか後ろから声が聞こえたけど無視。

あ、どう書けばいいんだろうか。

歳まで書くのツ！？ギルドめんどくせえな。とりあえず全部本当に嘘つかないで書いてみた。

それを渡すとおねえさんは奥に入って消えてしまった。

「お前みたいな怪しいが何でこのギルドに入るんだ？」

む？無視してるのにまだ話しかけてくる人がいる。

とりあえず振り向いてみよう。

うおお！すごいな？はある身長で腕は大木のように太い。簡単に言うとアスリートのふたまわりぐらいの大きさの筋肉の持ち主だ。これが戦いで鍛えてきた人の筋肉か、・・・暑苦しいな。

「お前、体ヒョロそうだな。よし、一発殴ってみろ」

おお、挑発のつもりか親切のつもりかわかんないけど（たぶん挑発だろう）

腹辺りをちよいちよいと指でさして殴ってきてもいいですよ宣言。

おお！楽しみだね、苦しみの顔・・・じゃなくてその筋肉のすごさを見せてくれ！

「・・・では、遠慮なく」

本気でやるのはまずそうなので3割程度で殴ってみた。

「ぐほおおおおおッ！！」

ああ！大男が壁まで吹っ飛んで行った！！（その距離5？程）

うああ、壁にひびが・・・弁償しないとダメかな？（多分気にするところはそのではない）

「「「「「「「「「「

うへえ、すごい目でこっち見てるよ。

こっち見ないでさつきと変わらず飲み食いしててくださいよ。

「は、いい、おまたせ」

そこに受付のお姉さんが俺のギルドカード（俺命名）を渡しに来てくれた。

この雰囲気はやばいな。超恥ずかしい（多分そこも気にする事ではない）。

「・・・ありがとう」

そう一言言つとカードをもらい

急いでギルドをでる。『化け物か・・・？』そんな声を聞いた、失礼な。

まず最初に忘れてたものがあつた、武器だ。素手で戦うのもいいだろうが...

己の拳一つで全て碎けるのなんてヒーローマンガくらいだ。

それにあの筋肉ムキムキのおっさんは碎けなかつたしな（碎けたら相当グロいだろう）

だから武器屋に行つてみた。

武器屋といつても買い取つた奴も売つてたりするものだ。

新しいのでなければ安くならつてほしい。

「お探しのものはありますか？」

店主が店に入ってきた俺に聞いてきた。

「・・・ふむ。いいの見つけたら買つよ」

たくさんのものがあった剣、槍、弓矢、モーニングスター、血で錆びたモーニングスターなどだ。・・・ふむ、モーニングスターの専門店か？

おお、丁度よさそうな二つ剣が並べておいてある。

剣を鞘から抜いてみる事にした。剣の刃はまるで宝石のように紫色の透明だ。

そして頑丈、その刃にはまるで底がないような感じがあった。

その剣は二つあり、二つで一組みたいだ。

・・・その剣には何かがいるみたいだ

久しぶりに聞いた黒い女の子の声だ。

ふむ、黒い女の子・・・クロと名づけよう。

犬みたいな名前にしないで欲しいんだけど・・・

でも思い浮かんだのはこれだけだからしょうがない。

ハア・・・、話を戻すわ。この剣には私と同じようなものがあるね。

でも目を覚ましてはいないみたいね。冬眠状態ってところだろう
ふむ、じゃあこれにしようかな。何かのときに力になるかもしれない。

「これ、もらえるか」

店主は一瞬驚くとそれでいいのか、と聞いてきた。

俺はうなずくと金貨50枚と言ってきた。

この世界の通過は銅貨と銀貨と金貨なのだ。

銅貨100枚が銀貨1枚 銀貨100枚が金貨一枚 ということらしい。

すごい金貨の価値は・・・まあ、当然俺は値切るぞ。

その結果渋々30枚まで値切れた。

フ……。俺がこの程度で満足するとても？もつと値切る。
店主は泣きながら20枚にした。まあ、微妙だがこの程度が妥当だ
ろうか。
ネックレス買うときに金貨は銀貨になっていたため何枚かある。
20枚数えると店主は微妙な顔で「またおこしく下さい」といつて
いた。
当然の結果だな。
ふむ、おれは2つ剣を買ったから双剣使いつてとこかな。
どこに行こうかと迷いながら歩いていると、裏の路地のほうで何か
うるさいものが聞こえた。

『言う事を聞け！このっ！このっ！』
なんだか気になったのでそっちに行ってみる事にした。
少し行つたところを曲がるとそこには鎖を持ったおっさんが何かを
蹴っていた。

その鎖の先には・・・む！犬の耳と犬の尻尾！
まさか！俺、この犬好き連合会長の前で犬をいじめているだど・・・
ッ！

「せえい！」

「げふっ！..！」
とび蹴りをおっさんに食らわす。

「何をする！..！」

「こんな子（犬）をいじめてるお前に言われたくないわ！」

「そいつは私が買った奴隷だぞ！」
奴隷・・・？」

改めてそつちを見てみると、犬の耳と尻尾が付いている人間。いわゆる獣人を言う奴がいた。まだ12歳ぐらいの女の子だ。

「・・・ロリ、で始まりコン、て終る奴？極め付けには痛めつけるという変態？」

つい口に出してしまった・・・。その男は体をプルプルしながら怒っている。

ふむ、じゃあ、ごうしよう。

獣人の少女についていた鎖を剣で断ち切る、拘束具も全部だ。

「なにをするんだ！私が買ったのに！」
それを見てさらに怒る変態。

「それはこの国の法律で許されているのか？」

「・・・」

男は黙りこくる。どうやらだめな事のようにだな。

ふむ、おっさんはほっといて少女に向き直る。

む、まだお前はこつちむいてたのか、とりあえずおっさんには腹パシんくらわせて気絶してもらった。

少女はこつちを見てまだ震えている。

むう、この姿じゃだめかなあ、とりあえずフードをとってみる事にした。

獣人の少女の震えはどのくらいかおさまった。顔を見せないのと見せるのでは違うね。

「もうクソなおじさんは大丈夫だから安心して、これ食べる？」

やさしく声をかけて懐（具体的には闇の中から）から一人分ケーキを取り出す

それを恐る恐る見つめる少女。

つまんで一口食べて見せるとフォークで少しずつ食べ始めた。

「……ありがとう」

獣人の少女の初めての発言だ。うわああ、この声癒される。

「お父さんやお母さんは？」

「……私と一緒にオークションで売られてた。まだ売れてなかった」

ふむ、オークションとか……そんなもんあんのか、潰すか……。少女に場所を聞いてみるとすぐにわかった。

あとは俺一人で潰しに行っても正当性がないな、潰す事はできるが……こういうときに使うのがギルドだよな。

「……一緒に来る？お父さんとかを取り戻す？」

こくん、とうなずいたので少女を引き連れてギルドに向かう事にした。

歩いてる間も少女はケーキはちまちまと可愛く食っている。ほんと癒されるわ。

ギルドについた

ギルドに入るとまた全員がこっちを見て黙っている。受付に行く

「依頼したいのだからできるか？」

「できますよ」

「奴隷オークションを潰す、で」

「！？、ええ？それって国がやる事じゃないですか？」

そんなに大規模な事なのか。
奴隷制度を潰すように頑張ってるのかこの国。
いい国だなあ……

「とりあえず依頼した。一人でも潰せるがそれじゃ後片付けが面倒
だろう?」

「……」

しょうがないじゃないですか

やるべき時よりもやった後が疲れるんですよこつこつこの

「では、依頼ボードに載せますね、どのくらい待ちますか?」
多分これは依頼の締め切りを聞いているんだらう。

「10分で」

「……」

「あくまで後片付けを考慮したギルドに依頼ですから、それにハヤクしないとオークション終るんじゃない?あ、あとその依頼には俺とこの子もついてくでん宜しくお願いします」

「報酬金額は?」

「ゼロで」

めんどくせえし、これだと依頼を受ける人はいないだらう。
では、と言葉を区切り。

奥の席に着く。

俺の隣には少女も座っていてまだケーキを食べている。
まだ半分程度だ、食べるの遅いねえ……癒される。

俺が出した依頼にはみんなが一瞬見たあと離れていった。ゼロにしたかいがあったぜ。

『あいつ・・・』

『ああ、あれは・・・』

男二人がなんか言っている。ちなみにフードをかぶってる状態なので顔を見られてない

『ロリコンなん（ヒュツ）・・・（ダラダラ）』

ちなみに最初の音は俺が手近にあったフォークを投げた音だ。その次は男達が汗をすごい勢いで流してる音だ。

その瞬間、扉が開き、三人の人が入ってきた。

一人は金髪で背も高く背中に金色の剣を担いでいる。俺より歳は同じか一つ上かな。

顔も良く、かわいいというよりきれいな感じだ。

もう一人も金髪で背が低く、14歳程度に見える。こっちは可愛い感じだ。

もう一人は仮面をかぶった黒いフードで体を隠してる性別不明だ。

この人は不明だ。俺の予想では小柄だし女性とみた。

飲み食いしていたおとこたちはすこしざわついている。ふむ、有名な人かな。

その三人組の金色の剣を担いでいる女が依頼をみている、俺の依頼を見てフツと笑った

うう、めんどくさい予感がしてきた。

そして依頼の紙を取ると受付のお姉さんに…

「これ、受けるね」

ううおおおお！誰も受けないようにゼロにしたのに・・・すると、その三人組はこっちにきて

「宜しくね、依頼主さん」
ニコツツと微笑んでいた。

「・・・よろしく」

はあ、めんどくせえ。そしてオークションの場所に行った。
まだ、やっているらしいな、まあ…とりあえずはオークションつぶしが始まった。

30分後（戦闘シーンは面倒なのでカットさせて
いただきました）

正直三人組は強かったです。

特に金髪の金の剣を担いでる女性は相当の強さだ・

警備のゴーレムみたいなのが襲ってきた時、五回剣を振るったように見えたのだがそのゴーレムは7回切られていた。

うむ、この強さにあの美貌、だから有名なのか。それにあの剣にはなにか苦手なものを感じる・

小柄な金髪の少女は電撃を帯びた拳を振るい、モンスターを砕くし。仮面をつけた人はすごい速さで敵をナイフで切っていく。

多分みんなAランク以上だね。

俺も負けないように頑張りました

火の球ファイアーボールつかって砕いてみたり、普通の拳で砕いたり（白い目で見られました）。

まあ、めんどろだったです。まあ、本気でやってるわけじゃないので疲れはしませんでした。

というわけで俺は後ろに少女を待たせながら。
オークションを仕切っていた奴を脅し中。

そして脅した末に

「そいつの親はそいつを身代わりにして逃げてったよ！」
うおおおおおおあああああッ！！

これは聞かせちゃいけないことを聞かせてしまった。
振り返ると少女が泣いている。

とりあえず仕切った奴に腹パン and 喉突きをくらわせて気
絶させる。

ぐあああ、こつこの苦手なんだよ！何言ってるのかわかんねえ
よ！

むう馬鹿になれ！おれ！フードをとって素顔を出して、と

「・・・顔を上げて涙を止めな、ずっと泣いているよりも笑顔のほ
うが楽しいしなんか幸せな感じがするよ（たぶん）」

うあああああん、恥ずかしい、何言ってるのかわかんねえよ俺！
恥ずかしいよこれ、おもいついたのがこんなに恥ずかしい、俺の頭
おかしいんじゃないかな。ううううう…

「俺は旅をするつもりなんだが、その悲しみを補えるかはわからな
いけど、一緒に来るかい？少しは楽しくていいと思うけど」
ううう、話が飛んだ気がする。

でも、どうすればいいのか俺わからないし…………！！

「…………行く」

マジか・・・これでこつこのとおもわなかったんだけど。
獣人の少女は必死で涙を止めようとしているよ。

ふむ、そういえばすぐに別れるだろうとおもって聞いてなかったん
だけど

この子の名前聞いていないな。だから名前を聞いてみました。

「…………ラウ・バーン。」

ほほうラウ・バーンですか。ラウと呼びますかね？

そうしてなんとなく旅の仲間さんが一人追加されてしまった。もっと言葉選べよ・・・俺。

そして・・・、

俺はまたフードをかぶりラウと二人で横に並んで座っている。

ラウはまた出してあげたケーキを少しずつ食べている。

そして少しはなれたところでは、警察のようなもの（よく言う自衛団かな？）と金髪で金色の剣を担いだ女性が話している。

『さすがは聖剣のラルドと呼ばれることはありますね。依頼お疲れ様です』

『いえいえ、今回は依頼主まで戦ってましたよ。なんか複雑でしたが・・・。』

まあ、その分楽でしたよ。じゃあ、連行お願いしますね』

そういつて話は終わっていた。

聖剣？聖剣ってエクスカリバー？・・・いや、あれは普通手に入れるのが難しいダンジョンとかの奥深くにあるのでは？・・・もしそれだとしたら俺が苦手なものもうなずけるな。

次は三人で何か話してるね、俺帰っていいかな？

そしたら俺のとこまでラルドと呼ばれている女性が歩いてきた。

「依頼主さん、お疲れ様。」

「お疲れ様です。報酬ゼロですがいいのですか・・・？」

「ああ、いいんですよ。もしかしたらですが他に良い者が手に入るかもしれません」

む？なんだというのだ？

「いきなりですが、私達とチームを組みませんか？顔を見せぬ方ええっ!？」

いきなりですか、しかし何故に俺？

「あなたは信頼できる人みたいだ、戦いの途中には少女を守りながら動き周りを見て邪魔にならないように動く、そして魔法も武術もどちらも優れている。

あとは、少女を助けて結果は悪くとも一人でここを潰そうとしている。

それは簡単に言う人はいてもやろうとはしないことだ」

あの報酬ゼロは一人でやろうと思っていたからだろ？って感じの事をいわれた

むう、なんだこれはあゝ。

俺が押されてる！押されるはずのない俺が（自分で思ってるだけかもしれないが）

まあ、この人たちも信頼のおける人だとおもつ。

警察の人たちにもどこか尊敬のようなものがある。

・・・ふむ

「では、こちらからもお願いしよう」

「受け入れた」

握手をして一応契約成立かな。ラルドは俺に他の二人を紹介した。小柄な金髪のほうはエミリイ・ライトオンというらしい。

マントをかぶって仮面のほうはライル・レイシーというらしいね。どちらも宜しくといていたのでよろしくと返した。

「あゝ、この子も付くけどいいかな？」

「問題ない」

ふむ、一言で切り捨てる心の広さ。いいかも

ふむ、顔見せないのも失礼かな、という事でフードを取ってみることに

「あゝ、仮面つけてる人もいるから別に見せたくなければ見せなくても ツー!!」

途中で声が止まったのは、俺がフードを取ったらなんか驚かれた。三人が少し後ろに下がっていく。

「うおお、ビックリしたんだけど」「……イケメン」「好みかもしれない……」

ラルド、ライル、エミリーの次々の発言。

むゝ、なんか、ねえ、うん、なんとも言えない。

コートを脱ぐ、なんか熱かったんだよね。

「む？剣が二つ？使ってなかったからいつも素手でやるのかとラルドの発言。」

「ああ、剣を買ったのはいいんですが、技術がないものでそう、おれは剣道すらやった事はないのだ。」

「ふむ、では今度お教えしよう」

ありがとう、といいながらギルドにもどる。

今日はそれきり終わり。

ギルドでは寝る場所も貸しているので昨日寝ていない俺は、一人で眠る事にした。

5話 どうなるかは時と運しだい（後書き）

むむ書けるとここまで書いたが無駄に文字数が多くなってしまった
2000文字までのつもりが7000近くなってしまったよ

ふむ、それはそれとして新しいお仲間増量中
今回は4人追加！

このメンバーで結構続くとおもいますね

2011 7/17 訂正しました

6話・・・俺って綺麗？(変態じゃないよ)(前書き)

前回のあらすじ

仲間が増えた！

ギルドでの仲間です

結構嬉しいと思います

6話・・・俺って綺麗？（変態じゃないよ）

ねむい〜。うう〜ん・・・。

俺がいるのはギルドで貸している宿の一室。

「もう朝か〜。ふあ〜」

俺は昨日お昼あたりに寝たんだがどうやらずっと眠っていたらしい
まあ、一日寝てなければそうなるのも不思議じゃない（？）かな。
む・・・？

「・・・おはよう」

「あ、おはようございます」

俺の目の前にいるのはラウ。犬の獣人の女の子だ

・・・なんでここにいますか？

「・・・じゃ」

そういつてラウは部屋を出て行った。・・・なんだったんだ・・・
？

ふむ、とりあえず受け付けとかがあるところに行ってみようかな。

あそこで食事とか取れるらしいし、という事で俺は髪の毛を束ねな
いまま完全にダメ人間だろみたいな服装で行く事にした。

廊下を歩いていく、ときどきすれ違う男の視線がうぜえ。

それにしてもなんで見られてるんだ俺？

んで、目的地についた。

全体を見てみると何個かある机の一つに、昨日仲間になったラウ、
ラルド、エミリィ、ライルがいた。

ライルは仮面もフードもつけていて当然目立っている。

「おッは〜」

ふむ、俺の挨拶古い。

するとラウを除く三人かこっちを見て

「……誰?」「」

え?まさかの一日でお忘れですか?

あ、そういえば俺昨日名前言い忘れた……

まあ、とりあえず自己紹介をしよう!!

「わたくし、かげやまてつや景山徹夜ですよ」

昨日お仲間に入れてもらった方ですよ」

うう、一日で忘れられるんだなんてさびしいな……俺。

「ああ、そういえば名前聞いてなかったですな、すまぬ。つい、うかれて」

ふむ、今頃ですか。

あと何に浮かれてるのか俺はわからんですが……

「……で、あなた誰?」

フードをかぶった仮面のライルが聞いてくる。

「え、だから言った……」「いや、そうじゃなくてね」

小柄のエミリイが俺の言葉にかぶせてきた。

ううう、泣きそうになって来た。……どついう意味ですか。

「……なんで女性なの?」「」

は?なに?俺が女装をしてるとでも言うんですか!

失礼な人たちだっ!

「ふむ、説明が足りないようだ、ようするに髪の毛を縛ってないから女性に見えるんですよ」

ラルドの説明が入る。え？そう・・・なの・・・？

「しかも相当きれいな女性」ラルド

「うらやましいぐらいに、ね」エミリイ

「・・・きれい」ライル

「・・・ケーキ」ラウ

の言葉だ。なん・・・だと・・・ッ！！

・・・とりあえず髪の毛縛ろう

ケーキをラウに渡しながら髪を縛る・

「ふむ、昨日と変わらずの顔・・・。髪の毛を縛る縛らないで相当変わりますな」

失礼な。これでも同じ顔です。

とりあえず食事を取る。

フードはかぶんなくてもいつもどおり真っ黒なコートを着ている。

あとで思いついたんだけど中にも闇を仕込めば十分涼しいという。

闇は秘密にしている。嫌われんのは嫌だね。

そういえばこのギルドの食ったりできる集まる場所で必要なものは買えるらしい、便利ですなあ。

メリケンサックでも買って・・・やめとくか。修学旅行でもあるまいし・・・。

新聞みたいなものをラルドは読んでいるし、ラウはケーキと格闘中、エミリイはラウのケーキを興味ぶかけに見つめていたのでケーキを渡したら甘いだんだかんだで騒いでいる。どうやら本当にこの世の中にはケーキが無いようだ、ライルはただボーっとしている。

他の皆さんも俺の顔見て驚いたり、食事をしたりしている・・・

俺の顔見て驚くなや。

「む・・・？」

ラルドは新聞を見ていたと思ったたら突然声をあげて俺の顔と新聞を見比べている

どうしたんですか？いきなり。

「むう、徹夜さんかこれ？」

ええ？いきなりなんですか？

「徹夜さん、これをご覧になってくださいな」
新聞を見てみるとこんな事が書かれていた

☐ ×新聞

王妃様がまた王様を黙殺して国の警察やらへの命令！（黙殺で有名なのか）

今度の命令はとても簡単。

王妃様お気に入りのあるお方がいつの間にかお城から抜け出したとのこと。

黒髪、黒い目、背は高く、スラリとしたイケメン・・・チツ（舌打ちすんな）

黒髪はへそあたりませ髪を伸ばして後ろで縛っている、その男を見つげ出し。

拘束・・・じゃなくてやさしく連れてくるようにとのこと（拘束って何だ？おい）

連れて来た者には銀貨十枚とのことです。見つけて連絡をくれたものには銀貨五枚。

かなりの美貌で有名な黙殺王妃さまが今日の朝この命令を下したとのこと（黙殺・・・）

気になるギルドニュース

今回はこの大陸でもベスト3に入る大きさのギルド『空を飛ぶ鳥』スカイ・バード

です。いきなり現れた黒いコートを来た顔を見せない者、それは怪しい者orすぐ死んでしまいそうな人を追い返す係りになっていたもうすぐAランクのBランクのグロウズさん（結局Bランクかよ）を一撃で撃破した。タフさで有名だったグロウズさんは壁まで吹き飛ばされ泡を吹いていたそうだ、当記者がインタビューしにいったところ……。

なんと、その人の素顔を見る事ができた！

黒髪、黒い目、背は高く、スラリとしたイケメン……チツ（また舌打ちしやがった）

黒髪はへそあたりませ髪を伸ばして後ろで縛っている……ん、あれ？

これは上の記事の人物と同じ特徴ですよ。舌打ちの場所まで（舌打ちまで載せるなよ）

……銀貨5枚もらってきまゝす（おい！）『

まあ、……こんな感じですよ

「……（スタスタスタ バタン）」
逃げるべくギルドのドアをあける

（ソロソロソロ、グジャグジョグベエア）
上は人が多すぎて超うざい音。……めんどくせえよ、もう……

『『『新聞に乗ってた人？』』』外に集まっていた人の声（30人以上はいる）

「人違いです（バタンッ）」

うおおおお！外からめっちゃ入ってこようとしてきてる〜ッ！
うう〜、30人程度だったら抑えられるけどあと20人来たら終わりだよ。

・・・人外な感じだけド気にスンナ。

するとギルド内では、みんなが立ち上がり。

こちらをみてきていて…だんだんはこちらに近づいてきてる。

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいッ！！」

あまりの恐怖に声をあげる俺。

だけど、ギルド内の人は俺を捕まえることなくドアと一緒に押さえ
てくれた

ええ・・・や、やさしい。

ドアを押さえているのは俺にぶっ飛ばされたグロウズさんを中心に
屈強な男達数名

「ギルド内の仲間を売るなんてことはこのギルドはしないよ、徹夜
さん」

これはラルドの言葉だ。

おれがドアを離れると少しドアが押される。

『なッ！！これを一人で抑えるなんて本当にお前化け物かよ』

『吹っ飛ばされた俺が貧弱じゃなかったって証明になるなこれは！』

抑えてくれた人たちの声。うう・・・泣ける。

そういえば気になってたんだが受付の横にいるあのご老人はだれだ
ろうか？

説明はしなかったがずっと椅子に座ってる老人がいるのだ。

すると受付のおねえさんがその老人に・・・

「マスター。これはどうしますか？」

「フォツフォツフォ」
「マスターだったの・・・!?」
すると老人がどこかに電話し始めた。

「あゝ、馬車だよ馬車。いつもの場所にお願いでいいか？
ええん（ヤクザ風）？新聞の？ああ、それだよ、そいつを逃がすんだよ。」

銀貨10枚？お前解雇されたいの？おし、それでいいんだよ、おう、頼んだ」

なんか電話のときのご老人の言葉使いが怖い。
どうやら逃がしてくれるようだ。

「まあそういうこと。裏口から逃げて。はい、これお弁当、」
これは受付のおねえさんだ。うわあゝ優しいなこの人たち。
涙が出そうだ・・・。

「フォツフォゝゲフツゴホツ・・・まあ、とりあえず『レーゲン』
に行きなさい」
レーゲン？となりの大国だった気がする。

「あと数週間後にギルド同士の大会があるから、それに出てきなさい。
王妃様はわしが説得しとくからのおゝ、レーゲンにもうちのギルドはあるからの。
そこに行きなさい。じゃあ、いつてらっしやい。フォツフォゝゲフツゴフツ」
せきが多いな。
まあとりあえず、ありがとございます、と頭を下げた。

「じゃあ、行くわよ」「久しぶりに違う国行くかも」「・・・旅」

「・・・ケーキ」

ラルドさん、エミリイ、ライル、ラウの言葉。
ふむ、じゃあ、行きますか。

15分後（無事馬車に乗りました）

うう、なんでこんなことに・・・やだよ！こんなやだよ！

なにをしているのかというと・・・

なんかメイド服みたいなものを着せられて髪を縛ってるのをとかれ
て・・・

・・・まあ、要するに完全なる女装です

「しょうがないじゃない、あなたのいつもどおりじゃ見つかるんだ
し」

がラルドさんのいいわけだった。

うう、もうやだ・・・

そしてこの王都の周りを囲むレンガの壁の出入り口の門まで来た。

そこを警備してる兵が中を覗く。

その中は当然五人そのうちの一人・・・俺は。

「・・・（しくしくしく）」

泣いていた。それを見た兵は心配そうに

「どうかしたんですか？」と聞いてくる。

それを聞いた俺とラウを除く三人は・・・

「・・・失恋です」「」

失礼な。

「ああ・・・気の毒に、まあ・・・どうぞ行っていいですよ」

そういうことでここを通るを許可された。

いやだ！・・・じじい

6話・・・俺って綺麗？（変態じゃないよ）（後書き）

ときどき侍のような言葉が混じるラルドさん美女ですよ
男じゃないですよ

ん、ライルさんは無口にするつもりだからあまりしゃべらなくて
もいんだけど、どうもエミリィがあまりしゃべっていない
これは少し問題だな

・・・ラウはケーキとしか言っていないな（笑）

まあ、それはおいといて王都からも脱出です
美月からはどんどん離れていきますね

新聞かなにかで美月はどうなっているのかはのせるつもりです

2011 7/18 訂正しました

7話 落ち込んだときはどうしよう(前書き)

前回のあらすじ

脱出！サラスム王都

・・・サラスムって微妙な名前だよね
なづけた奴の顔が見てみたいな！

7話 落ち込んだときはどうしよう

・・・もう、最悪だ。

完全なる女装はさせられるし、女装させられたから泣いていたら失恋したなんていわれるし、それを見た兵は・・・『あんな綺麗な人でも失恋つてするんだ・・・』なんてつぶやいてやがった。正直その目をえぐってやろうとおもった。羽交い絞めにされなければ殺^やっていただろう。

「もう元に戻っていいんじゃない？」

ラルドさんのコメント、やった〜!!

そういうことでメイド服っぽい奴の上からコートを着る。闇をうまく使えば・・・。

「たたあ〜!!」

コートを脱ぐと元の服へ。

拍手しているギルドメンバーのそこ三人!あとで絶対シバくかな。そして髪の毛を縛ればいつもと同じ。

「あれ?さっきの服は?」

エミリーの発言。

「あ、ちょっと待つてくださいね」

コートの闇から服を取り出し丸めて(当然、他の人たちには見えなようにしています)

空に投げる!

「燃えて灰となれ!」ファイアーボール『火の球』」

空中をとんでいた服に大きい火の球がぶつかって爆発。

粉々になつたぜ！

これで俺の気も少しは済んだろう。

「あゝ、まあ、私達が着るものでもないし代わりは何着もあるからいいか」

え？

そっついながらエミリイがバツクのなかから取り出したのは同じ服だ。

「バツクごと燃えて灰となれ！ファ　ゴフウ！！」

「バツク目掛けて撃つたら馬車も壊れるでしょ」

そういう理由でラルドさんに羽交い絞めにされた。

いああああ！絶対あの服は燃やすんだああああ！！

「でもさ、そんなに嫌だったら髪の毛切ったら？」

エミリイの言葉。

・・・

この人たちは俺の苦勞をわかっていないようだな。

まあ、この頃このことを他の人にいうこともなかったしな、わかるわけないだが。

「・・・11歳のごろ髪の毛を短くしました・・・」

「そのままにできなかったの？」

ラルドさんの言葉

「・・・もろ女の子でした」

絶望の俺の言葉。

「……」 三人の沈黙

「……ケーキ」

ラウの言葉。

「あゝ、だめだめ、何回も食ってると虫歯なっちゃうし太っちゃうよ〜」

その言葉にむ〜とむくれてラウが横腹をつついてくる。
ははっ、美月以外にこんな痛い突きを繰り返してくる人なんてあつたこと無かつたぜ。

「〜二日に一個ね。ちゃんと運動もしないとね〜」
ラウの頭をなでて、どうにか横ばら突きを止める。
うあゝ、やっぱり癒される〜…

ちなみにその状況を見て他の三人の心は一つ

「……」（あの微妙な雰囲気が無くなってよかった）「……」
さりげないラウのフォローある意味ラウは大人かもしれない。

そして俺……徹夜のほうは徹夜で

「……」（微妙な雰囲気だったからこそこっちにのってそらしたけど、さすがに落ち込んでるのまでは治せないなあ。……ハハツ、神様がいたら目を抉り取ってやりたいZE!）「……」

ああ、そういえば……
俺がこの世界に来る前に寝坊して遅刻寸前で行ったときに（忙しいので髪を縛っていない）

決まって現れる男子の制服を着たロングヘアの美女って俺のことだったのかな……

はは……
はは……ッ!!もう、生きるのがめ

んどくせえな・・・

「なんかさらにテツヤが落ち込んだる！」

これはエミリイの声。

もう・・・ほっとしておくれよ・・・

『おい、サラスムとレーゲンの間の町に着きましたよ、

こいつらを休ませるためにここで最低でも一日泊まりますよ』

これは馬車を運転してる奴のの言葉。・・・俺を売ろうとした奴だな。

ちよつと・・・一緒に裏行こうぜ。目をえぐったりしないって・・・
ハハッ！

とりあえず馬車から降りた。もしラルドさんに止められなければ運

転手(？)の

目をえぐってやったのに・・・チッ！！

「ここにはうちのギルドの宿舎はないから普通に宿ね。

ギルドの依頼は受けられるようになってるから暇だったら受けてもいいから」

ふむ、宿舎は大きい都とかにしかないらしいね。

めんどくせえ・・・

「ああ、お金は俺が払いますよ、一応私新人わたくしですんでパシリぐらい
そついいながらコートのズボンの中(具体的には闇のなか)を探る。

「いや、まだ入ったばかりでお金ないんじゃない？ ツ！？」

俺が取り出した金貨をみてビックリしてるラルドさん。

あれ、銀貨を取り出そうとしたのにな

「・・・その金貨は・・・？」

これはライルの質問、・・・ん、どう説明しよう？

「地面を掘ったら「嘘ね」「

ハハツ！さすがラルドさんだね」

まあ、地面掘って金貨出てくるんだったらみんな掘ってるか。

「強盗に「・・・通報」・・・嘘です、すみませんでした」

これはライルの言葉。

あはは、いいのおもいつかねえ。あ、だけど俺。

城から盗んできたんだから強盗に近くね？

「王妃様にもらった」

うおおおお！なんか変なうそが出ちゃった。

・・・否定しろよ！

「ていうかさ、なんでテツヤは王妃様に搜索されてたの？」

くつ・・・！！痛いところをつかんでくるなお前！

別に気にしなくていいじゃないかあ！！

・・・

・・・

・・・

「さうばっ！」

俺はとりあえず逃走さ

・・・夜まで隠れた・・・捜しにきてよ！

そして今は・・・

「ぶはあ〜！お酒ってこんな味だったんだ〜、むひ〜」

お酒を飲んでいる。

この世界って高校生の歳・・・16歳からは酒のめるんだってね。日本じゃ考えられね〜、もうすでに1樽を飲み干している俺。むふい〜、酔ってますよ俺。

そして一気に出してしまった20枚の銀貨によりまわりの知らない人たちと一緒に俺の金で飲んでる〜。

『あんちゃんいい飲みっぷりだね〜』

「おっちゃんこそ〜、もつとのみなつて〜」

『ゴボツグボツゲボボコツ！（俺に無理やり飲まされている状況）』
てな感じのがずっと続いている

それを見ているお仲間4人は黙って違う人のフリ

おれはそれを続けたあと自分一人用の部屋にいつて寝た

結構のんだのにそれほど酔ってなかったので驚かれていた

多分普通の人が俺とおんなじ量飲んでいたら歩けないほどだったろう。

おれはしっかりと普通の人と同じ足取りで帰っていったという

ふむ、なんか落ち込んでいる（女装の件）のも少しは和らいだかな。

…んでその日は終わった。

7話 落ち込んだときはどうしよう（後書き）

はは、

微妙なシメになってしまったが

どうも見つからなかったからこれでいいでしょう

この徹夜くんの今のお気に入りの魔法はファイアーボール

特にこだわってるわけではないのですぐにすごい魔法を出そうとおもっています。いろいろと面白そうでいいですよ

2011 7/18 訂正しました

説明不足でしたが、内容は変わっておりません。足りないものをつけたり、いらぬものを削りました。基本的に内容には変化はありません。今回の説明だけで、前回も今後はもう説明は入れません。

8話 ちょっとした暇な一日(前書き)

前回のあらすじ

王都を出た俺はファイアーボールでお遊びしたり

おじちゃんたちと酒を飲んだりとても楽しい一日を過ごした

・・・カオス

8話 ちよつとした暇な一日

むう・・・今日は眠かったんだが・・・

また起きると俺の目の前にはラウがいた。

だから慌てておきた。

もしかしたら眠ってる間に何かされているのでは？暴力とか折檻とか目を・・・

いや、そんなわけないよな。

話を変えよう。

むう、二日酔いもせずにとってもいい気分だ。

なんか本当に俺っておかしいかもしれないなあ。

まあ、とりあえずそれもおいとおくか。

でさ、今日もゴタゴタあったんだよ。

なんかさ、この町山賊現れるんだってさ・・・迷惑だよな。

俺が静かにおじさんたちとティータイム（という名の談笑）をしていたわけだが

そこに・・・

山賊があらわれた！（ドラクエの戦闘開始の音楽）

行動のメニューは「逃げる」「戦う」「目を抉り出す」

ハハッ！目を抉り出すに決定！

・・・山賊は捕まえましたよ。

目を抉り出す段階になったときに、ラルドさんが羽交い絞めしてきたあきらめました。

うう、この頃・・・羽交い絞めにされっぱなしだね。

あゝ、元の世界ではやっても怒られなかったのになあ。

（多分怒りたくても怖くて怒れなかったと思う。あ、美月は叱って

きたよ)

ふむ、それでいま俺が見ているのは新聞みたいなのだ

『 ×新聞

昨日はすごい騒ぎになったわけだが、見つからず結局得をしたのは昨日、当記事を担当したクソ野朗のみ、あんなに探したのに見つからなかったのはどうしてだろうか。噂ではもうこの王都を出たというものがある。

所変わって新しいニュースだ。

それは勇者様が訓練を始めたということだ。勇者様を召喚して五日まだそれだけしかたっていないのか。ついに訓練が始まった。今回の方は万能で剣術もできるのでという方なので魔法の訓練で終るらしい、そして勇者一行のメンバーが今日から吟味される事となる

騎士二人に女性の腕のたつ者2人に勇者様お世話係の女性一人を用意するらしい。

(あの王妃、俺が抜け出したからって約束を破ったな・・・)

この野朗二人はうらやましいな・・・。

そして、その勇者様の噂がいくつか出てきた!その中で一番気になるのが。

『勇者様には恋人がいる』(ゴフツ!!!(咳をこみました))というものだ! (俺のことじゃないよな・・・?) (この噂は広く広まっ
つていて早速できていた勇者様ファンクラブ一同は怒りをあらわにしている。)

(前の世界でも同じ事があったよ・・・) (この噂が本当かどうか調べるため、勇者様にインタビューにいった!) (この質問に勇者様は

・・・

黙って顔を赤くするだけだった……これはどうやら本当だったらしい……
ちくしょう、誰だよそいつは……
これで今回のこのコーナーは終わりだ、見つけ出すからな？恋人とやら』

めっちゃ怒ってるよこの記者！

うあ……めんどくせえ……けど、見つけられるほど俺は甘くないけどな

むう、なんかね

元の世界のときはずっと寝てただけだよ。

この世界に来てからあんま寝てないんだよね。

まあ、昼寝なんてしなくても俺は大丈夫なんだけどね。

そういえばさ、闇ってすごくないか？

闇の中に食べ物を入れておくとそのまま腐りもせずに食べられるんですよ。

軽く冷蔵庫よりも役に立ちますよね。

とてもいいものを手に入れた感はあるのだが、食べられるとやばそうだな。これは。

まあ、どんな薬にも副作用はあるっていうしね。言っただけ？

まあいいや、めんどくせえし。

それでさ、ようするにさ。

俺の中には食べ物やらお酒やらがいつぱいだという事です。

ああ、昨日もらった弁当も少しは入れとけばよかった。

アレはすごく美味しかったから……。

むう……。

まあ、そんな事でブラブラ歩き回ったりしていたが、何もやる事もなかったよ。

ああ〜出発の時間だ〜。

これからの出発は一晚かけていくらしい〜

そのために馬車を引いてる奴をここで休ませたらしいよ。

ちなみに場所を引いてるのは馬に目が二つプラスされたようなもの
だったよ。

気持ちわりい〜

おお、もうすぐ出発の時間みたいですな〜。

ああ〜、レーゲンの王都に言ったらラルドさんの剣術訓練が始まる
らしいよ。

辛そうだ〜

俺は闇と魔法の訓練を影でするつもりだから、大変かもね〜

まあ、訓練して悪い事はないでしょ〜。

めんどくせえのは悪い事だけだな・・・

「早く来なさい」「」

はい、すみませんした。のろまで・・・

ラウを除く三人のきついお言葉。はあ〜・・・疲れる・・・

という事でいっきま〜

8話 ちよつとした暇な一日(後書き)

今日のこれはほとんど徹夜くんの

心のお言葉でしたね

(最後だけしか他の人の言葉が入っていない(汗))

新聞は除外)

どうも何を書いていいかわからずに

キーボードをカタカタ鳴らしてました

まあ、今回はレーゲンとやらに到着する予定なので

書くことが増えるでしょ

ちなみにまだ五日しかたっていません

2011 7/18 訂正しました

9話 レーゲン王都到着（前書き）

前回のあらすじ

徹夜はとても暇な一日を送った

9話 レーゲン王都到着

むお〜、眠い〜

ちなみに今日は一日たった日です。

この世界に来て6日目だ。

馬車の中で俺は壁に寄りかかって寝ていた。
とても眠い。

(プニプニ)

なんか小さな何かで押されてる感覚がする〜。
うう〜、眠いのにやめて欲しいよ。

(・・・プニプニ)

目を開けてみるとラウが俺のほっぺをつっついている。

「・・・何日もそれやり続けてた？」

「・・・(こくり)」

小さな顔を小さく揺らす。

「・・・理由は？」

どうでもいいことだけだ。

つい聞きたくなってしまっるのがこの俺です。

「なんとなく」

なんとなくですか〜。

ふむ、なんとなくですか〜。

ふむふむ、なんとなくか〜。

・・・なんとも言えないですなあ〜。

「・・・怒る？」

「怒らないよ、怒る理由がないでしょ」
「こんな事で怒っていたら、今頃俺はあの新聞を出してる会社と王妃様に怒っているだろう。」

「・・・そう（ぷにぷに）」
「また実行し始めましたな。」

ふう、だけど、こんなことしてくるラウには・・・癒されますな。
今は朝早い時間ですな。
いつもこんな時間におきてるんですかな？

「・・・何故か起きちゃうの（プニプニ）」
「俺の顔を見てそんな事を言ってきた。」

ああ、心よまれたのも気にする事ができないほどに癒されますな。
そしてみんなも起きはじめてきた。

2時間後

『レーゲン王都に着いたぞ』
『そんな言葉でおれは正気に戻った。』

正気に戻ったとは少しづつケーキを食べているラウをず～～～～とみていて。

ポ～～～～～～ととしていたからだ。
外を見てみるとサラスム王都と同じほどの外壁の高さのある都だ。
（ちなみに外壁は100?ぐらいだ。それと同じぐらいのはずだ）

「お前らは何者だ？」

それが門を守る兵の最初の発言だ。
その人にラルドさんがギルドカード（俺命名）を見せると通してく

れた。

そういえばライルとエミリイはAランクでラルドさんはSランクらしい。すごいよね〜。

ちなみに俺はCランク。まあ新人はそんなとこだよね〜。

そこでこの馬車とはお別れ。どうもお疲れさんでした〜。

そして、ラルドさんたちは何度も来た時があるみたいで（まあ、ここらでもこの人有名らしいしね）何度も行った時のあるいい宿があるらしい。

そこのほうがギルドの宿舎よりもいいらしいね。

「おう、久しぶりだねラルドちゃんたち〜。お、新人か？」

宿の床に入ると気のよさそうな白ひげのおっちゃんが出てそんな事をいって来た。

俺はどうもと挨拶をしてそれで終わり〜。

もう疲れてきたし面倒なんだもん。

あっはっはっは、ラルドちゃん達とのチームはつらいぞ〜とおっちゃんがいって来た。

確かにそうだろうね・・・ラルドさんSランクだしね、おお、こわつ。

・・・訓練やるんだっかね〜、はア・・・。

俺一人用とラルドさんの四人部屋をお願いすると、かぎをもらったから荷物を置いて来た。

まあ、荷物といってもほとんどないんだけどね。

そして俺はラルドさんに宿の裏のほうにある空き地へと導かれたのだった〜・・・ハア。

「どこまればよいか見たいので、まわりから石投げるので斬って下さいな」

ははは、まさかの訓練最初はこれか。

しかも周りには俺以外の四人＋白ひげのおっさんがセッティングしてるよ。

「じゃあ行きますよ」

そういつてみんな振りかぶる。

次の瞬間石が投げ始められました・・・いやいや、ちょっと石って当ると痛いんですよ。

しかもおっちゃんの投げてるの岩じゃありません？

うおおおおおおお！きたあつあああああつあ！！

とりあえずよけまくる。

「避けるんじゃないで剣使って」

えええ！！めんどろだあああ！来た石を斬ろうとするんですけど。

(ゴッ！！)(ゴッ！！)(ドパンツ！！)

殴る、殴る、思いつきり殴ったすえ爆発した音だ

ああ！剣じゃなくて拳が出ちゃう・・・ツ！！

「・・・じゃあ、殴れそうにないものを使いましょう」

取り出したのは鉄の大きな球。それには針が何本も出ていて触ったら手が傷ついちゃいそうだ・・・てか傷つくだろう。

それ〜という掛け声とともに投げてる。

「・・・ツ！！」

ついこれも殴ってしまう俺。ああ！俺の手大丈夫！？

ああ・・・俺の手大丈夫、なんか針のほうがひん曲がっていた。

「このあんちゃんなんかすごいなあ・・・気に入ったぞ・・・」

白ひげのおっちゃんの発言。別にこんな事で気に入らなくても・・・

「・・・じゃあ、絶対に拳じゃないのにしましょうか」
え？嫌な予感が・・・ラルドさんが取り出したのは黄金の剣
エクスカリバーだ・・・それはやばいでしょッ！！
もう構えてるッ！！

「大丈夫、本気でやんないから」

ええ〜！？それでも斬れるんじゃないですか、それ。

ラルドさんがだぁッ！！という言葉とともに上から下に振る。
え？それで直接攻撃じゃないの。

その切っ先からは光の斬撃が俺目掛けて一直線に進んでくる。

むぎゅおおおお！！もういやだぁッ！！

「みゅああああああああああああ！！」

二つの紫色の刃を合わせ光の斬撃をうけとめる。

あああッ！！光がこんなにも近くにあるとなんか背筋がゾクゾクする〜。

闇の力を手に入れてから光はやっぱり苦手になったんだね、俺エ！！

「だっしやあア！！」

思いっきり力をこめて斬撃を直角に上に曲げる。

かぁ〜ッ！！手首いてえ！！手をぶんぶん振っていると・・・

「おお〜、このあんちゃん本当にすげえな」

微妙な感想をもらしてないで、おっちゃん！

これでも光は苦手なんだから！

ラルドさんはこれに満足したのかこれみたいなものが1時間続いた。
ああ〜、もうやだよ、でもこれのおかげで拳で受ける癖が無くなっ
た。

でも、これはちょっと・・・めんどくせえよ。

そして所代わり俺はこの都から出て森のほうまで行ってる。
俺が闇や魔法の修行するところをみつけるためなのだ。
門を守ってる兵隊さんからは注意するようにといわれた。
魔物が出るらしいね。ちょうどいいかも。

少し森に入り適当に歩いていくと木が生えていない丁度いい場所を見つけた。

数時間ぼくとそこに座っていると魔物が現れたよん
オオカミみたいだが、大きさは普通のとは違いとても大きい。
おお、丁度いいかもしれない試したかった魔法があるんだよね。

「『重力操作』^{グラビティン} まずは5倍でどうだろうか」
その瞬間俺が決めた範囲は重力が5倍だ。

アハハ。チートだ、チート
オオカミみたいなのは重さに耐え切れずに突っ伏している。
ちなみに俺はチートなんて気にしてる暇じゃなかった。
なぜなら…

「むぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ！設定範囲を間違えた〜ッ！！」
設定範囲に俺の立っているところまで入れてしまったせいで、サイヤ人が宇宙船の中でやっていた特訓法を行っていた。
ううう！つらいけど立てている俺ってやっぱり人外かも〜ッ！？

疲れたので帰ってきました〜。あ〜、失敗しましたな〜。
足がガクガクいつてるよ〜、うえ〜。
むおお〜疲れた〜。

すると前の道に横から急に曲がってきている知らない少女がいた。
少女は俺を見るとパツツと顔を輝かせた。
知り合いじゃないのにな・・・？

「ちょ、ちょっと助けてくれませんか！？」

ええ〜めんどくさいからいや と条件反射で言おうとしたときにまた男三人がこっちに走ってくる。

うああああ、めんどくさそうだ！

俺が何かを言う前に男の一人が拳を振りかぶっている。そして拳は放たれた。

ええ！？俺の言葉は無視！？

放たれた拳を横にずらしよけて、そのまま柔道技の背負い投げをする。俺がてきとうにやったので相当痛かっただろう。

それで男は気絶した頭は打たないようにしたので死んではいないだろう。

それに驚いた男二人が行動をおこそうとするが、その前に片方には喉突きをし片方には男の勲章に蹴りを入れる。

男の勲章・・・それ以外には何も言わないつもりだ。

「おお〜」

それを見てなその少女はそんな声をあげていた。

「お名前は？お嬢さん」

てきとうに言葉を言ってみたくハハツ・・・ハア、めんどくせ。

「カイラ・ミラージュよ、カゲヤマ テツヤさん」

にっこりと笑ってそんな事をいつていた。

あれ？俺名前教えたっけ？

む〜こっちの世界での詐欺って俺わかんないからな〜。

んでとりあえずラルドさんたちのところにつれてきた。

そしてさっきあったことを説明して、名前を教えると・・・

「カイラ・ミラージュって『時の巫女』じゃないッ！？」

ラルドさんではなくエミリイが声をあげていた。

ああ、『時の巫女』って前に聞いた時あるぞ。たしか未来を見る
事のできるとかいう大切な人だったな。

たしかレーゲンの神殿にいるらしいとかだったな。

勇者一行も現れる事だし重要度が上がるらしい。

へえ、有名な人なんだ

・

・

エッ！？時の巫女！？本物ですかっ！？

するとカイラはただ一言だけ。

「これがもう一つの勢力ですか。予知よりも現実で見たほうが現実
感がありますね」

いみのわかんねえ意味深な言葉を吐きやがった。

むあああ！なんかめんどくせええよおおお！！

9話 レーゲン王都到着（後書き）

むおおお！

お決まりの巫女さん出場です！

書くことができたので良かったです！

ちなみに今は6日目

大会はあと一週間後（小説内での一週間後）の予定

2011 7 / 18 訂正しました

10話 時の巫女さん現れた(前書き)

前回のあらすじ

特訓やら何やらを済ましたあと

王都の外を見学

そして帰ろうとおもったら変な少女が助けを求めてくる

断る間もあたえずに攻撃してくるなぞの男達

おれはとりあえず撃退した

そして少女は意外な事に重要人物!?

10話 時の巫女さん現れた

ああ〜なんかめんどくさい事になったぞ、おい。

何ですかさっきの意味深発言は……？

ちなみにここは俺が訓練していた宿の裏の空き地。

「なんで『時の巫女』様は追われていたんですか？」

これはラルドさんの質問〜。

まあ、普通の人ならそうおもうわな。

「カイラでいいよ、カイラ。呼び捨てでOKです。えっと、あれはね〜

私を連れ戻そうとしていたの、神殿で私を担当してる人たちですよ」
それをきいてカイラさんを見ていたラルドさんはキッ！！と俺を睨んでくる。

「だ、だって仕方ないじゃん。俺が何か言う前に追ってくる大人たち俺に向かつて

拳振りかぶってたんですよ？ねえ？そうおもいますよね、甲冑のおじさん？」

あれだ、正当防衛だと主張する。

まちがってないもん！

ちなみに甲冑のおじさんとはだれももない所に向けて言った。

普通の一般人なら気づいていないはずだ。

「もう来ましたか……」

これはラルドさんのはつげん〜、めっちゃげんなりしてる〜。

「気づかれないように近づいたつもりなんですがね……」

その声とともに現れたのは、全身西洋の甲冑に身を包んだ、男の方（声でそうだとおもう）

それと同時に10人ほど俺達の周りに甲冑を着込んだ人たちが現れる。

みんな剣を抜いている。

ちなみにそれを見て驚いているのはラウとエミリイだけ、エミリイ・

・お前Aランクじゃなかったの？

うおゝ、日の光が甲冑に反射して目がアア！目がアアアアアアアアアアアア！！

まあ、そんなにもろい目ではないのだが・・・

「さすがは『聖剣』のラルドのチームと言ったところですかね」
最初に現れた甲冑を来たおじさんの声だ。

そして顔にかぶってるものはずす。うあゝ、ワイルドな感じのおじさんだなゝ。

「ジョイツですか・・・、この人たちに会ったら帰るつもりだったのに、わざわざ迎えに来なくても・・・」

これはカイルの発言ですよ。ふむ、どうやら知り合いのようですね。

「その方を返してくれるとありがたい」

ああ、ジョイツさんとやらは強そうだゝ。

「言われなくても返しますが・・・」

これ俺の発言だよゝ。

面倒な事に巻き込まれたくないからね。

するとカイルがこちらを見て・・・

「お昼まだですか？」

む、何故そんな事を聞くのですかゝ？

まあ、一応まだと答えておこう。

「じゃあ、ちょっと神殿にご招待しますよ」
ニコツと笑ってこんな事をいつてきた。
ラルドさんたちのほうを見ると、困っている。めっさ困った顔をしている。

「一生に一回あるかないかの事ですよ？遠慮せずに来て下さいよ。
ジョイツ〜！いくわよ〜」

ジョイツさんも困った顔をしていたが、その発言を聞きため息をついてから・・・部下に合図をした。・・・『捕獲』

・・・何故ですか〜！？

その合図とともに周りの甲冑どもが動き出す。

むぎゃあああああああああああああ！！

「えッ！？なんで私まで!?!」

ちなみにカイラも捕らえられてた。

もう逃げられないようにとの事だろう。

恥ずかしかった。

甲冑の男たちに抱えられて連れて行かれるのは恥ずかしかった。

しかもなぜかおれとカイラだけしか抱えてないし、ラルドさんたちは普通に歩いてるし。

所変わって神殿

真っ白な建物にどんな意味があるのかわからない飾りまでたくさん

あります。

ちなみに俺達は据わってカイラを待っている。

カイラは今一番神殿でえらい歳のとった女の方にしかられている。

・・・人を面倒に巻き込むからそうなるんだ・・・ざまあ。

(´・`・´)俺はこんな感じの顔をしてる。簡単に言つとニヤツとした顔だ。

そしてカイラが戻ってくると反省してるのか反省してないのかわからないけど、元気に案内してくれている。

最後に通されたのはめっちゃごちそうの並んだテーブルのある部屋。とりあえず食ってくれといわれた(めんどくさいから俺の解釈)うまい)。

食ってるフリしながらも闇に入れたり、普通に食ったり。とても美味しかったです。

そして・・・

さっきのえらい女性の方が来ると部屋を移動)。めっちゃ真顔で深刻そうな顔をときどき見せる。うあ、なんかめんどくさくなりそうですな)。

まあ、ただで楽できるなんてこの世の中ありえませんか)。

ハハハハ、はあ)・・・めんどくせえ。

そしてある部屋まで来た。

この部屋にいるのは俺、ラルドさん、エミリィ、ライル、カイラ、ジヨイツ、偉い女性の方

ラウは重要な事なので聞かせられないとの事でケーキと一緒に退場。

ジヨイツの部下さんたちと遊んでいるだろう。

「実は、この子・・・巫女様は命を狙われているんです
こんな事から始まった会話。

うあ〜ん、もう面倒なこと匂いがしてきたよ！HELP！ヘルプ
ミー。」

「命を狙われているとは？」

ラルドさん場慣れしてる感じだね〜。

切り返しがは〜やいこと〜。

「狙っているのは闇ギルドで『血祭り』という名なんですよ
うわ〜、センスねえな、こんちくしょー！

「理由はわからないんです。この闇ギルドは、まあ力もあまりなく
あまり名は出てこないギルドなんですけど、隠れ家がどうもわから
ないんですよ」

こちらでも搜索はしてるんですけどね、っと続けていつてきている。
うあ〜、本当にめんどくさそう。

闇ギルドとか調子のんなよ〜、力がないんだっいたら黙って隠れてる
よ〜。

ホントぶっ潰すぞこのこのヤロウ。

「だから護衛、もしくは闇ギルドを潰して欲しいんですが、
いい加減この子が危険にさらされているのも嫌ですし、闇ギルドの
せいで

騎士も数名負傷してるんですよ。もう・・・いい加減目障りなんで
す・・・」

黒いオーラを出しながらのにつこりの顔はとっても怖かった。

ラルドさんは一つ言葉でそれを受けた。

ギルドに通しておいてください。といいその日はそれで終わった。

ちなみに俺以外の三人は隠れ家を探すそうだ。

俺は慣れていないだろうから、護衛で、といわれた。

はア、なんかこっちきてから暇な日は一日しかなかった気がするよ。

10話 時の巫女さん現れた(後書き)

時の巫女さんはお命を狙われていますね
大会を一週間後と考えてしまったので
とても長くなりそう

あゝ、

今までは一日ずつ書いてたけど

もう何日か飛ばしたりするつもりです

結構書いたとおもったのにまだ一週間たったばかり
疲れちゃいそうです

2011 7 / 18 訂正しました

11話 この頃面倒な事はかり起こるけど何でだろう・・・？(前書き)

前回のあらすじ

時の巫女さんがあらわれ

神殿のおえらい女性の方に依頼された

面倒な事はかりでどうなるのやら

11話 この頃面倒な事ばかり起こるけど何でだろう・・・？

ねむいいいいいい

とおもって寝たはずなのだが気づいたら真っ暗な世界

ああ、お久しぶりのクロちゃんですか

「犬みたいな名前ですんで呼んで欲しくないのだが」

おお、きました黒色の美少女です

ああ、そういえば感想を聞いてみようかな

「外を見てどう思う？クロ」

「とても興味深く見ているよ。ご主人」

なぜ俺がご主人・・・？

まあ、いいや。それで何のようなのかな

「紹介する者達がいるよ、ご主人」

ああ、やっぱりここだと心が読まれるのですね

話すのめんどくさいから考えるだけにしようっと

てかご主人って宿とかにいるおっさんみたいでいやなんだけど

「この子達ですよ。ご主人は気づいてなかったでしょうが冬眠状態ももう終わりました」

その声がおわると同時に、青紫色の炎が二つ爆発するように出てくる。

それがどんどん消えていくとそこには二人の子供

片方は男、片方は女 どちらも14歳ぐらいだ

む、こいつらは？

「剣の中に入ってる精霊達ですよ」

「はじめまして」「よろしくおねがいします」
「兄妹かな？」

「私達は」「僕達は」「炎の精霊の双子です」「
なんか楽しそうに笑いながらの自己紹介
話し方がめんどくさいな

「めんどくさいとか」「いわないで」「下さいよ」「
本当めんどくさいですな」

炎の精霊ってことは炎の魔法とか教えてくれるわけ？

「YES!」「」

ほんと・・・めんどくせえな

まあ、今度ためさしてと言って、この世界は終わり

「ご主人、もつと歩いて旅してくださいね」

「がんば!」「」

これがこいつらのここでの最後の言葉だった

ああ、ほんとめんどくせえ

もう朝起きてから結構たち

俺はカイラの部屋にいた」

とっても質素な感じで・・・言い換えてしまえば地味だ
そしてカイラと俺とジョイツさん

この三人でいる

ジョイツさんはカイラ・・・そして俺までも見張っている

ああ、もうやだよ
とおもっているとジョイツさんは急用でどこかにきえた
・・・ニヒッ

「カイラ。お前は外って興味はあるか？」

「ええ、そりゃあ興味があります。昨日、外に出て行ったわけですが知らないものでいっぱいでした。ああ、あなたに会うのがもうちよつと遅ければなあ」

遅かったらつかまって神殿に逆戻りだったな

「じゃあ、外に行くか？」

「えッ!? どうやって!？」

目を見開き驚いているカイラ
ふむ、期待通りの反応だな

「簡単だよ、簡単」

そういつて紙を用意する

カイラはでもこの部屋に入られたら・・・といっている
だからそれを封じるための作戦がこれだ
簡単に説明します。カイラに

「着替え中。一人でファツションショーやってます」の文字を書いてもらつて

それを窓に張るだけ、うむ、簡単簡単

「なんか微妙な作戦ですね」

そんな事いわないで欲しい。

まあ、扉には魔法で固定したし幻術みたいな魔法もかけたので大丈夫だろう

という事で窓からカイラを抱えて飛び降りる

「わああ!!!」

最初の声はそれだけだ

それから門を跳んで超えたりなどしてすぐに神殿からは出れた

それからカイラは驚きで大声を上げるばかりだったりもする

神殿の暮らしというのはとても楽しかったのだろう

服が作られているところ

料理が作られそれを大勢の人が食べているところ

それを見ただけで驚いている

「むむ、こんなものは食べたことなかったです」

同感です

俺まだこの世界着て一週間ですから

ちなみに食べているのはボファ・・・ボリ・・・ボズ・・・ボなん

とかの丸焼きと書いてあった

料理だ、それなりにうまいし俺達が行った店のおすすめみだった

ああ、こんなのが食べてけるんだったらおれはもう

この都にずっと居ようかな

「契約違反ですよ。ご主人」

頭の中にそんな言葉が響いてきた

すみませんでした

「え？これ・・・いいんですか・・・?」

この発言はカイラ。何故こんなことをいつているのかというと

俺が外に来てこうやって見てまわるの初めてだろうから記念にとい

うことで

ネックレスをかってあげた

べつに高いわけでもない普通のものだ

「高いわけじゃないし、俺は無駄に金が余ってるからな（盗んだものだけど）」

そういつてわたすと

嬉しそうな顔をして自分の首につけていた

ただどなかなかそういうほのぼのした雰囲気も続かないわけだ
ちよつと人通りが少ないところに行く

全身を黒い布で覆い顔もわからない目だけが見える10人ぐらいの
男達に囲まれた

「時の巫女・・・死んでもらうぞ」

これが男達の最初の発言だ

はあ、なんかめんどくせえな

てかこいつらはなんでここに『時の巫女』がいるのがわかったんだ？
なんかこの国のお偉いさんがかかわってそうでいやだね、もう

戦闘はすぐはじまった

俺はカイラに黒いコートを着とくようにと渡す

これなら俺の闇が剣をはじくし傷を負う事はないだろう

最初に男の一人がナイフを構えながら突進してくる

ナイフを持っている手をつかんでそのまま腹に膝蹴りを食らわせ
力が抜けたところで別の男に投げ飛ばす

それを間一髪男は避けるが、投げられた男は壁にめり込んでいる
すげえ・・・ここまで思いつきりやったときないからこんなのはじ
めてみた

俺がそれをちよつと見てる間にカイラに近づこうとする男がいる

「こんな女の子に物騒なもの向けんなよ、このハゲ！」

べつにはげているわけではないだろうがハゲとってしまふのは俺

の癖だ

そしてそのハゲを背負い投げして気絶させる

うーん、つぎは一本背負いなんてどうだろうか・・・

俺が考えているうちにすぐ近くに迫ってくる男がいる

その男の顔をわしづかみにすると思いつきり地面にたたきつける

ちよつとしたクレーターができた

ふむ・・・これで三人・・・めんどろだなあ

「これがあつたんだった・・・」
『重力操作』グラビトン 5倍なんてどうだ？」

範囲は俺とカイラの周りに全部

今度は間違えないで設定できた、いきなりのチート攻撃に男達はなにもできずに

重力でおし潰される

「.....む.....」

なんか面白い

とりあえず一人一人首のところに手刀くらわせて気絶させとく

カイラはぼくっとしていた

しよつくだつたのだろっか？

まあ、とりあえずは警察みたいなものに男達9人を預けた

え？何故9人かって？さっきの魔法を見てたら思いついたいい拷問があるからです

楽しみ

時間がたち

俺はカイラを部屋に戻すと（ジョイツさんの監視つき）

使っていない地下室を教えてもらった

楽しい拷問のはじまりだ！

「それはどうしたんですか？カイラさま」
これはジョイツの発言です
それ、というのは今私が手にとって見ている
ネックレス。

「あるひとがプレゼントしてくれました・・・」
その言葉を聴きジョイツは表情を少しゆるくしてそうですかとこた
えている

私が何を言ってるのかわかったのだろうか・・・？
むあ～～～

このきもちはなんだろうか・・・
自分でも良くわからない

「悪いね、カイラに貸したコート返してもらったの忘れてたよ」
そのとき突然扉が開いて
あるひとが顔を覗かせてきた
それにビツクリした

「は、ははははははい、ごりえ！どうちよ！」

「お、お前どうしたんだ・・・？とりあえずありがとう」
そういつて扉を閉じるあるひと

「「・・・」」
黙るジョイツと私

「カイラ様・・・あの方が好」

「いわなくていいです、私は『時の巫女』ですから・・・
運命に従います」

それは運命
残酷ともいえるものだ

・・・

俺がいるのはてきとうに使っていない地下
何故そんなところにいるかお分かりだろうか・・・？

ふむ、わからないのが普通だろう
それはね、ちよつと楽しみにしてたんだ

「G O U M O N だあああああ
このとおりだ」

10人襲ってきた奴のうち一人は俺が確保しといたからな
ハハハッ！ストレス発散だァァ！

11話 この頃面倒な事はかり起るけど何でだろう・・・？（後書き）

むあゝ

一応巫女さん落ちた（？）

まあ、巫女さんの奴を

後一話で終らしたら

大会に向かって進まないとかダメだこれ

ちなみに8日目かな？これで

12話 今日シリアスかも知れないよ? . . . (前書き)

前回のあらすじ

精霊ともはなして

仕事の護衛

なんとなく外に出発

そしたら黒い奴ら登場で、台無しに

とりあえずすぐに撃退しておれはその一人を拷m . . .

いや、なんでもない

12話 今日シリアスかも知れないよ? . . .

所変わって

俺は地下

別に俺が地下というわけではなく
地下にいるという事です

「何か吐いてよ。おじさあ〜ん」

俺はこんあことをいいながら捕まえたおじさんにデコピン連発して
いる

デコピンと言っても相当痛いだろう。おれのデコピンは岩をも砕く
(たぶん)

デコピンを一回することにとてもすごい音が鳴っている
そしてされているおじさんは

「・・・う・・・(ドパンツ!)しゃべ(ドパンツ!)れ・・・

(ドパンツ!)

ないんだ(ドパンツ!)・・・が...(` パパパパパパア
アッ!! (連発))

こん感じになっている(というか、ストレス発散といっても具体的
な方法がわからん)

ハハハッ!!しゃべろうとしている(たぶん真実は言わない)人の
邪魔すんの面白いなあ

んで?なに?

なにしゃべんの?

「わ、私達は金をぬすもうと (トパンツ!)...」

「それにしては殺しなれてる動きだったが・・・」

それに金を取るだけだったらすりでもいいし声で脅せばそれで終わりだろ

アホか」

「・・・」

黙ってこちらを睨みつけるおじさん

ああ、俺ってこういう知識無いから良くわかんないんだよね

ホント困るなあ

こういうときに使う魔法ってないのかな

うん、あるにはあるだろうけど名前が出てこない・・・

うん、やっぱり物理的な方法か

髪の毛を抜いていくとか？うん、それはなんか違う

あ！歯を抜くとかかな！？ん、そのあとに歯を処分すのがめんど

くさいからやだ

やっぱり俺がさっき思いついた方法でいくかな

「命が大事ならそこに大の字で寝転んでくれ、上向きで頼む」

ちなみにおじさんにはロープも何も使ってません

正直逃げられるかの心配なら無用だ

逃げられるならもう逃げているだろうし

おじさんは嫌そうな顔をしながらいうとおりにしてくれる、

命令どおりに動くとか、ハハッ！！、犬みたいだ

そのあと両方の手のひら、両足、腹あたりに5kgの錘を乗せてく

「これが拷問になるとおもってるのか？」

おじさんはニヤニヤしながらこっちを見てくる

あ、きもいな

俺は無理して（キモイ顔に向けてやるのはきつい）ニッコリしながら

「おもいますが何が？ 『重力操作』^{グラビトン} 10倍なんてどうだろう？」

「結構なお偉いさんの豪邸ですね・・・」

うあ、俺の予感的中ですか（前の話を見てね）

そしていろいろと決めたのが

一応警察みたいな人たちと一緒に乗り込んで

隠れ家が見つたらうんたら

時の巫女は最重要人物だからお偉いさんがなんたらかんたらでも大丈夫らしい

あくまで隠れ家を見つけられればだが

闇ギルドの人たちは生け捕り、お偉いさん生け捕りてな感じで何たらかんたら

時間通りに一緒に乗り込む

そしてすぐにその時間となった

『突入を開始してください』

この声を聞いた瞬間一斉に入っていった

メイドさんみたいな人たちはおどろいている

他の人たちは隠れ家みたいなものをさがしている

「・・・」

むう、予定とは違うだろうけど

ちよつと外れるか

俺は他の人が地下に向かうのとはずれて上の階に行ってみた

何回か扉を開け中を確かめた

そして5回目に見つけた

男はえらそうに座ってしかめっ面でこっちを見ていた

だけど顔中に冷や汗をかいていて余裕がなさそうだ

「・・・なんで『時の巫女』を殺そうとした？」

この言葉にビクリッと肩を震わすお偉いさん

するとニヤリツとわらい

「あのガキが調子にのてて (ヒュッ)」

途中で言葉をとめたのはおれがてみじかにあつたものが投げたからだ

それはお偉いさんの頬をかすり壁へと突き刺さった

その頬の傷からは血がたれ始めている

「そんな理由で襲っていたら権力があつてもなくてもすぐに破産するそんな馬鹿な事を考えるしかできない脳ならずと前に破産しているだろう」

お笑いさんは黙ってこちらを睨んでくる

ああ、さっきの襲ってきたおじさんやらこのお偉いさんやら

今日は俺は睨まれるのが多いかもしれない

・・・てかさ、俺もある意味気づいてなかったんだけどさ

さっきのって私はやってないみたいになんじやね？

微妙に私がやりましたって言ったようなもんですけどこれ

本当にこの人馬鹿なのかもしれない・・・さっきのも本当かも・・・

「正直に言わないと目の玉えぐるぞ」

自分でも驚きなほどに感情がこもってなかったよ

ああ、それにしても気になる

さっきから気配がしてたんだけど陰に隠れている誰かに気になるよ俺はそちらに何気なく近づいていく

当然お偉いさんからはめをはなしません！

そしてそこにいた人の首根っこをつかむと思いい切りひっぱってみることにした

「あつ!?」

それはカイラだった

おお、敵の隠れ家に来ちゃうなんて馬鹿だね。あんたとりあえずしかりつけながら頭に軽くチョップを50連発50回もやられたら痛いだろう

「というわけで早く答えてくれ。こいつをもっと叱らなきゃいけないんで」

ええッ!? まだ叱るの!? という声は無視で

お偉いさんを睨みつける

「・・・私はまゝ」

また声が続かなかったのは別に俺が何かしたわけではない

この部屋には二つの窓がありその一つから突然全身を隠した奴が飛び込んできた

その手には小型のナイフが握られている

「チッ!!」俺の舌打ちです。だってめんどくさいだもん

慌ててカイラをかばうようにたつとナイフがこちらに迫ってくる

こちらも剣を抜きそれをはじき返す

その次の瞬間、何十回もナイフが迫ってきた。それを一つ残らずはじき返し

カウンターで反撃をする

それが顔のフードを切った

顔が見えた

するとそいつはお偉いさんのほうにまで一瞬で飛んで戻った

顔は周りの布を手で寄せて見えないようにしている

「おおっ! あんたか! たすけん」

またお偉いさんの言葉は続かなかった

俺が何かしたわけでもない、別に誰かが飛び込んできたわけでもない

飛び込んできたやつがいきなりお偉いさんの首を切りつけた
すると血がすごい勢いで噴出しお偉いさんは力なく倒れた

「なっ!?!」

おれがビツクリして固まってる間にそいつはご丁寧に割れてないほうの窓から

飛び出していった。この部屋の二つの窓がどちらも割れて風が通っていく

慌てて窓の外を見てみるとすごい速さで逃げていく奴がみえた

「あの動きにあの一瞬で見えた顔、少し黒い肌に黒い髪・・・魔族
しかも」

俺は少し考えながら一人で口を動かしている

「女性・・・」

完全にあのうごきとあの顔は女性のものだった

「じよ、じよじよじよじよ、女性!?!」

その声を発したのはカイラ。なんだと思つてそつちを見てみると俺を指差しながら女性だなんだかんだ叫んでいる

む?・・・気づかなかつたけど髪を縛っていたゴムが切られていた
ああ、さっきの奴にやられたな、不覚を取つたとても言っておくか

「徹夜!お前は私をだましたのかッ!?!」

すごい表情で叫んでいるカイラ

・・・(イラッ)

「俺はだましてなんかいねえッ!!おれは男だア

ッ!?!」

シリアスな雰囲気は俺の叫びで綺麗さっぱり吹っ飛んでいった

12話 今日シリアスかも知れないよ? . . . (後書き)

なんかPCを使えない日が続きました

まだ携帯を持っていないのでどうする事もできず

こんなかんじになりました

まあ、あいたと言っても二日、三日程度全然

モーマンタイですなあ!!ワハハハハハッ!

…なんかおれ変ですよ

13話 やらかしたッ!! orz(前書き)

前回のあらすじ

闇ギルド隠れ家とおもわれる場所に

突撃

なんとなく上に行ってお偉いさんから話を聞こうとおもったのに
突然の乱入者にお偉いさんは殺されてしまった

そしてカイラは俺の姿を見て目を見開く

・・・そいえば髪を縛ってた紐切られちゃったけどどうしよう・・・

13話 やらかしたッ！！ orz

・・・ああ

なんか疲れたよ

昨日はなんかカイラもついてきちゃうしで

それをラルドさんに見つかり、そして首掻っ切られて血を流しているお偉いさん

を見つけたり

すごい顔で睨まれた

俺のせいじゃないんですが・・・

ああ、そのあとめっちゃ叱られたよ

別に俺のせいじゃないじゃないですかアアアアア！！

ああ、疲れるなあ

まあ、一応闇ギルドの隠れ家は地下にあったようです

一人残らず捕らえることができ、死者も出なかったそうだから終了らしい

まあ、そんなことはどうでもいいとして

まだ、カイラの依頼が続いてるらしい

なんか終わりかとおもっていたのになあ

だからさ、宮殿が俺達のところにいるんだったらいいらしいむあ・・・

というわけでおれは寝ていたのですがね

目覚めてみるとなんなんですか・・・

いつもはラウだけだったのにね

なぜか今日はカイラもじゅっとみつめてきていましたよ

俺が何か言う前に二人ともどこか逃げていきました

・・・

なに・・・？

そして

また訓練が始まってしまい、俺は背筋に嫌なものを感じながら
さまざまな方向から迫ってくる光の斬撃をはじめ返していく
それが続くのですよ

もう嫌ですよ

大変ですよ

ていうか剣術の訓練だったら斬りかかってくればいいじゃないですか
ああ、もうつかれましたよおお！！

まあ

そんな感じで訓練が進んで終わった

で俺がいるのは

「魔物がいっぱい沸いてきたなあ」

あの俺が見つけた森の中だ

今回は魔法は使わずに

自由に闇を使ってみることにした

闇は便利とっていいだろう

闇を意識して使えば刃のように切り刻む事もでき

結構な堅さなものも切り刻む事ができた

そういえば、さ

闇は物体に影響を与えるらしいね

小石を闇の中に入れて細かく分解して時間がたつと

さっきまでとは違う黒いものへと変わっていた

それは硬度も上がり、とても小石だったものとは思えないものへと
変わっている

それは石だけではなく鉄とかもできるかもしれない

あとは闇がどれだけ伸びるかという事だろう

どんだけ伸ばしても限るがないばかりか
結構時間がたってしまい飽きたのでやめる事にした
伸ばしてる途中で特大物の魔物がいたので
切り刻みまくったりもしたわけだ

闇は感触は感じるんだな、とおもったよ
・・・どこの感覚として感じるんだろうか・・・？
むう・・・

ホント疲れますな

今ので50匹は殺したとおもうんだけど

新しい発見はないなあ

あとは闇を霧状にできるといっただけかもしれないなあ

ああ、

つまらないなあ

もつと使えるように早くなれないとなア・・・

むう・・・

ああ、すぐ近くの木の陰に誰かの気配がするんですよ
物は試した闇を使って拘束してみっかなあ

「そこにいるのはわかってんだ。誰だか知らないけど出てこいよ」
すると木の陰ににいる人は強張らせるような気配があった

それでも出てこないなあ

ああ、めんどくせえ

とりあえず闇を動かして捕まえようとおもっ

俺の周りの闇が動くと同時に

その隠れてる奴も動き出した

闇から逃げようとしているのだろう

結構早いな

そいつは二つ三つと木の陰を移っていくが

四つ目でとまった

「捕まえたな……」

闇は他にも使って地面に見えないように進ませていたものだ
それでそいつの体を動かせないように拘束する

闇で木を一気に切断した

そこにいたのは

こちらを睨んでくる目が見えた

たぶん女性だろう

黒い布で体を覆い、顔は仮面で隠している

その人は見たときがあった

「……お前は一体なんなんだ」

そいつはライル・レイシー

俺が入っているチームのメンバーだった

……どうしよう

13話 やらかしたッ!! orz (後書き)

いろいろとライルには

治してもらいたい所があるので徹夜君の秘密を使わせてもらいました
さあ、どうなるのかね

この展開

大丈夫、何日も前に紙にかいて決めた事だから!
たぶん崩壊はしないでしよう!!

・・・たぶん・・・ね・・・

14話 秘密と勇気 (前書き)

前回のあらすじ

闇を使い慣れるように使っていたものの
ライルがあらわれて秘密を知られてしまった

14話 秘密と勇気

目の前には仮面で顔を隠し黒い布で体を覆い全てを隠している
そんな人物がいる

「・・・お前は一体何なんだ」

そいつから漏れたこの声はライル・レイシーのものだ

普通ならありえない闇を使っている俺に向かつての言葉

今まで嫌われるのは嫌だな〜という微妙な理由で隠していた事
それを知られてしまった

これはとてもめんどくさい事になったというべきだろう

「・・・はあ」

俺はため息を漏らしながら

闇での拘束を解除する

その様子に拘束されていたライルはビクリと肩を震わしている

どうやらビクリしているらしい

仮面をかぶってるから表情が読み取れないせいでどうおもってるの
かわかりづらい

「・・・何故私を解放した」

「別に拘束する意味がないじゃないか」

テキトウに答えつつ

周りに広げていた闇をすべてしまう

それにも驚いている雰囲気を出しているライル

「・・・それがお前の秘密なのなら、私を殺して口止めをすればいい
じゃないか」

どうにもふに落ちないという様子で聞いてくる
む、これはどういうべきなのだろうか
やっぱり返す言葉は簡単なものでいいよな

「俺は人を殺してまで自分のみを守るうとはしない。
秘密がばれたらおさらばすればいいだろうしなあ」
この返答にも驚いた様子だ
ええ、俺ってそんな人間に見えてたのかな・・・
ちよつと傷つくわ・・・
俺が肩を落としているのに気づかずにライルは口を開く

「・・・それが、・・・その闇が知られたら国にも狙われるような
事になるんだぞ？」

ああ・・・そこまで大変な事なのか
ああ、ホントなんでこうなるんだよう

「そんなどこまでも逃げればOKですたい」
すみませんが
逃げるという選択しかわたくしにはおもいつきません

「・・・」
おお、黙っちゃったよ
俺は何をしゃべればいいんだ？
むう、つとテキトウに考えて口を開いてみる事にした

「闇は俺の力そのものだ。それは俺が決める事であり、相手が勝手に
に決め付けても関係ないことだ。相手が俺を脅威とみても、俺はそ
れを無視するだけさ」
ん、

正直ダメ人間かな・・・？

「…お前は」

ライルが口を開き

手が顔まで近づいていく

そして仮面に手が触れ、仮面をはずしていった

「…お前はこの顔をどう思う？」

仮面をはずした先には

真っ白な肌に黒い髪

左目は黒い

魔族というのはほぞ少し黒い感じの肌だが

人間と魔族のハーフではときどき血が流れてるのか？と疑問に思う
ぐらいの

白い肌を持つものが生まれてくるらしい

彼女は魔族と人間のハーフだ

ただ、ほかと違うのは右目だ

右目だけが真紅の瞳をしている

「私は魔族と人間のハーフということまで退けられ」

その声は苦々しく

今までの苦勞がわかるようだ

「そして、突然色が変わってしまったこの右目により

仲間からも退けられた。お前はこの私の姿をどう思う？」

正直言うが…

彼女の姿は綺麗だと思う

可愛いというべきだろうか…？

真っ白な白い肌はもろろん

小さな姿にあの顔はもちろん

あの真紅の瞳はルビーのようで美しいと言えよう
ん、なんかおれの外れな事思っでないか・・・？
という事で正直な事をいってみようと思う

「可愛いと思うよ。その右目だっでまるでルビーのようで綺麗だし」
最初彼女は何を言われたかわからないように
ポカンとしていた

あれ、俺何かまずいこといったかな・・・？

「・・・ッ！！」

すると彼女は俺から目をそらして
こちらに背を向けた

あれ・・・？

俺ホントに何かまずいこといったかな・・・？

「・・・そ、それは本心で言っているのか？」
そんな質問が帰ってきた

「今、嘘を言う必要ないし・・・」
なぜだかわかんないけど
こっちに顔を向けてくれないんだが

「・・・お前は変わっているな」
ええ！？

俺ってそんな変態だったの！？（別に変態とまでは言われていない）

「俺って変た・・・これが俺だからしょうがない」
さっき思ったことをきこうとしてしまったが
むしろその発言はもっと俺を変態にしかねないので
言うのをやめておこう

「・・・(クスツ)」
なにか笑われたような気がした・・・
うう、なんか笑われると恥ずかしいんだが
穴に頭から突っ込んでそのまま埋めて欲しいぐらいだ(これを埋葬
という)

「・・・私は王都に戻るよ。大丈夫、このことは秘密にしておこう
だけど」
こちらを振り向いたライルの顔は
少し赤くてちよっと目じりに涙があった気がする

「だけど、うちのチームに秘密は無用だと思う。
私はいつも姿を隠していたがチームに入るときにはハーフというこ
とを話したが
私の心配は笑われて飛ばされていってしまった」
満面の笑みでそういうと
すごい速さで走って行ってしまった
むう、これはどうしようか・・・
いい機会だしバラすというのもありだろうなあ・・・
さあ、どうなるかな・・・

もうライルは戻っていた
自分達が泊まっている宿の部屋にだ

「おかえり・・・ん？仮面は？」
エミリーの声だ

その部屋にはラルドもいた
その二人は本当にハーフだということを話されていたので驚く様子

もなかった

ラウとカイラは目を見開いていたが

二人が驚きもしないので安心してまた二人でキャツキャと遊んでいる

「・・・もう必要ないと思う。この姿を可愛いと、この目を綺麗と言ってくれた人もいるし」

すこし顔を赤くしながら答えたライルの顔は
とてもいい顔だったらしい

ちなみに俺はとぼとぼと歩いてるわけだが
秘密にしておくべきかばらすべきかとても悩んでいる

「むう」

これは俺の癖で考え事をしているとこんなうめき声が出てしまっ
ん

前いた国ではハーフでも大丈夫らしかつたけど

今の国ではダメなんだろうな

ん、そんな彼女は姿を見せなくても言葉ではらしたのだろうから
すごい勇気が必要だったろうに

むう、俺も勇気を出してみよかな!!

まあ、切りかかれても逃げる事は簡単だろう

闇には当然俺も入る事は可能だし

一応これでも逃げ足だけは自信がある

ところかんがえているともう宿の前についてしまった

「・・・話してみるかッ!」

俺は勇気をだしていつてみることにした

まるで勇者のように

間を使ってるけどね

14話 秘密と勇気 (後書き)

秘密をばらす事にしました

ばらしたときの反応は僕にとって難しくなりそうなので
いつきに3日飛ばさせていただきます

大会まで5日なのであと二日になるはずです

最初に徹夜くんの秘密をばらしたときの

反応を徹夜くんに考えてもらおうじゃあ〜りませんか

15話 秘密を話した末 (前書き)

前回のあらすじ

ライルに勇気をもらい

秘密を話す事に。全部話したわけではなかったが
とても晴れ晴れした気分になった

その日からの三日後

15話 秘密を話した末

秘密がばれてから3日後

俺が話して彼女達の反応は驚き、そして笑みだった

（カイラは『時の巫女』だからか、驚きもしなかった

『時の巫女』。恐るべし）

なんで笑ったのかは俺にはわかりません

難しい事は考えても意味無いと思います

みんなも知つてのとおり（？）俺は勘で動く（？）派ですから

そしてそのあとには質問攻め

何故その力を使えるか、どんな事でできるのか

いろんな質問、答えられるものには答えたいし

答えられないものには わからない の一言です

そして俺はライルに質問してみた

単純な事で闇は魔族は誰でも使えるのかということだ

ライルによると

魔族でも闇を自由に使えるのは上の上らしい

ハハッ！おれは完全なる異常な存在イレギュラーですな

そして上の下から中までは

他の魔族が作り出した闇の中でも昼間と変わらずに見れるという事

ライルは他の魔族の闇でも見れるらしい。結構上のようにだ

それから下はあまり関係ないそうだ

ん〜、そしてさ闇って荷物をしまったり中に入る事ってできないん

だつて

おお〜、徹底的に異常イレギュラーなおれ

そして、荷物をたくさんしまえるとしたみんなは

俺に荷物係を押し付けた・・・うう・・・ひどい

やっぱり隠してたほうが良かった・・・

むう、立ち直れ俺！
まさかこんな反応されるんだっいたら隠さなくて良かったんじゃね？
こんな感じでうなってたらラルドさんが
他の人にはあまり言わないほうがいいとってきた
言う気はないんで大丈夫です

そしてまた訓練がはじめった
いいじゃん！もう訓練しなくて！俺は光が苦手なんだよツ！！
これをつい言葉に出してしまった
それをきいてラルドさんにはっこりと笑い

「あ・ま・え・ん・な」
ひいひいひいひいひいひいツ！！
こわいよおおおおお！！
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
！！

そしてあの日からライルは仮面をつけなくなった
だからちよつと質問してみた

「何で仮面つけないの」
直球だ

「・・・あなたがこの顔を可愛いと、この右目を綺麗と言ってくれたから
もう、隠す必要はない・・・」
ライルの顔が気のせい少し赤くなっている
むう・・・？

まあ、それは気にしないでほかに気になることがある

「その瞳はいつから？」

すこし驚いた表情になると
すぐに話してくれた

「私がまだ幼いときに私が丁度いた建物が火事になったんだ
奇跡的に私は助けられたんだけど、あの火事だったから火傷がすこ
いかと思われた

だけど、火傷はおろかかすり傷一つおつてなかった
その次の日には右目だけが赤くなっていて・・・」

赤と火ですか

むう、やっぱりなんか違和感があるんだよね

なんというか、その瞳になにかがいるような

俺の剣と同じようなかんじだ

「むう、別に気にしなくなっただったらそれでいいけど
多分何かいい事あるよ。自分の気持ちしだいだろうけど」

俺にはこんぐらしいしか言えませんな

俺の予想では火系の精霊がいるとしか考えられないが

生き物の目に憑くというのはいええるのだろうか？

確信は持てないからこれだけしかいえない

そして気にするのを忘れていたが新聞をしてみる事にした

☐ ×新聞

（いつも思ってたけど国境をこえてこつちまであるんだからこの新
聞スゲエよな）

今日のニュースですぜ！の時間

今日は勇者様についてだ

数日前に魔法の特訓を始めた勇者様だがその覚えが早く、必要な魔法はほぼ覚えたそうだ

（さすがは完全完璧女だ）

そして〜！！

勇者様は『時の巫女』にあうために今日出発した〜！！

最低でもギルド同士で争う一大イベントの最初の日には間に合うだろう〜オツ！！

その美しい勇者様が出発するときには

サラスム王都でも祭りのように騒がれるはずだ〜

正直こんな記事かいてるよりも外に出て騒いできたいぜえ〜ツ！！

（仕事しろ、仕事）

という、私欲はボーナスを得るために押さえ込みまた書き始める事にした

（ホント、この記事を出してる会社はこのままでもいいんだろうか・・・）

というわけだ、（どういうわけだ）これで勇者様を木の上から見る事もできなくなり

（ストーリーかッ！？）とても残念だ

ああ、人気だったラルドさんのチームも出て行っちゃっし

勇者のほうも出て行っちゃっしで困ったよ

あ、忘れていた、勇者ご一行が決まったんだっ（仕事ならちゃんとしろよ）

えっとな〜、勇者様はもちろんのこと

騎士で腕が立ち性格がまっすぐな若い青年のロイズ・ルーサニツヒが選ばれた

そしてもう一人の騎士はこの国の初の女性の騎士でとっても強く可憐な

マイル・トクルサーさんだ

そして魔法ギルドで女性のSランクのサイスさんが加わった。杖ではなく鎌を振り回す事で有名だ。（なにで有名になっただよ、こ

の人)

そして最後の主力にロミル・トゥート二さんだ

この人は剣術にすぐれ、ギルドのSランク。これぐらいしかわからないの残念だ

(結構Sランクを入れてますな)

そして最後に召使のラルチちゃんだ、とてもかわいらしくて

・・・恐ろしいほどの蹴りを放つ少女だ、私も食らったのでじゅうぶんなほど理解している

(お前も食らったのか・・・!!)

このぐらいで今日はやめておこう!

さよお〜なら〜

おまけ：勇者様の愛人らしき人はレーゲン王都にいるらしい(・・・俺じゃないもん)

前、この記事を担当していた記者・・・見つけ出すといていた人がナイフをもって

インタビューをしにいつている(完全にインタビューじゃねえ...)(『

・・・

記者に気をつけないといけないかもしれない・・・

それでこの日は終わった

15話 秘密を話した末 (後書き)

む

何日かあけて更新しようとおもっていたのですが

暇なのでつい更新してしまいました

ああ、暇ですな・・・受験生ですが・・・

き、気にしない!!

次は大会当日にスキップするかもしれませぬ

ちなみに徹夜君(主人公ですよ)がこの世界に来て11日目ですか
な

16話 大会ですよ (前書き)

前回のあらすじ

秘密を話した末

いろいろな反応が返ってきた

16話 大会ですよ

今日は大会当日だ

どうやら本当に美月（勇者様）はきているらしい
顔隠して出ようかな

困ったなあ…

そういえば髪留めが切られてたことを思い出し買いにいったんだ

結局はテキトウに選んだ灰色の紐にしたんだけど

その店のオバちゃんがめちゃくちゃ女物をすすめてきておれはとて
も苦労した

男だといっても聞いてくれなかった…

しょうがないから金属製のも買ってあげたんだが…いいカモか
もね、俺

まあ、紐が切れちゃったらこれにしようとおもっ、金属なら壊れな
いだろうし

…ん？闇でまとめとけばよかったんじゃ…
き、気にしないもん！！

まあ、とりあえず大会が始まったのよさ（誰かのしゃべり方だが気
にしない）

は、えつとね新聞で見たんだが

ギルドの参加数は50だそうだ

その中で有力なのが

『折る事のできない剣』上位の騎士のように剣の腕が立つ者ばかり
だ（他のスキルも上位）

『強い亀』ストロングタートル 防御力売りのギルド

『疾風の翼』ブルード スピード自慢の多いギルド

『青い剣』水の属性の魔法を使う人たちばかり

そして俺が入った

『スカイバード空を飛ぶ鳥』理由ですか？・・・さあ？
だそうだ

そして最初の競技は、24体の中ぐらいの大きさ（身長）？（10？）のゴレムと、1体の大の大きさ（身長）？（15？）のゴレムをどれぐらいの速さで倒せるかだ。

チームメンバーなら何人でも競技に参加可能

俺達は3番目に行うらしい

「あのさ、俺試したいものがあるから一人でやっていいですかね？」
試したいものがある

丁度いいからそれを試すことにした
それをきいて他のメンバーは

「。。。いいよ。。。」

この一言で了承

そしてラルドさんがつこりと笑う

「ただし五分以内に全滅させてね」

うあああああああああああ！！！！

プレッシャーがッ！！

プレッシャーがかかるよおおお！！

まあ、多分可能ですけど・・・

というわけで俺の出番だ

俺がフィールドにはいると（コートを着てフードで顔を隠している）
遠めに美月の方を見てみた（彼女は『時の巫女』と同じ場所で特等
席に座ってる

ちなみにラウもそこにいる、待機室は参加者しか入れないそうだ。

とても寂しそうだった
すると

『てええええつうううううううあ　ブグウツ！！』
こんな感じの大声がきた

ちなみに『ブグウツ！！』とは俺がおやつに食べていたソーセージを思いつきり口の中に投げ込んだ。それはプロ野球選手も顔負けな速度でまっすぐに口の中にホールインワンした。

そして目の前には25体のゴーレム
ゴーレム作り選手権というものがあり1位～3位までの人が何ヶ月もつかって作ったらしい

『では・・・始め！』
司会の女性の大きな声が聞こえた
それと同時にゴーレムたちはこちらにすごい勢いでせまってくる

よし！チートなせこい技の出番だな
おれは剣の中にいた双子の精霊に教えてもらった魔法を使うことにした

「^{ヘル・フレイム}地獄の炎」・・・四割程度でいいかな」

精霊さんが言うには相当威力が高いのでおさえめにしたほうがいいらしい
おれが前に手をかざすとそこにはライターで火をつけたときと同じぐらいの

小さな紫の炎があった
それが一直線にゴーレムの群れの中に進んでいく

すごい爆音とともに25？はありそうな紫色の炎の柱ができあがっ

ている

それは周りにいたゴーレムを衝撃だけで粉々にし、それをまともに食らったものは

塵ちりも残らず消滅した、それは大サイズのゴーレムも例外ではなかった

「……うあゝ、四割でこのぐらいって」

自分でやったのにビックリした

ここまでのものだったら事前に教えて欲しかった

「……ええゝ。タイムは5秒15でした……。この頃入ったばかりと聞いたのですが

これは反則な魔法を使ってきましたねゝ

……まあ、お疲れ様です。では次のギルドに」

そういつて俺の出番は終わった

ちなみに美月はキャツキャとはしゃいでいた……。おまえ……。
おおい

「……いやゝ、あれは反則だったねゝ」

戻ってきた俺に最初の一言

ひどいよッ!!

ここまでのものだとは思わなかったんだもんッ!!

「次はレースだね。これは二人まで出場可能だけど

うちのチームが入ってるところには『疾風の翼』のチームがいるからなゝ」

ラルドさんがうんうんうなっている

俺が出ない事を祈ろう

「もうちょっと実力見たいし徹夜くんと私かなゝ」

ああ、神様。何故あなたは私を見捨てたのですか……

俺が激しくブーイングしていると

「訓練のときもつと厳しくするよ?」

「謹んでお受けいたします、ラルド様」

あはっはっは、と笑っているラルドさん
くそう・・・

「ちゃんと次に進んでね。私達の出番なしでおわるの嫌だよ」
これはエミリイ

「・・・私は別に」

これはライル

ああ、なんかもうやだ

ちなみにレースのルールは

一人二週してから交換しもう一人が二週したら終わり
俺達のほか9つのギルドと争うそうだ。

むお、めんどくせえ

俺は現実逃避 じゃなくて休むために寝る事にした

レースは五回にわけて行われ最初ので一着と二着の10組
そして三着の五組が争いそのときの1着と二着の2組
あわせて12組生き残ることになる

おれたちは二回目のレースだ

そのはじまる20分前におこされた

「・・・眠い」

まだ眠気は覚めず目をこすっている状態の俺

それをみてライルさんがニツコリ

「起きます。もうおきました」
嫌な予感がしたので緊急回避
それをみてラルドさんは少しガツカリした様子だった
あああ、よかつた〜

所変わってレースになりました
邪魔するのに攻撃あり、殺してはダメだけどね
魔法ありのレースだ

『よーい！』

この言葉でみんな準備する

『ドン！』

この言葉でみんな一気に走り出し
俺は結構本気でスタートダッシュをした

『おお〜つと、一気にトップに出たのは』
空を飛ぶ鳥スカイバードだ〜ツ！』
こんな感じの実況が聞こえた

『さすがは『疾風の翼』でのNO.2！あのスタートダッシュにつ
いていつています』

横を見るとまるで忍者のような感じで走っている男が見えた
その男がこつちを見た瞬間に手が動いたかと思うとナイフが四本飛
んできた

うおおっツ！！

両手の剣ではじきながら走る俺

「『ファイアボール
火の球』」

お返しにというわけで魔法を放つがそれを軽々と避けてきた
むっ!!このレースには障害物というのがあるのだ
俺の場合は特大サイズのゴーレムが三体いて、それを壊すかそのま
まスルーするかだ
そのゴーレムが一週目の半分に来たところでした
忍者のような男をジグザグに動きながらゴーレムの足の間を通過
していくようだ
おれは

「どっせえいッ!!」
跳んで

とりあえずゴーレムにむけて膝蹴りをかます
その一撃でゴーレムは粉々に砕け散った

「化け物か・・・ッ!!」
俺が着地したところにあの忍者が横にならんでいて
こちらに向かってそんなことを言ってきた
失礼なやつめッ!!

『トップの二人が二つ目の罠に入りました』
実況の声が聞こえた
むっ、そろそろこいつを突き放すか

「『重力操作』^{グラビティン} おれのまわりだけ5分の1に」
俺の周りだけ重力が5分の1になる
同じ力加減で走っているのに一気に加速した
それをみた忍者は

「『加速』」
その声が聞こえると同時に忍者はもっと早くなった

むううう〜!!
ならば

「『バナナの皮』」
後ろにいつぱいバナナ（みたいな）の皮をまいてみた

「むぎやあああああああああ!!」

後ろからそんな声が聞こえた。南無

まあ、バナナの皮に似たものなんだけど結構すべると思うよ
俺これで滑って頭打ったもの

ちなみにトラップの発動は遅く、俺が通過したあとに発動していた
そしてもう二週まわり終わりラルドさんに代わった

ラルドさんもすごい速さでさっきと同じように『疾風の風』のNO、
1の人と争っていた

結局はラルドさんが一着だった
これで次に進めるらしい

そして午前の競技は終わった

むっ!?!?ゴレム25体いらなかったんじゃね!?

・・・という疑問は捨てておこう

16話 大会ですよ（後書き）

闇を話したのは良かったと思っただけでしょう

よくかんがえれば闇をつかえるのに

徹夜くんには闇を使う機会がまわってきませんでした

そして最初から徹夜くんはチートなキャラにしようとおもっていた

のですが戦闘シーンがなくチートなキャラにはなっていないませんでした

ですので、できるだけ多く戦闘を入れて

チートな感じにします

17話 大会 一日目午後（前書き）

前回のあらすじ

大会の午前

ゴーレムをぶっ壊して

レースでてバナナの皮みたいなのをばらまいて

とてもおもしろかった

けど、めんどくさくもあった

17話 大会 一日目午後

今日は大会最初の日の午後

俺達は一着で進み、次はギルド同士での1 vs 1

そしてそれで勝てれば3組のギルドのサバイバルファイトとかいうらしい

要するに遭遇したら殺しあえという事だ

ちなみに一対一の勝負では

『戦場を生きる者達』というギルドが相手らしい

なんか、長い名前のギルドのような気がするけど

それを言ったらうちのギルドも一緒だろうし

30文字を超える名前のギルドもあるらしい

もおゝめんどくさいっいたらありゃしないよ

そういえば午後の部は3:00からなんだけど

おれはその前に12:00〜1:00までめちゃくちゃ追われた

誰が追ってきたかって・・・

そりゃ勇者様 つまり美月ですよ

まさか追ってくるとは思わなかった。

とにかく頑張つて逃げ切ったのだが

最後の言葉がちょっとビビッた

『助っ人も呼んでまた追うからね ツ!!!』

だそうだ。助っ人って誰だよ

もう追つてくんないよ

もうめんどくせえゝ

…っって感じた

そういえば

疑問に思っていたのだが、ライルは仮面はずしちゃったけど、大丈夫なのかという事だ

それをライルに聞いてみるとギルドカードをもっていれば

大丈夫だそう。ギルドに入ってるだけで国に貢献してる事となりそれだけで信頼されるそう

そういえばこの大会は三日行

三日といっても連続というわけではない

一日一日の間に一日だけ休みがある

殺してはダメだが相手は場合によるとAランクの魔物を相手するのよりもきついらしい

だから休みがあるというわけだ

二日目はサバイバル。三日目は決勝らしい

たぶん場合というのは相手がSランクあたりだった場合だろう

それはラルドさんにまわすつもりだ

だってめんどくさいじゃん・・・

ラウは大会の間はカイラのほうに預かってもらってるから

美月ともあっているはずだ

そういえばこの頃訓練やら闇ギルドのことやらでラウの相手ができていない

あの癒し系はめんどくさがり屋の俺にとって必須ともいえよう

まあ、そんな感じで俺はもう精神的に体力が尽きてきているというわけだ

ちなみに今までしていなかったこの世界の魔法の属性を紹介しようと思う

一番下が火、水、風、土、雷

これは結構人が多い
中ぐらいが光、闇

これはあまりいない。俺は徹底的に闇だが微量になら普通の人でも
闇は使えるらしい

基本的に闇は魔族が使うといい

一番上が創造、時空

これは下位の神の領域とっていいものらしい。俺は試した事が無
いが今度試そうと思う

まあ、俺が使えた場合あまり使わないことは眼に見えている
てな感じだ。

むっ・・・俺がよく使う重力を操る魔法は一体どれだ・・・

・・・創造かもしれない

(創造は世界を作る事もできると考え、重

力を操るということは世界のルールを

変えるということだろうから一番創造に近いかもしれない)

まあそんなことはほっといて(ポイント　どっかに投げました)

そして午後のギルドファイトの時間だ

大会、大会って連発してたけど他の人は『ギルドファイト』ていう
らしい

むっ

それでおれは6個ある試合のうち二つ目

1時間でタイムアップらしい

六つある試合だが有力とされていたギルド同士では一個も当たって
ない

試合側が意図してやってるんだらうけど有力といわれてないほうでは
迷惑な話だろう

少しでも有力といわれてるところが潰れてくれば決勝に行きやす
くなるのに

と思うこと当たり前だろう

こんな事を考えてる間にも試合は始まりもう30分は経過している
そういえばラルドさんが言っていたのだが
俺達が戦うギルドのリーダーはSランクらしい
策士・・・というより卑怯な奴らしい
まあ、俺には興味がありませんが

・・・ということとで試合も終わらしたので俺達の番だ・・・
めんどくせえ

『さあ！始まりますよ。午後の2試合目です！
今回気になるのは、聖剣エクスカリバーを扱うラルドさんです
そして最初から登場してきた新人。彼はCランクと聞いてはいるの
ですが

あまりにも反則的な性能スペックをしています！そして
とこんな感じに司会が言っている
反則、反則ってお前失礼だぞ！！

『というわけではじめていきましょう！』
説明を終えたらしく
次の瞬間ピ
ッという耳に響く音が鳴った
どうやら始まったな

その瞬間目の前でキラツと光が見えた
俺がとつさにそれをつかむと矢だった
あぶねえ！

そして視界の隅ではもうラルドさんが動いている
剣を空に向けるように構え、せええええいつ！というあまりかわい
らしくない声とともに振り下ろす。その瞬間に剣から光の斬撃が一
直線に切り裂いていった

それをギルギリのところで真ん中にいた人が避けていた

「あれがSランクだそうだよ」

というラルドさんの声

ちなみに俺とラルドさんは微妙にまったりしているが

もうエミリイとライルは戦闘に入っている

「私の・・・『雷拳』のエミリイといわれる力を見せてあげるわッ
！」

そしてエミリイが空に突き出した右の拳には

白いナツクル。その手の甲には黄色い宝石のようなものがくっついている

もしかしたら雷属性の精霊入りかもしれない

ん〜、精霊多いなあ〜・・・

そんな事を思っていると空には雲ひとつないはずなのに雷がそのナツクルに落ちてきた

エミリイの右手が雷の光で見えなくなっている

そしてそれで敵に向かって殴りかかっている

敵はそれを交わすが地面にぶつかった拳からは周りにいくつもの雷撃が飛んで行き

相手に攻撃を加えている

ライルも方ではすごい速さで攻撃を加え

相手は二人係でそれを受けとめていた

「ん〜、どうすればいいのかな〜」

と思つてちよつと前に歩いていると

足元がいきなり光だし、魔法陣のようなものが浮かび上がった

「むおッ!?!」

驚いただけで何もする事もせず地面からなにか板のようなものが出てきて

俺を閉じ込めた。・・・罨だ。

ちよつと振り返ってみるとラルドさんも俺と同じ状態になっていた
むう、眠い

あ、眠いのは今関係ないか

「ククク、これで主力はおさえたと思える。あとは二人を倒しタイムアップを待つだけだ」

そんな声が聞こえた

それはSランクの男だった

むう、策士ともいえないただの卑怯者だね

そしてその男が何かをとつばやくと同時に地面が盛り上がり鎧のようにくつついていく

すごい力の土がついていき巨人みたいな感じになっている

「私を倒すということ事態で無理な話だけどねッ!!」

いつの間にかきていたエミリイがもう拳を振りかぶり飛び込んでいつている

エミリイの一撃で鎧は壊れるがすぐにまた土を吸収し復活していく

むう、俺はどうすれば・・・

とりあえずパンチをくり出してみた

・・・いたかった、壊れそうにない

「上位の結界だから絶対に壊せないよ」

その声が聞こえた、前を見てみると知らない人がいた

「当然君たちを退屈なんてさせないさ」

その男がパチンツと指を鳴らすと俺がいる結界の中から

『グルルルツ』という声が聞こえた
そちらを向いてみるとめんどくせいことに黒い狼がいた
そしてそいつが俺に向かって飛び掛ってきた
ものの

「ぐはっ！！なめんな！！ペツペ」
じゃれ付かれてるだけだった

「・・・」

男は黙ったままボーっとしていた
と、そのとき

「ね、ねねね。ネコオ ……！！！！」

ラルドさんの意味不明な声。

苦手な感じだったのか？と思ったがどうやら違つらしい
猫みたいなかいまじゅうにめちやくちやだきついている
どうやら猫がすきだったらしい・・・
男もそれをみて呆然としている

「キャッ！」

そんなエミリイの悲鳴が聞こえた
どうやら少し食らつたらしい
ちよつと勢いがあるが落下するときには体勢を立て直しすぐに立った
エミリイは気づいてないみたいだが足元にへんなものが見えた
ふむ、そろそろ俺も動こうかな

「まず最初は『雷拳』ですか。」

そういつて鎧というより土の人形が腕を振り上げエミリイに攻撃に入る

「ッ!？」

エミリイは気づいていなかったが足元では相手がセツトした罠で動きを封じられている
そして拳が迫ってくる

「ヤバッ!！」

思わず目を閉じてしまう
だがいつまでたっても攻撃は来なかった

「くあッ!!腕が痛いなあ!!もうッ!！」

その声がエミリイの前方から聞こえ
目を開けると

徹夜が自分の数倍ある大きさの土の巨人のパンチを片手でとめている

「何故ここにいるのですかッ!？」

巨人のなかにいるSランクの男が驚いている

「左手がちよつと間、使い物にならなくなったけど素手で脱出完了
でえゝす」

ふざけた調子で左手をプランプランしているが
その手は血まみれだった

「あんたホントにSランク?なんか弱い気がするけど」
それはテツヤがおかしいだけなきがする

「なっ!?!おまえ!！」

怒っている土人形

「まあ、そろそろ閉幕致しましうじやあゝありませんか！」
ふざけた調子でそういいながらクルツッとまわったかと思うと強烈な蹴りが土人形の手にあたった。

ピシツツと音をたてひびが入るとそのひびが全体に広がっていき全体が粉々になっていく、中の人間が見えた

「では、エミリィ。閉幕よろしく」
いつの間にか足の拘束が解かれてうごけるようになっていた

「りょーかいッ!！」

そういつてエミリィが思いつきり斜めに飛び拳を構えるその先にはSランクの男

「なッ!?!?!?!?!」

その言葉を最後に男はまともに顔面に拳を受け
気絶した

こんな事であるのだからSランクとは思えない
それともSランクの最下位ってかんじかな

「ふむ、これで閉幕だ」

そういつた徹夜の声で
周りを見てみるといつのまにかでたのか

ラルドさんとライルの周りには気絶してる男達

そしてラルドさんの手の中では首を絞められ（多分ラルドさんは抱きしめているかと思ってる）

気絶している猫

ちなみに黒い狼は俺の闇の中。その狼はもともと影とかに入れるらしく

俺の闇とすごく相性が良かった

そのおかげかとても仲良くなれた気がする

『しゅくりよおー！！勝者』大空を飛ぶ鳥スカイバード『！！』

その声とともに今日の大会は終わった

17話 大会 一日目午後（後書き）

終わりました

大会一日目です

つぎは休日ですね

久しぶりにあの人が本格始動すると思います

ほぼネタとっていいでしょうな

では、みなさんごきげんよ

18話 大会の間の一日。休みの日（前書き）

前回のあらすじ

いろいろ大会をして

一日で結構消費した大会のスケジュール

そして俺の左手は使えなくなるものの一晩で直ってしまった

あの超弱いSランクはいつたいたいなんだったのだろうか

たぶんSランクというのはデマだったのだろう

18話 大会の間の一日。休みの日

今日は大会の一日と一日の間の休みの日

「ハツ・・・ハツ・・・」

ただいま絶賛息切れ中

それでも走り続けるのには大きな理由がある
おれは細い道を曲がり裏路地にはいつていく

ここなら十分に暗いはずだ

フードをかぶり闇にまぎれる

おれはある奴らから逃げています

裏路地に入り少し奥にはいつた後てきとうに中身のない箱に
隠れる。

普通なら闇にまぎれるまでで普通の人は撒けるのだが
今回の相手はそうも行かない

俺につづいて入ってくる人が三人入ってきた

俺の体が強張るのを感じた

その一人が手を前に突き出し

そのてからすごい量の光が周りを照らした。それは暗闇を簡単に吹き飛ばす

あのまま外にいたら見つかったらいただろう

「徹夜はどこに隠れたのかな？」

この様子で少しはわかっていただけだろうか

そう、俺を追っているのは内藤ないとう 美月みつき。要するに勇者様である。

そしてあの言葉通り助っ人がいた

前は一人だったのに二人追加されている

片方はなんというか、うん、直で言おう。

カイラだ

もう片方は犬の耳と尻尾を上下にピコピコ動かしている獣人さん
ラウだ

「私はわかりませんね」

「・・・大丈夫。捜せる」

これがとても厄介だ

カイラ・・・は問題ないとして

ラウが問題だ

ラウは犬の獣人だ。ようするに鼻がいい

だから今日はもう10回以上撒いたはずなのに
10回以上ロツクオンされている

何故美月から逃げているのか

それは簡単な事だ、どこにナイフ・・・じゃなくてマイクをもった
記者がいるのかわからないという事だ。

いつ俺の体にナイフ・・・じゃなくてマイクが俺の体にぶつかって
くるかわからない

避ける事も可能だがなんか嫌な予感もするのでできるだけ回避した
いものだ

まあ、そんなわけで

俺は逃げ続けているというわけだが

まあ、あとは美月を捕まえて離れさせるというのも手だ

あいつだけは運動神経がいいから

ついてくることもなくなるだろうけど

さっきも説明したとおり

マイク（ナイフ）がとんで来そうだ

あとはカイラ

あいつは『時の巫女』として相当の価値の持ち主だが
俺には関係ないし

こんなことを予知していたら
無駄すぎる能力だ

だからこいつは関係ないということになる

やはりここはラウを離れさせるしかないようだ

ラウを離れさしたら

美月とカイラを捜してる連中（主に勇者一行とジョイツさん達）に
報告する必要がある

これ以上捜されるのは面倒だからな

というわけで行動に移ろう

バツっと思い切り金属製の箱を蹴破って飛び出しラウを抱えて

「……ツ!?」「」

三人とも驚いている

建物の屋根に思いつきりジャンプしてとびのる

「ふう……。さらばッ!」

そういうことで全力ダッシュ and ジャンプ

そうしたら二人の叫びが聞こえてきた

「何で私じゃなくてラウなのーッ!」

そういう問題なのか

俺は疑問に思いつつもとりあえず走る

「別にお前らが嫌いってわけじゃないからアアアアアア!」
一応フォローを入れておこう

むう

俺の目当ての人物はッ！

イタアアアアアアア！

ジョイツさん発見！どうやらカイラを捜してるようでキョロキョロしている

ジョイツさんの手前にジャンプして着地する

「む！？ おお、徹夜くんか。」

「ちやつす。ジョイツさん。む？そちらの方は」

ジョイツさんのほかに軽い装備をつけた女性が後ろにいた
そういえば彼女も何かを探すようにキョロキョロしていた

「こちらマイル・トクルサー殿だ」

ああ、あの新聞で言った。勇者ご一行様の一人の女性の騎士さん
ですか

するとよろしくと手を伸ばしてきた

「えつと、徹夜ていやくです、よろしく」

そういつて握手をする俺

正直に言おう。徹夜のほうしか呼ばれないため俺は苗字を忘れてしま
った

ちよつと（記憶の）過去をさかのぼろうと思う
景山かげやまだ！良かった思い出せて

「誰かを捜してるんですか？」

一応確認

「「巫女と勇者」」

二人一緒に答えていた

ペンゴだぜ！

「じゃあ、あっちにいましたよ。さっき”チラツ”とだけ見ましたから」

一応 チラツ を強調しよう

すいうと、ありがとう とこたえ一人とも猛ダッシュしていった
するとそちら側から

『美月さまああああ！』 『カイラさまあああああ！』

『何故ここにッ！？』

『徹夜君に教えてもらいました』

『てつやあああああああ！！！！』

『いいから早く来なさい！！』

『んみやあああああああ！！』

こんな感じの音が響いてきた

なんと愉快なんだろうか

さあして。テキトウに今日はラウとブラブラしているか
ちよっとラウに冗談を言ってみよう

「さびしかった？」

「・・・うん」

ああ！冗談のつもりなのが

まさか当るとは思わなかったよ・・・

18話 大会の間の一日。休みの日（後書き）

まあ、とりあえずシリアスは絶対に入らない話でした
まあ、シリアスはあるま入れても仕方ないでしょう！

（それもどうかとおもっ）

まあ、とりあえず徹夜君の力を見せつけようと思います

19話 サバイバルファイト。俺の疑問は捨てておこう（前書き）

前回のあらすじ

おれは美月とかに追われ

逃げまくった

とりあえずラウを引き離したものの

まだ追つてきそうなのでジヨイツさんとかに連絡

そして美月とカイラを撃退した

その頃、

作者（焼き芋）は現実の友達にこの小説がばれるというだいさんじに、

現実の世界の俺を捨て書いていた俺にとってはとても恥ずかしい事だった。これのせいでいじめ・・・といっても笑って済ませられる程度だが・・・らしいものをうけた

がたやまなかの
型山と中野に社会的死を

（べつに本名じゃないから大丈夫）

とりあえず恥ずかしさを我慢して書くことに決心した

この決心が後悔に変わらないことを祈ろう

19話 サバイバルファイト。俺の疑問は捨てておこう

今日は大会二日目（休みを入れたら三日目）

今日はサバイバルファイトみたいなかんじ（サバイバルとはいえないかもしれない）

広いフィールドで3組のギルドが遭遇したら戦えって感じだ
まあ、ずっと隠れてるのもアリらしい

隠れてたら10分隠れてる後にポイントが消されていくという感じだ
ポイントが一番多ければ決勝

またはほか全員を倒せれば決勝進出だ
二試合あり俺達は二番目だ

だから午後になる

というわけで俺はこんな考え事をしながら
ぼーっとすごしたりしている

ラルドさんとかは素振りをしたりしているが
基本的におれって素手のほうがやりやすい

「ひど」「すぎ」「ないか？」

こんな事を考えると剣の中の双子さんさんが
こんな事を言ってくるのだが気にしない

気にしたくないし気にするわけがない
まあ、そんな感じでいいんじゃないか

前の世界では素手で全滅（主にチンピラとファンクラブ一同）させてきたから

一番やりやすいのはこれなのだ
というかさ

さっきの剣の中の双子さんさあ、
しゃべりかためんどくさくね…？

「・・・」「・・・」「・・・」

ほらこのとおり

めんどくさいよね。なんか

まあ、癖なのだろうからしょうがないんだろうけど

ちなみにこの世界にはSランクは総合で150人

Sランク内でも力の差はあるが（土人形とラルドさんを比べればわかる。ラルドさんは土人形の50倍以上の強さだ）、全体から比べると少ない

そしてその上にはSSランクというものがあるらしく

現在では5人しかない、しかもその全員が戦争には興味がないというものばかり

というか、こういうギルドに入ってるものは全員とっていいほど戦争には興味がない

ちなみに俺もその一人だ

うん、まあ。考え事も終わったし・・・

寝るか！！

午後 試合2分前

という事でこの時間になった

寝るのは得意だ

横になれば0.1秒もしないはずだ

のび多くん（『多』は一応漢字をちがくしました）にも勝つ自信があるからな

たしかあいつは0.8秒程度で眠るはずだ

「いつまでボーっとしてんの！早く行くよ〜」

エミリイが声をかけてきた

正直眠いがとりあえず行くかな

どうやら試合も終わったらしく
もう、ウジャウジャと観客が次の試合を待っている
むっ、めんどくせえ

『さて、始まりました！本日二試合目です！

今回は、『空を飛ぶ鳥』スカイバード・・・『青い剣』ブルーソード…

『疾風の翼』という、有力だけのバトルです！これは期待が高まります！！』

とこんな感じのことを司会が言っている

『今回では、Sランクが多く出場する中、Cランクの選手が目立っています！

インタビュールをつけてくれないので、調べてみたところ、え、名前前は「通行人A」さん！・・・これは偽名ですね！なんとお腹立つ名前をつけたのでしょうか！

モンスター映画でモンスターに食われてしまうような通行人Aになればいいのにッ！！』

なんか微妙な事いつてるよ、この人
ん・・・？悪口かッ！！悪口なのかッ！？

悪口だったら殺してやんよ

『まあ、そんな事はおいときまして、試合を始めます

試合の舞台は無人島。大きなスクリーンに戦いの様子が映し出されますよ』

どうやら移動するらしい

スクリーンといっても大きな鏡に映るといふ不思議なものだ

『という事で各チームの前においてある水晶に手を乗せて下さい』

一つチームに一個ずつ水晶があった

言うとおりに手を載せてみた

司会が全員が乗せた事を確認すると

『では移動させていただきます。移動した瞬間に開始なのでお気を付けて

では』テレポート『空間移動』！！』

その声が響くと同時に青い光が俺達を包んだ

次の瞬間には無人島らしきところにいた

たびん相当の広さだろう

「よし、いってみよう」

俺がめずらしくやる気を出して一歩歩くとカチツという音が足元から聞こえた

『ああ、島には罨があるのでお忘れなく』

どこからかケラケラ笑うようにそんな声が聞こえた

次の瞬間足元が爆発した

そして俺達は空中に投げられた

「うわああああああああああ！俺の叫び

「ミョアアアアアアアアアア！」エミリイ

「たのしいかもしれませんな、これは」ラルドさん

「・・・自分で体験してみるとなかなか恐ろしい」ライル

なんかあとの二人だけ冷静だった・・・

うあああ~~~~！！地面が迫ってくる

ということクルツと回って着地

上を見てみると

「きゃあああああああ！！」

エミリイが落ちてきた

「あぶなッ!!」

とそんなかんじのこえをだしながらも

とりあえずキャッチ

ありがとう、といいながら降りるエミリイ

ふう〜・・・エミリイの顔が赤くなつてたけど、きにしねえぜ・・・

「どうやらラルドさんたちとは別れちゃったみたいだ」

「うん」

そんな感じの会話をしながらとりあえず歩く事に

う〜ん

普通あまり遭遇しないようにとか、先に見つけるとかそんなことは
気にしないのかな

と、次の瞬間

轟音が響き

「キャフッ!!」

エミリイの変な悲鳴が聞こえた

そちらをみてみるとエミリイが吹っ飛ばされ目を回している

そしてその横には同じくたおれて気絶している男

あれは、『疾風の翼』の俺とレースをしたNo.2だったやつだ

捨て身の攻撃か・・・?と一瞬思ったが違うようだ

「これはすまない、私が吹っ飛ばした先にまさか人がいるとは・・・

」
その声が聞こえた

そちらを見てみると青い鎧を着て剣を持っている男がいる

顔には鎧を着ていないので顔が見えていた

うん、ワイルドなかんじ

「これはあんたが・・・？」

「ああ」

短く答えが返ってきた

これは、やっぱり場面から考えるに

「ふむ、『ブルーソード青い剣』か・・・」

男は俺に向かって剣を構え口を開いた

「チームリーダー、トウルス・トーマンだ。

お相手しよう」

ふむ、雰囲気が違うね

『おくと、『ブルーソード青い剣』のチームリーダーと『空を飛ぶ鳥』のスカイバードクラ
ンクの通行人A（とりあえずこれで呼ぶことにした）が
勝負をするようだ！CランクはSランクに勝てるのか〜ッ！〜！』
どうやらあいてはSランクのようだ

場所が移って

「徹夜くんはトウルス・トーマンと遭遇してしまったのか・・・」
ラルドさんはこんな感じのことをいっていた

「あの人は強いからな！」

この声はラルドさんとレースをしていた『疾風の翼』のリーダー
トミー・キークソンだ。こちらもSランクである

そして二人の周りでは金属のぶつかり合う音がすごく多い

火花が何もないとこで散ってるように見えている
目に見えないほどの速さで攻防を繰り返しているのだ
相手の速さでは相当のもので、速さだけの勝負ならラルドさんも負
けているだろう
だが、ラルドさんは先読みをして動いているため、その差を埋めて
いるというわけだ

そしてその周りでは他のB、Aランクの奴 3名ほどを
ライルが一人で相手をしている
速さ優先のギルドだがなかなかライルの早さには追いつけていけ
ない

場所が戻って

「では、いくぞ。」
その言葉とともにいくつもの突きが襲ってきた
あのときの魔族の女と同じように早く一瞬でいくつものつきをさ
れたように感じる
けど、それを一つ残らず防ぐ俺も俺でおかしい気がする

だが頬にチツつとなにかがかすった
そしてそこには傷ができ血が少し出していた
相手の剣は全て俺の二つの剣ではじいてるはずなのに

「なッ!？」
俺がおどいてる間にもそれが体中でおき
いくつもの小さな傷が増えていく
なにかキラツとひかるものがいくつもみえた

「むおツ!?!」

足元の何かにつまずき倒れそうになるのを
倒れないようにふんばった

次の瞬間に

「でえいッ!?!」

相手のそんな声を聞くとともに

俺の腹に衝撃がきた

青い鎧の手が見えた。相手の拳だ

「ぐふっ!?!」

それだけで吹っ飛び後ろの気にぶつかり気を2本程度なぎ倒しながら
ら進み

やっくとまった

相当痛かった。これがあの土人形と同じSランクなのだからビック
リだ

あの小さな傷を作ったものは何だったのだろうか

するとトウルスの周りにあったキラキラと光る小さなものを思い出し

『フルード青い剣』が水属性の魔法が得意なのを思い出した

「わかったッ!?!この小さな傷は水滴のせいかッ!?!」

俺が飛び起きながらそんな事を言うと

トウルスはすこし笑い

「ほんの短時間でこれがわかるとは見事としか言えんな」

さっきの小さな傷は水滴が弾丸のように飛んできて俺につけたもの
だったのだ

むう、ほめられてるのはわかるんだけど

さっきの一撃で俺もやり返したくなっただよなあ（若者の性ださが）

まあ、数倍返しにさせてもらおう

「相当痛かったよ……。さっきのパンチ……。あなたには悪いが徹底的にやらせてもらうよ。プライドも体も再起不能にしてやんよ」

「ほほう、面白い」

またニヤツとわらうトウルス
ホントにやってやんよ

一瞬でな〜ッ！！（微妙に相当いらついています）

ダツという音を出しながらすごい勢いで走ってくるトウルス

「『ファイアーボール火の球』」

俺は手の上に大きな火の球を造りそれを投げる

「それごときで私かとまると思うかッ！！」

そんな事をいいながらそのままっこんでくる
でも

ちよつと違うんだな〜

おれは二本の剣を同時に投げる

火の球に向かつてだ。それは剣が刺さると同時に爆発する

二本の剣は俺の横を通って飛ばされていった。……。あぶねえ

（自分の剣のせいで負けたと言ったらシャレにならない）

俺の目的はプライドをまず壊す事だ。相手の技を潰す

あいつの戦い方のあの水滴をさっきの爆発で吹き飛ばした

「私の魔法攻撃を崩すのが目的だったか……。」

それに気づいたらしく

そっついながらもこっちに剣を構えせまってくる

俺が攻撃範囲に入ると同時に相当の威力であろう突きをしてくる
そして

俺はその剣をへし折ってやった

「なッ！？」

やった事は簡単で

まっすぐ迫ってくる剣にあわせるように

手をクロスするように交差させて両側から強い力を加えへし折った

これは相当難しいと思う。タイミングがずれると串刺しになってし

まうしね

ふむ、これでプライドをへし折ってやったかな

そしておれは手をクロスした状態から裏拳を放つ体制に入った

「・・・見事」

ふむ、どうやらプライドはおる事はできなかつたらしい

ちよつとショックだ

まあ、自分の技を破られたのだから相手もちよつとはショックだろ
う。

次の瞬間には俺の裏拳が顔目掛けてとび。トウルスは横に吹っ飛ん
でいった

「むう」。体は再起不能にできたんだけどな・・・。」

そういつて俺は動く事にした

木に刺さっていた俺の二本の剣を木から抜いて鞘に収める

そして、振り返ってみるといつのまにかエミリイはおきていた

「んあゝ、大丈夫？」

俺が変な声を出しながらもたはずねてみた

「・・・足をくじいたみたい」
そんな事をいいながら足を押さえていた
うあく、少し腫れてる
いたそおゝ
そういうことで

「え、わっ！なに!？」
おれはエミリイをかかえたから
いきなりの事にビックリしたようだ

「いや、ここさっきのでもしかしたら近くに敵が来るかもしれない
から
移動しないといけないし、ここは俺が運ばせてもらっよ」
そいとう　こくり　とエミリイはうなずいたので
俺は走る事にした

そして少し走るとラルドさんが見えた
そこにはレースをしていた人が気絶してたおれており
横ではライルが息を切らして立っている
遠くに3人ほど倒れていた

「徹夜くん、トウルスに勝てたのか。む？エミリイはどうしたんだ
？」
足をくじいたらしくてというと
ラルドさんは　ふむ　というと本体やら何やらの入った袋を取り出し
応急手当をしていた
そして

「じゃあ、またお願いするね、徹夜くん」

また俺がかかえさせられていた

はあ、なんかもういやだ

なんか、こういう何かを運ぶ仕事ばかり俺に押し付ける・・・

そして時間がたち何人かと戦ったものの

トウルスさんとかラルドさんが戦った人とか^{トミーさん}ほどのつわものがない
いらしく

簡単に倒す事はでき

結果、俺達が決勝に進む事になった

ていうか、なりゆきでたたかってきたんだけどさ

俺って戦ったりして頑張る必要なくね？

・・・そんな疑問は捨てておこう

19話 サバイバルファイト。俺の疑問は捨てておこう（後書き）

む

これは徹夜くんはチートっぽくなったのでしょうか

ちよつと疑問です

まあ、一応うまくかけたのでいいとおもいます

「俺にかけるのか？戦闘シーン」という疑問を持っていましたが
おれにしてはめずらしくうざくなかったと思います

…たぶん、ね

20話 休日あり、乱入者あり(前書き)

前回のあらすじ

畏に引っかけり

飛ばされ、戦い

一応勝利だ

20話 休日あり、乱入者あり

今日は休日だった

それはいろんなことが起こり

とても有意義だった

当然あの追っ手もいて逃げまくった

そしてトウルスさんとトミーさんとも仲良くなった

二人は大会が終わったから久しぶりのお酒だそう

俺はお茶を飲んだ

こんな感じの会話をしていた

「俺、ときどき思うんですよ」

「なにになに？」

二人とも聞き上手だった

「ラルドさんのにつこり笑顔が怖いって・・・」

「・・・がんばれ」

二人ともなんともいえない顔だった

そこでトミーさんが口を開き

「じゃあ、今度息抜きにでも俺らと一緒に依頼でもするか」

「いいですね！それ！」

俺はとても大歓迎だ

トウルスさんは「じゃあ、今度こちらでもしよつ」と誘ってくれた
俺的にこれは結構嬉しいお誘いです

そこでトウルスさんとトミーさんが固まった
恐怖にゆがんだ顔で

「その二人、さりげない勧誘はやめてくれないかな。こつち
のメンバーだよ」

徹夜くんは悪い人が相手じゃなかったらガードが緩いんだからさ。
・
・
・

ラルドさんの声だった

後ろを見なくてもわかるニッコリ笑顔のラルドさんがいるだろう

「と、その一人」。

うわわわ！

背中に感じるヒシヒシとしたなにか

これは完全に脅威以外にほかはないだろう

「さりげない勧誘にのせられたんじゃないんだヨ。・・・」

その言葉とともに俺の顔が両方からガツとつかまれた

そしてすごい力で引つ張られていく

「ひいいいっ！！助けて！二人とも！Sランクでしょオオオ！！」

その言葉を聞いて二人は

『まあ・・・うん・・・がんばれ・・・』という視線を向けてきた

ひどいよおお！！

ひぎゃああああああああああああああああああああ！！！！！！

うう・・・ひどい目にあつた

俺がなんとなく宿に戻ってきた。宿の食堂みたいところでわいわい
い話している人は多く

そこにエミリイ、ラウ、ライル、ラルドさんがいた

(ラルドさんは普通の顔で座っているけど、なんともいえない恐怖を感じる)

そしてエミリイがすごい勢いで笑っている

「どうしたの？」

とりあえずたずねてみた

そしたら新聞のある部分を指差していた

とりあえず読んでみよう

『
×新聞

今日も新しいニュースですよ、のコーナーです

今回のニュースは

大会に出てきたCランクの男です

異名というのは目立ったことをすると勝手につけられるものですが
どうやら勝手につけられてしまったみたいです。

え〜とですね〜。聞いた話だと

『黒の破壊者』(指差していたのはこれだ)というものです

(正直な話、とても恥ずかしい)

とてもおもしろい・・・はずかしいですね〜。まあ、異名というのは最初は恥ずかしいものです。誇って振り回す人もいますが(エミ
リイのことだろう)

まあ、ゴーレムを片っ端から破壊したりしてれば当然とも言ってい
いんじゃないでしょうか。ストレス発散にも使ったんじゃないです
かね?(否定は・・・できない)

まあ、今回は他にはとくにはありません

あとはいつも勇者様がある人物を追い回してるといふ噂がある程度
でしょう

では、バイなら〜』

よし！穴に頭から入ってこよう！

ラルドさんに羽交い絞めにされてできなかったがとても恥ずかしかった

ちなみにトウルスさんは『雨水』という異名らしい。あの人の本領発揮は

雨の日だというらしい。（または自分で雨を降らしてるとき）

たぶん俺が破ったあの技のほかにもっと強力なのがあるのは間違いないだろう

あとトミーさん

あの人は『斬風』と呼ばれているらしい

風のように速く、鋭く斬られるらしいね。見てみたいなあ

ああ、もうやだ・・・

うん？てかさ

他の人ってほとんどが二文字なのになんで俺だけ五文字…？

次の日 決勝

ということ次の日だ

当然俺は眠いが引きずられて会場まで来ていた

前みたいに『空間移動』^{テレポルト}せずによこの会場で行うらしい

相手のギルドは『折ることのできない剣』らしい

基本的に素手の俺にとって敵しいだろう。ん？そしたらトウルスさんのときもそうか

うん、問題なし

ちなみにエミリイは今回出場しない

原因は怪我だ。あしをくじいていたがどうやら骨折していたらしい魔法で治療をしたが数日間は激しい動きはしないほうがいいから

決勝は断念したということだ

まあ、とりあえず決勝だ
相手は五人。そのうち二人がSランクだそうだ
という事で片方は俺に任されたわけだ
相手の装備は剣一本にかるい服。俺と同じようなものだ
まあ、俺は剣二本だけど

『はっじめ〜ッ!』

という事で開始しました

ラルドさんはエクキャリバー・・・じゃなくてエクスカリバーを構え
ライルは相当の速さで移動してる

俺はゆったり歩いている

相手の五人も剣を構えこちらに走ってくる
そして

二チームの間で爆発が起きた

「・・・?」

俺はただボ〜っとしているだけだけどね

そしてその爆発してるところには二人の男が立っていた
肌が黒かった。魔族だ

そして遠いところでは金属のぶつかるような甲高い音が響いてきた
そちらをみると

カイルを狙う女の魔族（前にお偉いさんを殺したやつだ）がいて。

そいつは剣を握っていた

その剣を折れてしまっんじゃないかと思うほどの細さ剣で受け止めて
いる美月がいた

「『オールドソード古き剣』、世界の五本指に入る名剣の一つですな」

となりでラルドさんが美月の握る剣のことを言っていた

そして魔族はあきらめたらしく

後ろに跳んだ。一回跳んだだけで闘技場の真ん中までくるといっす
ごさだ

Sランクの上位あたりの実力だろう

「第一ターゲットは諦める。第二ターゲットに移るぞ。」
魔族の女の声が聞こえた。

そして二人の男は「ハッ」という声を出していた
そして女が口を開いた

「……『闇』よ」

その声とともに魔族の女の足元から闇が広がり

俺達のギルドのチームともう一つのギルドのチームを飲み込んでいく

「強者を狩る時間だ」

そんな女の声が聞こえた

20話 休日あり、乱入者あり（後書き）

うう……

ひどいよ！

現実の友達から

『アイ アム ア ダークネス（俺は闇 のところを言ってます）
って言われるよ

とっても恥ずかしいです！

うわ〜ん！黒歴史！黒歴史ですよおお！！

まあ、そんなことはおいといて

結構ある展開の乱入者です

ん〜

つぎの話は戦闘シーンがメインなんだけど
ちゃんとかけるか心配ですなあ〜……

まあ、頑張るときます

誤字、脱字があれば報告宜しく願います

21話 多数の謎(?) (前書き)

前回のあらすじ

大会の決勝戦を行おうとしたところ

いきなりの乱入者

それは魔族で

闇に包まれた

21話 多数の謎(?)

いきなりの乱入者だ

そして闇に包まれていた

・・・最初に俺の感想を申し上げよう

「・・・なんにも見えない」

目の前真っ暗だ・・・。夜の暗さとかなら意識すれば昼間程度に見えるんだが

闇を使えるからといって他の人が出した闇の中でも見えるわけではなさそうだ

「ふむ、もしやと思っていたが当てが外れたみたいだ。ライルしか戦えないようだね」

さつきラルドさんがとなりにいた

それと同じような場所から声が聞こえた

「あとは、私がこの闇を切り裂けば大丈夫だろう」

「できんの？」

「私が持つこの剣の名前を忘れたの？闇の濃度が思ったより高いから力をためるために

少しかかるかな」

ふむ、さすが聖剣ですな

あとは俺もいろいろと試すとしますかな

気配をつかむ？むう・・・剣を向けられたら避けられない・・・

ああ、どうしたらいいんだろう？無差別攻撃

だめだライルとかにあたる

ん〜、やっぱり闇を使うしかなさそうだし、外じゃあ闇が充満しているだけで中を見れるわけじゃなさそうだしよし、いろいろ試していきますかな

そのとき、魔族の男・・・二人いた内の一人がこちらのチームに向かって

結構なスピードで迫っていた、片手にはロングソード、もう片方にはナイフを持っていた

『折ることのできない剣』のチームのほうにはもう一人が言っているだろう

この男の役目は上官が出した闇の中で迅速にかつ確実に決勝まで進んできた者を殺す事だが、その役目を行う前に邪魔が入る

「・・・あなたの相手はこの私」

その理由はライル
闇の中で動けないと思っていた魔族と人間のハーフは
二つの目でこちらを見据えている

「おもしろい・・・」

男はただ笑っていた

一応他のチームのともやっときま〜す

「防御体制AからBCへ移る」

その声が響くと同時に剣を持った男達は動き、形を変えていく
男達の周りでは金属音が響く、攻撃されている

このチームは闇に十分に立ち向かえるものは今はいない

普通ならそれ専用の装備をしなければ闇の中ではフリなのが
いまは微弱ながらも魔法を使い相手の動きを察知し
連携を組んで守りきっている

「『聖剣』のラルドが動くまで待て。闇がなくなればすぐに血祭りにあげるぞ」

それがこのチームに最初に伝えられた言葉だ

「防御体制BCからAMにうつる」

戦いは続く

いくつもの金属音が響く

ライルと男が戦っている音だ

ちなみにおれは

「何だ・・・この感じは？」

何か良くわからない感覚があった

自分の闇には入ったときはないからわからないし

闇自体に入ったのはこれが初めてと喋っていいのだが

よくわからない感覚が妙に残る

なにかひっかかる

そんな感じだ

少し考え事をしたとき

ズキリと頭に痛みが走った

次瞬間には目の前に何か映像が流れている

映像が映ってるというわけではなくなにかの記憶そんなところだと

思う

それは二人の男女の姿だった。とても仲がよさそうな二人
どちらも黒髪、黒目というまるで日本人のような姿

そして男は肌はふつうの肌色で人間だという事がわかる

女の方は腰まで伸ばした黒い髪

そして、少し黒い肌、背景も鮮明に移ってる、それを見る限り前の
世界ではない

それにこの世界でも、前の世界でも一回もあって話したことのない
はずの顔の二人だ

ただ、矛盾があるようだがこの二人の顔にはすこし見覚えがあった

そして次に入ってきた情報は耳からだった

映像で女が口を開き

『ヤマモト リシさん』

女が名前らしきものを呼んでいる

すると、男はそれに答えるため口を開き

『山元李氏。リシでいいよ、リシ』

『じゃあ、そうします。リシ』

女はニッコリして答えていた

「ハッ!??」

次の瞬間にはさっきと同じ場所にいた

なんだったのだろうか。さっきのは・・・?

むう・・・

考えても良くわからない

とりあえず今の状況を打破するために考える事にしよう

「くうッ!!」

ライルは立っている

その体は無傷ではなくところどころに傷ができ
出血している

「その程度ですか？闇の中でも見える目を持っているのならもっと
楽しめるとおもったのですが」

男は武器を構えながらと

ニヤニヤと笑っている

「あなたのあとはあなたのほかのチームメンバーを殺す番ですね」

「ッ!!」

その言葉を聞くとともにライルが跳び

次の瞬間にはするどい金属音が響く

ライルの武器と男の武器がぶつかり合っている

だが次の瞬間にはライルの腹に男が蹴りを打ち込み

ライルが吹っ飛ばされる

「ぐうッ!!」

このときライルが考えている事は

仲間を守る事

なにがなんでも相手を倒し仲間を守る

でも力が足りない

どうやって守る・・・？

そのとき

では、力を貸そうか？
頭の中にそんな言葉が聞こえた

「誰だか知らないけど借りる。仲間を守る力を」
意識するよりも早くその言葉が出た
考える暇なんてなかった
すると

では貸そう。我が火の力。昔、貴方に迷惑をかけてしまった償い
のために

その言葉とともに
ライルの目が熱くなった

「・・・ッ」

いきなりの事で驚き目を押さえる
やっとおさまり手でおさえるのをやめると

両方の目とも赤色に変わっていた

21話 多数の謎(?) (後書き)

文字数は少ないのですが

結構時間がかかってしまいました

途中で書いていた文が消えてしまうという事がおき
とても

やる気がなくなってしまいました

一応かけたので

まあ、良かったという事にしましょう

誤字・脱字があればご報告宜しく願います

22話 決着（前書き）

前回のあらすじ

闇の中での戦い

そのなかでライルの眼が変わった

22話 決着

闇の中。その中で戦闘が起きている

俺は思いついた手を試すべく

目を閉じ集中している

正直真つ暗の中で集中するのは大変な事だ

俺の場合にはちょっとしたトラウマがあった

俺が小学一年生のころだった

肝試しということでお墓にきていたわけだが

なぜか俺だけおいて行かれてしまった事

そして捜してくれていたお坊さんを見て幽霊だと勘違いして騒いでしまった事がある

お坊さんはそうとう歳をとっていてヨボヨボだった

あの人もふざけていたのだろう。顔の下から照らすように懐中電灯を持ち

言った一言・・・

『わるいこはいね〜かあああ・・・』

なんか違う気がした。普通は『うらめしやあ〜・・・』とかならま
だわかるが・・・

まあ、とりあえずそのときの俺は小学一年生

相当怖い思いをした。そしてそのトラウマが今も残っている俺は恥
ずかしい存在だ

まあ、そんな感じでドキドキ この頃では出てこないかな、という
思いがある。いまなら欲望に任せて殴る事ができるきがするからだ
しているわけである

まあ、そのあとお坊さんをつい殴ってしまったわけだが

お坊さんは気絶してしまって俺が担いで運んだわけだ

そのときの俺はただケラケラと笑っているだけだった
お坊さんの気絶している姿はとても笑えたのだと思う

まあ、そんな現実逃避のことはおいといて
現実に戻るうじやないか

ライルの視点

「何ですか、その眼は」

男が少し驚いたような目で見ている

正直自分の眼を見る事のできない私から見れば　なんで?と
思ってしまうわけだが

なにかが変化してしまったらしく、最初みたいに相当熱くはない
ものの

少しだけ熱がこもってるように感じる

この力を貸し与えたときに自然に使い方もわかっただろう。それ
を思う存分使ってくれればいい

またそんな声が頭に響いた

正直な話。この声が誰なのかわからない

さっきの（作者より：前の話を見てくれ）？償い”と言っていた

何の償いかもわからないのに力を貸してくれると言うのは少々
ひっかかるものがある

だが、この状況で・・・仲間を守るためには使う

仲間がいなければ、今まで楽しい日々をすごす事などできなかった
のだから

それは昔も今も未来も同じ事だ
だから殺^ちる

次の瞬間にはどちらも動いていた

一瞬のうちに二人がいた中間地点で金属音が響き
次の瞬間にはいくつもの音が響いていた
いままでライルが後れを取りついていけなかった動き
それに今はついていけている
それどころが男を押ししているように見える
ラルドの体には炎のようなものがとこるところ光っている
それは体を傷つけているものではなく
サポートしているものだった

「今までと・・・動きが違うッ!!」
男もそれに反応し、力を込めライルの武器に思いっきりぶつけ
ライルと自分の攻撃に少しの間をあけ
その間に数歩下がる
にらみ合いの状態に戻る

「今までそれを隠していたのですか」

「・・・違う。今使えるようになった」

「・・・・・・・・・・戦闘中に成長ですか。なんとも面白いんでしょうか
かね

「こんなにも面白いのは久しぶりですッ!!」
その言葉とともに男は動き
今まで以上に早く、重い攻撃を繰り返してくる
ライルと男の強烈な威力の一撃がぶつかりあい
その勢いでどちらも後ろに飛ばされる
ライルは回転しながら落下し次の瞬間には武器を中腰でかまえるよ
うな体制で着地し
男もその瞬間には着地していた

「近接戦闘だけじゃ、私には勝てませんよ！」サンダーホルト「雷撃」

男がこちらに向けている右手の人差し指の先から

黄色の光がジグザクに、しかも的確にこちらむかってくる

次の瞬間にはライルの下に直撃し爆発のようなものがおき、爆煙で見えなくなる

直撃した。男はそう思ったが、なおも警戒しているようだった。

だが、すぐにニヤリと笑った後すぐに警戒を解いていた

「…そう、近接戦闘だけじゃ貴方を倒せない。だったら他にも使えばいい」

煙の中からその言葉が聞こえた

「ッ!!」

男が振り返る。

すると…もう煙ははれ、ライルの姿が見えていた。

男が刃物でつけた傷以外なく自分の魔法が無駄だったことがわかった次の言葉が返ってくる

「…だから魔法を使うことにした。あなたはもう手遅れ」

その瞬間に男の周りには赤い炎が噴出し

男を囲んでいる

その炎は一つ一つが5cmでいどのなにかにみえた

よく眼を凝らしてみるとその形が何かわかった

人型だった、羽が生えていて精霊のような人型の炎

「…『フェアリーフレーム 精霊の炎』」

ライルが小さく魔法の名をつぶやくと同時に

炎は男を完全に囲み

小さな精霊が男に向かって進み

爆発した

悲鳴も何もかもが爆音によって吹き飛ばされていった

「・・・私は今まで火の魔法使えなかったから・・・精霊というのはこんなにも力が強いのか」
ライルがそうつぶやき
違う方向を向き
走り出した

ある女がいた

少し黒い肌に黒い髪の女性

この任務のリーダーでありギルドのメンバーたちを引きずり込んだ闇を出した者

その見つめる先には光がある

その光の元は女の持つ黄金の剣

「エクスカリバー・・・」

『聖剣』という異名を持つ女

その異名の由来となった剣だ

あれは邪魔だ

せつかく闇に引きずり込み部下の力を高め私が動かなくてもいいようにしてやった

それなのにあれは私の闇を切り裂こうとしている

それに十分だろうと思ひ連れてきた二人の部下のうち一人は爆発して死に

もう一人は傷を相手に負わずことはできてもいまだ相手を殺す事もできていない

この時点での失敗させられる原因は二つ
あの女の聖剣とあの魔族と人間のハーフの女
この二つを排除すればあとはどうとにでもできるはずだ
この二つを排除する場合、優先順位は聖剣のほうが高い
だからロングソードを右手にナイフを左手に持ち
女に向けてすごい勢いで走っていった

やる事はさつきも説明したように一つ
ただ単純に殺すことだ

そして聖剣をもつ女が攻撃範囲に入ると同時に武器を振るう

だが、その武器は女に届く事はなかった
武器は相手の二本の武器で防がれていた
私の、目の前には

「危ないなあ、そういうのは」
黒髪に黒目。魔族のような色をしていながら肌は普通の色という男
『時の巫女』を殺そうとしたときに邪魔してきた男が
またも邪魔してきた

「せっかく女の子に生まれてきたんだから、こんな血が関係するよ
うな事なんてしなくて
いいんじゃないかなッ!!」
言葉が終ると同時に魔族の女の武器をはじくと
魔族の女は数?を一回で跳んで下がった

「女だから、男だからなんてものは関係ない。ただ殺すか、殺され
ないか
魔族と人間の間にはただそれだけしかない」

魔族の女はこういった

「なら、あの魔族と人間のハーフの女の子はどうなるのかな？」

「けがれた者から生まれた大罪人だ」

女は一言で切り伏せて

武器を構え始めている

「名前ぐらい聞かせてくれるかな？ 闇を出せたと云う事は相当上位のほうじゃないか？」

俺のそんな言葉に

魔族の女は少し考え

口を開いた

「まがいろくはじり魔界六柱がNo.1『漆黑』のリーシ・トルウマアだ」
魔界六柱つてのが気になった

だが俺が質問するよりも早く相手が動き

一瞬のうちに攻撃が数十と数で来た。前のナイフ一本でもすごかったのだ

ロングソードをもう一本の手に持っているのだから手数は少なくとも二倍にはなる

それを二本の剣ですべてはじく

かならず、剣技にはテンポがある。だからそこを見極め

2秒もないだろうがその間に魔法を放つ

「『インパクト
衝撃』！」

リーシはその言葉よりも早く横にとび

俺の魔法を避けた

俺はそれに反応して

「『火の球』」

火の球を造り投げつける

それをリーシは避けずに横一線に切り裂いた

・・・すげえ

やれない事はないだろうけどやられるところを見るとその一言にかぎった

そして向かってきた

俺は一本の剣を両手で持ちおもいつきり横にふった

リーシは剣で防ごうとしたが俺の自慢(?)の怪力にとめる事ができないのだろうと知り

後ろに衝撃を受け流すようにして俺から離れていった

そしてリーシは口を開き

「何故お前がこの闇の中で見れるのかと思っていたが、おまえ・・・眼を開いていないな」

リーシが言っている事は本当だ

前髪で目を隠すようにしていたが動き回っていてはそれも意味がないだろう

おれがやっているのは気配をよんでいるわけではない

気配を読んだだけで相手の剣の位置がわかるんなら苦労しない

「この肌を感じる不愉快なもの…闇。だが、私ではない、もしかやおまえ」

その言葉は最後まで言い切れなかった

違う言葉が言葉をさえぎった

「チャージ完了！一気にいくぞお〜！」

力をためるのに嫌気がさしていたのかラルドさんは微妙なテンションだった

その声とともに空を切り裂く音が聞こえ

莫大な量の光が闇を切り裂いていく

「・・・チツ！」

リーシが舌打ちすると大きく跳んでどこかにいった
おれは

「まてッ！！」

と追いかけてようとするものの

俺の目の前に光の斬撃が通過して行って

無理だった

とても怖かった

そして闇は無くなり

ギルド『折ることのできない剣』のチームも反撃を開始した

22話 決着（後書き）

一応これで大会のは終了させていただきました
あとは一回ラルドさんとかと別れて

違う国に一人か二人でいってみると言うのもありだと思います
まあ、とりあえずレーゲンという国にいるのは
あと一話程度だと思えますね

ユニークが一万を超え、P.Vが10万を超えました
わざわざ見てくださりありがとうございます
これからも（たぶん）続くと思えますので
宜しく願います

誤字・脱字があればご報告をしてください
願います

23話 一旦別れることになった(前書き)

前回のあらすじ

ライルは魔族の男を倒し

俺は魔族の女と戦った

ラルドさんが闇を切り裂き

魔族の女は逃走した

大会の乱入者事件は終わった

23話 一旦別れることになった

魔族の乱入者が大会にきてから二日後

ちなみにこれは俺がこの異世界に着てから20日目だったりもする結構いろいろあった気もするのだがまだ3週間も過ぎていない事実には俺はビックリだ

まあ、そんなことはどうでもいいとして

大会がどうなったかを説明しようじゃないか

大会では続きをやる時間も費用ももうなかったらしい

外の屋台とかにお金をほとんどつき込んだらしい

まあ、どっちも優勝にするか！という超テキトウな結果にしようとしたところで

ギルド『折ることのできない剣』のチームリーダーが

「あの闇の中ではなにもできずにただラルドの力を待っていただけだこの場合優勝するべきはそちらのチームだろう」

という言葉をもとにこちらが優勝する事に

ちなみに、この俺らじゃないほうのチームは闇がなくなると同時に魔族を一瞬で殺すという神業的のをやってくれたもんです

まあ、という事で優勝

賞金をもらったりしました、おれは4分の一をもらいました

その3分の2はラウにあげました。お城から盗んできたお金・・・使ってなくてね・・・

まあ、今回の大会ではいろいろと収穫もあった

一つ目は俺の力試し

二つ目は黒い狼さん、ラウがクオと名づけました

黒い指輪の精霊のクロと少しかぶってる気がする

三つ目は魔界六柱という存在です

どうやらそいつらは名前どおり6人いるらしく
魔界でも武に長けたトップたちの六人だそうで

時空、創造、光をのぞく残りの6つの属性に一人ずつらしい

あの女は闇が特化していたらしく、その六人の中でもトップだ

まあ、俺の魔法の攻撃あたらなかったしね

フエイントを入れれば大丈夫かな？・・・？

まあ、いろいろと考えさせられるものばかりなんだが

俺の悩みは今一つである

あの闇に飲み込まれたときの記憶はなんだったんだろうか

そんな考えがよぎる

ラルドさんとかに山本李氏やまもと りしという名前を聞いてみると

二代目勇者だという事もわかった、何百年も前の人物だぞ・・・

ラルドさんによると詳細はわからないが二代目は一代目とかとは違い

いろいろと規格外なところが多かったらしい。そしたら俺もそうじ

やないか・・・？

ちなみにいまの美月は四代目らしい

まあ、こんな事があったが、今俺は考えない事にしている

あと、もう一つあった

ライルのことだ。俺の予想していたとおりあれは火の精霊がとりつ
いたものだった

何故目に憑いたのか。それは

まず、ライルの目は相性が良かったらしい

あとは取り付いたときの状況だ。ライルは火事に巻き込まれたとき
からあの目になったといっていた。それは火の精霊がまちがって燃
やしてしまったものなのだろう

精霊というのはどんなところにもいるものだ。人間が使えるのは物
についたものだけ

憑かなければなんの力も持たないものだ

だから、一人火に囲まれ最悪の場合死んでしまいかもしれないときに精霊が憑いて火傷も負わないようにしたんだろう
あのときの精霊は物につこうとしたときの力の余波が建物を火事にしたのだろう

だから『償い』とっていたのだろうと、俺は思う

まあライルはいま目の赤色も操れるようで両方とも黒にしたりできるらしい

(力を使うときは赤になるが)

でもなぜか片目だけを赤にしていた。ちょっと疑問に思って聞いてみると

「…こっちのほう慣れてるから」
だそうだ

そのあと感想をきかれた。別にいつもどおりだから変わらないんだけど

一応「いつもどおり綺麗な目だよ」と答えておいた

なんか顔を赤くしてたけど俺は気にしない

絶対気にしない、気にしてたまるかァー!!!

とりあえず落ち着こう

まあ、とりあえずそんな感じだ

大会終了の次の日にはいろいろと苦労した

美月が毎度のようにすごい勢いで走ってきたもんだ

それを撒くべくある大きなテントのような建物にはいったわけだが

「占いをするかい…?」

へんなおばさんがいたもんでね

「俺は占いを信じない主義でね」
俺がテキトウに断つても
そのおばさんは目をカツつと見開き

「あんた悩み事あるだろう。…何か見たときの無い記憶とかあるんじゃないか？」

うお〜

すげえ〜・・・と驚きの顔していると
フェツフェツフェと俺の顔を見て笑うおばさん

「まあ、これ以上はわからんのだがね」
意味ないじゃん・・・ツ！！

「まあ、がんばんな。すぐわかる 때가くるぞ」

「それは占いで・・・？」

「勘」

だめじゃんツ！！

まあ、とりあえずタダというのはちょっとだめだとおもつので
銅貨を二枚ほど投げ渡しといた

俺って親切（自分で言うなって話だよな）

まあ、とりあえずは場所を移動するわけだ

そして次はカイラとあったもんだな

「いや〜、散歩してたら偶然会っちゃったね〜。」
嘘だろ

・・・

散歩ってツ！！お前重要人物だろ！！

しかも後ろでジョイツさんたち騎士数名が隠れてるしッ！
ちなみに、カイラはその事に気づいていない
ジョイツさんたちのほうから声が聞こえた

『うう・・・カイラ様がお人を好きになられるとは・・・ッ！』

『やめろ！ズイ、泣くな！俺も泣けて・・・うわああん！！』

『ガイト！お前も泣くな！カイラさまも大人へと近づいているんだ！
…俺に小さいころおんぶしてくれと頼んできたカイラさまはもう・・・

・・・うううううう・・・』

『やめろっってお前ら！一番古株なのはジョイツ隊長なんだぞ！俺ら
よりも

ジョイツ隊長のほうが・・・ッ！！お前らジョイツ隊長は泣いてい
ないんだぞ！

あの立ち姿をみてみるッ！！』

『・・・（泣）』 ジョイツさん

『『『たいちよオオオオオ！！』』』

・・・こんな感じの声だ

なんか知らないけど大変だね・・・
がんばれ！誰のせいでもないのか知らんけどッ！！

「んぐ、まあそれはおいといて本題だよ。本題」

カイラがそんな事をいうと雰囲気ガラリとかわった・・・気がした

「竜の国『ドラゲイル』に行つて欲しいな」
・・・唐突だな

「なぜ？」
とりあえず聞いておこう

「この1〜2週間かの中に絶対何かが起きる。それも悪い事」

「それは予知か？」

「うん。」

こくりとカイラがうなづく

「俺じゃなきゃだめなのか？美月だつているだろう」
俺が当然誰でもこの状態なら思うことを質問してみた

「ダメダメ。美月さんは大精霊と呼ばれる精霊の上位の存在たちの何人かに
認めてもらわないとダメだから、あつちもあつちでやる事があるんだよ〜」

カイラが指をバツテンにしながらこんなことをいつてきた
ええ〜、俺がやらないとだめですかあ〜

「どんなことがおきるかわかんないけど
それは絶対に美月さんの障害になるのは確かだね。

それに、予知では詳しくなかったからどんな悩みかわかんないけど
徹夜の悩みのヒントも手に入るよ」

悩み・・・

ああ〜、とりあえずいつときますかな
俺に覚えのない記憶なんて困つた悩みだ

「じゃあ、よろしくね。あ、これ大切にするから」
右手ではこちらに手を振り

左手ではネックレスを少し持ち上げていた
そして走って行ってしまった

「じゃな」

テキトウに手を振って俺は後ろに振り返ってからまた歩き出し始めてみたり

そして背後から

『ジョイツたちには見つからないように帰らないと』

『『カイラさまアアアア！』』

『んみやアツ！！？何故ここに！？』

そんな声が聞こえてきた

多分もうジョイツさんたちに抱えられて神殿に帰るために走っている事は

間違いなしだろう

そしてラルドさんたちのいる宿に戻って見た

ラルドさんたちは荷物を整えていた

「あれ？どこか行くんだっけ？」

「忘れたのかい？サラスムに戻ってギルドマスターに報告だ」

別にいいじゃないかそんなこと

新聞でもくわしく報告してあったぞお

まあ、そんな事はいわずに俺は俺の報告をしよ〜

「ああ、俺違うところに用事できたから、一旦別れるわ〜」

「『ええッ?!?!』」

三人がビツクリ仰天していた

そしてラウは声に出していないけど目を丸くしていた

「それにあの新聞の事もあるしサラスムには帰れないでしょ〜」
まあ、たしかに。と納得している三人

「まあ、報告重要でしょ〜？」

俺一人で大丈夫だからみんなはサラスムに行ってくればいいよ。
「金もまだまだあるしな〜」

「いや、でも〜」

ラルドさんがちよつと考えている

ここがチャンス！押し切れ！

「1〜2週間でサラスムに行くからさ〜、まあ、戻れそうになかったら連絡するし

別にチームから抜けるわけじゃないから大丈夫

それにサラスムに行ってもまだあの新聞のがあって入れなかったらしょうがないからさ〜

中の様子を教えて欲しいな〜」

その言葉に

う〜ん。と考えているラルドさん

そして次には顔を上げて口を開いた

「まあ、それならいいでしょ〜」

そしてなぜかニツコリではなくニヤリと笑うラルドさん

「まあ、私達に秘密を教えてる時点で、もう簡単には離れられないでしょうけど」

・・・うわぁ

後悔した

俺の考えにいまさら後悔した

勇気なんか出すんじゃないかった!!!

「ま、死なないように頑張れ」

ラルドさんが

そういうと拳を前に軽く突き出してきたので軽く俺もそこに拳を当てる

トン、という軽い音が聞こえた

「じゃあ、また今度」エミリィ

「・・・またね」ライル

「ああ、また今度」

そうしたら

誰かが俺のコートの袖をちょいちょい引っ張ってきたむ？

そちらをみるとラウがいた

んゝ。。。。

「一緒に行く？」

「うん！」

ニツコリして即答だった

なんかさ、ラルドさんとは違う笑みだからさ

癒されるよ

「まあ、ラウはギルドに入ってるわけでもないからな」
ラルドさんがそういつていた

ふむ、俺とラウとその他精霊で竜の国ですか

そういえば竜の国は獣人と竜によってできている国だったな
ということはラウみたいな獣人が結構いるんだろうな

まあ、そういうわけで

少しの間ラルドさんたちを別れて行動するのが決まったわけだった

ホントいろいろあって疲れるよ

めんどくせえ……

23話 一旦別れることになった（後書き）

休みなのでつい

話と話の間が開くことなく

更新してしまいます

ちょっとした病気かもしれないね

まあ、そんなものは

ほっときましょう

小説のほうでは

いろいろと決まりの展開を入れて行こうと思います

とりあえず頑張ります

誤字・脱字があればご報告宜しくお願いします

24話 水風船の成れの果て(前書き)

前回のあらすじ

ラルドさんとも別れることとなり

竜の国『ドラゲイル』に行く事となった

なにかあるらしいね

本当にめんどくさそうつで

なによりだ

24話 水風船の成れの果て

あれから二日たったりしている
俺達は道の端を歩いている

最初の一日は馬車に乗り途中の町で宿をとったのだが
二日めのきょうは馬車がなかったので歩きだ

まあ、当然ラウには長い間歩かせる何てことはしない
俺とクオ（黒い狼のことだ）で交代でおんぶしている

まあ、狼は背に乗せているというべきだろうが
まあ、とりあえずこんな感じだ

俺は無駄に体力が有り余っているからな
大丈夫です、問題ないです

「大丈夫？」

ラウが心配して聞いてくれた

うわああ・・・

ちゃんと心配してくれるなんて・・・ッ！

なんていい子なんだ！！（泣）

「大丈夫だよ。無駄な体力が唯一の自慢だから」

俺がニッコリ笑ってそうこたえると

ラウも笑ってくれた

癒やされるわあ・・・

うっん、なんだろう。

幼いからこそこの純粹さには
どんなものも勝てない気がする

そんな感じを思わせてくれるこの子はとてもすごいと思う

今までラルドさんのニッコリ笑顔ばかり連続で見っていたのだから
しょうがないだろうが

なんかとても嬉しい

まあ、そんなことを思うのは
ここらでやめておこうと思う

なんかさ

目の前に一杯いるわけだよ

なんか豚の普通なのよりでかくてぼこぼこにふくらんだような体に
鋭い牙を持っている豚

トカゲのようだけどでかくて人間ぐらいあるやつ

そんなのがあわせて15匹以上

そして最後に一匹だけいるのがオーガというやつ

大型の人間のようなものだ。手にはでかい斧みたいなのを持っている
が

オーガが持つとあまりでかくみえない

こいつは特別らしく知性を持っているらしいのだが

どうやらそういつがこの魔物たちを誘導してきたらしく

魔物の群れから少しはなれてニヤニヤしている

そしてその目線の先には横に倒れた馬車と

その周りにいるのは

『うおおおおおおお！！』

『このツ！！このツ！！クズどもがツ！！』

『ココココココココココココココココロス（殺す）—————
—————！！』

と叫びながら

剣で切り刻んだり魔法を飛ばしたりしている人たちが5名ほどいる
とても大変そうだ

「むあゝ、めんどくせえゝ・・・」

「一体俺はどうすればいいんだろうか
面倒な事に巻き込まれるのはごめんだ
だけど、人として助けられないのはまずかろう
どうすんのよ!!どうすんのよ俺!？」

「…なんにしてもめんどくさいのはかわらないのであるが
まああそこで戦ってる五名もなかなか強いといっている
あの量だからしょうがないものの一人も死なずに戦っているのだから
それに結構戦ってるみたいだ
オーガが見るの飽きて砂いじりしてる
…オーガ、ガキみたいだね
まあ、そんなことはおいておこう
俺の行動が大切だ
俺が魔物を倒したとして俺の今までのストレスが発散するかどうかが
大切だ」

「どうしよお〜
まじでどうしよお〜
よし!!決めた!!」

「ラウ、ここで待ってて。危ないから、俺がいいよっていうまで来
ないでね」
「そういうとこちらをじ〜っとみたあと
うん、いいながらこくりとうなずいてくれた
ああ…
癒されるウー…!!!
だめだ、トリップすんな俺
軽く変態みたいだぞ」

「まあ、そういうことで」

「ストレス発散だアアアアアアアアアア！」
そんなことを大声で叫びながら思いっきり走る
結構な速度だから相手は気づく前に近づけた
俺の狙いはオーガでえゝす

「ツ！？なんどあ、おべえええ！！」

オーガの声だ

たぶん　なんだ、おめえ！！と聞いたかつたんだろうが
知能の低さからかちゃんとしやべれていない
オーガは何も考えずにこちらに拳を放ってきた
結構な太さだが大きさだけだったあのSランクの土人形よりは小さい
その拳を簡単にうけとめる

「な」

オーガが何か言おうとしていたが気にしない
その手を握ったまま思いっきり振り回す
そして勢いがついたところで
魔物の群れに投げ飛ばす、うおゝ！
ボウリングみたいになったぞ！
まあ、オーガが乗ったものはまるで水風船を踏んだときみたいに
はじけたけど、ううゝ、きめえゝ・・・

そしてオーガが倒れるところで近づいて
顔の上に足を乗せた

「ぐおらア！！おべえ！！なんどあゝ！！」
気にする必要はないな

「さいなら」

一言そういつと俺はおもいつきり足に力をこめ
踏み潰した

オーガの顔は水風船の成れの果ての仲間入りです
ああ、おもわずやってしまったけど・・・

「靴が汚くなった・・・」

アハハハハ！こんなときまで靴の心配！！

俺って外道だああ

あはははは！！

でも、これがおれだからしょうがないだろう
と自分を無理やり納得させようじゃないか

「キヤツハアア　　！！」

なにもかも忘れてとりあえず魔物の群れに突撃

二本の剣を振り回しながら高速で通過していく俺に
どんな魔物も反応できずに切り刻まれていく

5分後

「いやあ、助かりましたよ」

そんなことを五人のうち一人が言ってきた
につこりとわらって話しかけてきてくれる

体中を血にぬれている俺を見てすこし苦笑いしているが
俺は気にしない

気にしても意味がない事は絶対に気にしないのだッ！！

「人として当然の事やっただけですから」

・・・まあ、やったことはいいとして

どうしようラウ待たせてんだけど

この姿をあまり見せたくないんだけど

だって血に濡れて軽く悪魔みたいだよッ！！

軽く闇の中から取り出したタオルで血を拭きながら見てみる
戦っていた五人は疲れているようで
座っている

その五人はみんなこつちをみている
ん〜、なんか違和感があるんだよなあ
なんというか

わからないんだけど

目がちよつと裏な感じの目で見てるといっつか

ん？この座り方の配置は・・・

あ、俺がさつき思ったことは簡単ですよ

俺が馬車に近づかないように配置されてるように見えるんですよ
いやいや、俺の勘違いかもしれないし

ん〜、怪しいなあ〜…

一回気になったものはどんな事があっても見ようとすると
これが若者の性さがでございますよね

みなさん・・・おれ、誰に話しかけているんだ？

まあ、俺の変態まがりなことはほつとくとして
やっぱり気になるんだよね
行動に移る事にしました〜

「ねえ、その馬車には何か入ってるの？見せてね〜」

「え？ちよ、待っ」

相手が何か言う前に頭上を思い切り跳んで

馬車の上に着地

ドアを開けてみると

眠っている少女がいた

普通の少女ではなく

金髪という綺麗な色

ただ俺が気になったのは手首と額

手首にはなにやら怪しい陣のかいてあるゴツイ手錠

そして額にはこれまたあやしく黄緑に光る魔法陣がかいてあった

俺がもらった知識で捜してみると力を抑えるものだということがわかる

「これはどういうことだ・・・？」

おれが振り返って五人のほうを見てみると

こちらを向き

武器をもち立っている五人がいた

その目は裏の・・・人殺しに慣れた目をしていた

ハツハツハ・・・

これは

これは本当になんかねええ…

いやあゝ、やっぱりなんかね

疲れるんだよね

でもどうやら人として当然な事をやんなきゃいけないかもしれない

ああゝ

なんだろう

もうさゝ

これは本当に

「それを見たんだ、死んでもらうぞ」 男が冷たい声で言ってきた

これは本当に

「めんどくせえよ・・・」

24話 水風船の成れの果て（後書き）

むあああ

最初に考えた文をそのまま書くと

1000文字以下という

つまらない話になってしまいそうでした

いろいろと徹夜くんの邪念を入れて文字数を増やし

戦闘シーンはオーガのところで稼がせていただきました

もうちょっとなにかある予定にすればよかったです

頭の悪い俺はこれぐらいしか思いつかなかったのでしょうがないで
しょう

誤字・脱字があればご報告宜しく願います

25話 今日はいろんな五人組に武器を向けられるのが二回あった(前書き)

前回のあらすじ

道を歩いていると

魔物に襲われている人たちがッ！！

めんどくさがりながらも魔物の群れを倒した

そして馬車には少女がいた

それを見た俺に向かって

俺が助けた五人の男達はこちらに武器を向けてきた

25話 今日はいろんな五人組に武器を向けられるのが二回あった

眠っている少女

武器を向けてくるやつら

「めんどくせえ・・・」

めんどくさがる俺

いろいろと変な状況だ

そして

「コロコロコロコロコロス（殺す）ウウウウウウー！」

斧のようなものを振りかぶって飛んでくる奴が一人

さっきから思ってたんだけどこいつ狂ってね…？

とりあえずそいつの斧を持った腕を掴み思いつきり

間接を逆に曲げてみることにした

「ちょ・・・ッ！！まッ！！その関節はそっちにまがらな・・・ッ
ッッ！！！」

そのネタはお前のようなやつがやってはいけないことだ

思い、おもいつきり折ってやった

そのネタをやっているのは

Fクラスのバカで男なのに女の姿をしている事が悩みで双子さんの
弟だッ！！

まあ、そんなことはおいといて

それをみたほかの四人も動き出した

火系の魔法の準備を始めるものもいれば、武器を片手に突っ込んで
くるものもいる

俺的に手っ取り早いのは

「爆発してシネエ!!」

火系の魔法を準備していた奴のその声とともに魔法が放たれた

突っ込んでる奴を使うことだ

突っ込んでくるそいつの武器を軽く避け顔をガツ!!と掴むと
大振りに振り回しこちらにとんでくる魔法へ向かって投げる

「ちょッ!!やだ、え、こんな終わ

ぎゃあああああ……

」

俺が投げた奴のそんな声が聞こえたが気にしない
そしてトツと軽い音がなる程度で俺は動き

次の瞬間には魔法を放ってきた奴の横に移動していた
そして拳を振りかぶる

「ああ……俺、終わりか……ギョフツ!!」

俺が殴った相手はなんだか遠い目をしていた
そんなことするより

最後まで抵抗すればいいものを
え〜と

これで倒したの三人ですか
ということは残り二人ですね

俺がちょっと嫌な笑みを浮かべながらそっちを見ると

「ひ、ひい!!た、たたた、たすけてえ〜!!」

俺に背を向けて逃げ始めた
ちよつと、待つて欲しいな〜、いくぜっ!

「ひいひいッ!?!」

次の瞬間には男の目の前に俺は立っていた
なんかこういうの見てると楽しくなってくるんだよね
俺

別に人を殺すのはすきじゃないよ。現にさっきの三人も殺してない
しね

まあ、なんだかもう楽しくなってきたねえ……

「アハッ」

のどの奥から笑いがこみ上げてきた

次の瞬間には悲鳴が聞こえ

悲鳴が途切れると地面にめり込んだ男という

とても奇怪な芸術作品ができていた

「動くなッ！！この子がどうなつてもいいのかッ!？」

そんな声が聞こえた

そちらを見ると男が少女を人質にしている

眠ってる少女ではなく俺と一緒にいた少女のラウだった

ラウは少し震えている、

首下には刃物があり相当怖いだろう

男も必死でこちらから目を離さない。だから気づかなかったのだろう

「ラウ、耳をふさいでこっちだけを見る、拘束が解けたらまっすぐ

俺のほうに走ってくるんだぞ。絶対だ、振り返っちゃダメだ」

俺がそういうと

少し疑問に思いながらもこくこくと頷いてくれた

そして俺が言ったとおりしっかりと耳を防いでいる

いい子だなあ……

まあ、よし、これでおk

男も疑問に思っているだろう、この発言

だが、俺は教える気もないし教えるわけがない

「よし、やっちゃっていいぞ。クオ」

男の背後の影・・・黒い狼がその言葉とともにうごいた

そしてクオは大きな口を開き、牙のズラリと並んだ口で

殺さない程度に、そして絶対にラウの拘束が外れる程度に男の頭に
噛み付いた

「ぎゃあ！！なんだあッ!？」

その言葉とともに男の手は緩み

そのすきにラウがまっすぐこちらに駆けてきて

俺にヒシツと抱きつく

相当怖かったのだろう。ラウの頭をなでながら耳をふさぎ続ける

これは絶対に男のほうを向かせないための対処でもある

男のほうからは・・・

「ぎゃああああ・・・」

…という悲鳴が聞こえすぐに途絶えた

そして次に聞こえてきたのは

ガリツ　ゴリツ　グチョ　グチャという咀嚼音そしゃく

とても生々しくて怖い音だった。すごく嫌になる音だった

ちなみに俺はそれを見てるのでちよつとりバースしろうになったが

我慢我慢

クオは軽いランチを済まして

こっちに来た。俺はラウの耳をふさぐのをやめる

けど、そっちは絶対に見せません。黒い狼の口の周りには血がべっ
とりついでるので

絶対見せるわけには行きません。とても怖いです

とりあえずタオルで血をふいたあとに軽く頭をなでて影の中に入るように指示

すると、すんなりと影の中に入っていつてくれた

「ラウ、大丈夫？」

腰を低くしてラウの目線にあわせてしゃべりかける

「うん」

まだ少し震えているがこの様子だと大丈夫だろう

ラウを軽く撫でてから馬車のほうに向かう

中には金髪の少女

あまり見てなかったから説明できなかったがラウより背は低くかった
そして完全に拘束用の魔法がかけられている

少女を馬車から掴んで出してみる

むう、なんであいつらは力を抑える魔法なんて使っているんだ？

完全に普通の少女だと思うんだが・・・

まあ、とりあえず魔法をといってみる事にした

闇つてさ、すごいんだね

試したときもないし試す機会もなかったからわからなかったけど
こういうのに干渉する力を持っていたよ

だから

とりあえず闇で魔法を食つてみた

そしたら綺麗さっぱり額のマークもなくなり自然に手錠も砕けた

でも・・・

起きる気配がない・・・

なんか、めんどくせえ

・・・；

むう、とりあえず連れまわす事にした

起きるおきないの前にここで立ち止まってるのもなんだ
横に倒れてる馬車を戻し、だいたい走れる程度に直す
次に、いままで襲ってきた奴ら五人を拘束して馬車に乗せ
業者が馬を操るために乗る床にラウと眠ってる少女と俺がのる
とりあえず男達と一緒に部屋のの中に入れるのはまずい気がした

あ、馬車なのに馬がいねえじゃん
とおもったがクオが仲間を呼んでひいてくれた
なんか唐突な展開だけでも

もともとこの種の魔物にはこういう仲間を呼ぶ能力があるらしい

まあ、そんなわけで次の村には早く着いたわけだ
今はお昼の時間だ

馬車はテキトウに自衛団という警察まがいのところに行き
さつき倒した男達を渡した

自衛団の人が言うには

ブラック・クロス

この男達は『黒の十字架』という闇ギルド

しかも闇ギルドの中では大勢力の中に入るギルドの下っ端らしい
結構な大物が背後にいるねえ、こいつらは小物だったけど

まあ、あとは全て（拷問とかの情報収集などあわせていろいろ）任
せた

食事をしたりした

・・・この少女は眠ってるけどどうすればいいんだろうか

そのあと宿を取った

俺の一人部屋と、少女とラウの部屋あわせて二部屋を取った
なんか闇ギルドだなんだかんだを考えて

この町の中では安全と清潔度がたかい結構高い宿を取った
まあ、王都とかそういうのを考えると低いだろうが

ほんとに少女をどうすればいいんだろうかと思えば一っとしていると
ラウが

「なんだか、懐かしいにおいがする」
少女の近くといい始めた

「どんなにおい・・・？」

「私が生まれた。『ドラゲイル』の王都におい」
ほほお！！

・・・これは・・・

「さすがラウ！でかしたッ！！」

問題解決！

とりあえずラウを撫でている
ほめられたラウも嬉しそうだ

よし！この少女をどうするか決定！
とりあえずかついで俺の目的どおりの道に行けばOK！
ということ自分の部屋に戻り寝ることしてみたりした

次の朝 8：30 異世界にきて23日目だった
りする

ラウにおこされておれは寝ぼけながらも
食事を取っていた

寝ぼけていたせいで覚えていないが

お皿も食べそうになり食堂のおばさんとラウに必死に止められた
いつもラウは俺的にまぶくというかなんというか

おっとり？というかなんというか
あ、あれだ、まったりだ。まったりしてる感じがあるので
そのときのラウの迅速な動きを見ていたら俺は眼を丸くしていただ
ろう

とりあえず眠ってる少女を背中におんぶしてまた歩き始める
眠ってる少女には目立ってしまったため俺が普段着ているコートかぶ
せている

この村からだ
ドラゲイルの国境あたりからはあまりかからないわけで
一時間もせずについた
そしてついて

「通行許可証は？」
獣人であるラウが聞いてきた
通行許可証などは一般人は必要だが
便利な事に俺みたいにギルドに所属していれば
ギルドカードを見せてればとおしてくれる
ということで見せて

「この子は俺の連れなので」
とラウを紹介すればラウもおしてくれたり

「その背中に乗っている者は？」
ときかれた
えーっと

迷子と答えるべきか？王都に連れて行けば問題は解決だろうし
ということ
迷子なので王都まで連れて行き親を捜します。といおうとして
コートのフードをとり

顔を見せると

「ルミ様!!!?」

衛兵がそんなことを大声で叫んだ

え?ルミ???

と聞こうとするがそのまえに衛兵がボタンのようなものをおすと
5人ぐらいの兵が出てきて俺をかこんできた

え?えええええ?

何この状況

ちよつとまってよ・・・

・・・時間は待ってくれませんよね、はい
もうやだ

めんどくせえよもう、ホントに

25話 今日はいろんな五人組に武器を向けられるのが二回あった(後書き)

今回のタイトルは

前回の話から続いている男五人と

衛兵五人に武器を向けられた事です

なんとなくおもいついたタイトルなのでこのへんが妥当でしょう

ふう〜、いろんな小説を読んだあとにかいてるので

どうも真似したくなってしまいます

まあ、俺の書く力では真似してもつまらないのが普通でしょうが

まあ、とりあえずがんばってます

いろいろと頑張ってます

頑張ってるとはいえませんです、はい

ちなみに現実の友達からの(笑って済ませられる程度の)いじめは

俺の新しく買った携帯のメールまで侵食気味です

ほんと、俺には心休まるときがありません

この小説が完結する前から黒歴史になってしまったのには

ちよつと困り気味です

誤字・脱字あればご報告宜しく願います

26話 とりあえず、お目覚め(前書き)

前回のあらすじ

少女を助けて

ドラゲイルに入ろうとすると

なぜか兵士に武器を向けられた

ハア・・・疲れた

26話 とりあえず、お目覚め

俺は衛兵に囲まれていた

完全に彼らの勘違いだろう。

だって・・・俺はこの子を助けただけなのだから

だから口で説得しようと思う

さっきの五人みたいに血が出るような事は避けようと思うからだ

「あの、これはですね。昨日」

「いいからその方をおろせええ!!」

「いや、だからあのこ」

「黙ってその方をおろせエエ!!」

「いや、ちょ」

「聞こえんのか、貴様アア!!」

「・・・(イライラ)」

もういやだ・・・

同じ事繰り返すたびに邪魔されるのって嫌だね

何に警戒してるのかわかんないけどとりあえずこちらに攻撃してこないから

やり返す必要ないだろう

ちなみにラウはあたふたしながら俺の横にいる

ああ、ちょっと脅かしてみようと思ひ

自分の魔力を2割程度放出してみる事にしてみました
そのときは相手の言うとおりにこの背の上にいる子をおろせばいい
だけなのかもしれないのだが、俺はそのときその選択を思いつけな
かった

その結果が俺の周りでは

俺を中心とした周りに突風のようなものが吹き上げ

「ぎゃあッ!?!」「おうあッ!?!」

などという声をあげながら兵士が転んでいる

そのときちよつとした変化があった

べつに兵士になにかがあったというわけではない

ただ、俺の魔力が予定よりもすごい勢いで減っていった

あまりにも一瞬で減るもんだから

「はふう・・・」

脱力してズルズル・・・という音を立てながら

地面に寝ている感じになる俺

「・・・?」

周りの人たちが疑問顔でこっちを見ている

すると俺の背中に激痛が走った

刃物などで刺したというわけではなく

なにかに思いっきり踏まれている感じの痛みだ

「・・・ふう、ごちそうさま。そしておはよう」

俺の背中の上からそんな声が聞こえた

ちよつと変な体勢になりつつも上のほうを見上げると

今まで寝たつきり動かなかった少女が俺の背中に立っている

「ルミ様！」

兵士達はひざ間づくなりそんな名前を大声で叫んでる
それに対してルミと呼ばれた少女は

「あゝ、よいよい。ただ馬車と大量の食べ物を用意してくれ
この者は私が空腹で倒れている間に助けてくれた者だ。
私を誘拐したものではないから気にしなくてよい」

そういうと兵士達はテキパキと動き始める
すると少女はしゃがみこんで俺をツンツンと指でつついている

「いやゝ、助かったよ。エネルギーがなくて動けなかったのだ
人というのは微々たる物だが常に魔力を放出してるものでな、それ
を吸収して

動けるようになるまで待つていたのだが、一気に開放してくれてと
ても助かったよ」

そんな事をいつていた

あああゝ、それより気になる事が二つあるんです
言いたい事と質問したい事があるから

最初にまず一つ。質問するほうを聞いてみよう

「・・・どなたですか？」

「ん、ああ、堅苦しい言い方はクライなので簡単に言つが
白竜のお姫様といったところだよ」

ああ、そうなんですか

・・・なんか爆弾発言なきもするけど

それよりももう一つの言いたいことを言わせてくれ

「背中が痛いんだよ・・・、とりあえず早くどけ」

どんな人（竜だけど）にも態度の変わらない俺である

まあ、そういうわけだ

今は馬車の中で移動している

馬車は特別な人用にといいことでも大きい

馬車の中にいる（またはある）のは俺、ラウ、そしてお姫様^{ルミ}

そしてレベルの上に並べられた大量の料理だ

それはルミが空腹だからという事で用意されていた

「いやあ……。木の上でお昼寝をしていたらいきなり誘拐されてビックリしたよ」

まず最初の言葉がそうだった

お姫様がお昼寝って……

そのあと魔法でエネルギーをとられちゃって空腹状態でつかまっていたらしい

あの拘束具とかにあった魔法陣などはエネルギーをすいとるものだったらしい

そしていろいろ聞いたが完全に誘拐される前にやってた事はアホだった

めんどくさいから省こう

「お姫様といっても、うちの国は白竜の長が一番偉いとかそういうわけじゃなくてね

一つの国に竜だ七つの種族がいるんだな。その光をつかさどる白竜のお姫様ってだけで

まだまだこういうのはいっぱいいるよ。火、水、風、土、雷、光、闇という種族でね

一番えらいのは竜王女さまなんだよ、彼女は時空と創造をつかさどる竜でね

もう何百、何千というときを生きているのさ」
ふむ、そうなんだ

時空と創造を司る竜で相当すごいんだろっなあ

「いまの竜はほとんどが竜人という混血なのです。だけど竜王女様は混血じゃないね」

昔から生きてるんだからね」

詳しく闇というのに聞いてみた

するとその属性を完全に使えるわけではなく

他の奴よりは使えるだけらしい

ちなみにルミは話している間も料理にがつついている
言葉で表すなら

がぶがぶガブガブガブムシャムシャムシャムシャゴフツゴクゴク
カムカムシャムシャカムガブウウウウ!!!

って感じになっている

馬車は時どき振動しながらも進んでいく

そしてまだ説明してもらっていく

その説明に入っていたのは

この国にいるのは人間と友好的にいこうという竜ばかり
人間なんて嫌い！という竜は自分で出て行ったりもする

その竜は竜と人間との契約から外れるので人間に殺されても文句は
言えない

契約違反を起こさない限り人間は殺してはいけない
というものがある

そういう竜は人間のギルドでもよく依頼され討伐されるときもある
まあ、相手は竜だからそううまくはいかないが

国の説明に戻ろう

国の王都は三段層となっていて一段層では獣人などの住む地域

二段層では竜・・・竜人（と言い換えよう）の住む地域

ここ当りのある地域では白竜などの領域があり

そこでは白竜の長などがそこにいたりする

そして三段層は竜王女が住む城。

獣人と竜人が出入りし、そこでいろんな（獣または竜）人が働く場所

いまはその三段層に行こうとしているということだ

なんかルミが誘拐されて大変だったらしい

はあ・・・なんか疲れたよお・・・

『つきましたよ。ルミ様。』

馬車の業者からのその声が聞こえた

「うむ」

ルミがそついうと最後に残っていたのパンを一つ手に取り馬車から降りた

・・・もう食べ終えそうになっているのに気づかなかった

「早く来るのだ。（ムシヤムシヤ）王女さまに謁見できるのだぞ〜。

彼女も堅苦しいのは嫌いだからため口になるかも知れんぞ〜」

そんなこと言っているルミに続いて歩いていく

そして五分ほど歩き

「ここが『竜王の間』だよ」

そしてら？ほどある扉の前に着いた

その扉などは宝石などいろいろなもの装飾してあり

とても綺麗な扉だ
ルミがコンコンとノックする

『どなた？』

「ルミです」

うーん、こういうのって堅苦しい挨拶とかしてるイメージがあるんだけどな

なんか堅苦しくない感じですかあ

・・・なぜ？

俺が行くところ全てが堅苦しくないというのはとても俺にとってやり易くていいんだが

なぜなんだろうか・・・？

とても疑問だ

まあ、考えても仕方がないだろうが・・・

まあ、とりあえずそんなことはほっておきますかあ

『どうぞ〜』

・・・え、えええ？

軽すぎませんか？

扉がギイイイー・・・という音を立てながら開き

その中に入っていく

すると

また豪華の飾りがいっぱい

中には何人かの大人たちが両脇にいて

その真ん中にはまた豪華の椅子がある

王座というものだろう

その椅子にはある人物が座っていた

人間の姿だが、それは魔法を使って姿が変わっているだけだろう
あの座に座っているのはあくまで純粹な竜なのだから
ただ、その人間の姿がちょっとおかしかった
いや、人間の形はおかしくないんだけどもね
何歳も生きてるはずだよね？

だって

「いらつしゃい、人間と犬の獣人のお嬢さん、ルミを助けてくれて
ありがとう」

ニッコリと笑顔の彼女の容姿は
ルミよりも幼いような少女の姿だったからだ

・・・なぜですか！？

26話 とりあえず、お目覚め（後書き）

ふう、地震でずっと停電が続いていたので

やっと見たときにお気に入り数が200は増えていてとてもビックリしました。とてもニヤニヤさせていただきました

ありがとうございます

久しぶりの投稿とても嬉しかったです

停電など他県で原子力発電所の爆発などがおきていて

俺の家はゴタゴタしています

とてもめんどくさいです

いい加減少女におきてもらうことにしました

どんな相手に対しても相手の仕方が変わらない徹夜くん

これは俺の知識不足によりどうしていいのかわからないという点も
ありますが、俺の小説なんてそんなもんでしょう

今度どこかのサイトで詳しく調べようかな

では、ここらで筆・・・じゃないからキーボードを壊す・・・じゃなく
て

キーボードから手を離そうと思います。

誤字・脱字などあればご報告宜しくお願いします

27話 竜王女と竜人と俺のイライラ（前書き）

前回のあらすじ

起きない少女は白竜のお姫様で

竜王女とよばれるひとにあって

その人（竜だけども）は・・・

まさかの口り容姿だったッ！？

27話 竜王女と竜人と俺のイライラ

「いらつしゃい。人間と犬の獣人のお嬢さんルミを助けてくれてありがとう」

何故だ

何故なんだ……？

何故よりもよってロリ容姿……？

普通あり得ないだろう

この世界って怖いわぁー……
もしかしたら魔王も子供かも……そんなわけないか！

「人間のあなたのお名前は？」

俺がぼくとしてる間に質問されていた

「徹夜です。徹夜^{てしや}、景山^{かげやま}です」

つい敬語っぽくなってしまっ

幼女の姿なのに威圧のようなプレッシャーのような何かがひしひしと感じられる

そして雰囲気も違う気がする

あまりにもアンバランスな人（竜だけでも）だ

「『ドラゲイル』にようこそ、歓迎しますよ、徹夜くん。その犬の獣人のお嬢さんは？」

「……ラウ・バーン」

緊張してるようで少したってから返事が返ってきた
それを察したようで

「ラウちゃん緊張しなくていいですよ、私は堅苦しいのは苦手ですから」

ニッコリ笑ってそんな事をいっていた

「おっと、私の紹介がまだでしたね。私はイリル。イリル・ドラゲイルです

一応、何千年も王女やってます」

イリル・ドラゲイルって言うのか

うーん、何千年といいながらあの姿って・・・

「いや〜。いい加減成長してもいいでしょうにね〜」

すると、王女様がそんなことを言い出す

心読まれたッ！！

「正直これだとみんな驚くから嫌なんですよ」

そんな悩みまで言い始めた

そしてまだその話を続けようとしていたらしいがハツと何かに気づいた

「今の問題は誘拐した犯人ですね。」

そういうと横に並んでいた大人たちの中の一人にいた

たぶん竜人の男に向けて指示を飛ばしている

多分俺が自衛団に預けている奴らを引き取るかなにかするんだろう

「別に明日でもいいですよ。やっておいってください」

「ハッ！」

それが最後の指示だった

明日でいいってそんなのでいいですか

王女様・・・

まさかの決闘！？
いや、ハハツ！？
相手は竜人だけど大丈夫かな・・・ツ？

「では、決闘を申し込みます」
男がそういった

ええ・・・

いいやあ！！もうめんどくさいから考えねエ！

「では、受けてたちましょう」
おう、俺っておかしい頭してんな

「えッ！？テツヤ！？あなた正気ッ！？あの人は竜の中でも上の中の強さだよ！？」
ルミがめっちゃ驚いてる。

周りの大人たちも目をまるくしてるものはいるは
ニヤニヤしているものはいるは、正直イラつきます
ラウはオドオドしていた、ああ、一つ一つの行動が可愛いな・・・

「では、闘技場の方に移りましょう」
そういうと、みんながいつせいに動き出した
統率がまったくない自由行動のようだ
そして俺も歩き始める

「テツヤ・・・あなた大丈夫なの？」
ルミの質問だあ・・・

「大丈夫・・・かな・・・？」
正直、自信がない

「大丈夫ですよ。私の目にはくるいはありませんから」
隣にいつの間にかイリル王女様がいた
王女様でも自分で歩くって・・・
これはどういう・・・

「正直、あのロイルはルミの護衛の任につけたことで浮かれていたんですよ

確かに実力はありますが、浮かれているだけではダメです
だからそれを思い知らせてください」

あの人（竜人だけど）ロイルっていうんだ
知らなかったよ

ああ、まあ、がんばります

そしてそう話しているうちに闘技場についていた

城の横に闘技場があり

いろいろ武闘会などがひらかれているらしい

そして俺は闘うところに入っていく

イリル王女様やルミとラウは観客が座るところに移っていった
目の前にはロイルという男が一人

「殺さなければ大丈夫です。治療する準備は万全ですので」

イリルの声が聞こえた

ふむ、殺さない程度に容赦はしなくていいと

「では、こちらも負けたくはないのでな。本気で行くぞッ!」

そついうと筋肉が膨れ上がったかと思いきや

数?の大きさの黒い竜へと姿が変わった

おお、すげえ〜

『いまさら後悔しても遅いぞ人間。我が力で一ひねりにしてくれる』

黒い竜の音がきこえ

その次の瞬間には太い尻尾が横殴りに振るわれる

おおおおッ！！こええっ！！

それを俺はジャンプして避ける

「むお・・・かつこいいな・・・、竜」

思わずつぶやいてしまう俺

うーん、小学生のころの心が抜けきっていないな
とりあえず着地

「はアアアアアッ！！」

その声とともに竜の黒い炎が撒き散らされる

むぎよおおッ！！？目の前から炎が迫ってくる様子はとても怖かった
とりあえずそれは・・・

「『ファイアーボール火の球』！！」

火の球を造りそれを投げ一箇所だけ穴を開ける

そこに俺は移動する事で難を逃れる

「下級魔法で『ドラゴン・ブレス竜の息吹』を吹き飛ばした・・・」

ルミのそんな声が聞こえてきた

吹き飛ばしたって言っても一部だけですよ？

うーん、そろそろ面倒になっってきた

ふむ、思い知らせてやりましょう！！

「おーい、舌かむなよー！！」

「は？何を言っつて ムグウッ！！？」

ロイルは何が起きたのか理解できなかったら

俺の姿が一瞬ぼやけて消えたと思ったら

いきなり顎に下から衝撃が来たのだから
俺が行った事は単純ですよ

バツ!!と跳んでロイルの顔の下で思いっきり膝蹴りを繰り出しました

そして俺は自然の原理に従って落下を始める
空中で身をひねってもう一発の準備

『何が起きて・・・ぐおおおおおツツツ!!』

身をひねって回転したところでまわし蹴りを

竜の腹に食らわした

竜は吹っ飛んで行き

観客が安全に見えるように配慮されているであろう上に観客席のある壁に

思いっきり背中からぶつかつた

かるく壁にひび割れが生じた

俺は足を抑えて

「うっ、竜の鱗、硬い・・・足痛い・・・ヒリヒリする・・・」
俺のそんなつぶやきがつい口から出ていた

「竜を蹴ってその程度なのだから褒めるべきなのですが・・・」
聞こえていたのか今の眩きを

微妙に遠くにいるはずなのに大人たちとルミもちよっとわらつたりしてる

よし!最後はかっこつけるぞ!!

「たかが人間をなめるなあツ!!・・・聞こえてないか」
改めてロイルのほうを見てみると
完全にのびていた

ああ、俺のかっこつけ意味ない・・・

・・・なんか寂しい

「ふむふむ・・・」

うん？いつの間にか近くに来ていた

イリルとルミとラウと大人たち

なんですかあなたら・・・？

忍者ですかッ！？

そして俺は信じられないものを見た

この何日かで幾度か見てきたもの

そのたびに恐怖を味あつたもの

久しぶりに開放されてまさかこんなところまであるとは思わなかつたもの

簡単に言おう

嫌な感じのニッコリ笑顔

寒気が・・・ッ！！嫌な予感がアアッ！！

ちなみにそのニッコリ笑顔の主はイリル王女様・・・

あア！！さらに寒気が・・・ッ！！

「では、徹夜さんに護衛をやってもらいましょうか」
嫌な予感的中

他の人たちは何も言わずにいる。無言

・・・直ちよくで言いうと異論なし

いやあああああ!!

めんどくせええええええええええええ!!

たすけてええええ!!ヘルプ!ヘルプ!!!

27話 竜王女と竜人と俺のイライラ（後書き）

更新できませんでした

今回は自分で一回一話から読み直してみました
誤字が結構ありました。メッセージで送ってくれた方もいるのですが
その話で見落したり
まさかのメッセージでさえ読み間違いをしていたりという理由で
直せていませんでした。わざわざ送ってくださったのに直すことが
できなくてすみませんでした。

今回の話は

一回竜と戦わせて見たいな。という気持ちがあったので行ってみま
した

他の小説を読んで一瞬で移動のときにはどう表現すればいいのかを
知り

それを使わせていただきました
とても楽しかったです
とりあえず更新してみました

メッセージにもあったのですが一話に詰め込みすぎて追いつけない
ところがあると自分でも読み直して思いました
過去の話は無理かもしれませんができるだけ直して行こうと思います
・・・今回の話も詰め込みすぎたかも・・・
今後気をつけます

誤字・脱字があればご報告宜しく願います

28話 何で俺は護衛対象と戦ってた？（前書き）

前回のあらすじ

なぜかしらんけど

ロイルという名の竜人と戦い
かるくぶつとばしてやったぜ・・・ッ

・・・もう・・・疲れた

28話 何で俺は護衛対象と戦ってた？

ああ、なんでこんなにもめんどくさいのだろうか
ちなみにロイルという名の竜人をぶっ飛ばした次の日である
昨日のイリル王女様の言葉を俺が断ろうとすると

「いや、俺は仕事する気は・・・」

「ん〜、じゃあ一つか二つあなたの欲しいものをただであげちゃいます」

「謹んでお受けします。陛下」
即答だった

正直、もので釣られる俺って・・・小学生のころの心が抜けきっていないな

「それにルミもあなたの事を気に入ってるようですし」
まあ、助けてくれた人に対してクライといわれたら
俺はもうシヨックで立て直せないと思う

「別にこの仕事が終わってからというわけではないので途中で私に言っただけです」

ふむふむ
じゃあ今はめんどくさいから
あとでお願いしてみようかな〜

てな感じだったわけだ

むあ〜ッ！！護衛の任につけられたけど

正直言っただけやることがないというのは変わらない

身の回りのことは召使さんがやっているらしいし
それに、ルミを注意してる人は昨日の護衛の二人だった
俺が、そういうのはできませんよ？といったら

「では、丁度いいから護衛の二人をつけましょう」
といつてきた

ええ〜ッ！？おれ戦う意味ありました？
そのあとロイルさんが

「さつきはすまなかった、つい自分のプライドが出てしまい・・・
と頭を下げてきた
ルミやイリルさん（明らかに年下の姿の人に”さん”ってつけるの
ってなんかやりづらい）
聞いたのだがロイルさんは根はいい人だ
そしたらつい俺も

「いえいえ、こっちが悪かったんですよ。」
何が悪かったのかわからなかったがつい謝ってしまう
そしたら

「いやいや」
「いえいえ」

「いやいや」
ペコペコとそれを十分ぐらい続けていた
途中でルミが俺にとび蹴りを繰り出していなければ一時間は続いて
いただろう

「ふふ〜ん、私は竜の中でも上の上には入る位強いんだよ〜！」
いきなりルミがそんな事を（無い）胸を張って言い出した

俺がなんとなくロイルさんともう一人の女性ミアアとコウジを見てみるとコクコクとうなずいている

「じゃあ、護衛っていらないんじゃ？」

俺は思ったことを言ってしまう口だ

「いえ、護衛はほとんど建前でルミ様の行動を制御するためのものなんです」

ミアアさんがそんなことをいつていた

当然、護衛としての任もあるのですが、とロイルさんが言っていた
ああ……

ルミは相当アホな行動を繰り返していたんだろうな
だから、こんな任務があるんだろう

「テツヤ。あなた相当強かったけど、私ともやってみる？」
ええ、めんどくさいなあ……

俺がそれを表情に表していると

「怖いのお？」

正直イラッと来る言い方だが
ロイルさんの竜バージョンと戦ったときの感想を今ここで思ってみよう

怖かったです

炎が迫ってきたり200年とか生えてる木よりも太い尻尾が迫ってきたりする

それが怖い以外の表現ができるはずが無い

ちなみにロイルさんは黒竜人

マイアさんは赤竜人だそうだ
むう、いろいろ色があって面白そうだ

そしてルミの挑発（レベルは低い）それに対して

「おおう！やってやんよ！！」

乗ってしまう俺

俺も十分レベルが低い

という事で昨日と同じ闘技場に行った

「まあ、とりあえず私も本気で」

そういうと一瞬の内に白い竜へと姿が変わっていた

昨日の黒い竜はコツい感じでかつこいと表せるが

白いのはスラリとしていてなんか美しいと言えるだろう

「ふっふっふうゝ・・・凶体がでかいから強いと思うことは昨日見てわかっただろう

そして俺は凶体がでかいからこそ効きやすい魔法があるのだゝ」

俺は軽く余裕があるように見せ付ける

相手が反応する前に

「『重力操作』！！！！」

魔法を発動させる

10倍でいいと思う、ルミといつても一応は竜だから

『によおッ！？いきなり体が重く！！！？！？』

それでも立っていられるルミ

さすが竜バージョン

『むおおッ！？小さくなればッ！！！！』

そう言うのと竜化をときまた少女の姿に戻っていた
そして一気にこっちに跳んでくる
面積が小さくなった分圧力が減ったみたいだ
どっちにしても十倍なはずなのにおかしいなあ・・・
そんな事を思ってる間にもう俺はルミの戦闘範囲内にはいつていた
繰り返し出てくるのはただのパンチだ
手をクロスして受け止める

「竜人の握力で吹っ飛ばないのだからすごいよねテツヤって・・・」
確かに人間と比べれば強いだろうが
まだまだ俺の許容範囲です

すると、ルミが後ろに跳び空中で口のとこに手を持って行った

「ふうふうふうううツツ!!」

なんか言葉で表せばそんな感じのなんでもない声だけど
俺にとつたらとても大変な事に

口から炎がバアアアアア...!!と出てきた
人間の姿だからその分小さいが立派な息吹だ
ブレス

「チイツ・・・!!」

つい舌打ちしてしまう俺だがとりあえずジャンプして避ける

「ちくしょう！なんてかつこいいんだツツ!!週間少年ジャプで
やってる

NARUTOの忍術を思い出しちまったツツ!!」
ちなみに俺が気にしてるのここだ

「何言ってるのかわかんないけど、とりあえず行くよツツ!!」
もう着地していたのかルミは空中の俺に向かって拳を構えながら突
っ込んでくる

空中だから受け止めても踏ん張りどころの無い俺は攻撃に徹するしかない

次の瞬間にはゴキイイイイ・・・ツ！！！！という音を立てながら俺の拳とルミの拳がぶつかり合っている
おれとルミはー？程度後ろに吹っ飛ばされながらも普通に着地

「空中で力のいれどころが無いのに私の一撃と同じってテツヤは本当に人間・・・？」
失礼な奴ですなッ！！

「おれはバリバリ人間ですツツツ！！！！！」
そういいながら、俺は地面に向けて拳を振り下ろす
すると爆発にも似た音をたて、そこは大きいクレーターとなった

「むあわッ！！？」
そのクレーターで一瞬足元がなくなり驚くルミ
ふふっ、その隙が負けへとつながるんだ！！
俺が一瞬でルミの前へと移動

「え？あわわわわッ！？」
めっちゃくちゃ慌ててるルミ
だが、もう遅い！！くらええええええ！！
次に響いた音はちよつと聞き覚えのあるものだった

ドッパアアアアアン・・・ッ！！

次の瞬間にはルミのおでこに俺のデコピンが炸裂していた

「いや、正直（敵じゃない）女の子を殴るっていうのも・・・

だからなんとなくデコピンにしました
もう負けでいいでしょ、ルミく？」
俺がそんな事を言ってみた

だけどルミは俺の言葉を聞いていなかった様だ
俺の目の前のルミは

「みゅアあああッ！！おでこが、い、いたいイイイイイイ
イイ！！！」

おでこをおさえていて
めちやくちゃ痛がっていた

・・・力加減間違えたかな・・・？

まあ、いいか（笑）

所変わって。徹夜達がドラゲイルに着く前に寄った町の自衛
団の留置所

そこには四人の男性達がいる
徹夜たちを襲って軽く返り討ちにあつた男達だ。
牢屋の周りには誰もおらず只中にその四人がいるだけだった
五人から四人になっているが、もう一人はクオ（哲也たちと一緒に
いる黒い狼だ）の
お腹の中にいるだろう。生きているかは言わないでおこう

「うう・・・」

「コロ……スウ……」

「あの野郎……」

うなだれる四人うち一人はただ無言なだけだ

こいつらは一人殺されたからといって恨むも何も無い

裏に生きるものはそんな事は気にしない

ただある一人の男のせいで捕まり、それに対しての言葉だった

「仕事を達成する事ができず、しかも捕まるとは……」

彼らが入ってる牢屋の前には一人の少年がたっていた

18歳ぐらいの顔立ちの少年だ

それに対して四人達は目を見開き驚いている

うちの一人が口を開いた

「3人の幹部の内の一人が何故……」

少年はこの言葉通り

ブラッククロス

闇ギルド『黒の十字架』の三人の幹部の内の一人

その少年は完全に美形な顔立ちをしている

裏に生きる者としてはおかしいぐらいだ

「それは折角の重要な協定を結ぶための条件だった『仕事』を、お前達が失敗したからだ」

それは幹部の少年が言った言葉ではない

いきなり誰もいないところから霧が晴れるようにして姿が現れていた

黒いような赤いような髪に黒い目、そして黒い肌

……つまり、魔族だ

「ジールク・ライ……別にくる必要ないのだが……」

幹部の少年はそれを見て

苦い顔をしながらつぶやいていた

「我らの第一プランがこれでダメになったんだ。丁度いいから協定の条件に出したのが失敗だった……。これは俺が出てきたほうがいいだろう？ク로우ラス・ロイドロウ。」

これで、人質作戦は没、第二プランに変更だ」

ジールクがお返しといわんばかりに相手の名前を言っている

「では、とりあえず仕事に移ろう……。 」

ク로우ラスはアイアンクローの要領で

一人の男の頭をガシツと鷲づかみにし

呪文のようなものを口ずさんでいる

表面的にはなにもされていないが男は苦しみ始めた

男は悲鳴をあげることすらできていない

そして10秒ほどそれが続き、手を離す

「……。一体何が」

今まで鷲づかみにされていた男は何をされていたかわからない

「黒い服を着ている、黒髪をへそまで伸ばし後ろで縛り、黒い目の人間の男

が邪魔をしたようだ、どうやら偶然の結果のようだな。阻止するために送り込まれたわけではなさそうだ」

ク로우ラスは別に四人の男達から話を聞いたわけではない

さっきの鷲づかみは魔法を使い記憶を引き出していたらしい

「ふうん……。黒髪、黒い目の人間の男ねえ……。 」

ジールクがニヤニヤと笑っている

それをみてク로우ラスは

「知っているのか？」

「いや、直で見たわけではない、ただ同僚の話聞いた」

「同僚というと同じ『魔界六柱』まかいろくはしらの魔族か……？」

「ああ、そうだ。まあそれ以上は言わないがな」

「フン……。とりあえず最後の仕事を済ますぞ」

「ここは俺がやらせてもらおう」

勝手にしろ。というクロウラスの言葉を聞いて

「では……」

ジールクは指をパチンとはじき

何事も無かったように二人の姿は消えていく

次の瞬間

牢屋の中がいきなり爆発した

なかの人間の生死は言わなくともわかるだろう

「『魔界六柱』がNO.5、『死炎』のジールク・ライが竜の国」

ドラゲイル』をおとそうじゃないか」

クックック……。という笑い声が響く

最後にはその笑い声も消えていった

28話 何で俺は護衛対象と戦ってた？（後書き）

一日も開けずに投稿してしまう俺
とても暇な子です

この頃はあまり投稿数が少なくて高ポイントの
面白い小説探しに没頭しています
いろんな小説があつてとても面白いです

今回の話は

なんか楽しそうな感じのことを最初に書いて
最後にちよつとシリアスを入れてみました
いろいろと頑張つて書いていきたいです

そして、日間ランキングでは11位

週間ランキングでは16位になっていました

凄いなのか？と思うかもしれませんが

ランキングなんて俺のが入るわけねえーって思っていた

俺にとつて、とつても嬉しいことでした

ありがとうございます

（この話は予約投稿によるものなのでこれが投稿されるときの
ランキングから消えてるかもしれませんが・・・）

誤字・脱字があればご報告宜しくお願いします

29話 勇者の日記と俺の腕相撲大会（前書き）

前回のあらすじ

なぜ？

何故俺は護衛対象と戦っているのか

そんな疑問を持ちながらも

デコピンで勝利

29話 勇者の日記と俺の腕相撲大会

むあ〜・・・

むあ〜ツツツ！！

なんか暇だぬ〜

ちなみに今日はルミと戦った日の次の日です

暇だし護衛もほとんどないし、だからイリル王女さんと話をしてみた
なんか気安く話せるらしい

「山本李氏やまもとにしのことを知っていますか？」

「あの人の事だったら覚えていますよ。協力して悪竜を封印しました」

悪竜・・・？

疑問に思い聞いてみる事にした

「悪竜・・・あいつは私の愚弟です。私と同じように創造と時空をつかさどる竜

私と互角の存在。私と二人で永遠に竜達をまとめ

そして守るはずでした・・・」

その表情には苦いものがあり

過去を思い出している顔をしている

「・・・ですが、あいつは自分の？欲”に弱かった・・・。魔王に
惑わされ

魔王に協力もしくは利用しようとした。あいつは世界のバランスを
崩す絶対的な力です

だから、封印しました。さっきも言ったとおり私とあいつは互角の
存在

だから、勇者の力が必要になった。そこでリシの力を借りたのです
・・・
ですが、そのリシの事を何故私に聞くのですか？」
すこし間をおいて
次は俺に疑問を言ってきた

「いや、ちょっと興味があつて・・・」

「そうですか。まあ、リシはいろいろと予想外な存在でした
魔王の娘を彼女に持っていたほどですから・・・」
え？ええええええッ！！??
それでいいですか勇者さん！！
勇者ですよネッ！？勇者さんですよネッ！！????

「驚く理由もわかりませんが、彼女は人間を殺したくないという思考
の持ち主だったので

彼女は一回も人間を殺しませんでしたし・・・。
まあ、実力は魔王を除く魔族でトップでしたが」
なんかすごいなその人・・・。
むう、そういえば

今までの勇者達を説明しようと思う
簡単に言おう。今までの勇者達の魔王討伐は失敗している
失敗してるといつても無駄ではない

魔族の戦力または魔王の力を大幅に消耗させて勇者達は敗れている
その結果が世界の維持だ

勇者というのも全てがチートな奴らだつたらしい
という事は美月もありえるかもしれない・・・
そのとき俺はどうしたらいいんだろうか・・・？
まあ、今のところは置いておこう。まだまだ先の話だろうから

すると、イリルがなにか思い出したように
(様とかさんづけするのってあれだから俺が考えているときはさん
も様もつけません)

「リシが書いていた日記がありますよ、それをあげますので護衛頑
張ってください」

おおっ！？まじですか！！！

「いいんですか？」

「ああ、コピーがあるから大丈夫です。原典があっても私達は今
必要ないですから」

おお、そうなんですか

「その代わりサボらないでくださいよ」
うーん・・・まあ、頑張ろう

そんな感じで

ヒントの元となる日記をゲットかも・・・！

まあ、だいたいあの俺がみた魔族の女はさっき言われていた
魔王の娘じゃないかな・・・？

やっぱり話からもヒントをゲット！！

まあ、とりあえずルミに案内してもらおう事にした

「うーん・・・確か奥の金庫・・・何番だっけかな？」

ルミがうなりながらも進んでいくのに俺は追いかけていく
ちなみにいまいるのは城にある大量の本を保管する図書室
相当の多きさと本の量がある

当然ここにいるのはルミと俺とラウと護衛の二人

「・・・(112番の金庫です。ルミ様)」
「マイアさんが何か耳打ちしている」

「あ！ 112番の金庫だったっけかな!!」
すると、大きな声をあげて走って行く
ルミのあとを走って追いかけていく
そして小さな金庫が20個位並んでる所についた

「うーん、えつと、えつとお」
ルミがさがしている

「これ？」
ラウが金庫を指差している
それには112番と書いてあった

「おお、さすがラウ、でかした！」
そういつて撫でてやると嬉しそうにしている

「」
笑顔で嬉しそうなラウ

「・・・とられた」
なんかガツカリし始めているルミ
ええっ？いきなりなんですかッ!?
と、とりあえず、褒めておこう

「さすがルミ、記憶力いいね」
ん、なんか微妙な褒め方だよなあ・・・

もつといいの考えるよ、俺

「そう？そうだよね、へへ」
ん、いいのかこれで？
嬉しそうだけど

まあ、とりあえず開いてみる事にした
金庫の中には一冊のボロボロの本
ペラペラとめくってみる

ボロボロで古いが別に破れてるページはなかった

「ふむ、これが勇者二代目の日記ですか」
ロリルさんが本を見てそういつていた
簡単には見せるものではないという事が
とりあえずは
ポケットに入れてそのまま闇に保存だ
あとで読んでみよう

「何で勇者の日記なんて欲しかったの？」
ルミがどうやら気になったらしく聞いてきた

「歴史を学ぶには丁度いいだろ？」
テキトウな事いつてすまじところ

「ふん、歴史に興味あるんだ？」

「まあ、少しね」

うん、そういえば元の世界の家族とかってどうしてんだろ？
何も言う事できずにこんなことになったけど

まあ、気にしてもしょうがないか
俺にはどうする事もできないんだから

とりあえずやる事がなくなっちゃった俺
さあて、どうしましょうかな〜・・・

「じゃあ、適当に私が案内しようか？」
いきなりそういい始めるルミ
こいついきなりが多いな

「じゃあ、お願いするよ」
そういうと嬉しそうに歩き始める
ちなみにロイルさんが

「歴史に興味あるならこの本を全て読めば・・・」
といていたがラノベみたいなおんな本ならともかくこんな難しそうなおんな本ばかりは

さすがに読めません
ちなみにラノベだったなら読みます

「ここは食堂！」
兵士たちが食事をするために作っているらしい
堅苦しいのが苦手なイルルは時々抜け出してここで食べているらしい
そのたびに捕らえられて元の場所に連れて行かれる
そんな事を聞いた後

「いやあああ！！堅苦しいのはいやですううう！！」
ちようどイルルが連行されていた
どうやら食事に時間は関係なしでくるようだ
とりあえず無視して次に移動

「ここは大浴場！」

言葉通りです

とても豪華なつくりですね

初代勇者のときに作られたものが何回も改築して
こうなっているらしい

「ここはトイレ」

紹介せんではない

「で、ここは鍛錬場」

そういつた場所は外で

何人かの男性が木の剣を振っている

「やほ。みんな」

そうルミが言うとみんな手を止めてこちらを見てくる

「ルミ様、こんにちわ」

軽いなあゝ・・・

「元気だった？」

「元気です！！」

なんか数が増えてるっ！？

その内一人が出てきて

「ロイル、お前人間に負けたんだって？」

「え、いや、その・・・」

ロイルさんの目が泳いでる

「おお、その人が」

ニヤニヤしながらこちらを見ているその人

「まあ、負けてもしようがないんじゃない？私も負けたしね
(デコピンでやられたけど・・・)」
その言葉でみんな驚いて

「ルミ様がツ!?」「」「」

また人数増えてるツ!!
すると違う男が出てきて

「よし、じゃあ、ロイルを力だけで沈めたらしいからな
本当か確かめるために腕相撲やろう!」
意外な展開だ

でも、なんとなく面白そうやってみることにした

「いいですよ」

ニヤツとしながら言う俺の表情は余裕に満ちているような顔だろう

「ロイルのようにはいかないぞ」

男も楽しそうに笑いながら台を準備し始める
準備ができたところで腕を台の上に置く
準備完了!

「はじめッ!!」

流れるに審判をやっている男性のその声で
腕相撲が開始した

一瞬こちらに押されそうになったが
すぐに力を入れて相手の手の甲が台についた

「本当に力強いな・・・」
楽しそうな悔しそうな顔をしながらつぶやいている

「よし、じゃあ次は俺だ!!」
その声とともに

俺は何時間も腕相撲大会をするはめとなった

29話 勇者の日記と俺の腕相撲大会（後書き）

ユニークが三万、PV が三十万を越えました
ありがとうございます！

ユニークが一万越えたのが22話だったのでとてもビックリしました
駄文ながらも頑張っかけています
本当にありがとうございます。

腕相撲・・・

入れて良かったのだろうか？
そして鍛錬してる兵の中では
なぜかタモさんみたいになっているルミ。
おかしいなあ・・・

なんか自然に女性のキャラが増えていってしまう・・・
何故だろうか・・・
むうう・・・ん？

そういえばこの小説で人気なキャラって誰だ？
とりあえず気になる！
という事で気が向いたら

好きなキャラクターのメッセージいれてください！

「お前ごときの小説が調子にノンなア！！」と
思う方が居るかもしれません！ここは多目に見てください
お願いします m () () m

ちなみにこの小説・・・
もう一人身内にバレマシタ・・・
とっても恥ずかしいです・・・
誰か助けて・・・

誤字・脱字があればご報告宜しくお願いいたします

30話 二代目の勇者の日記（前書き）

前回のあらすじ

俺は竜の王女様イリルに

二代目勇者が書いたらしい日記を手に入れた
読んで何かをヒントを手に入れよう

そしてその日は兵士達と腕相撲して終った

なぜかルミはタモさんみたいになっていた

30話 二代目の勇者の日記

これは次の日・・・と言っても

今日は仕事をお休みさせてもらっている・・・いや、お休みというのは正しくはない

俺が貸してもらってる城の部屋にルミを連れてきて

ラウとロイルさんとマイアさんが相手しているので俺はやらなくてもいい、ということだ

今日は勇者の日記を読もうと思っっているからだ

当然、ルミたちが退屈しないように俺が夜の時間かけて

人生ゲームを作ってみた

アレは簡単だから一回説明すればできる

だから、頑張っ作ってみた

簡単に例を言ってみると

『ギルドランクがBに上がった。報酬が になった』という感じものだ

他にもいろいろと書いてある

相当時間もかかったし、職業などの事をよく知らない俺はマイアさんなどから

職業などの下調べをしてから徹夜にて書いたのだ

お金は現実と同じ金、銀、銅だ。

さすがに本物は使えないので丸く切った紙に金、銀、銅と書いたもので相当しょぼいが

ゲームにはこれで十分だろう

それではみんなは・・・

「あああ、3マス戻されたア！！あああ！！」『魔物との戦闘。武器

と防具が壊れ、修理のため

銀貨30枚の支出』てなによおッ!?借金が増えていくウッ!」

「ルミ様そう気を落とさず……。よっし、Aランクに上がった、お金がガツポガツポとたまっていく」

「うう……。マイアは順調に上がって行けていいわね……」

「おお、ラウちゃんは家を買ったよ。運がいいな」

「それほどでもない。ロイアおにさんも旅団長にまで行ってるし」

「現実でもそこまできるといいんだけどね……」

「うう……。女王なのに……。農民になっちゃった……。だけど借金があるよりは……」

「イリル様、それは私への挑発と受け取ったわ……」

「……イリル様も借金まみれにしてあげるから」

「ルミ……。地味に怖い脅迫やめてくれる？」

とそんな感じだ

いろいろと新機能も入れている。相手を陥れる事も可能だ
ちなみにルミは自爆した

イリルはいつのまにか混ざっていて、違う事に集中していた俺はビ
ツクリした

ときどき廊下のほうから『イリル様ア!どこですかア!?!?』と
いう声も聞こえる

「テツヤ、やんないの？」
ルミがそんな事を聞いてきた

「やることやり終わったらやるよ」
そう？じゃあ先やってるから、という言葉を言うと
またボードのほうに向き直る

では、そろそろ勇者の日記を読もうと思います
いらぬところは省いていこうと思う！

（ 作者より、日記の途中の「言葉が入ります」は徹夜の思っている事と思って下さい）

勇者の日記

「最初はちゃんと読んでおこうと思う」

一日目

俺は山本李氏^{やまもとじし}普通の学生の俺は生活していた。それだけなのに
気づいたら異世界に来ていた。いつもどおりボーっとして
いつもどおり友達と話して、いつもどおりフラれて、いつもどおり
落ち込んでいた

「なんかいつもどおりフラれるって・・・悲しいな・・・」

そしていつもどおり帰宅しようとした
そんなときに足元にこの世界で言う魔法陣が現れ、僕を飲み込んで
いった

そしたら目の前は知らないところで、知らない人がいて

「勇者様！」の一言を俺の耳が聞いた。え？ええええ？何ですかこ
の展開！？

どうやら俺は異世界に来たらしいとわかった時は自分の力を引き出
してくれるという金色の変な指輪を選んだあとで、とても混乱した

二日目

もう、意味がわからなかった
俺はただいつもどおりでいたただけなのになぜこんな事になってしま
ったのかわからなかった

だから、混乱を少しでもなおせるように頭の中を整理するように日
記を書くことに決めた。

学校帰りの俺は全て空白の本をなぜか持っていたので・・・自分で
もなんで持っていたかはわからない、読んでいる人がいるとは思え
ないがそこは気にしないでくれ・・・それを使うことにした。

「すみません・・・。読んでます」

・・・一日目と二日目を書くのに半日以上かかったのは秘密だ

「秘密なら書くなよ」

三日目

今日から訓練が始まるらしい、大体のことは指輪をつけたときに知
識としてもらっている

から魔法などはわかるんだが剣術とかは一回もやったときがならな
かったので苦戦しそうだ

そして今気づいたんだが

今まで運動神経が決していいとは言えなかった俺なのだが、なぜか
何十倍も良くなっていた。

人体の神秘だ・・・。「違う気がする」

四日目

人体の神秘と騒いでいた俺だが・・・、どうやら召喚されると一定の
スペックにはなるらしい

軽く恥ずかしい・・・。「美月と俺はもともとだったけどね・・・。

」

恥ずかしい・・・穴に埋めて欲しいかも・・・「それを埋葬という

かも」

まあ、そこは気にしないでおく
何故だろう？剣術の上達が早い

これも召喚されたせいなのだろう。俺得だね

五日目

なんかさ、最初の日さ、混乱してて聞き忘れてたんだよね
魔王を討伐するって・・・
もう！！いや・・・ッ！！

それから俺は部屋にこもって一日出ませんでした

六日目

この世界の料理・・・うめえ（・・・）

「それだけで終らせんな」

六日目と同じような日記が続いたので省きました

例「剣がかっこいい、なう「意味不明です」」
「獣人の女の子かわええ、癒される（同感だ）」

十五日目

今日はやっと剣術の訓練が終わった

勇者という異常なスペックで、もうこの国で一番の剣術の人も倒せるようになった

正直なところ元の世界では小学6年生にも負けるような俺だったの
で嬉しい

ちなみに俺は18歳だ

「こいつもとの世界でへボイな・・・」

十六日目

今日は旅立ちの日の前日

今日はとてもドキドキして眠れなかった。俺は世界を旅するんだ！
！（・・・）

十七日目

ヤッフウー

「これだけッ!？」

二十五日目

ていうかね

これも混乱してて忘れてたんだけどね

俺を召喚した国って召喚するだけで元の世界に戻る技術がないんだって・・・

・・・トホホ、orz

とりあえず、この世界で頑張ろうと思います

だって、元の世界で平凡に暮らしていた僕には、優秀な弟がいて家族にもすごく必要とされたときがなかったんだけど・・・

そんな俺がこの世界では必要とされてるんだもの、必要としてくれる人のために頑張ろうと思う

二十六日目

初めて魔物を倒しました

人を相手に模擬戦とかしたときはあるけど、魔物相手はこれが初めてです

返り血とかいろいろ汚かったんだけど

魔物を倒すと助けた人や俺のお供の人に褒めてもらえたり、感謝してもらえたりして、

とっても嬉しい！・・・これでも18歳ですよ

見た目は高校三年生・・・時々中学3年　しかも女の子　と間違えられてたけど・・・、ね

中身は子供！・・・正直、だめな人ですよね・・・はい orz
「なんか可愛そうな人でおもしろい」

二十七日後

みんな！「だれにむけて言っただ？」

骸骨の戦士みたいなものを相手するときには気をつけて！

火系の魔法を使うと死んだおばちゃんを思い出すよ！！火葬という
意味で

「知らんがな・・・。てか、不謹慎だな」

三十日目

なんか日々の戦いでいろいろと遅しくなっただけでギリギリで

男性に見えるようになって来たよ！やったぜ！（^^^^）

「今思い出すとあの外見はギリギリの男性だった・・・」

三十五日目

はじめて魔族と会った

『時の巫女』さんとあつただけど、魔族が狙ってきた

いろいろと途中の村とか町で闇ギルドを潰したり、奴隷の人たちを
助けたりしてたら

ここまでくると結構かかってしまった

まあ、今の時代は魔王の活動が激しくなってくるまで人間同士で争
っていたから

国の境を超えるのも結構大変だ

魔王の存在は人間にとって結構良いかもしれない

とりあえず魔族を撃退！とてもきざったらしい魔族の男だったよ！
だけど、イケメンだった・・・俺もイケメンになりたい、別に泣
いてなんかいません

「水（たぶん涙）でグチヨグチヨになっているよ、このページ・・・
なんか切ないな・・・」

三十八日目

今日は俺の故郷に良く似てる小国の『キョクトウ』という国に行ってみた

島国ということもあり、故郷にとっても似ている

でも、お米がなかったから探し回った。お米はなかなか知ってる人がいないらしい

小国の端の端のほうにいつてみるとお米を育てている地域があってそれを頑張って国中に知らせた

ふふふ・・・これで何年かかるかわかんないけどお米をたくさん食べられるぞ

「今度行ってみようと思う」

四十日目

俺はあの人に会ってしまった

それは女性で腰まで伸ばした黒い髪、黒い目に黒い肌。魔族だった自分と同じ歳のような人だ

その女性はとても綺麗で一目で・・・惚れし・・・いや、なんでもない

その人は魔界と呼ばれる魔族の国から逃げて来たらしい話を聞く限りとても大変な人生を歩んできている女性だった

一緒に行動する事になった

四十二日目

ある村で山賊に被害がすごくあった

だから根絶やしにしまくっていたんです

そしたらつい油断しちゃって後ろから迫ってくる矢を気づく事ができなかった

でも、魔族の女性・・・リヤナさんに救ってもらった

・・・女の人に助けられるってちょっと・・・ダメ男かも・・・

これじゃ、いつまでも・・・付き合ってもらえるわけない・・・
まあ、・・・告白する度胸もないんだけど・・・

うう・・・ぐすっ、泣いてないもん・・・

「日記にまで『ぐすっ』って書いてる・・・多分無意識の内に書いてるんだろうなあ・・・」

徹夜の視点

その先は2ページぐらい

水(たぶん涙)でグチョグチョになっていて

どうやらそのページには書く事を諦めたらしく

次の日の四十三日目はグチョグチョになっていないページから始まっていた

ふむ、では続きを・・・

「テツヤー！食事に行くよ！」

ルミのそんな声が聞こえ

どうやらもう夕食の時間になっていたらしい

4時あたりから読み始めたからこれまでに3時間はかかったようだ

「おk。行くよ」

食事が終わったら読み始めようかな・・・

そう思ってたとき

俺の手を引っ張られた。そちらを見てみるとラウがいて

「一回人生ゲームやろう。徹夜・・・」
手を引っ張りながらラウが言ってきた
ん・・・

「じゃあ、一回だけやるね」

「うん！」

ニッコリと笑っているラウ

なんかルミも嬉しそうにしてる

日記は

夜に読むことになりそうだ

30話 二代目の勇者の日記（後書き）

正直なところ投稿する前に一回読み直して

誤字・脱字があるか確認しているのですが、なかなか見つけれません

なので見つけたらマジで報告宜しく願います

多分、一話の達成感により完全に見つける事ができないのでしょう
本当に困りものです

（一話書くのも簡単なのに達成感で・・・）

今回の話は二代目勇者さんの日記が大半でした

ホントは日記の最後まで書くころと思っていたのですが

そこまで書くとすごい文字数になると思い、やめておきました

次の話も二代目勇者様の日記を続けて書きます

正直なところ何日分が省かれてしまつか心配です

省かれたところ、それは勇者のその日の報告という奴なのですが

ほとんどが『馬車のカタコト揺れるのが楽しい』や

『いい人にあつた、お小遣いくれた』などの子供みたいなものです
中には『なう』だけで終わってるものもあるという感じですよ

それを書いていたら多分もったかかったと思います

ふっ・・・皆さんか好きなキャラはなんですか？

ちなみに自分は美月とラウです。なんというか書きやすいキャラです。
気が向いたらメッセで好きなキャラ送って！

誤字・脱字があればご報告宜しくお願いします

31話 二代目の勇者の日記(2) (前書き)

前回のあらすじ

人生ゲームで他の人を遊ばせ

俺は二代目勇者の日記を読んでいた

31話 二代目の勇者の日記(2)

夕食も終わり、めっちゃくちはしゃいだ人生ゲームも終わった
人生ゲームというのは大変なものだ

しかも俺が作ったのは多分多いと思う800マス。相当頑張った
そしてもう一つ作ったのが400マスバージョン。半分の量だが
その分進みにくくしている。俺達はさつき400マスバージョンを
やった

ちなみに二つをつなげる事もでき1200マスコースとして遊べま
す。

とりあえず

みんなが終ったときの自分の状況を教えましょう

俺 『魔王』・・・なんか嫌だ

ラウ 『貴族』・・・運良すぎ

ロイアさん 『騎士団長』・・・なんか順調

マイアさん 『ギルドランカー』・・・これまた順調

イリル 『家庭という名の宝を守る守護神』・・・妻』・・・なんも
いえねえ

ルミ 『売れない奴隷』・・・俺が集中的に陥れてやった

「うう・・・なんでテツヤに集中攻撃されたのかわかんない」

「おもしろいからかな？」

「うわぁぁん!?!」

「ルミ様、そう気を落とさず」

「どうせわかんないわよ、職についてる人には・・・」

「ラウちゃんは領地まで、もらえてすごいなあ・・・」

「ロイルおにいさんもすごい・・・」

とそんな感じの会話をしていた

で俺はまた日記を読むことにしました

ちなみにまだみんなやっています

では、日記の続きを読もうと思う

ー 二代目勇者の日記 ファイナル・トリック

プー

〜最後のたび〜

「ファイナルと最後がついているのにこの題名は結構続きそうな感じだ」

四十三日目

みなさんに言っておきます「だから、だれに言ってるの?」

僕は絶対に泣いていません!「嘘だろ」

あれは、あれです、あれなんです、え〜っと、あ〜っと

目から出てくるおさえられない水です「それを涙という」

うう・・・ぐすっ、また泣きそうなのでやめます・・・

「泣いたって認めたよな、いま？」

四十五日目

・・・うう、情けない

「まだ引きずってるよ・・・」

四十八日目

と、とりあえず、復活しました。泣いてるときに仲間の慰めがとても心に

きました。そのおかげで、また泣きました「また泣くのか・・・」
それには仲間も困ったらしく、そっとしておかれました

とりあえず復活です！俺は男らしくかつこよく！そして頑張っ
てい
くんだアア！！

という事で寝ます「ダメだなこいつ・・・」

五十日目

こんにちわ、みなさん（だから、だれに向けて言ってるの??）

今日はね〜、うふふ〜、なんかね〜、うふふ〜「早くしろよ」

あ、はい。わかりました、早くします。

「あれッ!? 聞こえた? 聞こえるわけないのに聞こえたッ!？」

で、デートしちゃったんです〜（クネクネ

あのね、なんかねお祭りがあったんだけど、二人で一緒に回ったの！
まあ、リヤナさんはデートのつもりはないんだけど、とても嬉しか
った

俺は一生この日を忘れません！

あ、ちょッ!?! リヤナさん、こっち見ないでッ!?! 日記をとらない
でエッ!?!

アア

ッ!?! 「とられたのか」

五十一日目

・・・恥ずかしい
みら、れた・・・

俺の思いが見られた・・・。もう、埋めれ

「埋葬か。最後の文字が『て』から『れ』になってるがそれは誤字
ではない

多分恥ずかしくて二代目勇者が間違っただらろう」

五十五日目

ふっふっふん

「鼻歌で終わリッ!？」

五十六日目

・・・嬉しいご報告をしたいと思います

リヤナさんと付き合うことになっちゃいました、えへへ(クネクネ
え?ニヤニヤするな?ごめん、自重します

でも、とっても嬉しい

五十七日目

今日はトロールを倒しました(、#)

リヤナさんにかっこいいって言われてとても嬉しかったです、
でもさあ、なんでこんな僕と付き合ってくれたんだらう?

謎です?遅しくなっただっていつでもまだ女の子に見えるような姿な
のに

謎です

六十日目

うっっ・・・

うっっ・・・

・・・おやすみ

「それで終らすなッ!」

六十二日目

リヤナさんに指輪をプレゼントしました

何もついてなくて何も書かれていない金色の指輪です

別に左手の薬指のじゃありませんよ

なんとなく寄った所に良いのがあったのでプレゼントしました

リヤナさんのジッと見てる欲しそうな目に僕はやられました・・・

うへえ・・・

「・・・何も言えねえ」

六十五日目

んにゃ!!

「なに・・・?」

六十七日目

しよ、しよしよしよしよ、

すう・・・はあ・・・「呼吸してるようです」

衝撃の事実!

「え・・・?気になる単語で終わり?」

六十八日目

リヤナさんが魔王の娘だったアーー!!

うう・・・

リヤナさんに話しを聞いた(この事実は二日前に知り、今まで仲間で会議してました)

ちなみにリヤナさんとは今、交戦状態だ、なう、にらみ合い、なう

「今は『なう』を入れる時じゃないと思う。てか、交戦状態で日記書けるお前はすごいよ」

とりあえず話しを聞いた

最初は一週間程度で俺を殺そうとしていたらしかった
でも『楽しかった』からなどの理由で殺すことができずにいままで
にいたるといふ

ううっ・・・お恥ずかしい事に俺は

次の瞬間にはつい抱きついちゃいました、とても嬉しかったです、
そのお言葉は

そしたら

『キヤアアア!!』と悲鳴を上げられてビンタされました、なう・・・
ガクッ

「気絶つて・・・そんなに強烈なビンタあるのか・・・」
最後に聞こえた声は

『殺そうとしていた女に抱きつくって・・・やっぱり変ね、リシ
・・・でも、そこが面白いわ、殺せないぐらいにね・・・すk』と
いふものだった

気絶して聞きとれなかったけど最後の言葉が気になった

六十九日目

うううううう!!

リヤナさん居なかつたああああ!!
もう、やだあ!!

ううううう、泣かない!

絶対に泣かないもん!!うううっ・・・ひぐっ・・・ぐすっ・・・

「五ページぐらい涙でぬれて書けない状態になっていた。なんか切
ないけど面白いな」

七十二日目

とりあえず頑張つて忘れるようにしようと思つ
失恋は得意中の得意だ

『可愛すぎて男として見れない』『付き合つなら可愛いよりも男前のほうがいい』

『可愛いけどどうしても女の子に見えちゃう』

そんな多種多様な理由で断られてきた俺の告白

「全てにおいてあなたの容姿のかわいさが原因です。多種多様ではありません」

うう・・・思い出したらまた泣けてきた・・・

七十五日目

『魔界六柱』の3人目を排除し、残り3人となった

「昔からあったのか、てかいつの間にか3人殺してたけど、日記には書いてなかったぞ」

俺は魔族でも殺すのはあまり嫌だから

日記に書かないようにしていたが「これが理由か」

これからはあまり気にしてはいけない

魔界の魔王を攻めるときが近づいているのだから

「多分『魔界六柱』は交代制で強いものあとに同等かそれ以上の実力のものに

引き継いでるんだらうと俺は思う」

七十八日目

これから準備期間に入ります

五日の準備期間のあと単独での二代目勇者の御一行が魔界への潜入そして、4つ大国と竜の国での連合の軍で時間稼ぎの大戦となるわけです

では、読者の皆さんありがとうございました

この日記はこれで終了です

といっても、日記も持っていくつもりだから誰も読者なんて居ない

んだけどね

僕が死んだらイリルちゃんのところにも送る転送魔法をかけておくので

もしかしたら数人は見るかもしれないけどね

徹夜視点

パラパラと軽くめくってみただけどこのページから先は真っ白だった
本当になにもなく、今までの勇者は敗北している

という事は死んでしまったのだろうか

それともどこかには逃げて生きていたのか

それはわからないが、この日記からこれ以上引き出す事はできない
だろう

一応この日記はこの俺がもらったものだから
持っていくことにする

この日記には悪竜というのも入っていた、しかしいつもどおり簡単な文章なので

悪竜の強さは

『ドーンとでかくて、欲に満ちてて、ギラギラに光る瞳が怖かった
！！』

というものだった。はっきりいって何もわからなかった

ふう、とりあえず

闇に閉まっておこう

ちなみにもう深夜

それなのにみんなは人生ゲームをしている

どうやら最初は400マスコースでやっていたらしい

「丁度終ったしテツヤもやる？1200マスで」

ルミが聞いてきた

「ん？いいぞ。ちなみにさっきのゲームの勝者は？」

「ラウちゃんです」

マイアさんが答えてくれた

「ラウはチート並みに強いなあ」

「チートという言葉はわかりませんが本当に強いですよ」
これはロイルさん

「うう、女王なのに・・・」

これは言わずともわかるイリル

「えへへ」

撫でてあげるとラウは嬉しそうにしている

そこ！ルミ！何故、うらやましそうな顔してんのッ！？

とりあえず、今日は楽しそうだ

31話 二代目の勇者の日記(2) (後書き)

4つの大国というのは間違いではありません
この何百年の中で滅びたということですよ
そちらについては後々書こうと思ってます

ユニークが四万、P.V が四十五万を越えました
ありがとうございます
正直ビックリです (<|>)

ある意味すごいです
新しいゲームだからといって
一日中人生ゲームをやれるすごさ
人生ゲームは時間がかかるし結構楽しいと自分は思うのですが
ちょっとやりすぎたかな、と思います

他の小説などを読むといつも思います
勇者は変な人ではないのか
そんな疑問を思います
ある意味、リシという二代目勇者は
日記を誰かが読んでいるはずないと思いつつも
誰かが読んでいる、と仮定して書いている変態
そして喜びのあまり
人に抱きつくの様な変態であります
そしてすぐ泣く子供でもあります

何百年も前の人ではなく
ある意味、主人公として書いてみたかった人物です
最初は遅しい『俺様強いよ!』みたいな人をイメージしてたのですが

日記を書いていくうちに『俺、遅たくましくなりたい・・・』という人になつてきてしまいました。

まあ、自分の結構好きなんで問題はない・・・と思いたいです!!

ある意味このキャラは結構好きです

この小説が完結したら書いてみようかな
リシを主人公にして

そして話が変わって

今は出ていないラルドさんのお話

最初はラルトという名前にしようとしていたのですが
気づいたらラルドという名前に

もう、こっちに慣れてしまったのでとりあえずラルドにしました。

自分、誤字が相当多いです

ところで(めちゃくちゃ話がそれます)

みなさんはほかにどんな小説にハマっていますか？

投稿されている話数が少なく面白い小説があれば
教えてくれるとありがたいです

正直、退屈な日々です

誤字・脱字があればマジでご報告宜しくお願いします

32話 良い子とお薬と病の母親(前書き)

前回のあらすじ

勇者の日記を読み

人生ゲームをした

32話 良い子とお薬と病の母親

今日は次の日

今日のやること

特になし

俺のやる気

全然なし

俺の脱力感

ありすぎる

「ぐだ~~~~~」

そんな事をいいながら自分の貸してもらっている部屋でだら〜んとしている俺

「テツヤやることないなら城を出て買い物に行こう!」

ルミがそんな提案してきた

正直内心、えええ〜ツ!!と思っっている俺
だるいです、動きたくないです。

「徹夜・・・行こう」

ラウのそんな発言

「よし、行こう」

即答だ

「態度が180度違うッ!」

だって、ラウは日々、俺を助けてくれる癒し系だよ？

助けてもらっている俺が逆らえるわけないじゃん

ルミは頭と両手をダラ〜んと下げて落ち込んでいる様子

「ルミ様、そう気を落とさず、あつたばかりの者と二人で旅してる者
そうすぐには勝てませんって、まだチャンスはあります！」

さて、マイアさん、なに意味のわからん事を言っているんだい？

何に勝つの？何のチャンスがあるの？何のことだかわからないよ・

・
むう〜・・・

まあ、とりあえずそれはおいといて
お出かけのほうに戻ろう

「ていうか良いのか？勝手に出て？一応昼寝して誘拐されたあとだ
ろ」

俺が普通に思ったことを疑問として問いかける

ルミに対してだったのだが

「あ、いいですよ〜」

いつの間にかイリルさんが後ろにツ！！

ビックリしたツ！！

「むう〜、私も行きたいんだけど・・・「イリル様！！見つけまし
たよ！！！」

え？ちょ・・・マジ、引っ張らないで！！オタスケエエ！！！！ほ
んど、まっつてっ！！

・・・

ミユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア！！！！」

・・・

「じゃあ、行こうか」

「「「りよゝかあゝい」「」」

三つある断層の内 第一層、獣人たちの住む

エリア

というわけだ

「この・・・クレープ・・・高くないッ!?!?」

ルミが指差してるのは銀貨二枚のクレープ

普通こつこつというのは銅貨で十分買えるものだ

なにが違うのかとルミが聞くと

どうやらわざわざ遠くの地からいいものを選び

作ってる材料一つ一つが良いものらしい

ルミがこちらを見ている。・・・自分のお財布は持っていないらしい
という事で

「諦めなさい」

「ええッ!?!」

ルミが声をあげている。ていつか俺にお金を出させようとしている
事態がまちがいなんだ

俺がお金持つてるように見え・・・

持つてるけどさ、サラスムの城で盗んだのがまだまだあるけどさ
くっ!!

そして俺がなんとなく視線を移しラウを見てしまった

ラウの目はとてもかわいらしく

そして表情もかわいらしく『食べたい』と言外に訴えている

・

・

・

・

「よし、じゃあ買おう」
負けました

「くっくっくよっし!」「くっく」

あれ?マイアさんもロイルさんもガッツポーズしているよ...

え?ええええ?

ちよっとひどくね?

くとりあえずお買い上げ

「うーん、このバナナチョコ美味しいね」ルミ

「ルミ様、こちらのいちごも美味しいですよ、どうぞ」「マイアさん

「く」ぶどう美味しい」「ラウ

「徹夜くん、このドリアン納豆クレープの端っこをちぎったから食
べるかい?」「ロイルさん

「ドリアン納豆とか嫌がらせか、俺はパイナップルがあるので結構です」俺

てか納豆があるのも驚きだ

ときどき手でちぎって食べ比べしながらも（当然ロイルさんは除外だ）

楽しくわいわいと話しながらも進んでいく

「てか、人にお金出して貰ってるのに、ドリアン納豆とかふざけすぎでしょ」

「ついうっかり」

ふざけんなやアツ！！

とりあえずこの話題は終了

「うわああ、この洋服かわいい」

これはラウの声、ちなみにラウは最低限の服を今まで着ている

最初の奴隷になってたときの服はひどかったが、ラルドさんたちとチームを組んだときに

俺が寝ている間に服を買っておいたらしい。3着とかぐらいしか買ってなかったらしいが

という事でここで服を買っらしい

マイアさんとルミと一緒に買い物している

獣人たちの住むエリアではみんながわいわいとしてる感じで

とても良い雰囲気のところだ、その分裏との落差はすごいだろうが表にいれば居心地が良いぐらいだ

という事で俺はなんとなく周りをしてみる事に

獣人がいっぱいだな、あたりまえか

ん？

路地裏で男の大人二人と男の子一人がいて

男の子がおびえたようにしている

頑張って音を聞いてみる

『おおい、金目のもの出せば悪いようにしないからよお』モブキヤ
ラ？

『いや、これはその・・・』男の子

『いいから、よこせていってんだッ!!』モブキヤラ？

大人の二人はハイエナのような感じだ。てかハイエナの獣人だろう
そして男の子はどうやら猫の獣人のようだ

ちなみに俺はシヨタコンではないです。同じ歳が一番こんお・・・
ゲフンゲフン

ただ子供を助けたいだけです、そして運よく行けばラウに友達を作
りをさせます

運よく行けばですがね・・・

と、いうことでエエッ!!

「どっせエい!!」

「ギャウン!!」

二人の内一人にとび蹴り成功!

「オメエ・・・よくも ギュフウ!!」

「おとなしくする事をお勧めする」

いきなりもう片方の男が短い悲鳴を上げたのは俺の行動に気づき

慌てて追っかけてきたロイルさんが男を後ろから壁に押し付けている
ロイルさんG」ケツジョブ

「ぐう・・・ッ！！竜人かア・・・！！！！」

男がわめいているが

さすがはロイルさん

俺には負けたけど強いねッ！！俺にはまけたけど・・・（ニヤッ

「徹夜くん、今僕が傷つく事考えなかつたか？」

「いや、そんなわけないじゃないですか」

笑顔で嘘をつく俺

とりあえず俺の飛び蹴りをくらったやつは俺が持っていたロープで
拘束

「おにいちゃん達ありがとう！！」

13歳ぐらいの男の子だ

おお、猫！猫だよ！猫！

・・・残念ながら男の子ですよ。皆さん

まあ、シヨタコンの人は嬉しいかもね、

「ん、どうしたの？」

といいながらこつちにくるルミ。そのあとに二人ともついてくる
そしてこちらに着いた

「いや、ちょっとゴミがあったもんで掃除してた」

俺も口が悪くなりましたなあ

あははは

そしてふと気づいた

男の子の目線の先、その先にはラウがいて

「ほえ・・・」

ほほう・・・(ニヤニヤ)

これは、これは、もしかしたらもしかしますなあ・・・

「とりあえず移動しよう」

ということどこから移動

男達は放置です

『はア・・・床つめてえ・・・』

こんなつぶやきが聞こえたけどほっとこう

男の子の名前はロムだそうだ

そして、ロムの目的は

「お母さんへの薬を買って帰らないと」

というロムの言葉

いい子だね・・・

また変なのにかまれるのを考えて

とりあえず同行

そして大人数の3組(15人ぐらいが1組)に襲われたけどとりあえず撃退

なんか無駄に襲われる回数多いな

ということ薬を買ったあと

「おにいちゃん達も家にきてよッ!!」

この言葉により、行く事になりました

そしてロムに連れられて歩いていくと
ちよつとした居酒屋のような感じの店があり、そこにロムが入って
いく

「お父さ〜ん、薬買って来たよ〜」

ロムが店に入ると大声で知らせている

それに周りの客の人もいて慣れてるのか『ロム、偉いなあ〜』などと
軽く声をかけている

ちなみにこの店には5人程度しか今はいない、メニューからも考え
ると

夜とかが一番賑やかになりそうな店だ

「ロム、おかえり」

そういうと体格のいい男性が店の奥から出てきた
猫の獣人だ

「そちらの方たちは？」

俺達のほうを見てロムに質問してきている

「途中で助けてくれたのッ!!」

「それは、家の子がご迷惑をかけて」

そういうと男の人はペコリと頭を下げてくる

「コウド・リアマーといいます」

相手が名前を言いながらまた頭を下げてきて

そのあと俺達もそれぞれ名前を言いながら頭を下げる
そして、それを終えると

「ここにいるのもなんですから、中に入ってください」

家のほうにとおされた。店のほうは数人の従業員に任せて中に入っていく

「お母さん、ただいまッ!!」

奥には敷き布団の上に座っていて腰当りまでは掛け布団をかけている女性

顔色が悪い事から病人だろう

それに驚きなのは犬の獣人だということだ

これは、あとできいたのだが

王都ではない集落などでは同じ部族で結婚という事になるがこういう王都ではそれは関係なく違う部族で結婚できる

もし違う部族で結婚したときは子供がどちらになるかは運しだいだ

「あらあら、ロムおかえりなさい」

ニッコリと笑いながら返事をしている女性

さっきみたいにみんな自己紹介をして

女性はケイトという名前らしい

「何かの病なんですか？」

不謹慎な事にルミがそんなことを言った

ギロツと俺が睨んでしまいルミの体がビクツと震えた

予想通り病気らしい

薬で悪化はしなくなるが、魔法で治療しないとなおらないらしい病の名前は、名前は聞いたけど難しかったので忘れまし

「治るのは治るんですが、お金がないんですよ」

まあ、魔法の治療なんて相当お金かかるだろうな

治療が完璧にできる魔法を使える人なんてあまりいないし

「どのくらいなんですか？」
またルミが・・・

「金貨10枚なんですよ、貧しい私達にとってこれは相当つらいです」

ケイトさんが答えてくれる

金貨10枚ははつきり言っていると借金しまくってもとどく確率が少ない金額だ

そしたら横でルミが

私のおこづかいじゃあ、届かないなあ・・・と言っている

お金出してあげようかと思ったのか

偉いね〜ルミは〜・・・

・・・ふ、俺は金貨300枚弱ぐらい持ってますよ・・・？

う〜ん・・・。やっっちゃえ

「じゃあ、今度から食べに来るのでそのときは食べさせてくださいね」

俺がそんな事を言うと

コウドさんとケイトさんが最初何を言われたのかわかんないような顔をした

それと同時に俺は袖に手を突っ込んで服（具体的には闇）の中から金貨15枚を取り出す

「え？ちよつと、その気持ちは嬉しいですがさすがにそんな大金は・・・

それに5枚も多いし・・・」

「いやいやいや、ドラマみたいな家族愛を見せてもらって

こっちはある意味嬉しかったですから、それに今度ただで食べさせてくれればいいですから」

はつきりいつていつぱい金があっても邪魔なだけだ
ちなみに

ドラマ・・・？とみんなが疑問に思ってるが俺はスルーだ
はつきり言おう、なにが嬉しいのか俺の言葉には俺にも疑問がある
まあ、それはいいとして

「と云う事で、どうぞ」

そんな言葉とともに15枚の金貨が（おもいつきり力を入れて）投げ
それは・・・

コウドさんの顔面に命中した

・・・押し付けようとして思いっきり投げました・・・
コウドさんすません

32話 良い子とお薬と病の母親（後書き）

いくつかいっておく事があります

ロイルさんはノーマルですっ！！

クレープの時に何故徹夜くんに食べるかと聞いたかというところやっぱドリアン納豆にツツコミを入れてくれるのは徹夜くんかなと思ったことであり、別にロイルさんがホモとかそういうのではありません。他の人は気にしないかもしれませんが、俺が読み直したとき

あれ〜？と思ったので書いておきました

・・・言っておきますが、徹夜君への嫌がらせでもないですよ！（たぶん）

今回の話ではオチが見つかりませんでした

ということでおしつけがわりにロウズさんには

痛い思いをしてもらいました。本当に悪いと思っています

そして徹夜くんは

『癒し』のラウには逆らう事ができないのです

（癒し、が異名みたいになってるけど気にしないで）

ラウをみて「ほえ・・・」と言っていた少年現る・・・ッ！！

良い子です！！どうなるか、楽しみですな

ちなみに今回の話の続きを書くことはありません

次の話からは次の日に移るので一回少年は出てこなくなります！

次出てくるときどうなるか、それは時と運しだいです（五話の題名）

ちなみに

好きなキャラ、お気に入りの小説などを教えて欲しい

というのは続いております、気が向いたら
気軽にメッセージください

あれですね

小説の設定で背景の色を変えられるじゃないですか

あれって凶器ですね

目が相当痛いです

では

誤字・脱字があればマジでのご報告宜しくお願いします

33話 将棋と飯と急展開(前書き)

二話を一気に投稿しました
間違えて見忘れないでね

前回のあらすじ

徹夜はコウドさんに

金貨を投げつけ

作者は才子を見つける事ができなかった・・・ッ!!

33話 将棋と飯と急展開

そして次の日だぬ

今日はいろいろあつたよ

まあ、いつもどおり楽しかったんだけどね

ミヤハハハ！！

はア・・・疲れたあ

朝からめんどくさいわな

いつもどおり護衛と言つ名のサボリ

今回は頑張つて将棋を作ることにしてみた

うん、木の板を削るのってさ

素材によつて難しさかわるんだよね

基本的に俺は将棋など工作などが好きです。なんというか子供のころから

楽しくてしょうがありません

と言つ事で作つてみることにしました

うん、なかなか興味深い

さすがに駒の文字にデコポコをつけるのはめんどくさいと言つ事で

駒はただ文字を書くことだけにして、それがどの駒よりも大きいなどがわからない

なので玉と王以外は全て同じ大きさにしてみる

あとは、コーティングすればおkかな？

というわけで

「え？ちよっ！？ちよつとまつてよ、そこはッ！？」

「フツ・・・もう諦めなさい」

「待って ツツ!!?」

カチツという駒を置いた音が響く

「全駒だな（笑）」

「んみやああああああああああああああああああああ!!」
手加減はしねえ

どんなときでも本気で嫌がらせをしてやる

それがこの俺のルールだ
というわけで弱いものいじめ・・・じゃなくてルミを撃破

「うううう・・・なんで、なんで私だけいつも精神的なダメージを」
ルミが膝をつき手を地に乗せて orz の格好で

落ち込んでいる

それをマイアさんがまた慰めている

ふふふ・・・ツ!!次はラウの番だぜツ!!

俺の戦略により、落ち込ませてやる〜!!

落ち込んでる姿も可愛いかな?

ということで

「・・・まいりました」
負けました

何この子!?何でこんなに強い!?

チート・・・?

チートだよね、この子?

うわああああああああああああん!!

「さ、さすがラウすごいな」

さすがに負けを認めるほかありません

と言つ事でとりあえず撫でます。ああ・・・癒されるっ

「」

嬉しそうに目を細めているラウ

「私ももう一回やる!!」

なぜカルミがそんな事をいつてきた

「絶対に勝つて・・・ボソボソ（撫でてもらうんだ・・・）」

「んあ？最後、何を言つて？」

「なんでもない！とりあえず勝負!!」

ええ・・・

と、反論するまもなく始まつてるしまつ将棋

この将棋はお昼まで続いた。50戦中50連勝

・・・ヤッフウ」

という感じだ

とりあえずお昼の食事をした後

俺は干し肉など携帯食料などを買いに行く事にした

前に食料がなくて日が暮れる前に村につかないという時があったの
だが

そのときはギリギリでつけたからいいもの

つけなかったら相当つらかっただろうと俺は思う

だから買いだめして闇にでも入れておくつもりだ

「これがいんじゃない？」
ルミが指差したのを見つめる

「乾パンみたいなものか、確かにいいな」

「これとかもいいんじゃないですか」
ロイルさんがこんな事を言ってきた

「ドライフルーツとかみたいなのドリアン納豆……」
バカにしてんのかお前？

「ドリアン納豆のネタいい加減やめろ」
俺がギロツつと睨みながら言う

それに対してロイルさんは
あつはつは……、と笑いながら手を軽く上に上げて降参のポーズ

「じゃ、じゃあ、これでいいんじゃないですか？」
マイアさんが指差したのは普通な携帯食料
ふむ、たしかにこれはいいですな

「これ」
ラウがもってきたのは……
飴玉だ
かあくわいい

旅にはあまり向いてなさそうだけどね
溶けたら食べにくいし

「買おうか」

「〜」

・・・軽く俺はラウに

餌付けされてるんじゃないだろうか？

いや、この純粋な笑みに裏があるわけがない

もし、裏があつたら

俺はトラウマで一年間はどこかの部屋に閉じこもってしまつたら

そのあと軽くロムの店行って

ただ食べ物を食べさせてもらった

最初の一回だけただでいいといったのに

また、ただで食べさせてくれると言つていた

ん〜、なんか悪い気がする

ちなみに

その時、ラウは昨日かつた新しい服を着ていて

「ほええ〜・・・」

ロムはラウをポケ〜とみつめたままだ

まあ、ラウはかわいいだろうからなあ〜

頑張れ少年！

ということが終わり

城に戻るうとして

「ん〜、楽しかつた〜」

「良かつたですね、ルミ様」

「〜」

ラウは軽くにこにこしている

「徹夜君、ドリアン」

「黙れ」

俺に勧めてきた

ドライフルーツみたいなドリアン納豆をもって俺の名前を呼んできたので

とりあえず遮った

おまえそのネタ、マジうぜえよ

目球えぐるよ？

次の瞬間

ドカオアアオアアンツ……！！という何か胡散臭い爆発音が背後から響いた

それに驚き

振り返ってみる

すると

王都の外壁あたりから火のてがが上がっていた

そしてゴウンツ……という大きな音が響くと同時に

俺達の目の前の曇りで遮られていた空から

黒い物体が出てきた

「あれは……魔族の空中戦艦……ツ！？」

ロイルさんのそんな声が聞こえた

空中戦艦とは文字通りで空を飛ぶ戦艦のことだ

機械とは言えない江戸時代のカラクリ程度の仕組みでほとんどは魔

法の力を利用して
空を飛ぶ鉄の塊

魔界の方では魔力を含む物体が多くあり、それを動力源に動いているそれは相当の戦力で人間と竜人が連合して戦争しなくていけない理由は

この戦艦がこちら側よりも圧倒的に多いということがある
一応こちら側にもあるが、数で言うところ5倍以上という数がある側にあるらしい

それが目の前に四隻

そして違う方角からそれぞれ4隻が一組として
三組きているので

あわせて四組なので16隻。相当の数だ

「めんどくさい事になりそうだ・・・」

もう、やだッ!!

33話 将棋と飯と急展開（後書き）

今回は

なんとなく将棋を出してみました

僕は将棋が好きです。弱いですが

ですので、「あゝ、最後の戦艦のどこまでなにでつながる（だら
ゝ）」と思いながら

将棋をしながら考えていたので

「将棋を作ることにしよう」となりました

将棋にしなかつたほうがいいでしょうか・・・？

まあ、とりあえずそれはおいておきます

うゝ、ファンタジーの世界に戦艦

なんか微妙です

まあ、俺的なイメージは翼の生えた船底の浅い金属の船というところ
でしょうか。

むうあゝッ！！

いつもの話もダメダメだけどちょっと今回は話はダメすぎたかなゝ
・
・

別に大丈夫ですよね・・・？

誤字・脱字があればマジでご報告宜しくお願いします

34話 俺と戦艦とアイアンクロー（前書き）

二話を一気に投稿しました
間違えて見忘れないでね

前回のあらすじ

いつもどおり

さぼり・・・じゃなくて護衛を
して
今日も一段層へ買い物へ行った

ただ最後に帰ろうとしたら
いろいろとめんどくさいことになった

34話 俺と戦艦とアイアンクロー

目の前に突然現れたのは魔族の兵器

これはどういうことだ・・・？

なぜだ、俺の行く先に魔族が関係してくるのは何故だ

ふう、

ん？さっき爆発音、目の前の状況

それなのにみんなは何故混乱しない？

目の前には住んでいた人たちは混乱する事もなくぞろぞろと歩いている

その住人の眼を見てみると光がなく

感情のない表情、この緊急事態と言っている場合には

不自然でしかない

「あ、疲れましたあ・・・都市全体に魔法をかけて住民を誘導するのは

この老体には骨が折れるですう、おかげで魔法使用中は動かせません」

その時に頭に響くように幼い女の子の声が聞こえる

これはこの国で一番えらい王女様の声だ

老体って・・・見た目は幼女だろ・・・

「イリル様・・・これは・・・？」

ルミが声でたずねている

むむ、対話できるのか？

「あはっは。時空と創造をつかさどる竜はこんなこともできちゃうんですよ」

とりあえずルミちゃんとラウちゃんと護衛二人は今すぐ避難してく

「ださいな〜」

「え？テツヤは・・・？」

ルミがそんなことをきいていた

ああ、俺も思いましたよ、何故俺の名前が出てこないか
はあ〜

『徹夜くんには追加でお仕事です』
人使いが荒いなあ・・・

『もう迎撃に出てる竜人もいますし、あとは徹夜君たちの目の前の
やつらだけです

住民の避難するのに他の兵たちは使ってるので十分実力を持ってて
空いてる兵士が
いないんですよ〜』

違う方角の戦艦のほうをみると戦艦一組に対して竜が10体ずつ
迎撃に向かっている様子だ

はあ〜、どうも嫌だな

『そういえば、あなたの捕まえた闇ギルドの連中、消されてました
けど

どうやらこれに使おうとしてたんでしょうね。人質にでも使おうと
してたのかな？』

あああ！！

めんどくさい、めんどくさい、めんどくさいッ！
やるしかないのかな
やるしかないのかな〜・・・ッ！？

『追加報酬を出しましょう』

「任せてください、イリルさま!!」

『相変わらずですねえ〜・・・』

あつはつは〜・・・と笑っている

いいじゃないですか、別に

俺は俺なんですから、

「徹夜、大丈夫?」

ラウが心配そうに見てくる

その頭を撫でながら

「大丈夫、大丈夫

ロイルさんマイアさんちゃんとラウを安全なところまで連れて行って
くださいよ」

「任せてください」

「心得た」

それぞれ返事をしてくれる

「ちょッ!? もう一人でやるって決まってるみたいだけど

大丈夫なのッ!? 私も手伝うよ・・・?」

これはルミだ

心配してくれるとはこちらもいい人ですな

「俺より弱い奴に心配されたくないな?」

俺がニヤニヤしながらも

冗談を言ってみる事に、まあ弱いのは本当だが

「な・・・ッ!！」

それを聞いてめちゃくちゃ反応してるルミ
冗談なんだけどな

「とりあえず行きますよ、ルミ様」

「仕事を増やさないでください。昼寝だ、なんだかんだじゃすみませんよ」

マイアさんとロイルさんが手をがっちりつかんで

違う所に連れて行く

お役目ご苦労さん

「ではでは、俺の仕事ですな」

そんな事をいいながら

結構なスピードで四隻の空中戦艦に向けてダッシュする

「うーん、あれはどのぐらいポコポコにすればいいんだ?」

『徹底的にお願いします』

俺が疑問に思っている

イリルさんが答えてくれる

ふむふむ、おっけ

『ぶっ壊せる程度に力を出してください。住民はほとんどは今の事を詳しくは覚えていません、他の人に隠しておきたい力があっても使って結構です』

ははは

結構お見通しですなあ・・・

目の前の四隻の主砲がギチギチと動いてるように思える

次の瞬間複数の爆発音が響き

十数発の砲弾が飛び出している

その方向は当然都市でまだ避難してない人がいる

「っ！！弾幕だな・・・『火の球』ファイアーノール×50だア！！」

わざわざ一つずつ狙うのはめんどくさいので

簡単に火の球で弾幕を造らせていただく

砲弾は火の球にあたり爆発して消える

残りの火の球は空中戦艦にぶつかって爆発するが特に大きいダメー

ジはなさそうだ

くあゝ・・・ッ！！

魔力がああ・・・

疲れるなああゝゝゝ・・・

どうやらさっきのでこちらを認識したみたいで

こちらを狙っているのがわかる

爆発音が響き

次の瞬間にはすごいスピードで砲弾がこちらに迫ってくる

「にやはははは！！！！無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アアアッー
ーッ！！！！」

それらを全て両手に持った剣で

はじき返していく

正直なところ手がジンジンするけど

今は気にしてはいけません

『本当に・・・人間なんですかねゝ・・・？』

一番すごそうあなたにそんなこといわれたくありません！！

何百歳も生きてるのに人間の姿が幼女のあなたになんか言われたくありません~~~~ツ!!!!

「もつと、もつとだアア!!!俺を楽しませてくれエ!!!」

『なんか妙なテンションになってませんか？徹夜さん？』
気にしません

変なテンションで変なキャラになっているんだろっけど
俺は絶対に気にしません

気にしない、気にしたくない、気にするわけがない

四隻の戦艦の中の一つで紫色の光が見えた

次の瞬間にはぶっといエネルギーの塊のようなものが

こちらに向かっつとんでくる

あれです、ゲームでもあるような

チャージすると出せるエネルギー砲みたいなものです

「あれはちよつとやばいかな・・・」

俺がそんなこと言ってる間も近づいてくる

「『闇』よ・・・。食らえ」

俺が手をかざすと足元から闇が広がり

こちらに向かっつてきたエネルギー（ここは魔力と言えるのかな？）を
飲み込んでいく

闇は、全てのエネルギーを食らっっていく

そして食らい尽くし、エネルギーの砲弾は一時的にだかなくなる
その間に急接近だ

「人間投球とでも行きますか」

その声とともに闇で俺の体をつかみ

持ち上げさせる
そして力をためて

投げました

とりあえず手を目の前でクロスさせて防御の体勢

「んごごごごごッ！！風の魔法で保護しとけばよかった・・・ッ！」

飛ぶ

飛ぶ

飛ぶ

そして戦艦に激突した

・・・痛い、

けど、俺は潰れないで

反対に戦艦のほうの装甲が貫かれる形になった

まあ、とりあえず接近完了

「なんだアツ！？今のはッ！！！？??？」

そんな魔族の声が聞こえた

モブキヤラ程度だろう

「ヤツホオ・・・」

「ッ！！！？??？」

俺は挨拶の言葉と同時にその魔族の顔面を
アイアンクローのように驚づかみにする
次の瞬間には

「…わるいね」

握り潰した

当然相手の顔はグチャグチャになり

俺の手は血で真っ赤だ

まあ、それはあとで手を洗うとして

「さて、まずは一隻めを落とそうじゃないか」

34話 俺と戦艦とアイアンクロー（後書き）

今回は

とても楽しめました

なんというか

チートだな〜って思えた気がします

久しぶりに闇が戦闘に使われました

まあ、防御と投球なんですけどね

いつもは収納にしか使えないのでなんかいい気がします

今回は二話を一気に投稿させていただきました

33話は32話が投稿される前にもう書いてたんですよ

だからなんとなく一気に投稿してみる事に

なんかしんせんです

誤字・脱字があればマジでご報告宜しくお願いします

35話 仕事と封印と悪竜の存在（前書き）

前回のあらすじ

まずは一隻目の戦艦に

潜入

突然ですが背景の色を変えました

白に黒の文字は正直目が疲れると思ったので
変えました

35話 仕事と封印と悪竜の存在

走って移動してる影が4つある

「私だって戦えるものッ!！」

「女の子は避難すべき」

「そうですね、ルミ様、ラウちゃんの言つとおりです」

「ルミ様に怪我があれば僕達はどうすれ
ッ!！伏せてくださいッ!！」

最後のロイルさんの言葉は
遠くからの戦艦からの流れ弾がこちらに向かっていている事に気づいた
から

その声とともにラウは無理やり倒される感じで全員が伏せる

爆音が響き

砲弾があたり、まわりの家が碎けた
その破片が空を飛んでいる

「大丈夫ですか？」

ロイルが起き上がってみんなに聞き

「大丈夫」

「ルミ様は大丈夫・・・あれ？居ない・・・ッ!！」

「えッ!? ルミさまあああ!!??」

視点：徹夜

四隻のうちの一隻のある戦艦

それはところどころ火の手が上がり、ところどころで爆発をしていて船体も傾きゆっくりと落ちて行ってる
墜落寸前だ

その内部で

武器をそれぞれ持った魔族の四人がいつきに襲い掛かってくる
それを斬ッ!!という音とともに一回だけ横一線に右手の剣を振るう
だけで

その四人の命を刈り取っていく

「二隻目に行きたいのに邪魔が入りやがる・・・」
舌打ちがしそうなほどに不機嫌な顔をしながら俺はつぶやいている
そろそろ掃除は終わったかな
ということだ

「よいしょっと」

そんな軽い声を出しながら上に跳び
天井を突き抜けて戦艦の上に立つ
そして次の瞬間には斜め上に跳び
違う戦艦に移る

「コントロールしてるところはどこだ?」

軽く走りながら探す

その間にも魔族とすれ違い
攻撃され、殺し、外に捨てる

というのを続ける

コントロールルームみたいなところを潰せば簡単だ
さっきも4つのエンジン（のような魔法具）の1つを破壊したあとに
そこに行き潰したら完全に落とせた
エンジンは多分関係はないだろう
それをコントロールしてるところを壊せば無駄を省ける

「めんどくせえなあ・・・」

そうぼやきながらも

ちゃんと潰して動きまわる

んあゝ、なんとなく曲がろう

「ここかな・・・？」

なんとなく扉を開けてみたけど

やっぱり違う

食堂だったよ

んゝ、どこだ、どこだ、どこだ

ちなみに一隻目は適当に壁ぶつ壊しながら進んだから

戦艦の構造は全然わからないで

たどり着く事ができた

だからすこしでも構造がわかれば残りも簡単になるだろう

走る、走る、走る

「よし、見つけた」

扉を開けると同時につい独り言を言ってしまっ

「ッ！！！」

そこにいた魔族の数人は驚き急いで武器を取り出そうとする

「よし、潰してくぞ〜」

そんな声とともに

近くにいた魔族の後頭部をガシツとつかみ

思い切り機材に叩きつける

機材も魔族の顔もグチャグチャになっているだろう

「名剣クソヤローソード。にやはははははははははッ!」

魔族の頭をつかんだまま思いつきり振り回して

武器を取り出して襲ってきた魔族をなぎ払う

なかなか攻撃力高いな

「カータをはなせえ!」

一人の魔族が仲間思いな事を言いながら突っ込んでくる

なんか俺が悪役みたい

まあ、いいか

「じゃ、はなす」

あっさりとはなす俺

でも、普通にはなすのつまんないよね〜

だから・・・

「ちょッ!こっちに投げな・・・ッ!ゴフウッ!」

投げてみました

俺の魔(族)球は魔族に当たり

二人とも下に落ちていった

南無

「ハッハー!壊してやんよオオ!」

暴れまくるよ

俺

なんかね〜、物を壊してるとスカツとするんだよね〜、開放感というかなんとというか

「・・・俺も、もう危険だな、今度ストレスがなくなる何かしない
と・・・」

ははは
なんかストレスたまりすぎかな？
とりあえず破壊完了っつと

ん？

窓から外を見てみるとこちらに向けて
紫色の光が見える
どうやら墜落寸前の戦艦と一緒に俺を潰す気なんだろう
窓を蹴破って外に出る

「ったく、めんどくせえ・・・」
軽くジャンプして足が戦艦から離れる
そして落下する前に戦艦の先っぽのほうを
指が食い込むほど思いつきりつかむ
いつも思っけどおれは軽くチートだとおもっ
とりあえずそれはおいとして
打たれる前に殺^やらなくちゃ

「おおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオツ！！！」

当然足がついていないので腕の力だけで
戦艦を振り回す

そして思いつきり投げる

でかい戦艦どうしがぶつかり合う

火の手が上がるが

どうやらチャージの砲は壊れなかったらしくエネルギーが放たれる
当然狙いは大きくそれていて何もないとこを通過していく
そしてどちらにも墜落していく

「『エアブロック空気物体』・・・残り一隻か」

魔法で空気の足場を作り

そこに着地する

ふう、正直疲れるなあ・・・

やばい、やばい・・・

正直なところもう寝たい

終らせますかア！！

今気づいた

コントロールルームにはさ

中から向かうんじゃないかと外から入ればいいんだな、と
ということ

直で殴りこみ

「ふう、ラストだ」

俺が中に入ったようにして入り
着地する

「畜生ツ！！」

もうやけくそ気味に魔族がつっこんできた
ふう・・・

「またも現る。名剣クソヤローソード！！」

そいつの頭をわしづかみし振り回す

「ぎゃああああああああああああああああああああ！！！！」

みやはははは！！

みやはははははは！！

さすが名剣、金属をも砕く最強の攻撃力
金属を砕くたびに赤い血が・・・トマトジュースが空中を舞っ
ているが気にしない

そして最後の一撃で完全にコントロールルームを破壊して
この一隻も大きく傾き、落ちていく

「とりあえず脱出」

外に出て魔法で階段のように足場を作り

そこをゆっくり降りていく

そして地面に足をつける

目の前には四隻の戦艦の残骸だ

ところどころ火が見える

「おお、闇で回収しとくか」

足元から闇が広がり残骸を回収していく

まだまだ使えるのもあるからな

当然魔族は回収しません、死体でも生きててもどちらにしても邪魔だ

『・・・終わりましたか、徹夜くん、では城の地下に向かってくださ

い』

頭に響くイリルさまのこえ

「え？なぜ？」

『先ほど気づいたのですが、敵の気配があります

おかしいとは思ってたんですよ。この程度の戦力、この私がいるの
ですから

この国を落とすには無理だと言う事が相手もわかっているでしょうに』

たしかにイリルさまの実力はわからないけど
相当な実力なのは間違いなしだな

『そしたら地下に向かう気配がありました。』

これは私の愚弟の封印を解くつもりらしいですね。だから向かって
ください

このままじゃやばいです』

本当に人使いは悪いですな・・・

愚弟ということは二代目勇者とともにイリルさんが戦った悪竜ですか

『ん？』

「どうしたんですか？」

『いや、地下の最下層に気配が一つ・・・これは』

「え？なんですか？」

『ルミですね・・・やばいかもしれません』

「はぁッ!？」

階段を結構なスピードで降りる
二つの影、それは魔族だ

「見えてきたぞ、メイト」

「そうですね、ジールク様」

軽く言葉を交わしているが
いくつものトラップが作動し、二人を殺すために迫ってくる
それを二人はかわして行く
そして階段が終わり
進んでいくと
ひろい空間に出た

そこには氷で全身を覆われた特大の竜がいた
永久に時を止め、イリルと同じ時空と創造をつかさどる竜さえも
封じる、『永遠の氷』アイス・エターナルという魔法
使えるものがいない事から今はほとんどの者から忘れられた古代魔法

「あれが悪竜か・・・」
ジールクがつぶやいた瞬間に
魔族の二人がなぎ払われた

『魔族といってもこんなものなの？』
いつの間にか白い竜がいた
隠蔽魔法でもかけていたらしい
そして次の瞬間には

「ここにくるほどだからもつと強いかと思ってただけど・・・」
人間の姿に戻る、その姿はルミだ

「・・・メイトは気絶してるな。はア・・・なめるなよ竜人
いくら奇襲だろうが、お前ごときに負けるわけがないだろう」
いつのまにかルミの10？離れた横にジールク・ライが立っている

「・・・ッ！！これは、これは、なかなか骨のありそうな獲物が
いるわね」

ルミが手の骨をポキポキと鳴らしている

「フン・・・、核の違いを見せてやるよ竜人、 『魔界六柱』 の名は伊達じゃねえ、つてな」

ルミと『死炎』のジールク・ライとの戦闘が始まるうとしてい

35話 仕事と封印と悪竜の存在（後書き）

今回では

徹夜くんがんばってチート臭を

ただよわせようと思いました

失敗か失敗かどちらかはわかりませんが

とりあえず頑張ったと思います

戦艦では

俺が5〜10話を投稿するとき思ったことがあります

「あれ？人間と竜人とかが連合して戦ってる、ってかいたけど、魔族の人たちそんなにチート？ちょっとおかしい気がする」

ということを思い

魔族は人間などよりもカラクリと魔力の環境がよく

兵器が多いという設定にしました

これでパワーバランスを整えよう、というわけです

今回は戦闘中の徹夜くん以外は

全てシリアス！

戦闘中に『にはははははは！』と笑っている徹夜はシニール！！

まあ、いつもどおりのダメさでしたが

こんな自分でも読んでくれている人がいるだけ

まだましなのだと思います

みなさんありがとうございます（TAT）ノ

ちなみに、好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しい、はまだ続いています、気が向いたら気軽にメッセお願いします

投稿時間を深夜0時に変更しようと思います

誤字・脱字があればマジでのご報告宜しくお願いします

36話 白竜の姫と魔族と人間（前書き）

前回のあらすじ

徹夜が自分の担当の敵を

殲滅してる間

敵も動き、悪竜の封印を解こうと動いている

そして封印された空間についた、

その封印されし竜の前で待ち構えていたのはルミだった

36話 白竜の姫と魔族と人間

「あああッ!!もおッ!!めんどくせえッ!!!!!!」

無傷の家、元は家だった瓦礫それらの上をジャンプしながら進む

「徹夜くん!」

いきなり呼ばれてそちらを見るとロイルさんがいた
とりあえずそちらに着地する

「ルミ様がどこにもいないんだ!!」

「……大丈夫です。ラウを無事に避難させて下さい」

「だがッ!!!!」

「俺が迎えに行くので心配しないでくださいッ!!」

ロイルさんの言葉を大声で遮ったあとに何も聞かずに
また俺は大きくジャンプする

目指すのは城。イリル様に地下への近道を聞いたので
その近道を目指す

「……絶対に、大丈夫だ……」

激しい戦闘音がそこには響いている

「はああああああああああああ!!!!!!」

その声とともに口から炎……『ドラゴンブレス竜の息吹』を吐く

その狙いはジールク・ライ
敵だ

「ふんッ!!」

手を軽く振ると何もないところに爆発がおき

ルミの炎とぶつかり、打ち消しあう

ルミが一気に距離をつめ拳を振るう

ジールクは片手に持っていた剣でその拳を防ぐ

「白竜のお姫様と聞いてただけだが、なかなかのもんだ」

「それは、どうもッ!!」

ルミがいつそう力を込め、もう片方の拳を繰り出す

それを下にしゃがんでよけるジールク

「だが、まだまだ甘い」

しゃがんだままの体勢でそのまま蹴りを放つ

「ぐうっ・・・」

その蹴りで吹き飛ばされる

地面から数?足が浮くほどの威力

当然落下し地面にぶつかるといふところで両手をつき

バク転をするようにして体勢を建て直す

「本当は少しでも楽になるようにあんたを人質にするつもりだったんだがな・・・」

思わぬ邪魔が入ったよ。竜王女がいるんだ。最悪でも戦艦が全滅する事だって

あり得るからな」

ジールクがやれやれ・・・、という感じで首を横に振っている

「私ごと、殺される場合だってあるでしょうに・・・」
国の民とたった一人のお姫様、それを比べるとしたら
普通は国の民をとるだろう
お姫様と言ってもいなくてもなんの支障はない存在だから
だけど・・・

「それはないさ、竜王女は魔王様も認めるお人好しだからな」
ジールクの言う事は当っているだろう
イリル様は世界でも上位の力を持っているが、
敵でない限り生き物を殺すことを躊躇う、国の民と私一人を比べた
場合

絶対に両方とも守ろうとするはずだ
私にはどんな方法かはわからないが、絶対にその方法を探し出そう
とするはずだ
それが民に尊敬される理由でもあり
兵士がついていく理由なのだから
もし、悪竜のように自分の欲に従い、民のことを思わぬ方だったの
なら

この国はもともとできていなかっただろう

「だから折角、ない脳ミソを使って人質作戦を思いついたってのに
なア・・・」

自分で言っていて悲しくはないだろうか・・・？
そんな疑問はおいといて今は目の前の戦闘に集中しよう
絶対に目の前の敵を殺し、この国に害のなす存在を消し去ろう
そのためには
本気で行かなければ

『絶対に殺す！！』

次の瞬間には白い竜の姿へと変わり
歯をむき出して咆哮をあげる

・ ・ ・ ・ ・
ゴオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
・ ・ ・ ・ ・

その咆哮とともに尻尾が振るわれ敵を潰し殺そうとする
それをジールクがジャンプするように避ける

『ロイルと徹夜の戦闘でその反応は見ている・・・ッ！！』
次の瞬間には鋭い牙がジールクに迫る

「・・・チイツ！！！」
普通なら避けれない空中を捉えた。徹夜も空中では動けずに攻撃へ
と転じてきた

だからこれなら殺せるかと思った
だが、自分の牙は空を裂き
ジールクは横に吹っ飛んでいた
別に自分がやったわけじゃない、聞こえたのは爆発音
そして私が攻撃したところの横ではかすかに焦げ臭いにおいがある
どうやら自分の横で爆発させその衝撃で移動させたらしい

「竜が変わったことで本気になったか・・・
だが、それでもまだまだだ・・・ッ！！」
その言葉とともにジールクが指をパチンッ！！と弾く
それと同時にルミの体の周りで複数の爆発が起きる

『ぐあっ・・・！！！！』
それでもルミは動き追撃をするために動く
竜の鱗ならまだこの程度なら問題はない

「竜はタフだから困るッ!!」
その声とともにさっきの爆発の
数倍の量の爆発が私の体を覆う

『うつ…ああ…』
思わず動きが止まってしまふ
竜の姿になって増しになっているはずの体力なのに
苦しくて息が荒くなってしまふ

「竜が圧倒的な力を持っていたのは純粹な血の時代だ
確かに今でも十分な力を誇っているが、それだけじゃ俺は倒せない」

『あああああああああああああああああああああああああ
ああああ!!』
その声とともに『竜の息吹』ドラゴンブレスを放つ

「だから、倒せないと言っているだろ」
ジールクがこちらにかざした手から紫色の炎が
すごい勢いで噴出した
それはこちらが放った炎よりも火力が数段上で
炎が紫の炎に焼かれていく
そして私の体を紫の炎が覆い、私の体を焼く

『ぐうあああああああああああああああああああッッ!
!!』
紫色の炎が鎮火し
やっとの事で激痛がなくなっていく
でも、体がぐったりとして立っていることさえも苦に感じる

「だから逃げろといったのに・・・、人の話を聞かないから痛い目にあうんだ」

いつの間にか目の前には徹夜がいて

紫色の炎をまとった拳を片手で受け止めている

「おい、コラ、魔族・・・殺してやるよ」

その声は今までふざけていて楽しかったときとは違い
完全に怒りのこもった声だった

36話 白竜の姫と魔族と人間（後書き）

とりあえずめちゃくちや投稿スピードを上げています
暇な日が続く俺にとって唯一の暇つぶしです

今回ではルミとジールク・ライの戦闘です
書いてる途中にず〜っと思っていたのですが
ジールクって名前・・・言いづらいです
ちなみにそれは50回中50回は思いました

なんかこの頃

主人公のかっこよさだけを追求してしまっています

なんかな〜・・・

まあ、いいか

チート主人公はかっこよくてなんぼですよ！

自分の小説の主人公はかっこいいのはわかりませんが・・・

あなたの好きなキャラ、オススメの小説を教えてください
ということ

気が向いたら気軽にメッセージを送ってほしいです！

たくさんのおススメ小説を教えてくださいました。

ありがとうございます、まだまだ募集しています

宜しくお願いします

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

37話 白竜の姫と死炎と黒の破壊者（前書き）

前回のあらすじ

ルミとジールク・ライが戦い

ぶつかり

そしてジールク・ライが圧倒的な力でルミを倒す

そして、とどめの一撃を加えようとしたとき・・・

徹夜がそれを防いでいた

37話 白竜の姫と死炎と黒の破壊者

「いつの間に・・・ッ!」

ジールクが驚いて距離をとるように後ろに跳ぶ

「今来たばかりだよ」

俺は普通に答えてルミを抱えて部屋の隅まで運ぶようにする

ルミは傷だらけで、いつもは元気なのに対して、今はぐったりとしていて

とても頼りない姿だ

「テツヤ・・・ごめん」

「謝る理由がわかんねえよ。あとは黙ってそこで見てる

それに謝ったとしてもあとで説教は決定事項だ」

俺はルミを隅のほうに寝かせるようにしておき

ジールクのほうに向き直る

「心配するな。完全に無力な戦えない者を殺すつもりはない」

ジールクがこちらを見て言ってくる

「どっちにしてもお前はルミを傷つけてるからな、俺がお前を殺すことは変わらない」

「レーゲンにおいての話は聞かせてもらったよ。

たしか・・・えつと、『黒の破壊者』さん？」

・・・私欲でも殺すことに決定しました

恥ずかしい名前読んでんじゃねえよ・・・

「『魔界六柱』がNo.5。『死炎』のジールク・ライが
『黒の破壊者』さんを倒させていただこう」

「俺は徹夜だ。さっきも言った通りお前を殺す、ただそれだけだ」
そして戦闘が始まる

「オラアツ!!!」

そんな声とともに回し蹴りをくりだす
それをジールクはバックステップするようにしてよける
そのあと何回もパンチを繰り返すがうまく避けられてしまう

「スペックが異常だが、経験は少ないな、人間と戦う事に慣れた俺
を相手にするのと

魔物と戦う事に慣れた冒険者を相手にするのは少しばかり違うぞ」
確かにそうかも知れない
同じような実力で、さっきの人間相手専門と魔物相手専門が戦ったら
魔物相手専門が負けるかもしれない
だけど、いまは
そんなことは・・・

「そんな事はどうでもいい、俺はお前を殺す、それだけだ!!!」

「怒ってるね・・・」

二つの剣を鞘から抜き、何回も振るう
相手も剣で防御をするが
相手は一本、こっちは二本、手数が違う

「・・・チツ!!!!!!」

ジールクが手をこっちにかざす

嫌な予感がした

だから、追撃をやめて横に飛ぶようにしてこの場を離れる
すると、後ろで爆音が聞こえ

振り返ってみると今まで立っていた所が爆発している

「ファイアーボール火の球」！！！！」

俺の手の上に火の球を造り

それを投げつける

「俺の炎より熱い炎なんか無いさッ！！！！」

そいつが手をかざすと

火の球が紫の炎によって焼かれる

「炎を焼く炎つてどんだけだよ……」

むかつくなコンチクショー！！！！

黙って殺されればいいものをッ！！！！

「せえいつ！！」

床に思いつきり拳をぶるけて床を割る

割れた床では相当なのでかさの破片があり

「おおオオオオらああアアアアアアアアア！！！！」

それを思いつきり投げつける

「ッ！？馬鹿力がッ！！！！」

その大きな破片も爆発により木つ端微塵に碎かれる

「殺されるッ！！！！」

その壊れた破片の後ろの死角から

爆発で碎けると同時に飛び出す

そしてジールクに目掛けて剣を振るう

「断る！！！！」

そんな言葉と同時によこに飛んで

俺の攻撃から逃れた

チイツ・・・！！！！めんどくせえッ！！

さすがに地下だから本気は無理だ。

だから3割程度に抑えよう

「『ヘルフレイム地獄の炎』！！」

俺の指の先からライター程度の大きさの炎が噴出しそれがジールク目掛けて飛んでいく

「強力な火の魔法かつ！！『デスフレイム死する炎』！！！！」

紫色の炎の小さな球が三つでき

それが回転しながらこちらに向かって飛んでくる

そして俺の魔法とジールク・ライの魔法がぶつかる

次の瞬間には

聴覚が飛びそうなほどの轟音が響き

ー？先でさえ見えなそうな煙幕が舞い上がってる

「『エアブロック空気物体』」

俺の目の前に空気で壁を作る

すると同時にその壁が衝撃をうけた

たくさん紫色の炎の球が飛んできている

「まさかさっきの魔法が打ち消されるとは・・・」

いくらす割といっても結構な威力だったのになあ・・・

火系の魔法じゃだめなのかな・・・

その間にも火の球はとんできている
空気の壁の魔法を解いて

「ウインドスライサー
風の刃」

複数の風の刃がとび火の球を切り裂き
火の球が爆発し、その爆風に乱され消える風の刃
その間に正面に向かってダッシュし距離をつめる
さして完全に煙幕が消え、ジールク・ライがいる
その両手は紫色の炎をまとっている

次の瞬間には

ゴキイイイイイイイイイイッ！！！！という音が響く
俺の拳とジールクの拳がぶつかり合う

「あつつ・・・！！！」

あわてて後ろに飛んで距離をとる
まあ、相手の拳は炎をまとっているから当たり前なんだが
とにかく熱かった

よし、じゃあ俺も真似しよう
ポケットに手をつ突っ込む、その突っ込んでいる間に闇で手袋のように
手を包む、そして手を出して見てみればかっこいい手袋のようなも
のがある

かっこいいッ！！！！

・・・まあ、それはおいておこう

そして、両者ともに動く

それからはほとんど元の世界と同じような殴り合いだった

殴り

「いてえッ！！」ちなみにこれはジールク・ライの声

殴られ

「あつうツ!!」ちなみにこれは俺の声

そして

「熱い(痛い)んだよ、この野郎がアアアア!!!!」

二人の拳がぶつかり合い

両者とも5?程度吹っ飛ばされる

「絶対にお前を倒す!!!!」

二人して相手をビシッ!!指差して大声で叫んでいた

37話 白竜の姫と死炎と黒の破壊者（後書き）

ふう・・・

戦闘描写はやっぱり難しい

そして一話を必ず2000文字は行かせようとしている俺にとってとても難しい

戦闘描写はどうにも文字数が少なくなってしまうので

ジールク・ライとの戦闘を二話続けて行う、と決めたときは

正直なところ『大丈夫なのかな、これ』と思いました

あと最後までシリアス行こうとしたのに

ちよつとギャグが入ってしまいました

失敗です

次の話も

ギャグも多少は入るでしょうが、ほとんどはシリアスです
頑張って書こうと思います

では、話がそれますが

新聞をこの頃書いていなかったな、という話です

美月（現勇者様）が今どうなってるのか、

などのことを書いてないな、と思いました

ちなみに ×新聞はこの世界で一番大きな新聞社ということですね

いくつもの国境を越え

何万人という人たちに情報を与えるという

結構すごい会社です

その新聞は魔界でも出版されてるかも（笑）

そしてその新聞で思い出したこと

いつのかは忘れましたがサラスムの王妃の事を

黙殺王妃と言ってるときがありましたね、華麗なる不敬罪です

でも、なぜか罰せられない記者達、

自分の小説は地位というものがまったくないことがよくわかります

そしてこの頃・・・というか、この小説サイトに登録して

小説を投稿し始めた頃からの悩みです

正直なところ頭の悪い自分にとつて

策を巡らす、などの頭脳戦が無理です。なので、なんでもかんでも
力でねじ伏せる、というチート主人公を作らせていただきました
頭脳戦にも正直あこがれています

一生無理でしょうね

まあ、

そんな自分の悩みは右から左にスルーしてくれて結構です

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しい

これはまだまだ続きます、気が向いたら

気軽にメッセか感想で教えてください

ちなみに、好きなキャラを教えてくださいるのはほんのわずかですが、
結果は

ラウの爆走です

徹夜くううううん!!!!!!美月ちゃんああああん!!!!!!

あと、その他大勢!!!

・・・どま

では

誤字・脱字があればごマジで報告宜しく願います

38話 炎と氷と封印(前書き)

前回のあらすじ

ジールク・ライと

戦闘中

38話 炎と氷と封印

魔法が飛び、拳を放ち、
そんな戦闘が続く

「ラアアアツ！！！！」
また拳がぶつかり吹っ飛ばされる

「『魔炎球』！！！！」

紫色の火の球がこちらにむかってくる
魔法の名前が違っけど
ファイアーボールと同じようなものだった

「『インパクト衝撃』！！！！」

それに俺が放つ衝撃がぶち当たり
火を四方にぶちまける

「……やっぱり素手のほうがやりやすいな」
剣を使うよりも素手のほうが数段器用な戦い方ができる
俺は元の世界では素手で喧嘩してたもんだから
(主にファンクラブ一同)
素手が一番なのだ

「『ファイアーボール火の球』x5」

火の球を五つ造り俺の周りで円を描くように飛んでいる

「火の魔法で俺に勝てると思うなよ」
その言葉をあらわすかのように
両手にまとっている紫色の炎の勢いが強くなる

「燃えるッ!!」

その言葉を言うと同時に5個の火の球が飛んでいく

「うらああああ!!」

手の炎で俺が放った火の球を砕きながら急接近する

そして俺に向けて拳を放つ

それを横に避けて

顔の横面に肘を食らわす

「ぐうあ!!」

ジールクは横に行く勢いを利用して

こちらに蹴りをかましてくる

完全に反応できずに横腹にくらう

「・・・ツ!!!!」

いてえ・・・ツ!!!!

とりあえず両者とも距離をとるために下がる

「ここまで苦戦するとは思わなかった・・・」

おもわずつぶやいてしまう俺

ほとんど予想外だ

「簡単に負けるようなら『魔界六柱』には入れねえよ

トップが簡単に死んだとか笑い話にもならねえ。そんな事になったら

死んでも許される事じゃねえよ」

「いろいろと大変な事で・・・」

「まあ、俺は死なないから別にいいけどな」
ああ

痛いし、疲れるし、めんどくさいし
早くこいつを殺して
終わりにしたいもんだ

「お前、闇が使えるんだってな。リーシが言ってたぞ」

「ッ!？」

「本気出してくれて結構だぜ。はっきりいって俺相手に出し惜しみ
すると

次で死ぬぞ」

ああ、わかったよ

やってやりますよ!

「・・・『闇』よ」

足元から闇が広がる

そしていくつもの手数となって襲い掛かる

「うお!!本気で使ってきやがった!!」

お前が言ったんだろツ!!

ジールクは後ろに飛びながら手を数回振る

そのたびにいくつもの爆発がおきて

闇を砕いていく

だが、それだけじゃ止まらない

そしてジールクの胴体を切断した

「だが、甘い」

後ろからジールクの声が聞こえた
切断したと思つたのにッ！！
確認しないで横に飛ぶ

「逃げても焼く」

その声とともに炎がこちらに迫ってくる

「チイツ・・・！」

闇を使って防御する

その間にまだ後ろに下がり距離をとる

さっき切断されたジールクのほうを確認してみると
姿がぼやけて消えていく

奴は炎を使うから

「蜃気楼かッ！！一部分だけ温度を上げることによって光を屈折さ
せて蜃気楼を作つたのか」

めんどくさい技を使いやがッ！！！！

またこの技をやられたらめんどくさいな

対抗策を実行しよう

「・・・今のも防御するか。お前のは魔族の闇以上に厄介なものだ
な」

・・・相手が何を言ってるかはもう聞きません

さっきの蜃気楼への対策も

もう完璧だ

とりあえずは

「これで終らすッ！！！！」

一気にダッシュして近づく

「フン……。次は避けられるかな」

そして急接近して

顔を狙ってパンチを繰り出す

膂気楼だったようで何の手ごたえもなく貫く

そしていきなり後ろにいきなり姿が見えた

それに反応して後ろを振り返る

これは、違うッ!!

その振り返ったときの勢いを利用して

なにもない俺の上に思いつき蹴りをぶちかますと

感触があつた

「なあ……。ッ!!!!」

ジールクの姿がそこにあらわれる

俺の蹴りはおもいつきり顔にぶち当たっている

そしてジールクは吹っ飛ばされる

「お前は光を屈折していても、そこには実際には存在しないということだ

だったら目ではなく触った感触で調べればいい

前にリーシとかいうやつの中中で戦ったときと同じだ

闇を見えない程度に小さくしたものをを広範囲にまくことで探し出しただけだ」

俺がなんとなく説明したけど

どうやらもう聞いてないようだ

気絶しているとおもう

「ふう、ルミを回収して上に戻るか」

俺がルミのほうに行こうとすると

イリルさん程度の歳ぐらいの男の子だ

(どうなってるんだ・・・ッ!?)

疑問に思ってるのは別に男の子がいるからではない
間違っつてここに来たとか簡単に説明できるだろう
ただ

なんでそこにあつたはずの封印が消えていて
竜がいたところには竜はいなくて男の子がいるんだ
という疑問だ

「お初にお目にかかります。悪竜殿」

ジールクが倒れながら大きな声をはりあげている
悪竜・・・?

俺がこの会話に追いつけていけない間に進む

「おぬしは誰だ？」

「『魔界六柱』がN O , 5であります」

「N O , 5・・・サイト・リズメリルアという女性ではなかったか
？」

「それはもう何百年も前の話であります。世代交代はもう何回もし
ております」

「そうか、封印されていた、ということか」

「そうです、あと魔王様が魔界に招待なさりたい、との話でありま
す」

「……ふん、わかった後で行こう。その前にやることがある」
そういつて男の子がニヤリとすると

「この国を滅ぼそうと思う」
あ？今何言つて……

「この二人は魔族の仲間ではないのだな……？」

「敵であります」

「では、どちらを先に殺そうか」

そんな声が聞こえて

なにかを考えるよりも先に俺は動き
高速で剣を鞘から抜き、切りかかる

「こやつから先か」

そんな声が聞こえると同時に

体にもものすごい衝撃が来て吹っ飛ばされた
壁にぶつかり、意識が遠くなる

「ふむ、次はそこの白竜の女か」

そして悪竜がルミに向けて手をかざす

「……む？これはこれは姉上様お久しぶりでございますな」
後ろを振り向いた先には
イリルがいた

「やはり時がたって、私の弟は愚かな存在ですか」

38話 炎と氷と封印（後書き）

今回では本当に苦戦しました

戦闘描写のはとても難しいです

そして

文字数をつなぐのもむずいです

困り者です

話が185度変わり

もう一個小説を投稿しました。

その小説は基本的にサブです。この小説がメインになり

こちらが詰まったらあちらにという感じで行きます

休みなのでどちらもできるだけ投稿していきますが、高校に入学し

たらこちらをメインに投稿していきます

では、気が向いたら読んでくださいな

ほんわかゆったり小説をめざして書いてますので

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

39話 姉と弟のケンカに巻き込まれる俺（前書き）

前回のあらすじ

ジールクにうちかち

悪竜に吹っ飛ばされた

39話 姉と弟のケンカに巻き込まれる俺

二人の古きからの竜が向かい合う

その二人の威圧で近くの生物は死んでしまいそうなほどだ
そこには魔族がいて

「おい、メイト」

「何でしょうか。ジールク様」

「やはり起きてたか。いつからだ？」

「二人で「お前を殺す！」って大声で叫んだときです

…「プフツ・・・シンクロしてるよ（笑）」って思っていました」

「お前あとで熱するから覚悟しとけ」

「それで、何の御用で？」

「わかってるだろう、俺は動けないが任務は完了だ。帰るぞ」

「悪竜はいいのですか？」

「勝手に来るだろう」

メイトと呼ばれた魔族が懐からなにかの紙切れを取り出す
その紙切れには魔法陣のようなものがかいてある

「では、」

そういつてその紙に火をつけると軽い光をあたりが包み

その光がなくなると二人の魔族は消えていた

「ふむ、魔族は帰りよったか。自由にしていいたいことじゃな」

「別に魔族がそう思ったからと言って、私がさせると思うのですか？」

「簡単にはいかないじゃろうな！！！」

そんな声とともに『竜の息吹』ドラゴンブレスを吐く

その威力はルミとかとは大違いだ

「私にそんなものは効きません」

息吹がイリルに触れるか触れないかで

イリルの小さな口の一点に集中して炎が吸い込まれていく

そして炎がなくなるまで吸い込む

「ふっ！！！」

その声とともに小さな炎の球が一気に50個近く

イリルの口から出てきて、悪竜のもとに向かう

だが、その火の球は悪竜の近くで盾のようなものにあたったかのようにして

はじかれていく

「防御も攻撃も衰えておらぬか……。まためんどくさくなりそうじゃな」

「私とあなたは互角ですもの、決着はなにか異常な存在イレギュラーが居なければつくことはないでしょう」

「だから、前は勇者を連れてきたということじゃろ?」

「ええ、まあそうですが」

「今回は連れてきてない、ということでおじゃるな?」

「いや、それはわかりませんね」

「昔から思っておったが、その意味深な笑みはやめて欲しいでおじやる」

「昔から思っていました、その麻呂言葉はやめてほしいです」

「……(ムツ)」

「死ねえええええでおじゃるう」

「あなたこそ死になさい!!」

ていうか「おじゃるう」が「死ねえええええ」という部分を腐食して

緊迫感がないんですよ!!」

二人の間ではいくつもの光が相手に向かっては飛び

何かにはじかれては消えていく

「意味がないですね(でおじゃる)」

「まあ、どうやら私の人を見る目は間違っていなかったようです」

「……どういづことでおじゃるか?」

「^{イレギュラー}異常な存在が居たと言う事ですよ」

そのあとの言葉に

悪竜は反応できなかった

いきなり横から顔に衝撃が着たかと思ったら吹っ飛ばされた

「これがお返しだ、こんチクシヨウが・・・」

そこには蹴ったと言わんばかりに足を空中で止めている徹夜が居た

うあゝ、いたあゝ・・・っ

少し気絶してたよ・・・

どんだけすごい衝撃食らったんだよコンチクシヨウ

体動かないんですけど・・・

こういうときは・・・えゝとあれだ

闇だ、闇

闇を体に巻きつけて、っと

闇を動かして指一本まで操作する事はできるかな？

お、できた、できた

考えたとおりに指を動かせる

カタツムリ（指で実践中）ハト（また実践中）

カエル（実践中）ドラゴン（実践中）

白馬の王子様（実践中）

・・・

ふむ、最後から一番目と二番目はさすがに無理があったけど
一応できるな

ん？あれ

イリルさんがいつの間にか来てて戦ってる

うあゝ、あの二人なにげなく撃ちまくってるけど

めちやくちゃ威力高いのばかり撃ってんじゃん
あの中には入れないな〜・・・
少し様子を見よう

それにしても一発食らったら体中が痛くなるってどんだけだよ
いじめですか？

うん〜、イリルさんがこっちを向いた・・・？

あれ魔法の嵐がやんだ・・・？

よし、今がチャンスです

GO！！

さっきの仕返し・・・じゃなくてルミの命を守るんだ〜
ということだと思いつきり

蹴りました〜

「これがお返しだ、こんチクショウが・・・」

おう、結局本音が出ちまったぜ

「これは面白い！わしの攻撃を受けて生きてるばかりか
立ってわしに攻撃を加えてくるかッ！！」

あれ？最初におきたときから思ってたけど

俺が吹っ飛ばされる前は麻呂言葉だったっけ？

「本来のしゃべり方はこれですよ、徹夜くん」

あ、そうなんだ

ん？心読まれたッ!？

「お主は体を鍛えてるか？」

「ん？ぜんぜん」

どうやら俺に質問されたようなので

返答しといた

そしたら悪竜はケラケラと笑い出して

「確かに、確かにこやつは勇者並スベックの性能を持っておるのう！！！！」

「んあ？いきなり何？」

「私の愚弟は前からこうです・・・」

「二代目勇者を思い出す、本当に殺やりたいのお！！！」
なにトチ狂ってんだ

「じゃあ、お望みどおりに」

一瞬の内に高速で動く

自分の体ではあまりここまでスピードを上げられないだろうが
今は闇で体の能力が全て上がってる状態と言っているだけで
簡単にこのスピードまで上げられる

「この動きを見る限り、勇者のちょっと上というところじゃろうか
のう！！」

そんな事をいいながらも俺の動きについてきながら
さまざまな攻撃がこちらに飛んでくる

それを避けていく

正直言っつらい

闇を使つてるといってもその分体にダメージがくる
戦うと言っても短時間の内だろう

俺の剣の刃と悪竜の手刀がぶつかり合う

剣の刃が相手なのに手刀で応戦とかどんだけ

「ふうッ！！」

その声とともに『ドラゴンブレス竜の息吹』が俺に向かって放たれる
やべえ・・・ッ！！！！

攻撃範囲が大きすぎてどこにいつてもくらうちまう・・・ッ！！！！
そう思った瞬間に

イリルさんが俺の前に割り込んできて息吹を吸い込み始める
食ったら力がわいてきたッ！！！！って感じかな？

・・・違うか（笑）

次の瞬間には返す刃で火の球が数十個飛ぶ

「では、行ってください」

え？なに、どういうこと？

なんで俺の手をつかむの？

え？ちよつと待って？

「あの弟は忘れてるでしょうが、二代目勇者のときも使った戦法で
す」

そんな事を言うと同時に

俺を思いつきり投げる

えええ！！ちよつと待ってよ！！！！

「ていうか、これって戦法っていうのかああああ！！！！？」

そんな事を大声で叫びながらも

おれは悪竜のところについていく

「ッ！？これは二代目勇者と姉上を相手にした時と同じパターンじ
やッ！！！！」

そんな事を言いながらも反応ができません

次の瞬間にはおれの二本の剣で切られる

悪竜

「・・・なんか、むなしのお・・・」
「どうやら力尽きたようだ」

「うう…竜化する事もできずに終わった・・・」

「こんな家族のケンカで竜化を使用しないでください」

「家族のケンカって・・・本気になればこの国を滅ぼせる人にそれは・・・」
「ん？ていうか」

「家族のケンカに俺を巻き込まないでッ！！」

「知ってますか？あなたが眠ってる間に私が探していた魔法を」

「む？それはなんじゃ？」

「精神に干渉する魔法です」

「ッ！！？それは、ちょっとやめて欲しいかな〜っておもっとなるん
じゃが」

「だめです・・・。やっと優等生になる日が来ましたよ、イルリヤ・
ドラゲイル」

「ちょッ！ーマジでやめてでおJAL)じゃる(」

「『夢を食らう悪魔』ドリーム・デビル」

「いやあああああああああああああああああ！ー！ー！」

・・・

・
・
・
・

ねえ、これさ？

ラスボスみたいな存在じゃなかったの？

39話 姉と弟のケンカに巻き込まれる俺（後書き）

すみませんでしたア!!!

ホントの予定では二話分を使い

悪竜さんには死んでもらおうと思っていたのですが

なんか書いて行くうちにへんな方向に進んでいき

最後にはこうなってしまいました

まあ、互角の力を持つイリルさんが居る時点で

二話分使おうとしている自体が失策なのですが

まあ、こんな展開でも許してください

PVが598000になり、ユニークが56000になっていました
五万と50万で言いたかったのですが

気づかないうちになっていてビックリしました

あれですね

異様にラウを可愛いと言ってくれる方が多いです

多分アレです。少数派に属する

キャラ固定がされているからでしょう。自分の小説の場合

キャラの固定があまりされていません

エミリイなどはおしゃべりなお元氣キャラとして出したのに

あまりしゃべれていませんでした

また出てくるときに希望を持ちたいですね

その分ラウは癒し系、主人公のことを心配してくれる

純粋な女の子・・・というキャラ付けにされております

そして、徹夜くんとは違い、運と頭が無駄にすごいチートキャラと

いっていいでしょう

人生ゲームで全勝するラウ

初めてやった将棋で徹夜くんに圧勝するラウ

なんてことでしょう、ある意味すごいです

まあ、シリアスなしのほとんどがギャグという戦闘シーンにはあまりあつてはならない感じになってしまいました

この小説はあくまでギャグ要素を入れまくろう、と思っている小説なので・・・、というか自分の各小説はほとんどギャグを入れようとしています

こんな感じになってしまった事は許してください

お願いします m (_) (_) m

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

40話 平和と将棋と人生ゲーム（前書き）

前回のあらすじ

予想外！

シリアスはギャグに！

上位の生命体の竜王女の弟は
あまりにもあっけなく負けた

それでいいのか、焼き芋（作者）！

40話 平和と将棋と人生ゲーム

・・・

全身が痛い

それが俺の感想だ、おわり

これだけじゃさすがに終われないと思う
ということでもまずはなんかラスボス級だったやつがギャグで排除さ
れてしまった
次の日を書こうじゃないか

「よし！人生ゲームをやるっ！」
まずこの一言で始まった

別にこれは俺が言ったわけではない
昨日まではぐったりしていたはずのルミがガッツポーズをしながら
声を出している
ちなみにまだ説教はしていない
全身が痛すぎて俺は昨日からベットで痛みにより眠る事もできずに
もがき苦しんでいる途中だ、治療魔法をしようかな、とおもったが
動くと激痛がくるので諦めた

「・・・なんでお前はそんなに元気なんだよ？」

「イリル様に治療魔法をかけてもらったから」

「・・・イリルさん？」

「今ですと、報酬一つ分を使いますが結構ですか？」
「なんなんですか、この営業スマイルは・・・」

「あと5秒後には報酬三つ分が変わってしまいますが、どうしま
すか・・・？」

「ああ、こいつ・・・
これを見越していやがったか」

「・・・お願いします」

「まいど」

「ちくしょうっ!!」

「じゃあ、はじめまあ・・・はい、完了」
「はええっ!!!!」

「これはちよつとひどすぎる・・・
報酬一つとこの簡単に終る速さの作業
とても損したとしか思えないのだが」

「ということで、人生ゲームはじめまあ」
「ルミが人生ゲームをひろげはじめる」

「その前に」
「俺がさえぎる」

「??？」

「説教タァ〜イム・・・」

「え？ちよつと待って・・・？私をどこに引きずっていくの？」

「・・・約束どおり、飴玉をあげよう」

「いちご」

「何でお前はそんなに強いんだ？」

そんな疑問を口にしながらも

撫でてみる

「〜」

うああ・・・飴玉なめてるし、喜んでるし
めっちゃかわえええ・・・癒されるう〜

「直感に従って駒を動かしてる」

ラウがそんなことを言ってきた

「・・・」

ちなみに俺の顔は 0 0 川 というものになった

ちよ、直感で・・・

ちよつとひどすぎないですか？

俺ね一応これでも

先の先の先まで読んで動いてるんだよ

将棋は昔から大好きだしね

先の先の先を読んてるのに

いつのまにか誘導されていって最後には滅せられる

俺の気分は誰かわかりますか？

フフ・・・

わかりませんよね、自分はいつもそんな感じですよ

美月にも負け続けてましたしね

それにファンクラブ一同とも将棋で戦った気がする

あ、『戦った』ですよ。将棋の駒って40個あってですね結構多い

んですよ

いくつかの小隊を潰してやりました。みんな倒れてるんだけど
おでこに駒が一つずつ刺さってるって言うシユールな場面ですね
とてもおもしろ・・・いや、なんでもない

とりあえず、それはおいて行こう

これ以上考えたらどんどんドツぼにはまっていく気がする

「よし！とりあえず人生ゲーム」

ルミがまた声を張り上げている

ちなみにここには俺、ラウ、ルミ、ロイルさん、マイアさん

ここにいないイルルは・・・えっと名前はたしか

イルリアという男の子（悪竜のことだよ）を

礼儀から基本の学のことなどを教えるために違う部屋にいるらしい
イルルさんも見た目は幼女なのにね（笑）

『今失礼な事考えませんでしたかアアアアアア！！！！？？？？』

お、おお・・・城がかすかに振動するほどの大声だ

しかも遠いのに心を読むとか

まあ、そんな感じで進み

「やったあ〜！！やつとBランクだ！」

ルミがこんな事をいいながらはしゃいでいる

これは当然なことだろう、こいつは今までお金を稼げるような職に
ついていなかったのだから・・・

「それで安心しちゃダメだぞ、ルミ・・・」

ニヤツと笑いながらそんな事を言ってみる

「・・・あわわわ」

ガタガタ（（００））ブルブル　と震えているルミ
今までふざけて意地悪しすぎたかな？

まあ、いいか（笑）

「さて、俺はつと・・・ッ！！！」

こ、これは・・・ッ！！！！

俺が止まったマスは

ラウと同じだ

同じマスに止まると最初に止まってた人が決闘するかどうかを決められる

「ん・・・」

ラウが迷ってる声を出している

ちなみにこの時点で俺は　ガタガタ（（００））ブルブル
こんな感じだ

「しない」

「ラウ！！お前はいい子だなッ！！！！」

いつもよりいっそう強く撫でてしまう俺

今の俺はSランクになれるかどうかのところで止まっています

もし、決闘をされたらラウには負けていただろう

だから相当嬉しかった

「」

ラウも嬉しそうだ

撫でられるのがそんなに好きなのだろうか？

ちなみに、俺は精神を治療魔法のように癒してくれるラウに集中し

ている

他のところでは

「よし、私もあの展開に持ち込まなきゃ！」

「ルミ様、あなたは徹夜くんの後ろでしかも離れすぎています。無理でしょう」

「・・・」

俺が気づいてそちらを見てみると

何故かルミはシュン…として落ち込んでいるようだった

40話 平和と将棋と人生ゲーム（後書き）

今回ののは

思いついたのはそのまま書いてみました

自分はパソコンが一日一時間と決められているので

（守ったときはあまりない）

事前に紙に書いてから

投稿するのに書いています

ただ今回の一話を入れなくて考えますと

あと二話ぐらいはノープランなのです

だからあとはロムとラウのことなどを書いてみようかなと思います
ロムはどういう風にラウの気を引くかッ!?

徹夜はその時どうするのかッ!!?

もし、それを邪魔したときは・・・ロリコンということですが

一応言っておきます、徹夜くんはロリコンではありません!

だから、ロムの努力しなさいでしょう

みなさん、この頃いつもより増して

だめな小説になっていきますが、どうか、見捨てないでください

好きなキャラ、あなたのオススメの小説を教えてください

はまだまだ続けております! 気が向いたら気軽に感想またはメッセージ送ってください

ラウの独走です!

ちなみに同時に投稿している『転生の先に』はやっつと

転生したところと言っていていいでしょう

そちらもお暇があり、気が向いて

「別に読んでやってもいいよ。まあ、どうせカス小説だろうけどな」と思いになったら、読んでください
ちなみに、「」の事を本当に思われたら
本気で泣くと思います

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

41話 平和と魔界と会議（前書き）

前回のあらすじ

へいわな日でした

別にめんどくさいからこうしたのはありません

41話 平和と魔界と会議

これは二日後の話

今日は覗き見をしている

当然隠れての事だ

覗き見をしているのは俺だけだ

覗き見といっても変態がやることと一緒にしないで欲しい

覗き見してる時点で変態のように見えるかもしれないが

この覗き見は当然のことである

なぜなら

「いや、あの・・・」

「?????」

目の前には

恥ずかしくてしゃべりだせないロムがいて

それに対して疑問の表情をしているラウがいる

さあ、どうなるのだろうか

気になるな

あの言葉を言えるのかな・・・?

さあ、どうなっちゃうのかな?気になる

「・・・一緒に遊ぼう」

「いいよ」

俺の予想していたもの比べるとレベルが下がったな

ん

さあ、どうなるかな?

この後は簡単だった
一緒に遊んでいて
分かれて帰っていた

ん

なんとも言えないなあ
頑張れ少年！

???

真っ黒な空間

大きなテーブル、会議室のようなところだ

そこには何人かの人間が座っている

11人分の席があり、今は9人程度の人間が座っていた

その人間は全員が肌が黒く魔族だということわかる

そこに扉が開き

魔族の男性が歩いてきて、リーシという女性が横についてくる

それを見ると9人が全員立ち上がる

「座ってくれててかまわない、堅苦しいのはキライだ」

入ってきたばかりの男性が口を開く

その言葉を聞くとリーシを含め、その他の9人も同時に座る

「では、今回の事についてだ、レーゲンとドラゲイルの事についてだ」

「魔王様、今回の失敗はなんと責任をとればいいのか・・・」
ある男性が立ち上がりながら口を開く

「ジールク、別に今回の失敗はお前のせいではない
あのアホな小僧が勝手に負けて、姉に精神干渉されたせいだ
力があっても脳ミソがガキだからあいつはだめなんだ」
扉から入ってきた男性、それはジールクが言ったとおり魔王
30歳程度の年齢に見えるが
その男は何年もの時を生き、今まで3人の勇者を打ち倒して生きて
いる存在

「そして、異常な存在も居たしな」
魔王が口を開く

「徹夜と言ったか……。どんな者だった？」

「正直、わかりません」

「わからないとは？」

「まだ、そいつは本気とは思えませんでした
生き残った奴の話の話を聞くと戦艦四隻を一人で潰した後に
私の相手をしていたようですし、それなりに体力は消耗してたと思
います

それに、闇を完全には本気で使っていませんでしたし
最低でも『魔界六柱』まかいろくぼしちゆうのNo.4ほどの力はあるかと」

「……闇か、人間が何故使えるのかも気になるな」
魔王はニヤニヤとしながら言っている
どうやら、楽しいようだ

「私はなぜリーシ・トルウマアとジールク・ライに処罰を与えない

のかが

疑問なのですが」

今まで黙っていた男が口を開いた

「失敗をすれば処罰を与える、それはこの世の中の決まりです。それなのに何故罰を与えないのですか？」

「それは、強いからだよ」

魔王は口を開き、続ける

「世の中は強者こそが絶対だ、私は強いからここに居る弱かったらここには居ない、だから強さこそが全てだ。私は今まで最低でも3人の強者に襲われた」
3人の強者とは今までの勇者の事だろう

「だが、それを返り討ちにし、今ここに立っている弱ければ初代勇者にも負けていただろう。だから強さの主義の軍を作った

それで終わりだ」

「ですが・・・ッ!!」

また男が口を開こうとするが

「黙りなさい」

リーシ・トルウマアが遮った

『魔界六柱』のトップの女性だ

「魔王様に逆らう事自体おこがましい行いだというのに・・・
まだ続けますか」

「お前は失敗したくせになにをいつているッ!!」

「では、魔隊筆頭ゴールド。私に決闘を申し込みなさい」

「なッ!？」

「あなただけでは物足りませんね、あなたの率いる魔隊もかかってきてくれて結構です

まあ……

それでも、『魔界六柱』まかいろくばし No.6にも叶わないでしょうが

それを承知の上なら申し込んでくれて結構です

魔王様は言いました、実力主義の軍隊だと……私を殺せばこの座につくことができますよ?

……殺せばですがね」

その言葉にゴールドと呼ばれた男は固まってしまい口を開かない

その顔には冷や汗がどっぴりと流れている

「申し込まないなら少しの間黙っててください」

「リーシ、お前は威圧しすぎだ、『魔界六柱』以外のやつらは顔色が悪いぞ」

「気をつけます、魔王様」

「それで、話を戻すが、その徹夜をどうするか、だ。当然せつかく俺の部下が頑張ってたつたつというのに邪魔されちゃあ、殺したいと思うのは普通の事だが……」

「では、私が出たいのですが」

一人の少女が手を上げている

「ん？ミルリアか……。では、任せよう。いつ出るつもりだ？」

「もう少したつてから出る事にします」

「ふむ、そうか……」

じゃあ、終わりにしよう。リーシの威圧のせいで

四人は顔色が悪いからな、それじゃあ、いい案なんて出ないだろう
そういつて魔王がたつと

六人が立ち、それに遅れて慌てて四人が立っていた

そして魔王が歩き出す

そしてそれぞれ各自で出て行く

その魔王の後に慌ててついていく少女が居た

それは、ミルリア

「お父様、私が絶対に倒してきますよ」

「ああ、任せた」

魔王はその一言だけで早々と去っていく

・ 「『魔界六柱』がNo.3『魔雷』のミルリアが魔王の娘として……
任務をまっとうします」

「……だから、もっと私を構ってください。娘として……」
それは誰にも聞こえていなかった

41話 平和と魔界と会議（後書き）

今回ではこんな感じにしました

裏の部分も書かなきゃな

ということを考えていたので書きました

魔王様登場です

とくに名前は考えておりません

ミルリアが出てきましたね

娘は何百年の間を空けて二人目をいうことだとおもいます

ロムは・・・どうなるのやら

ユニークが6万 PVが60万を超えました

驚きです

ありがとうございます

好きなキャラ、あなたのオススメの小説を教えてくださいのはまだ終わっておりません。お願いします

誤字・脱字があればマジで御報告お願いします

42話 別れは短く、追加の仲間は突然に（前書き）

前回のあらすじ

俺は

ロムとラウのやりとりを

< > - < >

・
・
・

ジ
と

見ていた

別に変態ではない、気になったただけだっ！気になったただけなんだッ

！！

そして徹夜の知らないところでは

徹夜を始末する、みたいな感じの会議があって

始末しにくる魔族は魔王の娘だった

それを知らない徹夜は

いつもどおりの笑顔でただ生活していただけだった

42話 別れは短く、追加の仲間は突然に

ふう、あの日から二日目

俺達は、国を出ることに決定した

サラスムのラルドさん達と合流しなくてはいけない

「というわけで、明日には出させていただきます」

「えっ!?!」

「そうですか。わざわざ私達のケンカに巻き込んでスミマセンでしたね」

「・・・まアろお」

・・・

ルミ、イリル、イルリヤの順の言葉なのだが
イルリヤの言葉はなんなんだ・・・?
ちよっとおかしいぞ?

「まだ治療中なので不安定なのです」

俺の表情から読み取ったのか答えてくれた

・・・なんか大変だね」

「いつちやうの?」

「うん、一応チームの人たちを待たせてるからね」

まあ、そんな感じだ

とりあえず世話になった人達に挨拶する事にした

「そうか、行ってしまふのかい、徹夜くん」

俺が来たところはロムの料理店だ

あまり知り合いはいないしね

俺そついうの苦手だからさあ

「ええ、まあ」

「悪いね、なんかお金くれてその分のお返しもできず」

「いえいえ、アレは俺の気まぐれですから」

そんな感じの会話をする俺

なんとなくロムのほづを見してみる事に

「ねえ、もう一度会える？」

「うん、・・・たぶん」

おお、なんか青春ですなあ

(^ ^、*) ホ力ホ力

むう、なんか良いねえ

そついうの

俺とは違い青春ですね

「行ってしまつのですか、元気でいてくださいね」
「マイアさんが言ってくれる」

「頑張ってください、よし、私が徹夜くんに納豆ドリアン」

「うつせえ、黙れ」

ロイルさんが

いつまでも納豆ドリアンのお話を
続けようとするのを遮る

いい加減にしつこいんだよこんちくしょ〜

「いや、だから私が納豆ドリアンを・・・」

・・・カッチ〜ン

「あは・・・、あははは、はははははははは・・・」

次の瞬間に

ロイルさんの悲鳴が城中に聞こえた事は秘密だ

「私もいくろう!!!」

ルミがそんな事を言った

俺にとつては「何言つてんの?」て感じだ

だって、一応お姫様ですよ〜

そうそう、簡単に出せるわけじゃないじゃないですか

「いやいや、そんな無理だから、お姫様を簡単に城から出すの
なんて

ありえないじゃ・・・」

なんか面倒な事になりそうだから

できるだけ良い理由をつけて断りましょ〜

「ん〜、別にいいじゃないですか？」

え？いまなんて・・・？

イリルさん今なんていいました・・・？

「国の外を見せるって言うのもいいと思うんですよ

外を見せる事で学び、最終的には白竜達をまとめる存在にならなくてはいけないのですから

何事も学ばせるのが一番なんですよ

まだルミは相手の実力、生き物の本性などを見抜く力についてはいいま
せんからね

それを学ぶのには丁度いいということですよ

そんな感じでニッコリしてるんだよ

まてよ・・・！

待ってくれよ・・・！

お前、いつも俺の心を読むようなことをしていたくせに
なんでこんなときばかり面倒を増やすんだよ！

「ということを決まり」

ルミがめちゃくちゃ嬉しそうに笑っていて

俺は苦笑しかできなかった

これから、どうなるんだろうか

今までは書かなかったがルミはすごい大食いだった

軽く、俺とラウとマイアさんとロイルのクソ納豆野郎が食べた量よ
りも

多く、軽く二倍の量を食べていた

うっ、これ本当にやばくね？

「ええええええ・・・」
そんな感じで決まってしまう
俺とラウ、そして一人加わってルミということ
で
国を出た

・・・

なんでこうなったの・・・？

4 2話 別れは短く、追加の仲間は突然に（後書き）

この話ではタイトルどおり短い分です
いつもは2000文字なのですが、1500文字程度になりました
ネタを見つけるのはとても大変です

今回で、やっとドラゲイル編が終わりました

ドラゲイルは18話（これをあわせれば19話）

レーゲンでは15話

サラスムでは6話程度でした

ドラゲイルが一番多くなりましたね

ちなみにロム 「好き」 ラウ

ラウ 「仲良しな友達」 ロム

ということになってしまいました。

くっ・・・話を進めるのにあせりすぎたか・・・ッ!!!

次はどうなるのか

ちよっとまだノープランですが大体のやりたいことはありますので

今の代めな小説を少しでもダメじゃないようにして

頑張っていこうと思います

頑張れ自分！明日の夕日が待ってない・・・けど、行こうじゃないか

あははははあははははははははははあはは・・・

すませんでした

なんか途中でハイな気分になってきてしまい・・・

本当に申し訳ないです

すみませんでした・・・m（）（）m

この頃思うのですが

自分の脳は大丈夫か・・・？と思うときがあります
いろいろと困るんですよ

あ、でも書きませんよ・・・？

思い出すだけで恥ずかしくなる自分なので書くわけがありません

頭脳戦が書いてみたい・・・

でも書けるほど頭が良くない

誰か助けて・・・なにかアイディアくださいな

・・・人に任せちゃダメですよ、すみませんでした

この小説は主人公の怒りなどのことは考えて書いていますが
あまりその他の気持ちを考える事ができていない小説でもあります。
それをかけるようにと「人の気持ち」を重視して書いてるつもりな
のが、もう一つの小説の「転生の先に」です。そつちで、できるだ
け勉強してこつちでも「人の気持ち」をかけるように精進したいと
思います

好きなキャラ、あなたのオススメの小説、を教えてください。はまだ
まだ

お願いしていきます、気が向いたら気軽に

メッセージまたは感想などでお送りください

宜しくお願いします

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

43話 寂しがり屋の白い魔女(前書き)

前回のあらすじ

やっとのことで旅出よう

そんな感じで出ようとすると

イリル様が「世界の事を学ばせたい」という

理由をつけて

ルミを俺に押し付けてきた

ひどいッ!!

43話 寂しがり屋の白い魔女

そして次の日

今日はラルドさん達と別れて12日目である

あと二日なのだ

俺が言った期間まではあと二日

もし延びる場合は連絡すると言っておいた

普通に行こうとすれば一日はおくれるかもしれない距離だ

どうしよ・・・

ということでもわからない

ということは連絡して謝るしかない

そして、昨日から泊まった村には

ギルド『空を飛ぶ鳥』^{スカイバード}のギルドのところがあつたりして

そこを使って連絡する事にした

ギルドでは前にギルドマスターが俺を逃がすために馬車を用意する

ときに使った

電話のようなものがある

それは風の魔法の『伝達』^{イテメンツ}というものを使う

魔力の糸が繋がりそのおかげで電話できると言うわけだ

ということ、その電話を借りたわけだ

「・・・ということ、遅れそうになつてしまつんですが」

『あゝ、竜の国の話はこつち着てから話を聞くとして、大変だったね。徹夜くん』

「ええ、まあ、大変でした」

『で、他には？』

「一人増えました」

『一人とは・・・？』

「えっと、白竜族のお姫様」

『はアツ！？』

「いやあ、ねえ・・・、最後まで竜の国の女王様に良いように使われてる性分でアリマス」

『ん〜、別にチームに年齢制限や人数制限は無いから、別にいいけどさ
まさかお姫様を引き入れる、とは・・・』

「いやいや、俺は正当な理由をつけて断ろうとしたんですよ？そしたらイリルさんが

「世の中を学ばせるにはいい機会です」みたいな事を言っつてさ、無理やり」

『・・・まあ、徹夜くん。仕方が無いだろう』

「『徹夜くん』ってなんですか？俺は常識人ですよ」

『常識人か、闇を使える時点でも異常だということによく言えるな』

「・・・」

『まあ、いいじゃないか、楽しそう。頑張ってくれ』

「・・・頑張ります」
その言葉を最後にプツンツ・・・と音をたてて回線が切れたん、もうやだあ
ていうか俺たちがいる村って寒いんだよね・・・
この村あたりに入るといきなり寒くなつて
慌ててルミとラウに厚手の服を買ってあげたし

「テツヤ、どうだったの？」

「ん？頑張れつてさ・・・」

ルミが聞いてきたので簡単に答える
ちなみにルミも何故かギルドに入る、というチャレンジ精神を見せてくれる

なぜかラウはライバル精神を燃やして入ろうとするが
さすがに戦闘能力無いから無理、と諦めてもらった

ラウは今も少しガツカリしてる様子だ

こういうときにはドラゲイル王都で買ったアレの出番である

「はい、飴玉」

「・・・！。・・・ぶどう味、美味しい」

「えッ！？武道味！？そんな味あるの！？」

「ひらがなで考えろ、武道じゃなくてフルーツのぶどうだ」
ルミが変な聞き間違いをしているので、俺が訂正をする
武道味ってなんだよ・・・

今も混乱してるようなのでぶどう味をルミの口の中に投げ込む
すると、やっと落ちて着いたようで

「うみや〜・・・」

と、ほっぺをとろんとさせている
なんか、いろいろと大変だ

ラウはめちゃくちゃ落ち着いてるから迷惑をかけてこないが
ルミは王都から出たのも初めてのようで（空腹で意識を失ってない
状態で）

めちゃくちゃはしゃいでいる

金も十分だし、わざわざギルドでなにか依頼を受ける必要も無いので
村からサラスラム王都のほうへ向かって山を越えることにした
するとある老人がいて、俺達が村を出ようとすると

「待ちなされ」

「はい？」

「そっちの山を超えるよりも、迂回して山を越えない道を行ったほ
うがいいですぞ」

「急いでのので、それは無理かと・・・」

いつもならその老人の話の聞くと思うけど
待たせてるのはあのラルドさん、ニッコリ笑顔でなにをされるかわ
かったもんじゃない

・・・ということ、急がなければッ！！！！

「そうですか、無理に引き止めるつもりはありません。ただ・・・」

「ただ？」

「白い魔女には気をつけてくだされ」

「白い魔女・・・？」

「この村には冬しかやってきません、それはその存在が邪魔してるからなのですよ」

そのせいでこの土地は600年前は豊かだったのが年中冬なせいでなにもなくなってしまいました・・・」

ん〜、聞く限りとても危ない存在だな

でも大丈夫じゃないかな？俺の幸運さは世界一品だからな

・・・あんなに巻き込まれまくる俺が幸運なわけないか

「会ったら、逃げますよ」

そういつて歩き出す俺

その後二人は白い魔女について

キャッキヤと話しながらついてくる。全然怖くなさそうだ

そして山道を歩いていく

登れば登るほど寒くなっていく

「やっぱり私は白い体の魔物かなにかだと思っわけ」

ルミがそんな事を言い出した

「え〜、私は妖精みたいなのだと思う」

ラウの考えはともロマンチックな感じでいいと思う

それに対して俺は

「めちやくちやデカイ鼻で『フェッフエッフエ』とか笑いながらデカイ鍋をかき回している老人だと思っ」

「「え〜」」

なんだいその反応は
魔女と言ったらあの姿が定番だろう！チョコとかクッキーとかで作
った

家に住んでてさー！！

「黒い服の少年と竜人のお譲ちゃんの場合は失礼だけど、
獣人のお嬢さんの考えはロマンチックでそれなりにいいわね
獣人のお嬢さんが一番のアイディアね」

「ちくしょうッ！！！！」

悔しがる俺とルミ

「やった」

嬉しがるラウ

ふふ、ラウには賞品として飴玉をあげちゃいます

「」

嬉しそうに笑うラウ・・・かわええ・・・
ん？てかさ

「さっきの声だれですか・・・？」

「え？私だよ」

横を見てみると雪の積もった木の横に座っている少女
白い服を着ていて17〜18歳ぐらいの少女だ

「だから誰？」

「君達がさっき話していた人だよ。『白い魔女』って呼ばれてるよ
白い魔女が

キタ

(〇 〇)

!!!

こゝこれはどうしよう・・・

俺が迷つてると

「ここは通せませんよ、もし通りたなら私に一発でも当てられ
たら通してあげます」

え、それだけでいいの？

「大丈夫ですよ、私には自信がありますから!!」
えっへん・・・と胸を張って威張ってる少女
よし、これはやるうじゃないか

「よおし、やってやるよ

その自信を木っ端微塵に砕いてやんよッ!!」
俺がビシッと指を指しながら答えてみる

「え、私がやりたい!!」
ルミがこっちに言ってくる

「ダメ、あんた魔族にやられたばっかでしょうが」
ええ・・・とブーイングをしてくるが
関係ない

なんか、変な感じがするからここは俺に任せもらおう

「じゃあ、はじめちゃっていいね？」

俺がルミとラウに後ろに下がるように言うと
ラウは普通に、ルミはしぶしぶ下がっていく

「オッケーです」

「じゃあ、行くよ」

その言葉とともにバツッと駆け出してパンチを放ってくる顔に向けて放ってきたので顔を横にずらして避ける

「うふふ」

そんな笑い声とともに後ろに下がっていく白い魔女
むむ？なんで笑ってるんだ

白い魔女のパンチを繰り出したほうの手

その手はなにも持っていないはずだったのに今は透明な棒を持っていて

その棒からは透明な鎖が俺の顔の横を通って後ろのほうまで延びていた

そしてそれを思いつきり白い魔女がひっばる

なんか嫌な予感がした

だからしゃがむようにして避けると俺の首があったところを透明な鎌が通っていく

完全に首をちよん切るコースだ

「・・・チエツ！！これにひっかからないなんて、初めてだよ」

そんな声を聞いたけど

今は気にしていられそうになかった

他にあることを気にしていたからだ

「その武器は今どこから取り出した・・・？」

武器を持っていなかったはずなのに今は彼女の手の中には

武器がある。それが何故だかわからなかった

「『白い魔女』ていうのはね、別に私が白い格好をしてるから

呼ばれるようになったんじゃないんだよ？」

「じゃあ、何で呼ばれたんだ？」

「私が「氷」の属性の魔法を使うからさ」

その言葉を聞くと同時に彼女の周りでは大きな氷の結晶がいくつもできる

「氷の属性？そんな属性無いはずだが・・・」
前にも載っていただろうが

この世の中の属性は

火、水、風、土、雷、光、闇、創造、時空

というもので「氷」なんてものはありはしない

「世界には必ずしも一つや二つは『異常』があるというわけさ

あえて言えば勇者も『異常』な存在だ。だけど、もう世界のみんなは勇者が『異常』だということは忘れている、人々に認めてもらっている証だ

それが当然だということ、認めてもらえないものは『異常』な存在」
ニコニコしながら話を続ける魔女

「私は『認めてもらえない』の方に入ってるけどね

昔は化け物として扱われたときもあるよ。だからこの山に住んで人と会わないようにしてるのさ」

多分この人は・・・

「あんだ、寂しいんだろ」

「・・・あっはっは」

少女は笑う

どこか寂しいように、悲しいように

笑っている

「確かに寂しいよ、私の『氷』は時さえも止めてしまう私は700年生きてるんだ、

そのうち600年はここで一人で暮らしている、

そんなの寂しくないわけがないよ

化け物と呼ばれた、人と接しようとするのをやめた」

そんな生活を600年も続けてきて

寂しいくない訳が無いだろう

「でも、だからってどうする事ができる？

私の異常な物はどうやっても取り除けない

どうやってその寂しさを取り除く事ができる？

どうやって私の居場所を見つければいいと思う？君はどうする、少年？」

「俺は・・・」

うまくいえそうに無いが言葉を見つけよう

「俺は自分の居場所を見つけれんじゃなくて作ると思う」

「は…？」

「異常な存在を見つけたたり、自分の異常さも受け止めてくれるような仲間を作ったり

そんな努力をすと思う。

あんた700年生きていたっていったけど600年しかここに住んでないよな？

なんでだ？」

「え？最初は私を受け入れてくれた居場所があったからかな」

「どんな居場所だ・・・？」

「二代目勇者御一行とか色々かな・・・？」

「えっ！？ここでも二代目勇者御一行ですか！？」

と、とりあえず話を進めよう

「だったらそのときと同じような仲間を見つければいい別にこの世界の人たち全員が異常を嫌ってるていうわけじゃないだろ」

「そんな大変な事したくないし」

こいつ、めんどくさがりやかッ！！

「じゃあ、一緒に行こう」

「は？」

「俺が居場所になればいいんだろ？」

「えええ・・・？いいのかな？」

「別に問題ないだろ・・・」

お手をどうぞ、寂しがり屋のお嬢さん」

「・・・ん」

ニッコリと笑って手を差し伸べると

そこに白い肌の冷たい手が乗せられた

ラルドさん・・・

早速ですがまた一人増えましたよ

勝手に仲間増やしてごめんなさい

マジデごめんなさい、だから許して

「でも、さっきの「俺が居場所になればいいんだろ？」って告白みたいだね」 ラウ

「はぁッ!? 何言ってるんだラウッ!?」

「わぁ、私告白されたの始めて、私、徹夜の事を好きになっちゃう!」 白い魔女

「うおわッ!! 抱きついてんなッ!!」

「ちょッ!! テツヤに抱きつくくなッ!!」 ルミ

「お前も抱きついてくんなッ!!」

そうか、さっき言った俺の言葉はそんなに恥ずかしい事だったのか・

・

不覚・・・

「また賑やかになって楽しくなった」

ラウが楽しそうにつぶやいてる言葉は俺を含めて誰にも聞こえませんでした

そしてラウは抱きついてる二人に混ざるべくスキップしながら徹夜

に向けて
ロケットずつきをしたのだった

43話 寂しがり屋の白い魔女（後書き）

今回では新しいキャラが追加されました

さっそく「人の気持ち」ですね

なんか「寂しさ」が出てきました

いざ、徹夜くんの出番だ、となり考えてみると

恥ずかしい言葉しか思いつきませんでした

ふっ、なんかね、恥ずかしいね。リアトモがもしこれを見たら

いじめ（みたいなの？）がさらに悪質になるの決定かな・・・

だって、仕方が無いじゃないですか

徹夜くんや美月以外に『異常』な存在作りたかったんだもの

そして最後のラウの言葉

なんか言葉は子供っぽいんだけど

最後につぶやいてるところが大人っぽい！！

基本的に賑やかになったのを楽しんでいるラウなのですが

なんか影の悪役みたいな知略に優れた人みたいに見えてしまいます

おかしいなあ・・・

今回は白い魔女さん

次の話で名前が出てきます。最初るときに名前を出そうかと思ったんですが、よいタイミングが見つからず出す事ができませんでした

ハッ！！（〇〇、）

ま、また新キャラが女性になってしまった！！

いつかは仲間として男性のキャラを作ってやるうと思います

うふふ、騎士見習いの男の子とか作りたいです

そして新キャラを増やす面で悩む事が一つ
俺はこの人数を裁く事はできるのかッ！？
少数の話になってしまい、エミリイのように
話すことができなくなってしまわないだろうか・・・
一応頑張っつていこうと思います

好きなキャラ、オススメの小説を教えてください
というのは終っておりません

気が向いたらお気軽にメッセまたは感想で教えてください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

44話 いきなりの依頼は俺の嫌な方向に（前書き）

前回のあらすじ

600年前から冬のままの地域があり

その山には原因の白い魔女がいた

だが、

白い魔女は寂しがり屋の少女で・・・

一緒に行動をする事になった

44話 いきなりの依頼は俺の嫌な方向に

ん、これはどういうこと？

「いい加減にテツヤから離れるオー!!!」
そんな大声を出しながら『竜の息吹』ドラゴンブレスを放つルミ。

「ふふ、その位の火如きで私を焼こうとするなんて600年は早いよ」
その言葉とともにルミの放っていた息吹が氷でおおわれて動かなくなる

赤色の炎が透明で日の光を反射している氷に覆われている様子はとても綺麗だと思う。

それにしても、竜の火をも凍らす氷とはすごいな。

「いい加減に仲良くしろ！」

その言葉とともに放つ俺のチョップが二撃

「いたあっ」

「だって、私が徹夜にくっついてくるのを邪魔するんだもん
また、くっついてくる
とりあえず離す

「正直、くっついてこなければいい話だと思う」
俺がそういつてるのにまたくっついてくる

「そつだよ！くっつかなければいいんだよ！だから、くっつくなア
！！！」

ルミが反論していて俺から白い魔女を離そうとしている

「というか、お前の名前は何だ？」

「え？…え〜っと、なんだっけかな・・・？」

「自分の名前を忘れたのか？」

「600年も一人でいると名前は関係ないからね〜、う〜ん・・・」
この会話中にも歩いていてるのだが
白い（魔女）のはず〜っと唸っていて考えている

「無理、思い出せない」

「・・・おいおい」

「じゃあ、名前をつけてもらおう 大会を開催いたします」
いきなり大会ときましたか

「ルールは簡単で私の名前を決めてくれ 私が良い名前を選ぶよ」
その言葉を聞くと同時に
ラウトルミが考え始める。それを見た白いのはウキウキしながら待
っている

「アイスとかかな・・・？」

ルミがそんな事をいう、多分、氷だからだろう。

「スノウが良いと思う！」

ラウトルミがスノウを提示、たしかに名前としても発音がいいし
氷の小さな結晶は雪だしね

そしたら白いのは俺を見始めた
え？俺も考えるんですか？

みんな単純な考えで行ってるし、俺も単純でいいかな？

「ハクとか・・・？」

「ん〜、アイスは発音が名前としては合わない気がするから却下ね」

「え〜、良い名前だと思っのに・・・」

「ごめんね〜」

何故だ、こういうときは普通に仲のいい感じの会話なのに
なぜ、最初あたりみたいに喧嘩になりやすいんだ・・・？

「ん〜、スノウかハクか・・・」

戦闘っていうのは奥の手を見せないようにするのが鉄則だし、

ハクのほうがいいんだろっけど・・・っう〜」

唸り続けている

「ハクだと、『白い魔女』ってのがばれる確率も〜、だけどこんな
か弱い少女が

白い魔女なんて思わないよな〜・・・」

自分でか弱いとか言うなよ

てか、この心の中のツッコミに、俺はデジャブを感じるぞ

「じゃあ、『ハク』に決定しました」

イエー、パチパチパチとでもやりそうな感じのテンションで言っ
ている

「じゃあ、ハクよろしく」

「よろしく」

そんな感じで名前が決定しました。

「そういえば気になってたんだけどさ、ハク」

「ん？なに、徹夜」

またくつついてくる、なぜに……？

「だから、テツヤにくつつくなアー！！」

さっきと同じでめちゃくちゃ慌てて

ハクを俺から離そうとするルミ

それを見て

「〜」

ラウは楽しそうに笑っている。可愛い……

「……いい加減はなれて、俺に話をさせなさい……」

「あ、ごめん」

すると、すぐに離れていった

うん、許してあげる

「ハクが住んでた山ってさ何でまだ冬なの？」

「え？何の話？」

「近くの村の老人が言ってたんだけど、お前があそこに住むようになってから」

600年ずっと冬だって言ってたぞ」

「ああ、あれはそんな話になってるの？」

「……？」

「あれはあの地域が特別だからだよ」

「特別……？」

「理由はわかんないんだけど、あそこは1000年の内
643年はずっと冬なんだよ」

「……何故それがお前のせいには？」

「人間というものは忘れていく生き物だからね、記録を残しておかなければ真実はわからない。だから自然の内に私のせいになったんじゃない？長い冬がはじまる時期と私が移住する時期が重なっちゃったし」

「じゃあ、お前のせいじゃないんだな」

「私が何で他人に迷惑をかけるの……？」

「俺が聞いた話がそうだったから、一応確認したの」

「ふむふむ」

そんな感じの会話をしながら先に進むと
都が見え始めた
王都とかと比べると小さな都である

「何者だ？」

当然のこと衛兵さんがいるわけですよ
ギルドカードを見せる

「この三人は連れです」

「え！？ギルドカード、私も出したかつて……」

「ふむ、そうか。まあ、通っていいだろう」

ルミの言葉を遮って通してくれる衛兵

めんどくさいから早く行けということだろう

俺もめんどくさいのには同感であるから何も言いません。

「恋人って言っただけなのさ」

そんな事をいいながらまたもやくつついてくるハク

「ハクは離れなさいッ！！そして、ルミは息吹を吐こうとしないッ
！！」

なんですか、このパターンは何回やってるんですか
お前らは……

この町の中央には城があり、そこに領主が住んでいるのだろう
そして、いつもどおりとも言っただけいい賑やかな感じ

ん〜、宿はどうしようかな〜？

「今回はギルドの宿舎に泊まるか。ハクのギルド登録もついでにや
っちゃおう」

「「「はい」」」

ということまでギルドまで行き

『スカイバード空を飛ぶ鳥』へ登録する

俺はそのまま自分の一人部屋へと歩いて行くことにした

三人へは自由行動で食事でも自分の部屋で寝るでもなんでもして良
いと、言っておき

いい加減疲れたので俺は寝ます

のび多（漢字はちがくしておきます）にも打ち勝つ

眠りにつく早さを見よ！！

フハハハハハ…

（　　）…zzzz

「おきてよ〜（パチンツ！！）」

「ハッ！！」

頬にめちやくちや鋭い痛みを感じて飛び起きる

めちやくちやジンジンするんだけど…

そして

目の前にはルミがいる

「なに…？」

「なんか仕事がどうとか言われてるんだけど

私は城を出てきたばっかだし、ハクは山を出てきたばっかだし
ラウは寝ちゃってるし、何もわからないんだよね」

あゝ、そういうことですか

今行きます、オツケーです

適当な支度をしてルミと一緒に歩いていく

そして、冒険者が良く集まるところにつく

するとオムライスみたいなのを食べてるハクと

一回起こしたのか目がとろろんとなつててこくん…こくん…と顔が
上下しているラウ

そしてハクの向いにある女性が座っている

「あ、キタキタ、徹夜！私わかない！」

いきなりなんなんですか、その言葉は

とりあえず席に座る

「こんにちわ、何か御用ですか？」

とりあえず眠いので即の質問です

「こんにちわ、依頼です」

むむむ、即答ですか

「何故に俺達ですか？」

「指名したんですよ、私が

何事も無能な者より強く有能な冒険者をお願いしたほうが良いと思
いますので」

「あまりそんなこと言わないほうがいいですよ、

まわりの冒険者達が睨んでますから・・・」

こんなところで聞こえるようにそんなこというあなたの
度胸はすごいね

「いや、どうもあなた達と他の者を比べると見劣りしてならない
んですよ

それにあなたがギルドの大会で優勝したチームにいた事はわかって
ますし

だから丁度いいので指名させていただきました」

「今もそのチームには入ってる状態ですよ。

僕なんて普通の冒険者と同じです、わざわざお世辞を言う必要なん
てありませんよ」

「私は思ったことを言っただけですから」

相手の女性はニツコリと笑った後にすぐに真顔になった

・・・
む、本題ですか

「実は、友達を見つけて欲しいんです」

「友達？」

何故それを俺達なんか指名する必要があるんだ

「私はこの都の領主様の城の召使達を束ねる役割についてまして
その役割についている私は当然召使の者たちの名前と顔は覚えておく
のですが

いつのまにか一人また一人と消えていくのです。今では合計6人が
消えてしまいました

最後にいなくなったのが2日前、休暇もとってないし、だから依頼
しにきたんです」

うわあ、なんかホラーばいな

「それはいつから？」

一応質問

「いつからはハッキリとはわかりませんが、わかる事といったら領主様のお城に錬金術師が居候になりはじめてからなんですよ」

錬金術師とは一般的に魔法具を作る人たちだ

ハクと会う前に使った電話もその一つで、物に魔法の効果を加えるような人たちだ

普通に魔法使いも自分が使うものにはその作業をやるときもあるが錬金術師の場合は売るために行くといってもいい

そして他には、その物質を魔力とか性質とかを調べて研究したりとかよくマンガとかに出てくる奴だと『合成動物^{キメラ}』を作ったりなどする

「領主様は錬金術に大変興味がおありでしてね、

そのおかげで錬金術師は長居ができてるんです」

「調べたりとかはしなかったんですか・・・？」

「前に召使の中で隠れて調べまわったものがいるのですが

そのものは二日後には消えていました」

うわ、怪しすぎるだろ、おい

二日後にいなくなるなんて不自然な事をするよりも

もっと時間がたってからやればいいのに

おっと・・・なんか悪い考えが浮かんでしまった・・・

「だから強い人に代わりにやってもらおうかと・・・」

「依頼は受けるか受けないかは後で決めるとして
どうやって調べるんですか……?」

「それはやっぱり召使の中に混ぜてもらおうのが一番かと
む、やっぱりそういうことになるか

「女性ですか?」

「女性ですね、ほかに潜り込む職は丁度ありません
となると……」

「ん、ルミはお城から出たばかり……召使なんて無理だし
ハクは山から下りたばかり、これもまた無理だな

やっぱり、ここは受けないほうg……ん?」

いきなり服を引っ張られたのでそちらを見る

すると、いつの間にか起きたのか少し眠そうなラウがいて

「え?ラウがするっていうこと?そんなのダメダメ
当然却下です

危なすぎます、絶対ダメです

「違う」

ラウがそれを否定した

「え?」

するとラウはイスに立つようにして俺の顔の近くまで来て
なにかをつかんで引っ張った

それと同時に俺の何かバサツ…という音を聞いて
回りに広がる

「よし」

ラウのやってやったぜ、みたいな感じの声

「????」

俺は何?としか思えないのだが

「……ッ!?」「」

なぜか、ルミとハクと女性は目を丸くして驚いている
なに?何でそんなに俺の顔をジーと見るの?

< > < >

ジ

…てな感じだ

「……徹夜ちゃん、綺麗だよ」

最初に口を開いたのはハクで
いきなりそんな事を言っただけ抱きついてきた

え? 徹夜?ちゃん”……?

ハッ!!髪の毛を縛ってるのを解かれたんだ……ッ!!

「男だったのに綺麗な女性になってるッ!!」

ルミの声

「本当に不思議です……ね」

依頼を言ってきた女性の言葉

やられた……

ラウは嬉しそうにニッコリと笑っている

ラウのこの行動にはとても恨む事しかできないんだけど……

かわええ……*、*

うっ、いかんいかん!!

「ちょッ！！俺は嫌でs・・・」
俺が拒否しようとするが

「っっっけつて〜い」

俺以外の四人は大声でハモっていた

しかも依頼をしてきた人はハクとかと何故かハイタッチしてるし
打ち解けるの早すぎだろ

・・・もう、やだ・・・
めんどくさいよ・・・

4 4話 いきなりの依頼は俺の嫌な方向に（後書き）

今回のお話は

髪を解くと綺麗な女性に見える

という設定を久しぶりに使わせていただきました

普通は追っ手を撒くという理由つけた設定だったので

まさか、まさかのこの展開！！

徹夜ちゃんの今後は

とてもおもしろ・・・じゃなくて大変そうです！！

徹夜ちゃん頑張って（笑）

さすがに、日数の変化は少なくなしなればいけません

ラルドさんに何をされるかわかりません！

それを考えると徹夜くんはとてもおもしろ・・・じゃなくて大変です

白い魔女はハクという名前になりました

苗字って決めたほうがいいんですかね？

正直思いつかないです・・・（汗）

好きなキャラです

まだまだ少ないですが

自分の小説だから教えてくれた人がいるだけでも奇跡ですが

ラウ・・・3人 ルミ・・・1人 美月・・・1人

白い魔女^{ハク}・・・1人 二代目勇者^{リッ}・・・1人

という感じになりました

ハクの場合、まさかの登場したばかりなのに言ってくれた人がいる
という驚きでした

ラウは独走中です、まあ、投票人数も少ないので

一気に違うキャラに投票されれば追いつかれる可能性はあるんですけど
アニマルセラピーは強し！です
はつきり言って徹夜くんなんて
逆らえないほどに侵食されていますね（笑）
そして、男性のキャラが一人混ざっています
日記が効いたようですな

昨日コタツでゆっくりしてたらいつの間にか寝てしまい
起きて携帯で確認してみると感想がいつもとは違い
5通ぐらい一気に送られてきていたのでとてもビックリしました
中には、きついお言葉もあり
どうにかして直さねばッ！！（・・）
ハク的能力についても感想送ってくださいました方もいますし
とても嬉しいです

感想を送っていただいた方達はありがとうございます
では
誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

45話 なんか、こう・・・なんでもないです(前書き)

前回のあらすじ

いろいろとあって

なんかこう、ア ッ！！で

バサッとなって

ぐはあ！！ 0 0、0、)

45話　なんか、こう・・・なんでもないです

むう・・・これはどういうことだろう
なぜだろう

何故俺はここに立っているのだろうか？

なんで俺はこんな思いをしなくてはいけないのだろうか？

「今日から入る、テイヤだ。みんなよろしく頼む」

なんでおれは女装なんかしているんだろう・・・？

「・・・宜しくお願いします」

依頼をしに来た女性・・・ミルダさんが俺の紹介する

女性が何人も並んでいてそれに対して

俺が一言言っぺコリと頭を下げる

テイヤってなんぞ？

「おい、サジ、面倒を見てやってくれ」

「え！？私ですか？」

その中の一人が慌てたように言っている

「そうだ」

「わ、わかりました。頑張ります」

「よし。じゃあ、頼んだぞ」

その言葉と同時にあわただしく全員が動き出し

サジといわれた女性は俺の手を引っ張って

仕事に連れて行くようだ

ちなみに俺は無駄に力があるが一応体型は

スリムな感じで、身長は170ちよつとだ

意外とばれないのがとても俺的にシヨックである

「仕事を教えるのでしっかり覚えて頑張ってくださいね」

「・・・はい」

「元気が無いですね。何か嫌な事でもあるんですか？」
この女装がいやです

「いえ、特にはありません」

「じゃあ、もっと元気出して」

「はい！」

「それでいいです」

うう・・・いじめです

無意識、無自覚なるいじめです・・・

基本的に2つ共に同じだけでも！

「では、最初に・・・」

てな感じで進んでいく

ううわあ・・・めんどくさいい～～～

どんどん仕事は進んでいく

廊下を拭いたりとか箒で掃いたりとか

そんな感じだ

「では、この頃一番大変な仕事に行きますよ」

「一番大変？」

「錬金術師様の部屋の掃除です」

キタツ！！

ミルダさんがサジに俺を任せたのは

この掃除をやらせるためでもある

そしてサジがある部屋の前でノックをする

「何だ？」

「失礼します、お掃除に参りました」

そう言っに入っていく

その錬金術師はモノクルみたいなのをつけて

髪の毛はオールバック、そして白衣みたいなものを着てる

むあ〜ッ！！怪しい気がするよ、これは

そして掃除が始まり

その錬金術師は何かが気になるのか部屋の真ん中の

高そうなカーペットの上に立っている

むうう・・・

とりあえず掃除しながらその錬金術師さんの作品を品定め・・・じやなくて、調べて見ますか

「・・・（うわ、安そうなものが一杯だな・・・）」

小声でそんな事を言っけしまいながらも

慎重に見ていく

「……（気をつけてください、壊すと相当怒られますから）
いつの間にか近くに来ていたサジさんが
一応注意してくる

わかりました、了解です

そんな感じで見ていく

中には液体に浮いた目玉

何かの胃袋らしきものなど、

後は、作品で言えばほとんど三流品ばかり

あえて言えば

飛んでいく便箋みたいな物もあり、魔力を見る限り1〜2？飛んで
力尽きそうだ

「……（技量が全然無いんじゃない？）」

まあ、それでも少しこーいうのを作れば

普通の人にとつたら興味を引くものなんだろうけど

領主様はなんでこんなチャチなものが気になるのかね？

金で買えばもつといい物はあるだろうに

ただ、ほとんどが三流品で人をさらったりとかそーいうのには
使えなさそうである

ん〜、この部屋には何も無いのかな〜？

そーいうことで掃除が終わり、礼をして部屋を出て行く

ん〜、なんにも収穫なしだ

「……」

「どうしたんですか難しい顔して」

あ、考え事してたら心配されてしまった

「慣れなくて・・・」

「大丈夫ですよ、すぐに慣れます」

「適切なことをいって話をそらしておきましょう」

「じゃあ、次は洗濯物運びますよ」

「次の仕事はこんな感じらしい」

「わかりました」

「サジさんの後をついて歩いていく」

「ううー、前が見えない・・・、重くて腕がつらい」

「そうですか？」

「二人とも同じ量の洗濯物を持っている」

「住み込みの人の分もあるようで相当大量にある」

「俺的にはまだまだ余裕なのだが」

「サジさんはプルプルいつてる状態である」

「まあ、戦艦を投げてしまっ俺だからこのぐらいは普通だろうか・・・」

「なんでこの重さで汗一つ流さず涼しい顔なんですか、テージャさんは？」

「さあ・・・？」

「俺だからです」

「うう・・・でも、もう少しだから我慢すれば・・・ぎゃあっ!!」
「そんな感じの声を出しながら転んだ洗濯物が当たり一面に広がる」

「・・・あゝ」

「あああああああああああああ！！！！！」
呆れてる俺と絶叫してるサジ

「ああ、これは私が一人で洗い直さなくては・・・」

「俺・・・じゃなくて、私も手伝いますよ？」

「いいんですかあ！？」

めっちゃ目がキラキラしてる！！

「べ、べつに構いませんが・・・」

「ありがとうございます！！」

なんだろうか、これは・・・

とりあえず洗濯物を干した後に
また洗い直しに行きました

誰もいないところでミルダさんと二人で話している

「で、何か見つかりましたか？」

「全然見つかりませんでした・・・」

俺の即答です

「そっいえば、あの錬金術師が良く行くところってないんですか？」

「ん、特にはありませんね・・・」

「むう・・・」

「ただ時々部屋から青い光が漏れてる時があるらしいです」

「え、一回調べたのに見つかりませんでしたよ・・・？」

「どうかして、もう一回入る機会を作るので頑張ってください」
「まだまだ続きそうである」
「めんどくさいよ・・・」

ちなみにハク達は合図があるまで待機

45話 なんか、こう・・・なんでもないです（後書き）

突然ですが

次の話はどうしたらいいんでしょうかッ！

最低でも3〜4話（あと2〜3話）は続けようかな
と思ったんですが、難しかったです

つなぎ方がわからないです

今回のクライマックスはもう、考えてあるんですが
ちょっとつらいです

てつやの「つ」を「ー」にして

テーヤちゃんにしてみました

名前が思いつかなかったので

デキトウです

ああ、こんな感じの依頼を作らないで

そのままサラスムに行かせればよかったッ！！

なんていうことを思ってることは秘密です

みなさん内緒にしといてください

だれにも言わないでくださいね

うゝ・・・意外に書くことが少ないので

あと2〜3話はいつも以上に少なくなるかもしれませんが
いつも以上に期待できなくなりますね

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

46話 それは俺への挑発か…？（キリッ）（前書き）

前回のあらすじ

なんか

三流錬金術師の事を調べる事になり

俺が女装して調べる事になった

ちくしよっ！！

もうッ！！いやだアッ！！

46話 それは俺への挑発か…？（キリッ

ううゝ、もういやです

何でこんなことしなきゃならんとですか？

と、とりあえず聞き込みですな

同じ召使の数人に聞いてみるのが良いかと思えます

「すみません」

「え、何か御用ですか…（…うわあ、綺麗な人）」

「錬金術師様について聞きたいのですが…」

こんな感じに何人も話しかけていく

なぜか最初のときにめちやくちやうつとりしてる感じの目を

向けられてるのは何故だろうか…？

とりあえずわかった事をまとめよう

ミルダさんからも聞いた事と一緒に時々夜になぜか青い光が

ドアの隙間から一瞬だけ漏れるときがあるらしい

なにか、魔法具を試してるだけかもしれないけれど、見てみる価値

はあるだろう

ちなみに領主様は今まで魔法具なんて興味がなかったらしく

一回も見たときが無かったらしい

だから、錬金術師の作った魔法具を見たときに

あつさりと興味が引かれたみたいだ

むうゝ、あんな三流品、店で売ってるのよりもへばいぞ…

まあ、もしかしたらある一つの方向にだけ才能がある人なのかもしれない

それを考えれば三流品がたくさんなのもわかる気がするが・・・
はたしてどうなのだろうか・・・

「フ、フフン フ、フフン フンフンフウーン」
隣で鼻歌を歌いながら歩いているのはサジさん

「なんでそこまで上機嫌なんですか？」

「本当は買い物は一人で行くものなんですけど、
買い物場所とかを教えるためとは言え
違う人と買い物をするなんて初めてですから」

今はサジさんが言ったとおり買い物中だ。
両手には持てる分だけ持ち（俺はまだまだ余裕だが、面倒なので持
てないフリをしてみた）

持てない分は馬車で届けさせるようにする
そして、今は帰りで、二人で横に並んで歩いている形になる

「これは仕事ですよ？」

「でも女の子同士で買い物とか楽しくありませんか？」
俺・・・男ですから・・・

「そ、そうですね・・・」
本当に申し訳ない・・・

「テーヤさんはなんでこの職に就いたんですか？」

「仕事だからですよ」

「いや、仕事に就くことは当たり前ですよ、その理由ですよ、理由」
だから仕事だって

あ、軽く本音を言っていた。一応隠しとかないとダメなんだった
でもサジさんは気がついてないな・・・

「家にお金が無いので、親を少しでも楽にしてあげよう・・・」
うん、ありあいな展開な感じでもとても怪しいぞ
俺の脳ミソはもっとうまく嘘をつけないのだろうか・・・？

「そ、そうなんですか・・・大変ですね、テeyaさん。頑張ってください」

・・・オウ・・・見事に騙されてますな・・・

「あ、ありがとうございます」
少し笑顔が引きずってるけどとりあえずニッコリしておこう
と、その時

「おおう、姉ちゃんかわいいね、どこかいかない」
モブキャラ？が現れた！

「そっちの綺麗なお姉さんも、一緒に遊びに行こうよ」
モブキャラ？も現れた！

・・・そうか、綺麗か・・・
俺への挑発とうけとりました
ウフフフ、ウフフフフフフフフフ、ウフフ...

「テeyaさん、逃げましょう・・・ふえッ!？」
どうやら俺の暗く冷たく笑ってる様子を見て

とても驚いてるらしい

俺は、その笑みを瞬時にチェンジ！暖かく・・・そして冷たく笑うことにした！

(矛盾してるのは置いといてくれッ!！)

「お兄さん達・・・知ってますか？」

「え？なにになに？」

「なにを知ってるんだ？」

それぞれニヤニヤ笑いながら返してくれるモブキャラコンビ
モブキャラコンビというのも面倒なのでモビにしよう

「美しいもの程、トゲがあるって・・・ねッ!！」

次の瞬間には上に跳んで、モビの後ろに回る

「は・・・？」「え・・・？」

モビは反応できずにポカンとしている

俺は二人のそれぞれの腕をつかみ
うまく捻りあげる

「いのででででッ!！」

さらには足を払って倒す

二人は腹ばいに倒れてる状態で

二人の片手は俺がしっかりとつかんでいるので上に引っ張られる状態になり、

俺は一人に一つの足ずつで上から踏みつけて押さえる

「別に折れるわけじゃないので、心配はしないでくださいね」

俺がニッコリと笑うと同時に、手に力を入れて腕を捻る

すると、男達の腕がボギイツ…！！という生々しい音が響いた

「ぐあああああああああああああああああああッ！！！！」

「腕がアツッ！！腕がアアアアアツッ！！！！」

めちやくちや大きな声で騒いでる男達

「別に折れてないから大丈夫ですって」

周りを見てると周りの人たちがこちらを見ていた

俺がやったことに啞然としている皆さん・・・むうう・・・

・・・やりすぎたかも・・・まあ、いいか

「ほら行きますよ、サジさん」

俺がやったことをボーと見ていたサジを

とりあえず引つ張るようにして連れて行く

「さ、さっきの二人、本当に手の骨は折れてないんですか？」

心配そうに聞いてくるサジ

「折れてないですよ。最悪でもひびが入る程度ですかね・・・？」

「で、でも、あの音は・・・」

「うまくやれば、あんな音ぐらい出ますよ」

正直な所、あんな生々しい音になるとは思わなかった

・・・まあ、別にいいでしょ（笑）

「あんな事、どうやって覚えたんですか？」

「私の家にはよく変な人たちが入ってきたもので・・・」
とりあえず、また嘘をつくことに

あ、だけど、ある意味本当かもしれないな
変な人達が俺の家に来てたし（主に美月のファンクラブ一同）

「そ、そうなんですか・・・」
一応これは本当になるので
罪悪感はありませんよ

「とりあえず早く戻りましょう」
そついつて仕事場に早歩きで向かう

とじろで

・・・

・・・あのモブキャラ二人の腕は本当に折れてなかったのだ
ろうか？

ちよつと心配だ・・・折るつもりは無いって言っておいて折れてた
ら・・・

・・・罪悪感がほんのすこしだけでできてしまう
まあ、本当に少しだけだね（笑）

46話 それは俺への挑発か…？（キリッ（後書き））

サブタイトルの『…（キリッ）』は
なんとなくつけただけです。意味不明ですよね
すみません…

今回はモブキャラ達が頑張りました

あれです、あの足でおさえてる状態は…え〜と…
テーヤちゃんの足の下に二枚の板があり（板はモブキャラ一人）
それを一枚に一つの足で踏んで

その板からのびてる紐（紐は男の腕）を上につけて引いてる状態です
想像するのは簡単ですが、説明するのは俺にとって難しいです
…

簡単に言うと二人の男達の上でテーヤちゃんが仁王立ちです

…
モブキャラさん達…南無

むう〜、結局今回はあまり錬金術師に触れることなく終わってしま
いました。本当はこの話で本腰に入って次の話で終わりにしようか
と思っただんですが、あまりにも短すぎるかな…？と思い、この
話を作らせていただきました。

まあ、自分が楽しめたのでいいでしょう

そういえば、本当に誤字・脱字が多いです

いつも投稿するまでに三回は確認するんですけど…
なんででしょうね？昨日少し見直してみたんですが
一つありましたし…

今日は一つご指摘していただきましたし・・・
ちゃんと見てるつもりなのになぁ・・・
ということと俺の目は飾りです・・・ッ!!!!!!
なので、一つでも間違いを見つけたら即で御報告お願いします
まじです!!まじなのです!!!

今日はリアトモ達と会ったのですが・・・
もういやですね・・・悪質です・・・

(まあ、当然笑って済ませられるものですよ)

おれが「オツス!」と感じで話しかけると

「やめろ、ダークネスが移る」てな感じのことを言われた

・・・ひどいッ!!!!悪かったね!!!タイトルのセンスがなくてッ
!!

てか、「ダークネスが移る」て意味わかんねえしッ!!

もう・・・本当にやだよ・・・

好きなキャラ、貴方のオススメの小説、を教えて欲しい。は
まだまだ続いております

気が向いたら気軽に感想またはメッセを送ってください
お願いいたします

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

47話 仕事ですよ、仕事（前書き）

前回のあらすじ

モブキャラ？が現れた！

モブキャラ？も現れた！

冷たい笑みの人が現れた！

47話 仕事ですよ、仕事

「ふう〜、やっと終わった」

もう夜であり、ほとんどの人は仕事は終わり

家に帰っているか、召使専用の宿舎にいるか、だ
それでして

俺はミルダさんに一つの質問

「俺って、どっちなんですかね？家ですか、宿舎ですか？」

「誰が聞いているかわからないので「俺」じゃなくて「私」と言いな
さい」

「私はどっちなんですか？」

「宿舎でしょうね。あなたには寝る間も惜しんで調べてもらいます
から」

「人使いが荒いですね、ミルダさん」

「いえいえ、それほどでも」

「ほめてないです、ところで」

「テイヤさん」

俺が何かを質問しようとしたところで
サジさんの声が聞こえた

「はい？」

「早く行きましょっよ」

「どっどこっ？」

「お風呂ですよぉ〜」

そういえばこの領主さんはお風呂とかを作らせているらしい
それを召使さんが使ってもいいらしい

「……ッ!？」

俺が助けを求めるようにミルダさんのほうを見る

ミ……ルダさ……んたす……けて……

「テeyaさんにはもう一つ仕事があるので、今は無理ですね」

ニコリと笑いながら助けてくれるミルダさん

よくやったぞ!ミルダさん!!

「そうですか、さきに行ってますね、テeyaさん」

「はぁ〜い」

そういうと走っていくサジ

うっむ、ざんねん……じゃなくて何事も無くて良かった〜

……本音なんか言っていないもん

「とりあえず、仕事してきます」

「え?私は仕事って嘘でいったんですが」

「いいんですよ。仕事ですよ、仕事」

俺がフラフラと歩いていく

え〜っと

どうしようかな〜、とりあえず部屋の前に来た
部屋には誰もいないようだ

夜なので結構暗い廊下、ということで例の闇がついてるコートでカ
モフラージュ

「光学迷彩!!」

ちがうか、とりあえず体育座りで待つことにした
なんかさ

一人で体育座りでポツンと座ってるのって寂しいよね
でも、とりあえずこの姿で待つてようと思う

・・・

・・・

(〽 〽 … z z z z z

20分後

「ハッ!!」

遠くからカッン…カッン…という足音が聞こえておきる俺

俺がより一層静かにすると

白衣を着たモノクルオールバック錬金術師が歩いてきている

そしてドアを開けて部屋に入っていく

おれがドアの隙間（指で穴を開けておきました）で中を見ている
すると

錬金術師が部屋の真ん中のカーペットをめくり始める

そのカーペットをとると

真ん中に青い水晶が床にはめ込まれている

「……」
「テレポート空間移動」用の水晶？」
前にギルド同士で戦う大会のときに出てきた奴と一緒に
大会のときは数人同時に送る用だったので大きかったが
今回は1〜2人という感じで小さい

そして見てみると
水晶が青く光だし、次の瞬間には錬金術師が消えた
俺が部屋の中に入っていく

「これが青い光の正体が……」
どうしよう、少し時間がたってからいくべきか……？
うむ、行こう
こつというのは単純な言葉で起動するからな

「テレポート空間移動」
本当に単純です
すると、水晶が光りだす

「徹夜くん……」
む？俺がそちらを見てみるとミルダさんがこつちに来ていた

「ああああッ……！こつちに来ちゃダメだって」
俺が止めようとするも

俺とミルダさん二人を魔法具は「テレポート空間移動」させた

すると、まわりは石でできている道になっている

……
この石とかを見る限り、まだ領主の城の中だ

隠し通路でもあったのか……？

「なんで、ミルダさん来たんですか……？」

「光に包まれる徹夜くんを見てつい……」

……はあ

帰る方法まではわからないのに……

「とりあえず行きますよ」

「はい」

ちなみに俺は部屋に入った時点で服を闇で一瞬にして着替えて髪のを縛りなおしてるのでいつもの俺だ

二人ともスタスタと歩いていく

むう、なんにもないなあ

そしてまだ歩く

「徹夜さんはなんで冒険者に……？」

ミルダさんが口を開き俺に質問をしてきたえ？何でって言われてもなあ……

「なりゆき……？」

「……」

「……なんか、すみせん」

「別にいいですよ。なにかないんですか？」

なんだろう

本当のことを言っただけなのに

俺の全身にミシミシとのしかかる威圧は

なりゆきで冒険者になるんだもん苦勞はしてないけどさ

あとは……ん……

「あえて言うなら、逃亡……？」

「逃亡ですか？」

「まあ、俺を巻き込む無駄に完璧な奴がいましたね

そいつといると面倒なんですよ、いろいろと

だから冒険者になっていろいろなところに行つてできるだけそいつから離れて

みたいな感じかな……？」

「それは貴方にとって嫌な人ですか……？」

「ん、ああ、とっても嫌だよ」

「それにしても話すときの顔がとても楽しそうですね」「ん？そうかな、俺？」

「そうですね？まあ、自分でも良くわからないのであまり聞かないでください」

俺がそんな感じのことを言うと

こくり、とうなずいて質問してくるのをやめてくれた

ん、俺はなんで冒険者になったんだろうな？

めんどくさいからじゃなかったっけ？他にもある気がする……？
まあ、わからないからいいや

そして歩いていくと
なにやら部屋が見えてくる
その部屋をソクッとみてる
そこには錬金術師がいた

「フヒヒ、フヒヒヒヒヒヒヒヒヒ。これで、これで！
やっと見返すことができる！！俺を馬鹿にしたあのクソ野郎どもを
！！！」

うああ、完全にトチ狂ってるよ
完全に変な人だよ

「・・・（私にも良く見せてください）」
そしてミルダさんが近づいてきて

ゴン……！！と壁を間違って蹴ってしまう
結構大きな音が鳴り

錬金術師がギョロツとこちらを見てくる
なにやってんですか、この人は・・・

「そこにいるのはわかってるんですよ！！でてください」
錬金術師が声を張り上げている

「こんばんわ、トチ狂った錬金術師さん」
俺がドアを開けて中に入っていく
ミルダさんもあわてながらも俺の後ろについてくる

「召使をまとめる女性と見知らぬ男性ですか・・・
何か御用ですかア??？」

「俺がなんのために貴方の後を追ってきたかわかるでしょう？
・・・消えた六人を返していただきたい」

「ふふふ、私の作品を見せてあげましょう」
え？あれ？俺の話しを聞いてた？

男がパチンツッ！！と鳴らすと
まわりから何人かの黒い影が錬金術師のまわりに集まった

「これが私の作品だよ！！本人の意思を無視して体を自由に操れる
ばかりか

自動的に肉体を強化する！！このときに成人男性3人分の力はある
はずだ！！」

その黒い影は六人の人間だった

召使の服を着ている女の人たちで顔の上半分は仮面で隠されている
そしてその女性達の手には一つずつ武器が握られている

完全に服装と似合わない物騒なものばかりで軽くシールドだ

「なんでこんなものを作った？」

「私を馬鹿にした奴を・・・みか」

「見返すんですね。わかります、さつき自分で言ってたから聞か
なくていいんだった」

さつき、めちやくちや大声で言ってたしね
失礼な事しちゃったかな・・・？（笑）

「・・・殺れ」

あ、怒った・・・

その声とともに六人の召使さん達が動く
次の瞬間に城全体に爆発のような音が響いた

47話 仕事ですよ、仕事（後書き）

今回ののは

やっとクライマックスの前！！

徹夜くんがテイヤちゃんになって三話目！

いつの間にか戻ってたけど

徹夜くんを苦しめる方法を考えると

とてもたのしかったです！！

まあ、ほとんど書かないで没にしたんですけどね

今回では錬金術師さんの作品登場！！

一応アレです

召使さん達は操られているだけです

考えてたときだと死んでるっていう場合も考えられたんですけど

3〜4話の短い話には

そのエンドは似合わない！ということので

操られてるだけ、ですね

あと・・・

錬金術師の笑い方がキメエツ！！

むう、書いてるときにいつも心配になるのが

誤字ですね、

キーボードの位置とかで「どうですか」を「そうですか」とかで
間違っちゃう場合も多いんですよ

本当に心配です

ユニークが七万、PV が七十万を越えました

ありがとうございます（<ー>）

好きなキャラ、あなたのオススメの小説、を教えてください
というのは終ってません、まだまだ続いています
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

48話 デコピン最強ウー！ヒヤッハアアア！！（前書き）

前回のあらすじ

錬金術師の笑い方が・・・

・・・

・・・

キメエツ！！

48話 デロピン最強ウ！ヒヤッハアアア！！

「チイツ・・・！！！！」

俺はバックステップをしてすばやく後ろに下がる
片手にはミルダさんを抱えてる状態だ

「ちょ・・・ッ！！私、女なのにこんなことして欲しくないんだ
どッ！！」

「あんだ、絶対にさっきの避けられなかつただろッ！！」
そんな感じの言い合いをしている
その間にも襲ってくる六人、それを片手に持った剣で全てをはじき
返している

「ちょっと・・・ッ！！いい加減にこの体勢はいやなんだけどッ！
」

「もおおう！！！！わがままだなアア！！」
俺がパンパン・・・！！と手を叩くと
影から一匹の狼が出てきた
忘れ去られていた孤独の一匹狼、クオだ

「クオ、頼んだ」

「グオン！！！！」

そう一吠えするとミルダさんを乗せて違う所に走っていく

「一人、追え。生きて逃がすな」

錬金術師がそういうと六人が一斉にジャンプするように動いた

一人って言ったのに・・・ッ!!!
俺もジャンプするようにして六人を抑えようとする
だけど、ジャンプしているのは五人で俺の下を一人がすごい速さで
通り過ぎていった

「やらかした・・・ッ!!!」
うわぁ・・・まじで不覚なんだけど

「三人残して二人付いて来い」
そう錬金術師が言々と指示通りに動く五人の内二人
そして、こちらに背を向けて逃げようとする

「チイ・・・!!逃がすかッ!!」
俺が追いかけてようとするが…ッ!!

「・・・ッ!!!」
残っていた三人が俺の行く手を阻むようにする

「どうしたの!テツヤッ!」
後ろからルミの声が聞こえた

「ルミはそっちのほうに行ってくれ、ミルダさんが追われてるから
俺がミルダさんとクオが行った方向を指差すと

「わかった」
ルミがそっちにむかって走っていた
むっ、どうしよう・・・
錬金術師は・・・

その間にも残った三人が俺に襲い掛かってくる

あああッ！！もうめんどくせえ！！

「仮面を壊せば大丈夫かな・・・？」

さて、剣で斬るのは間違つて顔まで斬っちゃいそうだな・・・ん、どうしようかな

その間にも剣が迫ってきてそれを全てはじき返す

ピンタ・・・？殴る・・・？目潰し・・・？

全てにおいてダメだ・・・

男として最低だろう・・・

「ここは・・・」

次の瞬間には一人の眉間あたりに対して指を曲げて力をためる

「デコピンだッ！！」

力のたまつた指が仮面を砕く

その瞬間に力が抜けるようにして倒れる

首に手を当てて脈をとってみても死んでる様子は無い

よし、これでOKだ

あとの二人にもこれで大丈夫だろう

すると

操られている二人のほうから

なにかカチツという何かのスイッチが切り替わるような音が聞こえた気がした

その瞬間にその二人のスピードが数倍に上昇した

「・・・ッ！！」

力も数倍だったようで、油断していた俺は力で押し負ける

あああッ！！手加減して攻撃してたのが失敗だった・・・ッ！！

「チイツー!!」

次の瞬間には後ろの壁に背中から激突して
後ろの壁が砕けた。そして背中越しに見えるのは
当然違う部屋。ただし違うのは

「ふえッ!?」

奇妙な声をあげている人が一人いた
それは女性で、俺の見たときのある顔
サジさんだった
すると

何を勘違いしたのか二人の内一人がサジさんのほうにも向かう

「ああッ!!もおおッッ!!」

めんどくせえッ!!とは口に出さずに
サジさんを抱える。すると次の瞬間には相手二人は攻撃のラッシュ
俺はそれをかわし続ける。その間にも片手では
デコピンを準備する

「だアッ!!」

足元を思い切り蹴り、床を崩す
すると、相手が驚いたようで攻撃の手が緩む

よし、いまだッ!!

一瞬の内に手をすごい速度で動かす
次の瞬間にはデコピンで砕ける二つの仮面

「おし、完了だ」

ふう……俺が片手で抱えてるものを見てみることに

「なんでミルダさんは狼と話せてるの？」

その声が聞こえ

バギーン……!!という何かが碎ける音が響く

そちらをみてみるとルミがいて

ルミがおもいつきり殴りました、という格好をしていて
今まで追ってきた人は仮面が碎け吹っ飛んで倒れている

「……わかんない」「……クウン」

ルミの質問にミルダさんとクオはただ一言いうだけだった

「フヒ、フヒヒッヒヒヒヒヒヒ。とりあえず逃げて、

また実験のしやすい所を見つけるとしよう。フヒヒ……」
錬金術師がそんなことを言っている

当然脇にはあやつられてる人が二人

「そんなに希望の持てる未来なんてなさそうだけどね」

「誰だッ!?!」

男が声のほうを見てみると

白い服を着た少女がいた

「みたところその仮面で操ってる感じが、ん、
発想は面白いけど三流品だね」

「なんだとオッ!?!」

その声を言いながら手で『殺せ』の合図をすると
二体が凄い速度で動き出し、ハクを襲う

「ん〜、やっぱりね、肉体強化も自動的にしているわけか」
ハクはそれを避けながら、しゃべる

「だけど、強化だけをしちやだめなんだよね〜、普通の魔法は
肉体強化と体が壊れないために補助もつけてあるんだよ
でも、補助が全然ついてない。これじゃ数分で壊れちゃうよ
操られてる人の体が」

ハクの両腕の服の袖から透明な鎖が出始める
それは辺り一面に広がっていく
それは複雑に絡まっていく

「三流の錬金術師は結局三流だね」
その声とともにハクが透明な鎖をおもいきり引いた
すると、鎖が操られていいる二人の体を拘束して
一つの鎖が仮面を砕いた

「な・・・ッ!？」

「ん〜、この人はどうすればいいんだろ？殺す？」

「ま、まてッ!?!？」

泣きそうな顔の錬金術師

ハクの手にはいつの間にか透明な鎌が握られている
さっきの鎖も今の鎌も氷で作ったものだ
そして、いざ殺そうかな。というところで

「む？あれ、ハクがいつの間にか片付けてる・・・」
徹夜の声が聞こえた

「あ、徹夜。殺しておく？」

「さすがにそれはダメだろう・・・」

「この領主に言っただけ預けるのが妥当だな」

錬金術師はただ泣いてるだけだったらしい

48話 デコピン最強ウ！ヒヤッハアアア！！（後書き）

今回は錬金術師はおしまいです

次はお別れをしてやっさとサトラスに

向けて出発です

ちなみに錬金術師の解決日数が一日です

まあ、これが妥当だと思えます

ミルダさんはある意味凄い才能を持ってました

徹夜くんでも理解できるわけがない言葉・・・

動物の言葉がわかるようです！！

自分でも驚きです

今回では今日の内には投稿できないかな？と思うほど
パソコンをやる時間がなく危ないところで投稿です

たぶん、4月10日で

（4月11日の深夜0時に投稿されるかもしれない分です

・・・投稿できるかはわかりませんが）

連日投稿は最後になってしまう思います

一応自分は学生です

これで暇な日も終わりですね

とても楽しい休みでした（´・`）

この小説の総合ポイントが2000を越えました

ありがとうございます

とても嬉しいです

自分の目標点数が2000だったのでとても満足です

本当にありがとうございます

我が生涯に一片の悔い・・・ありますけどね（笑）

好きなキャラ、オススメの小説、などを教えて欲しい
というのはまだまだ続いております
気が向いたらお気軽にメッセージまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

49話 懐かしい奴らが三人(前書き)

前回のあらすじ

錬金術師の笑い方はきもくて

吐き気が・・・

いや、そんなことはいまはどつでもいいだろう

とりあえずは錬金術師を捕まえ

事件は解決だ

49話 懐かしい奴らが三人

錬金術師を預けた後は簡単だった

簡単にやることも済ませ

次の日には出発という事だけだった

何回も言うように待たせているのはあのラルドさん

どんなニツコリ顔で何を言ってくるかわかったもんじゃない
錬金術師を預けた後はこんな感じだった

「あ、あのっ！」

「はい？」

話しかけてきたのはサジさん。なんだ？

「お、お名前を教えて欲しいんですがッ!!」

聞いてきたのは名前だった

むう、俺テイヤって言ってたしなあ

一応教えておこうかな

「徹夜です。テツヤ カゲヤマです」

この場合苗字って名前の後のほうが良いんだよね……？

「は、はじめまして、テツヤさん。私はサジって言います」

「知ってますよ」

むむ？なぜに今頃自己紹介？

「え……？何で知ってるんですか？」

俺がニツコリと笑いながらそんな感じのことを言った
それでサジさんは混乱しながらも
まだまだ質問をしてきた
それは無駄に多かったし無駄な質問が多かったので省こう
次にミルダさんと話していた

「ありがとうございます」

「いえいえ」

「報酬は受け取りましたよね・・・？」

「ええ、はい」

報酬はちゃんともらったし
もう完全に依頼は完成である

「本当にありがとうございます、行方不明だった人たちもちゃんと戻ってきましたし」

「それはよかった」

それから少し話しながらも
どんどん時間は進んでいった

ちなみにクオとミルダさんは異様に仲がよく
ミルダさんはクオと仲良く話しをしていた
狼と話せる人間で・・・すごいな

そして

おれは少しの時間だけ寝る事にした
そして次の日の朝には出発である

…というのが二日前の話である

そして俺は夢の中だ

夢の中といっても普通の夢ではない

あの世界

俺がこの世界に来てすぐに入ったあの世界である

「・・・忘れ去られてた・・・、ほとんど役に立てないから忘れ去られてた

私はご主人に忘れ去られてた・・・」

「なんか」「もう」「いやだ・・・」

俺の目の前には三人が一行に体育座りで並んでいる

一つ目のコメントでの「ご主人」と

二つ目のコメントの「」「」「」「」のしゃべり方には見覚えがある方は多いでしょう

最初は時々出てきていたが

この頃はほとんど出てこなかった人達

クオと同じで忘れ去られた孤独、三人組の精霊達だ

「いや、本当にごめん

いろいろと忙しかったし、お前達も話しかけてこなかったしで忘れてただけなんだ」

「それはご主人が忙しそうだったからで、私達が話しかけづらかっただけだぞ」

「僕の」「私の」「親切だッ!!」

「別に話しかけても良かったって、ちゃんと相手にする事もできたよ」

「ふっ・・・最初のほうはみんなそう言うのさ。ご主人」

「僕達なんて」「前の主では」「しゃべり方が面倒だからって無視されてたし・・・」

「いや、本当に悪い」

そして双子はそのしゃべり方をやめれば良いだけだ」

「それは」「ぜつたいに」「無理」

これは本当にめんどくさい

「よし、ご主人がそう言うなら手加減はしないぞ」

「・・・?」

「ご主人の魔力を一定以上吸い取れば私たちは実体化できる」

「でき」「るの」「だあ」

双子さんのしゃべり方が本当にめんどくせえよ

「・・・ふん」

「何だその薄い反応は?ご主人」

「いや、別にいいけど」

「いいのか、ご主人ッ!!!?」

「本当にッ!?」「良いのッ!?」「……驚きでしゃべり方が変わっちゃったぜ」

なんか二人でシンクロしてたのが一回解けたぞやめられるんじゃない!

だけど、結局は最後はシンクロしてるけどね

「別にいいさ、表の世界で遊んでればいい」

「おおおッ!!これで見るだけではなく触ったりッ!!体験できたりッ!!」

「これでこの真ッ暗だけで」「なにもなくて寂しいだけで地味な世界を」「抜け出せるんだああ~~~~!!」「」

その地味な世界は俺の心なんだけど
しっかりゲンコツを食らわしてやるっと思っ

「いたっ!!」「いたたたたッ!!」「いたiiiiiiiiiiiiiiiiiiii
iiiiiiiiiiッ!!」「」

「まだ片方にはやってないぞ、痛がる真似すんな」

「二人は」「一人で」「一人は二人」「」

「うん、よじするに感覚もつながってるって事か?……まあ、もう片方にもやるけどな」

「ちょ・・・ッ!?」「ま・・・ッ!?」「ぐああああああ
あああああああああッッ!!」「
また二人のシンクロ悲鳴が響いた

「まあ、別に世界に出て遊んできておかまわないぞ、
その代わり面倒ごとは俺に持ち込むなよ」

「わかっておるよ、ご主人」

「そんな事」「するわけが」「ない」「

「だったら別にいいんだが・・・」
なんか本当にこの三人を見るのは久しぶりだな

「表の世界に出るのは王都についてからな」

「・・・はい」「」

三人仲良く返事をしている

「じゃあ、俺はそろそろ出るから」

「うむ」

「りょう」「かい」「です」「
やっぱり双子のしゃべり方は面倒だな
あとで直すようにみっちり教育するか

「ん・・・そだ。クロちゃん」

「犬みたいな名前・・・。なんだい、ご主人」

「今も外の見れて楽しい？」

「ああ、とても興味深くて楽しいよ」

「そか、それならいいよ」

それが最後の会話ですぐにもこの世界に戻り
俺は起きた

ちなみにここは馬車の中

都から王都に行くまでの馬車に乗っている

そして乗ってるのは少しの荷物と

俺とラウとルミとハク、あとはクオ。俺以外はみんな寝てる状態だ

「もうつきますよ、お客さん」

「ありがとうございます」

どうやらこちらを振り返ってこちらをみたようで
俺に声をかけてきた

「むにゃ〜・・・徹夜、大好き・・・」

「スウ・・・スウ・・・飴」

「ごはん！ごはん！もうすぐごはん！食べるぞッ！！・・・ぐ
う〜・・・むにゃあ」

「グオン・・・ワフツ・・・ガウガウ・・・ワオオオオン、バフ
ッ！！」

これはハク、ラウ、ルミ、そしてクオの順番に眠りながら言っている

なんだこの寝言は、個性的すぎだろ

しかもルミなんて意識はしてないだろうが昔懐かしい「騒音おぼん」のリズムだぞ

・・・クオは・・・何言ってるの・・・？

と、とりあえず起こそうか

「おし、みんなおきるッ！！」

「ん、何？私の頭サイズの飴玉は・・・？」

「ご飯の時間・・・？」

「むにやむにや・・・徹夜の事が大好き！！」

「ガウ！！！」

「おおし、冷静にツッコミしていくぞ」

まずはラウだ。簡単だな、そんなでかい飴玉はありません
ルミ・・・確かにご飯は近いだろうがまだだぞ・・・

そしてハクだな、お前は俺に抱きついてくんなッ！！

そしてクオは何言ってるのかさっぱりだ

俺が言ったとおり

ハクは言葉をいい終わった後に俺にヒシッと抱きついてきた
ルミはまだ寝ぼけてるようで反応はしていない

クオについては何も言わない

俺がすっかりと三人を起こし、クオは影に入ってもらおう

「もうすぐサラスム王都だぞ」

49話 懐かしい奴らが三人（後書き）

今回では久しぶりの精霊の三人を出しました
正直今まで出たのに出番が無かったキャラは
終盤あたりでは絶対出すつもりだったのですが
あまりにも出していなくて忘れてる方も多いと思います
ちなみにその忘れてる方に自分も入ってることは秘密です
「最後は出す」と思っていてその間に出すのを忘れてしまったわけ
です

感想でそれを言われたので

「出さないのはまずいかな・・・？」と思いました
とりあえず三人は王都に入ってから

一緒に王都を歩き回る事は間違いなしです
好き勝手にやりまくります

そしてルミは一応大食いキャラです
ほとんど食事の事を出さなかったのだからないでしょうが
旅に出る前に説明したとおり
徹夜くとラウとマイアさんとロイルさんの食べた量の
軽く二倍の食事を取るのがルミです

この頃ラウは飴玉にはまっていますね
とても可愛いと思います

想像したら鼻血が・・・嘘です、出ません、本当にすみません
もし、鼻血が出たら自分自身でもドン引きです

鼻血で思い出すのが（ここはスルーしても構いません）
冬の初めにコタツに入りながらラノベ読んだら
コタツでのぼせて鼻血が出てしまい、

借りてたラノベだったのを汚してしまい買い取る羽目になるというとても嫌な事が起きました

べつにいらなかったのですが・・・

鼻血を出す場面でもなかったのですが・・・

それを友達に言ったらバカテスに出てくる「ムツツリーニ」と

少しの間呼ばれてしまいました・・・

とても最悪です、とても恥ずかしかったです

軽くお金が無駄になりました

まあ、そんなことは右から左にスルーして下さい結構です

所詮は俺の体験談ですので

好きなキャラ。貴方のオススメの小説を教えて欲しい

というのはまだまだ続いております、終わってはいません

気が向いたら気軽にメッセージまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

50話 偽者と本物（前書き）

前回のあらすじ

サラスムについたようです

ラルドさんライル、エミリーの登場

50話 偽者と本物

「……というわけでして、とてもなんか……凄く寂しそうな感じでしたので、一緒に連れてきました」
今はある人に説明中

「そうですか、そういうわけですか」
目の前にいるのはラルドさん

『ニツコリ笑顔』のラルド……違ってた、『聖剣』のラルド
エクスカリバーを使う女の冒険者である
久しぶりのご登場である
ちなみに、今何を説明していたかということ
ハクのことだ

ルミのことは最初に言っていたので別にいいのだが
そのあと連れて行くことになったハクは説明していていなかったのだ

507

「まあ、というわけで宜しくお願いします」

「……まあ、いいですよ」

よっしゃあッ!!許してもらえたアア!!

よし、これで俺は折檻を受けなくてすむ

うやったぜっ!!

そして、俺はみんなのところに戻るうと後ろを向くと……

「てっつやあ~~~~ッ!!」

「緊急回避ッ!!!!」

ハクが飛びついてこようとした

なので、もう慣れてしまった俺はしゃがんで避ける

そう、俺は避けてしまったのだ
さっき俺は後ろを向いた瞬間だ、そして後ろを向いた真正面という
ことは

俺の後ろにはラルドさんがいるのだ
ということとは…

「ぎゃふッ！！」

「なッ・・・！！！」

ハクとラルドさんの悲鳴

そう、ハクは俺が避けたせいでラルドさんにぶつかったのだ

「ひどいッ！！徹夜はなんで避けるのッ！？」

「避けるに決まってるんだろッ！！！」

ただ、俺はそんな事を言ってる場合ではなかったのだ

「徹夜くん・・・？私に被害が及んだのだが・・・」
はわわわわッッ！！

に、ニッコリ笑顔の気配がア・・・ッ！！
ガシィッ…！！と俺の顔がつかまれた

次の瞬間には久しぶりに俺の悲鳴が響いたと言う

うう・・・ひどい目にあった・・・

なんてこった・・・久しぶりに会ってもこれか・・・

「・・・ん〜、どのぐらい生きてるの？」

これはライルである

片目が黒で固目が赤の少女。これまたお久しぶりのご登場だ

「700年」

ハクが普通にニッコリと答えている

「ねえねえ、何竜のお姫様？」

これはこれまたお久しぶりの登場であるエミリィである

「白竜のお姫様だよ」

これはルミが答えている

むう〜、ちゃんと楽しく話せている感じだ

「・・・なんでそんなに長生き？」

「それが私が『白いm・・・』」

白い魔女と言おうとしていたのだろう

だが、その途中で邪魔が入った

「ゴルアア！！邪魔だ邪魔だ。席がねえんだよッ！！」

いきなり近くで大声が聞こえた

そちらを見てみると真っ白な服を着て真っ白な帽子をかぶってる

・・・デブの女がいた、それと小さな男達が横にいてそいつらもこ
つちを睨んでいる

しかもこつちをめちやくちや睨んでる。あ、俺らに言ったのか？

むう・・・？

「こつちは話をしていますので、やめてくれませんか？」

俺が冷静に返答してみる事にした

「うつせえんだよ、私は『白い魔女』さまだぞ ア、アッ!?!」

「そうだぞッ!?!白い魔女ぞ」「邪魔だ、ゴルアッ!?!」

ウザッたい声でわめいているで女と付き添いの男が二人

その声とともに

ハクの方がピクンと揺れた気がした

・・・うわぁ

「ラルドさん、この人って見たときあります?」

「ないな。田舎から来たか、ルーキーでとこだろっ」

俺とラルドさんが普通に話している

すると、無視されている。と思っただのか

またデブの女が騒ぎ出す

「このヒョロいクソ野郎がッ!?!どけっつっつてんだよッ!?!」

どうやら俺のことを言ってるようだ

確かに筋肉はついてないけどさぁ・・・クソ野郎って・・・

すると視界の端で手が動いた

それは白い服を着た細い腕だった

その動きは

ハクの手の尖ってる氷柱がデブ女の首元を向かって一直線に進んでいく動きだった

そして次の瞬間には、ラルドさんが鞘に入れたままのエクスカリバーで氷柱をとめていた

ラルドさんが止めなかったら完全に刺殺していただろう

「ひいつ!?!?」

もう少しで刺殺されそうだったデブ女の間抜けな声が聞こえた
自分の状況に気づいたようだ

「・・・別に私の名前を語ろうがなんだろうが別にいいんだよ」
ハクの声は氷のように冷え切っていた
そして睨みながら...

「だけど、徹夜の悪口は言うのは許さない、殺すよ？」

「ひいいいいッ!？」

女は騒ぎ

ハクがさらに力を込めて押しているが
ラルドさんの手は一ミリも動かない

「ハクさん、さすがにちょっとやりすぎですよ？」
ラルドさんが口を開いた

「ハク、別に俺はそんな事は気にしないんだが・・・」

「...でもッ!！」

「本当に構わないから」
それにあのぐらいならなんとも思えないのだが・・・

「・・・わかった」

その声とともに
ハクの手にあった氷柱はパリンッ...!!という音をたてて砕けて
散っていった
それにしても、これはちょっと・・・

「徹夜くん、なつかれてますね」

「・・・これは凄い」

「氷が突然現れた・・・おもしろいわね」

順番にラルドさん、ライル、エミリーの発言

ラルドさんは苦笑いだが、エミリーは面白そうに笑ってる
ライルは無表情である

「笑い事じゃないですよ・・・」

俺はため息をつきながら答える

本当に笑い事じゃないです

「・・・それにしても『白い魔女』ですか
ラルドさんがつぶやいた

???

あるところにある三人と一匹がいた

「これがッ!」

「ついに」「これが」「あの・・・ッ!」

「ガウッ」

「」「食べ物ッ!」「」「ガウガッ!」

それはクロと剣の精霊の双子とクオだった

ちなみに徹夜にお金を渡されて今までいろいろ行ったりしている
そして今はあるレストラン（当然動物OK）にいた
その目の前にはたくさんの食べ物があり

「こんなに食べられるかな・・・？本当に感謝するよ、ご主人・・・」
「ジュルリッ・・・」

徹夜はそこにいないのに
自然と「ご主人」の言葉が出てくるのは癖だろう

「いた」「だき」「まあゝす」「」

「クウン・・・ガウガアア！！」

そして食べ初め

三人と一匹で相当の量の料理を食べたらしい

50話 偽者と本物（後書き）

今回では学校が最初の日なので早く下校して投稿することができました

2000文字程度なら一時間かかるかかからないかで書けるので連日投稿が不可能というわけではないんでしょうがそこまで頑張れるかはわかりません

この小説のあとがきを書いている途中で地震がきました。マジでびびりましたよ

「学生生活が始まるよ、うわぁ・・・」て思ってたらくれです本当に困りものですよ
大丈夫かな・・・

今回の小説では偽者が出てきました。これは力の無いものが力のあるように見せかける

という、よくある設定ですね

ときどきハクは怖くなります、

ラルドさんはいつでもしっかりものですね

ライルは話し方もキャラも覚えてるから良いのですが

エミリーがどんな感じのキャラだったけ？と悩んでしまいました。・

・困りものです

これは・・・大丈夫だったかな・・・？

今回はラウを出すのを忘れてしまいましたね

やらかした・・・ッ

あとがきを書いているときに気づきました

不覚です・・・

今度から気をつけます

好きなキャラ。貴方のオススメの小説、を教えてください
などはまだまだ終ってません、続いています

気が向いたら気軽にメッセージまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告よろしく願います

51話 三人と一匹の冒険者(前書き)

前回のあらすじ

偽者と本物

本物はキレて

偽物は泣き喚く

51話 三人と一匹の冒険者

あるところに三人と一匹

全身が黒い格好で黒髪などの真つ黒の少女

14歳の少年と少女

全身が黒い毛で覆われている狼
が、立っていた

「ふふふ、これが」

「これが」「あの」「・・・あれかッ!!!」「」

「ゴゲガッ!これがっ!」

(クオの言葉も!に入れてわかるようにしていきます)

「!」冒険者ギルド!!!」

「ゴゲゲンガギゴ!冒険者ギルド!」

そんな三人の目の前には

徹夜たちがいる『空を飛ぶ鳥』スカイバードよりは小さいが

立派なギルドの建物があった

このギルドの名前は『集う野良猫達』という名前で

ギルドはあまり大きくなく、凄い実力の冒険者がいるわけでもない
ただあまりにもお人好しな人たちが集まり、雑用と思われるような
依頼を

文句一つ言わずに笑顔で楽しくやっていくギルドである

だから、周りの人からは評判がよく

お年寄りが食べ物を運んでもらったり、荷物を運ぶのを手伝ったりと
冒険者がしなくてもいいような依頼の集まるところだ

「たのも〜」

「た」「の」「も〜」「」

「ガゴゴ〜たのも〜」

三人と一匹が中に入って行く
すると

「なんだいお嬢ちゃん達、ギルドになんか用か？」

さっそく人のよさそうなおじさんが話しかけてくる

「ギルドに登録しようと思って」
クログが答える

「そうかい、あそこに行けば登録できるよ。
でも、なんで登録するんだい？」

「チャレンジ精神だよ」

「ちゃれんじ・・・？まあ、頑張ってくれ」

そして三人と一匹が受付みたいなところに行くと
真ん中がハゲてるおじさんがそこには座っていた

「登録したいんだが・・・」

「登録」「お願い」「」

「ガギユウ！」「登録したいっ〜」

その言葉を聞いてハゲおじさん・・・略してハゲさんは紙を取り出す

「この紙に名前と歳なんかを書いてくれ」

「この髪に書けばいいのですね?」

「・・・紙」の部分のアクセントが気になったが・・・まあ、そういうことだよ」

ハゲさんが苦笑いしながら教えてくれる

「ガウブツ?」なんで私の分の紙が無いの?」
そんな質問をしても

狼の言葉なんてわかるわけが無い、みんなスルー状態である

「グルルツ ムムッ!」

クオは頬を膨らませているみたいだった。だが誰も気づかない

「ここはこうで、こうすると・・・こうかな?」

「えっと」「こうで」「こうかな?」

「うん? ちょっとそこは違うな、こう書き直せ」

文字の間違いを優しいことに一つ一つ指摘しては違う紙に書き、それを写させるハゲさん

「グルルルツ! ガルブツ ムムウ~~~~ツ!」
「ねえ、無視しないでツ!」

クオはまだなにか言っているがだれも気にしない
言葉がわからないから気にする事もできない

「はいはい、少し待ってて、クオ」
クロが何を言われたかわからないのにそんなことを言っ
てあごの下辺りをなでるようにしている

「バフツッ!!ガウツッ!!クウウゥ……(ちょッ!!待っ……!
!まふゥ……)」

脱力して倒れているクオ
クオにとってこういうのは反則である

「これで大丈夫かな？」

「うんうん……大丈夫だ、クロちゃん、これでギルドカードをも
らえばギルド登録完了だ」
紙を見て名前を呼ぶハゲさん

「……」「……」「……」「……」
双子の精霊が迷っている

「どうしたの？」
クオがそれにたいして尋ねる

「名前を」「まだ」「つけてもらってない」「
徹夜はいつも双子と読んてるだけで
名前をつけていない状態である

「うん、ハゲさん……じゃなくて、受付のおじさん名前って偽
名でもいいかな？」

「今「ハゲさん」って言おうとしたよな?……はあ、偽名でもい

いよ。

あとで名前の記録を変えることもできる」

これは徹夜も初耳だ、これだと最初に正直に名前を入れたのが馬鹿馬鹿しく思えるだろう

「ありがとう、ハゲさん」

「完全にハゲさんって言ったな、俺にはハグルゲって名前があるんだ」

「・・・「ハグルゲ」の真ん中の「グル」を取れば、ハゲ。だから、やっぱりハゲさん」

「ちくしょうッ!!」

おじさんが大声で叫んで落ち込んでいるがこちらは気にしない

「どっつする・・・?」

「どっつ」「しよっつ」「かな?」「」

「ガウッ!!!(頑張って)」「

少し悩む事20分(少しじゃない気がするが気にしないで)

そこでクロが手をポンと叩き、頭上で電球がつくかと思うような行動を取る

「じゃあ、「フレイム」からとって「フレ」と「イム」なんてどうだ?

ちなみに少年のほうは「フレ」で、少女が「イム」だよ」

「それ」「結構」「いいね!」「」

「よし、決定だね。フレとイムで」

「「いえ〜い」「」

「ギユウガア〜良かったね」

「じゃあ、それでいいんだな」

「「「は〜い」「」

「バフツ!」!

あるところに黒い服のスラリとした感じの少年がいた
その少年は黒い髪をへそあたりまで伸ばして
後ろに縛っていて、まっくろなコートを着てる
すこし目立ってる感じの少年である
すると、その少年が口を開いて一言だけ言った

「・・・俺の出番は?」

徹夜君には最低でも後一話は出番はありません

51話 三人と一匹の冒険者（後書き）

今回は、この話を書いている途中に

震度6弱が自分の家を襲いました

インターネットの機械が置いてある本棚が倒れてしまい

一回インターネットが切れました

機械が壊れてないか心配だったのですが

一応壊れてなかったです

自分はこのいうのを知らないので適当にやったら一応つけられました

こういうのは父さんがやってるので不安でした

ユニークが8万、P.Vが80万を超えました

ありがとうございます

そして本題の今回の話についてです

本当はやりたいことは決まっているのですが

さすがに連続でやりたいことを続けるのはちょっとつらいので

休憩ついでのカロ、フレ、イム、クオの三人と一匹が

メインの話を書いてみました

次はこの三人と一匹が依頼をする話になるでしょう

本当はその一話もこの話に入れようと思っていたのですが

うざい地震のせいで断念。本当に厄介な地震です

今日思ったのですが

フレとイムの会話では二人分が一人分になるのですよね

自分は大人数の会話が苦手なので

得してる気分です

ちなみに今回の話は、2000文字ジャストです

2000文字ジャストは初めてなのである意味嬉しいです

そういえば12話あたりまで魔法のときの『』が
《》になってました

例 《火の球》 『火の球』 って感じですよ
一応『』に統一しました。ときどき自分が無意識に
変更してるので困ってます

好きなキャラ、貴方のオススメの小説を教えてください
などはまだまだ続行中です。終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

今回は震災により、誤字・脱字の確認をしてる暇がありませんでした
なので、いつも異常に多いと思います。ですので
誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

52話 三人と一匹の冒険者(2) (前書き)

前回のあらすじ

三人と一匹の冒険者が現れた

その三人と一匹の冒険者たちは

勇敢にそして凛々しく、そして完璧にッ!!

・
・
・

嘘です、すみませんでした

52話 三人と一匹の冒険者(2)

「何か良い依頼はないの？」

口を開いたのは黒い少女

「なにか」「いい」「依頼は・・・？」

次に口を開いたのは

双子の兄妹

「バフツ（依頼）」

次に口を開いたのは狼

（今回につきましても、クオのことは（ ）により変換させていただきます）

「これでいいんじゃないか？」

目の前にいるハゲさん、それが一枚の紙を渡す

その依頼は簡単なもので

簡潔に説明すると荷物持ちだ

「もっと難しい、魔物を倒したりとかの方が・・・」
クロが反論をあげる

「いやな、最初の内はこういうものをやり、基礎体力など上げて行き魔物を倒せるような体力にまであげていく事が一番いいんだぞそれをやって有力な冒険者になった者だっているからな」
はつきりいってこれはハゲさんの嘘だ

「ふむ、それならやってみようと思う」
そして、騙されてしまうのが子供だ

「大丈夫かい？お嬢さんたち？」

「だ、だいじょうぶです……これ……っでも……ぼ、冒険者ですから」

「正直」「これは」「きつい」

「ワフツ？へ大丈夫？」

今の三人は体が見えなくなりそうなほどの荷物を抱えて
よたよたとそしてフラフラしながら歩いている

それを見て依頼主のおばあさんとクオは心配の声をあげる

クオは後ろに車輪のついた板に荷物を乗せていてそれについてる紐
を引っ張っている

だから、転ぶ可能性も無い

「うう……どこまで運ぶんですたっけ？」

「あそこを曲がればすぐだよ」

「みんなで」「がんば」「ろお」

「ブフツ（オー）」

「なんかクオに笑われた気がした……」

気のせいである

クオオ的には「オー」って言っているのだが
他の人から聞くと「ブフツ」とはまるで吹いてるみたいである

「ガウ・・・ツゝそんなつもりじゃ・・・」

「クロちゃん」「クオオが」「笑うわけ無いでしょ」「」

「・・・うむ、そうだよな」

そんな会話をしながらも
着々と目的地に進んでいく、そして数分かったが
やっとのことのでついた

「ありがとね、偉いねお嬢さん達」
褒めてくれるおばあさん

「これでも冒険者ですから」
えっへんという感じで胸を張るクロ

「冒険者」「です」「」から「」

「ワフツゝですから！」

てな感じで返答している三人と一匹

「じゃあ、報酬以外に少し飴玉をあげるよ」
そういうと飴玉を三個渡してくれる

「」「わあゝい」「」

てな感じでもらってしまう三人

何年も生きてるはずなのだが・・・
やっぱり子供である

「バフツ？　私の分は？」
「今回も、もらえないクオ・・・」

「ワンちゃんにはこれをあげるよ」
おばあちゃんは犬を飼う人用の犬専用のおやつをあげる

「バウンツ　ありがとうございます！・・・でも犬じゃないんだけど」
「今回はもらえてうれしいのだが
なんだか複雑な気持ちである」

「ありがとうね」

「・・・さよなら」

「バフツ」

依頼も終わり

依頼主にお別れを言って分かれる

そして時間は進み依頼を達成した報酬をもらった後
もう一回依頼に行く

今度は庭の草刈だ

その家の人は老人で草刈でも相当つらいらしい

「わるいねえ、ばあさんや」

「ばあさんじゃないですよ」

答えるクオ

「わるいねえ、ばつちゃんや」

「言い方」「変えても」「意味無いですよ」「
答えるフレとイム

「本当に悪いねえ、ポチや」

「バフツ!?!犬ですかッ!?!」
叫ぶクオ

とまあ、こんな感じである
ちなみにこのおじいさんのおばあちゃんは
めっちゃくちゃ元気である

一緒に草刈をしながら談笑していたほどだった

最後には少しだけ飲み物をもらって帰っていく
そして最後にまた報酬をもらう

今回は依頼を受けずに報酬でお菓子を買おうということになった
だから三人と一匹で歩いてる状態である

そしてある道を曲がろうとしたところで

「いたっ!?!」

「きゃっ!?!」

クロが誰かとぶつかった

クロが最初に小さな悲鳴をあげて、そのあとにその人も小さな悲鳴
をあげている

「ごめんね、考え事してて・・・」

そのぶつかった人は綺麗な女性だった

その女性はクロを立たせてくれる

見た目は細い腕でヒョロい感じなのに意外と力があるようで
起き上がらせられたときにすこし足が浮いた

「いえ、こちらこそすみません」

クロが洋服を叩いて埃をおとしながら答える

「だい」「じょう」「ぶ?」「

「バフツ」

それに気づいてフレとイムとクオが駆け寄ってくる

「お嬢さん達は何をしてるの?」

「お菓子を買いに行こうと・・・」

「えっ!? 私も行つていい?」

予想外の言葉だった始めてみる女性は

目をきらきらさせてこちらをジッと見ている

そして三人はコソコソ会議だ

「・・・(どうする?)」

「・・・(私たちは)」「・・・(僕たちは)」「・・・(別に
いいと思う)」「

基本的に精霊などは人の感情・・・

特に悪意などのものには鋭い

それをこの女性からは微塵も感じないのだ

「わあ、この犬かわいい」

ちなみに女性は会議をしてるから

その間の暇つぶしにクオをなでまわしている

「バツ！バウ・・・バフウ・・・ハマツ！ちょ・・・まふう・・・」

またもや脱力してしまうクオ

撫でられるのは基本的に反則なのだ

「・・・いいよ！」

そして元気よく三人で答える

その後は自己紹介をしている

「私はクロだよ。で、この犬はクオ」

「僕はフレで」「私はイムで」「二人合わせてフレイム」

「バフツハ犬じゃないよ・・・」

「そうなの、クロちゃん、フレくん、イムちゃん、クオちゃんね」

女性はニコニコしながら答えると

自分の名前を教える

「私の名前は美月みづき、ミツキ ナイトウだよ。よろしくね

やっと仕事が1段落してサラスムに帰ってきたばかりなんだ」

女性の名前は美月だった。それはちょっとした有名人の名前である

「・・・ハッ！！美月の気配が・・・ッ!？」

ある全身が黒一色の少年は何かの気配を感じ
まわりをキョロキョロと見回して自分の身の安全を確認していた
そして身の安全を確認した所で一言

「俺の出番は・・・?」

だから、ありません、って。しつこいですよ

52話 三人と一匹の冒険者(2) (後書き)

今回ではまたも三人と一匹の冒険者達の話です
基本的に精霊なので魔法系では強いはずですが、見た目は弱い少女、少年、そして犬(?)
そんな子達に当然のこと魔物を討伐なんていう
危険な依頼はやってくるはずがありません。
それに気づかず頑張るクロ達
泣けますなあ・・・(泣けるかどうかはわからないがなんとなく)

そして今回では最後にあの人が出てきました
やることをやったので今の時点では大精霊の関連は
どうにかなったようですね
まさかここで出てくるなんて思いもしませんでした
新聞でもなにも報告されずにいたのはこのためだろうか・・・ッ!?
自分にもわからない展開です
正直な所自分の予定外でした
まあ、「三人と一匹冒険者」も予定外ですけどね
あと最低でも一話は付き合ってください
これじゃあ、終らす事はできません・・・(; ;)

徹夜くんには美月センサーでもあるのかと思うほどの
反応でした。

ある意味凄いです徹夜くんと美月ちゃん

そして久しぶりの登場である美月です

正直なところキャラが変わってしまわないかが心配です

うっ・・・、頑張れ自分

好きなキャラ、貴方のオススメの小説を教えてください
は、まだまだ終わっておりません。

気が向いたら気軽にメッセージまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

53話 三人と一匹の冒険者(3) (前書き)

前回のあらすじ

三人と一匹は依頼をこなし

さいごにお菓子でも買いに行こう

ということので歩き出す

そして曲がり角である女性とぶつかった

「私は美月^{みづき}。ミツキ ナイトウだよ」

その女性は現勇者だった

53話 三人と一匹の冒険者(3)

「おいしい」

そんな声をあげながら

ほっぺに手をやって顔を左右に振ってる人たちが
四人いる

「ガウ・・・ハ・・・ケツ」

そしてそれをただ見ているだけしかできないふてくされた狼が
一匹、四人の近くに寝そべっている
その姿は完全に犬だ

「それにしてもミツキさんは精霊と契約してるんだね」
クロがそんなことを言う

その言葉に美月はすこし驚いた様子をするが
すぐにいつもの笑顔に戻る

「わかるんだね、クロちゃんは。なかなかわかる人なんていないの
になあ」

「まあ、似たような存在ならわかるよ」

「かん」「たん」「だよ」「」

「似たような存在ってことは、やっぱり君達も精霊かあ」
どおりで違和感があったわけだ

美月はニコニコしながら話している

「どんな人が主人なの？」

「私達を忘れる人」

「それはひどいな。こんな可愛い子達を忘れるなんて私だっただけありえないなあ」

そんなことを言いながらニコニコとクロを抱きしめている

「むぐう……ッ!? 窒息死するッ!」

「あ、ごめんごめん」

クロの言葉を聞くとすぐに離れる美月

「ミツキさんは王都で何してたんです?」

「人探しかな」

「人探し?」

「そうッ! ある男の人でねッ!」

結構前にほとんど話さなかったんだけど何回か会ってね!

しかも、なぜか逃げて行っちゃうんだよね……まったく……もう……

でもやっぱり会いたくていろいろと情報網をはついたら

このサラスム王都に戻ってきてるって聞いたのッ!!

だから仕事も一段落したし、捜しに来て見たのッ!!」

そのときの美月の顔は

とてもキラキラと輝いていて、楽しそうな感じだった

「……（主人の事だ）」

ちなみにこの精霊達は徹夜がいつも持っていた

ということとは外の様子も常に把握しているわけであり
当然美月のことも知っていた
正直な所最初は忘れてたのだが途中で思い出した

「ん？どうしたのクロちゃん達、まるで心当たりがある、みたいな顔だよ？」

「「「そんなわけ無いよ」「」」

「そうだよね」

正直な所罪悪感が三人にはあつたらしい
主人がなぜ避けてるのかわからないが
とりあえず主人の意思を尊重してみることに決めたのだ

「とりあえず、その人を探し出すのっ！！」

「ミツキさんはその人が好きなの？」

「ふえっ！？い、いやあ、そうとも言っし言えなくもないし
なんと言っても、あの人は私の幼馴染だし・・・」
美月はとても慌てた様子である

「・・・言っし言えなくもないし」って肯定してるよ？ミツキサ
ん」

「確かに」「めっちゃくちゃ」「」肯定してる」「

「年上をからかわないでえっツ！！」

「どちらかと言えば存在している時間は私達のほうが上だけど・・・」

「精霊には寿命は無いとっていい
当然のこと美月の何倍もの時を生きているのだ

「え？でも、精神は子供だよな」

「よし、それは私への挑戦と受け取った」

「それは」「とつても」「失礼だ！」「
三人とも美月に向けて指を指して講義して来る

「でも、若い方が何事にもいい気がする」
美月のそんな一言

「それは否定しない！」「」
まだ指差しながらも同意してしまう三人

「じゃあ、そろそろ違う店に行こうか」

「オケー」「」

美月は子供の扱いはうまいのだった

というわけで、違う店に行くために歩いてる美月とクロ達一行だっ
たのだが

なぜかゴツイ男達10人に囲まれている
そいつらは顔を隠していて、変な模様の仮面をつけている

「・・・お前だな」

ある男がそんなことを言った

その言葉には殺意が込められている

そしてその言葉と同時に男達は懐から武器を取り出す

剣、モーニングスター、斧、槍などとさまざまなのが揃ってる

「これはなにかな・・・？ミツキさん？」

「いや、この頃闇ギルドに狙われててね・・・。

いろいろと魔族側がこっちの闇ギルドと接触してるらしくて

命を狙ってくる闇ギルドも多いんだ、・・・今回で12回目かな？

それにしても、仮面の模様を見る限りあまり大きな闇ギルドじゃないなあ」

のんきにそんなことを言っている美月の手には

折れてしまふかと思うような細い刃の剣が握られている

その剣の刃は鋭く光り、その様子には敵を恐怖させるものがあつた

世界の五本指にも入る名剣『古き剣』オールドソードである

「少し下がってて、私のケンカだから」

この状況をケンカごときで表せるのは美月や徹夜などの少数の人間ぐらいだろう

「大丈夫なの？」

心配するクロ

「ええ、こんな・・・」

その言葉が終る前に三人の男達が飛びかかるようにして襲つ

そして武器が美月の体をスタスタにしようと迫る

「・・・余裕余裕」

この美月の声が聞こえると同時に飛びかかろうとしていた三人の男達が吹っ飛んでいく

美月はさつきと同じ所で剣を振り終えた後の姿だ

それは一振りだ。一振りでゴツイ男達を吹き飛ばしたのだ

その姿には傷一つ無く、こんな状況でも完璧なほどに綺麗だ

「さて、誰にケンカ売ったかわかってるかな？君達

徹夜ほどじゃないけど無事で帰れると思わないでね・・・」

この状況でもとても綺麗な笑顔

だが、この状況では逆に恐怖を覚える

そんな表情だ

そしてゆっくりと、しかし確実に男達に迫ってくる

「ふう・・・終わった終わった」

美月は手をパンパンと叩いて埃を落とすようにしている

そしてそのまわりでは男達が倒れている

「何回やつても殺さずに倒すつてのは難しいね、やっぱり」

美月のその言葉通り

周りに倒れている男達は気絶しているだけだ

少し斬られて傷がある者もいるが、致命傷ではなく

長い時間がたつても死ぬ様子は無い

そして美月の体にはどこにも血はついていない

一滴もついていない・・・返り血でさえもついていない

「まあ、この人たちにやられてたら勇者なんて務まらないし

何個も闇ギルド潰しながらこの王都についたんだし、これくらいじゃあ、私を潰す事なんてできないよ」「そんなことを言う美月

「苦勞の多い人生ですね。ミツキさん」

「あつはつは。大人っぽいこというねクロちゃん、子供なのに」

「・・・」

子供、というのはよけいである

「まあ、善人は悪人を憎むし、悪人は善人を憎む。

いい事ばかりしてたとしても憎まれるのは変わらないよ」

美月は剣を鞘に収めながらそんなこと言った

「徹夜も誰かにはもう憎まれてるね」

その声とともに剣を鞘に収め終わり、チンツ…という金属音が響く

「その憎しみを潰してまわらないとなあ…」

そんなことを言う美月。とても物騒である

「どうやら、私のかわりにドラゲイルで頑張ってくれたようだしね」
美月の情報網、恐るべし

「じゃあ、そろそろ私は行くね、私の仲間も捜してると思うし。

クロちゃんに、フレくん、イムちゃん、クオちゃん」

美月はそれぞれ頭を撫でるようにして三人と一匹に近づいて

そして、後ろを向き、違う方向へ歩いていく

数歩進んだ所でなぜかこちらに向き直り

その後、一言こちらに向けて言った

「徹夜を宜しくね」
全て見抜かれていたようだ

そして、三人と一匹の自由な冒険者生活は幕を閉じた

「へっくちっ!!」
ある男がくしゃみをした

「どうしたんだい？徹夜くん風邪かい？」
背中に黄金の剣を背負っている女性が口を開いた

「いや、誰かにでも噂をされたかな？」

「徹夜くんならあるかもね。主に呪詛の言葉で」

「怖いことを言うのはやめてください。ラルドさん
俺も否定はできないので余計に嫌なんですけど
……はあ、それで
ラルドさん次の依頼が決まったんでしたっけ？」

「ああ、次は……」

ラルドさんが無駄に間を空ける

この人の言葉はいろいろと怖いからなんか嫌だ

「次は君は先生をやるぞ」

「・・・俺が先生？」

こんな俺が先生？

記憶力、人に教える能力、人に好かれる能力が
全てにおいて皆無な俺が・・・？

「ああ、依頼先は『ルズミナ国立魔法学園』だ
なん・・・だと・・・ッ!？」

53話 三人と一匹の冒険者(3) (後書き)

今回で「三人と一匹の冒険者」は終わりです

三話続いた感じですね

最後の美月ちゃん・・・

キャラが変わってないと思うのですが

変わってしまったようにも思えます

徹夜くんの前じゃないとフル稼働ができないようです

現れるよ徹夜！空気よめよ！

・・・すみません

今までも時々あったのですがハイな気分になると

こんな感じでダメになります

反省します

ハイな気分になったからやった、反省はしているようでしていない

by 焼き芋

はい。今の上の文もハイな気分だからやりました
本当に反省してませんね。すみませんでした

今回の話では

「美月ちゃんの強さを教えないと！」という思いもあったので
書きました

ちなみに徹夜ちゃんと美月ちゃんが戦った場合

哲也君は負けます

え？なぜかって・・・？

あれです、ガチコのバトルではなく

徹夜くんは美月ちゃんに手を上げることはできません

それについてミツキちゃんは
今までの徹夜くんの行動を1から10まで知っていれば
頬を膨らませながら徹夜くんをつねる事間違いないです
徹夜くんは一発KOです

いつも思うのですがあとがきで

「徹夜くん」と書くのですが「てつやくん」をそのまま
変換すると「哲也君」になってしまい
とても困ってます。あ・・・蛇足でした
スルーしてください

貴方の好きなキャラ、貴方のオススメの小説を教えて欲しい
はまだまだ続いております。終っておりません
気が向いたら気軽にメッセまたは感想でお送りください

いつも思いますが

自分が書く小説はあまりにも誤字・脱字などの
ミスが多いです

自分の力だけでは無理なので、あなたのお力を貸してください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

54話 ルズミナ国立魔法学園（前書き）

前回のあらすじ

三人と一匹の冒険者は現勇者と出会う

勇者は相当な実力で

10人も刺客達をいとも簡単に
ねじ伏せる

すべてお見通しのようで

最後に主人のことを頼まれた

54話 ルズミナ国立魔法学園

むあ〜ッ!!

眠い目をこすりながら俺は頑張っで起きている

依頼で王都を離れて二日ほどたった

今は馬車に揺られながら

道を進んでいる

カタコトと揺れながら進む馬車は

とても静かで

とても何も無い感じだ

・・・

・・・

正直に言おう

退屈だ

「スウ・・・スウ・・・」

こんな感じで

みんなが寝息を立てて眠っている

俺は眠らずに

ずっと一人じゃんけんをしている

・・・いたい人じゃないですよ。俺は

そ、そんな目で見ないでッ!!

お願いだからアアーーーーー!!

・・・すみません

少しハイな気分になりました

今もそうですが・・・

誰も俺の心の声なんて見てるわけ無いですもんね

ふう……とりあえず落ち着こう

「む？徹夜くん起きてたのか」
そんな声が聞こえたのは
ラルドさんが起きた様子だ

「ええ、いつも通りの時間です」
正直めんどくさいからいつも二度寝をしていたが
これでも元は学生。

早起きするのは習慣である
時々朝早くに家を出て学校まで本屋で時間を潰すと言つ事は
何回もあつたことだ

それもこれも、美月（のファンクラブ一同）のせいだ

「それでその学校とやらはどんなものなんですか？」
説明をまだ聞いていないので
とりあえず聞いてみることにした

「確か……」
ラルドさんがしゃべりだす

「剣士科、魔法科、という二つあり、学生がそれを選ぶんだつたね
剣士科と言つても武器などでいくつかの種類に分かれ
魔法科にも治療、攻撃などの二種類にも分かれている
……だつたけかな」
まだまだ説明は続くようだ

「あとは、えつと基本的な訓練を学生は受けてるんだつたけかな
生徒会長が全生徒の中で最強のはず……。まあ実力で言つと
Bランクの上の中あたりかな……？」

まあ、それだけの実力でも十分と言えるが、学生でこの実力だこの先が頼もしいなあとは、とくにわからないなあ
学園についてから説明を聞いてくれ」

「ふむふむ、そうですか
む、そういえば、依頼の内容は？」

「それは学園長から説明を聞く」

「ふむ、そうですか・・・
わざわざギルドに依頼するほどなんですから
何か危ない話だと思っんですが・・・」

「それは私も同感だな
というか徹夜くとチームを組んでから
まともに魔物を討伐した記憶が無いなあ・・・」

「それは気のせいとは言いません
というか、俺がいない間は魔物討伐はしなかったんですか？」

「いろいろと忙しくてね」

「ふむ、じゃあ俺のせいじゃないでしょ」

「あくまで覚えが無いだけだよ」
「じゃあ、俺のせいにはしないで欲しい」

「悪いね」

「・・・俺の心を読まないで欲しい」

「いやはや、本当に申し訳ない」

・・・またか

もういいや

これじゃあ、ループじゃないか・・・

「とりあえず、私たちは全然仕事をしてないわけだ」

「お金なら小銭があります」

俺はポケットから銅貨を数枚取り出した

当然金貨は出しませんよ

「それはどうしたんだ？」

「ああ、これはですね、俺の役に立ってくれる
親切な黒い精霊さんの稼いだお金です」

「・・・？」

「私の初の依頼の報酬を奪わないで欲しいぞ！！ご主人！！」

「・・・ッ!？」

いきなり現れたクロに驚くラルドさん

クロは俺から金を取り返そうとするが

相手の見た目は年の離れた女の子

手の長さは、リーチの長さ

俺はクロの頭を抑えてこっちにこないようにしていて

クロは取り返そうと手をブンブンと振るが

長さで有利な俺にはその手は届くわけも無く

空を切るばかりである

ちなみにクロは俺が魔力を分けておけば実体化もできるわけ
おれの闇の力も少しばかり使えるようで
闇に報酬をウキウキした顔でしまったのが運の尽き
俺の手の中だ

「盗らるゝなゝいであゝゝツ!!」

口調も子供っぽくなっていくクロ
そして微妙に涙目だ

・・・からかいすぎたか

「冗談だよ、冗談」

そついいながら、お金を渡すと
クロはほっとしたような顔になる

「子供じゃないんだからからかわないで欲しいぞ。ご主人」

「涙目になっていた奴がよく言えるな」

「なツ!? そ、それはその・・・あれだツ!!」

「思いつかないなら言おうとするな」

「・・・この子は誰だい?」

そこで今まで置いてきぼりを食らっていたラルドさんが口を開く

「俺の精霊です、この指輪の」

俺が指にはめている指輪をちょいちょいと指しながら
答える

「ふむ、そうか」

ラルドさんは納得したようである

『学園が見えてきましたよ』

馬車の業者さんの声が聞こえた

言葉通り真正面を見てみれば大きな学園が見えてくる

「着きそうですよ、ラルドさん」

「ああ、学園だな」

そこでなぜかラルドさんが言葉を止める

そしてまた口を開く

「エミリイともこれで一時のお別れになるわけだ」

いきなりのその発言

「……え？」

俺はその言葉にまぬけな声をあげていた

54話 ルズミナ国立魔法学園（後書き）

今回は

学園に着くまでである

学園は今の所は詳しくは説明できません

話を進めながら説明していきます

・・・別に

別に設定を考えていなかったとかそういうのじゃありません!!

このほうが話を稼げる・・・じゃなくて効率的だからです!

本当に無計画でも、ちょこちょこ稼ぐとか

そういうわけじゃありません!

ほんとうですよおおお!!

・・・こういうふうにしつこいと反対に疑われるから

もうやめておこう

ほんとうですからね

（正直相当しつこいですよね。すみません）

いつも思います

何故俺の小説は誤字・脱字が多いのかと

現時点で感想を35件もらいましたが

そのほとんどが誤字・脱字の指摘と言っていていいはずですが

困りものです

話が変わり

総合ポイントが2180に到達しました（減るかもしれませんが・・・）

）

正直なところ俺の小説が結構ポイントをもらってる事に驚きです

全体からしたらまだ少ないと言っていていい方なのでしょうが

俺が書いてきた小説はほとんどが10ポイント以下という感じでした。なのでこれは俺にとって相当な驚きなのです。前は25話書いて6ポイントというときもありましたけどね。疲れて途中で消してしまいました・・・

本当に皆さんありがとうございます。とても感謝です

貴方の好きなキャラ、オススメの小説を教えてください。はまだまだ続いております。どんどん送っちゃってください。気が向いたら気軽に感想またはメッセージでお送りください

自分の目は飾りです。誤字・脱字を見つけることができません。なので貴方の目の力を貸してください

(ちなみに自分の目は悪くないです。多分、気分の問題だと思います)

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

55話 不幸なお掃除係のルミ（前書き）

前回のあらすじ

魔法学園へと向かう中

いろいろな説明を聞く

そして最後の言葉に俺はあほな声を漏らす

55話 不幸なお掃除係のルミ

「・・・え？」

そんな俺の声

「む、言っでなかったか？」

そしてラルドさんのその言葉
なにも言われてないんだが

「それはどういうことですか？」
説明をしてもらおう

「エミリイは何歳だと思う？」

「14歳ぐらいじゃないですか？」

「・・・当るとは思わなかった」

あ、当たんだ

俺の目は凄いなあ・・・

「とりあえず、説明をすると普通ならこの歳ではギルドには
普通の人はいれないんだ。魔法学園を卒業したり、それなりの訓練
を終えたり

などと、そういうものを終らせてから入らなくはいけない

大人は関係ないだろうが、子供なら普通はいれない

子供がギルドに入って死なれてしまうのは誰でも嫌だろうからな」

このせかいでは、15〜16歳程度から大人ということになる

エミリイはまだ子供だ

「だが、エミリイの場合はそのどちらも終わることなくギルドに入った
エミリイの家はエミリイが稼ぐまで家に住めないほど貧乏だったからな
だからこの場合は二年生から入学してもらおう事になる、というわけだ」
エミリイの家のことは知らないけど
そんな理由があるのか

「学園は金が無い人は入れないからね、こういうケースは多いのだが
ギルドマスターが依頼のついでに丁度いいからということでの入学させるそうだ」

「ふむ、だから一時の別れ、と」

「エミリイなら学園でも最強の実力だろうな。一応彼女もAランクだしな」

正直な所、一時とは言え手放すのは惜しいはずだが、うちのギルドマスターは
ギルドよりも人のことを考える人だ。だから、エミリイを入学させると言う事になった」

あのご老人はそんな人なのか

「あの歳だったら、友達とわいわいしながら楽しむべきなのに
今までは魔物を殺したり殺されそうになったり、時には裏家業の間を
拘束したりなどということをしてたんだ

いい加減、普通の平穏な生活をしてほしいと思うな」
ラルドさんのそんな言葉

「それは同感ですね」

「たしかエミリイは最低でも3年前からギルドにいるはずだ
いくらギルドにいるみんなといるのが楽しい、と思えたからといって
さすがに同じ年の友達がないのはつらいだろうしな」
ラルドさんが口を開きそんなことを言う

「まあ、貧乏な人間からAランクの十分稼げる人間になるというのも
珍しいがな。やはりギルドマスターはエミリイの人生を優先してる
ようだ

私もこの判断には賛成だしね」
そこで一息つき

「まあ、エミリイには子供としての
当然の学園生活を二年間歩んでもらうというわけだ」

そんな感じで馬車は進み
時間がたつていき、学園に着いた

「ようこそいらっしやいました、ルズミナ国立魔法学園へ」
そんな言葉で出迎えたのは
男性だった

「学園長をやっております。ツール・ルクイズと申します
失礼ですが自己紹介はしてくれなくて結構です。」

知らない方もおりますがあなた方は大会などで有名なので名前も知っております」
「淡々とそんな事を言ってくる」

「接客室へのご招待します」
そして歩き出す

「あなた方のうち、エミリー殿は入学、ラウ殿は一時的な入学となっていたいただきます」
「エミリー殿は二年生から二年間授業を受けてもらい、ラウ殿には防御魔法などの護身的な魔法を学習してもらおう、ということによろしいですね」

「ギルドマスターはラウの事も頼んだんですか？」
俺のそんな疑問

「あなた方のギルドマスターからはあなた方についていっただら危険な目にもあうだろうから、自分のみは守れる程度に教えてほしいということですよ」
「ラウ殿は年齢はすこし下でしょうが一年生として授業を受けてもらいます」

「あなた方の任務が終了すれば学校を辞めるのもよし、そのまま入学するのもよし、です」

「その他の方々を説明いたします」
「徹夜殿は2年S組の担任、ラルド殿は2年A組の担任、ハク殿は2年A組の副担任、ライル殿は2年S組の副担任、です」

「私は・・・？」

これはルミの声だ、

「あなたは掃除係です」

「なぜッ!?!」

めっちゃくちゃ驚いている

「あなたはどうかやら偉い身分だったようなので、この世の辛さを教えよ。」

ということで、竜の国『ドラゲイル』のほうから言われましたので

「ふこつッ!?!」

手を床について落ち込んでいる様子

それよりも気になることがある

「なぜそんなに教師がいないのですか?」

なんでこんなに担任やら副担任になっているのかがわからない

「教師はここ何週間の間にすでに1名が殺害されております

そのためにこの学園内の巡回のために三名の教師を使っております」

「教師が殺害された・・・?」

「依頼内容の説明がまだでしたね。この魔法学園は

表上は学生の学び舎です。ですが、裏では強力な大規模魔法具の発明などを行っております。

そのため地下には大量の人殺しの道具が眠っているというわけです
それを闇ギルドが狙ってるわけです・・・

その為、拷問でもしたようで先生が一人殺されていました
幸か不幸かその先生はその事をあまり知らない方でしたが」

「闇ギルドの情報はず？」

「・・・『ブラック・クロス黒い十字架』。」

闇ギルドの中でもトップ3にも入る勢力です」

ああ、あのギルドか

ルミをさらっていた奴らだ

「それでは、依頼内容ですが、

闇ギルドを撃退をしてくれば結構です。それまでは先生として働いてもらいます。生徒には知ってる限りのものを教えたりなど教科書のを効率よく教えてくれれば結構です」

ふむふむ・・・

おれにはとてもつらそうな任務だ・・・

「あ、あと徹夜殿への付け足しですが・・・
2年S組ではちよつとした問題児がいます。

実力では生徒会にも入れる二人がいるのですが、その二人にはちよつとした問題がありますので気をつけてください

あなたの実力ならあまりありえないでしょうが、怪我するかもしれないので」

本当に嫌な所の担任させられるようだ

つらい、これは本当につらすぎる

「明日から先生をやってもらいます

生徒は新任の先生が来る事は知っておりますので」

そついつてそのツールさんは懐をあさはじめ

そして何かのカードを取り出す

「これはセキュリティのための専用のカードです。

生徒は生徒用、先生は先生用、従業員は従業員用などの種類があり

ます

自分の部屋から食堂までいろんな所で必要になりますので

なくさないようにお気をつけください」

そのカードをそれぞれが受け取っていく

「では、あなた方のお部屋へと案内いたしますので

この後は休むなり、学校を見てまわったりなどして自由に行動して
いただいて結構です

明日からお願いいたします」

そんな感じで最初の日は終わった

ちなみに俺はすぐに寝た

55話 不幸なお掃除係のルミ（後書き）

今回では

学園長の話ばかりになってしまいましたね
正直な所つかれます

そして、ラウは護身用に魔法を学ぶ事になりました
どうも、ラウの身の安全が確保できないなあ、と思っていたので
ちようどいいので学ばせる事にしました

徹夜くんはすこし問題児のいるクラスの担任に
副担任にライルを選んだのは魔法を完全に使えるからです
ハクは氷、ラルドさんはエクスカリバー、などと
魔法を完全に使えるものがいないので
徹夜くんには期待できないので
ライルを副担任にしました

今回の魔法学園編と言っているいいものは
新キャラは多数出てくる予定ですが
長続きはしないキャラばかりです
徹夜くんたちの任務が終わわり、魔法学園を去れば
出てくる機会は無いので
一時だけ覚えれば、もう出てきませんね

エミリイはこの魔法学園で退場になってしまいます
14歳と言っていたが、なんで子供がギルドに入れるんだろう
と疑問に思い
こうなりました

そして、ライルもエミリイと同じ程度か少し上のの歳ですが
彼女は魔族と人間のハーフなので

例外というわけです。一応疑問に思うかもしれませんが
あとがきで説明させていただきます

無駄に説明が多い話になってしまいました

いつもゆるゆるの（たぶん）シリアスなしのこの小説にとって
これは痛い所です

ユニークが9万、PVが90万を超えました

ありがとうございます

あなたの好きなキャラ、オススメの小説を教えてください
などはまだまだ終わりません

気が向いたらお気軽にメッセまたは感想でお送りください

前の話でも誤字・脱字のことを言ったのですが

さっそく二通ご指摘がありました

本当に自分の眼はお飾りです

またも言いますが、あなたの力を貸してください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

56話 要注意人物A and B(前書き)

前回のあらすじ

無駄になげえ

学園長のお話だったとさ・・・

56話 要注意人物A and B

ある学園があつた

そこは生徒が武器の使い方を学び

攻撃魔法、治癒魔法の二つの種類の魔法を学ぶ

授業では

他のクラスの人間と戦い

同じクラスの人間とも戦う

女子も男子も関係なく

死なない程度に殺し合いをする

そして

それが普通の学園生活をする

そんな学園

そしてその学園のある廊下を

カツン…カツン…と音を立てながら進む人間が四人

そのうち二人はクラスに入って行き

あとの二人はその一つ横のクラスに入っていく

それは黒髪の男女。

音を立てながら開くドア

それを見て少し緊張した感じで固まる生徒達

そして黒い髪の男は教卓まで歩いていく

それを見た女子は目がキラキラと光り、男子は憎しみの目で睨む

黒い髪の女性は入り口あたりでとまっている

男子は黒髪の女性を見ると顔が嬉しそうになる、女子は憎しみの目で見る

という二つの状態がわかった

そして、黒髪の男は口を開く

「あゝ…今日から臨時でこのクラスの担任になるテツヤ カゲヤマだ
記憶力などはほとんど皆無だ、名前を覚えて欲しかったら
俺にヤキソバパンを贈呈せよ！」

そんな一言。そして生徒たちは

(((もしかして、ダメ人間・・・?)))
全員がその男の的を射たことを考えていた

「まあ、ヤキソバパンのとは冗談だが、このクラスの担任なのと
記憶力が皆無なのは事実だ。気をつけてくれ」

俺、かげやま景山 てつや徹夜は本来まだ学生なのに対して
現在は臨時の先生をやっている

「・・・私は副担任のライル・レイシー。よろしく
得意な事は放火、苦手なものは熱血」

いやさ、確かにライルは火の精霊持つてるし放火は得意だろうけどさ
ちよつとそれを言うのはおかしいと思わないか？
それに苦手なの熱血って・・・なんとも言えねえよ

「人に何かを教えるってのは苦手なので、あまり期待しないでくれ
一応臨時だが先生をやることになった身だ、頑張るつもりでいる
それに、ギャラが高いと聞いたからな」

() (ギヤラって、おい・・・) ()
そんな生徒の考え

「誰も俺のことは知らないと思うが知ってる奴がいたら手を上げてくれ

手を上げた奴は・・・」

その言葉を聞き、当然大会なのでめちゃくちゃ目立ってしまった俺を知ってるものは

いるらしく、教室の大体が手を上げようとする

さっきの言葉の続きを言おうと思う

「・・・フルボッコにして吊るした後に記憶を消してやる」

その瞬間に上がろうとしていた手がバツ！！という音とともに下げられる

うむ・・・、なかなか面白いクラスだ

「・・・冗談だ、俺の言う事の9割は冗談だと思ってくれ」

フルボッコにして吊るした後に記憶を消すのは本当だけどな

「よし、じゃあホームルームは終わり。」

そんな感じでダメ人間MAXな俺だった

「普通さ・・・担当の先生とこういうのは入れ替わるもんじゃないのか？」

「……この学園は違う。育てる教師は冒険者やどこかの国の兵士とかだった人だから」

教師はは基本的に授業全体を担当できる」

「めんどくさいなあ」

「……これも仕事だから」

そんな感じの会話をしている俺とライル

いまは授業中、当然俺の目の前には生徒がいる

ちなみにこの授業は体育

目の前の生徒には屈伸などをして体をほぐしてもらってる

何事も準備運動が大切だ

俺なんて準備運動せずに美月ファンクラブ一同から逃げたときに

足の指が攣った記憶がある

……一体足の指を何に使ったかはわからない、足の指でシガンでも行っただろうか

「この後どんなことをすればいいんだ？」

「……ん、魔法科と剣士科でわかれて、行く必要があるはず

魔法科はとりあえず今まで習った魔法を撃つたりして練習すればいいはず

剣士科はお互いで練習程度に練習用の剣で稽古をすればいいはず」

「ふむ、じゃあ俺は剣士科行くから、ライルは魔法科でいいか？」

「……ん、了解」

そして生徒達を分かれさせて俺とライルもわかる
そして生徒達が自動的に稽古を始めている
ちなみに、そのなかには

「にははははは！！無駄無駄無駄無駄アア！！！」

「ちくしょおツ！！さすがはAランク、
ただの拳で、俺のラツシユがすべて防ぎやがるツ！！」
知らない男子が振る稽古用の剣を全て素手の拳ではじいてるエミリ
イがいた

エミリイは二年S組らしい
ちなみに、エミリイは早くも全員となじんだらしく
俺が来る前の教室ではみんなで笑顔で話していた

ちなみに稽古の最後では相手のラツシユを余裕の感じで避けて最後
に男子の額を殴る
・・・そして男子は吹っ飛んでいった
エミリイは軽くやったつもりらしく「あれ、えッ！？吹っ飛んでい
った！？」てな感じで
慌てている

「先生も剣を選んできたらどうですか？」
ある女子の言葉

むう・・・俺もやるのかめんどくさいなあ

「わかった・・・」
めんどくさいオーラを出しながらもトボトボと歩き
剣が置かれてる所に向かう

「うーん、これは軽いなあ、これも軽い、これも軽い、これすらも
軽い、

む？これは他のよりは少しばかり重いな、これにするか」
俺が取り出したのは剣
だけど大きさが違う。他の剣は1？程度の長さなのだが
その剣は2？。そして剣の幅が男性の肩幅ぐらいだ
簡単に言つと大剣だ

それを片手で持ちトボトボと歩いてくる

「よおし、誰か殺り合おうぜ！」

俺が持っている大剣を怖がってるのか

さっきの俺の言葉の「や（殺）り合おうぜ！」の意気揚々としてい
る言葉に恐怖してるかは

わからないが、全ての生徒がザザザア…と数？後ずさった

「じゃあ、俺がやろう」

その中で一人男子が出てきた

「お前、名前は？」

「ジークだ」

ふむ、こいつが要注意人物の一人か

確かこいつは剣が得意で

その腕は生徒会並。

だから、ギルドで言つとBランク程度だ

「よおし、やろうぜ。要注意人物Aくん」

「俺は職員室で何て言われてるんだ・・・」

普通の場面では普通の人に見えるが

こいつは要注意人物Bが揃わなければ意味が無いらしい

その内容は聞いてないので、どういつぶつに要注意なのかはわからない

そしてはじまる

ジークは俺に剣を叩き込もうと数回振ってくる

それを避け続ける俺

むう、確かに他の生徒と比べると動きも良くて、剣筋もいいとおも
むう……

「こなくそ！あたりやがれエー！」

そんな声をあげるジーク。

ラツシユはその声とともに加速していく

ふむふむ、確かに強い気がするなあ……

俺が軽く蹴りを放ってみる事にした

すると、ジークはそれをしゃがんで避け

しゃがんだ状態のまま俺の顔面に向けて突きを繰り出す

「おお、才能にあふれてますな、若者」

そんなことを言いながらも顔を横に振って避ける

「あんたも十分若いだろっ！！」

そんなことを言ってくるジーク

むう、そろそろ終わりにするか

避けてるだけじゃあ、終わらないもんな

「では、これでおしまいな」

「あ？」

そんな俺の言葉を聞いて疑問の声をあげるジーク

俺が軽い力で大剣を横に振るう

当然ジークは剣で防御しようとする・・・

ここで説明すると、剣は頑丈さ、刀は切れ味を重視している（はずだ・・・）

そして、大剣つてのは重量で叩き潰すものだ、普通の剣と大剣では圧倒的に大剣が有利

しかも筋力では、圧倒的に上の俺に対してその反応は間違ってるといえよう

大剣を剣で防御したジークは

その剣の防御と一緒に押し切られて吹っ飛んでいく

そして地面をバウンドしながら転がっていき

やっとの事だとまった所でうめき声を上げている

そして痛々しげだが、すぐに立ち上がる

「判断を間違えてるな、普通は防御じゃなくて避けたほうがいい筋力とかで押し切れる自身があるならやってもかまわないだろうが筋力でも負けていて、重量でも負けてるんだ。絶対に無理だろ」

俺のそんな声

むう・・・正直あたってるかはわからないなあ・・・

「あ、先生危ないッ!!」

そんな女子の声

後ろを向いてみると迫り来る火系の魔法

「いきなり、なんだよ・・・」

そんな声とともに俺は手に持つてる大剣を片手で横に振るい魔法を大剣で砕く

「ジークが負けたから、俺も試してみようと思って」

魔法が放たれたであろう場所にはある男子が立っている

そいつは杖についた水晶をこちらに向けている

「お前、マーリンか・・・？」

「なんで俺の名前を知ってるんだ？」

ふむふむ、要注意人物Bが登場ですか

こいつは魔法科で

ジークと同じで実力は生徒会並

そしてなぜ職員室では要注意人物A and Bと呼ばれているかは
すぐにわかった

「まったくへぼすぎるなジークは、だからいつも俺に負けるんだ」

「んだとゴルア！！誰がお前なんかに負けたときがあんだよ。この
野郎がッ！！」

「いつもだろ」

「負けてねえし！！なら、今日こそ決着つけてやんよオッ！！」

「いいだろうッ！！今日こそ殺してやる！！」

そんな感じで例のケンカがはじまる

これが職員室で言われてるものだ

ケンカと言っても殴り合いとかそういう問題じゃない

ジークは剣を片手で振るい、マーリンは呪文を唱えながら杖を構える
このケンカのせいで先生が止めに入ったとき

先生すらも怪我を負わしたということだ

ちなみにいつも決着はつかないらしい、ライバルってやつだろうか・

そしてすぐにジークとマーリンの間につき

「頭を痛くさせんな、ボケがア!!」

俺は片手でジークの頭を鷲づかみをすると地面に思いつきり叩きつける

そしてもう片方の手では上級魔法の貫通性の光線へ

おもいつきり上から下に向けて拳を振り下ろし、砕く

「二人一緒にのびてるッ!!」

地面に叩きつけられて目を回しているジークをマーリンに向けておもいつきり投げる

「えッ!?! ちょ、こつち来るな・・・ッ!! ぎゃあッ!!」

マーリンはいきなりの事に反応できずにジークが腹に激突して悲鳴をあげながら

ジークと一緒に床に倒れて動かなくなる

うん、のびたな

そして俺はジークとマーリンの制服の襟をつかみ二人を引きずっていく

「先生、二人をどうするんですか?」

誰かのそんな質問

「当然、? やさしい」教育だ」

俺のそんな声

やさしいを特に強調した言い方はとても怪しいと思う

「あ、あとエミリイも来い」

「え!?! なんでッ!?!」

「止められる實力を持ちながら、止めずに笑っていた罰だ」

「えええッ！！そんな〜！！」

「いいから来いってんだよ、このやるうッ！！」

「みやあああああああああああああああッ！！」
引きずっていく人は二人から三人に増えた

「後は頼んだ、ライル」

「・・・うん」

ライルに任せておれは歩いていく

56話 要注意人物A and B（後書き）

今回ではエミリイは2年S組です
組の順で言つと

C、B、A、Sの四組です

ギルドなどと同じでSのほうに行くほど優秀ですね

エミリイはギルドでAランクなので実質、学園最強です

その実力は先生をも上回ります

ちなみに先生達の実力はBの中位〜A下位であります

学園長はどの程度かはわかりませんが

ほかと比べれば結構強いはずです

そして今回では要注意人物AとBです

要注意人物Aはジークですね

皆さんもおわかりかのとおり

ジークはジークフリートから取っています

ドイツの英雄叙事詩『ニーベルングンの歌』の主人公です

名剣バルムンクを扱っていたという人物です

当然そんなものは学生が持つてゐるわけではありませんが

その名剣を登場させるのも良いと思います

そして要注意人物Bです

マーリンはヨーロッパ中世の伝説上のブリテン島の魔術師
から取らせていただきました

ほかに特には情報はありません

まあ、どちらにも具体的にどんな事をしたのかはわかりませんが
なんとなく歴史上有名(?)な人達ですね

適当にインターネットで調べただけなんで許してください

今回の最初は徹夜くんのダメ人間っぷりがよくわかります
やっぱ大切なのはギャラです、ギャラ

一応有名になってしまった（設定）の徹夜くん

一時限目で今回の話は終わってしまいましたね
無駄に長くなってしまいそうです

好きなキャラ、オススメの小説を教えてください
などは終わっておりません

気が向いたら気軽にメッセまたは感想などでお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

57話 古い本(前書き)

前回のあらすじ

要注意人物AとBは要注意だ

57話 古い本

むう……

「で、他には？」

「だってマーリンがッ！！」

「だってジークがッ！！」

「うっせえッ！！」

何か何かを殴ったような音が二つ響く
お前らは子供か……

「アハハハハハハッ！！」

「お前もうっせえッ！！」

そしてまた一つ同じ音が響く
何ゲラゲラ笑ってんだよ、エミリイは……

「……ッ！！うう……手加減なしで殴らないでよテツヤ」

「俺は臨時だが一応今は先生だ。生徒とは手加減なしで接するのが
先生だッ！！」

ただいま絶賛悪ノリ中です

こんなのは熱血教師がやることだが
正直な所こいつらのせいで俺はいまめちやくちや怒っている
別に体罰ではない。……？やさしい”教育だ

「でも、手を上げるのはダメでしょ」

「そうだぜ、新任教師」

「暴力はいけないよ、テツヤ先生」

「よおし、わかった。手はあげないぞお・・・」

「・・・ホッ」

アンドの声を漏らす三人

「?手”はな・・・」

「・・・ツ!?’」

「あのテツヤ?なに服の中から剣を取り出してるのかな?」
エミリイの恐怖に引きつる表情と声

「テツヤ先生だ、?先生”」

俺はエミリイの発言を訂正する

「そんなの今はどうでもいいじゃんツ!!」

しまつてよ!そんな物騒なものしまつてよツ!」

「いやだ」

「「ぎゃあああああああああああああああああ!」」

「みやあああああああああああああああああああああ

あ!」

二人の男子のうざい悲鳴と一人の女子の可愛らしい悲鳴が
その時学園に響いたらしい

それは『学園恐怖の七不思議』に長い年をかけて語り継がれていく
はめになった

(たぶんね)

そしてそのつぎの日にあたる
そして今日も

「このクソやろうがアアアッ!!」

「このカスやろうがアアアッ!!」
という大声が響き渡り

またジークとマーリンが熱い戦いを繰り広げている

「くらえ!!」
『アース・スピア大地のトゲ』!!」

「ふんッ!!この一年と少しの間お前と戦い続けてきたんだッ!!
その程度の攻撃などお見通しだ!!
切り刻まれて死にやがれエエエッ!!」

マーリンの放った数個の岩のトゲを
うまくかわしたり剣で砕いたりしながらマーリンに近づき
ジークが怒涛のラッシュ

「効かんッ!!それは俺も同じだッ!!お前の攻撃なんざお見通し

別に日記の目があった、その目があるトンデモ日記とにらめっこして
るわけではない
ただの言葉のあやだ

それは二代目勇者の日記

なんとなく読みたくなつたから読んでみる事にした
なにかが気になつたから気になる元の場所を探すことにした
ただそれだけだ

パラパラパラ：と日記を軽くめくっていく

変わらない日記

文字が書いてあるだけの日記

そして、あるページから空白の日記

それをパラパラパラ：とめくっていき

軽く目を通す

「なにもないか。・・・ん？」

最後のページのところでは何かが気になつた
他のページとは違い少し厚いページがある
それを指先でいじってみる事にした

「二枚が重なって張り付いてる・・・」

二枚が張り付いてまるで一枚のようになっていた
それを丁寧にはがしていく

何百年も前の日記だ。少しでも間違えれば破れてしまう
だから俺は、プロでも驚くような丁寧さではがしていく
そしてやっとのことではがし終わる

「む・・・？」

そこには文字があつた

黒い文字

だけでも、ペンで書いたようには見えず

指と同じ太さで書かれていて、所々ちゃんとかけていないようだ
まるで、習字を書くときに墨が少なすぎたときみたいになっている
その黒い文字は

なにかペンの黒色とは違う気がする

なんとなく臭いをかんでみると、なにか鉄のような臭いがする

「もしかして、血か・・・？」

血は時間がたつと黒くなる

これはそのせいで黒くなった血なのかもしれない
その文字を読んでみる事にした

「えつと・・・」
『我が記憶をここに残し、次の世代の者へとこれを示す』？

俺がなんとなく指でその文字をなぞりながら
口を動かす

すると、その文字がいきなり光りだした

「・・・ツ！？」
言葉で発動する文字の形をした魔法陣か・・・ツ
！！？？」

んな、むちゃくちゃな事してんじゃねえツ！！

そんな考えを抱きながらも

俺の意識は何か吸い込まれていくように遠のいていく

57話 古い本（後書き）

今回では

ついに本気で高校が本格始動

いままでは5時とかまでに帰ってこれましたが

今回は7時半になりました

連日投稿ができなくなる、っていままでも言っておいて

連日投稿をしまくっていた俺ですが

これは本当に無理になってくるかもしれませぬ

まあ、俺のことだから無理やりにもやりそうだが

今回では早く投稿だけでもしようといろいろと省いて書いたので

2000文字は行かないだろうなあ、と思い書いたのですが

二代目勇者の日記のことを書いていたら

2000文字を超えました

驚きです

これからは俺が考えて

「これでいいかな・・・」と思った設定ですが

もしかした、納得できないものになるかもしれませぬ

とりあえず一応報告しときます

それでもいいなら読み続けてね

今回は投稿するのに急いでいるので

最後の「」メッセージまたは感想を送ってね「の」ところは省きます
すみません

誤字・脱字があればマジで御報告お願いします

58話 古い日記の記憶（前書き）

前回のあらすじ

徹夜は日記の魔法に
のみこまれていった

58話 古い日記の記憶

「・・・ここはどこだ？」

さつきまで魔法学園の先生用の部屋で

日記を読んでいたはずだった俺は

どこかわからない場所に立っていた

俺が予想するにここはあの日記に書かれていた文字・・・

「あの文字は元の世界で言うルーン文字ってどこか・・・？」

・・・ルーン文字の力により

なにかにひきこまれたようだ

「・・・えつと、文字の意味を考えるに・・・記憶？」

俺はそんな言葉をもらしながらも

進む

ここがどこでどういうわけかは周りを見ればわかるだろう

「ん？」

金属がぶつかり合う音が聞こえた

俺からは見えないがどこかで音が聞こえる

そちらに向かって歩いていつてみる事にした

そして、やっと見える所まで着く

「は？」

俺の目の前には

ある御一行と腹からしたの体を氷付けにされ身動きの取れない魔族
がいた

その魔族は女性だった。俺の見たことの無い女性

そしてその魔族と戦っていたらしい御一行には

俺が一方的に見たときのある顔がいた

「このクソ勇者がッ!!」

魔族の女性が吠えた

この言葉通りその魔族の女性の前には勇者がいた

二代目勇者の山本 李氏が

「そんなこと言わないでよ。『魔界六柱』No.5のサイト・リズ
メリアさん」

魔族の名前には聞き覚えがあつた

ジークル・ライが悪竜の封印を解いたときに

悪竜のイルリヤが言っていた名前だ

「うるさいッ!!我が同胞を3人も排除したお前などにッ!!」

「君も同じ事になるんだ」

「・・・ッ!!」

「知ってる?僕は初代勇者に比べると物理攻撃では劣るんだ

ただ、僕は精神干渉魔法が得意だね。相手に触るだけでも頭の中を
いじる事は可能なんだ

記憶だつて例外じゃない」

「このクソがアッ!!」

「顔の整形の魔法もある。あなたは魔族と他の種族の戦争から排除
される

僕が転送する大国『サラスム』では僕が魔族を保護するようにと、

話をつけてあるからね。君はそこで平和な暮らしができる」

「そんな物私が望んで無ければ意味は無いッ!!」

「確かにそうだろうね。でも君は記憶を永遠に失い、それを思い出すことも無ければ」

その事が不幸な事に思えるわけも無い

それに、僕は相手が魔族でも殺したくないんだよ。

僕の勝手な理由で悪いけど、生きてくれ」

そういつと李氏は魔族の女性の頭に手を置く

その手が光ると同時に、その女性はどこかに転送されていったあの一瞬でやることは終わったようだ

「・・・リシくん」

ある女性が勇者に声をかけた

その女性は真っ白な格好で。俺の知る顔だった

今も昔も変わらない顔だ

多分魔族を拘束していた氷は彼女のものだろう

「…何を言われても殺さないのは変わらないよ。」

「それはリヤナが魔族だったから・・・？」

「それは違う。そんな理由でなんて考えていない

この考えはリヤナさんと会う前からあったものだ」

「・・・それならいいけど、あなたはリヤナと戦えるの？」

「戦えない、でも決着は僕がつける」

「矛盾してるわ、リシくん」

「矛盾してても構わない、俺は俺の考えを曲げるわけにはいけない、この考えだけは」

そんな会話が続き

また御一行は歩き出した

どうやらこれは魔界にいるようだ

どうやら今は昼の時間らしい

だが、空は真っ黒で薄暗い

洗濯物は乾きそうに無い・・・こんな無駄な事を考えている俺はほつておこらう

「日記になにしているの、リシくん？」

「僕の血でルーン文字を書いている」

「なぜ・・・？」

「文字だけで僕の存在を残すのだけは嫌だからね

この魔法に少し前から僕の記憶をコピーしておくの

・・・よし、完了。あとは糊付けしてはがれないようにと・・・
完璧」

そんな事を言っている李氏

どうやらこの魔法のせいで俺はこれを見ているらしい

「でも、数日間記憶をコピーしたら、もしかしたら誰かが見たときに数日間寝たきりになるんじゃないの？」

「大丈夫、僕の記憶ごときなんて時間をかけさせないよ
大事と思われる所以外は自動的に消去されるようになってるから」

そんな言葉を聞いた後に
すぐに違う場面に移った

・・・大事な所以外は消去される、というのはこういう意味か
次の場面は魔族と戦ってる所で
俺の知っている魔族ではないことは確かだった
そして、その魔族に勝ち、魔族の女性と同じことをし
すぐにまた画面が変わるようにして
違う場面に移る

それは李氏とリヤナというなの魔族が敵対してる所だった

「勇者リシ、お前を殺す」

リヤナという魔族の冷たい声が響く

そして李氏が何か言う前にリヤナは攻撃を繰り返す

手から何個もの球状の黒い物体が飛び出す

それは岩をいとも簡単に砕く威力を持っていた

それをリシが避けながら進む

「リシくん！」

ハクのそんな声

「手は出さないでくれ！前も言ったとおりこれは俺が決着をつける
！」

そんな李氏の声

その間にも攻撃は続き、それを避けながら進む

が、進もうとしてみても李氏は攻撃を避けるのに精一杯のようで近づけてはいない

「リヤナさんは何がしたいッ!？」
李氏の突然のそんな声

「お前は私が殺す!任務は全うする!!それが私のやりたいことだ
ッ!
それにたいして攻撃の手を緩めることなく大声で答えるリヤナ

「そんなの嘘だッ!！」

「嘘などついていないッ!！」

「じゃあ、なんでリヤナさんはそんなにつらそうなんだッ!！」

「……ッ!？私はお前と一緒にいたときもつらかったッ!！」

「俺は君といる間はとても楽しくて、とても嬉しくて
ずっと君の顔を見ていたッ!！」

最初は無理にでも笑おうとしていた感があったのは否定できないッ
!！」

でも、そんなに辛そうで、悲しそうで、寂しそうな顔は見たときな
んか無いッ!！」

戦うのなんてやめようよ!！どこかで平和に暮らせばいいッ!！」

「そんなわけ……」

「否定できるの?リヤナさんは……?」

あんなに楽しそうに笑っていたリヤナさんはそれを否定できるの?」

いつのまにか攻撃はやんでいた

「できない……。でも、私は『魔界六柱』のNo.1として……多くの人間を殺した……。それに今だつてリシを殺そうとした……。そんな私がッ！！……」

「……私が今更、私がそんなことできるわけがな……。ッ！？」

いつの間にか李氏がリヤナに抱きついている

きゃあああああ！これは俺の悲鳴ですよ

リアルで恋愛ドラマみたいなものを見た俺の悲鳴です

乙女じゃないです、男です。もしそう思った人がいるなら目をえぐりますよ？

「リヤナさんは僕を助けてくれた。あの時僕を助けなければ任務なんて終わっていたのに

人が死ぬのを見たくなかったから、そんなことをしたんだよ

それに短い間の旅立ったけど、リヤナさんは途中で寄った村で子供達と

笑顔で遊んでいたし、危ない所を助けてたりもした！」

え？子供を助けた？そんなの日記にそんなこと書いてなかったんだけど

「その姿をもつたいないから日記に書かず俺の記憶だけの楽しみにもしたッ！！」

そんな理由ですか……

李氏は少しだけリヤナさんから離れて
目を見ながら言う

「俺は君が好きだッ！この戦争が終わったらどこか人のいない所で
一緒に暮らそう・・・？」

そんな李氏の言葉

それに対してリヤナさんが答えようとした

その時、なにかトツ…という軽い音が聞こえた

そして、リヤナさんの胸辺りには小さな穴が開いており
血が噴出した

力なく倒れるリヤナ

何かの攻撃だったようでリヤナさんの体を貫通したその攻撃は
李氏の横腹も貫いていた

「な・・・ッ!？」

李氏が驚きの声をあげる

リシの動きは遅く、とても辛そうで力が抜けて倒れそうになるのを
必死にこらえてるのがわかる

「これは敵前逃亡というのか？私の娘にしてはダメなやつだ」

そんな声が聞こえた

それは30台程度の歳の男性だった

それは魔王のようだ

「リヤナさん！リヤナさん！」

李氏がリヤナさんの横に座り込み

リヤナに呼びかけている

どうやら死んではない様でまだかすかに息がある
だが、もう死しかないとしか言えない

「リヤナさんっ!!」

李氏の目からは涙がボロボロと流れていた

「リ・・・シ・・・あなた・・・は泣き虫・・・ね」

かすかに聞こえるリヤナの声

リヤナはゆっくりと李氏の頬を撫でながら言う

「うん、俺はだめな男だから」

「だめ・・・なん・・・かじゃな・・・い・・・わ・・・私
のからっぽ・・・の心。」

どう・・・にか・・・お・・・とうさ・・・まのやくにたって・・・
・
どうに・・・かうめよ・・・うとし・・・ていた・・・からっぽ・・・
・のこころに・・・

あなたは・・・かんたんに・・・あた・・・たか・・・い心・・・
・でまんた・・・んに・・・して・・・くれたわ」
かすかな声

途切れ途切れの声。

その声はだんだんと確実に力がなくなってくる

「ありが・・・とう、リ・・・シ。わた・・・しも・・・あなた・・・
・が好き・・・だった・・・わ」

そんな言葉を言った後に

力なく下に落ちるリヤナの手

その顔は死ぬというのがわかってるのに幸せそうな顔で

李氏とあったことに後悔はなくとても幸せだった、というような顔

だった

「俺も好きだよ、リヤナさん。もし生まれ変わることが可能ならあなたとずっと一緒にいたいくらい・・・」

そんな事を言うと李氏は立ち上がる

次の瞬間には、顔を上げる

その顔には悲しみもなにもない、ただ怒りのみ

「お前を殺す。魔王」

「ほお、横腹に穴が開いてる状態でそんな事を言うか」

そんな魔王の言葉

李氏は後ろに向き直り

なにもできずに呆然と立っている仲間達に

「ここまでありがとう。さようなら」

そんなことを言うと次の瞬間には仲間達の周りが光りだす

「リシくん!!」

「「「勇者様ツ!!!?」」」

次の瞬間には仲間たちは消えていた

「大国『サラスム』に転送の魔法で送ったのか。

それでいいのか？傷を負ったお前では到底私にはかなわないぞ？」

「いいんだ、これで・・・」

李氏は体の前に手を持ってくる

胸の前で手をかざす

「俺ごとお前を殺し切る!!」
その言葉とともに李氏の手のひらの間で
凄い量の光が現れる

「お前その魔法は・・・ッ!!お前の命と替えてまで私を殺すつもりがッ!!」

その魔法をみて魔王があせりを見せる

「・・・ライフ・フィニッシュ・シャイニング『生命最後の輝き』!!!!」

その手の光がまるで爆発の衝撃破のように周りに広がっていく

「・・・ッ!!」ダークネス・シールド『最強の闇の盾』!!!!」

魔王が防御魔法を張る

李氏の光の魔法はその盾ごと魔王を飲み込んでいった

58話 古い日記の記憶（後書き）

今回では李氏が主に主でした

場面を説明してるのは徹夜くん

ときどきギャグが入った気もしますが

ほとんどがシリアス

そして

なんだこの「うつエンド」はアアアアア！！！？ 0 0

俺の小説ってこんな「うつなストーリー」じゃなかっただろ！！
なんでもかんでも幸せフィニッシュ。

それが俺の小説だろおおがあアア！！！！

皆さんすみません・・・

そして今回の小説

李氏とリヤナのやり取りを書いていて

とても恥ずかしかったです

自分が書いている脇では母親がテレビを見てました
見られてないかドキドキしてました

リヤナさんの最後の力なき言葉

みなさんはちゃんと理解できましたか？

一応ここで書いておきましょう

「リシ、あなたは泣き虫ね」

「だめなんかじゃないわ。私の空っぽの心。

どうにかおとうさまのやくにたって

どうにかうめようとしていた空っぽの心に

あなたはかんとんに温かい心でまんたんにしてくれたわ」

「ありがとう、リシ。私もあなたが好きだったわ」
です。

ぎゃああああああああああああああああああああ
めちやくちや恥ずかしい！！

無駄に頑張んなきゃよかった！！！！

今日はとりあえずこの鬱な展開を早く終らせかけたので
短い時間で頑張りました末、連日投稿ができました

俺、よくがんばった(´・`・´) b

とりあえず

これで終わりにさせていただきます

あなたの好きなキャラ、オススメの小説を教えてくださいだ
まだ終りません

気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があれば御報告宜しく願います

59話 そして・・・(前書き)

前回のあらすじ

二代目勇者のリシの記憶

とても恋愛ドラマだった

59話 そして・・・

無

無の空間

まるでテレビの電源を切ったときのよう

映像が途切れた後の真っ黒の空間

・・・そこにはなにもない

「どうやって戻るんだ？」

そんな俺の疑問の声

そんな言葉には誰にも返答を求めた質問ではない

「まだ帰れないさ、古い本の魔法はもう終わっている。この私が引き

継いだのだから」

そんな返答

俺の後ろ側からした

「誰・・・？」

そんな声とともに俺は後ろを振り返る

30台の男性

その顔の人とは話したことも、現実であった事もない。

ただ、その顔を見たときがあった

さっきの日記の記憶に出ていた男

魔王だ

「お前が魔王ですか・・・」

「私が魔王だ」

これが美月の敵ですか・・・

「さっきの記憶の最後を見る限り

あんなものを食らって生きていて・・・化け物か」

あの魔法はかくく上級を超えていたと思う

まあ、上級魔法は命なんて削らないから

命を削った魔法なのだから強力に決まってるのだが

上級魔法がS級と考えるのならさっきのはSS級といったところだろう

「ああ、あれは本当にまずかった。今までの三人の勇者の中で

私に一番ダメージをくらわせたのはリシだけだよ

正直、あぶなかった」

「・・・」

なんなんだこれは、一応俺は敵(?)だと思うんだが・・・

「ああ、お前には本名の自己紹介をしていなかったな

クルズ・ミリアルズ・サイト・マラサイト。魔王をやっている」

「本名あったのか・・・」

「私は千年以上も魔王をやっているが、最初はただの魔族として生まれたのだ

名前ぐらいあつて当然だ」

「俺とただ話しているだけでいいのか・・・?」

「ここでは戦闘禁止だ。私が引き継いだとて、あくまでここはリシの日記の世界。いくら私でも介入する事が精一杯

攻撃する力までは持ち合わせてはいない」

「ふうん・・・」

なんて反応すればいいんだ・・・？

「勇者は偉大だ」

魔王がそんな事いつていいんですか・・・？

「私を今まで何回も追い詰めてくれる。そのせいで何回長い間力を貯めるために動かずにいたことか」「めっちゃ勇者を褒めちぎってますね

魔王さんは

「だからこそ、勇者を殺すのは面白い」

魔王はニヤリと笑いながらそんなことを言った
・・・自信満々ですな

「それにしても、会えて嬉しいぞ」

「俺はうれしくない」

「そう言うな。お前は私の娘なのだから」

「・・・は？」

「もう一回言おうか？お前は私の娘だ。」

嘘だあああああああああああああッ！！！！

ていう、スターウォーズのお決まりの展開の前に・・・
ツッコミ所が一つ

「俺は男だぞ、娘はおかしいと思うが・・・」

俺は男です

それは俺への挑発ですか？ あゝ あんツ？

「いや、娘であっている」

魔王のそんな言葉

よし、絶対殺そう

「お前は我が娘リヤナの生まれ変わりなのだから」

「・・・は？」

俺はその言葉の意味がわからなかった

「お前の使う闇、魔力、そして魂。どれもがリヤナと似ているというか、リヤナそのままだ。」

お前は記憶も無いだろうが、お前はリヤナだ。間違いない」

「・・・は？」

ちなみに俺ははまだ追いついていけず・・・

「人間が闇を使えること自体がおかしいとは思わないのか？
いくらお前が異常な存在だとしてもありえないだろう」

「・・・は？」

しつこいようですが追いついていけません

「ハア・・・消化不良を起こしているお前の事はほっておくとして
私にはお見通しだぞ、リヤナ。わずかにだがその男の魂のほかに
毛色の違う魂が残っている事はわかっている」

そんな魔王の言葉

すると俺の足もとから闇が勝手に出てきて

一箇所に集まる

「ふん・・・一生会いたくない顔に会ったわ」

その闇が次の瞬間には魔族の女性・・・リヤナの姿へと変わっている

「・・・は？」

この現象にも着いていけません

「いい加減まともに戻りなさい、徹夜。私の本体のくせに固まっっていないで欲しいわ」

「・・・え？あ、はい。わかりました」

「・・・まだ心配だけど、とりあえず良いとして何の用かな？お父様。わざわざ娘の顔を見に来たって訳じゃないでしょう」

「そんなつまらん理由では来ない」

「・・・つまらない理由ですか」

リヤナの呟きは誰にも聞こえなかった

「お前が魔界の軍に戻ってこないか、という事を言いに来た」

「また軍ですか。私が生きていた頃も軍、支配、殺し

全てそれだけでしたね、普段私を見ようとしなかったのに

私に才能があることがわかれば、軍で利用していく

あなたはとことん駄目な親ですね。家族という意味を知らないのかしら」

「家族なんてどうでも良い

私は今も昔も変わらない・・・」

ちよつと待ってくれませんか？

俺を置いていかないでくれませんか？

「それに今は離れています、私はリシの元からは絶対に離れませ
ん」

「え？リシ・・・？」

俺がやつと声に出せた、質問の言葉

「ええ、リシも生まれ変わってます。美月ちゃんにね」

「ええ・・・！？」

「魔族と人間のカップルは相当神様のお気にめされたようですね
リシの最後の「生まれ変わっても」という言葉を現実にした、とい
うところです

と言っても、リシは私とは違い少しも残りませんでしたので

「リシ」ではなく「美月」という魂ですけどね」

「そ、そうなんですか・・・」

「ああ！！あの可愛くてやさしいリシはいなくなっただけど
美月も男の「徹夜」としてはとても最高です！！ああああ！！また
会いたい！！

早く会いに行きなさいよ！！」

「何勝手にトリップしてるんですか・・・」

「・・・お気になさらず。」

とりあえず、お父様にはお引取りをしていただきます」

「答えはNOか」

「答える必要もありません。ここはリシの記憶

あなたみたいなのが入ってくることで自体が間違いです
さようなら」

リヤナが手を振ると同時に

魔王の体が薄れていく

「ふん・・・昔の勇者のリシが現勇者になり、リヤナがその幼馴染
か・・・

とても面白い組み合わせだ、とても良い絆でつながってる事だろう
・・・楽しみだよ

その絆を壊す事がな・・・」

そんな言葉を残して消えていった

・・・どうやってそこまで情報を引き出したのですか？
幼馴染とか俺言ってますよ？

「とりあえず徹夜。頑張ってるね

死なないようにしてね、リシ・・・美月ちゃんと一緒にいなさい、
いつまでも

私もあなたも鈍すぎますから」

リヤナがニコリと笑っている

「私はまた奥に閉じこもります。私の力ではこれが精一杯ですから
あ、あと私が出てきたせいで私の記憶があなたに流れ込みますので
本当に申し訳ありませんね

徹夜は徹夜です。私の記憶が流れ込んでもそれは変わりませんから」

その言葉と同時にリヤナの姿は消えていく

「記憶が流れ込んでくる・・・？」

俺が疑問を言葉にした瞬間に頭がズキリと痛んだ
あの大会で闇に飲み込まれたときと同じように

ただ、あのときの一瞬の記憶ではなく
十数年という記憶が一気に

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああッッ！！！」

めちゃくちゃ頭が痛いいいッ！！！！」
流れ込んでくる

ある一面が浮かぶ

『お父様、一緒に食事をしませんか？』

『私は忙しいんだ、無理に決まってる』

『・・・そうですか』

そして消える

また浮かび

『お父様！私は軍事の成績でSをとりましたッ！！』

『じゃあ、すぐに訓練をして殺すことを覚えなくてはな』

『え・・・っ？』

そしてまた消える

そんな物が十年以上のものが

頭に浮かんでくる

これはずっと続く

全てがつらく、魔王の冷たい態度

人を殺し、どこかの国の国の騎士を相手に戦い、また殺す

そんな物が続いていく

それはとても暗く、つらく、寂しい記憶

そんな物が続いていく

そして最後に

『お、おれはリシ ヤマモトっていうんだ。君の名前は？』

『・・・リヤナ』

『よろしく』

そんな記憶が見えて

最後にはとても楽しそうで、幸せそうな感情が記憶されていた

「うだう、頭がズキズキする・・・」
やっとの事で生還

リシの恋愛ドラマを見ているよりも
辛いような痛みが頭に残っている

「うん、なんかダルいぞ・・・熱か？」

59話 そして・・・（後書き）

最初にある方々に一言

申し訳ございません！

前の話を投稿した後に俺が恐れていたことがおきました

「義妹が勇者になりました。」に似すぎています。という感想です
その方にも送ったのですが

自分は考える力がありません、このもともとの設定は
「義妹が〜」など「黒い剣〜」など他にもたくさん小説を読ませ
ていただき

書かせていただいた小説でございます

（例に出した二つはどちらもトップ20に入ってますね）

当然、できるだけ違うように書いているのですが

無意識の内に似させてしまう場合が多いと言っていていいでしょう

自分でも、あまり良い事とは思えません

直したいとは思ってもここまで書いた話数などを考えると

自分には無理ですし、変えて言ってしまったら

ただでさえガタガタな設定の小説なのに

もっとガタガタになってしまう可能性があります

本当に申し訳ないです

この小説は似てしまってる作品が多いと思います

そこは劣化品と思って見逃していただけないでしょうか・・・？

と、まあこんな感じの言い訳です

あとがきで書いてもあまり意味無いんですけどね

本当に申し訳ない、とは思っていますが
この場合、自分は何をしたらいいのかわかりません（汗）

話が変わります

今回の話ですが、いろいろと続けてシリアスを続けましたね
ほんと、俺の小説には似合わないです
そして、リシとリヤナのような恋愛ドラマみたいなのは
もう書きたくありません
恥ずかしすぎて爆発死します

今回の徹夜くんは

魔族の女性リヤナの生まれ変わり、という設定になりました
これは書き始めた頃から考えていた事です
ここまで書くのに結構時間がかかりました
頑張ったと思います
正直、詰め込みすぎたかな？とも思います

では、このへんで終わらせていただきます

好きなキャラ、オススメの小説を教えてください、は終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

60話 高熱により（前書き）

前回のあらすじ（ここは大事ですよ）

・・・今回はあらすじではなく
皆様に謝らせていただきます

今回は主人公の徹夜くんは

突然の高熱により、休ませていただきます

私達のご都合により、本当に申し訳ないと思っております

今回のことは少しばかり温かい目で見守ってください

今度からはこんなことがおきないように

気をつけて行っておきます

徹夜が何故、いきなり熱を出したのかはわかりませんが

本当にこれからは気をつけます

体調を見る限り2〜3話ほど休ませていただきます

本当に申し訳ありません

その代わりと言っていいかはわかりませんが

ある方を主に出させていただきました

60話 高熱により

「・・・ああ、俺だって別に休みたいわけじゃあない
なんたつて主人公だよ？どんなときでも少しでも出番はあって欲し
いじゃないか？」

だつてさ、そのほうが俺にとっては楽しいんだ
君はただ寝てるだけで楽しいのか？熱を出して寝て

見る先には面白みも無い天井、だるい気分、そんなものはどんな人
でも嬉しくないだろう

俺に出番が無くて少しでも残念に思ってくれた人、あなたは良い人
生を歩めると思う

俺が出なくて「よし」とか「ざまあw」とか思った人、そんな人には
苦痛と絶望のフルコースをくらわせてやる

そして、「ハッ・・・どうでもいいんだよ」てな感じのことを思っ
た人

あなたは明日には目に俺の指が突き刺さってると思ってくれ・・・

「何を騒いでおるかッ！！ご主人！！」

「・・・すみません」

「病人は」「ただひたすら」「静かに寝てれば良い」「

「・・・はい」

要するに十数年以上の記憶が流れ込んだせいで

俺の許容量の低い脳ミソはパンクしました、

俺の脳ミソは弱い、弱い

「・・・というわけで、徹夜先生はお休みをします」

そんなライルの言葉

それはある三人にとって

ラッキーなニュースであった

そしてその二人はにらみ合い、すぐにもケンカになりそうになる

「・・・徹夜から伝言ですが、「エミリイ、ジーク、マーリンが何かしたら

俺が復活した後でコロス」だそうです」

「・・・」

ケンカしそうだったにらみ合っていた二人はお互いに中のよさそうなニッコリ笑顔でいて

一人はただ無表情にいる

三人ともガタガタと震えていたらしい

「・・・ハッ！！徹夜が熱を出して寝込んでいる気配ッ！！看病しに行かなくてハッ！！」

ある女性がそんなことを言って今すぐにも走り出そうとする

それがある女性が羽交い絞めをして止める

「美月様！変な事を言って走り出そうとしないでくださいッ！！」

「だって、マイルう、本当に心配がするんだものッ！！」

「それでもダメです」

この女性はマイル・トクルサー。

サラスムでの初の女性の騎士であり

結構な強さを持つ女性である

そして今は勇者御一行の一員としている

「……(ムスッ)」

美月はほっぺを膨らませたままマイルを睨む

それを見たマイルは

「そんな事したって同姓にはうざいだけですよ」

そういつて受け流す

そう良いながらも微妙に顔が赤く

目をそらしてる所は気にしないで置こう

「いつも美月様は「徹夜」という名前を連呼されますが、

それは一体誰なのですか？」

それを言ったのはある女性

肩には大きな鎌を担いでいる

サイス、これが彼女の名前である

見た目は14歳程度なのだが、これでも二十歳を過ぎている

「徹夜は徹夜だよ」

「それでは意味はわかりませんよ・・・」
新しく会話に入ってきたのはある男性
その男性はマイルと同じ騎士であるロイズ・ルーサニツヒである

「ロイズはお姉さまには近づかないでください。」

お姉さまに男など一切近づく事は私がさせません」

こんなことを言って蹴る準備をしているのは召使のラルチという少女だ
この「お姉さま」と聞けばわかるとおり
ファンクラブ同様、美月に心酔中だ

「・・・」

無言でそれを見てるのがロミル・トゥート二という女性

Sランクの実力を持つ彼女だが、ほとんどが詳細不明である

「徹夜殿とは一回私はあつた事があるぞ」

「コッツ!?!」「」

マイルさんの言葉にサイスとロイズとラルチが食いつく

「でも、ラルチは一応知ってるんじゃないの?情報を集めてくれた
のラルチなんだし」

美月のそんな言葉

ラルチは表上は召使だが

裏では相当の情報網を持っている

三人と一匹の冒険者と美月が会ったときもラルチの情報網が原因で
ある

「一応情報だけは知ってますが、具体的な容姿などはわかりません
ので」

「ラルチが情報を集め切れなかったの？」

「なにやら裏に結構大きいのがいるみたいでいろいろとカバーされてます」

ちなみにバツクとはイリルがルミのことをあまり知られるのはさすがにまずいかな、と思い

権力を使って消して行ってるだけなのだが
それは結果的にも徹夜の足跡を消していく形にもなっている

「ちなみにその「徹夜」という人は今は魔法学園で先生をやってますね」

あくまで容姿だけだが・・・

「よし！ありがとう、ラルチ。私行ってくるッ！！」
そんなことを言って走り出そうとする美月をまたもおさえるマイルさん

「・・・話を戻すがその徹夜くんは悪い所の無い人でしたよ。」

「悪い所がない・・・？」

「ああ、容姿も良かったし私達が巫女と勇者を捜しているときにわざわざ二人の居場所を教えてくれたほどだ」

「・・・厄介払い？」

そんな三人の言葉

「・・・ガアーン」

あまりのショックにわざわざ自分で効果音をつける美月

「……で、もつと話を戻しますが、この状態をどうします?」
マイルさんの言葉

「え? 返り討ちじゃないの?」

美月のそんな言葉

この六人の周りには

何十人と武器を持った奴らが立ち

美月たちに向けて殺気を放っている

「でも、この数と質は私一人で十分かな」

美月がそんなことを言いながら手を空にかざす

「……『ライトソード・レイン光剣の雨』!」

その言葉と同時に空から何十、何百と言う数の光の剣が降り注ぐ
次の瞬間にはその場に立っていたのは勇者御一行だけだった

「あいかわらず凄まじい……」

サイスのそんな発言

「……こいつらは闇ギルドのトップ3に入る

ブラック・クラウン
『黒の道化師』ですね」

「他のトップ3の闇ギルドも黒ってついてなかったか?」

「トップ3の闇ギルドは全て「黒」という名前がついていますよ
それが頂点に立つ者達だ、という事を意識してるみたいです」

「……そうなんだ。」

「どうしますか、勇者様？」

「当然、裏社会と言うのも変えていかなければいけないからね
・・・解体しよう」

美月のその言葉により

一つの大きな闇ギルドを解体するべく

少数、しかしとても強力な勢力が動き出す

60話 高熱により（後書き）

今回は勇者様が主でしたね
久しぶりに出ました
ただし困ったのですが、

徹夜とペアじゃないとやりづらい！

美月は徹夜とペア、という感じで作ったキャラでしたので
一人、または他の人が相手だと、非常にやりづらい面があります
盲点でした

徹夜を重視するあまり、最初と同じキャラにするのがこんなにも辛くなるなんて・・・
とても困り者です

美月さんは一応チートです
主人公ばかり出していたのでわかりませんでした
徹夜くんと同じスペックをもってるはず
徹夜くんは闇ですが、美月は主に光です
それは今も昔も変わりません

あえて言えば今回の徹夜くんの熱は
ちょうど良かったと思います
前から美月を出したかったのですが、なかなかそうは行きませんでした
した

そして徹夜くんの熱ですが
いくらチートキャラでも、さすがに十数年という記憶が
一から十まで流れ込んできたのに

平気でいるのはおかしいかな？と思ったので
熱をだした、ということにしました

そして今回の前書きです

前書きと本文は連動しております

後書きは連動はしていませんが、本文とつながってる前書きなので
ふざけて謝罪文を書かせていただきました

全てがふざけてるわけではなく

2〜3話は徹夜くんは寝たままです

そして、今回の徹夜くん！

読者にまで干渉して来ました・・・ッ！

気をつけてください！苦痛と絶望のフルコースをくらいます！

ちなみに自分は苦痛と絶望のフルコースを食らうはずです

みなさん、自分が投稿してこなかった場合は

苦痛と絶望のフルコースによりお亡くなりになったと思ってください

ちなみに自分は幽霊になっても完結までは投稿するつもりです

では、これぐらいで俺の無駄話を終わらせていただきます

次は本気で美月ちゃんが戦います！

好きなキャラ、オススメの小説を教えてください、はまだまだ終りま
せん

気が向いたらお気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

61話 闇ギルドと勇者(前書き)

前回のあらすじ

徹夜はお休み

美月がメインです

61話 闇ギルドと勇者

「・・・ヒマダ」

「ご主人ッ！！」

「スンマセンシタアーーーー！！！！」

数人の男達が一気に襲い掛かる

「はっ」

その声とともにある女性・・・勇者である美月が数人まとめて切り伏せる

斬られた男たちは

全員死んでいない

致命傷を避けられて斬られた者、ただの打撲で気絶させられた者
そんな感じで全員死んでいない

「美月様、わざわざあなたが前線に出なくても・・・」

「でも、マイル。勇者なんかだからちゃんと働かないと意味は無いと思う

名前だけじゃあ、意味は無いの」

「・・・確かにそうですが」

「だったら、何も言わなくていいよ」
そんな会話をしてる間もマイルと美月。
どちらも数人が襲い掛かってくるが、どちらも剣で一太刀で切り伏せる

「・・・『ビジョン・サイス幻影の鎌』！！」

隣からのそんな声

そちらを見てみるとサイスの鎌が複数に増えて
相手を惑わせながら切り刻む姿があった

「・・・さすがはトップ3の闇ギルド・・・無駄に敵の数が多いわ」

サイスのその言葉通り今勇者ご一行は

『ブラック・ケラウン黒の道化師』という闇ギルドの本拠地にいる

その本拠地は裏市場という所にあり

表通りにある小道にそれ

一定の道を通るといける道、一回でも道を間違えると表通りに逆戻りするという

不思議な道を通った先にある

そんな場所にある建物

そこが本拠地として動いていた

そこは今はところどころ煙が立ち上がり

悲鳴、なにかの壊れる音などそのほかにもいろんな音が響いている

「出てくるのはザコばかりですね、大物の幹部3名とボスが出てきてません

少し気になりますね」

ロイズという男性の騎士がそういった

「だから、ロイズはお姉さまにしゃべりかけないでください
お姉さまの美しい耳にゴミが詰まってしまいます」

「・・・」

いきなりそんなことを言ったのはラルチ
今はクナイという短い刃物を持っている
完全に忍者だ

そして無言でそれを聞いているのはロミル・トゥートニという女性
腕は確かだがほぼ詳細が不明という人だ

その人は美月たちと同様
一気に襲ってくる数名の人たちを一瞬で切り伏せる
当然のこと殺してはいない
それは美月の命であるからである

「まあ、ロイズの言うとおり大物が出てこないのは気になります」
マイルがそんなことを言う

「意外と私達を恐れて逃げていったのかもよ？」
サイスのそんな言葉
それに対して美月が口を開く

「サイス、それはフラグが立つちゃうからやめたほうがいいよ」

「ふらぐ・・・？それってなん・・・」
サイスが三月の言った事に対しての疑問を聞こうとした瞬間に

ストーン・ウォール
「・・・『石の壁』！！」

そんな声が聞こえた

その瞬間に勇者御一行を分離するように壁ができる

何人かずつ分離された

「・・・分離されましたね」
マイルのそんな声

「ええ、分離されたわね」
サイスのそんな声

そして二人は少し考えた後

「他の人達は大丈夫だろうから、私たちは進もうか」
そういつて二人で歩き出す

「む・・・？」
二人は一緒に固まる

「ぶほほほ、おいらのところにきたのはお前らか、おいらが相手をしてやるぞ」

目の前にはデブ
ひたすらデブ、デブ、デブデブデブデブ
デブである

そのデブは口から炎を出している

「・・・」

「名前は忘れたけど3人の幹部の一人だわ」
サイスのそんな発言

「じゃんけんで負けたほうがあいつを殺そう」
二人はじゃんけんをする事にした

「なんで私があなたなんかといなければならぬのですか・・・」

「それは俺の言葉だ、なぜに同性愛者などと一緒にいなければならぬのだ・・・」

ラルチは普段のまま

ロイズは他の人がいなくて相手がラルチだということ
いつもより口調が厳しくなっている

そんな感じながらも歩いている二人

「ああ、お姉さまが心配です、お姉さま、ああ、お姉さま」

「本当にお前は変態だな」

「うっさいです」

「変態だつていいじゃないッ！私だつてあの人のことを考えて・・・
ハア・・・ハア」

「……………」

二人の目の前にはある女性がいていきなり変なことを言っていた……

「あれは一応幹部の一人ですね」

「……………」

「ここは同じ変態が相手するべきだと思っぞ」

「いえ、変態は常識人が相手をするってことはお決まりのパターンだと思えます」

「……………」

二人は黙り込み

「私は絶対にやです！」

「俺も嫌だ!!」

「…………ああ、俺もこんな事をしたいわけじゃあないさ
でも、これが仕事だしここで潰されちまうのは少し困るんだよ」

「……」

「無言でわけか……？それとも話せないのか？

どっちなんだ？口が聞けないと言えば俺の親戚には

あるトラウマをかかえて口が聞けなかつた奴がいてだな

そのトラウマってのがおもしろいんだ

なんだってな、あいつはな……」

男のそんな言葉が続く

「……」

それでもただひたすら無言でいるロミル

「……と言っわけで死んでくれやア！！」

「……」

ツッコミどころのありすぎる感じだがそれでも無言だ

「それではこれからショーをはじめよう！……」

「わあ〜（パチパチパチパチ）」

ある男性の声と女性の声と拍手の音が響く

「ショーの内容をネタバレラシしよう！

この俺、闇ギルドのボスをやっているこの俺があ〜

……勇者を殺す」

「わあゝ（パチパチパチパチ）」

「……お前の事だぞ？」

「……（パチパチパチパチ）」

ただ拍手の音が響くだけ

61話 闇ギルドと勇者（後書き）

今回では完全に美月ちゃんが主です

こんかいではバトルの寸前まで作らせていただきました
ヤミギルドの人たちは少し個性がありすぎると思います

前の話のときに

ユニークが10万、PVが100万を超えました
とても嬉しいです

ありがとうございます

やらかしました

高校の先生との面談をすっぱかしました
忘れてたんですけどね・・・俺は最悪です

週明けがとても来ないで欲しいです

高校ではパソコン同好会に入りました

誤字・脱字を無くせるようにタイピングをしまくってます
パソコン検定略してP検の練習をやっていました

4級を試しましたね、

一応タイピングの速さだけなら準2級は楽勝のようです
ヤッフウー（^^）ノ

ちなみに、五分間に決まった文字をタイピングします

30～39点が四級、40～49点が三級、50点以上が準二級です
おれは95点でした。

750文字の内710ぐらいまで打ち込みました

好きなキャラ、オススメの小説を教えて欲しいなどは終わってません

気軽にメッセージまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

62話 勇者御一行と闇ギルドの面々(前書き)

前回のあらすじ

美月たちは分離され

いろんな面々と会っていた

とても個性的な幹部達だったと思う

62話 勇者御一行と闇ギルドの面々

「ブヒヒヒヒ!!」

そんな気色の悪い笑い声の一つ
そして

「「じゃんけんポン!!」」

じゃんけんしている二人

それはグーとチョキ

「……」

「では、頑張つてサイスちゃん」

「……あとで何かおごってくれる?」

「ん、銅貨五枚分なら」

「少ない気もするけど頑張るわ……」

そんな感じの二人

「ブヒヒツヒヒヒヒヒヒ!!お前が俺の相手か?別に二人一緒でもいいのになぁ……ブヒ」

「ブヒっていう語尾がうざいですね」

「正直私達とは関係ないところで死んで欲しいわ」

二人はそんな事を良いながら各自で動く

サイスは一步前に出て、マイルは少しばかり距離をとる
巻き込まれないようにだ

「ぶひひひひひひ．．．っ！！ぶふふっふふふふう．．．っ！！ぶ
きゆきゆきゆ．．．」

「さらに笑い方がきもくなった．．．」

早く目の前から消えてもらおう、魔法陣を展開っつと

サイスの後ろには二つの魔法陣が現れる

これはサイスの独自に作り上げた魔法であり

これを展開する事により、攻撃力UPなどいろいろと効率が良くな
る、らしい．．．

「ぶひゆうふゆひゆふゆh j ひゆっひゆふい！！」

「もうよくわからない言葉になってる．．．」

．．．『サウザンド・スレイヤ千の刃は命を狩る』

魔法陣から千という数の刃がデブに向かって飛ぶ

「．．．『一贅肉という名の最強の鎧』おにく・ストロング・アーム」

デブのそんな声

すると千の刃がデブのデブった腹にあたると

跳ね返ってきて、逆にサイスの命を刈り取るうとする

「．．．ッ！？『ストーム竜巻』！！」

サイスの周りに風が渦巻き向かってくる刃を吹き飛ばす

「ぶひゆひゆひゆひゆ、こんな無駄な贅肉なんて利点がなければ普
通ダイエツトするブヒ

利点があるから残している、それだけだブヒュヒュ

こちらの攻撃を食らうといい!!」
デブが口から炎を吐いた
それを横に跳ぶようにして避ける

「無詠唱ツ!? ……いや、魔力が感じられない。口の中に油でも
仕込んでるのか ……ツ!?」

…
『ウインドスライサー風の刃』!!」

サイスが魔法を放つも、デブの魔法も健在
全てはじかれる

「ならッ!! 物理攻撃をッ!!」

サイスが凄く速さで近づき手に持った大鎌を振るう
そして大鎌の刃がデブの贅肉にめり込んでいき

跳ね返した

「きゃあッ!!」

跳ね返された勢いで背中から壁にぶつかる

「ぶひゅひゅひゅ!!」

顔を上げると腕を振りかぶってるデブ

「っ!!」

サイスが横に転がると同時に
今までいた所の後ろの壁をデブの拳が砕いた

「おいらの鎧には誰も敵わないさっ!!」

デブンっ…デブンっ…という音を鳴らし贅肉を揺らしなが
らゆっくりと

こちらにむけて進んでくる

「……」

「ぶひよひよひよひよひよひよひよッ!」

「あ……」

何かに気づいたような声をだすサイス

「ぶひよ?」

「動きの軽い相手は簡単に脱出できる下級の魔法だから普通使わないんだけど

あなたが相手だったらできるかもしれない……」

「ぶひよひよ?」

「……『底なしの沼』」

サイスが呪文を唱えると同時に

デブの足元に魔法陣が浮かび、その魔法陣がすぐに泥沼と化す

「ぶひゃッ!」

デブは飲み込まれていく

バタバタと体を動かしているが逃げる事ができない

「大丈夫、勇者様の命でなければ殺したとこだけど
一応殺しはしない」

「サイス、お疲れ様です」

そんな感じで終わった
あっけなかった

「別に言いのよん、二人で私を攻めてくれて・・・ああ、二人で私を・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

そんな感じのことを言ってる変態幹部の女性

「俺は絶対にごめんだ」

「私もやです」

「二人で私の言葉を無視して会話・・・放置プレイね・・・、ハア・・・ハア・・・」

やっぱりいるのは会話もしてないのに勝手に何かを想像して興奮する変態幹部が一人

そしてそれを見てドン引きしている男女がいる

その男女の内、少女のほうは同性愛者という常識人とはかけ離れている面があるもの
さすがにこれは無理のようだ

「背筋に寒い者が走ります。本当にこれは無理です」

「俺だっっておなじだよッ!」

「二人は仲がいいのね」

「よくねえよ！お前が相手だからこうなってんだッ！！」
「ついハモってしまっ二人」

「二人仲良く私をいじめてくる・・・たまらない　ハア・・・ハア・・・」

「もういやだッ！！」
いつまでたっても変態な彼女に絶句する二人

「・・・あ、アンナトコロニ鞭ガアルワ」
ラルチのそんな発言

当然の事嘘なのだが・・・

そして他はカタコトなのに「鞭」の部分だけ流暢なのは気にしない
「えっ！？どこっ！？・・・それで私を痛めつけte・・・がふっ
！！」

異様に反応する幹部の女性の隙
それを見逃さずにロイズが首筋に手刀を叩き込む

「・・・なんか疲れた」

普通に戦うよりも疲れたかもしれない

幹部の女性の強さは不明のまま終わった

「そんなわけで、俺は戦ってるんだが別に俺はお前を痛めつけたくも殺したいわけでもないし普段はお前には恨みはないわけであまり戦いたくないわけであるが、俺の稼ぐ場所を取られてしまうのは本当に困ってしまうわけであり、そうなってしまうと路頭に迷ってしまうわけだから、できたら俺に殺されて欲しいわけである」

「・・・」

無駄に喋り捲る男性
ずっと、無口な女性

どちらも横に走りながら武器を構え

二人の間では火花が飛び散り、金属のぶつかり合う音が響く

「本当に申し訳ないとはおもってるぞ

一応裏社会で生きてる身だが、自分勝手に人を殺すのはあんまり好きじゃないからな

なんたつて俺だからな、

ん？俺だからな、っていう意味はわからないだつて？そこは気にすんな、話を戻すぞ

人を殺すのは良くないが、自分が生きるために相手はコロスし相手は生きるために俺を殺そうとする

それがこの世の中だからな、これがあたりまえというわけだ

そんな事を繰り返してるうちにトップ3に入る闇ギルドの幹部になんてなつちまつたが

これはこれで結構苦勞の多い人生を送ってきたんだぜ」

「・・・」

「・・・やはり話をする気はないというわけか
だったらしょうがないだろう！俺も本気で行くぞ！！」
その声とともに飛び散る火花とぶつかり合う金属音が激しくなる
幹部の男が武器を振るう速度を上げ
それにあわせてロミルも早くする
そして今までで一番大きな火花と金属音が響き
はじかれるように両者ともに後ろに跳んで数？下がる
そして、二人とも同時に着地した瞬間に

「悪いが次で終わらせるぞ！！」

「・・・ッ！！」

両者とも相手に目掛けて駆け出し
次の瞬間には交差する
いくつかの火花と金属音が響き
さっきの二人の位置と入れ替わった形になる

「ふ・・・ここまで何人も殺してきたが
殺さないようにして倒されるのははじめてだ・・・」
その男にしては珍しく短い言葉を言い倒れる
ロミルが勝ったのだ
ちなみに

「・・・」

それでもロミルは無言だった

「まずは手のひらサイズの火の玉のお手玉でございますッ!!」
そんなことを言いながら火の玉をジャグリングする男が一人

「わあ〜（パチパチパチ）」
そして拍手をする美月がいる

「あらあら、まがふし摩訶不思議です、いきなり消える、
マジシャン並みのスーパーマジック!!」
そしてその言葉通り玉がいきなり消えたかと思うと

「・・・ッ!？」
美月の周りにその玉が現れる

「そして爆発で一旦終了だ
ですが・・・」
次の瞬間爆発が美月を飲み込んだ

「当然これだけでは終わりません!
トランプカードのシュリケンに、いきなり現れる剣の雨!
次々現れるとても不思議な現象が、あなたを死に導いてくれます」
男の言葉通りのことがおきていく
それは爆煙で見えない美月のもとへと向かっていく
だが、

次の瞬間に莫大な量の光がその全てをなぎ払う

「とても楽しい時間だったよ・・・でも、徹夜と一緒にいるよりは
つまらないかな」

「徹夜・・・？」

「知らなくていいよ　じゃあ、ここらで終わりにしよう」
そういつて美月の手からさつきよりも強力な光が放たれ
周りを包み、あまりの光量に前が見えなくなる

光りがなくなり

周りが見えるようになると

ボスの男が倒されて気絶していた

「所詮道化師は人を楽しませるだけのもの
人を殺すのには向かないな」
そんな言葉で戦闘は終わった

62話 勇者御一行と闇ギルドの面々（後書き）

今回では

勇者御一行の戦いを一気に消費しました

だいたいギャグ・・・？

シリアスほとんどなしッ！！

一応強いはずの幹部なんだけど

女性の幹部なんて個性的過ぎて簡単に負けました

一応幹部とボスたちはSランクの上から中ぐらいの実力はあります

ですが、さつきから言ってるとおり個性的過ぎました

シリアスになる雰囲気がありませんでした

美月のはとりあえず予定では終わり

次からは徹夜くんサイドに戻らせていただきます

また美月をメインに出す場合があるかもしれませんが

そのときは少しだけでもシリアスを入れたいです

正直ですね

美月は徹夜くんがいないと

このときはどういふふうにしゃべる、とかわかりにくくなる時があります。

徹夜君がいると書きやすいのですが

居ないと書きにくいというゲテモノです

ちなみに、徹夜くんが完全に出てこなかった話は

俺の勘違いでなければこれが初めてだと思います

ああ、こっちの小説ばかり書いてて
もう一方が放置状態・・・どうにかしなくては・・・

好きなキャラ、オススメの小説を教えてください

刃まだまだ終わってません、気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

63話 始まりそうです(前書き)

前回のあらすじ

美月たちは闇ギルドと戦った

そして、再び視点は徹夜に戻る

63話 始まりそうです

ある所では

「オオラアアツ」

「お前ら二人はまたケンカしてんのかアアア!!」

「・・・いつも通りだね」

「アツハツハツハツハ!!」

ある所でも

『早くパンをかいに行かなくちゃアアア』

「折角掃除したんだから走っていくなあ!!」
不幸な掃除係りもいて

ある所では

『ラウちゃんはかわいいね』

『魔法の才能もあってすごいね』

「ありがとう、ある人たちに迷惑はかけたくないから」

獣人の女の子はニコリと笑う

そしてある所

『エクスカリバーって手に入れるの大変でしたか？』

「ああ、あるダンジョンの奥、100階まで下りて行ってやっと手に入れたんだ」

『ハク先生は好きな人っているんですか？』

「私は告白されちゃって」（クネクネ）」

これがいつもどおりだ

ただその一言で表せる日だった

俺が臨時で先生に来て

これはいつもどおりと行って言い

俺が寝込んで休みを取り

また復活してから二日たち

これは完全にいつもどおり

こりない生徒を仕事だから仕方なく叱る俺

めんどくさいながらも

いつもどおりの事に笑えるような感じだった

「それがですね、また先生が襲われたんですよ」

今いるのは学園の会議室

学園長からそんなことを言った

別にいるのは俺達だけじゃない

先生達全員と生徒会の面々がいる

「それに学園の周りにある探知式の結界になにかがひっかった」

「なにかとは？」

この言葉を言ったのは生徒会長という役目についてる男性
デルクという男性だ

「おそらくは闇ギルドのメンバー、しかも人数がハンパではない」
俺はただひたすら聞いているだけ
他の面々も次の言葉を待っている

「・・・250名」

その言葉にザワザワと先生達がどよめく

「私、先生、今回来てもらったギルドの方、生徒会、その全てを合
わせても対応できるかはわからない数です」

「こういうときのために生徒に訓練させてるのでは？」
ラルドさんの言葉

「ですが、経験も浅く、並みの人たちよりは上と言っても
本業が殺しである闇ギルドのやつらには勝てるかはわかりません
あると言っても圧倒的な数で押しつぶさなければまず殺されてしま
うでしょう」

「この戦える人数では生徒達全員を守る事も不可能かと・・・」
ある先生の言葉
これはとても正確に痛い所を着いている
先生は生徒を守る義務がある

「生徒は大勢、地下の魔法具の倉庫への入り口は五つあります
その全てを守るのは相当厳しいですが、ここは頑張ってください
ありません」

この場合の先生達や生徒会などの配置が問題です」

「入り口はこちらでやらせていただきます」

ラルドさんのその言葉

それに対しての学園長の言葉

「それには賛成です、先生と言っても我々は冒険者や騎士などから
の引退した者達
さすがに現役の人たちよりは弱いですしね」

「学園長はSランクの時から変わりませんがね」

ある先生の言葉

学園長はSランクだったのか

「いやいや、あの頃に比べれば私もまだまだ
それより、その入り口の配置です
この地図にA～Eまであるのが入り口です」

「では、私がA、徹夜がB、ハクがC、ライルがD、学園長がEで
どうですか？」

ラルドさんのその提案にある人が口を開く

「え、私はっ!?!?」

ルミのそんな言葉

「私も戦えるよ!?!?」

エミリーのその言葉

「ルミは今はこちらにいますが竜の国『ドラゲイル』のお姫様
危ない目にはあわすこともできないですし、あなたはAランクの上
と言える実力ですが

引退した今の学園長でもあなたよりは上です

あなたには生徒達を守っていただくしかありません
当然エミリイもです」

「……」

「ライルは精霊を使いこなし始めてから相当実力は上がっています
十分大丈夫なはずですよ」

「……任せて」

ライルのその言葉

ラルドさんがしゃべらなくなると

学園長がかわりにしゃべりだす

「あとは先生達の配置ですね。門などは頑丈と言ってもやつらは相
当な腕の持ち主

あってもなくても同じ、それに門なんていう場所を通ってくるかも
不明ですよ

先生方は全員で40名、五名一組で動くとして8組です

生徒会は10名、先生達と同じと考え2組、あとは生徒達には48
名ずつで行動してもらいます。48人一組で10組できますので、
その一つずつに先生方、生徒会合わせて

10組に一つ一組ずつで護衛してもらいます

先生、生徒会には指揮をしてもらい接触した闇ギルドと応戦しても
らいます」

生徒は480名ぐらいなのか

生徒にはラウもいるんだよなあ・・・

相手が250名、当然生徒たちはその一人一人よりも劣るからこの考えは大体正解だろう

おれもいいのは思いつかないだろうからな

「入り口は一番狙われるでしょうから生徒達に被害が及ぶのも少ないでしょうが、念のためを考えればこれが一番だと思います異論のあるひとは手を上げて言いなさい
無言は異論はなし、ということにします」

誰も何も言わないし手も上げない

ただの静寂である

俺は基本的に一人みたいだからなにも言う必要は無いだろう

「それでは決定ですね

次は生徒たちはどこにいてもらうかです。

だいたいは頑丈な壁で大部屋の

逃げるための出口が多数ある所に入ってもらいます」

会議は進んでいく

63話 始まりそうです（後書き）

今回は

もう闇ギルドとの決着間近です

数と数の戦いになります

生徒と闇ギルドのメンバーでは

確実に闇ギルドのメンバーのほうが強い

こんかいは出ていなかった生徒会長も名前が少し出てきました

そして、ほんの少しだけ発言はしています

だそうと思ったのですが

出すと名前を考えないといけないのでやめました

名前はかぶらないように考えるのが面倒です

今回ではまた学園長の話ばかりでしたね

一応学園長はSランクです

確実に土人形よりは強いはず

そういえば大会で最初に出てきた相手のSランク

「土人形」と呼んでいます

本当の名前は何なのでしょうか・・・？

謎です

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ
ありません。気が向いたらお気軽にメッセージまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

64話 始まりました(前書き)

前回のあらすじ

どうやら

戦いのときが近いらしく

学園長により集められ会議をして

どういふふうにうごくかをきめた

64話 始まりました

あの会議がお昼あたりだった

「という訳だ、なのでこのクラスが40名、あと8名プラスされた組で動いてもらう

俺とライルは違う所に行くので同行するのは不可能だが、違う先生方の言うことを聞くようにしろ

勝手な行動は認めないからな」

いまは俺が担当しているのクラスへの説明している

「チャイムが三回目の音で止まったときに緊急事態の合図だ

慌てて動くな、冷静に動け、一人が混乱するだけで他のクラスメンバー

ト全員が死ぬと思え

それが学園長からの言葉だ

俺とライルからは特にはない、死ぬな、という事だけだと思え」

それから一息つき

また説明を再開する

「このクラスが移動するのは食堂だ、

ある一定の時間を過ぎるとイスやテーブルはどかされる

そこに急いで歩いていけ、列の先頭と後方は交代ずつで結界を張りながら移動だ

敵を見つけ次第魔法で警報音を鳴らせ

先生方が対応する、もし先生方が対応できない所だったとしても連携を取って動け、さっきから言っているとおり混乱すると動けなくなるから気をつける

訓練の成果を出せ

武器は常に携帯するように」

これが午後

そしてその日の内におきた

チャイムが三回鳴り、止む

それを合図に各自で動き始める

『慌てずに動いてください！！先頭と後方は結界を張る事は忘れずに！！』

『心配しなくても大丈夫です。我々がついていきますので冷静に行動してください』

『前方に敵を発見しました、我々と生徒達で応戦中です。おっとあぶないッ！！』

『配置場所により敵接近、攻撃を開始します・・・』
『電撃の玉』サンダーボール！』

先生たちは風属性の魔法『飛行』で飛びながら生徒達を誘導する
ある所ではちゃんとした配置の所につくことができ

ある所では配置に着こうとした途中で敵と会ってしまったり、配置
場所で会ったりして

交戦状態に入ってしまう所もある

そして俺とラルドさんとハクとライルと学園長はもう入り口の前に
配置している

それぞれの手には風属性の魔法『伝達』の機能のついた板を持って
おり

それぞれが状況把握できるようになっている

先生達や生徒会もこれと同じものを持っている

さっきの声もこれから聞こえてきたものだ

「いや、それぞれ頑張ってますなあ・・・」

『独り言みたいですね・・・徹夜くんは』

ラルドさんの言葉

別にそんなわけじゃないです

『あは こっちはなんか敵が近づいてきたよ』

ハクという言葉

『・・・こっちでも敵を発見した。交戦状態に入る』

ライルの言葉

『こちらにはまだきておりませんね、幹部クラスになると相当強いので

気をつけてください、幹部クラスは苦勞するのは間違いないはずで
す』

学園長のツールさんの言葉

『あはは じゃあ、私は幹部クラスみたいなのいるみたいだからハズレだ』

『・・・こっちにはいない、アタリ』

「気をつけてやってくれ二人とも。む？俺のここにも着たな
さて、ハズレかアタリか。どっちだろうか・・・」

目の前にはゾロゾロと動く敵の集団がこちらに歩いてきている

俺としてはアタリがいいが、俺がこっちに来て運が良かった事はあまりない気がする

『私のところにも着ましたね。今から交戦状態に入ります』
学園長の言葉

『おや、私のところにも来たね。どうやら時間をそろえてきたらしい』
ラルドさんの言葉

「んじゃ、お互い死にはしないように」

『わかってるよ。徹夜くん』『徹夜はやさしいね』

『・・・気をつける』『徹夜殿も死なないように』

ラルドさん、ハク、ライル、学園長のトールさんの言葉
戦闘の音が通信機からもう聞こえている
俺は通信機をポケットにしまった

目の前の敵の集団はもうこちらに走って迫ってきている

「・・・うわあ、アリの群れを見てるみたいで気持ち悪い」
そんな言葉を言って戦闘を始める

「これはある意味いいな」

「ああ、珍しい事に今回はお前と気があうな」

「ああ、確かに珍しい」

ある男子二人が誰もいない廊下を歩いていた
ジークとマーリンだ

微妙に二人の間では目に見えない火花が散っている
今にもケンカをはじめそうだ
その瞬間に目の前の壁が爆発した

「……ッ!?」

「おおう、男子生徒が二人……やっと殺せるぜエ……」
目の前には大きなハンマーを担いだ大男がいた

「おれはB部隊のジャルってんだ、仲間とはぐれちまって暇だったんだよオ
相手してくれやア〜!!」

そんな言葉とともに
大きなハンマーが横に振られ全てを薙ぎ払う一撃がはなたれた

「先生、ある二人がいません」
ある女性の言葉

「はア!?それは誰ですかッ!?」

「……じ、ジーク君とマーリン君です」
先生の迫力にその報告してきた女子はびびりながらも
報告をする

「な……ッ!?またあの問題児ですかッ!!」

くそっ！！私たちはここから離れる事はできませんし・・・どっすれば」

「じゃあ、私が捜してきます」
横からある女子が入ってきた

「エミリイさんですか、あなたなら実力も問題ないでしょうが・・・今は冒険者ではなく生徒ですし・・・」

「大丈夫です。今まで魔物を相手に頑張ってきましたのでこれぐらいだったら問題ないです」

「・・・そうですか。それではお願いします」

先生は少し考えた後に許可を出した

そしてエミリイは走り出す

すぐに食堂を出て、道を曲がる

そして3分ほど走った所だろうか

「「死ねエエ！！」」

そんな声をあげて二人の男が襲い掛かってきた

「・・・『電糸』」

右手の水晶のついている白いグローブから電気の糸が周りに伸びそれがその二人を拘束した

「少しばかり糸での戦い方を学んでいてね・・・『糸死斬散』・・・」

「」

その言葉と同時に電気の糸が動き、二人の男達の体を切り刻む電気の糸が消えて男達が血を噴出しながら倒れる

もう男達は動かない

「そこに隠れてる事はわかってるわ。」

この『雷拳』のエミリィに会った事を後悔させてあげる」

その言葉を言うと

隠れていたらしく二十人の人間がゾロゾロとでてきた

「我らはB部隊だ。Aランクの冒険者か・・・冒険者が学園に入学したという噂を聞いたが

まさかAランカーが入学してるとはな。だが、ここでお前には死んでもらう」

「幹部クラスはいない・・・か。

かかってきなよ、私の雷であんたらを体の芯からガタガタ言わせてあげる」

エミリィが挑発をするように

グローブをつけてある手をクイクイと『来やがれ』みたいにうごかす

その言葉でエミリィ一人と二十人の男達が戦い始める

64話 始まりました(後書き)

今回では

それぞれの戦いの場所です

徹夜たちの入り口を護衛する人たちは

どんなやつと戦い、どうなるのか

ジークとマーリンはどうなるのか？

エミリイは20人と戦うけど勝てるのか？

そんな感じです

ちなみに具体的には幹部クラスは出ていませんが

美月たちと戦った人たちと同レベル

ちがうのは常識度

美月たちと戦ったのは完全に常識人ではなく

まともな人間ではなかったので

ロイズとラルチと戦ったのは簡単に負けました

当然美月はチートキャラなので関係ありません

今回では少しばかり

幹部クラスにも頑張ってもらいます

『ブラッククロス黒の十字架』は常識人の集まりです

そして

こういうときには絶対いるであろう

抜け出す二人、ジークとマーリン

こういうのは確実にいると思います

やばい状況をヤバイと思わないのか

ヤバイと思っ^ていて行くのか

そういうのはそれぞれですが

世の中、こういうことをすると絶対痛い目にあつとおもいます
まあ、俺の小説だから
なんでもかんでもハッピーエンドです

この徹夜たちの場合。守るものがあるというのもあり
美月たちのように暴れまわれないので
すこし辛い所があります

それに美月たちの場合攻める側でしたが
徹夜たちの場合守備側でした
いろいろと状況が違ってくるわけです

ちなみにこれは日曜日に書かせただきました
さすがに学校から帰ってきて
ガチャガチャとキーボードを無駄に早く鳴らして書いて
すぐに投稿する。というのは疲れます
ですので少しばかり休むために、早く書きました

誰か代わってくれ

・・・すみません、嘘です

こんな駄文、駄作、駄ストーリーなんて代わってくれる人はいません
もし代わってもらったら、良い文になり、今よりは見やすくなり
すこしは目を向けてくれる方は増えるでしょう・・・
それっていいんじゃないかね？とも思いますが
自分で投稿しなかったら増えても意味無いですよ

好きなキャラ、オススメの小説を教えて欲しいなどは終わってません
気が向いたらお気軽にメッセまたは感想などをお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

65話 幹部クラス（前書き）

前回のあらすじ

表は学び舎、裏では兵器を作る魔法学園

裏で活動し人を殺すことで生活する闇ギルド
その二つの勢力がぶつかり合う

65話 幹部クラス

「……ッ!!」

巨大なハンマーがなぎ払う範囲から慌てて逃げる二人

「…… 『アース・スレア大地のトゲ』!!」

マーリンの放った岩のとげは

「はははッ!!こんなもの食らうかア!!」
ハンマーでなぎ払われる

「おおおおおおおッ!!」

その間に近づいていたジークは剣を数回振るうが
巨大な体のわりに男は細かく動き、全てを最小限の動きで避ける

「今まで俺は何人も奴らと戦ってきたんだア……」

お前らごときに負けるわけねエだろオがよオオ」

その言葉通り二人の攻撃を全て防ぐ

そして、ジークに向かってハンマーを振るう

「……チッ!!」

ジークは危ない所があるもののジャンプするように避けて
マーリンの横に着地する

「……これは一人一人じゃあ、無理だな」

「ああ、確かにな」

「胸糞悪い事だが、生き残るためだ。俺のサポートをしろ」

「は・・・？なんで俺がお前のサポートをしなくちゃ行けねえんだよ
普通お前が俺のサポートだろ？」

「お前一応後衛の魔術師だよな？普通剣士が前に出るもんじゃねえ
のかよ？」

「・・・ふっ、痛い所についてきたな、お前にしてはとても良い進
歩だと思っぞ

だが、ここは譲らん・・・ッ！！」

「おおまあええなああ〜ッ！！」

「なあに・・・ゴチャゴチャ言っただア！！挽き肉にすんぞオゴ
ラア！！」

話してる途中に男はハンマーを振るってくる
話が終わるまで待つ敵なんて普通いるわけがない
戦隊ヒーローもののあの敵達はとても優しいと俺は思う

「ッ！！とりあえずお前サポートなッ！！」

同じようなことを言いながらも二人は避けて
攻撃に移る

「はアッ！！」

ジークが真正面から迫る

「最初に死ぬのはお前かア？」

そしてハンマーをかまえる男

ただ、男には予想外の事がおきる

ジークが首を横に振った瞬間、ジークの顔があった所から黄色い光

線が自分にまっすぐ向かってくる。

「おおわアツ!?!」

慌てて避ける男

「……ウォーターボール水の玉!?!」

マーリンが水の玉を造り、投げる

それを男はハンマーの一撃で粉碎する

「……なア!?!」

男が驚いた理由は簡単で水の玉の後にジークがいた

水の玉のせいで見つけることができず

ハンマーは水の玉を粉碎するために振った後で引き戻す事ができない

「だああアツ!?!」

ジークが剣を上から下に縦に振るい

男を切り刻む

「こオんの、ヤロオ!?!」

浅かったようで男は死んでいない

男はハンマーを振るい、ジークを横からなぎ払う

だが、手ごたえもなにもなく

肉が潰れるような音もしない

「一応俺って『ミラー・ウォーター映る水』っていう幻影の魔法が使えるんだ」

マーリンのその言葉

男の周りには水がただよっている

それがジークの姿を映していたらしい

「ただ、元から水を用意しないとダメなんだ、だからさっきの
ウォーターボール
『水の玉』さ」

「なアんだとオ!？」

「それより後ろ見なくていいのか？」

「ンアア!？」

男が振り返ると

そこには男の頭と同じ高さにジークがいた

ジークはもう剣を振りかぶっている

「・・・やべ、なめすぎてた」

その言葉とともに男の首が胴体から離れた

「おし!」

ジークとマーリンはお互いにハイタッチしている

「・・・」

その行動に気づいていなかったらしく

驚いている二人

「まあ、これからは仲良くしようや・・・」

「ああ、そだな・・・」

そんな感じで二人の戦いは終わった

「ふんッ!!」

その声とともに放った電撃をおびた一撃は男の胴体に突き刺さる
男は別に死ぬような一撃を食らってははいないが
体中を電撃が走り、痙攣して動けなくなっている

「・・・殺すつもりは無いから、手加減せずにかかって来ていいよ
私は死ぬかもしれないけど、あなたたちは死なないんだから
恐れる必要なんか無いよね？」

楽しそうに笑いながらエミリイが言った

意外に戦闘狂のような一面があるのかもしれない

「・・・ッ!!小娘一人に・・・」

その場には最初に倒された二人を入れて、13名の男達が倒れている
もう半分以上が倒されていた

意外にエミリイって強いのかもしない・・・

「意外ってなによ、意外って？」

・・・この頃、キャラが介入してくるのが多くて困る

「・・・幹部クラスってどうやって見分ければいいんだ？」

徹夜は何十人もの敵の攻撃を避けたり

そのうちの一人を使って殴ったりしながら通信機に問う

「ん？長年の勘かな？」
ラルドさんの返答

「・・・体から出てるオーラとかかな？」
ライルの返答

「ん、戦つてて面白い人が幹部クラスだと思つよ
ハクの返答

「簡単には死なない人とかですね」
学園長の返答

「みんな微妙な答えをしないで欲しいぞ・・・
あんたらに聞いた俺がバカだった・・・」
そこで俺は一息つき

「みなさんの内だれか幹部クラスはいますか？！？」
大声で聞いてみた

「『『『『確かにあんたは馬鹿だよ・・・』』』』』
通信機から一気に四人の声が響いた
・・・だつて、しょうがないじゃないですか
わからないものは相手に聞いたほうがいいとは思いませんか？
ふう・・・

相手も答えてくれないし
俺が仕掛けたほうが早いか・・・

「久しぶりのこの魔法『重力操作』
俺が呪文を口にする

だいたい1.5倍だね

すると、俺の回りにいる全ての奴らが重力に耐え切れずに倒れる

「・・・幹部クラスはいなかったか？」

俺がつい疑問に思ってしまう

「それはどうだかッ!!」

いきなり後ろから聞こえた

俺は振り向く、その勢いを利用してながら剣を振るっ

すると金属音が響いた

俺の剣は相手の剣で防がれていた

「・・・三人の幹部の一人、『食夢』のクロウラス・ロイドロウがお前を苦しみながら死なせてやるっ」

「ひどいこと言うねえ・・・」

その幹部は少年で、とても良い顔立ちをしていた

徹夜は知らないが、それは徹夜が捕らえた4人の闇ギルドのメンバーを排除しにきた

幹部だった

「ん、なかなか物足りないなあ・・・幹部クラスの人も前に出てきてくれないし・・・」

白い服を着た少女・・・ハクがそんなことを言ったため息をつきながらも

凄く速さで動く

彼女の周りでは男達が切りかかるも突然現れた氷の壁により邪魔されたり

手足が氷付けになり動けなくなった所に上から氷の刃が落ちてきて首をちょん切られたり

あとは、そのまま氷のオブジェと化すものもいる

はつきり言っつてグロい

「ここらで全員お掃除しようかな・・・」氷刃は全てを凍らし砕け散る（アイス・オール・ブレイク）」

その呪文が響いた瞬間に一つの氷の刃が一人の男に突き刺さる

その男はキョトンとしていたが、いきなり悲鳴を上げる
1秒もせずに、体が氷となり、砕け散る

次の瞬間にそれと同じ氷の刃が

何十、何百と降る

いたるところからの悲鳴、氷の碎ける音
それらが全て無くなる

「・・・さすがは幹部クラス。化け物じみてるね。
ただ一人だけ立っている人物がいた」

「お前が言うか。『白い魔女』」

「・・・『赤の吸血鬼』ごときにその名を呼ばれたくないよ」
彼・・・ではなく、彼女だ

彼女はその呼ばれた名前どおり吸血鬼

この世界でのただ一人しかいない存在だ

その彼女にも氷の刃は突き刺さり、氷となって砕け散るがすぐに再生していた

「さあ、楽しい殺し合いをしよう」

彼女の上の歯の特にとがった歯がキラリと光る

「吸血鬼は私と同様に長生きするからね。・・・あとの寿命は氷の中ですごさせてあげる」
お互いの殺気が頂点にまで上がる

「はアアアアアッ！！」

ラルドさんの周りの男どもが綺麗に吹っ飛ばす
彼女の周りでは金色の光がちらちらと見えた
目に見えないほどの速度でエクスカリバーを振るっている

「それにしても、この数は鬱陶しいな・・・」
ラルドさんがげんなりしながら呟く

「少し他のみんなと同じでお掃除するか・・・ふう・・・」
ラルドさんはそこで息切れしてないのに息を整える
エクスカリバーを斜め後ろに構える

「・・・『約束された勝利の剣』エクスカリバアアアアアッ！！」
その声とともに黄金の剣を横に振るう
それを行うと同時に

強大な光の斬撃が全てをなぎ払う
全てのザコ共がなぎ払われ、防御する事ができずに血を噴き出しな

がら空中を舞う

その中で凄い速度で動く影がある

それは空中のザコを足場に使い、こちらに向かって突撃してくる
その手には莫大な量の魔力の込められた特別な剣があった

ラルドさんの聖剣とその男の剣がぶつかり合う

「幹部クラス・・・その剣は魔剣ティルヴィングかな・・・？」
聖剣で受け止めた剣。それにはさつきも言ったとおり莫大な量の魔力が秘められている

それは、狙ったものを外す事のない剣

「あたりだ、聖剣の使い手よ。我は『魔剣』のスウアフルである」

「これは相当の腕の持ち主だ・・・」

勝利を約束された剣と狙ったものは外さない絶対の刺殺の剣がぶつかり合う

その戦場では

グジャア……！！という音をたて、何十人も敵が押しつぶされた
そしてその何十人も敵の前にはある男がいる
学園長。それがその男の役職である

「・・・我が法律の前では何者も裁きの鉄槌が下る。

『鉄槌』のツール・ルクイズと申します。悪いのですがここは通させません」

男は手に持った鋼でできている裁判官が持つような鉄槌を上から下に振り下ろす

その動作とともに違う場所で同様に押しつぶされ、敵と一緒に大地を潰し

大きなクレーターを作る

この潰されたやつらが最後の人数だったと言える
ただ、一人だけ立っている

「フン、笑わせるな・・・そんな法律ごとき、我が信仰の前では無意味・・・」

その男はこの世の中で言うローマ教皇のようなめちゃくちや豪華に飾ってある服を着ている

その男は手に持っていた黒い本を開く

それと同時にまるで威圧でもするかのように魔力が放たれる

「・・・では『ブラック・クロス黒の十字架』のボスである私が、

これよりお前の死刑の準備を始めよう。我が行動は我が神、邪神様のために」

その男は、邪悪な神に仕えるもの

「全てはわが法律のままに裁きを下す事にしよう・・・」
学園長は鉄槌を構えながらそんなことを言った

二人の戦いが始まる

その結果は誰にもわからない

65話 幹部クラス（後書き）

今回では

闇ギルドの主力のご登場です

いろいろと考えた末。

このメンツになりました

美月のほうでは名前を出しませんでしたが

こちらでは一応、竜の国のときでの布石があったので

名前を出させていただきました

前からいつてるとおり常識人の集まりであります

美月たちの場合とは違いちゃんと戦ってくれます

ちなみに、闇ギルドのボスはすべて闇ギルドの名前をイメージして
います。

『ブラック・クラウン黒の道化師』では

人を楽しませる道化師。なので楽しませる雰囲気でも作ろうと思
した

不思議な攻撃が多かったのはこのためです

『ブラック・クロス黒の十字架』では

十字架により、神様信仰する人です。神父様の格好にしようかと思
いましたが、さすがにそれは地位が低いかなと思い

例にだしたのがローマ教皇です

イメージは黒い感じです

何話で決着つくかはわかりません

一話に5人か4人の戦いを書かなければいけないので
決着の話数が伸びるかもしれません

・・・この小説は65話にまでいつてしまいました
さすがにこの話数だと末期だと思います
完結まで少なくても10から20
多くて40話以上ぐらいですかね
まあ、完結の道が見えているといっても
結構、かかってしまうのは決まりですね

まだ闇ギルドのトップ3の内

二つしか出てませんし、いろいろと大変なわけです
さあて、どうなるやら・・・

この話数だと、気軽に読める数ではないんですよ・・・
気軽に短い時間で読める小説、ということでは
2000文字程度で毎回書いていたので
さすがに、この話数は致命的です

今回では伝説上の魔剣が出てきました
この頃そついろいろを調べて、出すことにしています
いろいろともともと設定があるのは楽なわけでは
いろいろと楽しみながら書きました
敵のことを考えるのって意外と楽しいですよ
変態を考えるのよりは楽しくありませんけど
どんなのがいいかな？と思うと
わくわくします

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ
ありません。

気が向いたらお気軽にメッセージまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

66話 戦いの途中（前書き）

前回のあらすじ

幹部クラスと四人は出会い

戦闘を開始する

66話 戦いの途中

「我が神にささげるのは憤怒、強欲、傲慢、怠惰、色欲、暴食、嫉妬この七つの罪。我は神を否定するものであり、邪神に心をささげる者でもある

憤怒の象徴としてサタンの像を立て、黒い逆十字の像を組み立てる」
その言葉と同時に
その言葉と同じ現象が起きていく

「嫉妬はレヴィアタンの像を、強欲は悪魔マモン、傲慢はルシファ
ー、
怠惰はベルフェゴール、色欲はアスモデウス、暴食はベルゼバブ、
これで七つの像が揃う」
黒き聖職者は言葉をつむぐ

「・・・これはこれは、私如きに無駄な準備をしておいでで
学園長が思わずその光景に呟く

「邪神様は誰にでも平等、人も魔族も獣人も、そして他の神も
全てにおいて敵対する。誰にでも平等だ」

「これは少々やばいかもしれません・・・」

「さあ、死刑の時間だ」

「……『フェアリーフレーム精霊の炎』!!!」

ライルの目が赤くなると同時に
十数人の男達が小さな炎の精霊に飲み込まれて焼かれていく

「無駄に……数が多い……。一掃するような魔法を持ってない
私にとっては辛いな」

思わずぼやいてしまうほど
敵の数が多い

幹部クラスがいない分こちらがわではザコが多いようだった

「……でも、やるしかない」

数人の男達が飛びかかってくる

それを相手には見えない速さで一気に蹴散らした

「…はアツ!!!」

自分の黄金の聖剣が動き

「ふんツ!!!」

敵の強力な魔剣がそれを防ぐ

それにたいして返す刃でスウアフルが魔剣で突きを繰り出してくる
その剣に込められた力は「絶対に外さない」というもの

「……ふツ!!!」

それをどうにかエクスカリバーではじく
かわすのでは無理、他の剣で防御するのも無理
強大な力を誇るエクスカリバーだからこそはじける
相手は避ける事はできるが、自分は避ける事ができない
それは完全に自分に不利な状況を作っている

「・・・はアアッ!!」

ラルドさんが剣を横に振るい、その剣からは光の斬撃が放たれる

「・・・甘いッ!!」

その光の斬撃を突きで砕き、そのままの勢いで刺殺しようと迫ってくる

「・・・ッ!!」

ラルドさんは地面に向けて斬撃を放つ

剣を狙うのではなく、持ち手自身に妨害を加える

「くっ・・・!!」

それは成功し

スウアフル自体が数？ふつとばされる、

スウアフルは空中で体勢を整え両足で着地する

「絶対の刺殺の魔剣を何回も防ぐとは…さすがは聖剣エクスカリバーの使い手」

「・・・正直危ない所ですけどね、さすが魔剣ティルヴィングの使い手でしょう・・・」

数本の赤い矢が空気を切り裂きながらハクを殺そうと突き進む
その途中で氷の壁に阻まれはじかれる

「・・・防御してるだけですか？」

「私には私の攻撃の瞬間があるの」

「あなたは昔から変わりませんね」

「おまえは昔とはずいぶん変わったけどね」

「どつという風にですか？」

「不良になったわ、昔のおまえはとてもいい子だったのに・・・」

「・・・子供みたいに言わないでほしいですね」

「お前は今も昔も子供だよ。いつまでもあの人のことを思っ
てあの人が自分と結ばれずにあの女と一緒に行ってしまったのが許せ
ない」

「・・・」

「お前はいつまでも子供だよ。それだけは昔と変わらない」
そんな会話の最中にも

赤い矢は少くない数が飛び、その全てが突然現れる氷の壁に阻ま
れる

「お前は子供。いつまでも妬み続ける

600年前と変わらない永遠の子供。いつまでも変わらない
吸血鬼という化け物としても、女としても
いつまでも変わらない」

「・・・いいえ、私は変わってる

絶対に・・・絶対に絶対に絶対に絶対に絶対に絶対に
変わっているッ!」

「そこで騒ぎ出す時点で子供。

あの時と変わらない。あなたは自分を無理矢理サトラスに戻したの
が憎いんでしょう

あの人の一番重要なところで自分をのけ者にしたのが憎いんでしょう
でも、そんな事をしていても、もう変わらない

あの人は戻ってこない、リシは600年前に死んだのだから」

「おおおおおおおッ!」

ある少年が大声を上げながら俺に迫ってくる

その片手には剣

その剣を俺は片方の剣で受け止めながら

「ハッ!」

もう片方の剣で胴体を真っ二つにするために振るっ

その少年は後ろに跳び退くようにして避ける

「お前が我が友、ジールク・ライを退いた男だな」

「・・・魔族と友？」

「全ての魔族が人間を嫌っているわけではないと言う事はお前は知
っているか？」

ジールクはその少数に入る、彼は我が友であり、魔王に従う従順な
部下でもある

魔王の命令には従う

だから人間と戦う、命令意外ではとても良い奴だよ
第一、魔族に人間が近づくわけも無いが」

「ふうん・・・そうか」

その間にもお互いに接近して剣を振るい
避け、防ぎ、斬りかかる
それがどのくらい続く

「さすがは我が友を返り討ちにした男だ、とても面白いぞ
苦しみに歪む顔を早く拝んでみたいものだ」

「なんか、褒められた後にひどいこといわれた・・・」

精神的にとても来た・・・

66話 戦いの途中（後書き）

短いながらも戦闘の続きです

黒い聖職者さんは、神様の神話などの徹底的な所をせめて行きました
一応「マモン」だなんだかんだも、インターネットで調べてみました
あたってるかどうかはわかりませんが

こんな感じのことを書くだけでも、なんかかつこよく思えます

ライルはザコと戦ってますね

ライルは一掃するような魔法を持ってませんでした・・・

聖剣と魔剣の戦いです

この魔剣も一応インターネットで調べました

「絶対外さない剣」というものです

白い魔女と赤い吸血鬼

その因縁（？）は二代目勇者がらみ

600年後の世界にどこまでも介入してくる二代目勇者
とても厄介な奴です

徹夜くんのお相手の少年

それは牢屋の前でジールク・ライと話していた少年です

ジールク・ライとはお友達

ジールク・ライは仕事熱心な男

仕事となれば友も殺す

だけど、仕事でなければ友は大切にする。そんな奴です

ちよっとした俺にとっての大惨事

ケータイが一日できなつた 0 0

スマートフォンなのですが、友達に渡しといたら

最初のロック画面で何回も間違えたせいで

グーグルのアカウントにINしないとダメとなりました

それを知っていなかった俺は

パスワードを覚えておらず、学校にいる間はロック解除不可能に・

・

やっとの事で我慢して家に着き

とりあえずパスワードが書かれた紙を捜すもの

見つからず

絶望のどん底に落ちそうになりました。諦めずに探したら

やっとの事で見つかり、俺はとても安心しました

正直、俺のケータイには赤外線も無く

とても不便、そして今回の事態・・・

このクソなケータイなんて大嫌いです

違う機種を買えばよかった・・・安くなるからって最新型を買いから

ぜんぜん対応しておらずにこうなるのです・・・

皆さんも気をつけたほうが良いでしょう

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ終り

ません。

気が向いたらお気軽にメッセまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

67話 それぞれの戦い（前書き）

前回のあらすじ

それぞれの戦い

まだ途中だ

67話 それぞれの戦い

「ハアツ!!」

「ふんツ!!」

剣と剣がぶつかり合う

ラルドとスウアフルがぶつかり合う

今はつばの競り合いという所である

「・・・正直こちらは疲れてきたよ」

「我も久しぶりに息が上がってしまった。

強い者と戦うのはこれだから良い・・・とてもつらい戦いだ

・・・その上で勝つ事が我のやる気を引き出す」

その言葉とともに魔剣が動き

一瞬の内に数回の突きがラルドに迫る

「・・・ツ!!」

それをエクスカリバーを回転させるようにして全て防ぎ
相手の懐に忍び込んで、下から上に切り上げる

「クハハハハツ!! 久しぶりの強敵。久しぶりの冷や汗

殺しがいのある敵を見つけ、我は嬉しいぞ!!」

ラルドさんの剣を避け

笑いながら攻撃を仕掛けてくるスウアフル

「私にとつたら、ただ厄介なだけですかね・・・」

その攻撃を避け

光の斬撃を放つ

「そういうな、聖剣の使い手よ。戦いとは楽しいものであるう！」

「・・・それは人それぞれです」

光の斬撃をしゃがむようにして避けた後

しゃがんだ体勢のまま足のバネを極限にまで使い強力な突きを繰り出す

それをラルドさんは

体全体を使った一撃で迎え撃つ

その結果は、互角

どちらも、同様に同じ距離を吹っ飛ばされる

「・・・堂々とした戦い方。・・・何故あなたは裏の世界にいるのか。私にはわかりませんね」

「表に立っていては人を殺すことなど不可能ではないか。

裏にいるからこそ今の私がいる、表に立ってなどいたら

我が欲求など潤す事など不可能。そのうち干からびて死んでしまう」

「性格が最低と・・・」

「・・・否定はできないのである

そんな我だからこそ、今ここで戦っているのだッ!!」

その言葉と同時に動く

聖剣と魔剣がぶつかり合う

絶え間ない金属のぶつかり合う音

火花。

全てが一瞬の内にたくさん量が見え、聞こえる

どちらも互角

この状況は動かない
体力、スピード、パワー、精神、経験
個々に格差はあれど、全ての総合を見ればどちらも互角
この状況は異様な物が無ければ動かない

「ハアアアツ！」

また二人ともぶつかり合う

懇親の力を込めた一撃、

だが、決着はつかない

ふたりの手に汗がにじむ

どちらか、死ぬかもしれないという生きるか、死ぬかの所でのやり取り

その中での金属音

その全てをなぎ払う爆発音が響いた

「・・・ツ!？」

ラルドが眼を見開き、驚く

「ふ、ボスがやったか・・・。さて、こちらも決着をつけよう」

その声のほうを向けば

スウアフルが魔剣を構えている

慌ててそれに反応しラルドが聖剣を振るうが

「甘いな。ほかに気を取られた瞬間にお前の死は確定だ」

その言葉とともに放たれた突きは

聖剣エクスカリバーを持っていたラルドさんの手ごと貫くような軌道だ

どうにか、聖剣の柄に当たらせるようにして手を貫かれる事を避け

るが

エクスカリバーが甲高い金属音と共にラルドの手を離れ
空中を回るようにして飛ぶ

「しまッ・・・!!!」

その瞬間にラルドさんの横腹を魔剣が貫く
強烈な突きの勢いでラルドは後ろに数?吹っ飛ぶ
わき腹には魔剣が刺さっている

そして・・・

「自分の剣である聖剣によりとどめを刺してやるっ」
スウアフルの手には黄金の剣が握られており

もう上を持って行き、振り下ろせば殺せるという所まできている
偶然にもスウアイルの手に落ちたか、それとも計算してラルドの手
からはじいたのか
それはわからない

「・・・ッ!!!」

「楽しい戦いであった」

その言葉と共に振るわれる剣
そして・・・

「ガハッ・・・!!!」

口から血を吐いた

それはラルドさんではなくスウアフルである
黄金の剣はラルドのギリギリ横をとおり地面を斬りつけた格好であり
ラルドの手には相手が使っていた剣・・・
魔剣テイルヴィングが握られている
その剣はスウアフルの腹を貫いていた

「・・・私もやろうとしていたこととはいえ
・・・我が剣で倒されるとは、なんとも滑稽である」

「正直危ない所でしたが「絶対に外さない」という能力がこの剣に
無ければ
負けていたかもしれませんね。正直避けるのに精一杯で攻撃は雑な
ものでしたので・・・」

その言葉を聞いて
スウアフルは気絶して倒れる
死んではない、今の時点ではまだ
そのスウアフルにラルドは治療魔法をかけ始める
殺しはしない、罪人は国で裁くべきである

「・・・倒したものの、私もさすがに他の人に応援とまではいけま
せんね
正直体を動かすのが辛いです・・・」
スウアフルの治療と同時進行で自分の横腹に魔法をかけながらそん
なことを言った

「シネエエエエエエエエエエエエエエエエツ!!」
赤い吸血鬼が絶叫し
赤い矢が数十本飛ぶ

「いつもそうね」

その矢は全て氷の壁に阻まれる

「変わらない、・・・いや、変わらない」

「じゃあ、あなたは何が変わったて言うのツ!!」

その言葉と同時に

魔力の込められた矢が放たれる

その矢は氷の壁を砕くが、すぐに次の氷の壁ではじかれてしまう

「変わったわ、私は長年、独りで暮らし

そして、今は好きな人だっている。全てが変わったわ

孤独を味わい続けた、でも今は暖かいとても良い環境にいる」

「それは昔の事を・・・リシたちとの旅をまた体験してるようなものだッ!!」

吸血鬼の言葉

「だからどうしたの？私は同じように旅をしている。それは良いことだわ

あなたはリシのことが忘れられない・・・でも、リシは死んだ

昔のあなたは吸血鬼バケモノと呼ばれながらも楽しそうに笑顔で

暮らしていたわ。だけど、今はどうなの？

闇ギルドの幹部にまでなって、なさけないとおもえないのかしら・

・・・」

「・・・ッ!!」

「昔の生活が良いのならば、また同じ生活を作ればいい別に死んだ人を忘れる、というわけではない」

「だけど、昔は昔、いつまでも進まない事は間違いだ」

この会話の間にも矢が飛び続け
それらが全ての壁に阻まれる

「リシは決してそんな事を望んではない
だから、私がここで止めてあげる。」

私の氷は全ての動きを止め、私の冷気は全ての力を削り取る」
そこでハクは手を突き出す、その方向には吸血鬼がいる

「私の冷気で体力を極限までに削ってあげる
その間にあなたの力は拘束具についた封印で抑えられるでしょう
牢屋の中でまた考え直せばいいわ」

ハクの手から白く冷たい空気が噴出し
吸血鬼を襲った

その結果、死んではいけないものの体力が無くなりドサリと倒れ気絶する

「・・・ま、『仲間を作る』ってのも徹夜から教えてもらった事だ
けど

やっぱり徹夜のように受け入れてくれるのが一番よね」
「
そんなことを言った後

「・・・楽し」

この言葉は十分雰囲気壊せるものだと思う

「はアア!！」

「……ッ」

少年が大声を上げながら切りかかり
それを徹夜は剣で防ぐ

「……『イメージ・ブレイク 想像は精神を壊す』」

その呪文と共に

なにかよくわからないものが回りに広がっていく
よくわからないし、避けれそうにもないので
俺は呆然と突っ立ったまま、それに吞まれていく

『ここはお前と俺の世界、お前の想像が具現化するし、
俺の想像も具現化する』

異様な声が響く

それはクロウラス・ロイドロウの声

「想像が具現化だと……ッ!！」

『そうだ、そしてここはお前の精神を壊していく
生き地獄を味わえ!』

そんな事を言ってくる……が、徹夜は

「……（想像が具現化ということは、ライトノベルもまた読める
のではッ!?!）」

隠れたオタク魂を呼びさます

「・・・やっぱりやめておっつ」
徹夜はやっぱり諦めた

そこで徹夜は溜息をつくど、両手を前に突き出す
その手には、グローブのように見えてわからないだろうが闇がはり
ついている

「食え・・・」

そんな言葉と共に
闇が動き

魔法を飲み込んでいく、その食べっぷりは力士を軽く超える
まあ、限界の無い闇ならば当たり前前の事だが
そして、一瞬で魔法が消失する

「な・・・ッ!?!」

そんな現象にクロウラスが驚く
今起きた現象は

闇がわからない相手にとってわかるわけがないのだ

「おらアッ!!」

徹夜はそんな声と共にクロウラスを殴る
それをクロウラスは腕をクロスさせるようにして防御するが
パワーが圧倒的に上の徹夜の一撃は受けきれずに吹っ飛ばされる

「・・・ぐっ!!」

靴底がガリガリと音をたて、地面をえぐりながら
どうにか耐えるクロウラス

「ふっ!!」

その目の前には徹夜がいた

いつの間にか移動している
その徹夜は下から上に向けて蹴りを放つ

「があッ!!」

それをくらい

空中に吹っ飛ばされるクロウラス

「・・・チイツ!!今まで本気じゃなかったのかッ!!」
クロウラスが思わず言ってしまう
それほどまでに動きが違う

「ふんッ!!」

徹夜は何も答えずに空中のクロウラスを追撃する
空中で徹夜の踵落としがクロウラスの腹に突き刺さり
思い切り地面に叩きつけられる
そこから数?離れた所に徹夜は着地する
そしてクロウラスはフラフラとしながらも立ち上がる

「がああああああああああああああああッ!!」
クロウラスは大声を張り上げながら
凄い速さで迫る

「・・・『火の球』!」
ファイアーボール

哲也はそれに向けて火の球を造り、投げつける
そしてそれはクロウラスにぶつかり、凄い爆発音と共に
瞬間的に火が周りにひろがる

「・・・その程度で止まるかアアアッ!!」
その火の中からクロウラスが出てくる
その体はボロボロで火傷や皮膚が裂け、血の出ているところまである

「・・・ッ!?!」

その行動に驚き

一瞬動きが鈍る徹夜

その頭をガシツとクロウラスが掴み取る

「俺の手に触れたものは頭の中を覗かれ、最後には俺に壊される
これが俺の名・・・『食夢』がつけられた理由だ!

お前も味わえ、テツヤ カゲヤマ!?!」

「・・・ッ!?!」

その言葉と同時に魔法が発動する

クロウラスが頭の中を覗き込む

最初のそれは記憶だった

「・・・なッ!?!」

その内容を

明確に映像となって自分の頭に流れ込む

当然のこと自分の頭がパンクしないように工夫がされているので、
心配はする必要は無い

ただ、徹夜の記憶は、クロウラスにとって異様であった

自分のほかの魔族の記憶、この世界ではない異世界の記憶

今の勇者と学校と呼ばれるところに行き、なんか変な連中に襲われ
ている記憶

そして、勇者召喚のせいでこの世界に来た記憶

「・・・おれは、これが初体験だが頭を覗かれるのは大嫌いだ」
その声とともに

魔法で自分に流れ込んでいた映像が途切れる

正気に戻れば、自分の手を徹夜がつかみ、頭から引き剥がしている

「・・・なッ！？俺の魔法の途中では動けないはずだぞッ！！」

「・・・こんなの根性で十分だ」

そんな呆れる言葉の次には徹夜の拳がクロウラスの顔面を捉える
その拳で完全に倒される

「ふう、終了かな・・・まじめにやるのはつかれるな」

「・・・俺にとどめを刺さなくて良いのか？」

クロウラスは気絶してはいない
ただ体にダメージを食らい過ぎて、もう動く事はできない

「お前の秘密を覗いたのだぞ、口封じしなくて良いのか？」
再度クロウラスは徹夜に問う

「別にいいんじゃないか？記憶を読み取ったのなら知ってるだろうが
俺は黒髪で片目が赤色の少女に「他人を殺してまで自分の秘密を守るつもりはない」てな感じのことを言っただろ？」

「・・・」

クロウラスはただ黙るだけだった

「改心するようにしなされ」

徹夜はそう言って通信機を取り出す

「こっちは終わったぞ。他の人は大丈夫か？」

『ああ、こっちは苦戦したが、十分大丈夫だ、まあ、応援には行け

ないが・・・』

ラルドさんの声が聞こえた

『あつはっは、こっちは話をして終わったよ 相手には今眠ってもらってる』

ハクの声

『・・・むだにッ!! 数がッ!! 多いッ!!』

ライルのそんな言葉

まだ戦闘の音は響いている

『じゃあ、このお姉さんが応援しに行つてあげよう ちょうど近い』

ハクの言葉

『・・・それは助かるッ!!』

ライルの返答

「・・・学園長は?」

『・・・こっちはちよつとまずいですね』
通信機から辛そうな声が響いてきた

『ボスにやられました・・・一応死にはしませんでした、相手は進んで行つちやいました

誰か向かってくれませんか?』

学園長がこんな事を行つてきた

『・・・私は無理そう。今の体力ではボスまで相手する余裕は無い』

ラルドさんのそんな言葉

「・・・俺が行くしかないじゃないですか、これじゃあ
他の人は無理

俺はまだまだ動ける

本当にめんどくさい

「じゃあ、俺に任せてください」

そう言っただけ通信機をポケットにしまい

俺は入り口に入り、階段を下りていく

67話 それぞれの戦い（後書き）

今回では

ボス以外は終了

ボスは徹夜くんが戦ってくれます

結構、王道なパターンです

とても楽しいです、王道は

今回ではとくに何も考える事はありませんでした

やっぱりいつも思うのは

戦闘描写むずかしい、でした

書くのが得意ではない自分は

同じ場面がいくつも出てきそうな感じがします

「二人の剣がぶつかりあう」という場面がいままでで

何回も出てきてますね

正直むずかしいです

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ終りません。

気が向いたらお気軽にメッセージまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

・・・間違つて予約投稿ではなくそのまま投稿してしまいました最悪です。連日じゃなくなった気がします

明日は休みの日なので、2話分書きます・・・

68話 戦いの終結(前書き)

前回のあらすじ

戦いで幹部三人は倒された

68話 戦いの終結

「・・・なんで行かせてくれないのッ!？」

ある少女が大声を上げる

それはルミだ

後ろにはルミが守るようにしてラウがいる

ラウは一応魔法は少しは使えるが、まだ強力なものではないし
防御魔法などに力を入れていたため攻撃魔法がほとんど使えない

「あくまで掃除係ですので」

名の知らない教師がそれに答える

「私だつて戦えるよ？」

「だつたらまずはこの状況をどうかしてください」

教師とルミ達の周りでは魔法が行きかい

鉄のような臭いがあり、赤い液体がそこらじゅうに水溜りのようになっっている

だが、そんな状況でも

敵はまだ多い

ここら一带の敵の部隊が集中してきてるようだった

傷を負った生徒は後ろに連れて行かせ、動く事のできる生徒が対処している

教師は生徒に前の列が結界を張り、その後ろが攻撃をするように。

などの命令を下す

そんな命令をだしていても、人というのは混乱する

今、ルミがいるのは教師が生徒を制御しきれずに乱戦状態となつてしまつた場所だ

「はい、こっちに来る」

「「ちょッ！！まだ一人としか戦ってないんだぞッ！！」」

「もうダメ、下手したら死ぬよ？どうやら戦った奴のレベルは低かったから」

「今回は大丈夫だったけど・・・二人で戦ってて集団に囲まれたらどうするの？」

「エミリイにしてはまともな意見を出している」

「じゃあ、お前の体に大量についてる返り血は何だよッ！？」

「ジークの疑問の声」

「エミリイは二人をひっぱってるが、学生の制服には色は残っておらずその体は少し肌色の部分が残ってるもののほとんどが真っ赤であるその光景は軽くシニールである」

「20人ほどに囲まれちゃってね、殴り飛ばして来た」

「「Aランクってそんな事可能なのかッ！？」」

「あゝ・・・あれぐらいなら普通よ」

「殴ってその大量の返り血は無いんじゃないか？」

「いやあ、獣使いがいてね、大蛇に襲われたから。その時ね」

「獣使い、というものがこの世界にはいる」

「獣は基本的に「使い魔」というものだ」

「それなりに面倒な契約をして、まるで戦友のような・・・または奴」

隷のような感じに
獣は使われてしまうのである

「とりあえず、行くわよ」
エミリイは二人を引っ張りながら食堂へ向かう

「クハハハハハハハハハハッ！！これが学園が裏で作っていた強力な魔法具か・・・ッ！！」

黒き聖職者がいた

その聖職者の前には、なにやらゴツイ兵器が一つ
それは、今他の国などで使われている砲台の数十倍の威力を持つ砲台
魔族の戦艦に使われているチャージ式のエネルギー砲の二倍の威力
を持つ

715

「ククク…！！さあて、これを使えば邪魔な者を殺すことも容易くなる・・・ッ！！」

黒い聖職者はその兵器へ向けて
ゆっくり歩き出す

その瞬間

「がア・・・ッ!？」

横に吹っ飛ばされた

「間に合ったッ！！俺の速さスゲエ・・・！！さすが俺！！」
自画自賛をしている男が一人、とび蹴りを食らわした後だった

それは黒髪、黒目の男

「お前がボスか・・・なかなか面白そうだ」
徹夜である

黒い聖職者は立ち上がり、本を開く

「ふん・・・また邪魔か。私が良い気分です歩いてる所を邪魔するとは・・・その罪の償いは、体中を穴だらけにしても足りぬ」

「おお、怖い怖い」

徹夜はわざと大げさなそぶりをしてる
なにことも大げさな反応が一番だと思う、そのほうが相手が切れる
確立が高い

「・・・処刑の準備だ

我が神に捧げるのは『狂気』。・・・この世には狂気にまみれた話
がごまんとある。

そのうち一つを選び、我が言葉を現実に現そう」
聖職者は本をぺらぺらと高速でめくり
あるページでとまる

「ある貴族の女・・・。そやつは自分の髪をとく召使が、櫛を髪に
絡ませてしまったときに

その櫛で女を殺した、そのときに女の血がついた自分の肌を拭き、
その肌が黄金に光ってるように見えた。それにより生まれたのが『
鉄の処女』アイアンメイデン

女の狂気により生まれた拷問具でお前を殺そう」

その声と同時に俺の後ろにアイアンメイデンがいきなり現れる

「・・・ッ!?!」

俺が驚き、何かを反応する前に
アイアンメイデンは俺を飲み込んでいった

「クハハハハハッ! !次にそれを開けたときが楽しみだ」
聖職者は笑っている

その笑いを爆発音がなぎ払う
その爆発はアイアンメイデンが内側から爆破された音だ

「ビックリした〜・・・」

そのアイアンメイデンの会った場所からは傷一つ無い徹夜の姿がある
徹夜は今普通になっているが

生き残った理由は闇

飲み込まれるところで全身に闇をまとわせた。どこまでも収納させ
られると言う事は

自分の体に突き刺さろうとした針だけを闇で収納する事も可能だ
だから、針は一つも刺さらなかった

そこを俺が『火の球』ファイアーボールで爆破した

「・・・なッ!?!?」

その光景に驚く聖職者

「チイツ! !死刑「七つの大罪」の準備を開始する」

徹夜は知らないが、それは学園長にもはなつた技

「サタン、マモン、ルシファー、ベルフェゴール、アスモデウス、
ベルゼバブ、レヴィアタン。七つの像を一つ一つの間を均等に、七
つの方向に配置する

最後に黒き逆十時の像を我が背後にたてる

・・・死刑を開始する」

その一つ一つの像が光りだす

その像は円を描き、その中心に立っているのは俺

「我は邪神様のために、異端者を排除する」

その言葉と同時に、光が俺に向かって迫り

爆発がなぎ払った

「・・・痛い」

その中でも徹夜は立っている

正直、肌がぴりぴりと痛い、素の体で耐えている

この少年は何故だろうか・・・威力はさっきのアイアンメイデンよりも高いものなのに

防御をしないで受け止める、防御の序列がおかしい

「・・・さすがに攻撃を食らい続けるのも嫌だ、次ので終らす」

次の瞬間には凄く速さで聖職者に徹夜は迫り

その拳が顔面を捉えた

戦いは終わった

あの戦いではいろいろと大変だった

生徒は決して少ない数のけが人が出て、死人が出るのが無かった事が奇跡と言える

建物もところどころ壊れてしまい

そこを直すために使う金額は決して少ない額ではない
ラウなども頑張っていたようだ

そして

「じゃあな、エミリイ」

「あと一年でもしたら、また一緒に旅しよう」

「・・・じゃあね」

俺、ラルド、ライルの言葉

「じゃあね、また今度」

「また遊ぼうね」

ハク、ラウの言葉

「・・・じゃあね、みんな。また旅をしようね？」

そんな感じでエミリイとは別れた

68話 戦いの終結（後書き）

今回では徹夜のチートぷりで終了です
次の話も頑張らなくては・・・ッ！！

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ終り
ません。

気が向いたらお気軽にメッセまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

69話 世の中にはまだ救われない者がいる(前書き)

前回のあらすじ

ブラッククロス

徹夜は『黒い十字架』のボスを倒し

学園と闇ギルドの戦いは終了する

そしてエミリィと別れを告げ

また旅に出る

69話 世の中にはまだ救われない者がいる

魔界

これは数日前のこと、徹夜たちは戦ってはおらず

まだ会議の途中のときである

戦闘から二日前の事である

それは徹夜が覗いた勇者の記憶

その二代目勇者の記憶の世界

そこは記憶の映像のほかに徹夜がいた

そして……

徹夜のほかにある少女が徹夜に気づかれずに忍び込んでいた

その少女の名はミルリア

『魔界六柱』のNo.3『魔雷』と呼ばれる重要な立場の魔族

その魔族の少女の目の前では

「リシくん!!」

「「「勇者様ツ!?!」」」

「大国『サラスム』に転送の魔法で送ったのか。

それでいいのか? 傷の負ったお前では到底私にはかなわないぞ?」

「いいんだ、これで……」

これはあのときの映像

少女も見るのははじめて、これが我が姉の最後の記憶

「俺ごとお前を殺し切る!!」

600年前の人物、二代目勇者のリシから光が周りを包む

「お前その魔法は・・・ツ！！お前の命と替えてまで私を殺すつもりがッ！！」

我が父である、魔王が叫んでいた

「・・・『ライフ・フィニッシュ・シャイニング生命最後の輝き』！！！！」

勇者が強大な魔法を放ち

「・・・ツ！！『ダイクネス・シールド最強の闇の盾』！！！！」

それにはたいして我が父は防御魔法を張っていた
光がその後と周りを包む

そこで映像が終わった

なにもない、真っ暗

「もう何も残っていない・・・か」

ミルリアはそれを呟くと徹夜はわからなかったが

意図的にこの世界から抜け出す

ミルリアは父である魔王がこの世界に、自分が抜け出した後来ていたことを知らないが

魔王が介入できたように、その娘である自分だって介入する事は可能だ

記憶の世界は勇者リシと我が姉リヤナを中心に構成されていた

属性は違うものの同じものから生まれた姉と私では、魔力などには似てるものがある

だからこそ介入し、見る事ができた

「リヤナのせいだ・・・」

ミルリアはぼつりと呟く

それには憎しみと言う感情が染み込んでいる

「リヤナのせいで、お父様は私を見てくれないのだ・・・」
それは勘違い

あの記憶のあとにあったことを聞いていたのならば変わっていたか
もしれない

「お父様が私を向いてくれないのは、リヤナの・・・あのお姉さまの
才能、力、実力・・・そして、最後の裏切りのせいだッ!!」
彼女は今自分の部屋にいて

その部屋には自分の部下である魔族の少年が黙って立っている

「殺す・・・あの徹夜という人間を、あの女の生まれ変わりを
絶対に殺す。ロシアン・・・あの実験を私に使用する。準備をしな
さい」

ミルリアは歩き出しながらそんなことを言った

「ですが・・・」

魔族の少年・・・ロシアンという少年が口を開いた
当然後ろについていつている

「今の私では届かない、あのお姉さまには絶対に届かない
だから、無理にでも底上げをする」

「あの実験には危険が・・・」

「いいから、早く準備をなさいッ!!」

「・・・ッ!!」

ロシアンは苦い顔をしながら唇を噛む

「あなたはいつまで苦しむのですか・・・」

ロシアンがそんな事を問う

「……わからない。そんな事は私にはわからないッ!!
だけど、絶対にお姉さまを殺せば、絶対にお父様は私を見てくれる
だから、ロシアンは私についてきてくれますか?」

「我が主はあなたです。着いていく事は当然の事です
ですが……」

ロシアンという名の少年はそこからなにも言わなかった

「……(ですが、あの魔王様はその程度では見てくれません
いつまであなたは苦しまされるのですか?何故あなたは他を見よう
としないのですか?)」

ロシアンはミルリアよりも魔王のことを理解していた
ミルリアの部下となり、もう何年もすごしている
それは魔王のことを理解するには十分の時間だった

「さあ……いつ」

ミルリアがさらに足を早く動かす

「……はい

(……誰か我が主を助けてはくれないだろうか?僕にはそれは不
可能なのか……?)」

少年の言葉の裏には

リヤナやミルリアが求めている暖かいものがあるに違いは無かった
……だが、ミルリアは気づかない

この日は学園から離れて二日
その間は、王都から学園に行くまでの道は使わず
遠回りをして行っている

いろいろと遠回りをして、観光などに行こう、という感じだ

「む？あれはなんだ」

ラルドさんのそんな声

その目の前には煙

「業者、急いでくれ。あれが気になる」

『はいッ！わかりました』

馬車の業者をせかす

そして律儀にもスピードが上がる

それはすぐにわかった

村だ、村がなにかに襲われて煙が出ていた

村では緑色のぶよぶよとした生物の死骸が多い

「・・・ゴブリン」

ライルがその生物の名前を言った

緑色の気持ち悪い生物はゴブリンらしい

そしてすぐに村に着く

村の中は荒れていて、人の死体もあった

そして奥に進んでいくと

村人達が見えた

どうやら一番頑丈な建物に逃げ込んでいたらしく
ポロポロの体だがそれなりの数が生き残っている

ハクは馬車の上に乗って、まわりを警戒していてラウは馬車の中に
いるように言っておいた

「どうしたのですか？」

ラルドのそんな問い

村人達が立てこもっていた建物の前では異様にゴブリンの死体が多い
どうやら、気づかれてしまい、扉をこじ開けようと集まってきた
たゴブリンだろう

「・・・ゴブリンたちに襲われたのです」

村長のような男性がそんなことを言ってきた

「このゴブリンたちはあなた達が・・・？」

俺が誰でも疑問に思うようなことを聞いた

ゴブリンの死体のことを質問しているのだ

「いいえ、誰だかわかりませんが殺していききました

私達は外を見ることができずに扉を押さえていたのですが、突然
外が静かになったな、と思いました、一応警戒したので30分ぐら
いはそのままだったのですが、おかしいと思いい外に出てみると村に
侵入してきたゴブリン共が全て死んでいた、
というわけでございます」

訳がわからなかった

ゴブリンたちを殺して、そのまま去る冒険者・・・？

だが、冒険者はだいたいは金にがめついのが多いから
あまりそんな事は考えられない

ラルドさんと村長などが話してる間

おれはなんとなく周りを見てみることに

「こつちにも死骸があるな」

俺の目の前にはゴブリンの死骸

その体からは緑色の液体が流れ出ている。人間でいう血というやつだろう

ゴブリンの傷はまるで焼き斬られたようなものだ
すると、服をひっぱられた。そちらを見てみると
少年が一人いた

「我が主がお前に会いたいといっている。おとなしく来て貰おう」
その少年の肌は黒く
完全に魔族だ

「従わないのならば、村人を殺す」

「・・・いいだろう」

少年が歩き出す
それについていく俺

「どこまでだ？」

「ここからまつすぐ行く所に、下に流れの急な川のある崖がある。
そこだ」

ふむ、と短い相打ちをする

「それにしても、お前・・・。とても楽しくなさそうだな」
少年はどこか悲しそうな顔がしてるのが気になる

「仕事をしているのだ。楽しいわけがあるまい」

「いや、そういうわけじゃないんだけどな・・・？」
確かに仕事で楽しそうにしてるのもおかしいと思うが

これは何か違う気がする

「・・・」

「・・・」

少年は黙り込み

俺も黙ってしまふ

「・・・」

「・・・」

そして静寂の時間は続き

それを、少年が壊す

「・・・我が主を」

「？」

「我が主を救ってほしい・・・」

「ん？」

「我が主は物心ついたときからずっと苦しんでおられる
それを救えるのはあなただけだ・・・」

「なんでそう思う？」

この会話の間にもどんとどんと歩いていく

この会話にはまるで重いものが込められているように
ゆっくりと進んでいく

「・・・それはあなたが姉だからだ」

「は？・・・俺は男だぞ？・・・（髪の毛を縛らなければ間違えられるけどな・・・ハハ・・・ッ）」

「いや、姉であっている

あなたは自分の妹を救わなければならない。これは絶対だ

・・・もう着くか。どうか、我が主をお願いします」

最後にペコリと頭を俺に下げると、表情を戻し姿勢を戻した後

そのまま歩いていってしまふ。俺はそれについていくと

その崖にはある少女がいた

「私は『魔界六柱』No3、『魔雷』のミルリア。私が私のためにあなたを殺す

・・・我が姉、リヤナよ」

その少女はそんなことを言った

69話 世の中にはまだ救われない者がいる（後書き）

今回では前半では

徹夜の知らない所で憎しみを向けられてしまいます

ちなみにこれも

『昔の人物の生まれ変わりだった』という設定を考え

『主人公の生まれ変わる前は魔王の娘』というところを考えたときに

じゃあ、徹夜がいる時にも、魔王の娘が出てきたら・・・と思い

それを考えて作られたキャラがミルリアであります

ミルリアは『魔界六柱』での三番目に出てきたキャラです

まだ誰一人リタイアはしていません

結構時間がかかりそうな理由はこれにもあります

今回では

「妹と姉」というところを考えて作ったものです

600年前の人物である姉

当然のことそれがどんな人物かだったかわからない妹

姉も妹も同じように苦しみの生活

それは、リシという存在がいたか、いないか、の違いです

それより、苦しみ続けたのか、苦しみは終るのか、などといろいろ

と変わってくるわけです。

徹夜は姉（？）としてどうするのか

またハクと同様な事をするか？それともただ力でねじ伏せるだけか？

それらはまだわかりません

目指せ！第二の上条当麻！

すません、嘘です。あんな説教高校生なんて目指せないですし、俺まで説教されそうなんで嫌です

そしてミルリアのいう『実験』とは……？
とても危険な臭いを発する言葉
それを使い、姉を殺そうとするミルリア
いろいろと考えた末がこれです

俺にしては考えたかな……？と思う設定です

俺は基本的に頭はすこぶる悪いので

これを思いつくなんて奇跡です

さあ！俺を褒めて！

……すみません、前からそうですが

時々俺はハイになっておかしいです

さっきの言葉は忘れてください

本当にお願ひします

そういえば、みなさん。話が180度かわりますが
チート、という言葉を知ると決まって思いつくのが
アンパンマンの存在です。あれはみんなが認めるチートキャラだと
思います。

そして、何故でしょう、決まってみんなプロ野球選手も顔負けのレ
ーザービームをアンパンマンの顔で再現します。めちゃくちゃすご
いです

徹夜くんもアンパンマンに……すみません、嘘です

まあ、自分の場合は幼稚園の頃は「アンパンマンなんてどうでもい
いいから、水戸黄門をかけて！」と言ってる人だったので、ある意
味おじいさんな俺です

何故水戸黄門なんでしょうかね？

多分「すけさん」「かくさん」がかっこよかったからでしょうか？

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ終りません。

気が向いたらお気軽にメッセージまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

この頃、あとがきに書くことがなくなってきてしまい

後書きの量が減ってきています。それほどまでに気になる事がない・

。。。ということでしょうか？

今回は結構多かったですが、前の話はほとんど無いです

70話 妹と姉の出会い(前書き)

前回のあらすじ

俺はある村に着く

それはゴブリンに襲われてたようだが

どうやら違う何者かが、もう退治していた

そして俺はある魔族の少年と共に

流れの急な川が下にある崖までいく

そこに待っていたのは『魔界六柱』のNo.3

その少女は、俺の前世リヤナの妹でもあった

70話 妹と姉の出会い

「お前を殺す。我が姉リヤナ」
その少女の声

「・・・またリヤナさん関連なんだけど」
俺のげっそりとした呟き

《なんか悪いね、徹夜。でも・・・妹か》（クネクネ）
いきなり俺の頭に響いたリヤナさんの声
ああ、話せるんですか
だったら、なんでずっと黙ってたのかな・・・？
というかクネクネすんな

《私に妹がいるとは思わなかった（キリッ）》
キリッ・・・とかうざったいんでやめてほしいです、はい
そんな文字だけなのにやってもらっても困ります
アツハツハツハツハ・・・めんどくせえよオ
なんだよこれ
なんか他人の家庭の昼ドラ並みにドロドロした話に巻き込まれてる
気分

なんだよ、俺一応他人だよ？生まれ変わって俺になったからといって
別にお前らの家族って言うわけじゃないよ？
俺にはちゃんと元の世界に親はいるからね？

《いや、悪いんだが徹夜。あれはお前もわかるようにリシに会う
前の私と同じだ
どうやってかはわからんが、どうにかしてあの魔族の少年が言った
ように・・・》

救ってほしい》

「・・・はア〜」

肩をぐるぐると回しながら準備し始める俺

悪いけど、ここは最初から本気で行かせてもらおう

「死ぬ準備はできたか？」

その少女・・・ミルリアの手に電気が集まり始める

「来なさいな、二人に頼まれちゃったんだからやるしかねえよ」

「どういう意味だ・・・ッ!!」

その言葉と共に複数の電撃が放たれる

俺の命を刈り取るうとする電撃

それが俺に迫る

「ふんッ!!」

俺はそれを素の拳で砕く

一発目は砕くが次にも攻撃は迫ってくる

俺は2発目、3発目は体をクルリと捻るようにして避けてから

4発目、5発目、6発目をすべて一回の蹴りで砕く

というか、電撃を砕くって凄いよね・・・

「俺はリヤナとは違う、お前とはただの他人だ」

電撃をしゃがむようにして避けた後には

横に転がるようにして3発の電撃を避ける

「そんな事は、知らないッ!!私にはリヤナを・・・私からお父様を奪った女をッ!!」

殺したいだけだッ!!」

いつのまにかミルリアの手には電気の剣が握られている
その剣はどこまでも伸び、距離をとっている俺を殺すために
横なぎに振るわれる

「・・・ツ！！俺はリヤナじゃない・・・だが、俺はリヤナの記憶
を持っているッ！！

リヤナはお前と同じだッ！！」
電気の剣も素の手で碎きながら言葉をつなげる
正直、物理的に倒す事はできてもこいつを救う方法なんてわからない
ただ、なにか大声で言わないといけない気がする

「辛くて、悲しくて、寂しくて、・・・そんなリヤナの人生の記憶
をッ！！

俺は知っているッ！！」

「・・・はずかしッ！！
俺ってはずかしッ！！もう、やだあああああああつあああ
！！

「そんなわけがないッ！！」
ミルリアの叫び

「だったら・・・だったらなんでッ！！
なんで死ぬときにお姉さまの顔は幸せそうだったんだ・・・ッ！！」
電撃がさらに激しくなっていく

「・・・私にはわからない」
ミルリアが一言呟いた

「わからない、わからないわからないわからないわからないわから
ないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわから

「クイツー!!」

ミルリアの手の水晶がパキパキ…と音をたてながら大きくなっていく。それは手を完全に覆っている。

その腕は大きな紫色のグローブでもつけてるんじゃないか、と思うほどのもの

紫色の水晶に覆われた右腕

あれは・・・

《完全に暴走してるね・・・あの状況はヤバイよ》

リヤナさんの言葉

「人殺しの才能だけを見られてるなんて普通は家族とは呼べないな・

・

どんだけ腐ってるんだか・・・魔王は「

俺のボソリとした呟き

元の世界で普通の家庭に生まれた俺にとってはこんなものはわからない

こいつの気持ちはわからない

少なくとも俺はわからない、リヤナならわかるだろうが俺にはわからない

「ゼツタイニコロスツ!!」

その言葉と共にその紫色の水晶から

100以上あるじゃないかと思うほどの数の電撃が放たれる

「こわっ!!」

闇を出してすべてを食らう、闇は電撃も例外ではなく飲み込んでいく正直な所、今のミルリアは暴走していて完全に壊れている感じだから怖い

あんなのは初めて見る

ここで考えるべきなのは

「・・・どうやってあれをミルリアの体から引き剥がすか、だな」
救ってほしいと頼まれた。だから、絶対に殺さない

その間にも、何百と言う数の電撃が放たれ、それを一つ残らず闇が
食らい尽くす

「闇は中に入れた物体を意識すれば、分解した後、再構成することで
鉄が別の新しい物質になるように、異質なものを与える事ができる・
・
・・・ということは「分解」の部分でやめたらどうなる・・・？
もし細胞にまで影響を与えてるんだったら、分解の後に「再構成」
の時点で

工夫をすれば取り除ける・・・はずだと思う」
だけど・・・あれに近づくのは少し大変そうだ

闇で分解するときにはそれに集中しなければならぬ
そのときには攻撃が俺の体を貫く事は必然的だろう

「・・・コ・・・ロス」

完全に理性がない・・・ッ!?うわあああッ!!
怖いとしかいえねえッ!!でも、やるしかねえッ!!

《徹夜、少し体を貸してもらおう・・・》

「は・・・?」

俺が何か言う前に、俺は脚が動けなくなり、体全体が動けなくなる
何故か、体の皮膚が黒くなっていく、闇を使って黒くでもしてるん
だろうか・・・?

「アレに近づくには、攻撃を食らう覚悟が必要だからね
そんな痛みまで徹夜に受けてもらおうとは思わないよ

徹夜の体ではあるが、痛みを感じるのは私だけ、決して徹夜は痛くないさ

体を返したときには治療は完璧にしとくから、痛みを感じる事は無いと思う」

それは完全に女性の声

どうやったのか知らないが完全に声が変わっている

徹夜の体の手が動き、乱暴に髪を払う

払ったときに髪を縛っていた紐が切れて髪が広がる

その姿は完全にリヤナさんの生前の姿そのものだ

《髪を縛る紐をわざわざ切れる様にしないで良いじゃないかッ！！》

ちなみに俺のツッコミ所はそこだ

わざわざ買うのはめんどくさい・・・あ、金属製のがあったんだっ
た後でそれを使おう

「悪いね、大雑把な性格だから

・・・悪いけど、この体。ボロボロになるまで使わせてもらっ

・・・勝手にしてくれよ、もう・・・

その次の瞬間にはリヤナさんは動き出している

電撃を闇で防ぎながら、どんとどんと近づいていく

「ふふ、妹と会えると思わなかったし、まさかいるとも思わなかったが・・・」

どんとどんと近づいていく

もう、ほとんど近距離で

今手を伸ばせば届きそうなくらいだ

「・・・まさか、妹にハグしてやるときが来るなんて思わなかったよ」

え・・・？

その言葉と共にミリリアに抱きつくリヤナさん

俺の体なんだけどおおおッ！！はずかしいじゃないかアアアッ！！

「・・・作業を開始する」

闇がミリリアの右腕を覆い始める

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

ミリリアはそんな言葉を繰り返しているだけ

何をされているかわからない

ただ、自分の憎しみの相手が近くにいる事だけはわかるんだろう

ミリリアの体から電撃が流れ始める

「ぐうッ・・・！！・・・がアッ！！！！」

その電撃はリヤナさんを苦しめる

その間にも作業はやめないようで、ずっとくっついてる

「ふふ・・・お前も私と同様・・・ぐッ、

家族というものを、暖かい温もりを知りたかったただけだろう・・・

ッッ！！」

さらに電撃の光が強くなる

「私も同様だったから・・・ッ・・・な・・・。よくわかる・・・ッ！！」

それにたいしてリヤナさんはさらに強く抱きしめている

「あんなクソな父親しか・・・ッ・・・いなかったんだ、辛かったね・・・

「ッ」

さらに、強く、強く抱きしめる
もう、闇の作業が終る。完全に水晶という異物が取り除かれる
ハツと我に返るようにミルリアの目に光が戻り、電撃が止む

「……これからは私を頼るといい、いつも徹夜の体の中で眠ってはいるが

……お前が私を呼べば徹夜の体に乗っ取りをかけてまで出てきてあげるから」

《おいコラ、その発言は何だ》

俺には聞き逃せないものが聞こえた気がする

「う……ん……。」

ミルリアの声が聞こえた

「……ごめんなさい」

涙をポロポロと流しながら謝っているミルリア

「大丈夫、許すよ」

リヤナさんは優しく言っている

「お姉様に会えて……嬉しい」

はっきりとした意識の声。さっきの暴走時の声とは違う

「私も会えて嬉しいよ、可愛い私の妹」

《生でドラマを見てる気分だ。李氏の時といい、このミルリアの時
といい

なんでリヤナさんの時にはドラマになるんだ……?》

俺の疑問は無視された

「私もお前も鈍感だ……。近くにいる人の気持ちを考えれば、すぐに良い事があるさ」

チラリとリヤナさんは魔族の少年のほうを見る。少年はとても心配そうな顔で見ている

ミルリアの放っていた魔力は相当なものだったので、近づきたくても近づけなかったのだろう

「……。？。ロシアンがどうしたの？」

そのリヤナさんの視線を追って、ミルリアもその少年を見るが意味がわからないようで疑問の顔を上げている

むう……。あれって一応俺の体だよな？

俺の体がめちやくちや恥ずかしい事に使われてるよ俺としてはとても恥ずかしいよ

なんでまだ抱きついてんだよ。しかもお互いに

「ごういうのは自分で気づくべきだからね、私は何も言わないよ」
そういつてニコリと笑うリヤナさん

「お姉様、私は……。なッ!？」

ミルリアが途中で驚きの声をあげる

そして、いきなりリヤナさん突き飛ばす

リヤナさんとミルリアの間の地面にはなにやら変な矢のようなものが突き刺さった

その変な矢のようなものが爆発した

二人とも爆発には巻き込まれなかった

だが、ミルリアは川の流れる崖のほうに立っていたため爆発の勢いで川に落ちる感じになってしまった

「ミルリアッ!?!」

リヤナさんが大声で名前を呼ぶ

ミルリアは気絶してるようで何も言わなければ、こちらを向きもしない

そして川に落ちた

そこで、リヤナさんが一緒に川に飛び込もうとして

それを、魔族の少年・・・ロシアンがリヤナの肩をつかむようにして止めた

そして、リヤナさんではなくロシアンが飛び込んでいく

「我が主の苦しみを取り除いてくださり、ありがとうございます
徹夜殿と我が主の姉君。いつかまた会えますように・・・」

ロシアンは空中で器用にもこちらにペコリと頭を下げる

次の瞬間にはミルリアを追うように川に落ちていった

「フハハハハハハハハハハッ!!なにが『魔界六柱』No.6にも叶わないだッ!!」

私はNo.3を排除したぞッ!!ざまあみるオオオ、リーシ・トルウマア!!」

後は手負いの一人の敵を排除すればッ!!この私が『魔界六柱』の座にッ!!」

横からそんな声が聞こえた

リヤナさんがゆっくりとそちらをみると

魔族の大群。その先頭では大声で笑っている魔族がいる

徹夜とリヤナはわからないが、それは『魔隊』と呼ばれる部隊。300人ほどの部隊だ

そして先頭に立っているのは、そのリーダーを務める『魔隊筆頭』ゴルド

ゴールドと魔隊をあわせると301人だ

そのリーダーのゴールドは

前の魔界の会議でリーシ・トルウマアに威圧され顔色が悪くなっていた男

あの時の会議でかいた恥を同じ『魔界六柱』であるミルリアに向けて発散したのだ

「・・・悪いね、徹夜。まだ体は返せそうに無いよ
リヤナさんの・・・俺の体だけでも・・・足元から闇が広がっていく

《・・・》

俺は何も言わない

「ひいッ!？」

そのゴールドと呼ばれた男がリヤナさんから放たれる威圧により
気持ち悪い声をあげた。その顔には冷や汗が滝のように流れている

「私が600年前・・・『黒鬼』と呼ばれた力を見せてあげよう・・・」

その声は冷たく、なにも感情はこもっていない
ただ残酷に、容赦はなく、闇が動く、その魔族の部隊を一人も生かすつもりは無いように

その様子に、ゴールドも、そして『魔隊』の300人も怯えるように
後ろに下がる

「ひ、ひるむなあ!! 相手は一人だ、殺せエ!!」

ゴールドのそんな大声

完全にひるんでるのはお前もだけどね

怒りに満ちた黒い鬼と魔隊と呼ばれる301人の魔族の部隊がぶつかり合う

それはリヤナさんの一人舞台。戦いと言うものよりも虐殺だった

70話 妹と姉の出会い（後書き）

今回は

リヤナさんが後半頑張っていたいただきました

結構大事な所ですが、二話で終了です

正直な所、小説中にあつた徹夜くんの恥ずかしさ

あれは完全におれの恥ずかしさです

もう書いてる最中にも「うわああああ」と思い始めて書き終わるまでがとても苦労します

めちやくちや恥ずかしいです。そして近くに親がいたりするので見られてないか、とかがとても気になり凄い時間がかかってしまいます。まあ、自分で勝手に恥ずかしさで悶え苦しんでるだけなんですようけどね

ちなみに、あんな恥ずかしい事（徹夜の言葉）

生であんな恥ずかしい事をいつてる人いたら

おれは吹きだしちゃいそうです

あ、この最後のはやっぱり忘れて

とりあえずこんな感じの話です

そして・・・かならず魔王の娘 and 娘の生まれ変わりは

鈍感だ・・・ッ！！

むう、ミルリアがどうなったかは

今後の話で出てきます

そのときを楽しみにしててください

一応、その話も最初のときから考えてるストーリーなんで
死角はない・・・はずです

そして、今までで何回も誤字の御報告をしていただけではないのですが、俺も捜してみる事にしたのですが、さすがは俺の目、飾りですあれです、みつきりません
「かるく『ウオーリーを捜せ!』という本を思い出しました
小学生の頃はあれは好きでした
ちなみに『ウオーリーを捜さないで』という2チャンのやつも好きでした。みなさんもインターネットで見たらどうですか?
あ、音量を上げておくこと忘れずに
俺が最初に見たときは本当に笑いました(笑)

そして、話が戻りますが

あの会議に出ていたゴルドという男です
こういふのがあると、少し複雑な感じに思えてしまうのは俺だけでしょうか、各自の考える事があり仲間であっても襲う俺にとっては結構難しいですね

『魔界六柱』にも各自で思うことがあります

ジールクは魔王という上司からの仕事をこなす、仕事主義
プライベートは完全に自分のために使います

リーシは魔王様主義の女

仕事もプライベートも魔王のために使います

ミルリアは魔王という父にどうにか目を向けてもらうために殺す

という感じですよ。まあ、今の所でてる人たちでは、ですが
そして今回ではミルリアが脱落

これからの魔族と人間の戦いには参戦する事はありません
というか、参戦する必要がありません

ミルリアは家族の温もりが欲しかった、という女の子であり

リアナさんがそれを補ってしまえば同じことです

そして、ミルリアのことが好きな少年ロシアンです
こんな感じの人のことを純粹に思う男の子が書きたいなく、
と書いていたので、丁度いいと思います出させていただきました

ジールクにメイトという部下がいるように

ミルリアにはロシアンという良い部下がいます

『魔界六柱』なら部下をとるのは簡単

だけでも、部下を取るほうが珍しい。という感じですよ

まだNo.1とNo.3とNo.5し出てきておりません

後の三人を出すのが楽しみでもあります

徹夜くんの体がリヤナさんに乗っ取られると体が黒くなります
なぜでしょうね？身体の神秘ですよ

まあ、闇でも使ってるはずですが、リヤナさんの生前に近づけるた
めのものです。

今回では、ミルリアがどうなったかわからない。というものが残っ
たように、前の闇ギルド幹部のクロイドロウが徹夜の秘密を知って
いる

というものも残っています

これは別に無計画に残したわけはございません

計画があるのですッ！！べ、別に嘘なんかついてませんッ！！

・・・

・・・いや、マジで本当に計画ありますよ？

そういえば、闇での分解だなんだかんだの設定を忘れてる方も多い
でしょう。レーゲンのギルドの大会が始まる前に

そんな設定を書いてあるんですよ？ほぼ使う場面がありませんでし

たがこのための布石です。この話になって、いきなりそんな事が出来る。ってなるのは変だと思うので
めっちゃ前ですが書いてあります。正直前過ぎたと思います

この頃、お気に入りに入れてくれる人の数が、
増えては減って、減っては増えてが続き

965人ぐらいという数を保っております。正直な所
減るたびに俺は悶絶して苦しんでおります

「ぎゃあああああああ！！また減ったア〜！！」てな感じです
日々、悶絶の日々です

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ終り
ません。

気が向いたらお気軽にメッセまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

ちなみに今回の後書きは1500文字以上、最多記録です

71話 それぞれに重い物がある(前書き)

前回のあらすじ

ミルリアの暴走を止め

姉と妹のちゃんとした再会

それを邪魔したものがいる

そして、そいつらとリヤナがぶつかりあう

それはリヤナの虐殺行為

失禁しているものもいる

ほかの二百名強は全てが地に伏せ、目に光は無くピクリとも動かない
その魔族たちは、心臓さえも動いてはいない

残りの男達の目の先にはある女性

その魔族の女性・・・と言っても、そう見えるだけで元の体は完全に人間の男なのだが

簡単に言うと、リヤナさんだ

その女性の片手には血だるまと化した肉の塊がつかまれている

魔族であつただろう、その肉の塊はもう誰だつたのかはもう判別できない

生き残つてる者は一人一人知り合いであつただろう戦友を気にしている場合ではない

「残りは、なア〜んにんだア〜・・・」

その女性から声が聞こえた。普段聞けば綺麗な声だな、などと思つてもかもしれない声は

この場において恐怖しか生まないものである

その女性はユラユラと近づいてくる

それに対して魔族の男達はただ一歩程度下がる事しかできず足が震えて「逃げる」という大幅な移動ができない

それは、意図的にリヤナさんがやっているのか、やっていないのか、それはわからない

ただ、魔族の男達は、なにもせず死ぬか、覚悟を決めて立ち向かつて死ぬか、

その二択程度しかない

ただ、後者は絶対に選ぶものはいないだろう

まだ、戦い始めた時は数十人単位で一気に襲つたときがあつた

それを物ともせずになぎ払うリヤナさんを見ていた男達はもう抵抗する気力は無い

『助けてくれエ！！助けてくれエ〜ッ！！たすけ・・・』
また一人の悲鳴が響き、途中で途切れる
また命が一つ消える

そして・・・また一つ、また一つとどンドンと消えていく
そして、残ったのは一人

魔隊を率いていた魔族の男、ゴルドだ

その男の頭がガシツと捕まれ

その細い腕にはありえないほどの筋力で上に持ち上げられる
ゴルドの足が地を離れ、宙に浮く

「フハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！私があ・・・、私が
トップに立つのだア！！」

それでも狂ったように笑っているゴルド

「アハア・・・」

女性の短い笑いと共にグジョオツ・・・！！という生々しい音が響き
ゴルドの狂ったような笑いが途切れる

糸が切れた操り人形のようにカクンという動作で体の力が抜ける
そして、ゴルドはつかまれていた顔を離され、力なく地面に崩れ落ちる

《こわっ・・・》

リヤナの頭に体の主である男の声が響いた

その光景を遠くから見ている影が一つあった

その影は女性。黒い髪に黒い肌。その女性は魔族

その女性は、魔王に仕える魔族のトップである

リーシ・トルウマアと呼ばれる女

「ミルリアに使用された実験はいまだ暴走の危険あり

暴走すると理性が無くなり、敵を殲滅、または体から分離するまで
は止まらないものと

思われます」

その女性は風属性の魔法『伝達』の染み込んだカードに声を向ける

『ふふ・・・我が一番目の娘、リヤナの時から実験をしているが

まだまだ、足りないようだ。今実験をしている学者は始末しておけ
もつと優秀なものにやらせる』

そのカードから聞こえた声は30代の男性の声
魔王である

「・・・戻り次第、始末します

それであるの女はどうしますか・・・？」

『リヤナか・・・。やめておけ、あいつは私の出来損ないの娘だが
実力は本物だ

いくらお前とて準備をせずに戦うのは無謀というものだ

ここは、何もせずに戻って来い。あと、ミルリアの始末も怠るな』

「・・・御意に。あと、『魔隊』が無くなりましたが、よろしいの
で？」

『あんな物は所詮は雑魚の集まり、すぐに消えていたさ。特に問題

は無い』

「了解です。では・・・」

その言葉を言い、通信機をきり、ポケットにしまう
そして、リーシが手をパンパンと叩くと

彼女の後ろに三人の魔族の男性があらわれる

「ミルリアを見つけないさい。・・・見つけ次第、始末するように」
その言葉を聞き、三人の魔族の男性は黙ったまま
また消える

その三人はもうミルリアを捜しに行っているはずだ

「ミルリアは実験の水晶によって、衰弱してるでしょうからあの三人で問題は無いとして・・・あとはミルリアの部下のロシアンですか、あの少年は体調は万全としても

一人で三人を相手にするのは無理でしょう・・・ふむ、問題なく進みますね」

リーシは、もうここから去る準備を始めている

「あとは、あの女・・・いや、男かな？とりあえずあいつをどうするか問題ですね」

そう言ったリーシは、闇にまぎれて消えていく

俺はさっきの崖より少し離れた所にペタリと座り込んでいる
服は血だらけ、すべて俺の血ではないのだが・・・

そして崖は、大勢の魔族の死体があるため、とりあえず離れた

《いや、本当にごめん徹夜。魔力を使い切るとは思わなかった……》

「なんなんですか……ザコに本気で攻撃して……魔力の残量なんて考えてなかったでしょ」

《いや、妹を攻撃されたんだから、姉が怒るのは当たり前でしょ……》
・ (エツヘン)《》

「いや、エツヘンじゃなくてさ……しかも、魔力がなくて治療魔法を使えないから、体が電撃でポロポロなんだけど……」

《いやはや、何も言えないね》

「……はア」
俺は溜息をつく
めっちゃダルイ……魔力を使い切られた俺にとって一歩動く事もきつい事だ

「それにこれどうするんですか……完全にラルドさん達になにがあつたか聞かれますよ……」

《あ、だけど派手に暴れたから、もうこっちに気づいて来てるんじゃない?》

「おまえ……」

《あっはっはっはっは・・・申し訳ない》

「・・・もう、めんどくさいなあ」

《いつも思うが徹夜は「めんどくさい」「が多いと思うね》

「あれ、俺って声に出してます？」

《私は君の中にいるんだよ？心の中で思ってることなんて筒抜けさ
今まで言った回数を数えてもいいんだよ？》

「過去のものなんて数えられないでしょう」

《いや、そこは1（話）から読み直して》

「・・・それはどういう意味ですか？」

《ん・・・いや、なんでもない》

「・・・？」

《とりあえず、話を戻すね。ミルリアはどうなったと思う・・・？》

「あの少年ならやってくれたんじゃないですか？結構強そうでした
し」

《ふむ、徹夜もそう思うなら大丈夫だろう・・・》

そこで俺は立ち、村へと歩き出す

《じゃあ、私はまた眠るよ・・・。すこしはしゃぎ過ぎた

・・・おやすみ」

「・・・」

そしてリヤナさんがもうしゃべらなくなる

ああ、もうやだよ

体中血でベトベトなんだけど

血生ぐせえ・・・

「それにしても・・・マジで魔王はどうするかな」

ここまで巻き込まれたら、もうマジでやり返すしかねえよな

それに・・・ミルリアはミルリアの考えがあるとして俺を殺しに来たとして

私欲のために殺させるなんて事は『軍』としては、あつてはいけないことじゃないか・・・？

ということは魔王が直々に命令として俺を殺しに来させたという事だろ

じゃあ、俺がやりかえそうとしなくても、時期にまた殺しに来る奴がいるだろうからな

俺も俺で魔王側を始末するほうになるか・・・

「わざわざ美月にやらせる必要もないよなあ・・・」

俺のそんな呟き

俺が魔王を潰して、「勇者」という職の存在意味をなくしてやっかな・・・

「徹夜くん・・・。君は何をしている？」

突然聞こえたそんな声

そちらを見てみるとラルドさんとハクがいた

「・・・ちよつとした用事です」

さて、どうするべきか

こんな全身血にぬれた体。どんな説明をしてもアウトだと思う

「用事って何？徹夜」

ハクが俺に対しては珍しく鋭い眼で聞いてくる

・・・

「掃除だよ。掃除」

「へとへとだね、徹夜くん。魔力でも大量に使ったんじゃないか？」

ラルドさんんも言葉

「あつはっはっ・・・」

おれの花なき笑い

「ハクは徹夜くんが歩いてきた方向を調べてきてくれ

こんな徹夜くんはラウヤルミには会わせられないからな・・・。

とりあえず近くの川で体を洗ってもらおう事にする」

「わかった・・・」

ハクは一つの返事をして走って行ってしまった

いやっ・・・行かないでえっ・・・

でも、今の俺には馬鹿なりヤナさんが魔力を使いきってしまったせいで

追う事もできない

「さあ、来るんだ」

「いや、ちょ・・・俺のペースで行かせて」

正直、普通の歩きの速度でも辛いです

「いいから、来なさい」
俺はラルドさんに手を引つ張られていった

「ほら、服を村からもらってきた」
ラルドさんに服を渡される
今まで来ていた服はあまりにも真つ赤だったので洗って乾かしている
それを着た、その後に金属製のやつで髪を後ろにまとめる
ラルドさんが改めてこっちを見てくる

「なにをやったんだい・・・？」

「あっはっは・・・」

「・・・ハクが確認してくればすぐにわかる事だよ」

「姉と妹の再会を邪魔した人たちに天罰を下してました」
俺の正直な報告

「・・・」

白い目で見られた・・・
俺は本当のことを言ったよね？なんか理不尽じゃない？

「ふう・・・」

そこでタツという足音が聞こえるといつの間にか近くにハクが立っていた

よくもまあ、頑張って確認してきたもんだ

「・・・崖のところに300人ぐらいの魔族の死体があったよ」
ハクの報告。よくもまあ、正確に数を数えてきたね・・・

「徹夜くんはなにをしていたんだ？」
再度ラルドさんが聞いてくる

「あれです、命を狙われてるから返り討ちにしたんです
あとさつきも言ったように、姉と妹の出会いを邪魔した奴らに天罰を下しました」
めっちゃ俺って正直者

「・・・命を狙われる、ってところはギリギリでわかるが
妹と姉ってとこがわからないね」

「・・・」
なんか言っても信じなさそうだからやだなあ・・・

「別に秘密なのなら離さなくてもいいが、私達には闇のことを言ったのに

いまさら、話せないことでもあるのかい？」

「えっ！？闇っ！？」

ちなみにハクはまだ知らなかったり

俺は（魔力が無いので・・・）微弱ながらも闇を手の上に出し
ハクに見せる、それにもハクは驚いてるようだった

「……あくまで自分の問題なのでラルドさん達には関係ありませんよ」

あの大勢の魔族は俺が殺した、あくまでそれだけです」

「……まあ、人にはそれぞれいえないものがあるからな今の所は、黙って置いてあげよう」

「ありがとうございます……」

「……とりあえず、その体の傷を治療しようか」

「あつはつは、……ダメージくらってんの、なんでわかったんです?」

「疲れのほかに体にガタがきていたみたいだからねさつき手をつかんで引っ張ったときにわかったよ」

「……本当にありがとうございます」

そんな感じで治療の問題はなくなりました

魔界

ある少女が歩いていた
そしてある部屋に入る

「何か御用ですか……魔王様」
その少女の目の前には魔王がいた

「よく来たな。ルクライル・リーン」

その少女の名前はルクライル・リーン

『魔界六柱』のNO、6であり

得意な属性が水で『血水』という名前をつけられた少女

「・・・任務でございますか？」

「ああ、勇者か徹夜と呼ばれる男、どちらかを襲って来い」

魔王の言葉

「ですが、私は『魔界六柱』NO、6・・・最弱の『魔界六柱』ですよ？」

ジールクがかなわなかった相手を殺す事など不可能だと思いますが・・・」

「お前はただ攻撃してくればいいのだよ。運が良ければ倒せるだろう・・・？」

「・・・ようするに「特攻」ですか？」

それは自分の身を犠牲にした攻撃。ようするに命を削って攻撃し運よくば殺せ、というもの

日本でも昔、飛行機に燃料をいきの分しか乗せない「特別攻撃隊」というものがあつた

それと同じようなものだ

「ああ、そうなるだろうな」

なにも感情のない言葉

「魔王様の仰せのままに

「……ただ、私のほかに闇ギルドの手伝いを借りてもよろしいですか？」

「ああ、かまわない。どこの闇ギルドを使うのだ？」

「闇ギルドで最強を誇る、トップ3の残りの1つ。『黒の冒険者』ブラック・ランカーその闇ギルドのメンバーは全員で2人で、そのどちらもが実力が認められた数少ないランクSSの冒険者です
そいつらは戦いに喜びを求めるものであり、強い者と戦う事が好きな奴らです

誘えばついてくる事は決まっております」

「ふむ、いいだろう」

所詮、闇ギルドなど我らにとってはただの消耗品だ」

「ありがとうございます……」

ペコリと頭を下げるルクライル・リーン

「では、行ってよいぞ、勇者または徹夜を襲うのはいつでも構わない」

「ハッ……」

少女は歩き出し、部屋から出る

そして、どのくらいか歩き

「ふ……ついに私も使い捨てにされる時がきたか……
前から覚悟はしていたが、こつも早く来るとは思わなかった……」
ポツリと呟いたルクライルと呼ばれる少女

「お前も……大変だな」

横からふと声が聞こえた
ルクライルはそちらを向かずに答える

「ええ、もう私も終わりですよ。ジールク・ライ」
その男はジールク・ライ
その後ろには部下のメイトがいる

「お前も最後の任務だと思っていいだろうな」

「お前？も」・・・？」

「ああ、俺も最後の任務を言われちまった・・・
もうすぐ絶対にあるだろう『戦争』の時に、俺は死ぬな」

「・・・そして、私はその戦争の引き金。とても不幸な役を渡されました・・・」

「ハツハツハ、お前は死ぬか、生きるか、それはまだわからないさ
だが、どの道不幸なのは変わらないけどな・・・」

「・・・女の子に形だけでも慰めの声をかけてあげる、という事は
できないのか？」

「悪いな、俺はそういうことができないんだ
プライベートにゃあ、男友達しかいないし、仕事では友達なんても
んは作らない
それが俺だからな・・・」

「人間とも友達になれたくせに・・・」

「・・・むくれんな。そんなもんなんだよ・・・俺は」

「・・・そうですか。では、お互い死なない様に頑張りましょう」
そう言っつてルクライル・リーンは去っていく

「・・・俺は絶対に死ぬ運命なんだよ」
ポツリと呟いたジールクの言葉はルクライルには聞こえなかった

「ジールク様・・・」
後ろにいたメイトがしゃべりかけてきた

「ああ、わかっている。行こうか・・・」
そう言っつて、ジールク・ライも歩き出した

「お前は生きてくれ、ルクライル・リーン。お前はまたその可能性
が残っているのだから」

最後にジールクはそんな事も呟いた
その声はとても重く、悲しい響きがあった

71話 それぞれに重い物がある(後書き)

今回では

あまり明るい所はありませんでした

まさかここまで明るくなくなるとは思いませんでした

ちよつと自分でもびびりましたね

最初のところは

「魔隊」の奴らがごろされているとこだし、リーダーは狂ってたし

そのあとはリーシの魔王との会話だし

ミルリアに容赦のしない魔王だし

そのつぎは、徹夜とリヤナの会話で

そのあとラルドさんたちとの会話でしたね

徹夜くんが馬鹿な説明していましたが、ほとんどがシリアス

そして最後は

新登場の『魔界六柱』のNo.6の少女
ルクライル・リンです

その少女は「特攻とかけろ」との命令を下されてしまいました
生きるか死ぬかはわかりません、すこし気になるとこです

そしてジールクに下った命令とは何か

その命令により「戦争」で死ぬ、といったジールクの心の中は
どうなっているのか

そして最後の呟きは・・・？全てが今は不明
すべてが謎です

そして、魔王が外道

今回では、どんどん書いてるうちに6000文字を超えました
これは、いままでで二番目位に多い文字となります
いつも多くて5000文字、一番多くて7000文字でした
あまりにも夢中になり、こんな文字数になりました

そしてまた小説の内容に戻ります

この頃のこの小説は

最初は徹夜の一本道の人生の小説。だったのですが

今回出てきたように、敵も含めていろんな人生が書かれています
前の小説にも書いたように

軍が絶対主義のクソ外道、魔王

魔王主義のリーシ

仕事主義のジールク

ジールクとなにかがありそうな、ルクライル

家族の温もりが欲しかった女の子、ミルリア

ミルリアが好きで救いたかった魔族の少年、ロシアン

600年前、ミルリアと同様、苦しんだリアナ

600年前、一人の魔族の少女を愛した勇者リシ

美月に巻き込まれ、生まれ変わる前は魔族の徹夜

召喚により連れてこられた勇者、美月

竜を守るために生きる見た目だけ幼女、イリル

勇者リシと旅をしていた白い少女、ハク

勇者リシが好きだった不老不死の吸血鬼

『時の巫女』という鎖につながれた少女、カイラ

いろんな重いものがあります

書いてるうちにこんな感じになってしまいました

あゝ、楽しく可笑しくハッピーエンドの小説を書くのが目的だった

のに

なぜかこんな重い感じになってしまった

書いてるうちに変わってしまいますよね・・・
いろいろと大変です・・・

好きなキャラ、オススメの小説などを教えて欲しいはまだまだ終り
ません。

気が向いたらお気軽にメッセまたは感想をお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

この頃、この小説が終わったら書くの小説を探すために
書きまくってるのですが、なかなかじっくり来るものがないんです
よね。

ファンタジー系なのは決定事項なんですけど

設定が決まらぬ(´・`・´・`・´)

72話 (血)祭り(前書き)

前回のあらすじ

魔隊は滅び

ミルリアに迫る刺客

ルクライルの最後の任務

ジールクの言葉

全てが重い物

72話 (血)祭り

今日はあの日から3日後

もうサラスム王都に着いている

この日はサラスムでは何かの記念日で祭りがあるのでどんちゃん騒ぎだ

「・・・はい、これラウ。わたあめ」

あの祭りに定番のふわふわした甘いもの

これは三代目勇者の時に「祭りの時には子供にはこれが必要なんじやアアアアアア!!!」

との事より、作られたものである

他にも勇者の力は絶大であり、射的や金魚みたいな魚をすくう物などさまざまな屋台が並んでいる

「ありがとう」

そう言っ受取ったラウは嬉しそうに口に頬張る

とても美味しそうに食べていて、すごい良い顔をしている

久しぶりに・・・癒されるう・・・

この頃、殺されそうになったり、殺されそうになったり、殺したりだったから、俺の心の傷によく染み込む、この癒しとても最高です

「ラウは俺の助けだな・・・」

そういって俺はラウの頭を撫でている

「・・・」

それに対して、訳のわからなそうな顔をしながら嬉しそう顔をするといい

矛盾の顔をするラウ

「ラウにばかりかまってないですよッ!」
ルミがそんなことを言うてくる

「お前はガキか・・・」

「いや、この姿は完全に子供だと思っぞ、徹夜くん・・・」
ラルドさんからのツッコミ

えええ〜・・・だつてさ〜、癒され度ではラウが俺にとってのMA
Xですよ？

「・・・ごめんごめん」

俺が適当にルミを頭を撫でてみる事にした
適当なのだがルミは嬉しそうにしている

「徹夜〜 わたしにもかまって〜」

お決まりな感じでハクが俺に抱きついてこようとしますが・・・

「どっせエイツ!」

それを投げ飛ばす俺

ハクは器用に空中でクルクル回ったかと思つと
着地する

「なんで私だけ投げるのッ!」

「周りを見てみる、彼女のいない男共が惨めにも俺とハクを恋人だ
と勘違いして

俺を睨んできている」

俺の周りでは男供が凄惨な形相で睨んできている

ちなみに、さっきの徹夜の言葉によって殺意が出ている所もあるが
徹夜は気にしない

「・・・徹夜は人気がある」
ライルのそんな言葉

「人気なんて無い、あれだ・・・俺には良くわからない・・・」

「・・・話を戻すが徹夜くん、それで会わなきゃいけない人とは・・・」
「？」

「ああ、俺の『最悪だよ、センサー』が告げている、こっちに間違
いなくいる」

「・・・そのセンサーは何？というか使えるの？」
ライルのツッコミ

「大丈夫だ、問題ない」

「問題しかない気がするよ」

「やだなあ・・・ラルドさん俺を信じてくださいよ」

「私は信じるっ！」

「どっせえいっ！...」

また、抱きついてこようとしたハクを投げ飛ばす
さっきと同じだ

「とりあえず、行こう」

俺が歩き出すと同時に

『大丈夫、私の『最高だよ、ヒヤッハアアア！！センサー』に反応がある』

そんな声が聞こえると同時に

俺は誰かとぶつかった

「いたあッ！！」

「きゃッ！！」

それは女性だった

しかも、聞いたことのある声、見たことのある顔

この世界には珍しい十年以上の知り合い

美月だ

「「みつけたあッ！！」」

俺と美月が大声を上げた

「てえっうやあゝ・・・私を捜してくれてたんだね」

「げっっ！！」

ハクと同様投げようとしたのだが、さすがは勇者、突然のことで美月のスピードに間に合わず体当たりを食らい、倒れてしまう

「てえっっうやああああ」

「抱きつくくなッ！！顔をスリスリしてくなアアアア！！そして俺を撫でようとするなッ！！」

恥ずかしいわアアッ！！」

慌てて、俺の体の上からどかし

体勢を立て直す俺

「……」

なんですか、みなさん

俺と美月をそんな目で見ないでください

俺が一方的に恥ずかしいです

「……とりあえず、美月落ち着け

って、俺に顔を近づけようとしてくんナッ！！何をする気だッ！！」

「え？キスしよう……」

「よし、手を頭につけてゆっくりと後ろに下がれ、急に動くなよ
そして、理由を話せ……ゆっくりだ、ゆっくりだぞ」

「え？それは徹夜に会えなくて寂しかったから」

「……お前レーゲンで俺のこと追ってきただろ……」

「でも、ちゃんと会ったわけじゃないし、話してないし」

俺と美月の会話

「……」

ちなみに俺と美月以外はこの事態に追いつけていない

ちなみに、勇者御一行も一緒だったようだ

みんな、ボケとしてる中に

凄い怒りの表情でこちらを見てくる少女がいるのがとても気になる

「それに一回キスしてあげたじゃない」

めっちゃくちゃクネクネしながら言っている

「・・・あれはほつぺにだろ、それに一回したとしてもダメだ。
あの時は不意打ちだろ・・・ノーカンだ」

「・・・(ムッ)」

「むくれてるんじゃない、これじゃあ、本題に入れないだろ」

「・・・徹夜は何を抱えてるの、とても疲れてる顔だよ？」

「そこから言ってくるのか・・・。とりあえずは俺じゃあ、うまく話せないな」

この王都の牢屋にいるだろう、闇ギルドの幹部だったクロウラスという少年から

記憶でも移してもらえ、記憶を自分に持ってこれる、ということは相手にも渡せるはずだ

それは見ないとわからないからな・・・」

「・・・ふうん、その少年には秘密を話したんだ？」

若干不機嫌な美月

「勝手に覗かれただけだ」

というか美月が知らないということとは

あの少年は黙っててくれたみたいだね・・・なんとも予想外だな

「・・・徹夜ッ！！」「」

ラウを覗くラルドさんたちが声をあげた

「・・・美月さまッ！！」「」

勇者御一行の無口な女性を除いた人たちが大声を上げた

「……これはどういうことだッ!?」「……」
そして、その全員が同じ言葉を言った

「あゝ、話して無かったな……こちらはミツキ ナイトウ
現勇者様。そして俺はその幼馴染だ」

「……ツ!?」「……」
みんなが驚いている

「だ、だが勇者は異世界から呼ばれた人物……
その幼馴染ということは……」

「そ、俺も異世界から来ましたからね……無理矢理だけどね八
八……王様達コロス
あ、なんでもありません。最後のは忘れて
つつい本音が漏れてしまった」

「……ところで、美月。お前俺のことをなにかの情報網で追って
たんじゃないか？」

「……(ギクッ)」

「わかりやすい反応をありがとう。それはあとで叱るとして
……『魔界六柱』のNo.3だ、そいつを捜してくれ、お前にと
って良いことに使える」

「……わかった、その情報は良い事だね。
それにしても……私の考えてる事がわかるの、徹夜？」

「幼馴染を結構長い間やつてるからな・・・不本意な事に」

「てつやあああ」

「だから、抱きついてこようとすんなッ!」

その反応に若干むくれ気味な美月

最後の言葉は完全無視ですか

「できるだけ早くな。その少女は命を狙われる危険性もある・・・」

「わかった・・・ラル子頼んだからね。」

さっきの徹夜の言葉通りできるだけ早くお願いね」

「・・・はい」

こつちを怒りの形相で見ていた少女が返事をした

その少女はこつちをキツと今まで以上に睨んだ後、人ごみにまぎれていった

「・・・とても面白くないな、この世界は」

俺のポツンとしたそんな呟き

「・・・確かにこの立場に呼ばれちゃったからね、他の立場なら楽しめたと思うよ」

いつもとは違いまじめな表情で返してくる美月

「本当に面白くないよ、この世界は・・・」

そんな声が聞こえた、そこには俺と美月の間に割り込んできた少女
その少女は魔族だった。俺と美月が動く前に準備していた攻撃を実
行する

少女の周りから赤い水があふれ
周りを攻撃する

「どっちの二人の性格もお人好し……この場合は二人ではなく
回りを狙えばここは正解と見た」
そう少女は呟き

俺の場合は俺の横にいたラウ
美月の場合は近くにいた無関係な子供数人

「……ッ!!」

俺と美月は動き

俺はラウをすこし強引ながらも、位置をずらし攻撃範囲から離す
美月も同様で子供数人をどかす

そして、赤い水が俺と美月をなぎ払った

そして、俺と美月は反対の方向に吹き飛ばされた

そのどちらもが建物を一つか二つほど突き破っていった

「……私の任務はこれで終了」

そう呟いたときにはジャリンツ……!!という金属の音が複数響き
ラルドの黄金の剣、ハクの氷の剣、マイルの鋼の剣、ロミルの白銀
の剣

その四つの武器が首元に向けられている

「……私の命もここで終わり」

魔族の少女が呟く

「たしか『魔界六柱』No.6のルクライル・リーンですね？」

私の仕える勇者様は魔族であろうと殺す事は好きではありません。降伏してくださいますか？ラルドさん方のほうもそれでかまわないですか？」

マイルの言葉

「私達はそれでかまわない」
ラルドさんが答える

「・・・生きる可能性か」
少女は呟き、両手を挙げた

美月 視点

「・・・ッ」

私は相手の攻撃を防御するために手をクロスして赤い水の攻撃を受けた

その攻撃を受けた所は
服が溶け、肌がチリチリとなり全体が赤く、血が出ている

「・・・酸性の水」

すかさず治療魔法をして、できるだけ手の傷を治す
そしてあたりを見回す

逃げ惑う人々、その中に雰囲気の違いの違う男が一人
徹夜と同様でヒョロい感じの男

「俺は『ブラック・ランカー黒き冒険者』の二人の内の一だ
お前みたいな強者と戦いたかった」

「・・・最後のトップだね。ここで潰れてもらおうか」
そういつて両者とも動く

私の動きは早く、並の強者なら一秒も持たずに死んでしまうような
速度

それを男は止めた

そして、男は私の剣を握る手に少しだけ触れる

「がア・・・ッ!!」

その瞬間に私の体中に鋭い切り傷ができ

大量の血が噴出した

あわてて後ろに下がる

その動きはフラフラでどうも頼りない

「・・・な・・・にが？」

私の疑問の声

「俺は触った物を切り刻む、という特別な魔法を所有している
次に俺に触られた時点でお前は死ぬ」

「・・・」

こいつは・・・本気で行かなきゃだめだ

「はああああッ!! 『光の剣』ライトソードを展開する!!」

私自分の体の周りで剣を振るう

その軌道にあわせて光の剣が何百・・・何千という剣ができあがっ
ていく

「・・・ゴォー!!」

その声と共に何千という光りの剣が男に迫る

「私の魔法は他の魔法にも通用する

はあああああああああああああああああああああッ

！！」

男は雄叫びを上げる

その言葉を証明するかのように手をかざす

その手に当たった光の剣は見えない何かに切り刻まれるように
ポロポロになり最後には消える

「ハアアアッ！！」

私は右手に光の力を極限にまでためる

そして私のパンチが王都の大地を揺らした

そして、その敵は倒れていて、気絶していた

「・・・危なかつ・・・た」

そこで私は力が抜けて倒れる。気絶するほどではないが体がとても
辛い

徹夜 視点

「チイツ・・・いてえなこんちくしょ・・・」

魔力は回復済みなのでどうやら酸性だった水にうけた腕の傷を直す
美月も手でガードしてる所が見えたが

俺も美月も防御の仕方を間違えたようだ・・・
だから、わからない奴の攻撃は厄介だ

「死んでもらおう」

「ん？」

逃げ惑う人々のなかにそいつはいた

男、ゴツイ姿の男が一人

「私は『黒の冒険者』ブラックランカーの二人の内一人である」

「また闇ギルドか・・・」

その言葉を呟くと同時に

俺は思いつきり右の拳を振りかぶり、パンチを繰り出す

「・・・パワーが異常に強いな・・・。だが、攻撃方法を間違えたな俺に触られた時点で終わりだ」

受け止められていた

そして、次の瞬間にはまるで俺の腕の血管が爆発したかのように血が噴出していた

「なアツ・・・!!!?」

慌てて足で蹴りを放つ語りで俺から、相手を離れさせる

手が一瞬で使い物にならなくなった・・・

闇でそれを覆ってこれ以上ダメにならないようにする

だから、さっきも言ったとおりわからない奴の攻撃は厄介だ

「勇者のほうにいった相手も同じような魔法を持っているのだが

私の場合、物を爆発させるなどの操作をする魔法を所有している。

今回は、腕の血管を爆破させてもらった

まあ、相手に触れなければいけないのが欠点だが・・・私はSSランクの冒険者

そう簡単には行かんぞ」

「ちくしょおがアアア・・・!!」

この場合は片手が使えない分、本気で行かなければいけない
闇を完全に周りに展開する

それに対して驚く、闇ギルドの男

こんなところで闇を展開してはどうなるかわからなくなるが
いまこいつに殺されるよりはマシだ

闇が数千という手数になって

相手を刺殺しようと襲い掛かる

「ぐおおおおおおおおおおおッ!!」

俺の敵は雄叫びを上げながら手をかざす

その手に闇が触れると同時に闇ははじけて消える

こいつはSSランクでも上位と言っているいいほどの実力だろう

美月のほうにも行ったと言っていた、美月のほうがすこし気になっ
たが

今はこいつを倒すのを優先する

「ハアッ!!」

俺の短い声と共に

左手に、男を刺殺しようとしている闇の5倍の濃さの闇が集まる。

「俺の闇で滅してやるよオッ!!」

その声と共に俺は左手を振るう

黒い闇の爆発が起こり、王都全体の空気を揺らす

そして、

「ここまでの量は処理しきれなかったか・・・」

敵は気絶して倒れている

短い戦いだっただが、一瞬の内にピンチに追い込まれてしまった・・・
これがSSランクの上位
勝ったとは言え、とても辛い戦いだっただ

「・・・この手の治療は回復魔法でも上位魔法を使わないとダメそ
うだな・・・」

そんな環境が揃ってるのは城だけか・・・」

とてもめんどくさい事になりそうだ

72話 (血)祭り(後書き)

これからは凄いスピードで物語りは進んでいきます
すこし早すぎるかな、と思いました

物語は「戦争」という風につてしまった様で
話は忙しいように進んでいくのです

だから、だいたいはこんなもんかな、と思います

そして

ルクライルは生き残りの道へ

ジールクはどうなるのか・・・

全てが重い・・・全てを投げ出した思いです

今回では最後の闇ギルドが倒されました

はやすぎないか・・・？と思うかもしれませんが

それは徹夜と美月

どちらも長くは戦えない環境にされてしまったためのものです

闇ギルドの二人の魔法は似てましたね

どちらもチートみたいな魔法です

裏家業に堕ちたSSランクは二人ですが、

他の三人の内一人は同様にチートな魔法です

その三人はSSランクでも群を抜いた実力です

ちなみにその闇ギルドの二人の異名は

『斬殺』と『爆死』です

どちらも魔法の印象で決まったものです

そしてこれからも展開は速く進んでいきます

そして、なんか次の話はごじゃっと複雑(?)になる気がします
とても頑張ってます、俺

大変です、ですが頑張ります

本当に最終話が見えてきましたね

40話は行かないかもしれませんね

もう寄り道する余裕がありません

どうか、まだまだ見続けてくださいお願いします

好きなキャラ、オススメの小説を教えてくださいなどは終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

この頃思うのが

この小説を完結にしたら折角お気に入りなどに入れてもらい
高いポイントになったのに、減るんじゃないかな?という恐怖です
だ、大丈夫、大丈夫(自己暗示)

そして、またやらかした

予約投稿ではなく、直で投稿してしまいました

まだ、誤字のチェックできてないので

誤字が普通以上に多いです

なので、明日はできたら二話分書きます

片方は明日中に投稿し

もう片方は予約投稿です

73話 いろいろと終わらせたい(前書き)

前回のあらすじ

ぎゃああああッ！腕がア

腕がアアアアアアアアア！！

大きくなっちゃった

すません、古いですよ

あれです、「耳が大きくなっちゃった」みたいな感じですよ

ほんとすません、うざいですよね

しかもあらすじになっていないし・・・本当にすんません

73話 いろいろと終らせたい

俺は今城にいる

あの戦いから一時間程度は経っているはずだ

「……ん」

右手の調子を確かめている俺

右手では上位の治療魔法をかけられ、

黒い文字でルーン文字がズラリと書かれた包帯で手にクルクルと巻かれていく

治療魔法のあとにこれを巻くことで、普通以上に治癒力を高めるものだ

「めんどくさそうになりそうだな、こんちくしょうが……」

さっきも言ったとおり俺がいるのは城の中

そして、その城にあるたぐさんの部屋の中の一つ

確認するまでも無いがその部屋には外から鍵が閉められている

そして、部屋にはそれなりに硬い防御結界

外側からではなく、内側からの攻撃を跳ね返すものだ

『闇』を使ったせいだな

「警戒されてますねえ……」

俺が闇ギルドの男を倒すと

すぐに騎士団のやつらがきた

腕の治療をされると言われた。腕が使えなくなるのも嫌だしとりあえずついていく

覚悟はしていたが、やっぱり閉じ込められた

まあ、こんな結界如き壊せないものではないが

わざわざ壊して逃走した所で指名手配みたいなことをされてしまう

のはごめんこうむりたい

腕はだいたいの傷は治っている。ただまた乱暴に使えばすぐに壊れる事間違いないし

治療魔法の専門家によると「三日は安静に」とのことだ

「ふう〜・・・SSランクか〜」

SSランクって良くわかんない魔法を持ってる人ばかりなのかな？

あいつは爆破の魔法って言ってたけど

火属性魔法じゃなかったしな・・・

不思議だな〜・・・

「失礼する・・・」

その言葉と共に入ってきたのは、俺がこの世界に来て結構早くに見た顔だった

王妃に弱い王様である

その後ろにいるのは、顔の知らない男性と黄金の剣を背中に背負っているラルドさん

「王様が自ら俺の所に来るとは・・・なかなか面白くないですなで、後ろの方は誰ですか？」

「・・・私自ら来なければいけないと判断したから来たのだ

後ろの二人は一人はお前の知ってる顔だな

もう一人はSSランクの冒険者の『糸殺』のトルミスだ」

「よろしく『黒の破壊者』さん」

そのSSランクの男はニツコリと笑う

「ようするに、俺が暴れたときのための護衛役、というわけか

冒険者に依頼しないで勇者にでも頼めばよかったんじゃないか？」

「美月様は今結構な重症を負っている、けが人に頼めるわけが無いだろう」

「・・・美月が怪我をしたか。美月のほうにもそれなりの強者がいたんだな・・・」

「勇者様の場合はお前と同様トップクラスSSランクだ
そういえば・・・えと、少年・・・」

「あ？名前ですか・・・？少年でいいですよ、あなたには教える
気もありませんので」

「徹夜くん、王様に失礼なんじゃ・・・」
ラルドさんが言ってきた

「アツハツハ・・・無理矢理つれてこられた上に、
なにもせずこの城出てってやったんだから感謝しろよ。
はつきり言つてこの頃イライラしてるんだよ」
ニコリと笑いながらしゃべる俺には
みなさんすこし引いてるようだ

「話を戻すが、君はすこし複雑な立場にいる
レーゲン、ドラゲイルなどで魔族を相手に戦ってくれたのは私達で
もわかっている
私達の不利になる事をしないことも私はわかっている
だが、それだけじゃ重臣達が納得しない」

「めんどくさい事は抜きにして直で言えばいいじゃないですか
・・・『戦争』に参加しろ、と」

「・・・君にはなにもがお見通しか？」

「お見通しなんて分けないでしょ、あなたの事なんてわかりたくもない、吐き気がする」

予兆はあったんですよ、『時の巫女』の殺害、悪竜の復活
魔王達の側がやけに焦っている様に見える、

まるで戦力を急ごしらえに手に入れようとしている」

「・・・」

「こんな感じで考えられるのが戦争」

・・・「勇者」という絶大な戦力を手に入れた事で
人間側も魔族側も『戦争』という急な流れに乗り始めている」

「確かに、そうだ」

「別に俺はいいですよ、戦争に参加しても」

でも、軍の言うとおりにするのは嫌ですから、いい加減お前らの勝
手に付き合うのも

魔王のうざい存在を見たり聞いたりするのも嫌ですから」

「・・・我々の協力をしてくれる、ということでもいいんだな？」

王様の問い

「ええ、今の所はそう思ってくれてかまわないですよ」

俺のニツコリとした笑顔

これで、俺が美月に会う前に考えていた

『戦争』への参加する事が決定した
計算どおり)・・・キラーン)
眼鏡はないですけどね

73話 いろいろと終わらせたい(後書き)

今回で

徹夜も参加決定

本当に大変そうです

いや〜・・・俺にしては考えたんじゃないやありません？

バカandアホandドジandクズの俺にとって

これはとても難しく書いたと思います

まあへんなところもあると思いますが、見逃してください

好きなキャラ、オススメの小説を教えて欲しいなどは終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

74話 この頃、なんかまじめな話になってない？（前書き）

前回のあらすじ

・

・

・

（ ・ ・ ・ ） ぶもっ！ー！ー！

・

・

・

74話 この頃、なんかまじめな話になってない？

そして時間が過ぎる

戦争の開始はちょうど一週間後ということだ
困るね・・・

「・・・徹夜」

聞いたときのある声

それは幼馴染の声だ

そちらを見てみると体のところどころが包帯で巻かれている美月が
いた

その立っている姿は他の人から見ればちゃんとしているように見え
るようだが

どうにも俺から見ると痛々しい感じがする

「・・・美月か」

「うん・・・これから王様に用があつてね」

「じゃあ、俺がいた部屋のところに行けばいいんじゃないか？
まだいると思うぞ？」

俺がそういつと美月は行ってしまっ

まだ相当辛そうだな・・・

「勇者様か・・・」

「ええ、王様、すこし話があります」

「話とは・・・？」

美月の顔を見て近くにいた奴らをすべて部屋からのける
こういうのは重臣達がないほうが話しやすいだろう、という配慮
があるだろう

「魔族との戦争後、もし私が魔王を倒す事に成功したら
魔族との契約を結んでいただけなのです」

「魔族との契約・・・？」

「ええ、魔王を倒すという事は戦争主義の魔族のトップを倒すとい
うことです

なので、脅威はなくなることは決まっています
だからお互いに傷をつけないという人間と魔族の契約です」

「だが、いままであやつらは人間を大勢殺してきたのだぞ？」

「それは人間も同様の事です

魔王が戦争にこだわってきたから「悪」となっていますが
殺してきた量では魔族も人間も同じです。魔王がいなくなれば
人間も魔族も同様に悪の区切りなんてなくなります」

「・・・たしかに。だが他の国は従わないも知れんぞ？」

「魔王を私が倒したという事はこの世の中には私の上に行く者がい
なくなる、ということですよ。なので、魔族を奴隷にしたりなどとい
うことが起これば」

私はその国を潰します。絶対に」

「・・・確かにそれならば恐れて何もできないだろう

だが、そんなものは隠そうと思えばいくらでも隠せるではないか」

「だから、王様に言ってるんです」

「ようするに情報網を張り巡らしてそれを察知し、報告しろということか」

「そついつことです」

「・・・協力しよう」

「ありがとうございます、王様」

その会話を聞いている影が二人いた
それは魔族、

その魔族は次の瞬間には走り出し

地下に向かう階段を下り始める

そして、最後まで下り

こつちを見て驚き、声をあげようとした兵士に

一瞬の内に近づき、手刀で気絶させる

もう一人の魔族は階段のところの上のほうを気にしている

その少年がある牢屋を見た

その中には少年がいた

「ジールク・ライか・・・」

その牢屋にいる少年が呟いた

「久しぶりだな、クロウラス・クロイドロウ」

その少年は闇ギルドの男

他の牢屋にも同様に捕まっているものがある

「ジールクツ!？」

その牢屋の中に自分の名前を聞いて異様にこちらを見てくる魔族の少女もいるが

いまは気にしてはいられない。

だから、そちらは向かない

この話の後に行かなくてはいけない

ちなみにその少女は無視されてるのですこしむくれ気味だ

「クロウラス・・・お前には友達としてすこし優しさをやるっ」

「優しさ？」

「これだ・・・」

ジールクが取り出したのはただの地図

それは魔界の地図だった

「情報、か・・・」

魔界がどんあふうになっているか、などは人間にはわかっていない
だから、地図

これだけの情報でも人間にとっては宝のようなものだ

「これで、取引でもするんだな。そしてちゃんとした人生を歩むと
いい」

「お前・・・魔族を、魔王を裏切るのか？」

「俺は仕事とプライベートとは区切るタイプだ。これがプライベートの最後

あとの俺は仕事のために生き、仕事のために死ぬだろう」

「お前・・・」

「だから、珍しい人間の友への最後のプレゼントだ」
そして地図を渡す

この情報を取引にすれば、少なくとも死ぬ事はないだろう

そして、ジールクはある魔族の少女の所に向かって歩いた

「よお、ルクライル。生きる道にいけないよかったな」

「お前も早くこちらにくれればいい・・・」

少女は鉄格子があるが、限界までこちらに近づこうとしている
少女の手には拘束具のようなものがつけられている

それには封印の魔法でもかけられており、少女の力を抑えているだ
ろう

「無理だな、俺が生きる道に行くとすれば奇跡以外の何物でもない」

「そんなわけないっ！！私がこちらにこれたのだ、お前だってこれ
るっ！！！」

「俺のやるうとしてることは「特攻」とは違うんだよ・・・
とても重要な役だ・・・。それには俺の命が、俺の火の属性が必要
になる・・・。」

「・・・ッ!? 魔王様はあれを呼び出そうとしているのかッ!?
しかもお前の命を使ってまでもかッ!?」

「ああ、そういうことだ。とりあえずプライベートの心を捨てるた
めに来た

ほら、これをお前にやるよ」
ジールクの手から投げられたものをルクライルはキャッチする
それは赤い石のはめられたペンダントだった

「火属性の魔法石・・・?」
純粋な火属性の魔力を宝石に溜め込むと
低い確率で生まれるときのある石だ

「俺が頑張つて作つてみた。それをお前にやるよ
まあ、お前の属性は水だからな、火属性なんて無用だが
いらぬなら、捨ててもいいぞ」

「いや、大事にする・・・」
ルクライルはそれを両手で抱えて胸の前でギュッ・・・と力強く持
っている

「まあ、無用なプレゼントなんて人にするのは初めてだからな
さっきの情報を渡したのとは違い、これはお前にとって不必要だろ
うな」

「お前からはじめてもらったものだ、絶対に大事にする・・・」

「そうか、嬉しいよ」

「・・・」

「ジールク様ッ!!」

もう一人の魔族・・・部下のメイトが名前を呼ぶ階段の上から足音が聞こえてくる

「ふむ、俺はもう行く、じゃあな」

そうしてメイトがくると

すぐになにかの紙を取り出しそれを燃やす

すると光がパツと出てきたと思っただらその場から消えていた

『レポート空間移動』の魔法具だろう

そしてジールク達が出て行った代わりに入ってきたのは少女魔王にとって最大の相手であろう人間

勇者の美月だ

美月はルクライルが大事に持っているものを見つける

「・・・ッ!!」

取られてしまうかと一瞬思うルクライルだったが美月から予想外の言葉が

「彼氏からのプレゼント・・・?」

まさかの予想外の言葉

「な、なななな何を言っているッ!?!」
「こりゆはッ!?!ち、ちゅがうぞッ!?!」

「言葉が可笑しくなってるよー うふふー」

鉄格子の前でしゃがんでニコニコと笑っている勇者ミツキ
それに対してズザザ・・・ツ！！という音を立てながら下がる顔
が真っ赤なルクライル

「っだから違うとっっているッ！！」

「あつやしいー・・・」

「むがああああああああああああああああ・・・ッ！！」
恥ずかしさにより爆発しているルクライルを見て美月は笑っていた
それが20分ぐらい続いたので
最後にはぐでー・・・と疲れたルクライルがぶっ倒れていた

「あゝ、楽しかった。えっと、たしかクロウラス・クロイドロウだ
ったね

どこにいるのかな・・・？」

「俺に何か用か・・・？」

美月はその声がしたほうに歩み寄る

「徹夜の記憶をわけて欲しい」

「あの男か・・・だけでも、記憶つてのは生きてる間のことだからな
その中にもプライベートな事もあるわけだが
あの男にとっての異性と呼べる相手にそんな記憶を全部渡せるわけ
が無い

それは誰にとっても恥ずかしい事だからな

とてもだが、簡単には渡せることではないわけであり

あいつを憎む気持ちはあるが、すこしそこは気が引ける」

「その手に持った情報を王様と直接取引ができるようにしてあげる
あとは、そういう部分はあなたが故意に抜いてくれてかまわない。
私にとって重要な部分でいいからね・・・すこし残念な部分もある
けど・・・」

「ふむ、それならかまわないが・・・
私を信じて、お前の精神を壊されるかもしれないがいいのか？」

「そんなことする人が、わざわざ徹夜のことなんて心配しないと思
うけど」

「・・・ぐっ」

とりあえずはクロウラスが美月の頭にさわり
記憶が移っていく

徹夜のプライバシーは事細かに守られていて

美月は内心ガツカリ気味だったことは言うまでも無い

そして、時間がたち

「私が二代目勇者リシの生まれ変わり、

そして徹夜がその恋人だった魔族のリヤナの生まれ変わり・・・

ということは、前世からの赤い糸ッ!？」

そのあと城の中では「うふふ」
と笑いながらスキップする勇者
そんな珍しい光景を見た者は多いと聞く

74話 この頃、なんかまじめな話になってない？（後書き）

今回は

ほぼまじめな感じですよ

いやあ、俺にまじめな話は似合いませんね（笑）

あ、だけど

戦争ということなのでふざけの時間もほぼ終わりかもしれない

あ、もう疲れますね

重い内容なんていやですよ

だれか、かわって

いや、変わってもらったら逆に俺はどうすればいいんだ？

てな感じですけどね

ああ、余った時間は

新しい小説でも発掘してよ

あれです、いろいろと大変です

俺のタイピングのときって指が可笑しいんですよ

タイピングが別段うまいというわけじゃないので

右手は人差し指と親指

左手は中指でうってるのですが

左手が中指だと邪魔に鳴らないようにと人差し指が上に上がりっぱ

なしなのが癖なのです、なのでタイピングを思いっきりしまくって

ると

どんどんどんどん疲れていくわけです

人差し指単体が

でも直そうとしてもやりづらくて無理なわけです

というか、タイピング中人差し指が上に上がってるのなんかキモ

くないですか？

とりあえず、話を戻しましょうか

美月とルクライルの話

美月は女の子です

好きなキャラ、オススメの小説を教えてくださいなどは終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

75話 ねえ…なってるよね？まじめな話に…（前書き）

前回のあらすじ

この頃まじめになってきているのはなぜだろうか

そんな疑問を持ちながらも

徹夜は歩く

75話 ねえ…なってるよね？まじめな話に…

これは

主人公の徹夜、でもなく勇者の美月でもない

これは違う人の、違う場所

川に流された末の話

「……ん……う？」

私は良くわからない所で目覚めた

わからない天井、わからないベットの上

「いつつ……」

頭がズキンと痛む

周りを見てみると知らない部屋だった

「あ、起きた！おきたよ、母さん！！」

そっちから声が聞こえた

そちらを見てみると、黒い肌の少年がいる

10歳ぐらいの少年がいた

「……（魔族の少年？）」

そんな疑問が頭に浮かぶ

「ねえ、だいじょうぶ？」

少年が近づいてきて私に問いかけてくる

正直どんな反応をしていいのかわからず黙ってしまっ

「トオル、迷惑してるでしょ。やめなさい」

そちらを見てみるとドアを開けてある女性が入ってきた

その女性は人間だ

「でも、母さん!!!心配じゃんっ!!!」

トオルと呼ばれた少年が大声で言っている

「……(母さん…ということは魔族のハーフかな?)」

少年は魔族と人間のハーフだと思った

「大丈夫ですか？立ってます？私はチルと言います、こっちはトオル
あなたの名前は？」

軽く質問攻めだ

「……大丈夫です。私はミルリアと言います」

少しふらつくけど、どうにか立つ事はできる

すると、少年がニコニコしながら私の手を引っ張っていく

正直な所、立つ事も辛いのおもいきり引っ張られるのは辛い

そしてドアから出るともう一つ部屋があり、そこに男性がいた

「おお、起きたんですか。大丈夫ですか？」

その男性が口を開く

その男性は魔族のようだ

「大丈夫です……」

自分の右腕を見てみると、やはりそこには水晶は無く

ただ、なぜか黒い肌が目立つほどの黒で

変なマークが書かれている。それを手でこすってみても消える事は
ない

「それは何なんですか？トオルがあなたが倒れている所を見つけた
のですが

助けたときからそのマークがありますよ？」
男性が質問してきた

「・・・私にもわかりません」

確かお姉様に闇で水晶を取り出されていたはず

そのときになにかの副作用でなったのだろうか・・・？

今度どうにかしてお姉様に会って聞いてみるしかない

そして、今気づいたのだが魔力がほとんど無い

どうやら水晶の暴走のときに根こそぎ奪われていたようだ

「私はどのくらい寝てましたか・・・？」

「私達が見つけて4日ですよ」

4日・・・4日も経っているのにほとんどの魔力が無いとはどうい
うことだ・・・

そこまで水晶のせいで衰弱していたのか・・・？

よくわからないけど、これは絶対に回復するだろう

「助けてくださり、ありがとうございます」

いまさらだが礼を言っておく事に

それに笑って答えてくれる

女性と男性

そして、なぜか私の手を持っている少年のトオルは私をニコニコと

見続けている

なぜだろうか・・・？

その時、私のお腹が「くぅ〜…」という間の抜けた可愛い音を出した

「・・・ッ！！」

とても恥ずかしかった

それを見た女性・・・チルさんがニコツと笑いながら

「もうお昼の時間なので食事にしましようか
ほら、トオルとダイも手伝って」

と言った。あの男性はダイというらしい
トオルとダイさんは軽く返事をして食事の準備をしている

「ミリリアちゃんは好き嫌いとかあるう〜？」
チルさんの声が響いてきた
どうやら私も食べるらしい。正直ありがたい

「とくにないです・・・悪いので私も手伝います」

「ありがとう、ミリリアちゃん」

そういつて手伝いをする事に
はつきり言つて、『魔界六柱』として生活していた私にとって
これはほとんど無経験の事ばかり

皿を落としそうになり、一応それでも戦闘のプロ、結構自身のある
反射神経で

足などを使いバランスよく皿が割れないように受け取る
それに対して、トオルは楽しそうに手をパチパチと鳴らし
チルさんとダイさんは感嘆の声を出す

「・・・(こつこついうのも悪くない・・・というか良すぎる)」
ちなみに私の感想はこれだ
そして、すぐに食事が始まる

正直な所、こつこついうふうに他の人と食事をするという事も初めてだ
仕事の同僚とはあまり仲がいいとはいえなかったし、お父様は私を
見てくれない

こんな事するのは初めてで、とても嬉しい

「この村はいいところがいっぱいあるんだぞ！」

ダイさんが自慢げに話している

村ということは、他にもいっぱい人がいる、ということだ

「私、魔族ですけど迷惑にならないですかね・・・？」

私の疑問

これは人間のほうでは絶対に問題になる事だ

当然、ダイさんも魔族だがそれは認められていることだろう

いきなりのよそ者を認めてくれる所なんてあるわけがないので、一応聞いてみた

「ああ、そのことなら大丈夫だ

この村はな、魔族と人間で作られた村だからな。心配する事なんて無いぞ

ときどき旅人がビックリするときもあるが最後には笑顔で村を出て行く位のいい所だ」

ダイさんが答えてくれる

どおりで自然に生活できているわけだ

「ミルリアお姉ちゃん、昼ごはん終わったら一緒に遊びに行こう？」

トオルが質問してくる

「違う、私はいもうt o . . . いや、なんでもない、一緒に遊びに行く」

妹って言いそうになったが、ここでは関係なかったんだ・・・ッ！！

トオルは私が言いそうになった事に疑問の顔を浮かべたが

遊びに行く、と聞くと嬉しそうな顔をしてくれる

なんだろうか、こういう無垢な笑顔を見ると癒される

今まで無駄に「軍」の上層部にいたから、余計にこういうのに弱いのだろうか・・・？

「……「軍」といえば、ロシアはどこにいるのだろうか
気になる」

「私を助けたとき、ほかに少年はいませんでしたか……？」

「いや、見なかったな……トオルは見たか？」

「ん〜、見なかったよ」

「すかさず返してくれる」

「むう〜、私は見捨てられたのだろうか……？すこし悲しい」

「どうしたの、ミルリアちゃん？」

「いえ、なんでもありません」

「チルさんが聞いてきたので、言う必要もなさそうなのでとりあえず
こう答えておく」

「まあ、彼には彼の道があるだろう」

「もう私は「軍」には関係ないのだから、気にしてもしょうがない
……気にしてもしょうがないのだ」

「……ム〜」

「どうしたんだい、なんか不機嫌になってるけど……」

「私の料理は口に合わなかった……？」

「え？いや、違います。料理はとても美味しいですよ
ちよつと考え事してて……」

「つい不機嫌になってしまったが」

「訳のわからない人から見れば軽く変態だ。気をつけよう」

「ん〜・・・好きな人とかあ？」
チルさんがニヤリとしながら茶化してくる

「違います、そんなんじゃない
軽く一蹴する私

すると「むう、からかいがないなあ〜・・・」てな感じにむく
れているチルさん
大人に見えないですよ〜、子供みたいですよチルさん

そして食事が終る

食事をしたおかげか、短時間ながらも少しずつ魔力が戻り始めている
空腹のせいだったのかな・・・？

「じゃあ、行こう、ミルリアお姉ちゃん」

「ちが〜・・・なんでもない。うん、行こう」
また妹、と言いそうになった・・・

「気をつけてきてね〜」

というチルさんの言葉を聞き
家を出て行く

そして、トオルに引つ張られていく
足もだいぶフラフラしなくなり、ついていける

「みんなあ〜！！」

トオルはどうやら友達の方に向かっていたようだ

「・・・（友達かあ〜・・・）」

正直羨ましい・・・いやいや子供に向かってこれはないと思う
6人ぐらいの子供がいた

「その人だれえ？」

「あゝ、綺麗なお姉さん」

「いや、可愛いでしょ」

「ねえ、あそぼっ!!」

「お姉さん、どこから来たの？」

「萌えゝ・・・ハアハア」

なにやら危ない発言をしている子が一人と
なんか大人びている発言をしているのが二人いた
軽くドン引きです

「僕が助けたのおゝ」

エッヘンてな感じで胸を張っているトオル

それに対して子供は信じられない、という反応から
すごいね、と褒めている子供もいる

「私はミルリア、宜しくね」

私にこりと笑いながらみんなに言ってみる事に
すると、六人がいつせいに答えてくれる

「・・・・・・・・よろしく」

なんとというハモリ

完璧だ、個々まで統率がとれてるなんて・・・

・・・てな感じの感想はともかく

その後は私とトオルを入れた、八人で遊ぶ事に
とても楽しかった

初代勇者が伝えたという

「かんけり」や「けいどろ」という遊びをしたりした
ちなみに私はつい本気を出してしまい、
「けいどろ」では、私を捕まえる事ができずに男の子達が音を上
げていた。

そして裏山に行くという事で、行く事になった
私達は山道でとなりが斜面になっている道を通っている
ちなみに斜面側に行けば、私達が下なので落ちる、とかではなく登
る、になるだろう

「それにしても、あのお姉ちゃんすごいね」

「あれは反則だっ!!」

「あはは、捕まえる事ができずに転んじゃったからって文句は言
わないの」

「なにいつ!!」

てな感じで子供達が話をしている

私はそれを見ているだけだ

「お姉ちゃん、危ないッ!!」

そんな声が聞こえ、子供達から目をそらし山の斜面のほうを見てみ
ると

斜面の上から大きな岩が転がってくる

「・・・この程度なら今の私の魔力でも」

私に右手に魔力を集めるとバチバチと電撃の音が鳴る
これで気づいたのだが、微弱な魔力なのだが右手のマークあたりを
通ると

何故か何倍にも膨れ上がっている

どうやら、闇の分解での副作用はマイナスではなくプラスになるら

しい
膨れ上がってるといっても微弱なもので強い魔族や人間を相手には
できないだろうが・・・

「ミルリア様ツ!!」

そんな声が聞こえて私と岩の間に、一つの影が割り込む

その影は少年、私の優秀な部下のロシアン

そのロシアンが片手に持った剣で岩を切り裂いた

「わぁ!」

「すごいツ!!」

「お姉さんだいじょうぶ?」

などなどと子供達の声が聞こえる

私の目の前にはロシアンがいる、どうやら見捨てたわけではなかつ
たらしい

少し嬉しい・・・

しかし、ロシアンは傷だらけだ・・・なぜ?

「君たちツ!!今すぐ村に逃げなさいツ!!」

ロシアンが子供達に大声で叫ぶ

その声の意味がわからないようにで反応ができていない子供達

次の瞬間にはナイフが数本飛んできて

それをロシアンが剣で全てはじく

そちらを見てみると三人の魔族がいた

それを見た子供達はそれぞれ悲鳴を上げて逃げていってしまっ

「・・・私を始末しに来たの?」

「そうです・・・魔王の手のものです」

ロシアンが答えてくれる

その間にも三人の魔族はジリジリと武器を構え近づいてくる
今の私にはあれを退ける力は残ってないと思う

あまりにも魔力がなさ過ぎる

そしてロシアンは私を守りながら・・・しかも、戦闘をさっきまで
していたようで

体には傷が多数ある

これでは負けるのは確定だろう

「ロシアン・・・ここは逃げましょう」

「それが一番ですね。私はミルリア様が生きていればいいだけです
ので

それに反論はありません」

そこで二人で逃げる準備をしようとするが

「ミルリアお姉ちゃんッ!!」

少しはなれたほうからトオルの声が聞こえた

「・・・なッ!?!」

ついそちらを見てしまう私とロシアン

その隙を見逃さず襲い掛かってくる刺客

ッ!!・・・やらかした・・・ッ!!

と、次の瞬間三人の魔族の刺客たちを
光がなぎ払った

「・・・徹夜の言うとおり、刺客がいたね・・・」

光の発信源であるう方向に
ある少女がいた、それは勇者と呼ばれる少女

「私、勇者をやってるミツキです ミルリアちゃんに話があるんだ」
その勇者は私にそんなことを言ってきた

「私は魔王を倒した後に、人間と魔族が争わないようにしたいんだ」
いきなりそんな発言から始まった会話
家の周りでは勇者を一目見られるように、と集まっている人もいる
この部屋には私と勇者だけ、
この部屋を出ればロシア人とトオルとその家族もいるだろう

「そう、なんですか・・・」

私の発言

正直、できるか、できないかで言うときかない確率のほうが高い。
魔族は魔王という絶大な力に依存していると言っていい
その魔王が戦争をし、全世界を支配しようとしていれば
それが正しいと思いついてしまふ魔族がほとんどだ

「私はね、そのときに魔王がいなくなった魔族をまとめる人を捜して
るんだ」

「それが私ということですか？」

「うん、そんなところ」

ニコリと笑いながら答える

「ですが、私よりも適任がいるのでは？」

「もともと上層部で偉い人だったらみんな知ってるだろうから偉い人にやつてもらったほうが効率的なんだよねえ」
手をくるくると回しながら答えてくる

「・・・No.1かNo.2がいるじゃないですか」

「その二人はこの考えに賛成すると思う・・・？」

「正直な所、反対すると思います

No.1は魔王主義の女です。それと同様No.2も女と同じくらいの

魔王主義の男ですから・・・」

「じゃあ、あなたで決定ね・・・」

「またもやニコリと笑う勇者

「でも、人を殺してきた私にそれは不適任かと・・・」

「でも、徹夜から聞いたんだけど、ゴブリンに襲われていた村を救った、って聞いたよ？」

ゴブリンについていた焼き傷はあなたの電撃をまとった剣によるものでしょう？」

「・・・それはなんとなく気が向いたからです」

「それだけのいいんだよ、一回だけでかまわないの

それをやった、というだけで他の魔族とは違うんだから
・・・だから、あなたにしたの」

「・・・私にできるかどうかわかりませんよ？
正直な所、そんな私にできるとは思えない
あまり自信もない」

「やらなきゃわからないよ、そんなことは。・・・だからやって
最後まで押し通されそうだ・・・
これじゃあ、何言っても意味無いと思う・・・」

「わかりました・・・」
「ここは受けるしかないだろう・・・」

「じゃあ、戦争の結果が良い方向になったら
そっちも動いてね、準備だけでもしといて」
そう言っつて勇者は席を立ち、ドアに向かって歩き出す

「ああ、そうだ。一つ質問があるんだった」
そう言っつて振り向いてくる勇者

「・・・なんですか？」
首を傾げる私

「徹夜があなたに抱きついたってホント・・・？」
...その勇者の眼は怖かった

75話 ねえ…なってるよね？まじめな話に…（後書き）

今回の話は

ミルリアのお話です。家族というものに接していますね
何故でしょうか

ミルリアは徹夜と同じで子供の純粋な笑顔に
とても癒されています
なんか似てる感じがです

徹夜くんは出ていませんでしたね

あれです、本当は前の話にでも

ミツキが違う所に行った、ということを書いておきたかったのですが
忘れてしまいました

そこはあまり考えずに読んでくれると嬉しいです
どんどん進んでいきます

ミツキは自分の考えにより行動していきます

ちゃんとした考えがあつて動くというのは、とてもいいことだと思います。
現実でも・・・ね・・・

まあ、とりあえずはここらで終わらせていただきます

あと、みなさんありがとうございます

お気に入り人数が1000人を超えました

本当にありがとうございます

簡潔が見えてきている今更ですが、一応続きますので
宜しくお願いします

好きなキャラ、オススメの小説を教えてくださいなどは終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

76話 あ的面々と戦ってみた(前書き)

前回のあらすじ

出演：ミルリア

ロシアン

その他助けてくれた家族とその友達

美月

除外：徹夜

「なんか扱いひどくないッ!？」

76話 あ的面々と戦ってみた

ちよつとした番外編 乗っ取りの主人公

皆さんコンニチワ（またはコンバンワ）

久しぶりにまともに出てきました景山 徹夜です

この頃、美月ばかり出てきてるとは思わないか？

おれはこれに反対の意を表したいと思う

それでも主人公ですよ？俺

いつも扱いがひどい気もしますけど主人公ですよ

それなのに・・・美月ばかりいい感じになってさ

ひどくないですか？これ

ん・・・？

・・・うあ、焼き芋（作者）がきやがった。すみせん

もうパソコンの乗っ取りの時間も終わりのようです

では、本編を宜しく願います

これからもクソ芋（作者）が書く小説を宜しく願いますm（

）m

「ふあゝ・・・」

眠気がまだ残りつつも城を出て歩いてる俺

ちなみに今日は「戦争」に参加する、と言ってから一日

なんだか今日は朝から美月が一人で遠くに行ったらしい
俺の予想だとミルリアの所にも行ったのだからうけどさ
ちなみに、右手の包帯は取れず、ただでさえ目立つ俺なものにもっと
シールドに目立っている

ちなみに今は、医者にリハビリだなんだかんだで
リンゴ3つを片手でジャグリング中

最初は両手でやっていたのだが、めんどくさくなり右手一本でやる
ようになった

リンゴは4つだったのだが、どうも空腹になり一個食べてしまった
まあ、食べ物なんだからしょうがないだろう

「むうゝ・・・つけられてる」

これは俺の呟き

なぜか朝からつけられている、王様が俺の監視でもつけたのかな？
と思

ほっておいてるのだが、多分それはないと思う

なんでだか知らないけど殺気が俺に向けられている

ふむ、個人の恨みというやつかな

ちなみにおれ自身をつけてる人は二人、その二人をつけてる人が二
人、という感じだ

俺をつけてる二人は俺に対しての何かの恨みがある、と考えられ
二人をつけてる二人は、友達か何かで面白がってつけているという
ところだろう

「めんどくさくなってきたなあ・・・まあ」

ということ人で人の少ない所に向かう事にした

そこでぶちのめしてのびてもらおうと思う

さらにジャグリングのスピードを早くしながら小走りに進む

そして、見えてきたのは空き地

結構なかさで十分暴れても大丈夫だと思う

「よし、出て来いその二人！あと後ろにいる二人も出てこいやア！！！」

空き地に着いたので大声で言ってみる
すると正直ない子らしく、やはり合計四人が出てきた

「げっ！！おまえらいたのかよ！！！」

騎士であろう青年が言葉を出した

「えっ！！ロイズもいたのですかッ！？」

召使のような格好をしている少女が叫んでいる

ロイズ・・・？あ！！勇者御一行じゃん！思い出した

「・・・私達は前のロイズとラルチを尾行してただけなのですが・・・まさか気づかれていたとは」

マイルさんが声を出した

「あはは・・・予想外だね」

鎌を抱えている少女が言っている

ふむ、あれがサイスという人が、そしてあの少女がラルチで騎士みたいなのがロイズと・・・

「それにしても・・・ラルチっていう名前、ラルドさんと似てるな・・・」

おれの呟き

ラ行の名前の人が多くて覚えづらい

「ラルドは私の姉です」

へ・・・姉なんですかあ・・・え・・・ッ！？姉なんですかッ！？

これはビックリした今度ラルドさんに会うことがあったら確かめてみよう

ふふふ、面白いネタを手に入れたぞ

ふふふふふふふふ（悪い笑み）

「で、俺を尾行していたその二人！！なんで俺の尾行をしたんだ？」

「美月さまとの中を問い詰めよう」と
同じ理由か・・・ッ！！

「お前ら仲良そうだな・・・」
俺の呟き

「どこがッ！！・・・（汗）」
おお、どこがッ！！」の部分でハモった後に

「・・・（汗）」の部分までハモるといふなんといふすげえ
これは珍しすぎるぞ

ちなみに今の俺は笑いを抑えてる感じなので、それを見て顔を真っ赤にしてる二人

それも同じ光景なので笑いがさらにこみ上げてくる

「言う必要ないでしょ・・・」

とりあえず笑いを3回にわけて発散させてから言葉を言ってみる
ちなみに、三回も笑われた二人は完全に怒り気味だ

「私にはお姉様の周りを把握する必要があります！！」

お姉様・・・て

かるくドン引き中の俺である。いや、俺も軽く変態な部分があるしね
あまり他の人のことを引く事なんて出来ないんだけどもさ

「ただど、これは・・・」

「お、おれは・・・」

ロイズと呼ばれた騎士の青年が口をもごもごさせている
おまえは乙女か・・・

「よつするに、どちらか美月が好きだ・・・ということか」

「べ、別にそんな事は言っていないだろう!」
顔を真っ赤にして叫ぶロイズ

「そうです!!」

胸を張って宣言してるラルチ

ふむ、男が女みたいで、女が男らしいのはとてもギャップがある光景だと思う

「・・・それで、何しに来たんだ?」

俺の問い

正直言つてこれだけの理由で尾行してこないで欲しい
迷惑すぎるぞ、お前ら

「お前に決闘を申し込む・・・!!」

いきなりの決闘宣言するロイズ

おお、男らしいぞ、さっきの反応を見て乙女かと思ってたぞ(笑)

「それに私も入らせていただきます

ちようどいいのであなたとロイズ、どちらか排除させていただきます
す」

おお、なんとも黒い発言

おもしろいな・・・あっはっは

「いや、決闘だからな！一対一でやるのが決闘だ！！」
さすがは騎士のロイズ、そこはこだわるね
でも……

「別にいいぞ、二人でかかってこいよ。本気でかかってきてかまわないから」

その俺の言葉に驚くロイズと俺の余裕の態度にピクピクと青筋を作っているラルチ

俺は……得に何の反応もしないで無表情なだけなのだが、それが余裕と思われてる気がする

ちなみに、その二人を尾行してきた二人は面白そうに座ってこちらを観戦してる、まったくひどいなあ
こっちは右腕が使えないつてのに

「じゃあ、やらせていただきます」
ラルチはクナイを取り出し、構えている

「……少し不本意だが、遠慮しないでやらせていただく」
ロイズも剣を抜き構えている
俺がニヤリと笑った瞬間に二人とも走ってきた
ロイズよりもラルチがさきに出てきている

「ふッ！！」

その声と共にクナイで突きを放ってくる
おれはそれをかわして後ろに下がる

その反応を見たラルチはもう片方の手に持っていたクナイを俺に投げつける

それをちょうどリングに刺さるようなタイミングでリングを投げて防ぐ

「いたっ」

リングがクナイにあたった勢いで俺の顔面にあたった
とりあえずそれは大きな口を開けてキャッチしとく
ふむふむ・・・

「わっ・・・！」

ラルチの足を払って転倒させる
すると、ロイズが剣を横に構えて俺に急接近している
そして、その剣が横に振るわれる

「とおう！」

俺は

間抜けな戦隊レンジャーが出すような声を出しながら大きくジャン
プして避ける

そして、俺はロイズの顔面、腹、男の勲章に順番ずつに
リング、リング、ラルチに投げられてリングに刺さってたクナイを
投げる

「うおわあッ！！」

それに対して顔面と腹にはリングは命中
さすがにクナイはあたらなかった

・・・チッ

「危ないだろッ！！割と本気で避けなきゃならなかったぞッ！」
そこで大声を上げているロイズ

「軽く投げたリングはともかく

割と本気で投げたナイフが俺は避けられたのがショックだけだな」
あたらなかったとかマジでショックです

「本気で投げるなッ！！というか俺は軽く投げられたリングに反応できなかったのがシヨックだ・・・ッ！！」

そんな言葉を言いながらまたも接近してくる

それを俺は右腕が使えないので、ジャンプして空中で体を横にして両足をうまく使いロイズの剣をへし折ってやった

「・・・なッ！！」

驚くロイズ

「いてっ」

当然のこと、自然に落下して背中を打ち付ける俺

すると、今日は晴れているのに俺の上に影ができている

上を見るとクナイを下に向けたラルチが落下してきている

もうすぐ俺にクナイは刺さるだろう

「ふんッ！！」

肩辺りを軸にして、足を上で回転させる

あれだ名前忘れたけど、ダンサーがよくやるやつ、あとはカンフーとかでやってるやつ

頭を軸にしようかと思っただけどこは外、そんなことしたら

頭の皮膚がえぐれて悲惨な事になっちゃうのでやめた。この歳でハゲになるのは嫌だ

「きゃっ！！」

俺の脚はラルチのバランスを崩すのには簡単に成功

俺の脚が横からラルチに激突したからだ

そして、その回転を利用して無理矢理立ち上がり

俺に転ばされて横になってるラルチの背中から軽く足で押さえつける

ギヤーギヤー騒いでいるが俺は襲われてる身なので関係ない

「だア!!!」

俺の真正面にはロイズが折れた剣を構えている

折れていても振り下ろして斬ろうという感じだろう

俺はそれを軽く受け止め、剣を思い切り振り回す

「うぉあッ!?!」

剣を手から離すのを遅れたロイズは地面に倒された形になる

背中から地面にぶつかっていた

軽く痛そうだ

「ん・・・そうだ、ラルドさん達に挨拶しておかないとダメかも・・・」

俺は用を思い出したので早歩きでその場を離れていくことにした

ロイズやラルチが悔しそうな目で見てくるが関係はないです

あとはとどめを刺せば終わりの段階なので俺の勝ちですから

「あゝあ、遊ばれてやんの」

サイスが面白げに笑っている

「強いですね、徹夜くんは私も手合わせしたかったな・・・」

マイルさんがそれに対して呟いていた

それよりも挨拶しとかないとッ!!

我が癒しのラウに会いに行こう!!

76話 あ的面々と戦ってみた(後書き)

今回では

徹夜くんが主でしたね

ラルドさんとラルチはどうやら姉妹のようです!!

俺でもビツクリ!?

いや、これは結構前から考えてた事ですよ

でも、あまりストーリーには関係ないですけどね

え?蛇足をつけたすなつて?

俺の小説なんて蛇足だらけですよ (満面の笑み)

まあ、それは置いていて

今回ではロイズとラルチVS徹夜でした

正直、この戦いで徹夜くのダメージはほぼ自滅です

徹夜くんが「いてっ」といったのは

ほとんどがどうでもいいところだけでした

無駄が多いですね

まあ、俺の主人公なんてそんなもんです

今回では

特に意味も無い日々でしたね

次の話では徹夜くんと仲間達の話です

どうなるんでしょうかね

俺にもわからぬッ!!だって・・・

ぶっつけ本番だからさッ!!・・・どうでもいいですね

すみませんでした、俺は蛇足の塊です

とりあえず、今日はここらでやめさせていただきます

好きなキャラ、オススメの小説を教えて欲しいなどは終わってません

気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

誤字を大量に報告してもらったのですが

かっこつけないとな、みたいなノリ的时候会に誤字が入っていたので
思わず笑ってしまいました

本当に、誤字はどうかして消さなければいけません

77話 会話してますよ、俺（前書き）

前回のあらすじ

徹夜 VS ロイズ and ラルチ

ウィ（ン）ナー（勝ち） ルーズ（負け）

マイルのコメント「私も戦いたかった・・・」

サイスのコメント「ぷふっ・・・あの二人、あそばれてんの」

77話 会話してますよ、俺

「とういわけで戦争に本格的に参加する事に決定しましたア」
俺の戦争参加宣言

俺の目の前には今まで旅をしてきた面々

その表情はいつもと違い笑顔ではなかった、完全なる真顔

あとは、悲しそうな寂しそうな顔だ

俺はそんな顔のラウを撫でまくってるわけだが・・・

「・・・アハハ」

無駄に明るく楽しげにいったものの特に意味は無かった

・・・正直これは反応に困る

「私達も話すことがある」

ラルドさんからしゃべり始める

な、なんですかいったい・・・？

も、もしや、俺に告白！？・・・なんていうのは絶対にないことだな、うん

若干変態である俺を好きな人など一人もない事は明白である

「・・・今回の戦争、各ギルドの戦闘員は全て参加が義務付けられているから

私達も戦線で戦うのは決定している」

ほら、やっぱり違った

・・・

「え？マジですか？」

まさかの告白！！

「これは本当だよ徹夜、これはリシの時にはなかったことだから前よりも大きな戦争になるね」
ハクがめっちゃ真顔ツ！？あのハクがツ！！

「それで徹夜くん、君はどうするつもりなんだ？」

「言われた内容では、俺は魔界と今いる人間が多いこの大陸の間の海の中

つまり、敵が攻めてくるのを阻止するのが俺の配置ですよ」

まあ、あくまで言われた所だけだな

ふふふ、海を渡る手段ももう用意してあるし・・・

美月に魔王を殺らせるわけにはいけないさ 魔王は俺にとって頭痛の元だからな

アハハハ・・・

「で、本当はどうするつもりなんだ？」

さらにラルドさんが問いかけてくる

ええ・・・お見通しツ！？

「俺は美月とは違うルートで魔王を殺しに行きますよ

全てを美月に任せておくことは心配なんでね、いろいろと・・・」

「よつするに、今までの勇者みたいに死んで欲しくはない、ということか」

「・・・」

何故だツ！！何故この人は俺の心がお見通しなんだツ！！

幼馴染の美月にだってばれないように特訓したんだぞツ！！

ハッ！！美月専用の特訓しただけで他の人専用には特訓してねえツ！！！！

なんとという不覚・・・

「私達もついていくさ・・・ルミとラウは無理だが」

「ドラゲイルに戻る必要がある、ということか」

そこでよりいっそう悲しそうな顔のルミとラウ

ラウは戦えるような体ではないからな、しょうがないことだろう

「ラウはルミと一緒にドラゲイルのほうに連れて行かれるようになって
っている

それが一番だからね、今日のお昼にはここを立つよ」

「・・・じゃあな、二人とも。元気にしてるよ」

あつはつは、明るく明るく、アハハハハ・・・

・・・くっ、我が癒しのラウがいなくなってしまつとは・・・

「死なないようにねッ!!」

ルミがそんなことを言ってくる
死ぬつもりなど毛頭ありません

「帰ってくるよね・・・？」

うあ、こんなときにだけどラウかわえええ・・・
頭を撫でながら口を開く俺

「帰ってくるに決まってる、俺だからな」

意味わかりません、俺の言葉

そしてこれは死亡フラグがめちゃくちゃ凄いい勢いで立っていません
か？

完全にたってますよね？死亡フラグ

・・・

この戦争が終るまでの俺の目標
『打倒、死亡フラグ!!』に決定です

「ちなみに、どうやって魔界に行くつもりなんだ？」

「ふっふっふっふっふ、この俺をなめてはいけません
ふっふっふ、と笑いながら答える俺

「・・・舐めたら汚い」
ライルの直な反応

「いや、言葉のあやだから。そんな直で受け止められた後に直でその反応は傷つくよ、俺」
正直涙目になってきた
と、とりあえず話を進めよう

「ドラゲイルの時に移動手段は調達済みだ、もう修理し終えてあるからな
戦争のときまで楽しみに待ってればいいさ」

「徹夜はいつでも余裕だね」
そんなことを言いながら俺に抱きついてこようとする

「ふんぬッ!!」
それを投げ飛ばす俺
これは前にもやったような気がする

「まあ、わかったよ。戦争で本当に俺についてくるのか？
正直辛いかもよ？」

「ああ、私はついていくつもりだ」
ラルドさんの余裕の返答

「魔界という危険な場所で、徹夜と急接近作戦・・・フッフ」
ハクは俺以上に余裕だと思っぞ

「・・・乗った船からは下りられない」
ライルの返答

「・・・ふむ、じゃあ、俺からもよろしく頼む」
そんな感じで終わった会話

それからラウとかルミとかと遊んでいた
俺って余裕、余裕

ちなみに、それから今日ハクを投げた回数は50回を越す
俺は投げるのがうまくなってきて、ハクは投げられた後に着地する
のがうまくなっていた
なにかと疲れしました

77話 会話してますよ、俺（後書き）

今回では、徹夜くんたちの会話で終了させていただきました
ほとんどあとがきに書くことないです

ラウとルミはここで

一回離れます

ラウもルミもそれほど強いというわけではないので
魔界に行くのは荷が重い

というかラウはほとんど戦えない、ということなので
離れさせました

すみません、みなさん

ラウやルミが傷つかなかったための処置です

そういえば、友達にPCゲームのソフトを借りました

首に爆弾の首輪をはめられた人たちが殺しあう、という

ガクガク（（（（（（（（ブルブル な内容のものです

よおし、クリア目指して頑張るぞお〜

正直怖いですけどね

この小説の連日投稿はできるだけ落とさないように
やっています

好きなキャラ、オススメの小説を教えて欲しいなどは終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

また予約投稿にするの忘れましだ・・・

最悪です、明日忙しいのに・・・
頑張って二話分書きます

78話・・・戦争までの話数多くね？(前書き)

前回のあらすじ

俺とラルドさん達との会話

78話・・・戦争までの話数多くね？

あのラルドさん達との会話から二日たった

これで、三日が過ぎた、あと四日である

今は城の中を美月と一緒に歩いている

あと、俺の右腕は予想以上に回復したようで

もう包帯はとれた、素の右腕だ

んゝ、なんかミイラみたいでいやだったんだよねゝ、スッキリな気分です

ああゝ、それにしても暇ですねゝ

「で、どこいくの？」

俺の美月への問い

「ん、地下牢」

美月の返答

何でそんな所に行くんだらう

「あ、一応徹夜にも渡しとく」

美月に渡されたのは地図

右端に魔界と書いてある、ふむふむ

お前までも俺の考えはお見通しかッ！！

赤いラインあたりが美月たちの通るところらしい

ふむ、ちようど最初の俺の配置とは離れているな

ちようどいいね

「それで、何で地下牢に行くんだ？」

俺は地図をポケットにしまいこむ

話の間にも二人は歩いていく

「来たか・・・」

少女が顔を上げてこちらを見てくる
むむむ？一体なんのようだ？

「ジールク・ライを・・・」

少女が口を開く

「・・・？」

美月の疑問の顔

「あの放火魔族か・・・」

あいつとは戦ったときがあるしな

正直、全開の体力で戦いたかったな

あまりにも体が疲れてて戦いを楽しめなかった

「あの人を・・・」

なにやらいいにくそうな少女

「「????」」

「あの人を助けて欲しいッ!!」

そんな大声

・・・

・・・ふむ

そこで俺と美月は同時に口を開いた

「「できてるうううう」」

水色の空を飛ぶネコも顔負けの巻き舌だ

「なッ!!!?そんなんじゃなあああいッ!!」

少女の叫びが城に響いた
とても顔が真っ赤だった

これは絶対に恋人かな・・・（ニヤニヤ

ここはある個室

「で、魔力を蓄えておけばどのくらいもつんだ？」
俺は目の前の黒い少女に問いかける

「んっ・・・満タンに蓄えておけば三日はもつと思うぞ、ご主人」
考えるそぶりを見せた後そう答える黒い少女・・・ようするにクロだ
この部屋にはクロと俺しか今はいない

「それにしてもご主人、なにを考えておる、言うておくが私に秘密
を作れないぞ」

そんな事を問いかけてくるクロ
あっはっは・・・

ちなみに、クロで思い出すであろう狼のクオだが、いい忘れていたが
ラウについていってもらった、さすがにクオでも危ない目にあうだ
ろうからな

「なんだ、俺のこと心配してるのか？」

ニヤニヤしながらクロに問う

「べ、別にそんなのではないぞ、ご主人ッ！！」
なんだ・・・？ツンデレか？

いやデレてはないな

「・・・正直な所、私は心配でしょうがない・・・ご主人の真意が見えないのだ」

おお、デレたのか？これ、よくわからん
俺はそんなクロの頭を乱暴に撫でる

「別にそんな裏があるわけじゃないぞ、だから心配するな」

「心の」「世界は」「今、霧に包まれている」「
いきなり現れる双子の精霊

「だから、私達は心配しておるのだ。ご主人」

「霧は僕達」「私達の目を」「欺いている」「

「正直、ご主人がそこまでするのかわからない。何を考えておるのだ、正直に申せ」

「別に死に行くわけじゃないって
それに、子供にそんな心配はされたくないな」
俺は笑いながらそんなことを言う

「私達は子供ではないぞッ！ご主人」
クロが代表して異論を唱えてくる

「金を取られたときに、なきそうになっていたのは誰かな・・・？」

「・・・痛いところを着いてくるな、ご主人」
ふ、俺は日々進歩しているのですよッ！！

ない脳ミソを使ってフル活動ですッ！！

別に自分で言っただけで悲しくないです。別に泣いてないです

「まあ、とりあえず心配すんな。お前らは俺の協力してくれればいい」

「・・・頑張ってくれ、ご主人」

「僕は」「私は」「あなたに死んでほしくないから・・・」

最後にそれを言っただけで消えていく三人

ふむふむ、・・・子供にまで心配されるとは

なんとも言えないなあ・・・アハハ・・・はア

俺の溜息が静寂の場に響いた

78話・・・戦争までの話数多くね？（後書き）

この話は

77話を投稿した後に頑張って書きました

明日はとても忙しいので

疲れてる手を頑張って動かし書きました

誤字もいつも以上に多いと思います

今回は特に書くことはありません

書くところも書きましたので

戦争がすぐに迫ってきます

無駄にながしい気もしてました

もう大丈夫です

ギャグとシリアスとギャグの混ぜた戦争になると思います

よろしくです

好きなキャラ、オススメの小説を教えてくださいなどは終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

79話 戦争の始まり(前書き)

前回のあらすじ

・・・

・・・

・・・

正直さ、この頃「あらすじ」「が」「あらすじ」「じゃ、無いと思うんだよね

君もそう思わない？可笑しいよね

なんでこうなったのだろうか？

とりあえず、よくわからないよ

と言っておきながらも今回も「あらすじ」「じゃなくなってしまうっている

ちゃんとした前回のあらすじ

ルクライルという少女には

ある意味深の言葉をかけられ

クロや双子の精霊フレとイムにはなにやら心配されている

これはどういうことだろうか・・・？

ダメ人間がもっとダメ人間になってしまった

79話 戦争の始まり

そして、三日たった
それはすぐに始まった

『連合軍の代表として、サラスム王国、国王である私が指揮をすることは知っているだろう

・・・だから・・・』

・・・と、こんな感じで通信用の魔法具から声が響いてきている
正直めんどくさいからいいや

俺はラルドさん達と一緒にポツンと立っている
基本的に此処は防御地域

戦闘地域は海の上、魔族の戦艦に比べるとシヨボイが人間もそれなりに飛べる魔法具を持っている、あとは竜たちの実力だ

「ふふふ リシのときもこんな感じだったな」

さすがハク、一回経験した人は違うね

「・・・無駄に話が長い」

ライルの感想、俺もそう思う

あれだ、運動会のときの校長先生の話の二倍と考えてくれ

まあ、軍の士気をあげようとしているのだろう

俺みたいな奴ではなく軍のキツチリした奴ならこれでやる気が出る
ことは間違いなしだと思う

「ん、だいたい戦争はこんなもんじゃないかな？」

ラルドさんの発言

そうかもしれないかもしれないですけど、俺にはわかりません

『無駄に、話が長いわ、私に代わりなさい』
そこで、突然女性の声が出てくる
この声は・・・黙殺王妃か・・・

『守りたいもののために戦いなさい、以上!』
うん、こういうのは俺的には好きだな
楽でいいじゃん

ちなみに、この通信のBGMは王様の泣いてる様子がかかる音だ
それなりに土気が上がっているな
はじめるんだっいたら早くして欲しい

一回魔界側に移動

「・・・戦争か」

ジールクという男が呟いた

「ククク、この戦争で勝利すれば
これで下等な生物達の存在を気にせず暮らすことができる・・・」
となりに魔族の男がいた

「お前の考えはいつも下種だな
『魔界六柱』No.2『腐土』のクロイズル・リクトン・・・」
ジールクがその魔族の男・・・クロイズルに向かって言い放つ

「私を下種とは、よく言えますね。あなたごときが・・・腐って死
んでもらいますよ?」

「お前らうるさいぞ、上層部のもの同士で争うな」
そこにある女性が割り込む

No.1の『漆黑』のリーシ・トルウマアだ

「あなたもそう思いませんか？No.1」
クロイズルの同意を求めるような問い

「私は人間とか魔族などはどうでもいい、魔王様が支配する世界に
したいだけだ」
リーシの返答

「お前もおかしな奴だ・・・」
ジールクの呆れたような言葉

そして、他のものが口を開ける前に違う話題に変える

「で、戦場はどうなっている？」

「・・・戦艦は全隻出撃、魔王様のペットも大体は檻から出して放
している

あとは、お前と、No.4がどこまでやるか、だ」

「・・・まったく、何故俺が足止めなどしなければいけないのだ」
そこに突然入ってきた男性が一人いる
その男の周りでは風が異様にうねっている

「・・・お前も来たのか、No.4『風刃』のツールウ・マイラス」
「No.5も配置を無視してきてるだろうが・・・なんだ、恋人が
心配か？」

フフ、てな感じの笑いをしながらZ・ルクをからかっているツール

ウという男性

「そ、そんな関係ではないッ!!」

それにもあまりにも動揺しているジールク

「じゃあ、夫婦か？」

「お前をここで燃やすッ!!」

ジールクは割と本気で炎の拳を放ち、トールウの放つ風とぶつかり
合い

お互いに打ち消しあっている

「だから、やめなさいと言っている」

そこにリーシの冷たい言葉があびせられ

二人とも固まる

それを無表情に見ているクロイズル

No.1と2は基本的に仲間でも馴れ合いはしない

ジールクにとっては最もつまらない奴らだ

「はアゝゝゝ俺はこの戦争の結果にはあまり興味がないからな」

ジールクの言葉

「正直俺もだ、戦いは楽しいが団体で戦う戦争には興味はない」

それに対してどこかずれている返答のトールウ

「いや、そういう意味じゃなくなてな」

「・・・六柱に入ってるのなら、そこまでやめておきなさい」

ジールクがしゃべり続けようとしているのをリーシが遮る

魔王主義の彼女の前ではあまり言っていないことではなかったかもし

れない

魔王主義というのは、彼女が魔王の強さにほれている。ということだ
まあ、あくまで強さにであって、異性とかそういうわけじゃないら
しい

もし、魔王が負けた場合この女がどうなるかはわからない

「ククク、もう少し続けていれば私が腐り殺してあげましたのに・
」

クロイズルの不穏な発言

それに対して鋭く睨むジールク

こいつも基本的に魔王主義

強さに惚れた、というリーシとは違い完全なる魔王主義

魔王のためなら死んでもかまわない、という。魔王を神のように崇
めている奴だ

「・・・お前らと話すのは疲れたし、俺の配置に戻るわ」

ジールクは手をぱらぱらと振った後、きびすを返して歩き出す

「ん、じゃあ俺も戻るか」

トールウも歩き出す

「・・・疲れますね」

リーシの呟き

「私達が上位の存在であることが、この戦争で証明されるのです」
クロイズルの不穏な笑い

「で、お前の妻はどこにいるんだよ？」

トールウの問い

「妻じゃねえ…えっと、サラスムの牢屋だな、あそこが一番安全と
いっていいだろう」

ジールクの返答

「あ？何でだよ、俺らが勝ったら安全とはいえないだろ」

「・・・今回、俺は絶対には勝てるとは思わないがな」

「魔王に勝てる奴なんかいるか？」

「・・・さあな」

そんな感じでだべりながら歩いてる二人がいた

連合軍 ドラゲイル軍

大空に数百、数千という竜が飛んでいる

赤、白、黒、黄色、緑…などさまざまの色の竜が飛んでいる

そのなかでも一番前に飛んでいる竜は異様だった

灰色の体、他の竜に比べると数倍であろう巨体

体から自然に発せられているプレッシャーも他の竜とは段違いだ

悪竜と呼ばれていた竜だ

そして、その額に一人の幼い少女が前から凄い風が当たってるにもか
かわらず立っている姿も

シユールといえた

「ここに降りてください、イルリヤ」

『わかったでおじゃる、姉上』

その言葉の後に急激に降りる

それに続いて竜たちもおり始める

そして、全竜が地面に足をつける

『では、姉上、仕事があるので行くのでおじゃる』

「安全に送り届けるように」

『わかってるでおじゃる』

そういつて悪竜が飛び立つ

その後2匹ほど竜がついていく、一応の護衛であろう

「これから戦争がはじまるッ!!」

絶対に死ぬないようにしろオツ!!」

口調が変わったイルリルの大声がその場に響いた

「というかさ、なんで戦争って決まった時間から始めるの？」
俺の問い

なんで時間を待たなければいけないのかわからない

「戦争でリシの時に不意打ちが多すぎたせいで、どっちの軍も大打撃をくらってね

普通戦争はそんなもんなんだけど、人間側はそれは嫌だし魔王はゲーム感覚だったから、嫌な思いをしたくないから、人間と魔王の間で

戦争の取り決めをしたんだって」

なんかフレンドリーだな、お前ら

と、そんな事を思っているというラルドさんが口を開く

「必要なときは敵でも話し合うことが大切だからな
だったら戦争なんかすんなよ

というか、ラルドさんは俺の心を読むな

「・・・ん、戦争が始まった」

その言葉と同時に光の閃光があちら側からこちら側に飛んできてある地域を焼いた。これは合図であり殺傷能力はない

光が見えたほうを見てみると空を埋め尽くすように魔族の戦艦が飛んでいる

そして、こちら側では竜が飛び立ち戦闘を開始する

「これは・・・すごいな」

なんとというファンタジーワールド

ある意味アニメを見ている気分だ、まあ、俺もそれに巻き込まれてなければ

楽しめたらどう

さて、行きますかな

俺の足元から闇が広がっていく

「ドラゲイルでは俺が潰した魔族の戦艦四隻を回収していたんですよ
それを使えるパーツで修理していけば・・・」

闇の中から現れたのは魔族の戦艦の二倍の大きさの戦艦

その戦艦に使われている金属は底が見えないように真っ黒

おれの闇での分解そして構築の結果の副産物だ
硬度は10倍以上だろう

「ほほお、これが海を渡る術か」
ラルドさんの言葉

「・・・徹夜にしては、よく考えた」
お前俺のこと馬鹿にしてないか？

「大きいなあ」
ハクの超微妙なリアクション
と、とりあえず乗るぞオ

「ということで、しゅっぱーっ!!」
俺のその言葉と共にその戦艦は大空を飛ぶ

「戦争が始まりましたよ、美月様」

「わかってるよ、マイル」

「なんで美月様は目を閉じて静かに立っただままでいるの？」
サイスの疑問

「さあ？」

ロイズの返答

「なにかを待ってるようにも見えますが・・・」
ラルチの言葉

「・・・」

相変わらずの無言のロミル

そこで美月が目を開けて大空を見る

「ふむ、来たね」

その言葉と共に空から言葉が響いた

『迎えに来たぞ、勇者』

その言葉は竜から発せられたものだった

他の竜とは違い、特別な存在のもの

「ありがとう、悪竜のイルリヤくん」

『では、さっそくだが、背中に乗れ

魔界まではずぐに着く』

その言葉通り

今から竜の背中に乗り大空を飛ぶ

79話 戦争の始まり（後書き）

今回は正直、この話を書いている5月7日は疲れています

深夜アニメを見ていて夜三時まで起きていました

そして、7日はまさかまさかの農作業の手伝い

6時に起こされました。睡眠時間たったの3時間

そして、農作業は午後の3時まで続いてしまい

疲れてます、疲れてますよ俺

まあ、深夜アニメなんて見なきゃいいじゃん、と思うかもしれませんが
んが

普通のときのアニメを見てない分、深夜のほうを大事にしている俺
です

ちなみに深夜アニメでのお気に入り

「電波少女と〜」 「C」 「ゴシック」 「Aチャンネル」 など
です

今まで見た深夜アニメでは「伝説の勇者の伝説」とか

「とある魔術の〜」とかが好きです

・・・ああ、あのがきの内容が最初からそれっぽいなしだ・・・

今回の小説では

戦争が始まる直前です

これからは徹夜くん、美月ちゃんが魔界に乗り込んだお話

そして、前線では今まで出てきた戦闘キャラが再び出てくるのも少々
何回かしゃべっただけのキャラが出てくるので

忘れられているであろうキャラも多数出てくるでしょう

頑張っと思って出してください

では、そろそろ終わりにさせていただきます

睡眠時間はしっかり取り、朝食はちゃんと食べましょう

では、次の話をお楽しみに

好きなキャラ、オススメの小説を教えてくださいなどは終わってません
気軽にメッセージまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

80話 竜の長の弟は思いやりがあるように無い(前書き)

あらすじ

戦争が始まりました

あらすじはもうほんと適当なものになると思います
まあ、よくここまで律儀によくやった、と思います

80話 竜の長の弟は思いやりがあるようで無い

大きく揺れる戦艦の内部

だけでも、戦艦自体の状態を表示する機器にはまったく持って異常は表示されない

今の戦艦はまわりの魔族の戦艦に攻撃されている状態なのだとくにダメージもなく進んでいる

減速などするはずもなく、さらに加速している

「徹夜くん、大丈夫なのかこれは？」

ラルドさんが心配そうに尋ねてくる

「大丈夫だ、問題ない」

なんか聞いた時あるようなコメントで返す俺

その姿は自信にあふれている

その自信の元はこの戦艦に使われている素材

俺の闇の副作用のおかげでこの程度では傷がつくとしてもほんの少しそれこそ、髪の毛一本分ほど削られる程度だ

その間にも戦艦は進んでいく

そして、普通の攻撃ではダメージを与えられない、と気づいたのかチャージ式のエネルギー砲がチャージしてる所が目に入る

ふっふっふ、と俺の微笑が漏れる

そのエネルギー砲が発射され戦艦に衝撃が走る

だが、それでも止まらない

止まるわけがないのだ、ガッハッハッハッハッハ...

おっと、すまん、つい調子に乗ってしまった

まあ、心の中だけだからいいだろう

「……いや、まだ笑ってるから」
ライルがなにやら言ってきた
ふむ、どうやら心の中だけではなく
行動でも表してしまっただけではない
そして、俺の心を読むな

「なんか暇だね」
そんなハクの発言
ちなみに操縦は俺が一人で担当している
闇を使えば簡単だ
お前は暇でも俺は苦労してるんだぞ

「む、みえてきたのではないか？」
目の前には大陸が見えていた

「よし、じゃあ急ごう」
もっとスピードを出し
敵の戦艦から距離を離す
そして、陸の近くに着いた所でゆっくりになっていき
無事に着陸する

「おし」
そういつて着陸完了して、外に出る
そこはリシの記憶で見たような景色とほぼ変わらない
まっくらな所

「じゃあ、ここからが本番だな」
そんな俺の眩き

風が自分の頬を打つ

今は大きな竜の背中の上

詳細に言つと悪竜の背中の上だ

「美月様、あぶないからやめてください」
しがみつきながら叫ぶマイル

「おつこちるかもしれませんよッ!!」
背中にしがみつきながらロイズも同じく叫んでいる

「おお、こんな高い空まで飛んだときなかつたなあ」
サイスは背中にしがみつきながら下を眺めている

「ああ、お姉様・・・なんともたくましいです・・・」
しがみつきながら惚れ惚れとした目で見ってくるラルチ

「・・・」
相変わらず無口なロミル

「わああ、気持ちいい・・・」
そして背中でもつかまらずに立っている私
とても気持ちいいです

風が思いつきりビュービュー来ます
「気持ちいい」ってよりも「ぐはアッ!!」ってえッ!!」ってな感
じの風だけど

魔法で風の量を減らしてるので心配無用です

『落ちるなよ、勇者』

となりを飛ぶ悪竜と比べると小さいがたくましい感じの竜が話しかけてくる

黄色の感じの竜だから属性は雷か土、正直どちらかわからない
紛らわしいと思う

「心配ご無用」

私はニコリと笑いながら返答する

『なにをしてるのでおじやるかッ!? 見えないでおじやる!』
それを気にしている悪竜

『イルリヤ様はただ前方に向かって飛んでいてください。
なにかしたら勇者様が落ちますよ』

それを注意するもう一方の青い竜
属性は水だと思う

「それにしても、イルリヤとイルルって魔王と同じほどの強さなのに
なんで直で戦わないの?」

『それは魔界に我ら専用の結界が張ってあるからおじやる』
それに返答する悪竜

「結界?」

『全体から見れば、ほんのわずかと言って良い量の力が封じられる
のだが
そのわずかな量を減らされただけでも魔王に勝つことはできないの
でおじやる』

魔界では魔王の力も増量でおじやるからして』

「ふむ、そうなんだ」

それに微妙だがリアクションをとる私
イリルやイルリヤの存在を聞いて疑問に思っていたことが良くわかつた

『見えたぞい』

悪竜のそんな言葉により下を見てみると陸地があった
空もどんよりしていて、地も枯れているような世界
そして、悪竜のほかの竜二頭も急激に下降して、次の瞬間には地面に足をつける

『ふむ、これで我が仕事は遂げた、健闘を祈るでおじゃる、勇者』
そういうと空を飛び始める悪竜

「じゃあね、無事に帰ってね」
そういつて手を振るとそれに答えるように悪竜は一吠えしたと思うと元の方角を向いて飛び始めた

「よし、じゃあ行くつか」
そう言って歩き出す

「ふう、仕事を終えたのお」

「まだ、戦争はあるんですからね」

『忘れないでください』

「わかっておるわ」

今は悪竜・・・イルリヤは人の姿に戻っている。竜の姿からは想像もつかないが

人の姿になると幼い男の子なので強大な力を持っている存在には見え
えない

そして、もう一人は青い竜だった男
シャキツとしたイメージの男である

その二人は黄色の竜のせなかに立っている

イルリヤはフン・・・と鼻を鳴らしているかのような仁王立ち

男はしゃがんで手で鱗に触ってる程度だ

これが空に飛んでいるものと飛んでいないものの差だろう

『うおおッ!?!』

ガクン・・・と黄色い竜が揺れた

下を見てみれば足になにやら触手のようなへんなものが巻きついて
いる

それに引つ張られているようだ

触手は海からのびている。相当の長さだ

「なんでおじやるか?」

そういつてイルリヤが触手の元である海のほうに手をかざすと
轟音と共に海が割れた

さすがは上位生命体である存在

苦もなくそれをやる

そして、割れた海から見えたのは

3匹の魔物

一匹は普通の竜にも勝る大きさのサメ・・・たしかキンググシャーク
と言った感じの名前だった

そしてもう一匹は巨大なタコ
もう一匹は巨大なイカ、このイカの足が竜の足をひっぱっている
触手というかイカの足だ

足を引つ張られている竜が動き、イカの足を食いちぎる

『ふむ、うまい・・・』

なんともずれた発言をする竜
だが・・・

「それはまことかッ!？」

「マジでかッ!？」

思わずそれを気にしてしまう二人

『強者の証か・・・生き残りを繰り広げていた生物の性が・・・
相当戦いを繰り広げてきたであろうひきしまっている身は美味とい
える』

めちやくちゃ食べたくなるようなコメントをする黄色の竜

「ふむ・・・たしか初代勇者から話を聞いた時があっただが

タコは「たこ焼き」という料理にすると美味しいらしいでおじゃる」

あごに手をつきながらそんなことを言うイルリヤ

二代目勇者のときは悪のほうに回っていたが

初代勇者のときは基本的に仲間側だった

そのときに聞いた話だ

「イカはどうすれば?」

青い竜であった男が質問をする

「うむ、イカふらい」といつて揚げるとこれまた美味らしいの
う」

それに答えるイルリヤ

『では、サメは？』

「・・・ふかひれすーぷ」というやつがうまいらしい、勇者の来
る世界では

たしか「ふかひれ」が高級食材だとか言っておったでおじゃる」

「『おオ〜!!』』」

それを聞いて大声を上げる一人と一頭

「ふむ、それでは戦争が終ったらこの食材を持ち帰って
パーティーでもやるうではないかッ!!」

完全に食べる気満々のイルリヤとあとの二人は
嬉々とした様子で三匹の魔物へ襲い掛かる

ちなみに、この魔物たちは魔王のペットであり

基本的にSか、SSランクの強さを持つ魔物たちだったが
イルリヤという絶対的存在がいる時点で勝ち目はなかった

「ん？なにやら愚弟にしかりつけなければいけない気がしてきました
た」

イルルの一人での呟き

その発言は、イルリヤに大量の冷や汗を流させるものだろう
竜と戦艦、人間と魔族、それらが戦う戦場で立っている

絶対的強さを誇るイリルにとって、これらは無視しても良いもの
竜の犠牲を少なくするために、竜が混乱するのを少なくするために
彼女は立っていた

そんな彼女を巨大な爆発が飲み込んだ

「ククク、あれが竜の王女だとさ、幼い子供の姿だ簡単に殺せそ
だぜエ」

なにやら白い体をした赤い翼が生えた男がしゃべった

なぜか上半身は裸だ、翼はまるでコウモリのようなものだ

「・・・お前は侮ってみているようですが、あの存在は相当強い
すね

プレッシャーだけで消し飛びそうでした、甘く見てはいけないよ
うですね」

白い翼が生えた男、美男子といえる男だが瞳には欲の色が浮かんで
いる男がそう言った。

翼はまるで鳥のようでやわらかい感触があるだろうものだ

そして、爆発が一点で吸い込まれ始める

煙まで吸い込んでいき、煙が晴れると無傷のイリルがいた

「墮天使と悪魔ですか・・・魔王はそんなものまでペットにして
いるとは思いませんでしたね。魔王は本当に悪趣味ですね」
淡々としゃべるイリル

その様子に二人の男は驚きつつも、攻撃態勢に入る

「ですが、悪魔と墮天使と言っても私の強さは下級神にまでおよ
びます

ケンカを売る相手を間違えましたね、私が相手出なければ少しは戦

いを楽しめたでしょう」

そして、イリルは竜の姿に変わる

その姿は黄金に輝いていて、少しだがイルリヤにも大きさは勝っている

そしてその体からは凄い量のプレッシャーが流れ出ている

『・・・死んでいただきましょうか』

次の瞬間戦場にどんなものでも怯ませるであろう大迫力の竜の雄叫びが響いた

80話 竜の長の弟は思いやりがあるようで無い（後書き）

今回では徹夜と美月のほかに
竜の長の姉弟の話を書きました
あと一話か二話は他の戦ってる様子も入れる予定です
そのあとは徹夜と美月の舞台です
少しの間待っててください

今回竜の兄弟が主に出ていました
弟には、タコとイカとサメ
wikiで調べてみたのですが
クラークンとはタコもイカなど他にもいろいろ入るらしいです
サメはよくわかりませんがね

姉は堕天使と悪魔が相手です
wikiで調べてみたのですが
これらに関しては特にありませんでしたので
名前は出さずに行こうと思います
まあ、戦いの様子は書きませんがね
イリルの勝つことは決定事項です

タイトルの理由です
あれはみんなで食べようというものではなく
自分が食べたいからのものです、だけでも自分では料理ができない、
ということではパーティーです
だから思いやりがあるようで無いということですよ

あと、小説などの予定です
基本的に魔王を倒せばこの小説は完結となります

ですが、まだ書きたいな、とおもってるネタや

この後はどうなったんだろう？というところもありますので
番外編がたされる事になります

それまでどうか読み続けてくださるよう

お願いします

好きなキャラ、オススメの小説を教えてくださいなどは終わってません
気軽にメッセまたは感想でお送りください

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

81話 ヤフウ〜・・・() () (前書き)

あらすじ

徹夜も美月も到着

イルリヤはよだれをたらし

イルリルは竜の姿へと変わる

つかれた・・・

81話 ヤフウ〜・・・(〜)

徹夜サイド

真つ黒な土地、真つ黒な空

どんよりとした独特な空気

生き物が生きているとは思えないような場所

元の世界でも今の世界でも歩いたときのないような世界

それこそ第三の世界に来たような感覚だ

木は枯れはて、川は死んでいた

こんな所で魔族は生活しているのか？

もしかしたら、ある特定の地域ではどうかこの環境を改善して

その場所に住んでいるのかもしれない

そう思うほどの空間が広がっている

そして・・・

「ん〜、どつちに進めばいいと思う?」

俺の目の前には二つの道。簡単に言つとわかれ道

まあ、道を見ればまっすぐ進めるのだが

ここは道に沿っていくべきかな、と思う

多分それが最善だと俺は思いたい、思いたいけど

俺の考えだからあまり信用はできない

だって俺だもの

「私は右だと思っね」

ラルドさんの返事

なにを基準に決めているのだろうか？

少し、そこを聞きたいが、ほとんどが勘だろう

決められる基準がないしね、6割程度は勘だろうな

「ん、左かな？」

ハクの言葉

どうせお前は10割は勘だろう

「・・・まっすぐ」

ライルの言葉

さすがだね、まさかまさかの道を見捨てる答えを導き出した

これは見捨てよう

「じゃあ、・・・どうするんだ？」

これは難問だ

美月サイド

「ん、これは難問だね」

私がついつい呟いてしまう

そして、目の前の難問の事を口に出す

「だって、こんな可愛い魔物、殺せないじゃんッ!!」

その言葉にいつも無口のロミルさえ他の人と同様に溜息をつく
ちなみに、ラルチはなにやら

「美月様のその発言自体がかわいいいいい・・・」てな感じで身悶え
ている

そして、詳細を説明するが、目の前には道を通せんぼしてる魔物
それは目がくりくりしていて、サッカーボールと同じくらい大きさ

の魔物

丸い体にふわふわの毛、そして短くてちっちゃい手をかんばって広げて

キュウ、キュウ〜という鳴き声で、威嚇していたりする

女の子にとつたら引き寄せられるであろう事間違いないの姿のものがある

「いや、ここはちゃんと気絶でも何でもさせて通りましょうよ」

ロイズのその言葉

とてもひどいことを言うねッ！！ロイズは

「美月様の気持ちかわからないわけでもないですが、無理にでもここは通るべきですよ

私達にも目的があるのですから」

マイルのその言葉

「お姉様の発言ふぁ〜・・・くぁわいいい〜」

身悶えているラルチ

なんでこの子は身悶えているのだろうか？

「魔界でも美月は美月だね・・・」

呆れているサイス

「・・・」

無口なロミル

その手は剣の柄にそえられていて、いつでも斬る準備できている、ということだろう

それを私がわたたと手を振って止めている状態だ

「だって可愛いじゃんッ！！可愛いは心を癒す元なんだよ！！」

全ての生き物にとつての宝石を言っているいいものだよッ!!」
無駄に力を込めて説得する私
魔界にきてまでこんなことをするとは思わなかった
私って結構、図太いよね

「じゃあ、連れてけば？」

サイスのその発言

他の人たちはその言葉に目を見開き驚き、「やめてくれ」とでも言
いたいような目だ

そして私は頭の上に電球でもひかっているように、右手を左手の上
にポン・・・と置く
その考えには賛成だ

「よいしょつと・・・」

その可愛い魔物を両手で抱える、あまり重くはなかった
モフモフしてて、きもちいい・・・とてもやわらかい感触だ

そしてその魔物は「キュ？キュウウウ？」てな感じではてなマー
クを浮かべている

その、魔物にいつも持ち歩いている（おやつのためだ）ビスケット
のようなものを

渡してみることに
すると嬉しそうにカリカリと食べ始める

「よおし!!モフちゃんも手に入れたし、みんな行くかッ!!」

そんな感じで名前まで決めて意気揚々と私は歩き出す
その様子に呆れ顔を隠せない勇者以外の勇者御一行であった

「ふんッ!!」

戦場にある男がいた

それは徹夜と王が話していたときに後ろに護衛として付き添っていた男

SSランク『糸殺』のトミルズと呼ばれていた男

その男の手からは数本の鋭いワイヤーが伸び

戦艦に巻きついている、戦艦も相当高く飛んでいるはずなのだが

それでも巻き取られ、今はトミルズにひっぱられて急激に降下している

「切り刻まれる、鉄の塊がッ!!」

その言葉と共にさらに数十本の細いワイヤーが現れ
戦艦を切り刻む

金属をも切り刻む鉄の糸が戦艦をバラバラにした

その破片は鋭い鉄の雨となり魔族へ降り注ぐ

「ふう、戦争なんて興味ないのになあ……」

SSランクの男がぼやいてしまう

ちなみに、こいつが冒険者になった理由は

どこかで不自由なく静かに暮らしたい、というもので

最初はBランクを目指していたのに何故かSSランクまで上がって
いたという

なにやらおかしな男である

「ん〜、それにしても戦場の戦力はどちらも変わらないか……五分五分つてとこだね」

戦場を見渡しながらつぶやく

目の前では黄金の竜が翼の生えた二人の男達を圧倒してる場面や

なにやらギルドファイトという大会で黒の破壊者という少年に魔法ごとく砕かれていた
土の鎧というよりゴーレムを着たギリでSランクの男が戦艦の砲撃を食らっていたりする

「あら、トミルズさんこんなとこにいたんですか？」

そんなときに声がした、そちらを振り返る

その方向にはトミーという速さにこだわる男・・・ようするに早さ馬鹿の男がいた

ギルドファイトでは『聖剣』のラルドという相当腕のたつ女性と戦っていたSランクの男だ
異名は『斬風』だった気がする・・・うる覚えで間違ってるかもしれないが

「ああ、トミーか、久しぶり」

気楽に答える男

「そういえば、トミーと仲の良いトゥルスは？」

男の質問

ギルドファイトで黒の破壊者という少年と戦っていた水属性魔法の得意な男がいない

それに対してトミーは

「トゥルスは水辺で遊んでますよ」

遊んでいるというのはなんか気の抜けた言葉だが

水辺という言葉からしてとても乱暴な遊びをしているのだろう

あの男は水が多くある場所では相当使える奴だ

「へえ、なかなか面白いね」

つついニヤニヤと笑ってしまう

「そういえばさっきトウルスとあったときに
でっかいタコとイカとサメが大きな竜にさばかれていた、とか言っ
てましたよ」

そして、そんなことを言ってくるトミー

「本当にこれは戦争なのかな・・・？変な場面ばかり聞いたり見
たりするよ、僕は」

ちなみに徹夜が飛んでいったところも見たので
疑問がずつと頭に残っているSSランクの男です

「俺も時々疑いたくなる場面を見るので肯定はできませんよ
あの黄金の竜と戦ってるの堕天使と悪魔らしいですね・・・」

「あつはつはつは・・・」
Sランクの早さ馬鹿とSSランクの系使いの男が楽しそうに笑いあ
っていた

ここは連合軍の後衛

負傷者の手当て、遠距離からのサポートなどを担当している場所だ

「ほれほれ、お主らいつせいに呪文を唱え始めるんじや」
腰のひん曲がった老人・・・徹夜がこの世界に来たときから見たと
きのある老人

グレイブが宮廷魔術師の10名に話しかける

すると、その十名の声が呪文を唱え始め綺麗に八毛っている
1人でやると少ない破壊力だが、10人にもなれば相当の破壊力が
増すことになる

そして、十分な力がたまると

「ふむ、発射なさい」

そのグレイブの言葉により魔法が発射される

それは戦艦にぶち当たり戦艦を砕くが、まだ墜落までには及んでい
ない

墜落させるように攻撃してるわけではないので当然である

「・・・さて、次はどこを攻撃すればいいのじゃ？」

老人が目を瞑っている少女に話しかける

すると静かに目を開き、指示を声に出す

「あそこ、あそこに攻撃を仕掛けてください

もうすぐあそこから大規模な攻撃魔法が使われます」

その少女が指差した二つの方向へまた宮廷魔術師が攻撃準備を始める

「カイラ様、大丈夫ですか？」

その少女の後ろに立っていた甲冑の男がしゃべりかけた

その少女の名前はカイラ・ミラージュ。『時の巫女』という予知の
能力を持つ少女

その能力は戦場では強力な兵器ともなる、相手の行動がわかるのだ
から

だが、その分、体力も決して少ない量が奪われてしまう

それを心配してるのがジョイツという騎士だ

「ええ、問題ありません、美月ちゃんも頑張っているでしょうし
それに徹夜だって・・・」

カイラは首にかかっているネックレスをギュツと力を込める
その少女は能力をすでに多量に使っており、すこし辛そうで汗が額
に浮かんでいる

そして、また目を閉じる。能力を使用し始めているのだろう

ちなみに、そのときが丁度

徹夜たちは道で悩み、美月が魔物のことで呆れられているときと同
時刻なのだが

それをカイラは知らなかった

81話 ヤフウ〜・・・(、〜) (後書き)

今回では

カイラなども登場

本当に久しぶりです

久しぶりのキャラばかりでできます

もう、ほとんど出尽くしたかな？

そろそろ本番の美月と徹夜のほうにうつしたほうがいいかな？

さてさて、

とりあえず頑張って書こうと思います！！

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

82話 ぶみゃッ!?(000)(前書き)

あらすじ

戦争ですね

これからのタイトルは

ほぼ本編に関係ありません

82話 ぶみゃッ!? (00)

徹夜サイド

「ふう……」

とりあえず運試しにより右の道に決定した
その結果はよくはわからないが
一つだけはつきりとわかったことがあった

「どつちの道行っても結局一本道に戻ってんじゃん……」
俺の呟き

どうやらどつちに行っても同じだったようで
悩んでいた俺にとって

それはやる気を削ぐには十分だった
そうか……魔王はこれを狙ってこの道を作ったんだな……
お前の狙いはー？もずれずに俺の心をブレイクしたよ……

もう精神的にいやだ……
そんな感じで膝をつきうなだれている俺

「ま、まあ別に気にすることじゃないよ……」
ラルドさんの言葉

「別に変わらなかつたんだし、別にいいでしょ」
ハク言葉

ちなみにそのあと「ハッ！今の徹夜をテキトウな言葉じゃなく
心のこもった言葉で慰めてあげれば、私にイチコロだったんじゃッ
!？」という事を言ってる
フン……なんという愚策なこと

そんな程度じゃ俺は落ちませんよ

「……(クスツ)」

ライルの………笑い

「笑われたアアー……ツッ!!もおいやおあああああああツッツッ!!」

精神的ダメージ

大!!

「……冗談」

……冗談でも……

もお……いやだ……

「とりあえず立つて前に進もう……」

ラルドさんに引きづられていく様に進む俺

ああ、もお、なんかあゝ

やるきでねえっすう……あっはっはっはあゝ

「……お前らが来たのか」

そんな言葉が聞こえた

俺以外の男がいるわけではないのだが、それは男性の声だった
そちらを見ると

「ふむ、『死炎』……ジールク・ライか」

俺のそんな呟き

『魔界六柱』のジールクとその部下のメイトという魔族
その二人しかその場にはいなかった

「……二人で止められるとも思ってるのか?」

俺の問い

ルクライルという少女から頼まれたことがあったが

その詳細までは知らされていないのでよくわからない

まあ、その詳細を聞けなかったのは俺と美月がからかいすぎて

そのまま、しゃべる事ができないぐらい疲れさせてしまったせいな

のだが

まあ、俺のせいじゃないよね・・・

美月だ、美月が悪いんだ・・・ッ！

・・・つい、ニヤツと思ってやった、後悔はしている

「俺達二人では止められないだろうな・・・」

それがジールクの返答

そして、ジールクはメイトに手で離れるようにながす

「・・・ですが」

なぜかそれを拒んでいるメイト

「命令だ、上司には従うべきだぞ」

ジールクがその言葉を言うと

渋々と後ろに下がっていく

何をするつもりなんだろうか・・・？

「これが俺の最後の仕事だ・・・ッ！！」

その言葉を言うと同時に足をダンッ・・・！！と思いつき切り地面を蹴る

すると、どんな仕組みかわからないが、足元から赤い線が一面に広

がっていく

それは色は違えど見覚えがあった、美月を召喚したときと同じような魔法陣だ

つまり何かを召喚するために使うものだ

「我が命を尽くし、呼び出そう!!!」
その魔法陣にジールクの魔力が注がれていく
魔法陣から赤い光がもれ始める

「炎の獣・・・門を守る番犬・・・『冥府の番犬』ケルベロスをつ
!!!」

その瞬間、犬のような獣の遠吠えが聞こえた
それは一つではなく三つがハモっているような遠吠えだった
そして、三つの首の巨大な犬が現れる

「・・・SSランクオーバーの強さかな？」

ラルドさんが呟く

それほどケルベロスは強いんだろう

「・・・それぐらい強いのをなにも代償をなしに召喚できるのか？」
俺の疑問

勇者では論外だろうが、それなりに召喚には代償が必要だ
たとえば召喚のとき、魔法陣の真ん中に生贄を置くのと同じ事だ

「魔王でもあるまいし、俺にはこいつを操りきれないさ
いっただろ？「命を尽くし」ってな」

その言葉を言うと

ケルベロスが動いた、それは俺達を狙うものではなく
近くのジールクに対するもの
ケルベロスはジールクを飲み込んだ

「・・・はアツ!？」

その光景に俺は驚きの声を漏らす
ケルベロスは噛みもしないで飲み込む

『代償は頂いた、我がその命を果たしてやるっ』

その声がケルベロスから響いた

ええッ!?!?・・・しゃべれるのッ!?!?

そしてその犬の目は殺意がむき出しでいて

その目はこちらに向けられていた

三つの大きな口を開けて襲い掛かってきた

美月サイド

「ああ、モフちゃんが逃げて行っちゃった・・・」

美月はそんな声を漏らす

だけでも、それとは違い体はずばやく動き

うねる大量の風の鞭の間をすり抜けるようにしてかわしていく

今は戦闘している途中だ

相手は『魔界六柱』の風属性のトップ

No.4のトールウ・マイラスという男

その後ろには15名の魔族がいて、トールウの攻撃とあわせたように

さまざまな魔法を放ってくる

トールウは他の『魔界六柱』とは少し違っていた

他の奴は部下を取らないか、最高でも一人をつけているだけだった

しかし、トールウの場合は15名の部下を従え

一緒に活動してきた

「どんな計画があるかは知らないが、足止めをしろ、とのことだね
ッ!?!」

その言葉と共に風は激しくなる

美月以外のほかのメンバーもどうにかそれ avoidance 続ける

この風だけならかわしながら進むことも可能だが
部下の15人の魔法がそれを丁度よく阻んでくる

あの風を使う魔族の男は相当、自分好みに訓練させたのだろう

「……俺も痛い目に合わされなきゃいいけどな」

美月たちはそれなりに焦っているのだが、その状況を前にしても
トールウも焦っていた

何故「倒す」という命令ではなく「足止め」なのかがわからなかった
この頃命令が可笑しいところがある

ルクライルの任務、ジールクの任務、そして、俺の「足止め」
なにかが可笑しい

そうトールウは思っていた

「……まるで下位の『魔界六柱』を切り捨てるような」

そこでトールウは何かの存在にハッと気づいた

部下には攻撃をやめさせる

美月たち……勇者御一行も何かに気づいていたようで

トールウとほぼ同時にある方向を向いていた

「おいおいおい……俺達ごと殺すつもりか、あのクソ魔王は」

トールウは思わず呟いていた

目の前の空には20羽はいるアクババという強大なハゲタカ

そして、地面には動物がいくつも混ざったような生物

ライオンの体にライオンの顔、そしてヤギの顔がもう一つつき

尻尾は蛇……つまり、キマイラがいた

アクババはSあたりのランクだ、そしてキマイラはSSランクと言
っていい強さだ

「……これは魔王は仲間のことなんて考えてないじゃないかな？」

美月が思わず呟いてしまうのは当たり前前の事だ

これらの強さの獣が暴れたら仲間も敵もありはしない

「……クソが、あんなペットを送りつけてくるとは……
……強引に『魔界六柱』の世代交代でもするつもりか、あの野郎
は」

トールウは「魔王」とは言わずに「あの野郎」と呼んでいた
それほどこの状況は危ないという事だ

「……魔族のことは考えずにあの魔物たちだけに集中しよう」
美月がマイルたち……勇者御一行のメンバーにそれだけを告げる
それに異論は無い様で、他のみんながうなずく

「……勇者達とは休戦だ、今はこの状況で死なないことだけを考
えろ

団結を乱すな、近づかれるだけでも危ないからな」
トールウも自分の部下達に命令を下す
その額には冷や汗が浮かんでいる
あの数はヤバイということだ

「一人も死ぬな、あの野郎にはえ面をかかせてやる」
そのトールウの言葉と共に
21匹の獣達の強襲が始まった

82話 ぶみゃツ!? (00)(後書き)

今回では徹夜、美月が主です

完全にその二人が主になっていきます

魔王は二人の部下を切り捨てましたね

この外道ツ!!

いや、俺が書いてる小説ですけどね・・・

そして、前回の話のことです

5月9日は休みだったので朝に小説を書いて

3〜5回ほど見直し

俺の目で誤字は見つけることはできませんでしたね

なので完璧かなツ!? と思ってました

そして本文の誤字は来なかったです

「あとがきに誤字が・・・(以下省略)」

ぎゃああああああッ!!

見逃してたああ〜

誤字報告をしてくれるのはいいことです

自分の小説をよくしてくれてるのでから

ただ、俺の勝手なのですが精神的ダメージ大です

ぐふ・・・っ

まあ、そんな感じですが

どんどん誤字・脱字の報告お願いします!!

俺にダメージをあたえて倒しましょう

83話 (くAく) にゆわあゝ・・・ (前書き)

ケルベロスを画像検索すると

外国人がニツコリと笑いながら

ケルベロス(のような犬、多分合成だろう)を撫でている画像がありました

かるくシユールです

やっぱり、犬って可愛いですよねッ!!

あらすじ

徹夜サイドにはSSランクオーバーのケルベロス

美月サイドにはSランクのアクババ20匹、Sランクのキマイラー匹
怪獣大戦線

徹夜サイド

「うおアツ!?!?」

間一髪の所を俺が横に飛ぶようにして避ける
俺がいたところでは牙がぶつかり合う音が響く
もう少しで食べられそうだった

「はアツ!?!」

そんなラルドさんの声

ケルベロスの横からエクスカリバーを振るう

一応斬る事もできた、ただ剣のサイズとケルベロスのサイズとを比べると

あまり深いとはいえる傷ではない

「・・・氷柱雨!?!」

ハクの声

その言葉通り、透明な氷柱がケルベロスに傷つけようと雨の様に襲う
だが、その氷柱はケルベロスに当たる前に溶けていた

『炎を扱う我に氷など無意味』

ハクに襲い掛かるケルベロス

そして、ハクにケルベロスの大きな口が迫る

「・・・火柱』」

ライルのそんな呪文、ケルベロスの腹の下あたりから
火柱が上に向かって噴き出す

その衝撃でひるむケルベロスだが炎の獣に炎はあまり無意味だ

『その程度では我に傷を与えることなどできぬぞ』
ケルベロスの雄叫びにも似た声

「・・・別にダメージをあたえるためじゃない」
ライルの狙いは違う所にある

ハクは怯んでいる間にケルベロスの攻撃範囲から退く
仲間を助けるための魔法、ライルが炎の精霊に願った物どおりだ

「簡単には深い傷を与えられないね・・・」
ラルドさんがいつの間にか横に来ていた

「倒す前にやることがあります・・・」
俺の言葉

ラルドさんの言葉を待たずに続ける

「あいつはジールクを嘔まずに飲み込んだ、だから死んではない・・・」

「あの魔族の男を助けるつもりなのかい？」

「ある少女に頼まれましたから」

「・・・」

「だから、あいつにはゲロってもらいます」
ゲロってもらいますよ宣言、発令中

『何の話をしておるのだア！？我を無視して生きられるなど思っ
なッ』

突然のその言葉

俺とラルドさんは逆方向に前を見ずにとっさに跳ぶ様にしてよける
すると、俺たちがさっきまで居た所はケルベロスの吐いた炎で焼か
れていた

あぶなかつた・・・

そして、着地したらケルベロスから離れるように走る

『フハハハアツ！！死者を相手するだけではつまらぬからなアア
ツ！！』

久々の生きた獲物だ、我を楽しませよツ！！』

そんなことを言いながら俺に追撃をしてくる

さすがにデカイ、数十歩あるかないと移動できないような距離も数
歩で詰めてくる

そして、俺に向かって前足が振り下ろされた

「チイ・・・ツ！！！」

避けれないと判断する、そしてその前足を受け止める

うおおツ！？凄い圧力が俺に加わっている、相当重い

・・・だけでもここは

「おらっしやアあああああああああああああああああああ
あツ！！！」

その前足を振り回して投げ飛ばす

『おおおおおおツ！？我を投げ飛ばすとはそんなヒョロい体をし
ておきながら

なんと腕力ツ！！そして、いまだ一人も死なない強者達

これは楽しめるぞツ！！フハハハハハハハアツ！！』

笑いながら空中でクルツと回りながら着地するケルベロス

・・・こんのうぎってエクスン犬がアツ！！

ラウも犬（の獣人）だったのになんという可愛げのなさッ！！
お前ここから消えるよッ！！そしてラウが現れるッ！！俺の疲れを
癒してくれッ！

『フハハハハッ！！』

俺の頭に邪念がぶくぶくと湧き上がってる間に凄いスピードで迫っ
てくるケルベロス

もおッ！！ラウのあの可愛い顔を思い出す前にッ！！

そして、前足が数回振るわれた

それら全てを避けて最後の一回だと思つものをキャッチしようとする
ところで

突然、尻尾が横なぎに振るわれた

「ぎゃふッ！！」

アホな声を出しながら出しながら吹っ飛ば俺

そして、岩にぶつかってやっと止まった

なにやら体が重い・・・というより俺は今、岩の中に埋もれてるよ
うだ

「こオんのオ！！犬の癖に、かわいげのねエクソ野朗がッ！！！！」

そんな事を叫びながら周りの岩を吹っ飛ばす

そして起き上がる

『私の攻撃を受けてシャキッとしてるあたり、相当の実力の持ち主か
それともただのタフさだけの男か・・・どっちにしても面白そうだ
いたぶりがいがあるというものだッ！！』

こいつサドかッ！？

そんなことを思つ間もなく俺につっこんでくる

「我々を無視していいのかなッ！？その三つの首の内一つがなくな

「……『フェアリーフレーム
妖精の炎』」

ライルが魔法でケルベロスの下あごを衝撃で上に持ち上げるようにして口を塞ぐ

「オラアツ!!」

俺は上から下に思いつきり拳を振り下ろしてライルと同様にケルベロスの口を塞ぐ

『むぐツ!?!』

それで炎が外に漏れずに口の中で爆発した

すぐに離れる俺とライル。ケルベロスは口を確かめるようにアグアグしているが

どうやら大丈夫みたいだ……自分の炎でもダメージはないらしい

「……ツ!! 本当にめんどくさツ!!」

俺がそんなことを言ってしまったても仕方がないことだと思う

その間にラルドさんは動き

ケルベロスの腹の下に潜り込み、エクスカリバーを下から上に振り上げる

『おつとツ!?!』

それを避けるようにケルベロスは後ろに跳ぶ

俺も行動に移ろう

「……『ファイアーボール』!!」

俺は六つの火の球を造る

それを一つの首に二つの割合でぶつける
すると、爆発した

『そんなもの効かぬわツ!?!』

「でっかいハンマーだ、ハクツ!!」

俺の呼びかけに反応して俺のすぐ近くに

戦艦も壊せそうな大きな氷のハンマーができた

それを俺は持ち、全力で氷の柱に向かって振り下ろす

釘を打つような感じだ。まあ、先はとがっていないので圧力しかないだろうが

今は、それで十分だ

『げうツ!?!』

ケルベロスの声

この様子だと・・・もう少しだ・・・ツ!!

「久しぶりのこの魔法ツ!!・・・『重力操作』^{グラビトン}50倍だツ!!」

もう一回ふりかぶり振り下ろす、そのハンマーは俺の魔法で威力が相当増している

さすがにここまで重力を重くしなくてもよかったかもしれないのだが・・・

まあ、とりあえずそのハンマーはもう一回氷の柱を打ち込む

『お、おええ』《ピーーーーーーッーーーーーッ!

』

「ここはNGとさせて頂きました、想像するのはさすがに嫌だし
ようじ

もしかしたら食事中の方もいるかもしれませんが、本当に申し訳ない
と思っております

m (((m byゲロ芋)

「うわぁ、なんとという汚物の雨・・・うっ!!臭いがアツ!!

お・・・おええ』《ピーーーーーーッーーーーーッーーーーーッ

」

臭いにやられた・・・ッ！！なんとという不覚ッ！！
ちなみに他の人たちは鼻を塞いでいた

そして、その汚物の中には俺が依頼（だと思っ）された助けるべき
魔族の男も混ざっていた

それを部下のメイトが回収していた

ちなみにメイトは鼻に洗濯バサミのようなものをつけ

服は細菌用の作業服みたいな物を着ている、なんとという準備のよさ・
・

『くっ・・・！！我に恥をかかせおつてッ！！』

そんな事いいながら、汚物を全部焼き払ってるケルベロス

その炎は不思議で触ってみても熱くはない、ライルの精霊の炎と同
じようなものだろう

どうやらこれで巻き添えを食らわすよりも、ちゃんと戦って勝ちた
いらしい

そして全ての汚物が燃えて消える

『よしッ！！自分のゲ《ピーッ！！》は自分で始末したッ！！

・・・戦いを再開しようではないかッ！！』

そんな言葉と共に戦闘が再開される

臭いはライルが吹き飛ばしたので問題はないッ！！

ジールクも救ったし、これで躊躇なくケルベロスを倒せる

だけど、殺しはしない！！

だって俺は、犬好き連合会長だから！！

（ 「犬好き連合会長」を思い出した人は

『5話 とうなるかは時と運しだい』を見てください

ラウが登場する寸前で徹夜が考えているはずです by猫より犬派
の焼き芋）

83話 (くAく)にゆわあゝ・・・(後書き)

今回では美月サイドはございません

次の話では徹夜サイドも美月サイドも出てきます

ケルベロスがなにやら頑張って長持ちしやがったので

美月を入れる余裕がございませんでした

あなたは犬と猫どちらがかわいいですか？

俺は犬ですね、小さい犬が可愛いです

猫もかわいいですが、忠誠心のある犬が俺は好きです

ちなみに、ラウは犬の獣人ですね

そこはほとんど関係なくなってきたしまった今日この頃

今回の話では最後のほうが

《ピーーーーーッ!!!》が三つもありました

まあ、だしても良かったんでしょうけど

想像したくはないし、させてしまっはまずいと思い

やらせていただきました。本当にすみません

この小説はこの頃「バトルものなのかッ!!?」と思うようなもの

になってしまっています、基本的に「ギャグ」を大切にしています

なので、途中で自分のコメントが出てきましたが

そこはお気になさらず

そして最後の「by x 芋」となるところがありますが

そこもお気になさらずお願いします

では、今日はこの程度にさせていただきます

みなさん、お体にはお気をつけてくださいね

いつもコタツで寝ている母は元気なのに

一回だけコタツで寝てしまった俺は風邪気味になる世の中です
理不尽な世の中ですが、頑張つて生きましようね!!

誤字・脱字があれば『マジで』御報告宜しくお願いします

84話 ハッ！ (00) (前書き)

あらすじ

ケルベロスが・・・

・・・

・・・

・・・

おええ 《ピ—————ッ！—》

84話 ハツ！！ (00)

徹夜サイド

「おおおおおおらああああアアアアアアアアアアアア！！」
俺のおもいつきり力を込めた拳がケルベロスに向けて放つ
それをヒョイツって感じて避けるケルベロス
俺の拳は地面に食い込み、半径数？のクレーターができる

『なんとという威力・・・素手とは考えられんな』
ケルベロスの口からそんな言葉が漏れる
チツ・・・避けんじゃねえよ、黙って倒されるやア
クソ犬がアツ！！ラウを見習えツ！！！！
そんな事を思ってる俺に向かって大きな口で食い殺そうとしてくる

「ハツ！！」
そんな所にラルドさんの短い声が聞こえた
ラルドさんが大きくエクスカリバーを振るい
ケルベロスの右前足を切り裂いた

『ぐうツ！？』
足が使えないようにするまでは行かないが
それはケルベロスによるけさせる
そして・・・

「食らえツ！！」
ハクという言葉と同時にケルベロスの腹の下に氷の柱が
下から上に向かって突き出す
それがケルベロスの腹を思いつきり叩く

ゲロをさせちゃだめですよ、あの臭いには耐えられません

『むぐう!?!?』

その声と共にケルベロスの足が数?地面から離れる

・・・

ふう、なかなかダメージをあたえられるようになってきたな

「・・・私の得意な炎があまり効かないから、少し残念」

ちなみに、ライルが横に来て言った

・・・どんまい

「怯ませることはできるだろうし、今度役に立てばいいじゃない?」

その言葉にこくり…とうなずくライル

そして、また走って行ってしまった

ふう、さてはて・・・どうしようか・・・?

少しずつダメージはあたえてきてるけどまだまだ体力は有り余ってるように見えるぞ・・・

『・・・舐めるなア!!!』

ケルベロスが大声で叫び、両脇の二つの首で炎を回りに吹く

それに反応してラルドさんとハクが離れる

ふむ、ここが動き時か・・・

「・・・あなたを舐めたら汚い、だからそんなことする訳がない」

そんな言葉と共に、ケルベロスの炎にライルが干渉して道を開けた

『・・・』

さすがに傷ついたようだった

その気持ちはわかるよ・・・

そして、俺はその開いた道を走る
そして真ん中の顔に思いつきりアッパーのように下から上に向けて
拳を食らわす

『ぐあぁッ!!』

その一撃に大きくのけぞるケルベロス

『このクソがア!!』

その体勢から凄いい勢いで顔をこちらに戻してくる

その口の中には炎

そして、その炎が俺と周辺の地面を焼いた

『フハハハハハハハハハハハハハハハッ!! 楽しませてもらったが
今まで無事だったが、これで一人目が死んだなア!!』
そんなケルベロスの叫び

「死んでねえよ、このクソ犬・・・」

俺の声が響く

それに驚いたようにこちらを見るケルベロス

俺の周りには闇が壁のようになって炎を防いでいた

「今のは少しイラッと来た、本気で殺る」

俺のそんな言葉と共に闇が動く

ケルベロスを貫くために

『人間が闇だとッ!?!』

そんな驚きの声をあげながら後ろに飛びのく

「殺さない、という甘い事は言わないでおこう」

本当にイラツと来たからには徹底的に殺る」
俺の眩きとともに闇が一面に広がって行くようにして
ケルベロスを追う

『く・・・ッ!?!』

それに対して上に跳んで逃げようとする
普通の闇ならあまり警戒することもないのだが
使用してるのは人間、普通の闇ではないのかもしれない
そんな思考がケルベロスの行動を「逃げ」に走らせる

「そつちばかり気にしてていいのかなッ!?!」
突然後ろからそんな声が聞こえた
後ろにはラルドさんがエクスカリバーを振りかぶった状態にいる
その剣は光で剣自体の姿が見えない

『・・・ッ!?!』

それに驚きを表すケルベロス

「はアッ!?!」
その言葉と共に振るわれた剣は致命傷とまでは行かないが
ケルベロスの背を斬り、そしてケルベロスが地面にむかって落ち始
める

『ぐお・・・ッ!?!こおんの・・・』
ケルベロスがそんな言葉を話す
だが、落ちる先にはハクがいた

「・・・いい所に落としてくれたね」
そんな言葉と共に氷のどがった柱が生え
ケルベロスの体を貫いた

『ぐがア・・・ッ！！なめるなよオ・・・！』
そんな言葉を言いながら体を動かすケルベロス
それで体を貫いていた氷が碎ける

「いい加減死ね」

俺の言葉と共に闇が動き

ケルベロスの全方向から串刺しにした

そして音もなく闇は引き抜かれる

『ぐぬうあ・・・』

その言葉と共に倒れるケルベロス

まだ息はあるがもう動けないであろう三つの首を持つ猛犬

「・・・大きな犬も好きだったんだけどな」

俺はそんな言葉を言った後に

道を進むべく向き直った

「・・・私だけラストスパートに加われなかった」

そんなライルの悲しそうな言葉には何も反応できなかった

美月サイド

「・・・たあッ！！」

その言葉と共に剣を振るい一頭の巨大なハゲタカ・・・アクババを
切り刻む

そしてそのアクババはそのまま勢いで地面をえぐりながら進み
最後にはそれも止まる、完全に死んでいる

「無駄に数が多いねえ・・・」

美月が思わずぼやいてしまう

アクババはまだ14匹はいる、そしてキマイラも暴れている

「ッ！！数で攻めて来るとは・・・」

マイルがとなりで呟いている

13匹もSランクがいて、そしてもう一匹はSSランクの魔物
相当つらいだろう

サイスは自分の鎌を振るい、迫ってくる数匹のアクババを牽制して
いる

殺そうと追撃しようとした瞬間に違うアクババが攻撃してきてとど
めをさせない状態だ

それは他のメンバー。ロイズ、ラルチも同じ状態だ

ロミルは効率よくよけながら、隙があれば剣を振るい確実に数を減
らしている

「おまえらアッ！！連携を崩すなよ！！一瞬でかみ殺されるぞッ！

」

魔族である男トールウ・マイラスの大声が響いていた

それは部下に向けて言っている言葉だ

部下はどうかアクババの攻撃を防いでる状態だ

そして、トールウはキマイラを相手に戦っていた

「らアッ！！」

その大声と共に手のひらにためた風がキマイラの牙とぶつかり合う
そして衝撃がまわりに広がり

キマイラもトールウも同じ距離を吹き飛ばされる

「チッ・・・アクババが多数にキマイラが一匹

本当にめんどくせえ！！あのクソ野郎めッ！！」

トールウが手をクイツと合図をすると、それに答えるように部下の
15名が

キマイラに向けて魔法を放つ

そして、キマイラの動きが止まり

その間にトールウは部下の元まで下がる

「せいッ!」

その瞬間に私が割り込み

細いの剣を下から上に向けて振るう

それをギリギリだったが避けるようにキマイラは後ろに跳ぶ

そして後ろでは

「……『キル・ウインドウ死の乱風斬』!」

トールウの声が響く

その手からは強力な風属性の魔法を放ち

それがアクババを切り裂いていく

アクババの数が相当減った

残りは6匹程度だ

「……私も強力なの出すか」

そんなことを呟く私

そして魔力を思いつきり貯める

「……『エンド・ライト終焉の光』」

美月の貯めた光がキマイラに向けて一直線に進んでいく

その光がキマイラを焼いた

一瞬にして灰となるキマイラ

「……さすがは勇者だな」

トールウなそんな言葉が後ろから聞こえた

まだ本気ではやってないんだけどね・・・
ここで本気でやったら魔王までもたないし・・・

84話 ハツ！！ (00) (後書き)

今回では少し徹夜サイドが
美月サイドに比べると多くなりました
キマイラじゃあ美月の相手にはなりません

そして犬に攻撃をしてしまった徹夜
ああ、なんと嘆かわしい

犬に攻撃をしてしまうなんて本当にひどいことをする
徹夜は死んでしまえばいいんだッ！！
死んだら小説として成立しないけど・・・

ではでは

今回はこの程度で終わらせていただきます
あとがきを書くネタがございません
ではでは、みなさん

体調は崩さないほうがいいですよ
なにやら花粉？または埃にも気をつけたほうがいいですよ
10分の内に30回程度くしゃみがでました
中盤は友達に心配されて

後半は友達に無視されました

・・・泣いてないですよ、あれです
目から流れてるこの水は、鼻水です
・・・いやそれも汚いから嫌です
あれです、水道水です

・・・鼻水は忘れてください。お願いします

では〜) > < (ノシ

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

85話 ガタガタ()(00)()ブルブル(前書き)

あらすじ

徹夜はケルベロスの串刺し

美月はキマイラに破壊光線!!

85話 ガタガタ（）（）（）（）ブルブル

「ん？・・・なんで俺はまだ生きてんだ？消化されるだけだったはずなんだけどな」

そんな言葉を漏らしながら起きるジールク・ライ

「うげッ！？くさっ、なにこの汚物・・・おぼらアッ！？」

ジールクの言葉の途中にいきなり水がかけられた体についていた《ピーッ！》を洗い流す水がかけられたほうへ向くと

「ん？なんだメイトか・・・」
自分の部下がいた

「汚いです」
部下のその一言

「・・・」
何も言えない
それは置いといて疑問に思ったことを聞く

「消化されるだけだったはずだが、何故俺はここにいるんだ？」

「あの男がケルベロスの腹を殴りまくって《ピーッ！》です」

「・・・おいおい」

ジールクが周りを見渡すとケルベロスが横たわっている

その光景に驚く

『地面……つめてえ……』

そんなことを言ってるケルベロス、どうやら死んでないらしい
それ自体にも驚きだ

そして、魔力が尽きたのか消えるケルベロス
元のいるべき場所に帰ったはずだ

「……さてさて、俺はこれから何をどうするべきなのやら」

さっきの水のおかげでほとんど臭いもなければ
汚くもなくなっている、それでも淡々と水をかけ続けてくるメイト
それに抵抗もしなければ反応もしないジールク

「……この水じゃダメですね、赤い水をかけてもらわないと」
ジールクは体に炎でつつんで汚物の小さなものまでも完全に燃やし
きる

完全に綺麗にする、完全に臭いはなくなっている
それをみても汚いといってくるメイト

「赤い水って、おい……あれ、酸性だぞ」

それに対してジールクはそんなことを言う

確かにきれいになるだろうが、自分の体まで溶けてしまうのは嫌だ
それに反応せずにメイトはよく使っている魔法具

『テレポルト空間移動』の紙だ。それを燃やす

「おい、ちょ、マテッ！！あああああッ！！」

そんなジールクの叫びを無視して魔法具は発動し

二人を移動させる

そして、一瞬の内に牢屋の中へと移動していた

「・・・なんてこったッ!!」

ジールクの叫び

「えッ!？」

そんなある少女の驚きの声

そして、次の瞬間には少女・・・ルクライルがジールクに抱きついて
いた

その目には涙

「ルクライル様・・・さっきジールク様はケルベロスの《ピーッ!
!》まみれだったので・・・
消毒を」

そのメイトの言葉を聞いたルクライル

最初ポカンとしていたが、静かに赤い水がで始める

拘束用の魔法具で力を大体抑えられているので人を溶かすほどでは
ない赤い水が動いた

「ごぼごぼッ!!」

ジールクの奇怪な叫びが・・・というよりおぼれてる声が牢屋に響
いていた

酸性はうすかったのだが、正直肌がピリピリ痛かったらしい

その後念入りに水で体をまた流しました

汚れを落とす意味でも、酸性の水を洗い流す意味でも

徹夜サイド

「・・・この洞窟はいつまで続くんだ？」

俺の言葉

それは言葉通りの状態で洞窟をただひたすら進んでいる状態だ
それぞれたいまつをもって進んでいる

「さあ？」

ハクの能天気な答え

・・・溜息しか出ない

「ただ歩くしかないさ・・・」

ラルドさんの言葉

たしかにそのとおりなのだが・・・

「・・・がんばる」

ライルのそんな言葉

いやはや本当に何もいえないなあ・・・

ん、

正直疲れてきたな

ああ、闇なんて使うんじゃないかな・・・

「むっ！？俺の『最悪だセンサー』に反応がッ！！

美月が近くにいたとッ！？」

俺がいるのは一本道の洞窟

後ろを見ても前を見ても特に誰もいない

「前に勇者にあつたのは偶然じゃないのか？」
ラルドさんの言葉

「違います、これは絶対に美月が近くにいます
でも、どこに……？」

美月サイド

これは少しさかのぼる
数日とかではなく数分だが

「ん、この洞窟はどこまで行けばいいの……
なにやら聞き覚えのある疑問を口にする美月

この言葉からわかるとおり
私たちがいるのは洞窟の中
一本道の洞窟だ

「自分にもわかりません」
ロイズの返答

「さあ？」
サイスの返答

「歩くしかないのでは？」
マイルの返答

「お姉様……！」
ラルチの……なに？

「・・・」

ロミルの無言

さてさてこれはどうにもなりませんなあ〜
ん、これは・・・

「私の『徹夜センサー』に反応がッ!」

なにやら名前が変わってるがああのセンサーに反応がした
一本道なので前と後ろを見ても誰もいない

「誰もいませんよ？美月様」

マイルのそんな言葉

ん〜、なぜだろう？

「そのセンサーとやらは正確なんですか？」

サイスの疑問

「だったらあの祭りのときに会えたセンサーの力を
否定するって言う事？」

「いや、そういうわけじゃありませんけど・・・」

「絶対近くにいる、どこかに・・・」

説明

ちなみにこの洞窟は二つの洞窟が上下にXのように重なっていて
丁度、徹夜と美月がいるのは重なっている部分

二人のセンサーは万全で徹夜が下の洞窟、美月が上の洞窟にいる状
態なのだ

そんな事に二人は気づかず、そのまま歩き出す
二人の道は交差した形だ

徹夜サイド

そして数十分がたった

「お、明かりが見えてきた」

目の前には久しぶりの光り（と言っても外も暗いので微々たる物だ）
わあ〜い、やったぞ〜

て感じで早歩きになる俺達

そして洞窟を抜けた

「ククク、私の相手はあなた達ですか」

そんな声が聞こえた

そちらを見てみると

男がいた

「私は『魔界六柱』No.2『腐土』のクロイズル・リクトンです
以後お見知りおきを」

魔族の男はペコリと頭を下げながらそんなことを言った

美月サイド

こちらも洞窟を抜け

やっとのことで出られた

「私の相手は勇者か・・・」

という事はNo.2に徹夜という少年が行ったのか」

そんなことを言う女が一人

「確か、ギルドファイトのところであったね
リーシ・トルウマアだったかな？」

私の言葉

「知っててくれるとは光栄だ

勇者の言うとおり、『魔界六柱』がNO1『漆黑』のリーシ・トル
ウマアだ」

魔族の女はそんなことを言った

85話 ガタガタ()(00)()ブルブル(後書き)

んちゃー！焼き芋でござんす

高校生になってからマジでちゃんとしたテストが近づいてきたでヤンス

それにより投稿が遅れることもあるのでゲス

なので、連日投稿はそろそろ途切れますね

正直、いつも高校帰ってきてから書いては投稿ってのは正直疲れてきました

さつきから変な語尾をつけてるのも疲れましたねだからやめます

ふう〜・・・正直疲れてきましたね

終盤だつてのに文字数が激減

まあ、意地でも増やしていくので心配なさらず

みなさん、カギってのは丁寧に扱ったほうがいいですよ？

自転車につけてあるU字ロックを自転車にかけようと

カギを鍵穴に刺したのですが、カギが刺さらなかったのです

電車の時間も迫っていました、なので

むかついて思いっきり力を込めたらカギが折れました

折れたカギは鍵穴からとれたし、カギはまだ一個あるので大丈夫なのですが

かるくビビりましたね、真ん中でポツキリ行ってました

俺の腕力が恐ろしい・・・ッ！！というわけではなく

多分もろいところが折れたのでしょうかね

なので気をつけたほうがいいですよ

小説の内容に戻りましょう

今回は・・・

徹夜と美月が交差するとき、物語は始ま・・・なんでもないです
俺の好きなラノベの売り文句（？）をまねてみただけです
忘れてください

とりあえず戻りましょう

ジールクも退場です、そしてトールウも前の話で退場してます

もう、戦いはしないでしよう

ジールクは最後の任務を終了させ

トールウは魔王に切り捨てられたのです、戦うわけがありません

残る『魔界六柱』も残り二人

No.1とNo.2です

リーシと徹夜を戦わせ、クロイズルと美月を戦わせようかと思った
のですが、相性的にも戦い方的にもこちらにさせていただきました
リーシと美月は闇と光

徹夜とクロイズルは純粋な闇と闇の混ざった土属性

という組み合わせです

いろいろと楽しみながら書こうと思っています

徹夜くんも美月ちゃんも戦闘中に邪念が多いと思います

それが俺の小説なんですけどね

さてさて、次に違う内容を書かせていただきます

次の連載小説が決まってきました

当然、異世界トリップチート勇者なのですが

今回の主人公たちには、異世界というあの俺の没作品を旅してもら
います。

没作品とは書こうかなと思いついたもののしっくりこなくてやめた

ものです。

基本的に俺の考えた小説を次々に旅していくものですねので、この「俺は闇」の世界に入ることもあるかもしれませんが、まあ、途中で飽きてやめちゃいそうな雰囲気があるのですが・・・

なので、予定変更もあるかもです

あまりにもこの「俺は闇」がしつくりきすぎてて

他の小説がやりづらく思えます

困りました(・・:)

では、ここらでやめさせていただきますましよう

気が向いたら好きなキャラ送ってくださいね

もう少して完結間近です

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

86話 ー ー 0 ー ー 0 ー ー イヤ ツー!! (前書き)

あらすじ

美月と徹夜が交差した

そして、目の前には

上層部の魔族がいた

徹夜サイド

「ククク、私が戦いたいの少年一人だけだ、だから少しそこで動かないで欲しい」
クロイズルがそんなことを言いながら指をパチンツ・・・!!と鳴らした

すると俺以外のメンバーが結界のようなものに包まれる

「・・・ツ!!」

それを壊そうとラルドさんがエクスカリバーを振るう
だが、それは容易く弾き返された

「それは魔王様がわざわざ仕掛けてくれたものです
あなた如きでは壊せるわけありませんよ。勝負が決まるまでは消え
ません」

結界には相当の魔力が込められている
クロイズルの言うとおり相当硬いだろう

「なんで俺なのか、わからないんだが・・・」

俺の疑問

だって当たり前でしょ!!俺ってただの一般人だよツ!!

「600年前のNo.1の実力を知りたくてね」

俺はやっぱり一般人だ!!

俺自体は眼中にない感じだしねツ!!

ヒヤッホオオーイ!!

「それに生まれ変わったという後の少年の実力も知りたいしな」

・・・

・・・シ・・・ネ

「俺はそんな価値ないよ、戦っても意味無いよ」

俺は足りない脳ミソで説得を試みる！！

「ククク、戦うのが楽しみだ。

魔族という上位種族から人間という下等種族に成り下がったものの相当の実力をもってるらしいからな・・・」

やるき満々ですか、こんちくしょう

「では、行くぞ」

そういつてクロイズルは動く

クロイズルは手を地面につけると

その地面がいきなり腐り始めた

「・・・ツ!？」

急激に迫ってくるそれは全てを腐りつくす

それを急いで後ろに跳んで避ける

腐食は魔王の結界に弾かれラルドさん達は無事のようにだ

うわぁ・・・俺も中に入りてえ・・・

そして着地する

どうやら腐った後には触っても腐るわけではなく

見えない線が円形に広がっていき、その線に触ると腐るらしい

とは言え靴が汚れるのは少し嫌だ

「・・・『火の球』!!!」
ファイアーボール

俺は火の玉を作り、それを投げる
そしてそれはクロイズルに一直線に進んでいく

「・・・ククク」

そんな笑い声が聞こえた
すると、俺の放った魔法が腐っていく

「うえ・・・ッ!？」

俺の驚きの声

「・・・『腐針』」

その言葉と共にクロイズルの足元の腐った地面から
針が数本飛んでくる

「うわあつと・・・ッ!？」

それを避ける、それは後ろにあった岩に刺さり岩を腐らしていく
・・・あたったら腐るのか

ということはいつは一撃必殺の魔法ということだよね・・・?
うわ、なんだよあのチート・・・

「物の試し・・・つとッ!!」

腐っていない岩を持ち上げて投げてみる事に
それは魔法と同様腐っていた

「じゃあ、これはどうかな？」
闇を使う

俺の周りに6個の大きさの違う闇の球体を作る
それがクロイズルに襲い掛かる

「クク、闇であろうと例外ではありませんよ」

最初は小さいのから、そして最後は結構大きいのまで順番ずつに襲い掛かる、どんどんと腐って消えていくそして、6個目だった、それをクロイズルが避けた6個目の大きさは大きなバスと同じ程度

「ふうん・・・その量から消しきれないという事か」

「・・・計っていたわけですか」

「そりゃ、当然・・・」

俺の周りに闇が充満していく

「どの程度の闇の量で倒せるかわからなかったからなこの一発で決めさせてもらう」

そして、集まりだす

それはさっき打ち消せなかった量の5倍は多いそれほどの量が集まっていく

「・・・こおんの、下等種族ごときにこの私がやられるわけにはいけないんだよ」

クロイズルが両手を前にかざす

その手には相当の魔力が込められており

触れたら一瞬の内に腐り消えていくことだろう

「俺の闇でただ倒れてればいいんだよ」

「最後に立ってるのはこの私だ、腐って死ぬがいい景山 かげやま 徹夜 てしや!!」

俺は闇を放ち、それを両手にためた力で待ち構えるクロイズル

おれの闇と『腐土』のクロイズルの力がぶつかり合った

そして・・・

「死んではないな・・・よくあれで死なないもんだ」
立っているのは俺だ

「あの量をぶつけるとはね・・・」
そして、結界が消えたらしくラルドさん達が出ている
クロイズルは気絶しているんだろう
いつも思うがああの量をぶつけてやったのに何で敵は死なないんだ？

「私が・・・」
そこでクロイズルの声が聞こえた
すぐに正気に戻ったツ！？

「私がただ負けて終わりではいけないのだよツ・・・」
『全てを食らう腐食の力』
クロイズルの呪文が聞こえた

「・・・なツ！？」
俺が驚いた声をあげる
その呪文の魔法が最初に餌食にしたのはクロイズルだった
クロイズルの体が腐ってポトポトと肉が落ちていく
そして、最初の腐食と同様、円形状に広がっていく
ただ威力は数倍だろう

美月サイド

「・・・さて、魔王様の結界を使わせていただきますよ」

そんな言葉をリーシという魔族の女が言った

その瞬間に私以外のメンバーが結界に閉じ込められる

「勇者とそれ以外のメンバーと戦うのは正直辛いですからね

No.2のほうでも同じようになってるでしょう」

そんなことを言うリーシ

「私一人にだつてあなたは勝てないよ」

私は細い剣を鞘から抜き、構える

「簡単に負けるわけには行かないさ、私はこれでもトップだからね」

同じように武器を抜く。右にはロングソード、左にはナイフを持っている

そして両者とも動く

次の瞬間には私の剣とリーシのロングソードがぶつかっている
鋭い金属音が響いた

「ふッ!!」

リーシが左手に持っていたナイフを私の首を狙うように横に振るう
それをしゃがんでかわした後

「・・・ッ!!」

足を一閃するように鋭く、そして早く、横に振るう

それをリーシは跳んで避ける、そしてこちらに手をかざす

「……『闇』よ」

リーシの背中のほうから黒一色の物体が動き
数十の数の触手のような闇が私を貫くために突き進んでくる

「……『ナイフ光』！！」

私の手から光が爆発するように弾け
それが闇を打ち消す、そしてすぐに行動に移る
追う様にして跳び、剣を振るう

私の剣をリーシはナイフとロングソードで受け止める

「あなたは何故魔王についていくの？仲間も切り捨てるような奴に」
それらを少し強引ながら力押しで剣を振るい
リーシはそれで数？ふつとばされる
だが

「……力だ、仲間なんてものは関係ない、私はあの圧倒的な力に
惚れた」

それでも答える
リーシは闇を動かす、私の首を切り落とそうと鋭く闇が動く
それを剣で受け止め、次の瞬間には切り刻む

「私はあの力に近づきたい……だから魔王様の近くにいる、少し
でも強くなるために」

そしてまた、リーシと私がぶつかり合う

「……力に魅了された愚かな人だね」

「愚かなんて物は関係ない、私のしたいようにする」
ぶつかり合う、何回も金属音が響く

時には黒い闇が動き、それを光が打ち消す
そして光の剣が空を飛び、それを闇が食らい尽くす

「・・・私があなたの力の執着心を砕いてあげるよ。魔王を殺してあげる」

私のまわりには光の剣が数百という数で
空中に漂っている

「力の象徴ともいえる魔王様をお前如きに倒せるわけがない
どうせ、また勇者が倒れるだけに決まっている」

リーシのまわりでも闇が動き、力をためていることがわかる

「さあ？それはわからないよ」

その言葉と共に私もリーシも動き
闇と光がぶつかり

闇が打ち消された
そして・・・

「・・・きつちり気絶してるね」

倒れてるリーシと立ってる私

そして、結界がとけたようでマイル達がこちらに来る

「さてさて、魔王を倒さなくちゃね」

そして、歩き出す

そのときに私とその他のみんなと囲むように魔法陣が現れる

「・・・はッ!?!」

そして、その場から消える

???

「ここは、どこだ？」

俺の声はその空間に響いた

足元には魔法陣、『テレポート空間移動』の魔法陣だったらしい

「え、なに・・・徹夜？」

俺の知ってる声が聞こえた

それは十年以上聞き続けていた声、ようするに美月だ

「んあ？美月か・・・」

同じ部屋に美月がいた

そして周りを見ると、ラルドさん達、その他に勇者御一行も倒れて
いた

「・・・」

その一人を確かめてみる

「眠っている・・・しかも強制的に」

これじゃあ、起きないだろう

それを美月も確認したようだった

「これはどういうこと？」

美月の疑問

「俺にもわからない」

それが俺の答え

突然の事だったからわかるわけがない

『お前らを私の魔王城に招待してやったぞ
声が響いた』

俺は古い日記にかけられた魔法の世界で
美月は俺の記憶でその声を知っていた

「あつはっはゝゝゝまさかのラスボスですか」

「自分から招待してくるとは思わなかったね」
俺と美月の言葉

『早く来ないのか？お前らが魔界に来た理由の存在がすぐ近くに
いるぞ』

またその声が聞こえた、大きな扉が目の前にはある

「……うぜえ、言われなくてもすぐ行くっての」

俺の言葉、この声を聞いているだけでイライラしてくる

「余裕だね、その余裕を後悔に変えてあげる」

美月がそんなことを言いながら歩く
扉を開けて前に進む

「ようこそ、私の住まいへ……さあ、楽しい殺し合いをしようじ
やないか」

その声が聞こえた

目の前には30台の魔族の男性

見た目とは違い何千年も生きてる存在
魔族を束ねる最悪な男

そいつが・・・
この異世界にきた理由・・・魔王の声だ

今回では

急速に話が進んだ気がします

もう、完結が近いことがわかります

あゝッ!! 本当に疲れました

ああゝ、背中が疲れて痛いです)・・・(

ううゝ、高校は・・・

疲れます・・・大変です

とりあえず今日はこれで終わりますね
ではではゝ)・・・(ノシ

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

最終話 本編は……(ノシ)前書き

あらすじ

魔王だアアア！！

最終話 本編は……(・)ノシ

「フハハハッ！今までの三人は一对一と同様のものだったが
今回は一对二、楽しめそうで何よりだ」

魔王の声が響く

魔王の後ろには魔王城を支えてるかのような印象をもつ大きく黒い
柱がある

・・・本当は俺一人で相手するつもりだったんだが

まさか相手が俺と美月を自ら呼び寄せるとは思わなかった

誤算だ・・・

ホントにめんどくさいことをしやがる・・・

「さあ来い！！そして私を楽しませろっ！！」

今はそんな事を気にしてもしようがないか・・・

とりあえず今は目の前のクソ野郎を殴り飛ばすことだけを考えよう
ということ、俺から動くか・・・

「本気で殺す・・・」
闇を使う

体にまとわせて普段以上の動きをできるようにする

そしてダッシュする

闇をまとわせてる事もあり、相当早くなる

「ハッ！！」

思いつきりパンチをする

それを魔王は避ける。そして魔王の後ろの大きな柱にぶつかった

この柱・・・相当硬いな、揺れるだけで壊れないとは

「その柱を壊されては困る、それを破壊されては魔王城は潰れてしまふからな」

そんなことを言いながらどこから取り出したのか真つ黒な剣をふりおろしてくる

「私を忘れもらっては困るッ!!」

そこで美月が割り込んできて剣を受け止める

その間に魔王の懐に潜り込み、下から上に向けて拳を放つ

丁度いいタイミングで魔王のあごにヒットした

それで魔王の足は地を離れ空中を舞う

「・・・なかなかのパワーだな」

そんな事を言いながら余裕で着地する魔王

おもいつきり撃つたのにあまり効いてないようだから

俺をイライラさせる

「ふッ!!」

いつの間にか移動していたのか

魔王の後ろに美月がいて、剣を振り下ろす

「そして、なかなかのスピードだ」

その剣を振り向きもしないで黒い剣で受け止める

俺は拳を構えながら、真正面から突っ込む

「だが、それでもまだ足りぬ」

美月も俺もよくわからない衝撃が体を襲い吹っ飛ばされる

「ぐあッ!?!」

「きゃっ!?!」

二人とも10?程度吹っ飛ばされた

俺は靴底がガリガリ…という音を立てながらどうにか衝撃を受けきる
美月は地面に片手をつけたあと

後ろに衝撃を流すように回転しながら跳び、最後にはスタツと着地する

「男がパワーと女がスピード、それぞれが特別に段違いだな」
魔王のその言葉

「・・・チツ、本当にめんどくせえ」

俺の言葉

「これは強敵だね、今まで戦ったのとは段違いだよ」

まあ、俺の場合はイルリヤとかとも一度くらいはあるから

そういうわけではないのだが、イルリさんがすごいのがよくわかる

「・・・ライトソード・ストーム光の剣の嵐」

美月が呪文を口にする

光の剣の嵐、言葉通りの魔法が魔王を襲う

「『闇』よ、切り刻め」

俺の足元からは闇が動き、魔王を切り刻むために動く

「なかなかの魔法、これ程の力を持っていながらまだ強くなる可能性が残っているのだから、異世界からの訪問者は恐ろしいものよ、
デストラクション・・・『破壊』!!!」

そんなことを言いながら魔王は、俺の闇と美月の光を破壊する

「おらアッ!!!」

その間に動き、俺は上から拳を叩き込む

「ふッ!!」

美月も同様に動いていたようで魔王の足を切り落とさんと剣を横に振るう

「おっと、危ない・・・」

そんな言葉を言いながら余裕な感じで避ける魔王

俺が拳をそのまま床に叩き込むと美月が巻き込まれそうなのでどうにか手よりも先に両足をつく

「それぞれいい攻撃だ、今は危なかったぞ。やはりこれは楽しめるな」

余裕で避けてやがったのによく言うよ・・・

「・・・『ヘル・フレイム地獄の炎』」

久しぶりのこの魔法、手加減は無しだ

「『ライト・インパクト光の衝撃』」

美月の魔法

俺からはライターの火と同じくらいの火が飛んで行き

美月からは野球ボールぐらいの球が飛んでいく

それらが魔王にぶつかりると、飛んでいたものの大きさとは段違いの爆発がおきる

「・・・『ダイクネス・シールド最強の闇の盾』」

その声が聞こえた

勇者の命を駆けた攻撃もどうにか守りきった防御魔法だ
爆発のそこには魔王が立っていた

「・・・今のは本当に危なかつたな、さすがというところか」

魔王の声

・・・なんというチート野郎

「では、こちらからも行かせてもらおう」

その声が聞こえると爆発の炎や煙

それらがなぎ払われ一直線に魔王が突っ込んでくる

「・・・チイツ!!」

俺は舌打ちしながらおもいつきり拳を振りかぶり、放つ

俺の拳と魔王の拳がぶつかり合う

「・・・があッ!!」

その結果、俺が吹っ飛ばされた

止まることなく吹っ飛ばされ壁にぶつかってやっと止まる

「フハハハハハッ!! 私は魔力を力に変換する能力を持ってるからなッ!!」

単純な力比べじゃ負けんぞッ!! クハハハハハハ!!」

魔王は笑いながら美月に向けて剣を振るう

「・・・ッ!!」

それらを防ぐ美月

スピードでは対応できているがパワーでは劣っているせいかなだんだんと押されて行く

「ふっ!!」

魔王が美月の剣を上弾く

剣を手から離す、ということとはしなかったものの

明確な隙が生まれる美月、そこを確実に仕留めようと魔王が剣を振

るう

「・・・ツ!?!」

美月の顔に焦りが現る

そして魔王の剣が美月の体を二つに切り裂くために横に動き

「・・・間に合ったッ!!」

それを俺がどうにか受け止めた

ぎりぎり滑り込みセーフだ

「うらアッ!!」

おもいつきり魔王の腹に蹴りを放つ

それをまともにくらった魔王が吹っ飛んでいった

仕返したこの野郎

「ありがとう、徹夜」

礼を言ってくる美月

「別にかまわない、美月に死んでもらっちゃあ俺が困るからな
俺がそれに返答する

なにやら美月が顔を赤くして顔をそらしているのだが

・・・何故だ?

「ふう、それにしてもなんとというチートなボスキャラ・・・」

俺の言葉

「それよりたちが悪いかも・・・」

美月の言葉

「ふ、ふふふ、フハハハハハハハハハハハツ！！
私は今楽しいぞツ！！勇者共！！」
その言葉と共に黒い光線みたいなものだ飛んできた

「……ツ!?」

それを二人とも避ける

背中の方にある遠い壁にぶつかり

背後で爆発した、うう……耳がいてえ

「正直、帰る時にちゃんと歩けるように疲れない程度の魔力を残しておきたかったんだが

考えてる暇がないな……」

リヤナさんが暴走したときみたいに魔力がほとんどなくなったら魔界を抜け出すのにも大変だ

「そんなこと気にしながら戦ってたの、徹夜は？」

「考えとかないと帰るとき大変だぞ？」

「確かにそうだけど……」

そのときに魔王が突っ込んできた、単純な力だけじゃ少し分が悪いな……

だから、パワー比べはやめだ、やめ。魔王が攻撃を数回、数十回と放ってくる

「ツ!!!……おわあつと!!!?」

それを美月も俺も互いの動きを邪魔しないように全部避け続ける
なにやら言葉がハモツてたが今は気にしてる場合ではない

「美月、背中貸せッ!!」

俺がそういうと剣を避けるついでに背中を開ける美月
そこに手をついて、魔王の顔に向かって蹴りを放つ

「・・・ッ!!」

それを手で防ぐ魔王

「徹夜ッ!!」

美月が手を伸ばしてきたので美月の手を取って
そのまま振る、上から下に向かって振り下ろす
美月は踵落としをする形になる

「・・・美月ソード（笑）」

俺の言葉

「武器として扱わないで欲しいんだけど!!」

美月はそんなことを言いながら振り回される

魔王は美月の踵落としの軌道から避ける

それを見た美月は床を破壊しないで、そのまま足をつき着地する
そして、俺に振り回された勢いを生かしたまま剣を横なぎに振るう
俺は今まで使っていないかった二本の紫色の刃をX字に交差するよう
に振るう

「・・・チッ!!」

魔王の舌打ちが聞こえ、魔王が上に跳んで
俺と美月の攻撃を避けた

「動きがさらに良くなってきているな・・・さすがだ」
魔王がそんな事を言った

「魔王様に褒められるとは嬉しいね」
俺のふざけた返答

「でも、まだ攻撃が届いてないけどね……」
美月は鋭いところを突いてくるなあ……

「私にすぐ殺されなくても十分褒められることだと思っがな」
魔王がそんなことを言いながら攻撃してきた
突っ込んできたわけではなく莫大な量の闇の槍を放ってきた

「……ッ!!」

俺が美月の前に出て、それらを闇で防ぐ

「……『ライトソード・レイン光の剣の雨』!!」

美月のその呪文が聞こえて

魔王に向けて光の剣の雨がふる

「むうんッ!!」

魔王がそれらに向けて剣を振ると

剣の軌道に合わせて闇が出て、それらをなぎ払う

「懐がから空きだぞ、魔王様……『インパクト衝撃』!!」

俺はその間に魔王の懐に潜り込み魔法を放つ

「ぐあああッ!!?」

それに反応することができずに吹っ飛ばされる魔王
魔王城を支えている柱にぶつかると、その柱には傷一つつかない
それに追撃をする美月

折れてしまいそうなほど細い剣が魔王の心臓を狙う

「……ッ!!? 『破壊の闇』」
デストラクション・ダークネス

美月の細く鋭い剣と魔王の黒い魔法がぶつかり合う
そして……

パライイン…という甲高い音をたてながら
美月の剣が砕け散った

「……なッ!?!」

美月が世界でも五本指に入る名剣が砕けたのに対して驚く
美月はすぐに正気に戻り距離をとる

「……くっ、戦いの途中から動きが段違いに良くなってきたよ。
……
この私が押されているだと……」
魔王の顔には焦りがある

「そろそろ死んで欲しいな、お前がいるから戦争が続いてるんだよ」
俺の言葉

「け、剣が……」
なにやら落ち込んでる美月
気に入ってたのか?
とりあえず、武器がないのはまずいだろう

「ほら、美月」
それに対して俺の二つで一つの剣である片方の剣を投げ渡す

「ん? 精霊が宿ってる」

それに反応して受け取った美月

「双子で炎の精霊さんがはいつてるぞ、フレとイムだなどっちがどっちだかわからんが」

「あゝ、あの子か」

なにやら知ってる様子、なんで知ってるんだろうか？

「大事にしるよ、俺がこの世界にきてから使ってる大切なもんだからな」

「言われなくても」

そんな言葉を言った後に動く

なにやら疲れて来ている魔王さんの首を狙ったために

「こおんのクソがアツ!!」

魔王が黒い砲弾を放つ

それを俺も美月も避けて

俺が魔王の右から、美月は左から迫る

そして交差するように剣を振るう

「ぐうあツ!!」

それでまともに切られる魔王

「そろそろ寿命じゃないか？動きが鈍ってるぞ」

俺の挑発

「そんなわけあるかアアア!!」

魔王が叫ぶ、円状の黒い衝撃波がこちらに迫る

そして爆発音が響いた

「そろそろ終了だな」

俺のその言葉が響く、魔王の懐に潜り込んでいる
無傷では行かなかったがどうにかさっきの衝撃波を突破した

「な……ッ!?」

それに驚く魔王、その顎に俺の拳がめり込んだ
そして空中に浮く

「……『ライト・インパクト光の衝撃』!!!」

そこに美月が魔王に魔法を放つ

「がああッ!?!?」

それで魔王が光の攻撃により柱にぶつかると

「ハアアアアッ!!!」

そこに闇を貯めて威力を上げた拳を思いっきり放つ
美月の魔法がぶつかっている瞬間でもあるので相当ダメージをあてられる

そして俺の拳が魔王にぶつかり、魔王は柱を砕きながら吹っ飛んでいった

そして倒れた魔王は動かない

「……終わったか？俺魔力がほとんど尽きてるんだけど
多分あと一回か二回分しか闇は使えないだろう」

「多分ね……私も魔力はほとんどないよ」

するとなにやら凄い大きさの音が響き始めた
すぐに変化は現れ、城がところどころ壊れ始める

「む、魔王城を支えてる柱を壊すな、って感じのこと魔王は言っ
てなかったか？」

「・・・逃げよう」

慌てて逃げ出す俺と美月、さっきの魔法陣の部屋に着く

「俺、こんな大きなものを起動させるほどの魔力残ってないぞ・・・」

「

「私も・・・」

ワタワタと慌てだす俺と美月

「・・・クロ、出番だ!!」

俺が呼ぶと黒い指輪からあの黒い少女が出てきた

「これを考えておったか、ご主人」

「あ、クロちゃんだ」

美月は何故クロをしておるのですか？

「とりあえず、闇を出せ!! 魔力を満タンにしてあるからできるだ
ろ!!!？」

「うむ」

その言葉と共に闇が出てくる

そしてあるものを出す、最初は砲台だけだ

「オラ、撃てエ〜!!」

「うむ」

そんなやり取りをした後砲台が火を噴き壁を砕く
すると、壁の向こうは黒くどんよりした空が広がっている
そして闇が動き砲台だけではなくそれ全体を外に出した

魔界に来るときに使った俺製の戦艦だ

「よし、クロ。みんなを闇で運べ、すぐに魔界を出るぞ」

うむ、という返事をした後、俺の指示通りに動くクロ

美月も中に入っていく

「ふう、疲れた」

魔王城が壊れてきても俺はマイペースです
剣をはずしてテキトウな戦艦のなかにぶん投げる

「ひど」「くない」「か・・・ッ!？」

どこかの双子の声が聞こえた気がしたが気にしない
今は剣を持つてるだけでも疲れてきそうだ

『これで終ると思うなアアアアアアアアアアアアアア!!』

そんな声が聞こえた

すると、俺の足にペチ・・・という変な音が聞こえたので見てみると
闇がまとわりついていた・・・なん・・・だと?

そして凄い力で引つ張り出した

「おおおおおおううううあああああつああああつあああツ!!!!!!
??????」

俺は驚きでアホな声をあげる

「徹夜ツ!?!」

美月の声

「お前らは先に出てろツ!!すぐに追いつく!!クロ、美月を頼んだ!!」

魔王城が崩れるのに巻き込まれないとこまで飛んでいけツ!!」
クロがこくりとうなずくところが見えて、闇で美月をひっぱっていく
相当疲れているのか美月はそれに抵抗しようとしても抵抗しきれないようだ

そして戦艦は飛び始める

俺がひっぱられてる方向を見ると、そこにいたのは魔王・・・か?
でっかい闇の塊がいた

『さっきの攻撃で私の体は尽き果てたわツ!!』

悪いが呪いの魔法を使わせてもらったぞ!!お前にも死んでもらうツ!!』

ということとは邪悪な魔力だけの存在になった、てどこか?

ということは物理攻撃じゃ碎けそうにない、ということでもあるな
俺は手に闇をまとわせる、闇のグローブ的なものだ

「いい加減、死ねやア!!俺はもう疲れてんだア!!」

魔王城はどんどんと壊れ始めている

もうすぐ一気に崩れる事間違いなしだろう

そんな事とは今は気にせず魔王だったものに殴りかかる

『ぐうあッ!!』

ふむ、闇をまとわせたことが成功だったな

俺の拳は当たるが、蹴りは当たらない

そして、怒涛のラッシュをおもいつきり魔王にめり込ませる

『がああああああああああ．．．ツッ!!』

魔王の痛みの叫び

それでも殴り続ける

「いい加減に、俺は．．．休みたいんじゃアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そんな大声を上げながら最後に思いつき殴り飛ばす

なんともアホな大声なこと

だけど、これが俺の本音であり、何者にも邪魔されたくないことだ

『ぐるうあああああああああああああああッ!!』

思いつきり吹っ飛んでいった

いくら魔法を使ったといって相当魔力使っていたから弱っているのだろう

「へぶッ!？」

おれの後頭部に城の石がぶつかってきた

大きくなかったからいいものの、大きいのだったら気絶して

崩れるのに俺も巻き込まれてたかもしれない

「ヤバイ．．．はやく行かなきゃ．．．」

俺は走り出す

走るといつても相当疲れているので小6の走りにも負けそうだ

チクシヨオツ!!もつと早くなれツ!!おれツ!!

「ゼエゼエ・・・ふう、・・・ゼエゼエ・・・やっとなつた」
息も絶え絶えな俺

「さて、どうするかだ」
結構戦艦は離れていた

よし、めざすは戦艦のこっちの端にある人が外に出れるようにした
所だ

そこには人が落ちないように、鉄格子がある
そこをつかめばOKだ

「魔力が足りないから届くかわからないけど、やるしかないっしょ」
・・・

最後の一回分の闇を出し
ドラゲイルのときにやったように、俺を持ち上げる
そして・・・ぶん投げた

「おうわあああああーッ!!」
届け、届け、届けッ!!どんどんと空を進んでいく
そして、すぐ目の前に戦艦が迫ってくる

キターーーー・・・っていうところで手が届かない

「いや、ちょ・・・待っ・・・ッ!!」
そこで落ち始める俺、力がたりなかった・・・だと・・・ッ!!
・・・ア
ッ!!

そこで俺の手を美月がつかんだ

「無茶するね、徹夜は・・・」
なにやら涙目の美月、そんなに心配させたのか？俺
俺の後ろでは魔王城が完全に崩れていった

「・・・これが俺だからな」
俺は美月に手をつかまれたままそう答えるだけだった

これで俺と美月の『戦争』は終わった

その後は、戦争もやめさせ
美月が準備していた魔族と人間が平和に暮らせるようにというもの
が動き出した

それは何千年も続いていた戦争からして難しい事だが
竜の国『ドラゲイル』 大国『サラスム』 大国『レーゲン』が協力し
てくれる

ということなので、それほど長くはないだろう

あとは、『魔界六柱』だったミルリヤは魔族を束ねるため頑張つて
やっていくそうだ

ミルリヤには他の同僚、リーシヤートルウ、ルクライルにジールク
なども協力するらしい

それぞれ進んでいくそうだ

リーシは魔王が倒されたことにより、完全に力という魅了を断つた
らしい

さてさて、美月がやるうとしてることはいつ完成するのだろうか・

俺はわからない、というより考えるのが面倒なのでわかるつもりもない

「・・・ねえ、次はどこ行くの？」

「えっと、左端の島国『キョクトウ』なんてどうだ？」

なにやら俺と美月は二人で旅をしている

ラウたちとも会った、ラウは足手まといになった、とかいうよくわからない理由で

魔法学園に入學した、癒しで役にたったんだけど・・・すると、最後に

「私が十分、戦えるようになったら一緒に旅をしてもいい？」

と聞いてきて俺は当然「いいぞ」と答えた

だって、あの癒しはハンパないからな

するとニッコリと嬉しそうな顔をして学園に向けて馬車で出発していった

うう・・・あの癒しが・・・

ハクは『赤の吸血鬼』という女性、名前はキュラと言っらしいのだがその女性と二人でたびに出るらしい

キュラは闇ギルドのメンバーらしかったのだが、戦争に参加する。

という取り引きで罪をなくしたそうだ

寿命が長い人と一緒にいれば寂しくはならないそうだ

ラルドさんたちは二人になってしまったが

ギルドでまた依頼をこなしていくらしい、このたびが終わったらまた合流するつもりだ

そしてなぜ俺が美月と旅をしているか・・・それはよくわからない
あれだ、その場の空気とノリだ
ちなみに美月は「勇者」廃業ということでも冒険者になった

基本的に美月のやるうとしてることは、魔界や竜の国、あと二つの
大国が進めているため

美月がいなくてもいいそうだが、なんという・・・きつかけ作りだけ
の存在・・・

「そこはどんな国なの？」

「えっと日本に似てる国だったさ」

そして、二人でSランクなどの依頼をこなしながら旅してるわけ
だが・・・

なにやら『超人夫婦』という感じで有名になってしまっている

誰だ、こんなことを言ったのは・・・目をえぐってやりてえ・・・
てか、夫婦じゃねえし、そんなこと言われるのはジールクとルクラ
イルだけでいいっての

「じゃあ、はやくいこっ」

「・・・はいはい」

まあ、そんな感じだ

最終話 本編は・・・（ ）ノシ（後書き）

今回で最終話です

途中でパソコンのコンセントを抜いてしまうという事故があったのですが、どうにか文は消えなかったのでよかったです、消えてたら最終回は先延ばしでした

次からは番外編が少しあり、それで終わりです
そこまでほんの少しの間ですが
どうにか見ていってくださいね

この話は日曜に書いたのですが
もうテスト勉強につき込むので少しの間休憩させていただきます

番外編は多くて10話程度ですね
頑張ります

魔王様を倒しました
途中から動きが良くなっていき・・・魔王は鈍っていき
倒した、という感じですね
美月と徹夜のふたりがちゃんとコンビネーションに
なっていたかは不明ですが
頑張りましたよ、俺

俺の小説はいつも完結せずに
途中で消去してしまっていたのですが
正式に完結できたので俺的には達成感があります
ヒヤッホオオオーイ！！・・・とりあえずテンションを下げます

では、無駄に多い文字数になりましたので
誤字も多いと思います
報告してください、すぐ直します

もう蚊が出る季節になりました(;)

最悪です、蚊はヤンデレ、リアルぶりっ娘の次に嫌いです
え？微妙なものを例に出すなって？

ヤンデレで言うとその関連のアニメは絶対見ませんし
リアルぶりっ娘の場合は普通に「きもいからやめろ」「言うほどに
嫌いです。マジで言ったことがあります
それくらい嫌いです

番外編 幼き頃の思い出(前書き)

テスト期間が終わり〜

ウツハウハな俺の気分〜

さア！勉強するかッ！！

番外編 幼き頃の思い出

カタコト…と不規則に揺れる

今は馬車の中、二人で旅をしているので馬車に乗っているのだ
今の時間は朝早い

他の乗客も乗っているがほとんどの人が寝ていて
起きてる人たちは本当に小さな声で話して、他の人を起こさないよ
うにしている

私はその人たちに一回誘われたが「またあとで」と言っただけで断った
私にはやることがあるのだ
それは…

「…スウ…スウ…ムニヤア…もう食べられん…」

定番の寝言を言いながら寝ている黒髪をへそ位まで伸ばした少年
徹夜の寝顔を笑顔でずっと見ている
ずっと飽きずに見ている

「…」

軽く鼻歌を歌ってしまう私

え？徹夜視点？いえ、美月視点です、今日は私が主人公です
…ん？なんとなく考えた事だけど「主人公」ってなんのこと？
とりあえずその話は忘れよう

徹夜はやるのがなくなったらしくいつも寝ているのがほとんどに
なってきた

中学ではなぜか私関連で追われていたし、高校でもなぜか私関連で
追われていた

…なんで私関連なのだろうか？

こんなにも眠ってるのは小学生の頃以来だったと思う

・・・

今思い出すだけでも幸せな気分になるわあ〜・・・
え？気になるって？じゃあ、お話しよう
ん？誰に話すんだらう？時々変になってるね、私

とりあえず・・・

えっと、最初に話しかけたところから行こうかな

それは私が小学一年生の初めの頃の話

その頃は私はなにやら周りから天才やらなんやらと騒がれていた
今も徹夜に「完璧女」だなんだで言われているが
小学生あたりからそんなこと言われていた

「みつきちゃん、すごいね」

「あたまがよくていいなあ〜」

「小6のべんきょうできるんだもん、すごいよ」

テキストウにやっただけで答えが解けるといふ無駄な頭
それが周りから評価されていた

「そんなことないよ〜」

と、そんな感じでいつも私の周りに集まってくるクラスメイト
私は人を集める體質らしい、ちなみに中三のときに徹夜に言われる
まで気づかなかった

とても楽しくお話し、笑ったりしていた。クラスメイト全員が私の
周りに来ていた

ただ、一人だけ、いつも来ない男の子がいた

「・・・スウ・・・スウ・・・おかわり!・・・スウ・・・カレー・
うまつ・・・スウ」

なにやら食べ物関連の寝言しか言っていない少年

黒髪はその頃からへそあたりまで伸ばしていた少年

徹夜だ。カレーでも食べている夢を見ているのか

口をもぐもぐさせて時々、満面の笑みになる

私は友達と外で遊ぶことになり、みんな凄い勢いで外に出て行く

「ねえ、てつやくんも一緒に遊ぼう」

なんとなく一人はダメだと思って話しかけてみた

それでもおきない

なので、肩を揺らしながらしゃべりかけてみたのだ

「・・・スウ・・・ふえっ!?!」

なにやら変な声をあげながらおきる徹夜

「外に一緒に遊びに行こうよっ」

再度徹夜を誘う私

「んあぁ・・・いい、遠慮しとく・・・眠い・・・スウ・・・」

そう言っただけで眠りだす徹夜

それを二回くらい繰り返した後、友達に呼ばれたので諦めてしまった

そしてその日は終わり

また同じような事を二日くらい繰り返した

「なんでいつも寝てるの？」

私になんとなく問いかけてみた

そのときはちょうどシャキッとしていたからだ

「睡眠は人生唯一の救いだからさ・・・ねむう・・・」

なにやら意味のわからない事を言い出す徹夜

「・・・？」

それに疑問の顔を浮かべる私

「・・・ほら、眠ってる時ってなにもかも忘れられるだろ、だからだよ、

というわけで・・・スウ・・・スウ・・・」

また眠りだす徹夜

今思うと小学生の癖に老人の様な事言ってるから笑える

「????。・・・眠ってるよりみんなと話してたほうが面白いと思っけどな」

まあ、そんな感じでその日も終わった

「景山先生、おはようございまあゝす」「」

「うむ、おはよゝ」

これは朝の会の時

うちの担任の先生は女性で、美人な人だった

授業は算数、ちなみに徹夜は景山先生に叩かれて起きていた
一年生の初めの頃なので算数の時間はたし算
すこし教われれば簡単にわかる所だ

「徹夜、『 $1+1$ 』はなんだ？」

これは初歩の初歩と行っていい問題だろう
とうぜん「2」と答えるのが普通だ

「・・・田んぼの「田」です」

まじめに答える徹夜

「・・・」

無言で近寄る景山先生

「いたあッ!？」

おもいつきりチョップされていた
それを見て笑うクラスメート
景山先生が黙って教卓まで戻る

「徹夜・・・答えは？」

その目には殺意が込められている

「2です・・・」

涙目の徹夜はそう答える

今思い出しても可愛いなあ・・・そんな感じの授業はいつもあった
まあ、ほとんどの授業で寝ているから授業の最初は景山先生のチョ
ップが飛ぶのだが
そして、またそんな日が続く

「ねえ、徹夜の家につれてってよ」
なんとなく言ってみた

「なんでお前を連れて行かなきゃいけねんだよ・・・」
ちなみに徹夜と私の家は同じ方向にあり

私の家の帰る道の途中で徹夜の家がある、という感じだ
この頃は私が徹夜に付きまといっている感じになっていた
その日は一部の先生の会議で景山先生も同じ時間に家に帰るとい
う学校にしては珍しいときだった

「気になるから、だめ？」

「だめ」

「絶対？」

「絶対」

「・・・本当に？（ジーン）」
ずっと見つめる攻撃発動中

「・・・うつ」

なにやら焦っている徹夜、なんでだろうか・・・？

「わかったよ！！家に入れるだけだからな、すぐ帰ってもらおうぞ！」
「！」

「うん！」

そんな感じで徹夜の家に入りは成功したわけである

幼い私は天才だと思う、まあ何回かやったら相手にされなくなったけど……

今思い出すだけでもむかつく……あとで起きる前につねってやるうちなみに、これを数回やった末、徹夜は「目をそらしたり焦ったら負け」というものが植えつけられ私がジッとみるとジッと見返してくるわけである、

それで真っ赤にして顔をそらすのが私だ

「ただいま……」

徹夜が家に入っていく、それに続いて私も入っていった

「おじゃましま〜す」

ニコニコ笑顔の私だ

「おかえりなさい、あら？美月ちゃん？」

そんな声、それはほぼ毎日聞いているような声だった目の前に出てきたのは担任の先生、景山先生だ

「ふえっ!？」

それに驚く私

「お前、俺の名前を知ってるか？」

徹夜は普通に私に問いかけてきた

「ん〜、えっと景山かげやま 徹夜てつやって、ああッ!？」

そこでやっと気づいたのだが、先生の苗字は景山

徹夜の苗字は景山、先生と徹夜の苗字は同じだったのだ

「それにしても、徹夜がお友達……しかも女の子を家に連れてくるなんて〜」

ウリウリてな感じで徹夜のわきをつついてる先生
その顔をとても嬉しそうな感じである、なんでそんなに嬉しそうな
のかは不明だ

徹夜はそれを嫌そうな顔で無視していた

「こいつがしつこいから連れてきただけで、別に俺がすきでやった
わけじゃないじ、すぐに帰ってもらうから、ほらもういいだろ、か
え r e . . . 」

「ささ、美月ちゅわあくん、家が上がって！あまりいいお菓子ない
けど遠慮しないでね」

徹夜の言葉を遮って私の手を引っ張る先生

学校で見る先生はいつも凛としてるかんじだったのでなんだか別人
にさえ思える

そして私は家にひっぱられていく、後ろでは徹夜の溜息が聞こえて

「. . . だから嫌だったんだ」

そんな声が聞こえた

「美月ちゃんは何がすきななの？」

先生の質問

「えっと、ん、ぬいぐるみ」

私の返答

「んふふ、徹夜はね将棋が好きなのよ、笑っちゃうでしょ、老人
みたいで」

そんな感じで話している私と先生

徹夜は言ってる事も老けていれば、好きなものも老けていた

「うつさいよ、お母さん！！将棋で小1に負けてる人が何言ってるんだかッ！！」

となりで顔を真っ赤にさせて叫んでいる徹夜

なにやらツッコミがずれているのは気のせいだろうか・・・？

それを物ともせずニコニコしながら徹夜のことを話す先生

なかなかあれは面白かった。それに徹夜の秘密が何個か聞いた

んで、そんな日が結構続いたわけです

家が近かったし休みの日にもアポなしで行ったわけです

親には勉強を友達の親に教えてもらおう、ってことで言ったわけでありませぬ

なぜか本当のことを言う気にはなれなかった

なぜだろうか・・・？

まあ、そんな感じの日々が続くけど

徹夜は学校で毎日のように寝ているのは変わらなかった

そんなある日

不幸が私に降ってきた

人を引き寄せるといふことは、危ない人も引き寄せる天才なのだろう

「ということ、不審者が出るから気をつけるように」

という景山お義母さんの言葉

お母さん、というところに間違ってるような漢字が入ってるのは気にしないで欲しい

「もし、刃物を持って怪しい人を見たら大声で叫んで逃げなさいねたぶんそれでいいはず」

景山お義母さんはそんなアバウトなことを言っている

そしてガラガラ…という音をたてて扉が開いた

そこにはマスクを着け帽子を深くかぶりサングラスをかけた、とても怪しい人

そしてその手には刃物、噂をすればなんとやら・・・だ

『きゃあ~~~~~~~~~~~~ッ!!!』

普通、こういうとき小学生は反応できないものだろう

反応できずに固まってる所を刺される、それが普通のはずだ

先生が話をしたせいか、みんな叫んで教室を出て行ってしまっ

「まじで出た~~~~ッ!!!」

先生まで出て行った、だめだしょ・・・

「スウ・・・納豆にドリアン・・・おええ・・・キモっ・・・スウ・・・スウ」

徹夜は夢で変な食べ物を見たみたいだ

「徹夜!!!おきなよあ!!!」

そして残ってるのは私と眠ってる徹夜

「~~~~~」

なにやらボソボソとした声が聞こえた

そちらを見てみると不審者が口を動かしていた

ゆっくりとこっちに歩いてくる
一歩歩くごとにその声が鮮明になって聞こえてきた

「一緒に、楽しい所であそぼよお〜・・・」
今なら撃退することもできただろう

それなりに昔から運動もできていて徹夜のいうチート性能はこの頃からあり

こんな不審者ぐらい返り討ちにもできたと思う
でも・・・

(怖いッ！！)

子供の私にはこの光景は動けないものだった

そしてまだ買ったばかりだ、とでも言わんばかりにきれいに光る刃物の先がこっちに向いている。不審者は近づいてくる

ゆっくりと、確実に、そして・・・

「いつしよにあそぼおおああああああああッ！！」

不審者が大声を上げながら刃物を私の腹に向けて勢い良く刺そうとして来た

恐怖で目を閉じることもできずに固まっている私

「・・・うつさい」

その言葉と共にガツと刃物を持った不審者の手首がつかまれた

「・・・？」

私はその手の主を見る

それは眠そうな目をゴシゴシともう片方の手でこすりながら立っている徹夜だった

「君も遊ぶう・・・？」
不審者の言葉、完全に狂っている

「うつさい、俺はおきたばかりでイライラしてんの
それに、キモイおっさんと遊んでても疲れるだけだからやだ」
そんな言葉を言った後、不審者の手首から生々しい音が響いた
悲鳴を上げながら手を押さえている不審者
その手は変な方向に曲がっている
そのときは気づかなかったけど子供るときから徹夜は力が強く
手首の骨を粉碎したのだろう

「・・・俺が面白い遊びを提案してあげるよ、俺におっさんがなく
られる遊び」

次の瞬間には不審者の腹に徹夜の拳がめり込んでいた
腹を押さえてもだえている不審者

「まあ、俺のストレス発散だけだね。ちなみにさっきのは俺の眠り
を妨げた分」

そんなことを言いながらまた拳を構えている
もだえている不審者の顔は徹夜のちょうどいい高さまで下がっていた

「そして、これは美月を怖がらせた分」

そんなことを言いながらニツコリと笑った徹夜
次の瞬間には不審者の顔を徹夜が殴り飛ばし
不審者はガラスとかを巻き込んで廊下まで吹っ飛んでいった

「ふむ・・・美月、大丈夫か？」
それを見た後に徹夜が聞いてきた

「・・・うん」

それに答える私、まだこの状況についていけない

「そか・・・じゃあ、俺は寝るから」

え？と反応する前にまた寝始める徹夜

さつきまではイスに座りながら寝ていたのにめんどくさそうな顔して床にくるまつて寝てしまっている

「床で寝ると汚いよ？」

それを見て出てきた言葉はそれだ

「・・・スウ・・・スウ・・・」

ちなみに徹夜はもう寝ていた

その後は先生たちが慌ててきたのだが不審者は白目を向いてのびてるし

教室では女子生徒が眠ってる男子生徒のほっぺをツンツンと指でつついてるし

いろいろとありえない状況に唾然としていた

そんな感じで時間が過ぎ

いつもどおり二人で帰るときになった

今までクラスのみんなが私が不審者を撃退したって勘違いして騒いだりして、徹夜と話すことができなかった

今は徹夜が帰る途中の自販機でファンタを買おうとしている

買っちゃだめなのだが、この光景には慣れた

ちなみに背が足りなくてボタンには手は届いていない

「・・・徹夜、ありがと」

「ん？・・・どういたしまして」

やっとの事で手が届き、ファンタを口の中に流しながら答えてくる

「徹夜」

また徹夜の名前を呼ぶ

「んぼ？ぐぼぼ（んあ？なんだ？）」

飲んでる途中なので何を言ってるのかよくわからない

「私、徹夜が好きになっちゃった」

「じぱあッー！」

ファンタ（グレープ味）が空中でとても美しいアーチを作った

かあ〜らあ〜のおっ

「・・・スウ・・・スウ・・・」

大きさは変わったけど昔とかわらぬの寝顔

それはいつ見ても飽きない顔

「んふふ〜」

つい笑ってしまふ私

「・・・ん・・・むあ？なんだ美月？」

いろいろと考えてるうちに徹夜がおきた

のどが渴いたのか水を取り出して飲み始めてる

「私、徹夜がずっと好きだよ」

なんとなく子供のときに言った言葉を言ってみる事に

徹夜は昔のあの言葉を何故か綺麗に忘れてる

だけど・・・

「しゅあッ...!」

昔と変わらず徹夜の飲んでいたものが空中で美しいアーチを作った

番外編 幼き頃の思い出（後書き）

（、、）ノハハローです

テスト期間終わりました、あはは、うふふふ
勉強はしません、前書きのは嘘です

ちなみに、この話は二日前の午前中のテストが終わり
午後家に帰ってきてから書いたものです
そのときの俺の心の図は

一日目のテスト終了 家に到着 なにしようかな （思考中）

結論： そうだ、小説を書こう！！

はい、ダメ人間の図が今ここに完成しましたね
正直おれ自身、呆れて何もいえません
勉強しろよ、このクソ芋がア！！

自分で自分のことにきれてしまいました・・・忘れてください

さてさて、今回では

徹夜のお母さんが登場です、まさかの先生ですよ

徹夜くんの回答にはビビります

まさかのあの古いネタです

俺が小学生のとき（だったかな？）にはやった気がします

徹夜はいつも寝ていました

中学校、高校などでは美月は

他の人から見られるほどの顔になります

その幼馴染ということでは恨まれ襲われる徹夜くん
そのせいで寝ることはできません

ちなみに、この小説でのラスボス、魔王さんの威厳を守るため書かせていただきます、この小説では魔王さんの戦いを一話で終了させていただきましたが、文字数は今まで最多記録となります
いつもの文字数と比べると2〜3話ぶんあったわけですから
なので魔王さんを弱いとか言わないでください
俺を一話で終了させためんどくさがりやなどと言わないでください
お願いします

話が180度変わり、腹痛ってこわいですよね
自分は腹が弱くて、腹が冷えるとすぐに下痢に・・・
中学校では楽しい思い出もたくさんありましたが
腹痛による苦痛の思い出もたくさんあります
中3からでは水を飲むことができるだけ避けるという
努力をした結果、無意味でした
これから熱くなっていきますが、だからといって
油断をしてアイスを食べてはいけません
俺は絶対には腹痛に襲われることでしょう
こういうときにはお腹を暖めることが一番です
お腹を暖めるには腹巻が一番です
ですが、この歳になって腹巻は抵抗があるわけですから
・・・ここから無駄に文字が多くなってしまいそうなので
省こうと思います、今から書くことを途中と結論を書くとしています

途中：なぜゾロは腹巻をしててあんなにかっこいいのか

結論：それはゾロだからこそその技である

というものになります、大きく省かせていただきました

それではみなさん

楽しい日々をお過ごしでしょうか？自分はテストのストレスで

お腹が痛くなりました、あと夜に薄着で寝たこともあると思います

まあ、体調にはお気をつけください

好きなキャラを気が向いたらお送りください

最後まで残り最高でも十数話のラストスパートです

最後の話で結果を発表しようかと思えます

誤字・脱字があればマジで御報告宜しく願います

番外編 〰️… (前書き)

なう

番外編 ぐぐぐ

美月視点

今はあの馬車のときから3日程度たった

「うふふ」

今は朝早く

今いるのは三つの大国の内一つ『ミラゲイル』という国

今まではレーゲンとサラスムしか行った事がなかったなのでここは初めてだ

その王都の宿に泊まっている

キョクトウに行く途中ではこの今いる国とドラゲイルを通っていかなければならない

なので、ドラゲイルに行くときにはイリルさん達のところにも寄っていくらしい

ちなみに、私は隣の一人専用の部屋に向かっている

簡単に言うと徹夜が泊まってる部屋だ

私が予想するにまだ寝ていること間違いなしだから、起こしに行くのだ

ノックを二回程度したあと、返事がないのでドアを開ける

そして中に入り

ベットのほうに行く

そこにはやはり寝ているようで頭までかぶって顔は見えないが黒い髪の毛が見える

「てつや」朝だよ

ということ、ガバツと毛布をはぐことに

「むう、さむい……」

そんな声

「……なツ!？」

私の驚きの声

その驚きは必然だろう、徹夜の泊まってる部屋
徹夜が眠ってるはずのベッドの上

その場所には知らない人……というより魔族が眠っていた

「魔族の女性が何故徹夜がいるはずのベッドの上にツ!?!？」

魔族の女性の黒い髪は長く、へそ辺りまで伸びている

大人びてるような顔は整っていて、美人といえる

「むあ？美月ちゃあん？」

その魔族の女性がしゃべった

「私はこの人を知らないのに、この人は私を知っているだとうツ!
!？」

驚愕をあらわにする私の声

……そんな朝だった

リヤナ視点

ふつかふかのベッド

寒いようで暖かい感触、なんとも抱きやすい感触

布団をとられて寒かったのだが

代わりに私を暖めるもの、徹夜がいた世界で言うホツカイロがわり
のものを手に入れ
いまはとても暖かい

「んふふ〜」

すこし寝ぼけながらも笑顔の私

「はうあああああツツ!!!??何この状態ツ!??」
そして私にホツカイロがわりにされて混乱している美月ちゃん

「んふ リシだ、リシ」

つい声に出してしまふあの人の名前

私のように少しでも魂が残ってれば良かったのだが
完全に生まれ変わってしまったのでもう居ないと言えるのかもし
れない

でも、リシから生まれ変わった美月ちゃんは私にとったら宝物同然だ

「へ?リシ?」

私の言葉に疑問の言葉をあげる美月ちゃん

そういえば、美月ちゃんは徹夜の記憶を別ルートで手に入れてたっ
けかな・・・?

こっちを振り返って見上げるようにして見てくる

・・・

「美月ちゃんかわいいいいいいツ!!」

さらに力が込められる腕

「ひいあああツ!!メキメキ言ってるツ!!私の体がメキメキ言
つてるよおお!!」

おっと力を込めすぎた

徹夜の体だから馬鹿力だったんだ

「ふむ、徹夜は起きるのが嫌だから私に押し付けたと見える」

私の言葉

「・・・り、リヤナさんとやら・・・？」

美月ちゃんの言葉、なにやら言葉遣いが可笑しくなってる
いつも徹夜が振り回されてる感じだけど
相手が変わるところも変わるのかな？

「うん、そだよ」

ニコリと笑いながら答える私

「それは・・・徹夜の体？でも黒い・・・」

「自動的に黒くしてるんだよ、徹夜の体をね」

「・・・ということは徹夜に抱きつかれてる状態なのではッ！！？」

「・・・さあ？」

「そこはキチツと答えて欲しいかもッ！！」

「ふむ、体を使えるうちにやりたいことをやるうじゃないか・・・
私は立ち上がる

服は闇をつかってワンピース風に変える

徹夜の体は女性でも嫉妬するようなスラリとした感じなので疑われ
る余地がない

よくこの体である馬鹿力が使えるものだと疑問に思う

「やりたいこと・・・?」

「うむッ!ー!美月ちゃんを連れまわす!ー!」

ということだえ

「まぐ、べぐるべぐぼぼ(美月ちゃんは、どこ行きたい?)」

口の中にはなんとかウルフのお肉が入っており
変な言葉しか話せない

美月ちゃんもそれは同様で

口の周りについている、たれを拭いてあげる

「んむ、べべるべつとぼぼるだ(ん)、特に知ってるわけじゃないからわからない」

これで通じるのだから凄いと思う

そこで私は肉を食べ終わり、少しの間うんと唸りながら考える

「いつも思うんだけど、オシヤレをもっとすれば徹夜もちゃんと意識すると思うの」

徹夜自信気ついてないけど、美月ちゃんのこと好きなんだから」

「ふえッ!ー?」

おっと、口が滑った(ニヤッ

別にわざとやったわけじゃないから徹夜には謝っておこうかな

ごめんね、徹夜(ニヤッ

本当に、わざとだよ・・・じゃなくてわざとじゃないよあ

「そ、そそそそれってホントッ!？」

「さあ？」

「ちゃんと行ってほしいなッ!！」

「それよりもオシャレな物を買に行こう
徹夜くんを落とそう作戦」

「え？あ、はい、ん？うまく話をそらされた？」

ということでLet's GO!!

「ん、やっぱりこの世界だと化粧の道具ってのは貴族のものだからね・・・
結構高いんだよね、確か美月ちゃんと徹夜のギルドランクSだけかな？」

「はい、Sです」

無駄に硬くなってる・・・

そんなに硬くならなくていいのに、私傷ついちゃうよ

「じゃあ、余裕だね。まあここは私のおごりでしょ」
徹夜のお金だけだね
ん、これとかかな

やっぱり元の世界のお化粧道具ってのは万能だよな
この世界のだとすべてがダメなものに見える・・・

まあ、そんなのが続いちゃったりして
楽しくお話もしたし、食事もしたし
なんか相手は違うけど生きてた頃の楽しさが思い出せた感じで
とても楽しかった

そして時間はそんなんで進んで行き
すぐ夕方になり、宿に帰った

美月ちゃんは嬉しそうな顔で寝ちゃった
私が相当連れまわしたから疲れたのだろう

「ふうん・・・まったく徹夜はなんでこう自分からアタックしない
のか？」
私の疑問

《そんな恥ずかしい事したくないし、するつもりもない》
私の頭に徹夜の声が響いた

「まったく、恥ずかしがりやなんだから」

《うっせえ！！》
そんな感じの会話

《それで・・・今日はどうだったわけさ、体の主をほっといた一日
は》

「とても楽しかったよ、わざわざ私の事も考えるなんて優しいね
」
今は自分の部屋に移り、ベッドに座って足をパタパタを振っている

《ふん・・・》

「で、気づいてる？」

《ああ、俺達がこの王都に入ってから、ずっと見張られている》

この王都に入ったのは二日前なのだが

そのときから数人の男たちが付きまとっている

私（・・・徹夜と言ったほうが正しいだろうが）と美月の名前を聞いて

兵士が変な反応したのだが、それを無視して王都に入り

その結果が尾行だ

《多分、美月も気づいていただろうがリヤナさんが気をそらしたおかげで

悩む事もなく今はグッスリだ》

「ふふん、お姉さんは偉いでしょう？ということでもまた今度体を貸しなさい」

《断る》

「さて、どうする？徹夜は体に戻る？それとも私がやる？」

《ん〜、リヤナさんだと女でそのままだと気づかないし、肌が黒いから魔族と勘違いされている。やはりここは俺が戻ったほうがいいだろう》

「マジで今度私に体を貸しなさいな」

《だから断る、と言った筈だ》

「・・・もう」

そんな会話をした後にはもう肌が白くなり
髪の毛を縛りなおす

「・・・一日貸してやっただけでも感謝しろ」
もう徹夜の声に戻っていた

《・・・私は寝るから、いろいろと頑張りなさいな》

「・・・人事ですな」

《だって人事だもん》

「なんて最悪な奴ッ!!」

《じゃ、おやす》

ああ、逃げやがったよ、コンチクシヨウ
俺はベランダに出ると屋根に乗り移る
少しの間屋根の上を跳んで進み
俺が泊まっていた宿から離れたら止まる

「さて、何者なのかな、あんたたちは？」
その言葉を言うと周りですつ・・・という足音がいくつも響いた
10人ぐらいの男たちが数人
顔は隠していて確実に怪しい人たちだ

「ん、この国で訓練された兵士達っぽいけど・・・俺に何か用かな？」

「別に危害を加えるわけではない」

そのうちの男かしやべった

その男だけが浮いている

別におかしなところは外見にはない

ただ、強さというかそのオーラっぽいのが周りの男達と比べると違うものだ

その男が顔を見せる

「私はザアク・オルライト、この国『ミラゲイル』の誇り高き騎士の一人だ」

「ザアク・オルライト・・・大国ミラゲイルで一番の騎士と有名人じゃないか」

結構な大物じゃないか

「で、俺達に何か用ですか？」

「我が主である国王がここにはいないお嬢さんも含め、お二人に興味がありませんね」

ここになににきたか、なども含めて見ていたわけだ」

「別に直で聞きにくればいいじゃないか？」

「そんなことしたら君たちが無駄に騒がれてしまっただろうから」

「一応、気遣いというものだよ・・・」

ふうん・・・気遣いか・・・

「では、俺たちがそちらにお伺いしますか？」

めんどろなのは嫌いでね

それに、国王とやらが何故俺達を気にするのか知りたいし

「ふむ、それはありがたい
明日の朝に迎えをおくろう」

「ふむ、次はコソコソするのではなくちゃんと会って
腹の探りあいでもしますかね、まあ俺は頭が悪いから無理ですけど」

「私も考えるのはあまり好きではないさ、君の提案にはとても感謝
してるよ

では、明日」

ザアクという男はそういつて建物を飛び降りる
そちらに行つて下を見してみるがもうどこにも人はいない
部下らしき男達も同様にいなくなる

「なんかめんどくさそう・・・」
俺のうんざりとした声が回りに響くだけだ

番外編 んゝ．．．（後書き）

なにやら今回は微妙な気もします

いつも微妙なのですが

さらに微妙な気が．．．

たぶんおふざけが少なかったからでしょうかな．．．

うあああああゝ！！

疲れたゝゝ

頑張つてふざけますb

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

番外編 勇者様 + (前書き)

ねむい) (つ、)

番外編 勇者様+

「……眠い」

しょうがなく目をこすりながらおきる俺

「シャキつとしなよ、徹夜」

目の前では美月はもうシャキつとしている

朝の弱い俺と朝に強い美月

なにやら王様からの迎えが来る、というのはもう伝えてあるので
美月はそれなりに服をちゃんとした服装にしている

ちなみに俺はいつもどおりだ

別に俺は有名じゃない筈だから関係ないし

冒険者である俺にとってこれが正装だ

……といういい訳をしている

他の服も持つてるけどあまり変わらないからね

「めんどうだあゝ……」

「自分で勝手に行つて勝手に決めてきた癖によく言うね

私には相談もしてくれないし……」

なにやらむくれている美月

「いやいやいや、わざわざどうでもいいことで頭を痛くさせなくて
もいいじゃないか

俺なりの気遣いだよ、気遣い」

……といういい訳をしておく

「……へえ」

なにやらジト目の美月
信じてないよ・・・本当だよ・・・たぶん

「ん、このコートも飽きてきたなあ・・・」
異世界に着てからいつも使ってるコート
闇をまとわせて暗闇に紛れる能力もあるコート
でも・・・いい加減に飽きてきた
別に服装にこだわりがあるわけではないが、他にも着たいときが時々ある

「じゃ、じゃあ今度私と買い物に行こうッ?」
なにやら美月が凄い勢いで来る

「別にいいが・・・」

「よぉ、そのときにはリヤナさんに買って貰ったので
がんばるぞぉ!!」
何をそんなに頑張ろうとしてるんですか?
あと、リヤナの使った金は全て俺のですぞ?
あの人は俺の金をいっぱい使ったんですよ?
あのクソ野郎・・・

その時、ドアがノックされて宿の主人が顔を見せた
どうやら「迎え」というやつが来たらしい
宿の主人はいきなりの騎士の出現により混乱気味だ
いや、「出現」という言葉がおかしいことはわかりますよ?
でも俺に取ったら面倒事を持ち込んでくるやつはモンスターと同じ
です

だから、出現といったのだ
ちなみにそれには美月も入ってたりする

「いてっ!!」

いきなり美月に殴られた

あまり力を入れた一撃ではなかったが、不意打ちなので驚いた

「今私に失礼な事考えたでしょ?」

「いえいえ、そんなわけではないでございますヨ」
「なんでこんなに鋭いんだツ!？」

「言葉遣いが可笑しくなってるよ?」
「ひいッ!? 怖い!!」

「と、とりあえず行くぞ!!」

「・・・そうだね」

なにやら話をそらされた事に怒ってる感じの美月だが

とりあえず行かないとね!! 人を待たせるの悪いじゃん!!

ちなみに、いつもの俺なら人を待たせても気にしない。時と場合
ってやつだ

「おはよう、徹夜くん」

そこにいたのはザアク・オルライト

というか俺、名前教えてないよ?・・・どうせ調べたんだろうな・・・

「ええ・・・迎えに来させるならわざわざ貴方じゃなくても・・・

俺のげっそりとした声

「いやいや、世界を救ってもらった方には私がするのが当然だと思
ってね」

そう答えてくる誇り高き騎士さま

「徹夜、この方は？」

美月が後ろからヒョイツと顔を見せて質問してくる

「・・・オルライト卿だよ」

「ふむ・・・この大国一の騎士として有名な・・・」

この人は昨日も言っていたが相当有名だ

実力はSSSS相当、戦った者は必ず破れ、いくつもの戦場で実力
を証明している。

「はじめまして、お美しい勇者様」

胸に手を当てて足を交差してる騎士さま

たしかこうというのが挨拶なんだよな

「ねえ！徹夜、聞いた？美しいだつてッ！！」

反応するのそこ？

別にお前の外見なら言われて当然だと思っぞ？

「徹夜も私にそれぐらい言っつといいよッ！！」

意味不明だ

「よかつたな」

とりあえず反応しておこう

「リアクションが薄いよッ！！ちゃんと反応してッ！！それに話が
噛み合ってないし！！」

とりあえず無視

「・・・それではこの馬車に乗っていただく」

そういつてザアクが俺達に乗るように促す

この馬車・・・豪華だ」

売ったら何円になるんだろう・・・

とりあえず馬車に乗ろう

そして俺と美月、最後にザアクが乗ると馬車が動き出す

「国王の前では礼儀良くするのが普通だと思っが

俺はどうすればいいのかわからないぞ・・・？」

「え、徹夜そんなこともわからないの？」

・・・実は私もわからなかつたりするけどね」

だったらさっきの俺を馬鹿にしたような発言はなんだ？

「ふむ、別にそんなことはしなくてもよいと思う

相手は国王だが、あなた方は世界を救った方々だ、対等かそれ以上に扱われるはずだ」

そんなことをいう騎士さん

「対等かそれ以上・・・それにしても見張られたりして失礼な事されただけだな」

「疑われたくないのならば、一回国王に謁見でもすればよかつただろう」

終戦後に国を潰すと宣言した勇者が現れるのだ、当然警戒するだろう」

騎士さまの発言、終戦後にわざわざ戦場で美月が宣言したのだ

まあ、警戒されてもおかしくはないと思う

「それはそれは・・・すまないと思っている」
反論のしようがない・・・

「うむ、・・・国王は何を考えてるかわからない方だ、失礼と思われることも言うかもしれないが、そこは見逃して欲しい」
なにやらフレンドリーな騎士さんですな
そして自らの主をそんな風に言うとは・・・なんとも・・・

「徹夜が失礼な事をしないか心配だけどね」

美月の言葉

「うむ、言ってる」

俺の同意、俺自身心配になってるのだから反論のしようがない

「そこは否定するべきなのは・・・？」

騎士さまがなにか言ってるが俺には関係ねえ！！

だって、しようがないじゃないかッ！！

俺なんだものッ！！

サラスムの国王にはイラつく、って言ったほどの俺だものッ！！

「むう、もう到着しました、ではついてきてください」

そういつて降りる騎士さま・・・もといザアクさん

スタスタと歩いていき、それについていく俺と美月

そして、大きな扉の前に着いた

「陛下、連れてまいりました」

ザアクさんが口を開く

『うむ、入ってよいぞ』

そんな声が聞こえる

するとザアクさんが入っていくので俺達も入っていく
中は他の国同様広い場所で、豪華だ

いつも思っけどよくこんな金をかけようと思うよ

そして王様が・・・

「ふむ、これが噂の勇者さま+ か・・・」

まさかの第一声だよ、ヒヤッホオーイ!!

ぶち殺すぞ、お前・・・

「・・・ブツブツ） ってなんだよ、マジで殺すぞ、ゴルアア!!」

「・・・（ちょっと!! 落ち着いて徹夜!! 殺すのはダメだ!!」
とめてくれるな、美月よ

俺にはやらねばならぬことがある・・・

あのクソ国王の首を180度回さなくちゃいけない!!

「徹夜どの、落ち着いてツ!! 陛下も第一声がそれとは、なんなん
ですかッ!!」

ザアクさんが慌てて俺を羽交い絞めにしながら国王に叫んでいる

「えゝ・・・だつてめんどいではないか、省けるところは省こうで
はないか」

こオの、クソジジイイイイイイイイ!!

さらに力を込める俺、美月もザアクさんも俺に引きづられてる

「ま、まあ・・・そんな冗談はおいといて、おぬしらは何故この国
に?」

冗談だったら謝罪の言葉でも言えやアアアアアアアアアアア!!

ザアクさんの言葉

ふむふむ・・・そうですね

「・・・美月、頑張れ」

「そのときは徹夜も強制的に手伝ってもらおうからね」

「え〜・・・」

てな感じの会話があり

そこで国王とやらが少しひらめいた顔を見せる

「勇者様の力を見せて欲しいのだが、良いか？」

国王の言葉

「場所はここがかまわない、相手はザアクが相手をする」
あれ、決定事項？

「すみませんが・・・今、私は剣を持ってなくて」

美月は宿に武器を置いてきてたな、わざわざ国王に会うのに武器は失礼だろう、と思ったのだろう

ちなみに美月はこの頃、光の精霊が宿っているロングソードを愛用している

「ふむ、ちなみにこの王の間は魔法で強化されているから

少し暴れても問題はないのだが・・・勇者様は本当に武器を持ってないようだ・・・」

そこで国王は俺のほうを向いた
・・・んんん？

「では が・・・なッ!？」

そこで国王が驚いた声をあげる

国王の動体視力では「」といった瞬間に俺が消えて

当然、目の前でザアクがロングソードで俺の剣を防いでいた

「」って言うなやア！！」

俺の怒りの言葉

「いきなり斬りかかるのは失礼だろう・・・一応、これでも国王だぞ」

ザアクさんの言葉

国王のまえに「一応」てつけるあなたも失礼だと思います

「じゃあ・・・これから国王を襲います・・・おし、これでOK」

「いや、教えればいい、ってわけではないぞ」

俺の言葉にまたツツコンでくる、文句が多いなコンチクショオ！！

「じゃあ、どうすればいいんだアア！！」

そう叫びながら両手に一本ずつ持った剣を凄い速さで振るう

「最初から攻撃しなければいいッ！！」

ザアクさんはそれに返答しながら

片手に持った盾ともう一方の手に持ったロングソードでそれを防ぐ

さすがはこの大国一と呼ばれる騎士

本気でやってるわけじゃないが相当強いといえる

王様の目の前で火花が多く散り、それを見て王様は驚いている

「ふッ！！」

ザアクが盾を俺におもいきりぶつける

魔法で補強しているのだらう、凄い力で押され数？下がる

それに追撃してくるザアク

「ふんッ!!」

ザアクが盾をもったほうの手でパンチをするように繰り出す

「はアッ!!」

俺はまったく何もない素の拳を放つ

盾と拳がぶつかり合い

ザアクがふつとばされた

吹っ飛ばされても別に体勢を崩すわけではなく、綺麗に着地するザアク

「魔法で補強しているというのに押されるとは・・・なんというパワー・・・」

ザアクの言葉・・・魔王には力比べで負けましたけどね

「まだまだ本気じゃないですよ。本気でやったら少し危ないんでね」
俺の言葉

「本気が見てみたいものだ・・・」

ふむ・・・じゃあほんの一瞬だけやってやりますか!!

俺は動き、ザアクも動く。俺は剣をしまい拳を構え、放つ

それを見たザアクは驚きをあらわすが、盾を目の前に構える
いつもとかわらず盾で防御することを選んだらしい、

盾で防御した所をカウンターの剣で一斬りだろう

そして・・・

俺の拳が盾を砕いた

次の瞬間にはザアクの首辺りをつかんでいる俺

俺の力だと簡単に首の骨を折れるだろう

「なッ!?!」

驚きをあらわにするザアク

「勝負ありかな?」

俺はニヤニヤしながら言っただけ

それに対して剣を地面に突き刺し、降参のポーズをするザアク
ふむ・・・勝ちましたな

「・・・ただの ではなかったか」

王様のそんな言葉

次の瞬間に俺は王様の近くに行こうとして

それを美月が羽交い絞めにしてた

「こおんの、クソやろおおおおおおおおお!?!」
俺って不敬罪

番外編 勇者様 + (後書き)

番外編第三話です

さんがめちやくちやキレてましたね！

番外編は一体何話になるのやら・・・

ふう・・・この頃あとがきに書くことがないんですよ

だから、今までにも何回もあつたように

俺のどうでもいい情報が載せられるわけです

腹を壊しまくった中学校生活、などのものです

正直どうでもいいことですが

どうにか後書きも増やそうとしているので

結果的に無駄な情報が増えていくわけです

まあ、どうか生暖かい目で許してやってください

というわけで、今回もどうでもいい情報です

自分、去年の夏に砂糖がたくさんついたおやつを食べたのです
自分の部屋で食べたのですが

馬鹿なことをしました、それをこぼしてしまったのです

掃除したのですが、俺の部屋に蟻が出現するように・・・

正直、嫌です

蟻は好きですけど俺の部屋まで来なくていいです

なので、蟻を見つけたら殺しまくったわけです

数はわかりませんが、それぐらい殺しました

・・・

そして季節が変わり冬になります、当然蟻はもういません
なのですが・・・殺しすぎたせいでしょう

虫なんていないのに、視界の隅で虫が動いてるように見えてしま
います

毎回それに反応して……

「ん？虫だ……あれ？見間違いか……」という感じです
俺は呪われたのでしょうか？

まあ、基本的に呪いだ、幽霊だ、などは信じないので

(信じなくてもTVで見るのは怖いです)

ありえないと思うのですが、毎回そのたびに溜息が出ます

あゝ……めっちゃどうでもいいですな！！(だったら書くなって
話です

好きなキャラ送って

もう終わり近いよ

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

番外編 手紙（前書き）

・・・

んっ・・・

ぶはっ！！息止めるの苦しいッ！！

・・・というのは嘘で、実は鼻で吸ってたりする

見直してきてないので誤字がいつもより多いと思います

番外編 手紙

今は馬車の中、大国の王都を出てドラゲイルのほうに向かっているドラゲイルでは、なにやら戦争の途中で大きな魚介類の材料を手に入れたので

そのパーティー（という名の大騒ぎ）をやるらしい
美月はそれなりにドレスとか着るのではないのだろうか？
一応、他の国からのお偉いさんも来るらしい

・・・ちなみに俺はバイトをするつもりだ
たこ焼きを焼きまくる んゝ・・・だって、たこ焼き作るのって面白くありませんか？

くるつと回すのなんて、もういつも吹き出しますよ
ちなみに俺は料理はまあまあだ、興味の持った料理には挑戦するがほとんどは興味ないのでやらない
まあ、とりあえずこの話は終わりにしよう

「・・・徹夜、ちゃんと届いたと思う？」
美月がそんなことを聞いてきた

「んゝ、ちゃんと届くって王様は言ってたんだし大丈夫じゃないか？」

俺の返答

「そうだよね、絶対届くよね・・・」
すこしブルーな空気だ、うむゝ・・・

「届く届く、手紙は絶対届いてるよ」
そんな俺の声が響いた

+
+

これは、数ヶ月前

徹夜と美月の物語が始まる前のお話し

そこには高校があった

その高校は他の高校の学生から見るとチート学校と呼ばれるような学校

全ての部が全国にいけるような実力を持っている

成績は下のほうでも十分有名な会社に勤められるような学校だ

しかし、その学校は、一〜二年前まではただの普通の高校だった

何故その高校はそこまで上がったのか、そんな疑問が残るだろう

その答えは二人の男女の生徒

1021

女子生徒はその外見、成績、運動神経・・・それらが全てチート並み

なにより、他の人間の心を虜にしまっような女性・・・つまり

美月だ

ほぼ全ての学生に尊敬されている

そしてもう一人の男子生徒は外見、運動神経、それは良いと言えるが

成績はその高校ですっと中ぐらいにいたので、優秀といえは優秀だが

それほど目立つ成績ではない

ただ・・・美月の幼馴染というほぼ全生徒が望むようなポジションにいる

・・・つまり徹夜である

ほぼ全ての学生に嫉妬されている

なぜその二人が関係しているのか

それは全生徒が美月に自分を見てもらえるように優秀になろうと努力した

そして全生徒が徹夜をボコボコにできるように優秀に、そして残酷になった

その結果が優秀な高校というわけだ

そしてその学校で・・・

「……だあああああああああああッ！！」「」

三人の男子生徒が木刀を振り上げ、徹夜・・・つまり俺に向けて上から下に振り下ろす

それを俺は軽く避けて間髪いれずに鳩尾に俺の拳を叩き込む

「がはっ……！！」「くそ……」「この野郎……ッ！！」

そんな声をあげながら倒れる三人

「……はア、めんどくさい」

俺は溜息をついて歩き出す

今日は水曜日、そしてその放課後だ。

俺が美月ファンクラブとの交渉で週の休日または自宅の時のほか月と金は襲わないようにしてある

今日は水曜日、つまりほぼ全ての学生が俺を襲ってくる日だ

これも俺が交渉で決めた

なにやらこの頃、生徒の強さが上がってきてるがまだまだ

指一本でも勝てる程度だ

まあ、一部の生徒は相当強いのだが・・・

「まったく……なんでこんなことを高校生になってまでしてるんだ……」

俺の呟き

いい加減に美月病から卒業しろってんだ
ちなみに、美月病てのは簡単に言つと、美月に魅了されて俺を襲っ
てくることだ
まあ、卒業なんて無理だろうな

「おつすゝ、今日も襲われてんの〜？」

話しかけてきたのは天竜てんりゅう 瑞穂みずほ

見た目は整った顔立ちに綺麗と言える顔
完全に女のものなのだが・・・

「お前、いま俺の事を女とか思わなかったか？」

こいつは男だ

女顔なのがコンプレックスの完全に何かの主人公になれそうな奴
勘が鋭いのも女の特徴といえる、だが何度も言うように男だ

「大変だな、徹夜は」

その瑞穂の横にいるのはThe イケメン野郎

いや、ここは名前を言うべきか、総帥そうすい 和馬かずま

この学校でベスト3にも入るイケメンだ

「なんだよ、お似合いカップルかよ・・・」

俺の言葉

この2人はこの高校で数少ない美月病にかかってない人間でもある

「そんな、俺に瑞穂はもつたいないよ」

申し訳なさそうな和馬

「俺は男だア！！和馬・・・お前調子にのんなよ？ボコるぞ？

それよりこんなとこでふざけてていいのか？追われてんだろ」

瑞穂は俺にニタニタとしながら言ってくる

「うつせえ、しゃべりかけんなリア充がア!!!」
高校生になってまでいるんな奴に追われる苦しみを知らないクソ野郎めッ!!

俺だって追われてなかったらリアルに充実できたわッ!!

「「徹夜にリア充とか言われたくないな、軽く嫌味な気がする」」
そんな言葉を2人でハモっていた

「は？　なんで俺が言っちゃダメなんだ？」
正直意味わからんよ

「だから美月は可愛そうなんだよ・・・」
瑞穂の言葉

「その鈍さはどうにかしたほうがいいと思うぞ、徹夜」
和馬の言葉

ん〜・・・？　どどういう意味だ？

「んじゃ、俺達カラオケ行くんだ・・・頑張ってくれ」
瑞穂の言葉

「なにやら科学部が変な準備してたから気をつけるよ」
和馬の忠告

「うむ、わかった気をつけておく
じゃあな、お似合いカップル達よ!!!・・・へぶっ」
俺の言葉が終った瞬間に瑞穂がカバンで殴ってきた
瑞穂はケンカは激強だ、俺には劣るが

ということでは歩き出す俺
むむ、今日も暇ですな、交渉で決めた時間は5:00
いまは4:30・・・まだ時間があるな

と、その時

視界の端の学校の屋上のほうでキラリと光るものがあった
そして風を切る音

「むっ!？」

首を横に振ると、そこを何かが通過する
それを確認してみると矢だ、アーチェリーで放たれる矢だ
うわあ・・・まさかの狙撃
屋上には何人かの学生が見える

次々と放たれる矢

それを俺はポツケに入れといたシャーペンで全て叩き落とす
間違っって手に刺さったら怖いです

テキトウに足元にあった小石を拾い、それを目標めがけて投げる
石ころ一つが確実に生徒一人ずつの眉間にぶち当たる

そして、もう一つずつアーチェリーを壊すように的を絞って投げ狙撃ができないようにする。

ちなみに、弁償をする気はない

ガサリ・・・と背中の中で音がして、またしても風を切る音
完全なる殺意

「・・・つとツ!!」

慌ててしゃがむと頭上を光る何かが通過していった

「チツ!!しくじったか・・・」

そんな声、それは女性
俺は後ろを向く

「うわぁ〜・・・あんたですか」

目の前の女性は全国大会に行くような女子剣道部の部長

そして、いつも本物の刀をもってくる狂ってる女性

名前は知らない

「本気でやるのが私流だ」

そういつて走ってくる女性

うわぁ〜、ここに殺人鬼がいるよ、助けて〜

相手が振るってくる刀を懐から出したカッターで全てを防ぐ

いつもは持ち歩かないのだが水曜日だけは別だ

「ふっ!!」

その声と共にカッターで刀を上弾き

女性の足を払い、転倒させる

「きゃあッ!!」

そんな悲鳴を上げる女性

「まだまだ修行が足りませぬ、ってな、ワハハハハハハハ!!」

高笑いを上げながら逃げる俺

正直、刀相手にカッターは怖い

「次こそはかつからなアアアアアアア!!」

そんな声が聞こえた

この人は美月が目的というよりも俺を倒す事を目的にしてる女性でもある

一番厄介な奴だ

そして数分走り・・・

「ターゲット、発見！！ウテェ！！」

そんな言葉が横から聞こえた

そちらをすばやく見てみると、目の前は光で一色

多分、前にも使ってきたのだがミサイルのようなものだ

ミサイルをそのまま使つとイメージがわるいので花火のように光る仕組みにしてあるらしい

ようするに科学部のやつらだ

「フハハハハハハハハハハ！！甘い、甘すぎるわアアアア！！」

そんなふざけた声をあげながらその光ってるミサイルを全て避ける俺避けながら着実に近づいて行く俺

その様子に焦りを見せる科学部の奴ら

「・・・アレを使え、最終兵器を使っんだ」

そんな声が響き

機械音がすぐに響いてきた

なんだ？

「おわぁッ！！!?」

なにやら変な大きなものが迫ってきたのでそれを避ける

「クハハハハハハハハッ！！見たか、景山徹夜！！」

これが最終兵器だア！！筋力、スピード、機動性、全てにおいて人間の数倍の性能だ！！」

そんな声、その声の主は機械

「なにやら性能も外見もグレードダウンしているが・・・

いつからこの高校は魔術と科学が交差して物語が始まったんだ？」

完全にパスワードスーツだ、見た目がしょぼいけどね・・・

『潰れて死ぬのだ、景山 徹夜!!』

そんなことを言いながら突っ込んでくる機械

結構速く、短い距離だったのですぐ目の前にくる

「うっせえんだよ!!」

その機械を一蹴りで壊した

その後は面倒だったから相手しなかったが、ずっと科学部は泣いてました

たしか、科学部全員でお金を出し合って作ったものらしい
だったらこんな事に使うなっこの

「あ!! 徹夜、見つけた!!」

そんな声が聞こえた

その言葉を聞いた瞬間に俺は今までの行動とは異なり
すぐに逃げの姿勢に入る

だが、俺の腕はその女性に捕まった

「帰るよ、徹夜。いつまでも遊んでないで!!」

つまり美月だ

「お前のせいで俺はこんな目にあっただぞ!!」

「はいはい、そうだね」

「こいつの反応うぜえ!!」

いつもこいつに勝てないわけである

そして引きづられて行った俺

それが数十日前

美月と徹夜が目の前で消えるのを見た美月ファンクラブ一同は
すぐに騒ぎ出した

それを聞いた警察や美月と徹夜の両親などは
さすがに信じることはできなかったがいつまで待っても帰ってくる
ことがないので

さすがに焦り、警察に動いてもらうことになった

それでも見つからない二人

違う世界にいつてしまっただけは見つけることなどできるわけないのだが
それを知る事のできない人にとっては関係ない

いろいろと噂がとびかった

2人（そのうち片方は自称凡人だが）はなにやら可笑しいほどの運
動神経をもっていたりなどしていたのでどこかの組織に拉致された、
などの学生ならよくありそうなものだ

拉致されたのは事実っぽいですが、組織だのなんだの話ではない

そして・・・

「こんにちはわ」

「こんにちはわ、おばさん」

そんな二人の声

「あら来てくれたの、瑞穂ちゃんに和馬くん」

「瑞穂？ちゃん」じゃないですよ、景山さん。瑞穂くんですよ」

そこは徹夜の家の玄関、家の中には美月の両親もいるようだ

徹夜のお母さんは昔とかわらず美人だった

「なんで警察に捜してもらったのやめたんですか？」

瑞穂が質問する。敬語になると完全に女にしか思えない

「ああ、そのことね。手紙が届いたのよ、徹夜から」

その言葉に驚く二人

今は夏休み直前、一ヶ月以上前に徹夜たちは消えた

なぜに今頃なのかわからない

「いつ届いたんですか？」

和馬の質問

「今朝ね、なんかシユピントッ！って光ったと思ったたら手紙があつて」

これは徹夜達が送ったものだ

魔法は徹夜達がいた元の世界からつれてくる専用だったので

それをどうにか応用した所、人間は無理だが小さなもの程度ならおくれるようにできたらしい、その結果が手紙だ

「徹夜も美月ちゃんも一緒に帰ってこれない場所にいるみたいなのよね……」

どこかを旅してるみたいだわ、2人で。フッフ・ついに新婚旅行ね……」

そついう問題じゃないと思うんだが、この人は昔からそうなので気にしない

瑞穂も和馬も徹夜と高校で会ったときからの付き合いなのでこれは知っていた

「まあ、美月ちゃんもいるみたいだし心配ない、ということだ

美月ちゃんの両親とも話を決定してね、搜索してもらったのをやめた

の

「それでいいんですか？寂しいんじゃない？」

瑞穂の質問

「んふ〜、子供ってのはいつかは親離れするものよ
早いか遅いか、会えるか会えないか、ただそれだけ」
ニコリと笑う徹夜のお母さん

「まあ、寂しいのは当たり前だけどね
生きてるんだつたら、いつかは会えるわよ・・・きつとね」
徹夜のお母さんはとても優しくそうな声だった

番外編 手紙（後書き）

今回は元の世界のお話でした

徹夜くんは、いつもどおり大暴れ

パワードスーツを着てみたいです

パワードスーツが出てくるラノベの主人公は

右手以外をパワードスーツで包めばいいと思います

そんな話はほっておこう

むあゝ・・・

完結させるぞ！！という鉄壁に意思、それはある感想・・・

「終ってほしくないですw」というもので

鉄壁ではなくゼリーののようにプルプルだということがわかりました

うわあゝ・・・魔王を倒したとこまではネタがなかったので

完結にするように番外編にしたんですよあゝゝ

でも・・・

番外編を書いている内に二つはネタができてしまう、という・・・

うわあゝゝ・・・

今まで完結なんだ、って書いてたけど・・・どうしよう

ええゝ・・・正直、ここまでちゃんと飽きないで書ける小説はない

と思う

でも・・・完結って書きまくってたよ、俺

みなさん、どう思います？（他人に任せてみるダメ芋な俺）

さてさて、今回もどうでもいい情報です

ふっふっふ・・・俺は家でボゝとしてるわけですが・・・

家の前の建物の屋根のところに住み着いてる鳩がうるせえ！！

小学生の頃から住み着いている鳩

子育ての季節（つまりこの頃）になるとポーポーうるさいです

しかも、毎年、子育ての季節はあるわけですので

どんどん数が増えていくのです

前に屋根に止まってる鳩の数を数えてみました

約30羽

超うざい！！糞とかいろいろ自分の家につけられると困るわけです

どうにか今まで威力の弱いエアガンで戦い続け

どうにか俺の家に近づけないようにしました

犠牲になったBB弾は数多く

だけでも、鳩は増えるばかり（まあ、殺せるわけないですけど）

カラスをも圧倒する鳩たち、前まではカラスのたまり場だった場所が

いつのまにか鳩のたまり場に・・・

ここらをめるヤクザな鳩たち

なんとも恐ろしい事か・・・

とりあえず今日は終了です

好きなキャラの送って～

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

見直してきてないのでいつもより多いと思います

番外編 たこ焼きクルクル (前書き)

・
・
・

科学的にアニメを考えると不可能ばかり
ウルトラマンを人間的に考えると

あの身長と体重だと足や腕が大根のように太くなるらしい

そんなウルトラマンが怪獣を倒してる姿を想像するのは
なんか嫌だ

番外編 たこ焼きクルクル

「くるつとな・・・」

金属の針でたこ焼きになるものを回す

只今絶賛バイト中の俺

美月はいろいろと連れまわされている

「ほれ、くるつと、くるつくるつとぐるんつとな・・・無駄に多いんじゃボケエー!!」

俺の周りには山となっているたこ焼きの具材

何だ、この状況はツ!!

クラーケンのタコバージヨンのほうを焼くなんて聞いてなかったぞ
こんちくしょうツ!!

と・・・まあ、こんな感じで俺は今ドラゲイルにいる

ここは城の会場・・・というか会場ってよりも軽く祭りっぽい

ちなみにドラゲイル王都全体でも祭りみたいになってる

イカとかタコとかいっぱいあるらしい

「一パックもらいたい・・・」

そんな言葉

「あいよツ!!・・・あれ?」

ノリノリな俺だが目の前の人物には少し驚いた

「黙って一パックよこしなさい」

こんなこと言うてるのは黒髪黒い肌の女性

そして、実力では魔族の中でトップ・・・つまりリーシ・トルウマ
アだ

「よし、見なかったことに・・・」

「何故そこで見なかった事にするのかわからないッ!!」
大声で怒鳴られた

だつてさく・・・前に一回戦つた人ですよ
あまりしゃべりづらいじゃないですか
と、そんな所に・・・

「チツ・・・お姉さまじゃないのか・・・」

そんな声が聞こえた

ひよこりと顔を出す少女・・・ミルリアが現れた

「なんでお前らがここに・・・」

「こつという人間の国のお偉いさんが来るところに私たちが呼ばれた、
という事実が大切

戦争で戦力が結構削られたけど、ドラゲイルとかのバックがあると
ころを見せれば

なかなか手を出しづらくなる。ちなみに魔王を倒した二人の内の一
人の黒いのに

こつやつて話しかけているのもそついった事情によるもの」

リーシがながながと説明してくれた

ふくむ、いろいろとめんどくさそう

てか「黒いの」て俺のことか・・・？

「なんでリヤナお姉さまじゃないんだ・・・」

ミルリアのぼやきは無視しよう

ほら、そのの姉!!暴れるな!!俺の体に乗っ取るうとするな!!

「はいはい、これ・・・んじゃ、さよなら
とりあえず一パック渡してさよならの挨拶

「・・・なにやら無愛想だな、黒いの。失礼だと思わないのかい？」
リーシがこちらをジト目で見ながらそんなことを言ってくる
ちなみにたこ焼きはもう食べている

「ていうか、なんかしゃべり方変わってる気がするんだが」

「私のプライベートはこんな感じだ、何か悪いか」

「いや、そんなわけじゃ」

「あくまで仕事では女っぽくなっておこうとしているのだよ」

「普通逆じゃね・・・？」

「気にするな」

そこは気にしたほうがいいと思う
んぐ、やっぱり（俺も含めて）ずれている人が多いと思う
ちなみに、ミルリアはリヤナさんのことで騒いでいる
だが気にしない

「んで、なんでまだここにいんだよ？俺は一パック渡したぞ」

「話す相手がいらないからなんとなく、だ」

「まあ、近づこうとする人はいないだろうな」
相手は魔族だし、今の時点では怖いだろう

「うむ、だからここにいる」

「……」

黙ったまま手を動かしたこ焼きを焼き続ける

「……」

焼き続ける

「……」

焼き続ける

「何か話せ」

なにやら要求してくるリーシ

「じゃあ、話題はお前がふれッ!」

なんかこの人は特にめんどくさい気がする

「ふむ、ん〜……ん〜……ん〜……」

唸ってるリーシ

「……」

手を動かしながらそれを見ている俺

「……なにか話題を出せ」

「ホントめんどくせえな、お前!」

つい怒鳴ってしまった

自分から話題を出せないのならしゃべろつとするな、て感じた

「……」

ジッと見てくるリーシ、完全に話題待ちだ

「……」

それでも黙る俺

「……」

リーシの視線、内容はさっきと同じだ

「……少し待て、話題を探す」

負けた……完敗だ……

この俺が根負けするだ……

「ふむふむ」

相槌をうつリーシ、なぜここで相打ちを打つ必要があるのかわからない

人を馬鹿にしているのか、と疑問に思うほどのタイミングだ

「……そういえば、魔界は今どうなってるんだ？」

よし、これは結構続きそうな話題だッ！！

これで少しの間は大丈夫だろう、ふっふっふ……俺を甘く見るなよッ！！

「どうなるかわからないから戦艦の製造を進めているな

新しく軍も作っている、あくまで自治のためのものだ、勇者達の言っていた軍……

確か自衛隊だったか？それを作ってるどころだ

そして、お前らが魔王城の柱……ああ、お前たちは知らなかったな、あの柱は

魔界のエネルギーを貯めていたものだから、それが原因で地が死んでいたのだ

それを、お前たちが壊したおかげでそのエネルギーが大地をめぐり、ちゃんとしたものになってきた、すぐに良い作物がとれるだろう、あとは……ん……ん……お、そうだった

この頃、ジールクとルクライルが二人で魔界全域を調査してる所だいろいろと直すために調査中だ……うむ……

……ん……と……

……よし、ほかに話題を出せ」

「お前と話してんの本当に嫌だッ!!」

なんで一気に言うんだよ!!徐々にゆっくり俺と会話するように言えよッ!!

俺とコミュニケーションをとるつもりねえだろッ!!」

何故だろう、何故俺はツツコミ側にまわってるのだろうか?

いつも俺がふざける立場なのに……なんでまじめちゃんになるんだらうか?

「うむ、正直なところ黒いのはコミュニケーションはとりたくない正直すぎだ、このやろっ

「だったら、俺のところにくんナッ!!これでもバイト中だぞ!!」
こいつ俺に嫌がらせをしにきたのだらうか?

「そういえば、さつきから気にしていたのだが……それ面白そうじゃないか?

私にもやらせる」

「……」

なにこの人、なんでこんなに上から目線なの?

可笑しいよ、絶対におかしいよ!!

「ふむ、どれどれ」

俺がそんな事を考えてるうちにリーシが俺の前にわりこんできて
焼き始めた

「んん・・・形が崩れるな・・・」

悪戦苦闘のリーシ

「もつと焼いてからひっくり返せよ・・・」
軽く液体状態のたこ焼きをひっくり返すリーシさんにそれを指摘す
ると

納得したのか少し時間を置いてからひっくり返す
さっきまでドロドロベチャベチャだったのが、
俺の言葉どおりにして、きれいな球体になる

「ほほお・・・」

リーシさんがそんなことを言いながら夢中になっている
今まで一人でやってたのである意味楽になった
パックとかに入れるのも自分でやっていたので
手が少ないと思ってたところだ
なのでパックに入れてソースなどをかける作業に移る

「五パックくださいな」

そんな声が聞こえた

そつちを見てみると美月がいる

「テツヤ、ひさしぶり」

そんな声、美月の横にはルミがいた
白竜の竜人の少女だ

「おっす、ルミ」

それに返答する俺

「そういえば徹夜、私達にイリル様が用があるんだって」
美月がそんなことを言ってきた

「ん？ そうなのか・・・？ でも少し離れられないし・・・
あ、そうだ。ミルリア、お前、リーシの手伝いしとけ」

「え〜・・・」

「一人で仕事ができる妹を見たら、リヤナさんも大喜びだな」
ちよつとしたエサをまいてみる

「・・・ やつてあげるよ、しょうがないなあ、まったくう」
釣れた！！・・・ ということで俺は離れることに
そして歩き、イリルさんは人気の少ない所にいた
というかなぜルミはついてきてるんだ？
嬉しそうに笑いながら俺の近くにるのは何故だ？

「来ましたね、お二人とも」
イリルさんがこつちを見て言う

「それで、用とは？」

「いや、ただの質問なんですけどね。二人は旅をしていたようです
から
なにか噂でも聞いてないかな、と」

「????？」

「墮天使のことなにか聞いてませんか？」

イリルさんのその質問

墮天使……？

「あれ、それはイリルさんが倒したのでは？」

美月の返答……というか問い

あ、思い出した。戦争中びイリルさんにケンカ売って

『ドラゴン・ブレス竜の息吹』で吹き飛ばされたらしいやつだ

「それがですね、もう一人いた悪魔を盾にして生き残っているみたいなのですよ

海中に隠れられて見つけることができませんでした。いくら私でもなにかを捜す能力を持つてるわけじゃないですから」

「ふむ……めんどくさそうですね、一応旅の途中で噂とか集めておきますよ、または捜しておきます」

「ありがとうございます……あ、ちょうどいいのでヒドラも捜しといてくれませんか？」

「ヒドラ？」

美月の質問

「ええ、何百年か前になんかワクワクしたから旅に出る、ていう理由で出て行った

馬鹿な子がいるわけで……その子が帰ってこないわけです

多分迷子になりましたね」

なんという……

「余裕があったら捜しときます」

「お願いしますね」

「よし・・・話も終ったみたいだし、たこ焼きを食べよう！！テツヤ」

ルミがいきなり大声で言うてくる

それが目的！？・・・俺、バイトなんだけどツ！！

まあ、そんな感じで話が進み

たこ焼きを焼くのに夢中なリーシ

大食い勝負をするルミとイルリヤ、

・・・などいろいろと珍しいものが見れたわけである

結構楽しかった

番外編 たこ焼きクルクル (後書き)

この頃、いろいろと迷ってます

番外編が終わったら新章としてこのままスタートさせるか

この小説は終わりにして、新シリーズとして

徹夜くんが主人公の新しい続きの小説をまた新しく作り直すか・・・

お悩み中な俺

どうでもいい情報も尽きてきたw

まあ、ありすぎて俺が変人みたいで嫌なのだが・・・

(軽く変人だけどね、幻覚みたいなの見えるときあるし)

ちなみに、この小説の番外編

番外編の第一話の「幼き頃の思い出」以外は

全て、布石の嵐になっております

本当は新しい小説に使おうと思っていたのですが

新しいのと「俺は闇」を合併する事に

なので、今までと変わらず徹夜くん視点というわけです

とりあえず今日はこれで終わらせていただきます

好きなキャラ送って〜

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

番外編　これで最後です（前書き）

これが番外編の最後でございます
話が急ですけど、少し我慢してください

番外編 これが最後です

・・・記憶がない

ドラゲイルも離れ、三日がたち

ドラゲイルを離れた二日後になんか豪華な船に乗った

船に乗ったときの夜、たまたま乗り合わせたおじさんたちと

お酒でどっちが多く飲めるかバトルに・・・

俺の圧勝だったはずだ・・・そして何故かそこで記憶がぷつぷり多分、俺のことだから寝たのだろう

そして寝たのは、俺が借りている一人専用の部屋ではなく

酒を飲んでいた場所だが、俺は一人専用の部屋にうつされていた

もう一回、言おう

記憶がない、なので何でこんな状況なのか俺にはわからない

何故だ、何故なのだ

何故俺が寝ている横で美月が寝ているのだろうか

「何故だあああああああああああああああああッ!!」

つい叫んでしまう俺

うわああああ、何故なんだああああああああああ!!

「んん・・・てつや?」

そんな言葉をいいながらおきる美月

「・・・この状況はなんでせうか?」

引きつった笑みを浮かべる俺

「え?何の話?」

きよとんとしてる美月

「だからなんでお前がここにいるんだよ!!」

「あ、その事かあ」

ほかに何があるっ!!

「いやね、昨日、徹夜が寝ちゃったから

私が担いで連れてきてあげたんだよ・・・で、私も寝た」

「あはは、そうなのか、俺を連れてきてありがとな・・・

それでお前もここで寝てる意味がわからねえんだよ、このヤロオッ

!!」

叫ぶ俺

「なんとなく?」

「死ね」

なんとなくでこんなことすんな!!

「出来心?」

「うぜえ」

超うぜえ!!

「徹夜が好きだから」

「ぐはあっ!!」

俺、吐血ッ!!

「え、いきなり何ッ!？」

驚く美月

「なんで・・・も・・・ないです」

虫の息の俺

・・・そんな朝だった

というわけで島国のキョクトウについた

「ふうむ、これがキョクトウとやらですか」

美月の言葉

「これがキョクトウとやらですな」

俺の言葉

船を下りる、目の前には港

その港のある町を見てみると完全に日本に近い感じだ

船に乗り合わせたおじさんに聞いたのだが、キョクトウでは

騎士ではなくサムライがいるらしい

なんというか・・・日本に似すぎている

そして乗り合わせたおじさんに聞いた有名な観光スポットにいくわけだ

最初に行ったのは、金運、恋愛などさまざまなものに関わってるらしい

神社・・・ここまで一緒なのか

ちなみに俺は金運、美月は恋愛だそうだ

そして次に行ったのは、なんか1000年も立ち続けている大木
その大きさは相当でかい、見上げるほどでかい

「・・・あそこにロープを縛り付けて凄く長いブランコに乗ってみたいな」

ハイジみたいな感じがしたい」

美月のそんな言葉

まるでアプスの少女、ハイジか

ふむ、では言っておこう

「知ってるか、美月。アルスの少女、ハイジのあのブランコはな・

揺れる速度が時速120キロメートルの速さなんだってよ」

ハイジは実は筋肉マツチヨなわけである、

ジャットコースターと同等かそれ以上の速度、しがみついているのも辛いだろう

「・・・」

美月は黙っている

「ちなみに、降りるときには雲に乗って、みたいな感じだったらしいが

雲の上には乗れないので突き抜けると考えると、時速180キロメートルで飛んで

1000キロメートル以上飛んだ後に着地するらしいぞ

凄まじいよな、着地するのも一苦労だ」

できない事ではないと思う

「・・・」
美月は黙っている

「まあ、図書館で読んだ本に書いてあったことだけだな
・・・それに、うる覚えだから間違ってるかもしれないしな・・・」
とりあえず凄まじい速度なのは間違っではない
全て事実だ

「・・・徹夜に夢が壊された」

そんな美月の呟きだった

次は、違う観光スポットに行く途中だ
森の中を突き進み、町ではなく近くには村ぐらいしかないだろう
そんなところで

「むーっむーっ」

体と口を縄で縛られてじたばたしている女性を見つけた
・・・あれ？
とりあえず拘束を解く事に・・・

「ぶはあ〜・・・」
息を吸ってる女性

「これはなにが・・・？」
ついていけない俺の質問

「いやあ、助かりました。なんか生贄につかわれっちゃって」
なんだこの「生贄」という言葉に似合わないお気楽さは？

「なんの生贄なんですか？」

「というかなんで生贄になってるのかわかんねえし

本当に突然すぎて追いつけていけねえよ！！

どうにかしろよ、このクソ芋があああああああ！！

あれ、クソ芋って叫んだけど、クソ芋って誰だ？あれれ？おかしい
な・・・

「やまたのおろち八岐大蛇といういくつもの首を持った蛇が

私の生まれた村の近く・・・つまりここに出現しまして、だから昔か
らある

生贄、という方法を使ってとりあえずやってみたというわけで

・・・ちなみに私が二人目です」

へー、ソウナンデスカ

・・・む、久しぶりのカタコト言葉だ

よし、久しぶりにあれもやってみよう

ハハアーン！！・・・（ドヤ顔）

ふう・・・これも本当に久しぶりだ（一話を見てください）

わからないことがありますすぎてできなかつた

・・・うむ、現実逃避をやめて現実に戻ろう

「へえ・・・八岐大蛇かあ、見てみたいな」

美月の言葉

「んじゃ、ついでに討伐でもしてみますか」

神話のような話にしか聞かないモンスターと戦ってみたいものです

・・・と、その時、凄い音の足音が聞こえた

「ああつ！！キタツ！！」

そんなことを言っただけで逃げ出す女性

足音の方を見ている俺と美月

そしてそこから七つの首が出た

相当大きい

蛇・・・なのか？

というか今までの疑問が一つ

八岐大蛇というのはいくつもの首を持った蛇のはずだ

それなのに・・・なんで足音がするんだ？

その結果はすぐにわかり

七つの首の下に胴体があり、翼もあつた

「ヒドラだつ！！」

美月の叫び

「イリルさんがいつてたやつじゃね？」

俺のうんざりした言葉

「え？イリル様？それに僕を勘違いしないでヒドラって言うてくれ
たあ〜」

そんな軽い言葉が聞こえ

ヒドラが光つたと思つたら普通の人間の姿・・・白い髪の少年にな
つていた

え、えええ？何これ唐突すぎ・・・ありえん、ついていけねえ

「いやあ、迷っちゃってさあ〜、あはははは〜」

そんなことを言いながら俺の背中をバシバシと叩く
イリルさんの予想的中!!

「こっちこっち」

ヒドラは俺と美月に話す暇を与えずに連れて行った

というこどでついたのは洞窟

「それがさく、一人目の生贄って子が・・・」

ヒドラがそういつてる間に洞窟からある8歳ぐらい少女が出てきて
ヒドラの腰にしがみ付いていた

「この子でさく・・・この髪と目だと村に返すこともできないんだ
よね・・・」

その少女は黒髪、黒い目
勇者とかは別として

生まれつきの黒髪、黒目は不吉の象徴として扱われている
俺の場合だと「x新聞」のせいで不気味に思われなかったらしい

「むう」

俺の唸り

「ほほう」

美月のうなずき(?)

「・・・しかも、僕になついちやうし・・・ドラゲイルに帰りたい

からどうしようと思って」「

「一緒にいれば?」

俺の提案、正直めんどくさい

「・・・なんとという天才!」

こいつアホだ

「あ、でも・・・ドラゲイルの方向わからないし・・・」

「私が教えてあげる」

「・・・おお、なんとという親切!! 所謂いえば貴方たち誰?」

「景山 徹夜だ」

「内藤 美月」

「ふむ、勇者たちか」

名前を言っただけでわかるのっておかしくないですか?

ということとどりあえずドラゲイルの方向を教えてください

ヒドラとは1日話していた、

そして次の日には黒髪黒目の少女・・・ミイというらしいのだが

ミイと二人で歩いていった

なんだ、本当にこの唐突な流れは・・・

とりあえず、俺と美月はキョクトウを五日間ぐらい観光

久しぶりに米が食べられたので嬉しかった

そして今はまた海を渡り、キョクトウを離れ

馬車の中・・・

「・・・」

黙ってる俺

「スウ・・・スウ・・・」

眠ってる美月

俺が先に寝ようとしたのに美月が寝てしまい
どうにも寝づらくなってしまった

・・・横を見る俺、そこには美月の顔が・・・

「俺も美月のことが、す・・・好きだよ」

小声すぎて空白のように聞こえる言葉

「え？何？もう一回言って」
いきなり起きる美月

「なななな、何でおきてるんだ!？」

「もう一回言ってよ!！」

「もういやだッ!！」

まあ、そんな感じだった

番外編 これが最後です（後書き）

「「今までありがとうございましたあ〜!!」」
二人の声

徹夜「いや〜、一章の真の最終話だから俺と美月が特別にあとがきに出動というわけです」

美月「でもね、徹夜。今日は特別な人も出るわけ」

徹夜「特別な人？」

???「ぐわっはっはっはッ!!焼き芋の出動です!!」

徹夜「うわあ!!焼き芋のきぐるみを着た痛い人が現れた!!」

焼き芋「徹夜くん、そんなこと言わないで欲しい、これでも焼き芋だぞ」

美月「なんで焼き芋なのか、わからないけどね」

焼き芋「それは焼き芋だからさ」

徹夜「意味不明、とりあえずこれじゃあ進まないから話そう」

焼き芋「・・・」

徹夜「ん……？」

焼き芋「……」

美月「どうしたの？」

焼き芋「あ、俺って本当は人見知りなんで話せないです」

徹夜「だつたらなんで出てきたッ！！」

焼き芋「なんとなく」

徹夜「うぜえ！！こいつ、うぜえよ！！」

焼き芋「最初は人見知りでクラスメートに「静かだね」と言われるが最後のほうは「うるせえ！！」って言われます」

徹夜「そんなのどうでもいいんだよッ！！」

美月「話が全然進まない……」

焼き芋「ふう、話すのにも満足したし、二章のVTRを見てもらいましよう、じゃじゃ〜ん」

……つ「ビデオテープ」

徹夜「なんで今の時代にビデオテープ……」

焼き芋「俺のビデオテープのゴジラコレクションをだめしたDVDの社会への微々たる反抗だ」

美月「無駄な反抗だと思う」

徹夜「というか、DVDでも集めればいいだろ」

焼き芋「その頃にはゴジラはあまり見なかったからな」

徹夜「だったら、反抗する意味ねえだろ!!」

とりあえず、VTR・・・ドンツ!!

あの世界

そこに彼らはいた

「わあ、おいしそ」

子供が騒ぎ、おじいちゃんが焼く
だが・・・

「今までどおりだと思って、食べる側だと思つなよ・・・」
焼き芋たちが・・・

「俺たちが・・・食ってやるッ!」
牙をむく!!

プツンッ...

徹夜「はい、ドォーローン!」

焼き芋「ああああ、ビデオテープが壊されたああ!」

徹夜「完全にちげえだろ!!なんで焼き芋が牙をむくんだよ!」

焼き芋「でも、気にならない?」

徹夜「気にならねえし!!めっちゃクソの香りがしたし!」

焼き芋「はア・・・本当はこっちだよ」

・・・つ「DVD」

徹夜「おい・・・社会への反抗はどうした・・・めっさDVDだぞ」

焼き芋「使えるものは使う」

美月「話が進まないって・・・」

とりあえずVTR・・・ドンッ

そこは異世界

そこに男女のカップル・・・DVDを壊されそうなので、ただの男
女がいた

「ん？たこ焼き？」

この男の発言は関係ない、受け流すように
これは魔王を倒した後の世界・・・ッ！！

「お、お前は・・・」

強敵、旧友、キモイ芋、いろいろなものが現れ

「クハハハハッハハ・・・」

ただ笑ってるだけの敵はスルーして・・・

「徹夜、私にキスして」

「は・・・？」

なんていう、恋愛の方向には進まず

「無駄無駄無駄無駄アアア!!」

いつもとかかわらず、主人公の大暴れ

そんな、お話だ・・・

プツンッ…

徹夜「内容がうすっ!!」

焼き芋「あまりいいのが思いつかなかった(ゲッ)」

美月「そこで親指を立てる意味がわからない・・・」

焼き芋「まあ、そんな話は置いといて、一つだけ問題がある」

徹夜&美月「????」

焼き芋「章の作り方がわからない・・・」

徹夜「はア・・・」

美月「この作者がいて、この小説があると思っ」

最後までだめな作者でした・・・と
章の作り方を詳しく教えてくれませんか？
暇だったらお願いします

少しの間だけ休みになります
章のつくり方を完璧にマスターできたらまた再開しますので
すぐに再開する事になると思います

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

1話 始まりは？（前書き）

あっはっはっはっはっはっはっはっはっは
章作るの簡単だったツ！！

正直、高校でも疲れてるから
休もうかと思ってたんだけど

・・・時間を稼げなかったZE

1話 始まりは？

一ヶ月・・・一ヶ月がたった

前の話から一ヶ月・・・ん？「話」ってなんだ？
とりあえずそれは置いてくとして

ふう・・・正直今はめんどくさい仕事をやってましてね

まあ、仕事と言ってもギルドとかの依頼って訳じゃないですよ
ギルドの依頼のSランクよりも厄介かな？

別に敵とかが強いって訳じゃなくて
いろいろと問題があるわけだ

俺達が仕事を終えた後にそれがどうなるか、などといろいろ考えると
いろいろと手間が増えてしまうわけである

ん？そんな事どうでもいいからやってることを早く言え？
じゃあ、言おうじゃないか！！正直俺は誰と話してるかわからんけ
どな！！

ようするに簡単に言ってしまうと・・・

・・・『国潰し』だ

いくつかある小国の一つを潰すのだ・・・名前はめんどくさいから
教えないぞ

まあ、国を潰すと言っても王政を排除するってところかな

その国の王は暴君(だったっけ・・・?)と言っていいものだ、民
は苦しんでいるが

王は毎晩、パーティでどんちゃん騒ぎしているのだ

それで国の金がなくなってくればただでさえ貧しい民の税を増やす

・・・まあ、昔のフランスとよく似た状態なわけだ
まあ、違つとすれば「魔族」が奴隷として城に閉じ込められている
ことだ

だから、俺と美月がそこに干渉してるわけである

戦争で戦力を削がれ、今は新しく自衛隊を作ってる最中

そんな魔界から魔族をさらうのは今の所簡単なのだ

ちなみに、俺と美月・・・あとは戦闘員の魔族が数人にジールク
それが俺達のメンバー

そして、他にはその国の民達

前にも言ったとおり、国王はすぎ放題にやっている

私欲のために国を動かし、私欲のために民を苦しめている

その状況を利用することは容易い

民の代表と交渉をし、協力をすることに

相手も馬鹿ではなく俺たちが利用してる事を知っているだろうし

相手は同じように俺達を利用している

俺たちは数十人の命だろうが、相手は国中の命

相手に損する事はなく、俺達も損する事はない

まあ、そういうものだ・・・

そして、今はその終盤だ

鉱山で働かされていた魔族も救出し、残りは城

「んあ、正直ねみい・・・」

俺のそんな呟き

「この頃、徹夜寝てないもんね」

美月の言葉

そうです、この徹夜が徹夜をしてるわけです

・・・つまんねえ」

今は衛兵を片付けてるとこだ

あえて言えば俺たちは剣として利用されている

衛兵、騎士、それらを倒すにはそれなりの鍛錬が必要だ

それを普通の一般人が行っているわけがない

なので、俺達を利用してるやつらはそれらをできるだけ無力化してもらいたい

なので、俺と美月、そのほか数名の魔族が兵士達を倒してるわけがある

結構、倒しまくり、もうほとんどいない

「んじゃ、美月。牢屋のほう頼んだ」

俺が美月に話しかける

「オツケー」

美月と数人の魔族が俺とは別の方向に足を進める

牢屋には残りの大半の魔族が閉じ込められているだろう

だから、美月のほかに数人の魔族が必要なのだ

「悪趣味な王様に会いに行きますか・・・」

問題は王様に可愛がられている一人の奴隷の魔族だ

可愛がられてるってのは、愛でてるとかそういう意味ではなく暴力的な意味である、ストレス発散にでも使ってるのだろう

「まったく・・・めんどくさいったりやありやしない・・・

戦争後にわざわざ馬鹿でもわかるように美月が宣言したってのに・・・

・・・

思わずばやいてしまう

俺は本心を隠せない性質であるからして、しょうがないことだと思っ

どンドンと歩いていく、兵士達などもいるがそれらはテキトウに気絶させておく

この道を一般人が歩くわけだから、それを邪魔するものは排除しとかなければならない

代表とも会ったが、頭もよく、他の人のことを第一に考えている人物だった

今の時点では国王より良い方向に進めていくだろう

そして俺の目の前にはよくある大きな扉があった

その扉を思いつき蹴って、文字通りに蹴破る

「こんちゃあゝ 貴方に不幸をお届けしますっ」

正直、ふざけてないとやっていけない

破片が空中を飛び、俺の不愉快でうざったい言葉も空中を漂う
王様の顔を見てみるとその顔は真っ青である

そして、部屋に入ると同時に数人の騎士が襲い掛かってくるが

それらを全てなぎ払うように、さっき蹴破った扉の大きな破片掴み、それを振るう

俺の一撃をくらい、吹っ飛ぶ騎士たち

着ていた高そうな鎧も大分へこんでいるが死んでいるわけではない
だろう

「お、おおおおお主はっ！！な、何が目的だっ！！？」

そんなことを言う王様、なんでそんなこと聞くんだろうか？

言うておくけど今まで警告は三度ほどさせてもらった

それを考えれば簡単にわかるだろう

「うっさい、黙ってそこにいろ。お前を捕まえるのは俺の仕事じゃないからな」

俺はそんな国王を無視して、少しキョロキョロと見回した後
目的の人物を見つけ部屋の端の方に向かう

「・・・相当痛めつけてられている・・・軽い治療はしないとな・・・」

俺の目の前には魔族の少女、その体は痣なのがたくさんある
立つ力もないらしく、ぐったりとして目だけをこちらに向けている
当然、俺はこの子を知らないし、この子も俺は知らない
だから、少女は俺を怖がっているらしく体は小刻みに震えている

その少女に軽い治療魔法をかける

疲れが取れたりとか、体力が戻ったりとかそういうほどの魔法ではないので

痣が治るだけだ、それでも体の痛みはひくだろうし相当楽になるだろう

うむ、完璧

「・・・つしょと」

そんな少女を背中に乗せる。ぐったりとしているので落ちないようにちゃんと支える

そして部屋から出るために歩き始める

「そ、そいつは我の所有物だっ！！誰にも渡さぬ！！」

俺の目の前にそんなことを言いながら剣を構える国王がいた
俺は国王の剣など気にせず近づいていく

すると、叫びながら国王が切りかかってくる

「・・・つぜえ」

そんな呟きと共に、国王の剣を避けた後に横腹を思いつき蹴る
すると、国王は数？吹っ飛び最後は床をゴロゴロと転がったと思うと

王座にぶつかって止まる

「ぐあああああッ！！痛い痛い痛い痛いッ！！だれかあ、だれか

医者を呼べエー！！私のこの痛みを取り除けエエエエエエエエエエ！！」
そんな感じで泣き叫ぶ国王。なんとも哀れで醜い・・・正直、イライラしてくる

これを聞いてると次は本気で殺っちゃいそうなのですぐに部屋を出ることにした

まだ後ろでは泣き叫んでいる国王の声が聞こえる、お前はガキか・・・ッ！！

そして俺は部屋を出て早歩きで進む

すると、一般人の代表と数人のくわなどをもった一般人が進んできていた

「協力をしていただき本当に感謝する」

代表の男が短く礼の言葉を言った

「・・・少しでも良い方向に進めてくださいな

悪い方向に進めたら、あんたも国王と同じ末路になるぞ」

そんなことを隣を通るときに短く言い合った後

そのまま俺は進み、相手も王の間を目指して進んでいく

「だ・・・れ・・・？」

そこで今までぐったりしていた少女が口を開いた
声は相当小さく、聞き逃してしまいそうなほどだ

「ん、俺か・・・？」

ん、ここは格好つけるべきだろうか？

それとも正直に名前を言うべきだろうか？
どっち、どっちなのだあゝ！！？・・・まあ、とりあえずかっこつ
けよう

「俺はあゝ・・・えつとおゝ・・・元勇者の幼馴染ってとこかな・・・
」

微妙なかつこつけになってしまった・・・

俺ってこんなんで大丈夫か・・・？

大丈夫じゃないな、たぶん問題ありすぎるぞ

1話 始まりは？（後書き）

こにゃにゃちわ〜

・・・なにかで見たときがあるような気がする挨拶です
なんとなく書いてみました

今回では、唐突に国が一つ潰れました
人間というのは欲深いつていいいますもんね〜
簡単に手に入る労働力は欲しいものです
なので魔族というわけですね〜・・・

というわけで今回もどうでも良い情報です

みなさん、自転車の痛くない転び方を知ってますか？
自分は知ってます

時と場合によりますが、とりあえず
流れるように転んでください
1ダメージも食らいませんよ

ん？流れるように転べば本当に大丈夫です
俺が実体験済みです（´>`<）b

危ないのはやはり古い自転車ですね

危ない転び方をすると、体に自転車のどこかの部分が
刺さる場合もあります

結構危ないです、病院で何針か縫うことになります
ちなみに、うちのばあちゃんが体験しました

もう少し刺さってるのが深かったら本当に危なかったようです
歳なんだから気をつけて欲しいですね

まあ、何年か前の話ですけどね

あとは、転び方ではありませんが、
自転車に乗りながら座る所のバネでぴよんぴよんしないほうが良い
です

足を踏み外すと軽く足が使えなくなるぐらい痛い目にあいます
あくまで時間がたてば直りますが

中学のときで部活が卓球部だったため、相当苦しみました

まあ、そんな俺とばあちゃんの実体験です
本当に気をつけてくださいね
危ないです

ちなみに、好きなキャラの投票を載せるのを忘れてしまったため
今回のに載せませす

指輪の精霊	1票
剣の双子の精霊	1票
ラウ	3票
リシくん	1票
ハクちゃん	1票
美月ちゃん	2票
ルミちゃん	1票
徹夜くん	2票

まあ、投票数が少ないのでランキングにはできないのですが
票も増えてないのに不動のラウちゃんです

好きなキャラ送ってくださいね〜

誤字、脱字があればマジで御報告ください

2話 救出した魔族は（前書き）

パソコン同好会の人に

Web小説の『魔王「私のもになれ」勇者「断る！」』を見ていたら先生にしゃべりかけられ、「小説を書いてみたら」といわれた

正直困った。別にインターネットで知らない人に公開するのは良いけど知ってる人、しかも先生には見せたくない

めっちゃ恥ずかしいものだ。なので「考えておきます」と断ったこの一言は万能だと思うのは俺だけか・・・

ちなみに、この小説を知ってる俺のリア友には
いまだ「闇」などと呼ばれている、もう慣れた

2話 救出した魔族は

あれから一週間たった

「……(ヒシッ)」

「……ま、負けるかッ(ヒシ)」

「……何この状況？」

俺の疑問の声

え？よくわからない？まったく……

教えてあげますかね、誰に教えるのかよくわからんですが

簡単に言うと二人に抱きつかれてます

一人は魔族の少女、俺が王様のところから連れてきた奴

上位の治療魔法でぐったりしているのも治り、動けるようになって
いる

なんか知らんがなつかれた

そしてそれになにやら対抗してるのは美月

年下にライバル意識むき出し、お前はガキか……

まあ、とりあえず……

「美月はやめなさい!!」

「ええええっ!!何で私だけ!!?」

「お前、同い年に抱きつかれるのはさすがに恥ずかしいぞ？」

この子はまだ年下なんだぞお」

それに同い年……高校生の女性はいろいろと体が育ってるわけで

して

男としてはまずいものです

「むう……ムスッ」

「お前、久しぶりに会ってからあまりむくれないから大人になったのかと思ってたが、なんでまた戻ってんだよ……」

久しぶりに会ってから美月のムスッとかムスッとかはほとんどなかったのだ

旅で大人になったのかな？と喜んでいた俺なのだ

「いや、新章だから表示される話数は二話に戻ってるから良いかな？と……」

「意味不明だ「新章」とか「二話」とか俺にはよくわからないッ！俺もときどき言うときがあるが、本当に意味がわからないッ！

神様！俺の疑問を解決してええええッ！」

なんとなく神様にお願ひ、まあこんな事言っただけ返事なのくるわけないのだが……

『神じゃない、焼き芋だ』

なんか変な返事が返ってきたッ！

しかもジャンプの人気マンガの一つのぎんたまのロングヘアーの侍の答え方に似てるのですが！！と、とりあえず無視しよう……

「徹夜、なにをいきなり叫んでいるの？（ヒシ）」

「だから抱きつくなくなったの……乱心だ、気にするな」

「乱心って結構気にしないとだめだと思っけど……」

「気にする必要はないぞ、美月」

おれはそんなことを言いながら腰に抱きついてきてる少女を撫でてみることに

すると、嬉しそうな顔をする魔族の少女

ああ、これを見るとラウを思い出す

この子も癒しになること間違いなしッ！！
でも、すぐにお別れだけども……

「おい、もう少しで着くぞ」

そんな言葉をかけてきたのはジールクである

「この魔族の男は『魔界六柱』という上層部に位置していて

それなりの強さの魔族だ、そしてどんな理由があるかは知らないが
ルクライルという魔族の少女と親しく「夫婦」とか呼ばれている

もしかしたらもうできてるのでは……？」

「……お前、焼かれないのか？」

「ハッ！！なんか知らんが口が勝手にツ！！」

こんな当たり前のことを説明しても意味ないだろうに……」

「おおまええ……」

額に青筋を浮かべているジールク

とりあえずそれを無視

今は大人数が乗るように作られた馬車の中
向かっているのは戦争の舞台ともなった海

そこに魔族の戦艦がとまっているはずだ

魔族を魔界に戻すためのものだが、簡単に大陸内にいれてしまうと

いろいろとまだ警戒されてしまうので
海の所に止めてあるのだ

そして戦艦の場所につき、魔族が続々と乗っていく
美月はそれを誘導していて、こっちにリーシが向かっているのが見
える

「・・・あう」

そんなことを言いながらまだ俺の腰にしがみついている少女がいた
・・・むむむ？

「確か、その子には両親が病で死んでしまい
行き場所がなくなってさまよっていた時をさらわれた、という事で
奴隷になっていましたね」

リーシに最初にさらわれた魔族を調査して欲しい、と頼んでいたので
ここまで調査したのだろう、すごいな・・・

両親を失った直後に、さらわれて暴力を振られた・・・ということが
不幸だな・・・

「その様子だと大変そうですね。ふむ、この子に限らず他の奴隷と
されていた魔族にも

この問題はあるでしょう、この事に何か解決策を見つければな
りませんね」

リーシが口を開く

「カウンセリングでもすればいいんじゃないか？」
魔族の少女をなでながらしゃべる

「？かうんせりんぐ」とは？

「要するに心の治療だ、こんな風に不幸な思いをして心に傷が出ることは多いだろう?」

「ええ、確かに・・・」

「だから、それを治療するんだ」

「具体的にはどうやって?」

「この子の場合はよくわからないが、主にその人の悩みとかを聞いてそれを改善できるようにアドバイスをすることだな

まあ、最初はどんなことをすればわからないだろうが、それはそっちでどうにかしてくれ

俺はただの一般人であり、それほど詳しくはないからな」

「ふむ・・・この子の場合は、安心して暮らせる場所を作れば良いってところですかね?」

「まあ、それが正解っぽいな・・・さてそれがどこかが問題だ」

「黒いの、お前のとこじゃないかな?それを見れば誰でもわかるが」

リーシは俺の腰に抱きついていてる魔族の少女を見ている
今のところはそうかもしれないが・・・

「だめだめ、俺といると危険しかないし、美月がうるさいし旅をするよりも一つの場所で生活できてたほうが良いんだよ
いつその居場所がなくなってしまうかわからないだろ?」

そんなことを良いながら

魔族の少女を抱き上げて、リーシに渡す
それをリーシは受け取る、

「・・・はう」

魔族の少女はそんな声をあげ、不安の顔でこちらをずっと見てくる
その少女の頭をリーシが撫でている
それが数分続き、少女はやっと安心したようだ

「・・・ふふ」

その様子を見てリーシは嬉しそうに笑う

「・・・お前が引き取れば？」

「ひうツ！？な、何故私がつ！？」

それに動揺してるらしい

「正直お前、子供を見るの好きだろ？」

まあ、子供つてのは可愛く見えるようになってるんだが・・・
まあ、俺も子供は好きだしな

大人相手に話すより子供相手に話してた方が100倍は楽しい

「な、何故それをツ！？」

そういえばこいつ本当に仕事とかじゃあ、話し方が変わるんだな
ドラゲイルであったときは話し方が180度違うぞ・・・

「見れば誰でもわかるだろ・・・ちょうどいいからお前が引き取っ
て相手をすれば良い

女の子と一緒にいればお前の、時と場合で変わる男っぽい話し方も
治るんじゃないか？」

「……ふんッ！お前になどそんな事言われたくない！！」
いや、十分言えると思うんだが……
俺のどこにこのことを言えない要素があるというんだ

「だ、だが……その提案は少し嬉しいな」
魔族の少女を撫でるスピードが増加中。

「じゃあ、良いじゃん」

「こんな可愛いのと一緒に居れるのは最高だと思うからね」
リーシの言葉

「同感だ」

俺の言葉

子供は俺に癒しをあたえてくれるものである

「お前はそれで良いか？」

リーシは一応、少女に尋ねる

「……ん」

なにやら眠そうな顔で首を縦に振る少女
それほど撫でられるのが気持ちいいのだろうか？

「ふむ、よかったな。じゃあ、俺は美月を連れてここから離れるか」
ら

「うむ、お仕事ご苦労、次の仕事でも頼むぞ」
次がなければ一番良いんだけどな……

「ん、そうだった、黒いの」

そこで何かを思い出したように俺を呼び止める

「んあ？なんだ」

俺はそれに対して振り返る

「二日前、例の国王が逃げ出した、結局は捕まったのだが
なにやら気になることを言っていたらしい」

例の国王とは一週間前に俺が蹴った奴だろう

「気になること？」

「ああ、『都合の良いを見つけたぞ、これで奴らに仕返しができ
る』だそうだ

あとはただひたすら狂ったように笑ってるだけだったらしい」

「・・・」

「一応気にしといたほうが良いんじゃないかな？」

「ああ、そうしとく・・・ありがとな
そういって俺は歩き出した

2話 救出した魔族は（後書き）

こんにちわ〜

第二章の一話めのあとがきで最初に「こにゃにゃちわ〜」と書いたのですが・・・

金曜日の夜の「松本人志の な話」のときに

岡本夏生（だっけかな？苗字はうる覚え）が

「こにゃにゃちわ〜」と言ったのです

軽く寒気が・・・なんという・・・

もう最悪な気分になりました・・・

今回ではこういう話でした

だいたいストーリーは考えているのですが

細かいところまでは考えていないので少し辛いです

なので、投稿日は空く日もあると思います

連日投稿にはもうこだわりません

いろいろと新しい小説も考えてみるけども

絶対飽きて投稿しなくなるだろうな、と想着てしまうものばかり、

最初は考えられても後が考えられていない

というものです。この小説がそうならないようにしたいです

今日のどうでも良い情報

夢ってすごいですよ〜

この頃、地震の夢を見るのが二回ありました

正直説明しづらいのですが

一回目は何故か自分が有名な会社の社長と話し合っていて
そのときに地震が来て

割れたガラスが落ちてくるのを、顔をかばいながら外に出ました
するとコンクリートの地面が変形して割れたコンクリートが波の波
紋のように広がっていくわけです（波の波紋が通り過ぎた後は無傷
のコンクリート、その時点でおかしい）

そして津波が凄い勢いで、俺はビルに使われていた木製の柱にしが
みつく、とここで目覚めました

いろいろツツコミ所がありました

コンクリートは何故無傷なのか、あとはなぜビルなのに木製の柱を
使っているのか、俺の目の前で流されていったお父さんはどこの行
ったのか

お父さん、ざまあw。とか思ってますんよ？

あとひとつはツツコミどころがありません

俺の家の前に傾いた家・・・ボロの斜塔と呼ぼう

そのボロの斜塔が実際にあるわけですが

そのボロの斜塔が大きな地震で倒れました

しかもそのボロの斜塔の横には俺の家のビニールハウスがあるわけ
です（夢にも現実にも）

それを飲み込まれました

そんなありえない夢とありえそうな夢を見ました

夢というと、小さいころは

橋を二人の姉が通れるのに何故か俺のときだけ落ちるとい

夢があります

そこでまるでルパンやギャグアニメのように平泳ぎをやっていたの
は秘密です

誤字・脱字があればマジで御報告ください

3話 なん・・・だと・・・っ!?!? (前書き)

こんちゃでえす(、(ノ

・・・

・・・

・・・グッバイ(。(ノシ

嘘です

本当にちよならはしないでくださいm(—)m(—)m

3話 なん・・・だと・・・っ!!？

それから三日たち、俺達は宿にいた

「スウ・・・ハツ!!ご飯食べなきゃ・・・スウ・・・」
朝に弱い俺

朝ご飯を目の前にしても寝てしまっている

「もお、徹夜は・・・あ、そうだッ!!」

そして、その横にいる美月は何かに気づいた顔をした

「徹夜・・・あ〜ん」

そんな事を言いながら俺の目の前にあつたカレーもどきを
スプーンですくって俺の顔まで近づける

そして俺は寝ぼけている状態

なにがなんだかわからず、言われたことをすぐにやってしまう

「スウ・・・むう？あむっ・・・スウ・・・」

一回少しだけ起きてそのカレーもどきを食べる

軽く正常な時の俺なら恥ずかしくて死にそうな所だ

そして周りにいた他の野郎共からは憎しみの目で見られているが
さっきも言ったとおり寝ぼけているのでよくわからない

「念願の「あ〜ん」が成功したッ!!・・・はい、徹夜あ〜ん」
とても嬉しそうな美月の笑顔

そしてまた再び美月がスプーンをもってくる

「スウ・・・あむっ、うまい・・・スウ・・・」

そんなのが続き、10分ぐらいして俺がやっと正常な状態に戻る

「……ん？カレーもどきが3分の2くらいがなくなってるぞ……？」

俺の困惑した顔、俺がまだ寝ぼけてないときは完全にあつたはずなのだが

さっきも言ったとおり3分の2がなくなっていた

「さあ、何でだろうね〜」

美月の顔はとても嬉しそうだった

何故だ……？

「というわけで、一応顔を隠すようにフードをかぶってそこに魔法をかけておこう」

俺の言葉、何事も面倒なことは取り除きたい

「ふう〜ん、仕返しねえ……」

美月の言葉、ちゃんと俺の言ったとおりにしてくれるからありがたい事だ

「どんな仕返しかな？」

「普通こういうときは命を〜とかじゃね？」

「ありそうだね〜……」

というわけで宿を出た
まではいいんだが・・・一時間後には・・・っ

「お前たちが、国王の言つてた奴か？」

そんな声が聞こえた

何故・・・何故に俺の首にはナイフをおしつけられているのだろうか・・・

歩きながら寝ていたのが間違っていたのだろうか？

いや、歩きながら寝ることは誰だつてやることだっ！間違っていないっ・・・たぶん

「徹夜、なにやってんの・・・」

美月の呆れたような言葉

寝てたんだものしょうがないじゃないですか・・・

ちなみに敵と思われる人物は男女が二人

どちらも仮面をつけていて顔の上がわからなければ髪の色まで隠してある

顔の下のあごなどの顔の輪郭は見えるので、それで性別を判断した男性は何も持っていないが、女性は背中になにか大きなものを担いでいる

「ここで騒ぐのは少し面倒なことになる

この村から出て森の中に行こうじゃないか」

ちなみに、俺の首にナイフを押し当ててるのは女性のほう

さっきの第一声は女性のほうで、この言葉は男性のほうだ

ん、なんか聞き覚えのある声だ・・・

まあ、ということ歩き出す

「なあ、美月。なんか聞き覚えのある声だと思わないか？」

「え、私もそんな気がするけど、ここではそんなことはありえないし

たぶん、気のせいじゃない？」

どうやら美月も聞き覚えはあるらしいが

ここは異世界(だった、と言えはいいだろうか?)、本当に聞き覚えがあるとしても

こんな変な格好をしてる人とは知り合いなわけがない、と思う

「でも、なんかひつかかるんだよなあ……」
もやもやしてる状態だ

「……気にしなければ？」

とりあえずそんな会話をしている俺と美月

美月は俺がナイフで動けない状態にいるから仕方なく付いて来ているのだろう

そんな感じで歩き、すぐに森まで着く

まだ歩き続け、森の中を15分ぐらい歩いただろうか？

そこで、なんとなく仮面の奴らに話しかけてみることに

「ねえ、俺の事知ってたりする？」

なんともフレンドリーなしゃべりかた

女のほうがそれに答える

「……知らないとも言えるが知ってるとも言える

まあ、会った時も無いし顔を隠している状態なのでどんな人物かはわかるわけがない

・・・ただ国王から話を聞く限り、理由もなしに国の上層部を潰した罪人ということはわかる。だから俺達が裁きに来た」

あれ？なんか話を捏造されてませんか？

この話を聞く限りこの二人は騙されている、そして善人に近いぞ俺と美月が何か言う前に続けて女はそういった

「とりあえず死んでもらう、こちらにも予定は詰まっているのでな」
女性の腕がピクリつと動き、次に動く時には俺の首を切り裂くだろう

「・・・ふッ!!」

だから、その前に動くことにした
しゃがんで女性の足を払い、転倒させる

「ハアッ!!」

美月も同様にすばやく剣を鞘から抜き
男性を切ろうと横なぎに振るう

「・・・チッ!!」

男性はそれを後ろに跳んで避ける
そして男性が懐に手をいれ、何かを取り出した

それはこの頃ではもう見ることはないと思っていた二つの鉄の塊

「拳銃ッ!!?」

美月が驚きの声をあげる

それは当然のことだ、この世界では弓やボウガンはあっても拳銃はない

絶対に・・・だ

そして乾いたような銃声が数回響く

「おわあつとツ!!?」

慌てて回避した美月

さっきまで立っていたところには3個の小さな穴

完全に拳銃の銃口から出た銃弾だ

その間に俺は男性の近くに移動して追撃をかけようとする

「・・・俺を忘れるな、黒いのっ!!」

そんな声が聞こえ、慌ててそちらを見てみるとさっきの女性

しかも大きくて装飾がゴテゴテの派手なハンマーをふりかぶっている姿でこっちを見据えている

そして、ハンマーは振るわれ、それに対して二本の剣を取り出し防御する

さすがは俺のパワー、不意の攻撃でも数?押されたが受け止めきる

そこで横からチャカリ...という金属の音が聞こえ

そちらを見ると二丁の拳銃の銃口がこっちを見ている

「・・・ツ!!?」

慌てて後ろに下がるが、銃声が響く

銃弾が俺の横を通り過ぎていった

さすがは銃弾・・・早いね

そして再び数発の銃声

その銃弾は俺の体を貫こうと進むが・・・

「ハアアアッ!!」

俺の前に飛び込んできた美月がそれらを全て剣一本で弾いた
さすがは美月・・・早いわ・・・

「美月、お前は男性を頼んだ、俺は女性を殺る」

「相性的にそれが無難かな・・・」
そんな短い言葉を交わした後、美月と俺は動く

「・・・『火の球』」
ファイアーボール

俺は火の球を造り、女性に投げつける

それは女性にあたって爆発したように見えたのだが・・・どうやら無事らしいな

「・・・『神に与えられし防具』」
アイギス

そんな声が聞こえ、女性のまわりには分厚い透明な壁がある
相当硬いようだ

そこで横から銃弾が飛んできた、慌ててかわす

美月はなにやってんだッ！？と、思っで男性のほづを見る

「ふんッ!!」

すると美月が男性の頭上から現れて剣を振るう

それを男性は間一髪で避け

美月に向けて銃口を向ける

そして銃声、飛び出た数発の弾丸はまっすぐに進み

美月の剣に弾かれる

さらに銃声は激しくなり、銃弾は多くなる

これ以上は辛い、というところで美月は横に走り出し

銃弾を避ける

「・・・なんであの拳銃は弾切れしないのっ!?!」

走りながら剣を振るい飛んでくる銃弾を弾く

もう何十発と撃ってるであろう拳銃は弾切れの気配がない

「はあッ!!」

俺の近くでその声が聞こえ
ハンマーが振るわれる、俺はそれに闇をまとわせた拳で応戦する
普通の場合はハンマーと拳じゃ負けは決定だが、さすがは俺
そんな状態でも力で押し勝つ

「なッ!?!」

それに驚く女性

そこに俺は拳を放つ・・・が、さっきの透明な壁で阻まれた

「さて、どのぐらい硬いのかなッ!?!?」

そんな事を言った後、数回、数十回と拳を放つ
闇でコーティングしてるので問題ないが、普通にやっていたら
少しの間、手が使えなくなりそうなほど殴っている

「結構硬い・・・殴るのじゃダメか・・・」

さっきのとは変わり殴るのではなく、右手を添える

その右手は闇で包まれており、黒い手袋をしているようだ

その手と壁の間でガガガガガッ!?!という音が響き、火花が飛び始めた

闇を細かく使い、チェーンソーのようにして切り裂こうという考えだ

「正直なところ、この壁を出してる間はお前動けないだろ?」

俺の言葉

「・・・ッ!?!?」

それに驚いたような反応をする女性

「俺の考えはあたりか、ここまで強力な防御だもんな、すこしは副作用のようなものがなきゃ、マジでチートだよ。さてさて、俺の攻撃をいつまで持ちこたえられるかな」

俺は不敵な笑みを浮かべる

「ぐう・・・！」

悔しそうな声をあげている

ん〜、チエーンソーじゃあ、ちよつと無理かな？

そう判断した俺は手から凄い勢いで闇を放出し始める

威力はさっきの50倍はある。すると壁にひびが入り始めた

「神に与えられた物だろうが、俺に壊されちゃダメだと思うな〜」
さらに威力が上がる

そして・・・アイギスが砕け散った

その瞬間、俺は拳を振るい、女性はハンマーを振るう

他にも行動があつた。俺が防御を砕いたのに仲間の危機だと思つたらしく

男性がそこに飛び込んできて、それを追いかけて美月もこの戦場に入ってきた

全員がそれぞれの攻撃を放つ

すると顔を隠していたものが全員ともなくなつた

俺の拳は男性の仮面を砕き、美月の光属性の魔法は女性の仮面を弾く

男性の弾丸は俺の頭上のフードを貫き、その勢いでフードが後ろに下がる

女性のハンマーは装飾がゴツゴツだ

その装飾の一部のトゲがフードにからまり引つ張られて破け、美月の顔を出す

そして・・・

「・・・は？」「・・・」

俺と美月、そして戦っていた男女二人を含めたアホな声が響く

俺と美月の目の前にいるのは男女変わらない

男性はイケメン野郎、女性は美人だが

今までの言葉で「俺」と言っていたことを思い出す

「「なんで、美月と徹夜がこの世界にいるんだよっ！！？」」

そんな男女・・・前の世界のクラスメートの二人は驚きの声をあげ

「「和馬と瑞穂がなぜここにっ！！？」」

俺と美月の声もハモっていた

3話 なん・・・だと・・・っ!!? (後書き)

こんにちわ、今回ではクラスメートが出てきました
むふふ、説明は次回です

クラスメートの二人はなにやら国王に騙されていたようですね
まあ、もしかしたらあの国王には理由なく潰された、とか思われて
るのかもしれませんが
都合よく捏造するのはとても気持ち良いことです

ん？クラスメートて誰かって？

言ったでしょう？番外編は布石の嵐だと・・・ッ!!

本当は和馬と瑞穂の瑞穂を主人公あたりにして

新しく小説を書こうと思っていたのですが

急遽、変更して、そのまま連載というわけです

何故、瑞穂が男なのに女の容姿なのか、それは主人公候補だったか
らです

他にもいっぱい布石は使わせていただきますよ〜(^ ^)

今日もまたどうでも良い情報です

チュッパチャップスで、とても美味しいですよ

俺てきにはソーダとコーラ味が好きです

ですが、チュッパチャップスって舐めると

舌を切るときあるんですよ

空気が入ってるときがあるでしょ？

そこを舐めると飴が刃物のように鋭くなって、それが舌を切るん
ですよ

そのせいで美味しい飴が何回、血の味になったことか・・・
飴の甘みと血の鉄のような臭い
それらが混ざって、とても複雑な気分になりました

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

4話 勇者と・・・(前書き)

いつも思うが

戦隊ものやアニメなので

必殺技を叫んでいるが、その間に攻撃されたら終わりだと思う

4話 勇者と・・・

「「「なんでお前がここにいるんだ？」「」」
俺と瑞穂と和馬の声はハモリ

「なんで瑞穂ちゃんと和馬くんはここにいるの？」
美月は違う言葉で聞いているがほとんど同じ意味だ

「美月、俺は瑞穂？ちゃん”じゃねえ、最低でも瑞穂？くん”と呼
べ」

瑞穂は美月の場合には静かに注意するだけなのに・・・
俺の場合は・・・

「そつだぞ、美月。瑞穂ちゃんに失礼だぞ」

「おめえも「ちゃん」をつけてんじゃねえッ！！（ゴスッ）」

「へぶ・・・っ！」

なんで一回言っただけで殴られるんだろうか？

「話が進まないからな、とりあえずそのコントをやめろ」
それをイケメン野朗・・・つまり、和馬が止める
うむ、なかなか懐かしい感じがするぞ

「で、何でお前ら二人がここにいんの？」

俺の質問

「ふ、それは言えないな。言つのはこと違う世界から来た勇者だ
けに、さ・・・」

なんかうざったい言い方をしてるのは瑞穂なのだが

そういえば、こいつアホだったのを思い出した

元の世界で知り合いだったのに、俺達がここでいう異世界から来た
ってこと忘れてる

あんたはこの世界と元の世界は同じとでも思ってるんですか？

馬鹿だ、阿呆だ、ドジ、間抜けだ

「俺はその勇者と知り合いだからな」

うん、間違っていない、ちなみに勇者が美月だとはまだ言わない
からかってるのをバラスのは遅いほうが良い

主に俺が面白みを得るために

「それは本当か？徹夜」

こつちに詰め寄ってくる瑞穂、ちなみに和馬は後ろで瑞穂を見て呆
れている

和馬は結構頭も良いし、すぐに状況が理解できるからな

反対に瑞穂は状況がすぐに理解できない阿呆だ

そこで美月がハッ！！となにかに気づく、お前、ばらすなよ？
と俺が思っていると予想外の言葉が出てきた

「・・・徹夜と勇者は知り合い以上の関係かもよッ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

俺は追いつけていけない

「なんだとッ！？お前、美月がいながら・・・

お前、美月が可愛そうだろう！！」

そんなことを言いながら俺の胸倉をつかんできている瑞穂

この場で一番可愛そうなのは貴方の頭ですよ

「じゃあ、勇者にお前を紹介してやるよ・・・」
めんどくさいから話を進ませよう、なんかもういろいろと疲れた

「ふむ・・・話をそらされた気がするが、とりあえず勇者に会わなきゃいけないからな」

そんな感じの瑞穂を手で持ち上げて体を回転させる
そして瑞穂の目の前に美月がいる

「はい、勇者」

俺の言葉

「は・・・・・・？」

追いついていけない瑞穂

ちなみにそれを見て美月と和馬は面白そうに笑っている

「わからないか？美月が勇者だよ」

俺の言葉

「ども、勇者です」

楽しそうに笑いながらそんなことを言う美月

「はああああああああああああああああッ!!!??」
瑞穂の驚きの叫び、正直うるさい

「いやあ、瑞穂は可愛いなあ・・・」

和馬の言葉、その言葉を聞き瑞穂はドロップキックをおみまいしていた

正直、その容姿だったならそんなこと言われても仕方がないと思う

とりあえず、この世界に来てからのことを俺と美月でそれぞれ言うてみた
すると・・・

「あうあくッ！！なにこれ超恥ずかしいんだけどッ！！
ふざけて勇者だけに言わなきゃいけない、ってからかおうとしていたのに
反対にからかわれるなんてッ！！」
めっちゃ恥ずかしがっている瑞穂

「まあまあ、瑞穂。そう気にしちゃいけないよ
そこを和馬が慰めている
・・・いつも通りでなによりだ

「んで、お前らは何？」

俺の質問

すると、瑞穂が顔を上げて改めてこっちを見てくる

「勇者だよ」

あ・・・？

「サラスムで召喚されたの？」
美月が俺の代わりに質問している

「違う、この世界に来たから勇者になっただんじやない・・・」
和馬がそれに答え

「勇者になった後にこの世界に来たんだ」
瑞穂が言葉の続きを言った

「この世界だけが全てじゃないんだよ、お前らがこの世界に呼ばれたということはあるけど、少なくとも世界は二つはある……だが、その二つの世界だけしか存在しないって訳じゃない、そう思わないか？徹夜」
瑞穂の言葉

「確かにそうだろうが……」

「というわけだ、俺達は勇者になってからある理由があるからこの世界に来た」
和馬の言葉

「じゃあ、その理由はなんなの？」
美月の質問

「アニメで言う敵の野望を阻止するってとこだな
まあ、敵がどこにいるか、なんてのはわからない
ただ俺達はそいつを追ってここに来たからな、この世界にいるのは間違いはない」
瑞穂が言った

「敵ってのは？」
俺の質問、なかなかの面倒事がありそうだ

「『墮勇』だよ。墮ちた勇者、略して墮勇」
和馬の答え

・・・墮勇ってそのまんますぎね？

「そいつらの思い通りに行けば、この世界は消えると思っ
ていい
そんな瑞穂の言葉だった

4話 勇者と・・・（後書き）

ああ、だめな小説がこの話では特にダメダメだった気がします
ああ、なんか自分で書いてて今回の話は面白みがありませんでした
ああ、「ああ」てのが正直多くてうざいと思う
ああ、やめようか

てな、感じなので次の話は自分が楽しめるような話にしたいです
俺の自己満足小説なのに自己満足できなかったら意味無いですよ
頑張ろうと思います！！

異世界からの訪問者を小説に導入

ふふふ、ふふふふふふ・・・ちなみにこれは笑ってるだけで特に
意味は無い

今回のどうでも良い話です

今回は高校に入ってからのおざったいようで俺的に笑える話

前に書いたような気もするんですが、書いた気もしない話です
あれです、高校生になって

自転車を思いっきりこいで走っていたのですが

ある女子の三人組の横を通ったときに

舌打ちされました、その後は女子達はゲタゲタを笑ってましたね
とりあえず無視して通過しましたね

正直、その気持ちわかりますよ、俺も小学生のときやったような気
がします

今は何が楽しいのかよくわかりませんが

いるんですね。年齢だけ高校生で小学生の心の持ち主が・・・
ちなみに、思わず吹き出してしまったのは秘密です

・・・また、めっさどつでもいい話だ・・・

誤字・脱字があればマジで御報告ください

少しの間、お休みさせていただきます

第二章のストーリーがあいまいで細かく書けないので
すこし考える時間をとらせていただこうと思います

次の更新を待っていただくと嬉しいですm) | | (m

5話 フッフフン (前書き)

ぐだぐだ〜・・・てな感じですよ

5話 フッフフン

「あゝ、もうめんどくせえったらありゃしない・・・」
俺の言葉

これはあのクラスメイト達と再開した後の二日後

「あっはっはゝ、徹夜やる気満々だねゝ」

美月の言葉

なにがやる気満々だっ！！

あれはほぼ強引と言ってよかった

時間をまき戻し、皆様に見せようと思う

俺はいつもどおり、美月の肩にポンツと手を置き

いつもどおりの言葉を言った

「美月、がんば・・・」

「いやだ」

美月に俺は言葉を遮られた
諦めるか

「美月、がん・・・」

「いやっ」

あ、諦めるか！！

「みつk・・・」

「ダメ」

あきらめ……るか……

「み……」

「絶対ヤダ」

完敗だな、俺！！

「いい加減諦めたらどうだ、徹夜」

瑞穂の言葉

「うぜえ……面倒ごとを持ち込んできた奴に言われたくねえ」

「そういうなって、友達だろ」

こいつは意識してるかどうか知らんが……いや、こいつとの高校での付き合いを考えるに……天然なのだが、こいつは上目遣いになるのだ、それがなんとも……

ぐあああ……そんな目で見んな〜ツ！！

「徹夜、私に面倒な事を全部押し付けられないでよ……（ムス〜ツ）
となりでは美月がいて、そのむくれてる顔が……うわああ〜ん
もうやだ、なにこの可愛い二つの攻撃は……ッ！！」

「……す、少しだけだからなッ！！」

ツンデレかッ！！いや、俺がデレるわけがないんだけどね

元の世界のときも思ったことなのだが、俺は大体、全部終るまで付き合ってしまう

ああ、多分なのだが……今回もそうなってしまっただろう
めんどくさいったりやありゃしない……

「何くつろいでんだ和馬。お前も徹夜を説得しないとダメだよ」
瑞穂がそんなことを和馬に言い

「いや・・・徹夜には、美月と瑞穂の天然の可愛さだけで十分だよ」
そんな事をニコリと笑いながら答える和馬

瑞穂のドロップキック、俺の回し蹴り
それらが和馬をふつとばしたのは言うまでもない

ちなみに美月は嬉しそうな顔をしていた

ということとで今に戻る

今は移動中、移動といっても馬車とかではなく
空を飛んでいる。俺の闇で竜を形作り、その翼で飛んでいる

「よくこんな事ができるよな、徹夜は」
和馬がそんなことを言ってくる

「俺、美術の授業は結構好きだったからな」
楽だしな

「そういう問題じゃないと思うが・・・」
和馬がそれに対してそんなことを言ってきた
別にいいじゃん、そんな事を気にする意味がねえよ

「んで、奴らは何をするんだ？」
聞くのを忘れていた事だ

「奴らは異世界から来たわけではない黒髪、黒目の人間を狙うだろ
うな」

和馬が言った

「何のために？」

美月が質問している、確かにそれは気になるところだ

「召喚をするためだよ」

瑞穂がそれに答える

「召喚？」

何を？

「ああ・・・魔神を召喚するために集めているんだ

黒髪黒目の人間はこの世界でも普通の人々から見れば不吉の証だからな

それを利用するってところだろうな」

「魔神・・・？」

これはちよつと気になるな

「神つてのは存在する、神とかでもよく悪い方面で魔神とか邪神とかいるだろ

墮勇つてのは魔神と邪神という二体に仕えてる、と言って良い奴らだ多分、この世界で魔神を召喚するのを試したいんだろうな」

「邪神と魔神てのがいるんだつたら、なんで邪神のほうではなく魔神だつて確実に言いきれんだ？」

俺の質問、ここは少しでもよさそうだが

一応聞いておこうと思う

「邪神のほうは、もう試したのさ」
瑞穂が一回間を空け、言葉が続ける

「・・・そして一つの世界が消えた。もしかしたらこの世界もそうなるかもしれないねえ

それを防ぐために俺らが来たっていうことだ

まあ、邪神は破壊、魔神は絶望を撒き散らすって言われるからな、魔神の場合、世界が消えるというより人類はもちろんの事、その他大勢の生命が消える・・・と言ってもいい」

「ふうん・・・」

世界が消えた、か・・・

そして、なにやら具体的に説明された魔神の力・・・
恐ろしいわあ・・・

「まあ、墮勇は三人、それ以上はいないはずだ、協力する悪魔か墮天使がいるわけでもない

・・・それ以上の敵が増えるわけじゃねえからな。今度は阻止できるだろう」

瑞穂が言った

・・・ん、あつはつはつは・・・

「・・・いるんだけど」

俺の言葉、ちよつと焦り気味だ

「なにがいるんだ？」

和馬の質問

「いや、墮天使がいるみたいなんだよね」

美月が苦笑いしながら答える

あの戦争でイリルさんから逃げたらしい奴だ

「はあっ！？どういうことだよ・・・」

「戦争で魔王のペットが放されたみたいないんだけど
そのペットには墮天使もいたってことだね」

続けて美月が説明した

「そんなのを相手に勝てたのか？結構強いはずだぞ・・・」

「それは、イリルさんだな。

ん・・・とりあえずイリルさんにも報告しとかなきゃいかな」

あの人はチートキャラだからね・・・魔界や他の国の方にも知らせ
とくかな・・・

闇で作られた竜から小さな闇で作られた黒い鳥が別れて、ドラゲイ
ルの方向に飛んでいった

そして、あと何羽が別れるといるいな方角に飛んでいく

「イリル？」

和馬がその名前に疑問を浮かべる

まあ、知ってるわけないか

「ロリ容姿の凄い奴だ」

うん、正確な説明文だ

「なんか超微妙な説明だな・・・意味わからんし」

瑞穂くん、これが本当のことだからさ、しょうがないの
これ以上、説明なんてできないから

「んで、どこに向かってんだ？」

「ん？ああ、黒髪黒目の少女を一人知ってるからな
・・・今はそいつを捜している」

ヒドラと話しててわかったが、あいつは方向オンチだ
最初に方向を教えたからと言って、簡単にドラゲイルに行ける訳が
ない

「わかるのか？」

ふふ、和馬くんは何を心配してるのやら

「ああ、この一ヶ月で俺も美月も独特な情報網を作ったからな
・・・問題はない・・・はずだ」

「おい、最後に付け足した言葉で一気に不安になったぞ」
瑞穂ちゃん、そんなこと言わないで

「・・・「ちゃん」をつけんじゃねえ！！」

「へぶっ！！」

こいつ・・・こういう時だけ心を読んでくるのは何故だっ！？
いちいち殴んなッ！！

「向かってるのは、ある都市だな」

そこが一番確率が高い

そういつてる間に、その都市が見えてきた

「あれだね」

美月が言い

「ああ、そうだな」

俺が肯定する

そして、都市に離れたところに着地する

まあ、目立つのは嫌だからな

「さて、捜しに行こうか……」

本当にめんどくさいなあ……

5話 フッフフン (後書き)

少しの間、休ませていただきましたが

連日投稿しまくってたせいなのでしようが

五日間投稿しないだけで、長い時間を感じました

本当に、困りものです

こんな事していると抜け出せなくなってしまいそうなので
リハビリ(?)みたいな事をします

ということ・・・

連日投稿はしません、最低でも2〜4日ぐらいは開けて投稿しよう
と思います

まあ、この休んでる間に「俺は」は3話ぐらい書きました、と・

・
結局のところ・・・休んだ意味がございません

マジでダメです。高校生なら勉強しろ、って話です

まあ、さっきも言ったとおり3話は在庫がありますので
十分、休めるめるのですが・・・

それでして、話が変わります

ケータイのことなんですけど、軽くやらかしました

au ICカードのロックてとこをなんとなく押してみたら

PIN解除つてとこになつて、そしたら戻れなくなつてしまい

その重要なPINがわからなくて・・・やけになり馬鹿なことをし
ました

PINロック解除・・・10回失敗・・・ICカードがロックさ
れましたね

結果：・・・携帯電話の通信サービスが使えねえZE

こういうのって a u のシヨップに電話すればいいんですかね？
それとも直で殴りこみ？

週明けの学校の前にはどうにかしないと・・・（・・・）
まあ、直で殴りこみの方面になりそうな気がします

さてはて、今回は伏線をまた使わせていただきます
ヒドラと一緒にいた黒髪黒目の少女・・・ミイですね

まあ、全体的に黒髪黒目の人間なのですが
徹夜くんの知り合いではミイぐらいです

まだ、細かく考えてないところもあり、いろいろと大変です

そういえば、テレビを見て思ったんですけど

この頃の小学生ってすごいですね〜（ある意味で）
ダルビツシュだか誰だか忘れましたが、有名な人と握手して
手の臭いをかいてました・・・小学生にビビッた俺です
なんかあれです、末期だと思いました

今の小学生ってこんな事するんだ・・・と驚きです
小学校を卒業して、4年程度しかたっていないのに啞然としました
さすがに年をとれば、いろいろとありますからね
世の中の変態像に近づくなんてあると思います
でも、小学生でこれは・・・

まあ、そういうのは人それぞれですよね・・・（汗
受け流してくれてかまわないですからね・・・

誤字・脱字があればマジで御報告ください

6話 上右下左…(7分お待ちを)…(前書き)

() () z z z z z z z z

••• z z z z z z z z

•••••••••• z z z z

< > < > (クワツツ!!)

() () ノオハヨ

6話 上右下左…（7分お待ちを）…

俺達は歩いている

俺、美月、瑞穂、和馬の四人でだ

まあ、そんなことはいいいとして

ここはやっぱり…

「章の名前は「墮勇3人と墮天のボツチ野朗と異世界から来た勇者二人組みの面倒事」に変えたほうが良いと思うんだ。異世界から来た勇者の二人も面倒事を俺に持ち込んできたからな…」
そんな俺の呟き

正直、面倒な事を持ってきたのは「墮勇」と「墮天」だけじゃないと思う

「徹夜、一人で何言ってるの？」

美月が俺の頭を心配そうに見てきているが関係ない

これが俺の正常です

まあ、これをわかる人はいそうもない…

「ん、なんでもない。ただの独り言だ」

…というこゝとで話を濁すことにした

ていつか、俺も意味もわからずに言葉に出したのでよくわからないのだが…

「まあ、とりあえず捜すぞ」

俺の言葉

「いや、もう捜してるからな」

瑞穂がそんなことを言ってきて

「見つかったのか？」

俺の質問

「いや、ぜんぜん」

和馬がそう答えた

これが今の現状だ、あの野郎はどこ行きやがったんだ……
まあ、待ち合わせしてるわけじゃないので
会えるほづがありえないのだが……

「ん……じゃあ、裏側に行くか」

俺の言葉

「裏側？」

そこに瑞穂が疑問の言葉を漏らす

俺は答える気がないので黙っていると、それに美月が答えた

「この都市の裏側だよ

勇者つてのを表に例えるなら、墮勇が裏側。簡単に言うと「死」が
付きまどつてる危ないところだね」

「ふうん……」

それに納得したのか納得してないのか

よくわからない返事をする瑞穂

さてさて、とりあえず入るとするか

俺は歩き、光があまり入ってこない薄暗い道に歩いていく

そして足で道を叩いて音を確認する

一部だけ音が違う場所があるのだ、そこを見つけ上に持ち上げると
地下道が広がっている

「これは？」
和馬が質問してきた

「これは、え〜と、たしか・・・隠し通路なんだけど・・・え〜っと
そうだ思い出した。この都市に敵が進入してきたときに
前と後ろから挟み撃ちにするために、こういう地下道があるんだよ
この都市に張り巡らされてるから、入ったら迷う確率が高いけど
うまく行くと裏側にたどり着ける」

と、まあこんな感じだ

ちなみに、この地下道に入ったのは
今までで3回程度、少し欲しい物があったり（主に裏側情報）した
ので行きました

そして、その地下道に入る
全員が入り終わると勝手に隠し通路の蓋が閉まるのだから凄いなと思う
歩き出す俺達

俺と美月が前を進み、その後ろに瑞穂と和馬がついてきている
クネクネと曲がっていく

「ん〜・・・迷ったか・・・」
俺の呟き・・・ヤヴァツ！！

「はぁッ！？迷ったってどついう意味だ！！？」
瑞穂がそれに声を荒げる
そのままの意味だぞ、こんにゃろつッ！！

「とりあえず進もう。絶対誰かはいるはずだ」
俺の言葉

「誰かって誰だよ・・・」

そんな疲れたような言葉を言い、俺の後をついてくる瑞穂
そして一分もせずに誰かはいた
知り合いではない人だ。顔には大きな傷そしてワイルドな顔、体は
強靱

背中には結構大きい大剣、はっきり言うと裏側の人間だ

「ふむ、少し話を聞いてくる」

「いつてらっしやあゝい」

そんな美月の言葉を無視して、その人に近づいていく

「あれと話せるのか？なんか話しかけた瞬間に斬りかかって来そう
なやつだが・・・」

瑞穂の言葉

「大丈夫だよ、だって・・・」

そんな美月の言葉の途中で俺とその男の会話が聞こえたのだろう

「おじさん、俺達道に迷っちゃったんですけど、教えてくれませんか？」

「ああ、俺もそうなんだよ・・・悪いな」

「どんな道で来ようと思いました？」

ちなみに俺は右右左左右右右右左上上左…（五分お待ちを）…てな
感じなんですけど」

ちなみに、右とかは別れ道のとくにどっちに曲がったか、というこ
とだ

「んん？俺とは少し違うな

左左右左上下右下左左右左上…（六分お待ちを）…という感じだ』

「意外と裏側の人って親しみやすいんだよ？一部を除けばね」
美月がそう言う

「ていうか…なんだよあいつら、無駄に道を覚えてるぞ…
ゲームの技を出す時のコマンドみたいなの…それ以上に複雑だけ
ど…」

瑞穂の言葉

すこし呆れ気味だ

『ん〜、ということは…』

考える俺、ふむふむ

俺の金色の脳細胞が唸りをあげるぜ！！

…気持ち悪いな、俺

『…ん〜』

考えるおじさん

『うん、右下右下左上右左左上左下…（十五分お待ちを）

…だなっ！！』

「なにをどう考えたら、導き出せるんだッ!？」

そんな瑞穂のツツコミが聞こえたかもしれないが無視
俺と話していたおじさんも加わり5人で道を進んだ末
たどり着いた

「なんで、あたってたんだよ…」

げっそりとした瑞穂の言葉が聞こえた

それが徹夜クオリティーさっ!!
・・・うわ、俺の思ってることはやっぱりキメエ・・・

6話 上右下左…（7分お待ちを）…（後書き）

ちなみに、章の名前に魔神編をつけたしました
一話から書きちやうとネタバラシになっちゃいますので
このときにやらせていただきました

正直、この頃

電車に乗るのがつらくなってきた
きゆうくつすぎます

横に臭いおじさんが乗るときがあります
息を止める俺

毎日、座る所を確保するのは骨が折れます
でも一応確保しているので最高です
立ちっぱなしだとつらいですよ

そういえば、前々から思っていたのですが
この小説はファンタジーな世界なのに、残念な部分があるんですよ
・・・エルフとドワーフが出てこねえ！！
勇者に魔王、人と魔族と竜人に獣人、魔女に吸血鬼・・・それしか
出てないんですよ

ん、エルフ達も出せる小説を書き始めようかな
それに、魔物と戦うというより主に魔族または人間を相手に戦つて
る気がしますので魔物の討伐なども入れたいです
まあ・・・

もし書き始めたとしてもこっちを主に書くので心配は要りませんで
すよ（言葉がおかしいのはわざとです）
まあ、まだどんなのか思いつかないですけどね（笑）

では・・・

今回はこの辺りで終わりにしたいと思います

）・（ ）ノシユバイ

誤字・脱字があればマジで御報告お願いします

7話 フッフ…(前書き)

祝!!100話記念!!

・・・いや、特に何もありませんけどね・・・

番外編なんてこの展開の所に入れられないですからね
まあ、今日もいつも通りということです

7話 フッフ…

「ふむふむ、これが裏側」

瑞穂の言葉

周りは昼だつて言うのにどんちゃん騒ぎ

殴り合いはもちろんのこと、治安が悪いの間違いなしという場所である

ちなみに地下道であつたおじさんとはもう別れた

「いつ来ても、酒臭いな。酒はあまり好きじゃない…」

俺の言葉

「それにしてもよく飲むよね」

美月のジト目

「…やけ酒だ」

「何に対して？」

「…黙秘権を行使する」

美月にめんどろなことを巻き込まれたから、なんて言えないです
言ったら怒られます…

「…ふうん、そう思ってたんだ」

美月にそんなこと言われた

「あれっ！？心読まれたっ！！？」

俺の驚き

「・・・やっぱり私関連なんだ」
さらにジト目が鋭くなる
これは・・・

「カマをかけられたただだったか・・・
冗談だぞ、美月。お前がカマをかけてるのを知っててわざと言っただけだぞ」

あはは、俺って嘘が下手

「・・・今度、何してくれる？(ムッツ」
ああ、また膨れっ面・・・いい加減直せよ、大人になれ
いや、俺が言えることでもないけどな・・・

「ん〜・・・ん〜・・・今度買い物に付き合っただけ」

「なんかいつも通りの気がするけど、それでいいでしょ・・・」
少し納得が言っていない感じだが、許してくれる美月
ふう・・・

「俺達の事を忘れないでくれ・・・」
和馬がそんな事言ってきた

・・・正直、忘れてた。とりあえず嘘を言おう

「あつはつはつは、忘れてないぞ、えつと〜・・・無視しただけだ」
ちよつと本音に近いかも・・・

「そつちのほうが悪質だと思うが・・・」
和馬のそんなツッコミは気にしない

「んじゃ、行こうか」

と・・・歩き出した所で爆発音が響いた

「くくく・・・ッ!?」「くくく」

そしてある場所で煙が上がっていた

あと・・・なにやら竜の雄叫びのような声が聞こえた

『・・・堕天使の相手はめんどくさいなあ』

そんな声が響いた

その声は七つ、八モっている様な声

声の主はヒドラ、七つの首を持つ竜の亜種だ

周りは戦闘で壊れている。5階建ての建物が下だけ壊れてころがっていたり

人形が首だけ壊れていたり、お店の壁が崩れていたり、などだ

「なんなんだこの世界は・・・天使に匹敵する力を持った奴らが多すぎじゃないか?」

そんなことを言ったのはヒドラと対峙している男

その顔は美形、背中には白い翼、見た目でやわらかそうな感触があるだろうと思える

その男は翼で飛んでいたりする

『堕天使ごとき負けてるようじゃ、全国のヒドラに申し訳ないよまあ、僕しか居ないんだけどね』

そんなことを言ってる竜の後ろでは黒髪黒目の少女・・・ミイがいる

『ん、本気を出してみたのはいいけど

この姿じゃミイを間違っつて潰しちゃいそうだ』

そんな声が聞こえると、次の瞬間には白い髪の少年の姿に戻っている

「君ぐらいならこの姿で十分でしょ」

その少年・・・つまりヒドラが言った

「・・・墮勇とやらの誘いによって黒髪黒目の人間を捉えるのを協力することになりましたが

こんな面倒な奴を相手にさせられるとは・・・困りましたね」

そんな言葉と共に、背中の翼を動かし急降下する

その手には剣が握られていて、その剣を横なぎに振るう

「おっと・・・ッ!!」

ヒドラはミイを抱えてその剣をジャンプして避ける

そして墮天使のほうに手を向けると、そこから雷、火、水のそれぞれの属性の魔法を放つ

「三つの属性を同時に放つとは・・・っ!!」

その魔法を全て避けながら墮天使が驚きの声をあげる

「さっきの僕の竜の姿を見てわからないの・・・？」

僕の首は七つ。一つの首に一つの属性が宿ってるんだ

だから、僕は時空と想像以外の属性は全て使えるんだよね」

ヒドラはそんなことを言いながら土、水、火、雷、風の5つの魔法を同時に放つ

それに驚きながらも全てを巧みにかわす墮天使

全部かわした後に光属性の魔法を放つが、ヒドラが放った闇属性の

魔法で打ち消される

「自分で言うのもなんだけど、亜種ってのはすごいよね。他の竜よりも属性が強力なんだ
魔王とか魔族のトップあたりしかまともに闇は使えないはずなのに僕も使えるんだからさ」

その言葉と共に闇を数発放つ
それを墮天使は光を帯びた剣ですべて切り裂く

「本当に厄介ですね・・・」
その言葉と共に動く墮天使、翼を動かし急接近する
手に持っている剣を振るう

「僕が中距離攻撃しか無理とか思ったんでしょ
でも、それは少し間違いだな・・・」
ニヤリと笑うヒドラ

次の瞬間には墮天使の剣をよけ、墮天使に数発の拳を食らわしている

「ぐあつ！！？」
それで吹っ飛ぶ墮天使

「それにしても、少し弱すぎるなあ・・・手負いで動きが鈍いかな？

そういえば、噂でイリル様が戦争時に墮天使と悪魔を相手に無双したとか・・・」

そんなことを言った瞬間に魔法が飛んできた
それをヒドラは火属性の魔法で打ち消す

「・・・あのクソな竜の事を知ってるようですね、あの竜は絶対に私が殺さないと気がおさまらないんですよ・・・」

さつきとは違い完全に怒りの表情をしている堕天使

「本当に、イリル様にボコられたみたいだね」

それを見て楽しそうにケラケラと笑うヒドラ

そしてその笑いもおさまり、真剣な顔になると

「でも・・・君如きじゃあ、イリル様を殺せないよッ!!」

その言葉と共に走り出すヒドラ

「この私が殺ると決めたんだ。絶対に殺る!!」

そう言いながら剣を構え走り出す堕天使

そして二人がぶつかり合おうとした時

誰かが日本刀を手にヒドラに襲い掛かった

「な・・・ッ!!!?」

慌てて避けるヒドラ

だが、少し遅かったようでヒドラの体を日本刀が浅く切り裂いた

「・・・チッ!!」

舌打ちしてさらに下がるヒドラ

不意打ちしてきたやつが追撃を仕掛けてこようとしてくるが

七つの魔法を放ち足止めをする

「貴方も来たんですか・・・堕勇さん」

堕天使がそう言った

「・・・お前がいつまでも遊んでいるからだ」
不意打ちをかけてきたやつは黒髪の少年、今の動きを見るだけでも
強敵

しかも墮天使とあわせて、敵は二人になった

「・・・（これは正直やばいね・・・ミイを一人で逃がすか？いや、
二人相手には無意味か・・・むう・・・ん）、この場合はどうした
らいいんだろうか・・・？」
抱えてるミイがヒドラにさらにくっついている
ヒドラは考え続ける
ちなみに・・・

「・・・（それにしても墮勇って何？）」
ちよつと今は少しどうでもいい疑問もあつたりする
そして考えた結果は・・・

「うん・・・ここで墮天も墮勇も二人一緒に沈んでいたかどうか」
これが考えた末の結果である。とても単純だ・・・
それぐらいしか考えられないのは徹夜同様、悲しい生き物だと言う
事だ

「あなたのこの状況がわからないようですね・・・」
墮天使が口を開く、呆れたような表情だ

「お前の屍からそいつをいただいていく・・・」
墮勇と呼ばれた人間・・・黒髪の少年が言った
だが、三人とも動かなかつた
いや、唐突の事に動けなかつた・・・というべきだろうか

突然、横から乱入者が現れたからだ

「久々のストレス発散だZ E … ヒヤツハアアアー！！！」

そんな声と共に墮天使と黒髪の少年に

墮天使とヒドラの戦いでほとんどが壊れていた5階建ての建物が振り下ろされた

その建物を振り下ろしたのは、これまた長い黒髪を後ろで縛っている少年……つまり徹夜だ

そして、次の瞬間……その振り下ろされた建物が爆発したかと思うと

爆発で吹き飛ばされた場所には墮天使と日本刀を手に行っている黒髪の少年が立っていた

「……これぐらいじゃ、簡単には潰れてくれないかあ」

それを見て徹夜が呟いた、とてもめんどくさそうな顔をしている

「お前……誰だ？」

黒髪の少年が徹夜を見て、口を開く

「勇者の幼馴染だ……それより俺の事だけを気にしていいのかわ？」

徹夜がそんなことを呟く

その言葉に何か思うよりも先に動きがあった

数人の影が動いた

墮勇の黒髪の少年のまわりには、ハンマーを持った瑞穂と拳銃をもった和馬がいた

どちらもすでに攻撃態勢だ

そして、墮天使の首には美月がロングソードをあてている

「・・・ふうん、最初に出張ってきた墮勇はお前か。
都堂 泰斗とらふ とたいと」

瑞穂がその少年の名前を言った

それは当然、徹夜と美月は聞いた事のない名前だった

「お前達も来てたのか・・・ふうん、瑞穂と和馬か・・・
あとの二人は・・・誰だ？」

それに対して冷静な感じで返答を返す泰斗という少年

「ああ、俺達のクラスメートだよ・・・この世界では勇者だけだな
それに和馬が答える

「ねえ、この人、翼が生えてるよッ！！柔らかさそうで触りたいんだ
けど！！」

ちなみに美月は少しだけはしゃいだりもしている
この場面ではズレた発言と言えよう

「触らないでくださいね、手入れするのは大変なんですから」
ちなみに墮天使も同様にズレた発言をしている

ズレた発言をした後に墮天使は墮勇・・・泰斗と呼ばれた少年を見て

「それで、どうするんですか・・・？この世界の勇者達を相手する
のも面倒なのに

どうやらあなたの知り合いも居るようではありませんか」
墮天使が問い

「…ここはとりあえず退く事にする」
それに泰斗が答える

「ふむ・・・では」
すると墮天使の手から周りを埋め尽くすほどの光が放出される

「くくく・・・ッ!?!?」「くくく」
それにみんなが驚き、慌てて目を伏せる
光がおさまる。すると・・・その場には墮天使と墮勇はいなくなっ
ていた

静けさがこの場を満たす

「これはめんどくさくなりそうだなあ・・・ホントうざってえ・・・」
徹夜の呟きがその静けさをブレイク!!...!したのだった

7話 フッフ…（後書き）

こんばんわ〜、又は、こんにちわ〜（・・）ノシ
今回では堕天使とヒドラのバトルに
堕勇の乱入者と勇者の幼馴染の乱入者ですね
なんか乱入者が二人もいて、多い気がしました

ヒドラさんは七つの属性を同時に使いこなす凄い奴！！
チャラチャラしてるだけの奴ではないっ！！

前回の六話の後書きで間違っってこの話の内容を書いてしまった・・・
投稿される前の夜中11時に気づいて慌てて消去
危うくネタバレ・・・危ない所でした・・・（・・）

そして、6月10日の夜20:05に気づいたのですが
章の名前に魔神編と入れたのですが、よく考えたら
もしかしたら一話から読み始める人もいるかもしれない、というこ
とです。ネタバレだっ！！
ということで再び修正。「魔神編」を消去させていただきます

話が変わり

もう夏が近くなってきましたね
なので熱かったののうちわを自分の部屋で捜した末
持つ所だけを見つけたので引き抜きました

バツ） うちわの骨組みだけ

「・・・」

なんということでしょう、仰ぐために張られているはずの

部分がなく、プラスチックの骨組みだけでした
そして、もう一個見つけたので引き抜きました

バツ） またもやうちわの骨組みだけ

「・・・」

思い出しました、二年ぐらい前の夏の時にボロボロだったのりで新しく貼ろうと思っていたのがそのままだったのです。とりあえず、もう一個発見

バツ） 今回三度目のうちわの骨組み

「・・・いじめですか？」

そんな俺の呟き

そういえば、俺の部屋には体調万全のうちわ君を置いてないの思い出しました・・・不覚・・・っ！！

そしてまたもや話が変わります

俺の目は故障してるらしく、時々虫の幻覚が見えるのですが・・・今回は小さな蟻の幻覚が見えました

なので、観察してたのですがなかなか消えませんが

とりあえず手で押してみる事に・・・（グジョッ！！）

oh・・・本物の蟻かよ・・・どうやら高校に持って行ってるバツクに相乗りしてきたようですね

小さいほうの蟻は結構好きだったので残念・・・

まあ、まだ幻覚は見たときがあるので、そっちな残念・・・

誤字・脱字があればマジで御報告お願いします

8話 まかi・・・いや、なんでもない(前書き)

サブタイトルの意味がわからないって？

ふふっ・・・俺もです

なんでここで「なんでもない」ってのを入れたのか
わかりません

8話 まかi・・・いや、なんでもない

「いやいや、さすがにあの状況は危なかったよお、ありがと」

そんな気楽な感じの事を言ってきたのはヒドラもう腹の傷は治っている。なんとという回復力・・・

「それにしても、その二人は知らない顔だけど君達二人とはよく会うなあ」

俺と美月を指を指してそんなことを言うヒドラ

「そりゃあ、俺達がお前を捜してたからな

・・・いや、探してたのはお前の腰に引っ付いてる少女・・・ミイというべきだが・・・」

俺がそれに対して答える

「ん？なんで皆はここまでミイにこだわるのかな？」
ヒドラはミイという少女を撫でながら首をかしげている
説明めんどくせえ・・・

「かくかくじかじか・・・というわけなんだ」

さすが俺、省きっぷりが尋常じゃない！！

「へえ、そうなんだ。つまりこの子が魔神の召喚とやらに必要なんだね

でも、この子一人だけじゃあ、魔神なんて無理だろうから

他にもたくさん捕らえようとしていることは間違いないだろうね」

何故にわかったッ！！？まあ、話が早くて助かるけど・・・

そして意外とこの人（竜だけど）頭を使ってるね！！

馬鹿かと思つてたよ!!

「たしか、ミイと同じような黒髪黒目の少年が魔界でも保護されてるつて話だったよ？」

あとのこと話にないなあ……」

そんなことを言うヒドラ。ふむ、魔界にも保護されてるんだ……俺、それは聞いてなかったな……

まあ、必要の無い事だと思つて教えてこなかったんだろうな

「それで……この状況はどうするよ……」

俺の呟き

まわりでは建物が倒れ（俺が振り回した奴も含め）とてもゴチャゴチャしている

美月と瑞穂と和馬が一応、巻き込まれてる人がいるか調べている
ヒドラ達が派手に騒いだせいもあつてその可能性は低そうだけどね

「とりあえずバツくれようZE」

まるで小学生のようなやんちゃな笑みを浮かべたヒドラがそんなことを言った

賛成

「……この施設か」

……魔族の住まう大地、つまりそこは魔界だ

魔界はこの頃は少しずつ明るくなってきたが、まだ暗いと言えるほどだった

今の魔界ではある都が中心になっている、「魔城」という簡単な名前の城

そしてそれを中心とした円形の都市だった

その都市のある場所には施設があり、その施設の前にある広い場所では

魔族の兵士達が血を流して倒れていて、さらには息すらしていない。死んでいるのだ

その倒れてる魔族達の中心には一人だけ立っている男がいた

黒髪・・・そして白い肌、つまりそいつは人間だ

「まったく・・・戦闘が得意なタイプじゃないのにな、俺は・・・。

・・・こんな泰斗の野郎に任せてればいいんだよ・・・」

その男がぼやく

その言葉の中には墮勇の内の一、都堂 泰斗の名前があった

それからわかるとおり、この少年も墮勇の一人だ

その少年は施設に入っていく

目的の物を捜している・・・。それは黒髪黒目の少年だ

ときどき兵士・・・というよりも子供を世話しているであろう職員と会い

片手に持ったバスタードソードで躊躇いもなくそれを殺す

「・・・まったく、目的のためとは言え。こんな面倒な事をしなくちゃいけないとはな・・・」

そんな軽口を叩きながら歩き続ける

そして、ある一室についた

そこには大勢の子供、魔族もふくめ人間までいる

その子供達は貧しい生活で今にも死にそうになっていたところを保護された子供達

魔族が人間達とうまくやっていくためのいくつかある努力の内の一つ
魔族と人間の子供達は血のついた剣を見て、恐怖という感情がわき
あがる

そして、その人間の子供の中に黒い髪に黒い眼の少年・・・つまり
目的のものを見つける

「よし、あとはあいつを捕まえれば仕事終了かな・・・」
そういつて一歩踏み出そうとした所で・・・
墮勇の少年が横に吹き飛ばされた、壁をいくつも突き破りながら吹
つ飛ばされ

6つ目の壁に当たって止まった

「血の臭いがするからなんだと思ったら・・・」
まさかこんな場面だったとは思いませんでしたね・・・」
そんな声が聞こえた。その声は女性のもの
その声の主の名前はリーシ・トルウマア。魔界で一番の実力を持つ
女性だ

「・・・いてえじゃねえか」
そう言つて少年が起き上がった
その目には、殺意の色が見える

「あなたが墮勇てやつですか？」
その少年にリーシが問う

「・・・何故お前に教えなきゃならねえんだよ」
殺気のもつた言葉

「ふむ、その返答はYESって事ですね」
それを無視するリーシ

その様子にさらに怒りを見せる少年

「まったく、せっかくあの子と散歩していたのに・・・
あ、ちなみにあの子の名前はリミって言いますよ、今は近くの知り
合いの家に預けてます」

途中からどこに話してるかわからないがリーシがそんなことを言った
あの子・・・つまり徹夜から渡された魔族の少女はリミという名前
らしい

「・・・お前、気が可笑しくなつたか？」

その様子に変な表情を浮かべる少年

「あなたが気にする事ではないですね」

それを一蹴するリーシ

「・・・とりあえずお前は俺を殴ったんだ、その仕返しぐらいはさ
せてもらおうか」

怒りの表情で言う墮勇

「ん？私は殴ったわけじゃない、蹴ったんだ」

それを見ても表情を変えずに言い返すリーシ

「同じだよッ！！」

そういつて走り出す少年

その手に持ったバスタードソードを振りかぶる

「・・・とりあえずこの場では子供達に被害が出るかもしれませんね
移動しましょうか・・・」ダイク・インパクト『闇の衝撃』！！」

その呪文と共に黒い闇の衝撃が少年を襲う

「ぐう・・・っ!!」

それをバスタードソードで防御の体勢に入った

そして爆発音が響く

「・・・チイツ!!」

ズザザザ!!と靴底から音を出し、小石を弾き飛ばしながら施設の外に着地する少年

さっきの衝撃で吹き飛ばされ屋外に出たのだ

そして何かの気配を感じ、上を向いた

その視線の先には空中でロングソードを構え、そのまま落下しながら振り下ろそうとしてくるリーシがいた

「ハアッ!!」

その言葉と共にロングソードをリーシが振り下ろした

「・・・ッ!!」

それを後ろに跳んで避ける少年

それを追う様にしてリーシが着地した後にロングソードを振るう

ロングソードとバスタードソードがぶつかり合う

火花がいくつも飛ぶ、剣の残像が見えるほどの速度で振るわれている

ドパアアアアン!!という音が響き

リーシと少年が同じ距離を吹き飛ばされ、それぞれ同様に着地する

二人とも全力で攻撃を放ち、両者とも吹き飛ばされたのだ

「・・・うざい女だ」

少年が悪態をつき

「あなたにも同じ事を言えますね」
「またもそれを一蹴するリーシ」

「こおんの、やろうがア！！」

その言葉と共に少年が動き、バスタードソードをリーシの首を切断するように振る

それをリーシはしゃがんで避けた後にロングソードで体を切断するように振る

「・・・ツ！！」

それを避けた少年

それに対して殴るようにリーシがロングソードを持ってないほうの拳を放った

体のスレスレ手前を通って顔を狙うような軌道

そしてそれを顔を横にずらして余裕で避けた少年だったが

「・・・なツ！！？」

その少年の体が切り裂かれた

浅い傷だが、その攻撃があったのがわからなかったので驚いたのだ
それは拳が通ったのと同じ軌道だった

「ふふ〜ん 魔界はまだ暗いですからね〜・・・こんなものにも気をつけないとダメだね〜・・・」

したり顔のリーシの手は、なにかをもてあそんでる様に動かしてあり目を凝らすと黒い何かがクルクルと回っている様に見えるだろう

それは黒く、少しの光も反射しないように魔法をかけられた小さなナイフだ

そのナイフがもう少し大きかったら少年は重傷だっただろう

「・・・暗闇を利用した不意打ちか」

それを見た少年が呟いた

その顔は悔しそうな顔、そしてどこか楽しそうな顔だった

「次の一手で決めさせてもらおうか・・・ッ!!」

そう言っつてリーシは走り出す。そして少年に接近していく

「・・・だったら、本当の不意打ちつてのを食らわしてやるよ」

そんな声が聞こえたが

気にせずにリーシはロングソードを振るう

そして、少年の首をリーシのロングソードがとらえ・・・なかった

「・・・ッ!?!?」

それに驚くリーシ

少年がいつの間にか消えていた

相手が速いという訳ではなかっただろう・・・一応、スピード重視の美月の最高速度でも

やっとの事だが、目で追えるリーシに限ってそれはない

「これが本当の不意打ちつてエやつだ」

いきなり後ろからそんな声が聞こえた

気配もなく唐突にその声が聞こえ、慌てて相手から離れるようにしながら跳び

声のほうを振り向く

「・・・か、はッ!?!?」

次の瞬間、リーシの首が手でしめられ、壁に背中から思いっきりぶつけられた

その衝撃で無理矢理に肺から空気が吐き出されたいきなりの事に反応できずに手が緩みロングソードとナイフを落としてしまう

「あぐ、う・・・ッ!」

相手の手を引き剥がそうとするが、それもできず

相手の腹に蹴りを入れるが墮勇は眉間にしわができるだけで動じないさっきの壁にぶつけられた衝撃のせいで肺の中の空気も出してしまい普通なら数分は耐えられるはずなのだが肺の中に空気は無く、苦しい

「戦闘つてやつは奥の手つてやつを最後まで取つといたほうの勝ちだ・・・まあ、奥の手を先に使ったほうが勝つ確率が上がるのもあるがな

・・・死ね、魔族」

少年がそう言った。

「ぐ・・・う・・・っ」

その間にもリーシの体から力が失っていくそして・・・

少年の顔を雷の帯びた拳が殴り、吹っ飛ばした

「ゲホッ・・・ゲホ・・・ッ!」

その事でようやく空気を吸う事ができた、リーシ体はぐったりとして、少しの間動けそうに無い

その彼女を支える魔族の少年が一人と目の前に立っている魔族の少

女がいた

「まったく・・・あんたがそんな状況になるなんて、珍しいわね」
その声が聞こえた

それは、少女の声。そして魔族を束ねる同じ立場にいる魔族、ミルリアだった

そしてリーシを支えているのはミルリアの部下であるロシアンだった

「・・・遅いですね、せつかく最初にあんな派手な音を立ててあげたのに」

リーシがミルリヤに対してそんなことを言った

最初の魔法で少年を施設から追い出したときの轟音は他にも意味があったようだ

「あのねえ、すぐに来れるわけないでしょ。言っとくけど一応さっきまで中央の魔城にいたんだから・・・まあ、そのおかげで私以外にも来たみただけどね」

その言葉通りだった

ミルリアとリーシ、そしてその向かい側には少年を挟む形で4人の魔族がいた

ジールクとルクライルとツールウ・・・そしてジールクの部下のメイトがいた

「・・・あなた達も遅いです」
それに対してリーシが言った

「いやあ、勇者にもらった将棋とやらに夢中になっちゃって・・・」
それに苦笑いの返答を返すツールウ

「・・・すまん」

なんとも申し訳なさそうなジールク

「ごめん、リーシ。私が無理矢理にもこの馬鹿二人を連れて来れば良かったんだよね・・・」

ルクライルの言葉。これまた申し訳なさそうだ

「・・・ぶっ」

その状況にメイトが笑っている

そして、ジールクになぐられていた。それは気にしないでおこつ

「チツ・・・うざったいのがゾロゾロと・・・」

そしてミルリアに殴られた少年が立ち上がった

「結構本気で殴ったのになあ・・・」

それを見てミルリアが驚いた表情で呟く

その拳の雷がビリビリ...とさらに音が大きくなっている

「・・・黒いの中から報告のあった墮勇ってやつみたいですよ、簡単には倒せません」

それに対してリーシが答える

少しは体が回復してきたようで自分一人で立ち上がり、闇を出している

「へえ、面白そうだな・・・」

それに対して笑みを浮かべるツールウ

その体には風を纏っている

「ここで騒がれたのには少しイラつくな・・・燃やしていいか？」
いつもどおりのジールクの燃やす宣言。当然その手には紫色の炎がある

「二人とも、無駄にはしゃがないでね・・・近所迷惑になるから
ちよつと可笑しい気もするがそんな発言をするルクライル
他の『魔界六柱』と同様にルクライルの周りでは赤い水がうねって
いて

戦闘準備は完了しているようだ

「・・・これはめんどくさそうだ。あくまで俺は戦闘タイプじゃないからな

ここは一旦、退かせてもらおう」

そんな言葉を発すると同時に少年が消えた

「コッコッ・・・ッ!!?」「」「」

それにリーシ以外の四人が驚き

リーシはまたか…という感じで舌打ちをした

完全に気配が無かった

「これはなにか対策をとった方がよさそうです」
リーシがこれから何をすればいいかを考え始めた

8話 まかi・・・いや、なんでもない(後書き)

100話突破記念、というわけで今回は早めに投稿させていただきました

いつもどおり、ストーリーは進んでいきますけどね

3話先まで書いてあるので問題はないです(・・)

さてさて、今回は敵の強さの説明をさせていただきます
基本的に今回の墮勇の三人は少しの強さのズレがあるもの
ほぼ同じほどの強さです

まだどんな感じなのかは完璧に出せていないので誰かどんなものか
は言えません

今の墮天使はイリルさんからの傷により弱っており、墮勇より大分
劣っています。完全回復すれば墮勇より少しばかり劣っている感じ
の強さです

完全回復であればヒドラとも互角かそれ以上に良い戦いを行えるは
ずです

リーシさんの強さは墮勇より少しだけ下です

今回で言う奥の手を先に出した、あるいは取つといた墮勇さんの
勝ちなわけでありませう。

徹夜くんも言っていました、相手にどんな魔法があるのかわからな
いのが一番怖いというわけです。

なんで、いきなりこんな説明をしたのか、それは俺の一つの疑問に
よります。「あれ？最初に考えてたのと少し力関係が可笑しくねえ
か？」ということにより、「弱っている墮天使」「奥の手があるか
ないかでの負けのリーシ」を説明させていただきました

まあ、そんな感じですよ

そういえば、墮勇とリーシの戦いの時にリーシがまともに魔法を使
つていなかったのどうなるかはよくわかりませんです。はい

この頃では、必ず投稿する前に3話先まで書くようにしてるのですが
投稿してるのと、自分が書いてるところが違うので
後書きなどでネタバレしようとしてしまいます
本当に危ないです、気をつけなくては・・・

そして、第二章では25話〜40話程度で終ると思います
？後”ではないです、サブタイトルでの25〜40ですよ
まあ、第二章まで書いてちゃったのでほとんど書いていきます、今の
所で考えてるストーリーは全てこの小説につき込ませていただきます
この小説が終わったらスランプしそうですけどね（笑）
終わるのがいつになるかわかりませんが

・・・やっぱり犬って癒されますよね
特に小さなときとか、もう可愛すぎです
志村・・・馬鹿殿動物園を見て癒された自分が居ます

少し前に買ったばかりのイヤホンの右のほうが悪れた・・・
前のイヤホンは左のほうが悪れたせいで買い換えたのに
まさかの、新しいほうは右のほうが悪れて
またもや片方だけの寂しい音楽が聞こえるだけに・・・
イヤホンが最低でも1000円近くするのに俺には文句があります
まあ、他の人はこれが普通だと思うでしょうが
中学生・・・つまり数ヶ月前まで一ヶ月のお小遣いが1000円だ
った俺にとっては大事な所です
今は3000円に増えたけども、まだまだ貧乏性は残っています

これからの人生を考えても残しときます

受験前（その時は4000円程度所持）に親に小説つまりライトノベルを買ったという

ことでお金を貯めていたらいつのまにか一万8千円に
これにはビックリした自分がいます

ちなみに、受験の前でもラノベは4冊程度買いました

1万8千円になるわけない、とか思う人もいるかもしれませんが、
いろいろと裏技があるわけです

親から盗んだ、とかそういうわけではありませんよ

いや、ホントに違うから

おい、そこ通報せんでいい。いや、マジで

誤字・脱字があればマジで御報告宜しくお願いします

9話 カイギです(前書き)

なかなか面白みの無い話になったと言っておこう

9話 カイギです

そこは会議室だった

ヒドラが襲われてから、魔界でリーシが墮勇の一人と戦ってから・

・3日たった

「・・・それで新しい問題が出てきたわけだがどうするつもりだ？
そんな俺の声

この場にはいろいろな人物がいた

ある席では

魔界では一応まとめ役はミルリアが勤めているので席に座っている
その後ろにはリーシとロシアンがいた

そして、ある席

そこには一人の幼い少女がいた。その容姿からは想像できないがこ
の世界で一番強いと言っていい存在。時空と創造の属性を司る竜、
竜をまとめている竜王女、イリルさんだ

そしてその後ろにはイルリヤがいた。退屈そうにしている

そして、ある席では

『時の巫女』と呼ばれる、未来を見ることができる特別な能力をも
った少女

その存在価値は勇者と並ぶほどでもある。・・・つまりカイラがいた
その後ろにはジョイツという騎士がついている。何故か俺を睨んで
いたりする

・・・何故？

そして、ある席

そこには、いつも王妃の前では気の弱い王様がいた。正直、名前は知らない

ただ・・・王妃がいないのでイキイキとしている、とだけは言える

そして、ある席

黙殺王妃の大国『サラスム』でもなく、時の巫女がいる大国『レーゲン』でもない

もう一つの大国『ミラゲイル』一の騎士、ザアク・オルライトがいた
どんな時もシャキツとしていて威厳のある大人の生きるお手本みたいな感じだ

他の席では

それぞれの代表がいた、小国が複数でまとまり一人の代表者を出す
ことで

三つの大国の権力に対抗できるようになっていた。頑張って自分達の意見を出すためのものだ

そして、説明してる俺達側では

できるだけ幅を取らないように、俺と美月と瑞穂と和馬が座っている
他の人たちが取っている幅の3分の1ぐらいだ

「・・・リーシが戦ったけど、相当強いみたいじゃない

だから、倒すにしてもそれなりのメンツじゃないと無理だと思っ
け」

ミルリアが口を開く

「確かにそうだろうな・・・まあ、倒すにしても一番問題なのはそ
いつらがどこにいるか、だけだな」

それに対して俺が言った、そいつらに会わなかったら倒すも何もな
いからな

「あははは〜・・・私が墮天使を逃したばかりに・・・」

こんな事を言っているのはイリルさん
机にぐで〜って感じに突っ伏している。シャキツとしてよ、シャキ
ツと

ちなみに俺もぐで〜と突っ伏しているのだが

「・・・魔族の女の話聞く限り

突然その墮勇とやらが消えた事について気になるのだが・・・」

そこでザアクさんが口を開く。これは俺も聞いてないなあ
すると、瑞穂が口を開いた

「まあ、一応やつらも元勇者って言えるかな〜・・・

やつらは自分の得意な魔法を徹底的に鍛えてるんだよ

まだ未完成だが俺の場合は防御魔法を特訓した末のアイギスだから
な」

「徹底的に・・・か」

なかなかめんどくさそうだな〜

「まあ、そのリーシさんとやらが戦ったの墮勇は姿を消したりする
完全に気配を遮断する魔法が得意なんだろうな、気配や音と足跡、
魔力に魔法の痕跡まで消せるような位の魔法だと思う」

ふうん、やつぱりなかなかめんどくさそうな奴だな〜

隠れられたらめんどうだし・・・

そこまで特化している魔法なんて普通はありえないんだけどな、ま
あ（堕ちたけど）勇者だったらなんでもありか？

「ふむ、どおりで簡単に不意打ちを食らったわけか・・・」
そこでリーシが口を開く

まあ、それはしょうがない事だろうな

「それはどの位まで身を隠せる魔法なのかな？」
そこで美月が口を開く

「さあ・・・？相手が自分の奥の手の性能をそうそうあかさすわけはないからな」

それに瑞穂が答えた。まあ・・・あたりまえのことだな

「失礼だが、君達はどのくらい強いんだ？その特化した魔法とやらも教えて欲しいのだが」
ザアクが瑞穂と和馬に言った

「ああ、俺はもう言ったよな、防御系の魔法だ。まあ、本当の力は見せてないけどな

すこし面倒な条件があつて、発動できないんだよ」
それに対して瑞穂が口を開く

ふむ、強さに対しては俺が言わせてもらうかな

「まあ、強さは心配しなくて言いと思うぞ。・・・俺と美月に互角な感じで戦ってたからな」

それに対して驚いた様子を見せる人が多数いる

まあ、魔王を倒した二人相手に互角なのだから驚くのも当たり前か

「・・・じゃあ、俺の魔法か。簡単に言うと『増殖』だな」
そこで和馬が口を開く

「・・・増殖とはなんですか？」

イリルさんが口を開いた。それは俺も気になるな

「ああ、最初に一つは自分で持ってないためなんだが・・・無限に増やすことができるって所だな」

和馬がポケットから一本のナイフを取り出す

それを他の人から隠すように手で一瞬だけ遮り・・・すぐに手をどけると、そこには二本のナイフがあった

それを見た人たちは驚きでざわついている

「創造属性の魔法ですね・・・」

それに対して驚いたように口を開くイリルさん

ということはイリルさんもこういう系の魔法を使えるのか

む、勇者も普通に使えるみたいだから俺や美月もできるんだよな？

あ、俺の闇の中で物を作るのも創造属性の魔法に入るのかもしいないな

「・・・どおりで弾切れがしないわけだ、あれは怖かったなあ・・・」

そこで美月が口を開く

そうか・・・拳銃のなかで無限に増殖させてたわけだ・・・

ほぼ残弾に制限のない拳銃を二丁使ってるわけか・・・

ちなみに美月は弾丸を弾いてたときを思い出したのか、恐怖の言葉を言っている

「よく言うな。美月は。弾丸を剣で弾くってこと自体が恐ろしい事だと思っがな・・・」

それに対して和馬がそんな事言った

俺も同感だ、本当に美月の速さは怖いほど異常だとおもっ

うん、俺って優柔不断

「・・・ふむ、二人の強さは十分わかりました。それで墮勇とやらの居場所が問題だ」

ザアクが口を開く

「・・・その事なら、巫女様に予言できるのではないか？」
今まで口を開かなかつたサラスムの国王が口を開いた

「・・・その事なのですが、一ヶ月とちよつと前からどうも未来を見れなくて・・・」

カイラは悲しそうな顔でそんなことを言った

「一ヶ月とちよつと前つていうと・・・墮勇がこの世界に入った時だな」

そんな前から入つてたんですか・・・初めて聞きましたよ
まあ、魔界に黒髪黒目の少年が保護されてるつていう情報も手に入れたみたいだし

準備期間として一ヶ月をすごしていたんだろうな・・・

「・・・なんで『時の巫女』様が時をよむことができないんだ？
誰かがポツリ」と言った

それに対して、さらに申し訳なさそうな顔になるカイラ
・・・墮勇はカイラの能力に干渉できるのか？そんな疑問を俺が抱いていると

「・・・カイラちゃんが能力を使えないのには、その魔神とやらが関わってるでしょうね」

イリルさんが口を開いた。どうやら、話を続けるようだ

「カイラちゃん・・・というより代々の『時の巫女』の能力には普通の存在では干渉などできませんからね、最低でも神と同等の力は必要です。私やイリルヤ、魔王に勇者ならギリで、できそうですが・・・今カイラちゃんを妨害する理由がありませんしね。魔王はもう

死んでいますし、相手が『時の巫女』という存在がいると知っていたとして、その方法を墮勇が知ってる訳ありません。長年生きてなければその方法を知ることが不可能ですからね」

ふむふむ、すごいなイルルさんは・・・

「それで、どうするんだよ？」

少しイラついてきた。もう面倒なことが多いなあ

まあ、ここで誰かに怒っても意味無いから溜め込んでおこう
墮勇さんやらに会ったらぶつけさせて頂こうかな

「私のほうでもいろいろと情報を探りましょう、ついでに私も出るつもりです」

墮天使を逃がした責任もありますしね」

イルルさんが言った

まさかの出撃宣言、この世界で一番強いだろう存在が動くのか・・・

「・・・姉上がわざわざ動かずとも、我が動けばよいのではないか？」

そこで後ろにいたイルリヤが口を開く

それを聞いたイルルは

「あなたはどうせサボるでしょう？サボるのだったら優秀な部下のいる城でサボらせたほうがまだマシというものです」

ニコリと笑うイルル

「・・・それはサボっても良いと言う事でおじやるか？」

少し嬉しそうな顔でイルリヤが尋ねた

「・・・当然、サボったら仕置きをすることは間違いなしです」

イリルさんの笑みはまるで氷のように冷たいものだった
そして、それを見たイルリヤは固まる事しかできなかった

「じゃあ、魔界の方でもいろいろと情報を探ることにするわ
当然、魔界六柱も全面的に動かせていただこうじゃない・・・」
ミルリアがそう言った。ふむふむ、結構みんな力を入れてきますな

「・・・では、黒髪黒目の人間については我が国が搜索し保護しよ
う」

そんな事を言ったザアクさん
ふむ、大国が保護してくれるのであれば問題ないだろうな

「じゃあ、私達でも墮勇を捜しますね。見つけ次第、私達、または
イリルさんや魔界六柱などが討伐に向かうという方向で良いですね
？」

そこで美月がそんな事をいった。
結構なメンツだな・・・魔界六柱の5人が揃ってれば問題はない
だろう

他の人は何も言わない、つまり異論はないと言う事だ
ああ・・・俺はまた面倒な事に巻き込まれるのか・・・
やだな・・・

ちなみに、美月はサラスム国王からラルチ・・・元勇者御一行の情
報網・・・を借りることにしていた。

ああ、あの少女は・・・俺を凄い睨みつけてくるから嫌なんだよね
・・・
そんな感じで会議が終った。ちなみに会議中の俺は闇で遊んでいた
りした
だって暇なんだもん

9話 カイギです（後書き）

あはは、今回の話はあまり書いておもしろくなかったとです
ふう〜・・・自己満足小説で自己満足できないとは何事か・・・
面白みがあつて自己満足のできる小説にしていきたいです

他に書くこともありませんので

今日はここで終わらせていただきます

誤字・脱字があればマジで御報告ください

10話 ぐうっ!!俺の悪魔の右腕が…ッ!!(前書き)

悪魔を倒した代償に呪われた俺の悪魔の右腕が・・・

くそうっ!!勝手に!!勝手に・・・っ!!

プヨプヨで16連をやっていやがるうううッ!!

・・・

はい、意味わかりませんよね、自分でもわかりませんので無視して結構です。

・・・では本編を宜しくお願いします

10話 ぐうっ!!俺の悪魔の右腕が…ッ!!

会議から3日たった

今までの情報をまとめてみると

竜の国の最強幼女、魔界、元勇者御一行で俺を睨んでくる少女が墮
勇たちを捜している

大国『ミラゲイル』では、黒目黒髪の人を見つけ次第、保護をする
そして俺達は墮勇の討伐する、ということらしい

・・・本当に・・・面倒だあゝ

ちなみにヒドラの方では、少女・・・ミイと一緒にミラゲイルにいる
最初のほうではヒドラはミイを置いてドラゲイルに帰るつもりだっ
たらしいのだが

ミイがヒドラを逃がさなかった

さすがのヒドラもミイのジ〜と見つめる攻撃には敵うわけもなく
諦めて二人でいるらしい

幼い子供の純粋な心の力・・・さすがと言えよう

「はあ・・・」

俺の溜息

もう面倒な方向に進んで止まる様子がないのが理由だ

「徹夜、溜息をすると幸せが逃げるよ?」

もう逃げてます。というか逃げてるから溜息をついてるんです

ああ、もうやだなゝ・・・

「・・・もうやだゝ」

つい声に出してしまった

「何が嫌なんだ、徹夜」

和馬の質問

お前らが持ち込んだことについてだよっ！！

「いろいろと嫌なんだ」

間違っていないです、いろいろとこの状態は嫌ですもん

まあ、今は食事をしてる最中でもあるわけです

俺はチャーハンもどき

まあ、キョクトウからお米を入荷している宿に泊まれて良かったと思う

美月はパンとスープにフルーツのデザート

スープはコーンポタージュのようなもので

デザートはフルーツの盛り合わせ、これがこの世界の標準といえるだろうな

瑞穂は何の肉だか忘れたけど、とりあえず肉の塊にかぶりついている軽く美味しそうなので羨ましい

和馬は美月と同様でパンにスープ

スープの種類が違うのだが、あえて言えば白いシチューみたいなものだ

そして俺の疑問が一つある

それは簡単、そして俺達にとってはとても重要なものだった

「なんで俺達はこんなにのんびりしているんだろうな？」

「「「「「さあ？」」」」」

ハッキリ言おう

・・・やる事がない

あえて言えば、堕勇を見つければ一番しんどい事をするのは俺達だ
と言えよう

ただ・・・見つけなければ楽なのだ

いずれ相手も派手に動くだろうから、この楽なのはいつまでもは続
かないが

その相手が動く、または仲間が相手を見つけるまでは
やることはない・・・とつても暇なのだった

そしてそれは続き、その日は終る

それから3日、つまり会議の日から6日過ぎた日だった

それは唐突に現れた

まあ、それと言っても魔族が二人に見たときのない人が一人だった
魔族の二人はリーシとミルリア

そしてもう一人は美人と言える女性

白い肌に金色の長い髪、整った顔立ちにツン…と尖っている耳
つまりエルフだ。初めて見た

美男美女の種族と言われても無理はないだろう顔の持ち主である

そして、ミルリアが最初に口を開いた

「リヤナ姉様じゃない・・・だと・・・っ」
またか・・・お前それしか言えないのかコンチクショオツ!!
絶対に俺の体はのつとらせねえツ!!
だから暴れるな、この野郎ツ!! (妹思いな姉に言ってます)

「私達の情報網がどうやら例の人達らしきものを見つけたようです
てね」

リーシが口を開いた
それはわかったのだが、少し気になることがある

「そちらの方は？」
美月は質問する、当然、エルフのことだ
するとエルフの女性が口を開いた

「私はミーフアと申します。こちらに伺ったのは、あなた方が捜し
ているという

墮勇という方が私達の長であるハイエルフ様の昔の屋敷に居るらしいのです

これには私達の長も困っております、相当の実力を持っているよ
うなので手が出せず

・・・という事によりこちらに伺わせていただきました」
その声は、凜としていて美声と言っていていいような声だった

むう、エルフって・・・なんだか外見とか声とかめっちゃ凄いだ
けど

これはモテる事は間違いなし、ということだ

「・・・どうすんだ？美月」

とりあえず美月に聞いてみよう

一応、こいつがメインの勇者なのでね、ちなみに他の二人は行く気
満々だろう

「行くしかないでしょ」

美月のその発言

ああ、こちらも行く気満々ですか・・・
やっぱりめんどいなあ・・・俺ってなんでこう面倒な事に巻き込まれるんだ？

「エルフの森には私がご案内します
エルフの森は少し特殊なので森に入ったら私から離れないようお願いします」

礼儀正しく淡々と話すミーファさん

「あれ？お前達も来るの？」

俺の質問、これはリーシとミルリアに向けて言ったものだ

「私が戦った相手だったら少し仕返しをさせていただけこうと思ってね
・・・全身の体の皮膚を剥がしてあげちゃいます」
わあ、怖い発言するね、あなた

首絞められたのに相当怒りを感じているみたいだね
ていうか、特に怖いことを言ってるときだけ言葉遣いが女っぽいなッ

「なんで、リナヤ姉様じゃないの・・・？」

ミルリアの疑問の言葉、そしてまさかの上目使い
ぐう・・・っ！！？リナさんがさらに暴れだしたぞッ！！？

・・・

なんだこれ、もし俺が口で何か言ったら・・・
『ぐうっ！！俺の悪魔の右腕が・・・ッ！！』みたいな定番の感じですげえ、恥ずかしくなりそうだ・・・

口に出さずにいてよかったあ・・・と思う俺であった

10話 ぐうっ!!俺の悪魔の右腕が…ッ!!(後書き)

んちゃ〜です〜

こんいちわ〜、再来週はテスト

なので今まで貯めてきた話を消費して勉強の時間にするつもりです
ちなみに七話先まで書いてあるので十分大丈夫なはずです

そして、今回は初のエルフ!!

ああ、やっとこのときが来ました・・・

あこがれのエルフ・・・あまり出てもストーリーに意味は無いので
すが・・・とりあえず出したかったのでよかったです

総合ポイントが3000を越えました。ありがとうございます。

まさかここまで行くとは思っていなかったのととても嬉しいです
本当にありがとうございます

そして、今回の話についての話ですが

ミーフアってこの小説での名前が同じ他の人っていませんでしたよ
ね?

なんかもう名前があるかわからなくなってきました
これからどん・・・どん・・・かぶっていくかもしれません

いや、かぶらせる予定もありませんけどね

なのでかぶってたら報告してください、変更します

パケホは偉大だと思います

携帯を買ってもらいついついやってしまう俺

駄学生の手本の俺

前のつきのEモードの使用金額

120万円 (00)ギャー……ス!!

でも、パケホとかのおかげで・・・合計50000～60000
・・・気をつけようと思いました

誤字・脱字があればマジで御報告お願いします

11話 ???? & quot;...? (前巻)

) (

11話 「そい"」?」?

ガサ…ゴソ…という音がした

それは俺達が足を動かし前に進むたびに聞こえる

ここは森の中だ。エルフのミーファさんの後に続いてゾロゾロと行
進中

「エルフの森には特別な魔力が渦巻いており、方向感覚が失われる
ことがあります

なので人間の方などが間違っ
て入ってしまうと出ることができず
に死んでしまう場合があります」

ミーファさんが歩きながら説明をしてくれた

歩くといつても俺達は相当早く走っているのと同じだった

「エルフと森で、ドワーフと洞窟内で、この状況ではレースはする
な」

俺が中学生の頃に読んだ小説にそんな言葉があったが、その言葉に
はとても感心した

普通の道だと俺達よりもスピードは劣るのだが、森に入ると相当速
くなった

なにやら森の力…つまり森の加護があるみたいだ

「…ちなみに、上空にもその影響はあつてね…私達の戦艦が進
入すると

戦艦の機器が壊れちゃうときがあるんだよ」

ミルリアがさらに説明してきた

ふうむ、侵入者を拒むエルフにとっては最強の砦ってところかな…
?

「なんでエルフの人たちは平気なの?」

美月が疑問に思ったことを聞く

「私達でも別に平気というわけではないんですよ？」

祖先の時代から森を歩いていて細胞レベルでこの森の知識が受け継がれているのと

やはりこちらも祖先の時代から森のあちこちに私達しかわからないようなサインがあるんです。それを見つけて歩いていってるわけですよ」

「すごいんだな〜・・・」

超アバウトな俺の感想

「とても微妙な感想ですね・・・」

いや、それ位しか考えられないんで。ホントこんな頭の持ち主で申し訳ないっす

ええ、その視線がとつても痛いですね、マジでその目はやめてくれませんか？

「たとえばどういう風なサインがあるんですか？」

「あまり詳しくは言えないんですが、例えばこんなものとか・・・」
そんな会話が続けてる間にも

どンドンと走っていく、サインを見せるときにはさすがに立ち止まる必要があつたが

そのほかの時は走り続けている

見せてもらったサインは二個で、木にナイフで目印を書く、とかそういうものではなかった

とても見つけづらいもので、もしサインがあると言つ事を知っていても簡単には見つけられないだろう

このスピードでそれを見つけないながら進んでいるミーファさんにはさ

すがはエルフだ、としか言いようがない

「あと10分程度で屋敷の近くの集落につきますよ」

ミーファさんのその言葉

ふむふむ、結構走り続けてるけど・・・やっとかゝ・・・

ちなみにエルフの森には大きな集落が5つ

現在だとハイエルフがいる集落が中心にあり、それを囲むように四つの集落がある

その四つの集落のまわりに小さな集落などが点々と存在してるようだ

そして、今回はその周りにある大きな集落の一つに向かっている・・・

・らしい

そして俺達もどんどん進み、時間も進む

予定通り10分・・・。そう、ジャスト10分で集落に着いた

別に10分を強調した所に意味は無い、なんとなくだ

そして今は集落の中、そこでは普通に歩いている

「ハイエルフ様がお待ちしておりますので、そちらに案内させていただきます」

ミーファさんが口を開く、どうやらこの集落にエルフの王族が来てるらしい

ふうむ、走りすぎたせいか・・・なかなか足がガタガタくるね

森なんてところ跳んだり跳ねたり・・・いや、跳ねてはないけどね跳んだり、走ったりしては疲れるのは当たり前か

ちなみに、やはりエルフの集落などには人間や魔族などは来る事がないらしく

大人のエルフを含め子供達がこちらを見てざわついている

集落はとても賑やかな所で、生活の仕方などは人間と変わらないよ

うで

店などいろいろなものがある

そう言えば少し前まで魔族は世界を支配しよう、みたいな動きをしていたはずだが

魔族がいても大丈夫なのか？

そんな疑問をミーファさんに聞いてみることに

「いくら魔族と言っても森では私達の有利な状況ですからね。それにハイエルフ様が居るので皆安心して居るんですよ」

「ハイエルフってのはどのくらい強いんだ？」

瑞穂の質問

「今の代を収めるハイエルフ様は特別で創造の属性の魔法を使えま
すからね

竜王女や魔王、「創造」「時空」の魔法が使って成長の限りの無い
勇者、それらに比べれば叶わないでしょうが、相当の実力者ですよ。

まあ、森中なので実力も増しておられますし」

まあ、俺は『重力操作』^{クラビトン}は創造の魔法なのかな？

ちなみに後で美月に聞いたのだが、どう便利なのかわからないから
あまり使わないし

『時空』の属性の魔法は最高速度のときに無意識に使ってるらしく、
余計に自分を早く見せてるらしい

まあ、瑞穂は知らんが和馬はバリバリで使いまくってるよね

・・・とりあえず俺の邪念よりも会話に戻ろう

「じゃあ、なんで墮勇を倒さないんですか？追いつく事もできそ
うなのですが」

和馬がそれに対して質問している

ちなみに俺、美月、瑞穂、和馬、リーシはこの会話に耳を傾けてい

るもの

ミルリアはエルフの集落を見て、はしゃいでいる
そのミルリアをロシアンは微笑ましそうに眺めている

「それが、昔の屋敷の周りに変な魔力が集まっておりまして・・・
森の力を受けつなくなっていますし、変な魔力がどういったものか
不明なので

手を出そうにも出せずにいるんですよ・・・」

ふむふむ、なかなか興味深いなあ・・・
森の力っていうのは、エルフの力を増してくれるものらしい。ふむ
ふむ

そして俺達は歩き続け

ある一軒の家の前についた、どうやらここがそうらしい
ハイエルフが待ってるらしいから豪華で大きな建物なのかな、と思
っていたのだが

ミーファさんの話によると、ハイエルフは今の中央の集落にある大
きな屋敷以外は

こういった普通の人に住むような家しかもっていないらしい
普通の家をいくつも持つてること自体贅沢なのだが、エルフの王族
なのだから

豪華なものばかりかと思っただ

「ハイエルフ様は贅沢を嫌うお方ですから、中央の集落にある屋敷も
最初は住むことを嫌がっていたんですよ。両親から受け継いだもの
だから渋々住んでるらしいです」

へえ、どんな人・・・じゃなくてエルフなのかな？

そしてミーファさんが扉をノックすると「入って良いぞい」という
言葉が返ってくる

む??ぞい”・・・?・・・気にしないようにしよう

言葉に特徴があるキャラだって今までにいたし（例：剣の双子の精霊
そして扉を開き中に入る

「お主らが勇者とやらか、私用のために来てくださって本当に感謝
するぞい」

そんな言葉をかけてきた。？ぞい”・・・？

歓迎の言葉に異常は語尾に少しあるが、とりあえずそこは気にしない
容姿の説明をしよう

ツン・・・と尖った耳は他のエルフと同じで、イヤリングが両方の
耳に3つずつついているが、そこは問題ではない。・・・顔も整っ
ている

そして・・・その整った顔にはどこかやんちゃな男の子を連想させ
るものがあり

身長は153あたり、手は小さく足も小さい
簡単に言つと小学生ぐらいだ

「・・・ガキ・・・だどつ？」

俺の呟き。それにミーファさんが驚きの表情をしてこつちを見てくる
最初の大一声がとても失礼なものだから驚かれるのもしょうがない
だろう

そしてそのハイエルフの少年は・・・

「何を言つかツ！！これでもわしは800年は生きてるぞい・・・
ツ！！」

えええツ！！？イリルさんよりも生きてる時間は短いだろうけど・・・

・えええツ！！？

まさかのイリルさんと同パターン！！？

11話 ?ぞい":;? (後書き)

あとがきに特に書くものがなくなってきた件について・・・

とりあえず今週、または来週の

投稿日は水、土、日、月になります

月からさきはテスト終了まで投稿いたしません

それが終わったらいつもの投稿に戻ろうと思っています

ハイエルフはイリルさんと同パターンでした

しかも変な語尾のおまけつき、いろいろと面白いですな

書くことも無いのでこちらで終らせていただきます

誤字・脱字があればマジで御報告ください

12話 なんのじやせん... (前巻)

びみゃっ!!! 0 0

12話 なんのことやら…

まさかのイリルさんと同パターンの展開

そして白の魔女・・・つまりハクを越すぐらいの時を生きてもやっぱり・・・うん、やんちゃなガキだな

「失礼な事を考えるておるなツ！！これでも昔は大人の姿だったんだぞい・・・！！」

ほほう、まさかまさかのそのお言葉とつても気になりますなあなので・・・

「じゃあ、なんでそんな姿になったんだ？」

俺の質問、今の所は凄い気になるところである

だって、こういうのって凄い気になるじゃないですか？

それにはハイエルフが答える前にミーファが答えた

「このお方・・・つまりギエル・エンバールという名なのですがこの森の不思議な力は前まで不安定だったのです。その不安定な力はいろいろな災いを持つてくるものでした。それをギエル様が自分の莫大な量の魔力を使い、安定させたのですがその時に体が縮んだそうです。理由はわかりません」

・・・エルフの体の神秘発見！！

うわあ、なんでそうなったのかめちゃくちゃ気になるんですけど

「ふふんっ…！！これでよくわかったぞい？我は大人なんだぞい！！」

胸を張って大きな声でわめいているギエル

「結局のところ見た目はガキだけだな」

おっと、つい本音を言ってしまった
その言葉にギエルは精神的ダメージ、膝をつき両手を地面につけてうな垂れている

「別に好きでこうなったわけじゃ……そこまでいわなくとも……ひどい……ぞい……も、やだ……疲れた……」
……てな、感じのことをブツブツと言っていた

「ギエル様、そう落ち込まないでください。その姿でもかっこいいですよ」

ミーファさんの言葉

「ほ、本当かぞい!?!」
それにギエルが反応し

「はい、そうですよ。私は嘘はつきませんよ」
簡単な返事をするミーファ、ハッキリいって言葉に心がこもっていない

「フッフーン」
それで喜ぶギエル。とつても単純だな、こいつ
周りから考えると扱いやすく楽だろうな

「……そんな事より、我は気になっていたのだが」
そんな感じで立ち直りこつちを見てくるギエル

「お主らの中で一番誰が強いのだ?」
俺と美月と和馬と瑞穂を指差しながら質問してくるギエル
ふむふむ……

「徹夜か美月どつちかだな」

ちなみに、和馬と瑞穂は八モツていた

何故に俺か美月なのだ？

「いや、お前らは異常すぎるだろ。俺の防御魔法を砕いてる時点で可笑しいんだよ」

瑞穂の言葉

「俺が放った銃弾を全て剣で弾かれたのにはショックだったからな
和馬の言葉

ふむふむ、まあとりあえず俺か美月か・・・

「俺よりも美月の方が強いな」
俺の言葉

「それは何故じゃ？」

ギエルが質問してくる、いや

説明すんのめんどいなあ

「じゃあ、簡単に説明するために実演してあげましょう

・・・いくぞ、美月」

俺はそう言った後、一瞬の内に五発美月に拳を放ってみる

「え？あわわっ!？」

それを全て避ける美月、ちなみに俺の拳圧で家の壁が壊れちゃったのは秘密

弁償はする気はねえ、どちらが強いかという質問をしたお前のせいだ
・・・という理由で逃げよう

「・・・いくら力があっても速さで負けてたらあたらないからな」

これが俺の判断した理由、あれだ・・・
いくら核兵器をもつていてもボタンを押す前に殺されたら終わり、
てな感じだ

美月のこの完璧女めっ！！・・・うむ、さっきの言葉は忘れてくれ

「さらには・・・何故かこいつには俺の不意打ちは効かない」

俺がギエルに話して攻撃しないと見せかけた所で拳を放ってみるが
それを軽々とかわす美月

・・・ああ、かわす事はわかってたよ、かわせなかつたら攻撃しな
いしね

でも、少しシヨックなんだよ・・・

どうせやるのはデコピンだったからダメージはないこともわかって
たさ

でも、いくらやってもかわされるのはシヨックなんだよ・・・

「ふむふむ・・・確かにそれでは負けるだろうのう・・・」

それを見て納得してるギエル

そして背後では・・・

「・・・てえく・・・つう・・・や？」

はっはっはく・・・(汗)

威圧がとつても凄いんだな、こ・・・れ・・・が・・・

多分、美月は俺が突然攻撃した事により怒っている

俺のことが好きだから許すではなく、好きな俺に攻撃されたことに
より怒っている

・・・というわけだ。ということなので・・・やることは一つ

「さらばっ！！」

俺の拳圧で崩れた壁の所から外に出てもうダツシュをする俺

ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！

ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！

「徹夜！！私から逃げ切れるとは思ってないよねえ！？？」

やっぱり美月には速さじゃ叶うわけないかア！！

いやはや、美月が久しぶりに俺に怒っている！！

これは本当にやばいぞ！！

ちなみに普段あまり怒らない美月は怒ると怖い

そして……

「ぎゃああああああああああああああああああああ……

……っ！！」

俺の悲鳴がエルフの集落全体に響いた

そして最後のほうはまるで人の命がゆっくりと消えていくように悲

鳴が小さくなっていき

……消えた、そして……

「なあ、美月。ホントは怒ってないよな？」

「なんでそう思っの？」

「お前、俺の首を絞めるフリして抱きついてるだけだろ」
めっさ痛くないもん

「……さあ？なんのことやら……」

そんな感じだった。うん、俺は騙された

今まで美月に怒られたのは片手で数えられるほどしかないからな
この程度で怒ったと勘違いした俺が馬鹿だった

12話 なんのことやら… (後書き)

今日も〜ひたすら〜キーボードをカタカタと〜鳴らし〜
あとがきを〜入力する〜それが〜いつもの〜日課〜

うん、意味不明だ

とりあえずトチ狂ってるのをやめようと思います

今回は〜…えつとお〜、徹夜と美月

どちらかが強いか？みたいな感じですよ

正直書いたのは結構前なので思い出すのが大変でした

ふむ〜、美月が徹夜に怒ってる姿が想像できないのは俺だけだろうか…？

うん、これじゃあちゃんと書けないなあ…

どうにかして考えなければ…

そして久々に復活するのはどうでもいい作者におこった情報

今日は俺の祖母が近所にある販売機でアクエリアスを買ったのですが
それでアタリということでコカ・コーラの見た目をした缶のハツピ
ー缶というものをただでゲットしたわけです

その中身は錘が二つにイヤホンが一つというわけなのですが
俺の祖母は80歳を超えてるわけですし、あまりわからないわけですが
その結果、俺が帰ってくるまでイヤホンはキンキンに冷えていました
イヤホンは俺がもらったわけですが聞こえるかどうかを試したとき
の感想を一言

焼き芋「つめた…っ!!」

うん、マジでキンキンに冷えてましたね、聞こえましたよ。ちゃんと・・・まあ、つい笑ってしまった俺がいるわけです

登校日は水曜日ですが、これはその前日の火曜日に起こったできごとです。

ちなみに、ハッピー缶自体は横長の穴が開いており、貯金箱に使えるわけです。なので一円玉貯金箱として使っつもりです。目指せ一千元（一円玉が1千枚）

ちなみに、前も一円玉貯金はやったときがあります。100枚ぐらいで諦めました・・・というより飽きました

とりあえず、今日はこの程度で終わらせていただきますしょう

誤字・脱字があればマジで御報告ください

13話 いっせいの…6 (前書き)

何故だろう？…本当に何故だろう？

理不尽な理由で叩かれるのは何故だろう？

…そんな、俺の悲しい悩み…

13話 いっせいの…6

そして、次の日になった

今はその問題の屋敷に向かっている

今回は歩いている、もしかした墮勇三人と墮天とぶつかるともかもしれないのでできるだけ体力を温存しておくためだ

「いっせいの…6!!」

ちなみに歩きながら遊んでいる俺と美月と和馬と瑞穂

一応、高校二年生の歳の俺たちだが、久しぶりにやりたくなったのだが名前は忘れたのだが、いっせいに親指を立てて言った数と一緒にだつたら片手をしまう

それを一人ずつやって一周して自分にもどってくるのだ

そして、もう一方の手もしまえたら勝ちという簡単な遊び、最後まで残ってたら負けだ

うむ、説明が下手な俺に説明を求めないでくれ

諸君、友達にでも聞いてくれ

それが中学生ぐらいにでも聞いてくれ。中学生なら知ってる確率は高いぞ

ちなみに、俺は…両手が残り

美月はもうあがっている。瑞穂は片手

和馬も片手

うむ…10連敗目の予感

今まで9回負けているのだ俺は…ちなみに罰ゲームはデコピンだそして9連勝の美月には恐れ入る…てか美月のデコピン痛いんだけど

そんな俺たちを見て興味津々でみてるのがミルリアとギエル

横目で興味がありそうに見てるのがリーシ。
完全に先を先導するのに集中してるのはミーファさんだ
さすがミーファさん大人っぽいね

「・・・つきましたね」

ミーファさんの眩き

その目の前には古い屋敷が一軒、とても古くてホラー映画の舞台になってもいいものだ

そしてその周りには線で円状に囲まれている

「この線は変な魔力を広げないためのものだぞい、この線を越えると森の力が届かなくなりエルフの力は減るぞい」

ギエルが説明してくれた

ちなみに、今は関係ないのだがギエルには孫までいるらしい

なんと・・・不思議だな、子供の姿のエルフに同じくらいの孫が居るらしいのだから

この世の中は不思議ばかりだ

「ん、じゃあ。ミルリアとリーシはここで残っててもらおうか

俺と美月と和馬と瑞穂がいく」

俺がそういうとミルリアはなにやら涙目で素直にコクコクと頷いてくれた

それを俺が疑問の顔で見ていると

「・・・だって、あんな怖いところ行きたくないもん」

あああ、そういうことか・・・魔界も十分怖い所だと思っけどな

《あああッ！！、抱きつきたい抱きつきたい抱きつきたい抱きつきたい
たい

あああ・・・抱きつきたいいいい〜ッ！！》

はいそのシスコン気味のクソ姉さん！！騒がないでくださいね〜
暴れんのはやめてほしいですよ〜

今度体を貸してあげるのでマジでやめてくださ〜い

と、そんな感じでやっとな暴れるのをやめる姉さん、まったくめんどくさいやつだ・・・

本当にこの頃「めんどくさい」系の言葉が増える気がするのはい気のせいか・・・

「・・・この魔力はあいつではないですね。ここはあなた達に譲りましょう」

リーシがそんなことを言った

線から向こうに手だけを入れて魔力を探っていたらしい

ふむふむ、これでOKかな・・・？

「・・・なにかのタイミングで徹夜に抱きつけるチャンスがあるかも」

「美月・・・お前はどんな時でもマイペースなんだな。本当にお前は凄い奴だよ」

美月の変な発言に対して嫌味を混ぜた感じで言ったのだが・・・美月は・・・

「えへへ〜、そんな褒めないでほしいな〜・・・」

ないこの人、純粹すぎるよ〜。ここまで勘違いする人だったかお前？めっちゃ嬉しそうに顔してるじゃん・・・

「徹夜、美月にとってお前の嫌味混ざりの褒め言葉はただの褒め言

葉としか受け止められないんだよ。．．．まあ、つまりあれだ。．．
・諦める」

瑞穂のその言葉。．．．もお、いやだよ。．．

「ん〜、この不気味な屋敷を背景に美月と瑞穂を見てみると．．
ひとときわ綺麗に見えるな、二人とも」
和馬がいきなりそんなことを言いだす

「．．．よし、和馬。ちょっと一緒に森の中に行こうぜ。お前の骨
全部折ってやるからさア〜．．．」

そう言つて、瑞穂は和馬を連れて森の中に入っていく
そして生々しい何かが折れる音と、口を塞がれてるのか和馬の曇つ
た悲鳴が聞こえている。．．．まあ、すぐに復活してこっちに来る
だろう

まあ、というわけで不気味な屋敷を背景に美月を見てみることに．．

．．．ふむふむ．．．ほおほお．．．あっはっは〜．．．ふうむふ
む．．．かっかっか．．．
ハハ．．．まあ、うん…アレだな

「うわあ、マジだ．．．」

そんな俺の呟き。それに美月は即座に反応した

「てっつやあ〜」

そんな声を出して抱きついてくる美月
うわあああっ！！俺の呟きのせいだけど、これには後悔した
いや、正直嬉しいのもあるけどね．．．さすがは俺の邪念だ
消えろっ！！俺の邪念よっ！！

「や、やめなさい!!」

そういつて俺は美月を離す、それに対して美月はむくれ気味なわけである

そんな事を気にするよりも俺はとつても恥ずかしいわけである

「……いつも勇者達は変わりませんねえ」
それを見たりーシが眩き

「まあ、深刻な顔ですつといるよりはマシなんじゃないの？」
ミルリアがそんなことを言う

「これが魔王を倒した人たちなんですね……」
ミーファがそれを見て少し微笑んでるような表情で言った

「本当に面白いやつらだぞい」
そんなギエルの眩き

この四人たちにとっては戦闘があるかもしれない直前までのこの状況は非常に可笑しいものであり、とても微笑ましいものである
生まれた時から戦争がある者と、生まれたときは平和な国に住んでいた者達の違いだ

「……というか、早く行けぞい」
いい加減、待ちきれなくなったギエルが怒り気味に言った
何も言い返せねえ……行きますか……

13話 いっせいの…6（後書き）

ふう、予定通りの投稿です

パソコンが使用できるかわからないので

金曜日の内に三話とも予約投稿しようと思います

基本的に携帯で誤字脱字は直します

ですが、結構な量の誤字脱字の報告はさすがに携帯ではさばききれないのでパソコンの使用許可が下りることを待つことになりました
なので、すぐ直されない場合がありますが、絶対に直しますので
気にしなくて結構ですよ
量の多い誤字、脱字以外の感想などは返せると思います

まあ、誤字・脱字の御報告は俺にとってプレゼントのようなもので

バンバン大量に送ってくださいNE

・・・

うん…俺の上の言葉の最後の語尾がうぜえ

まあ、とりあえず今回の小説の内容について書きましようかな

嵐の前の静けさ・・・または賑やかさ（静かではなかった・・・）
というやつですね。なかなか話が進まなくてごめんなさい

・・・そして一言

三ツ矢サイダーの飴が美味しい！！

今は（6月25日投稿です）期間限定のパイナップル味もあるよ！！

うん…なんで俺は宣伝してるんだらうか？

というか、勝手に宣伝して良いのだらうか？

まあ、とりあえず美味しいですよ

誤字・脱字があればマジで御報告ください

ふっふっふっふっふっふっふっふっふっふっ
ふっふっふっふっふっふっふっふっふっふっ
ふっふっふっふっふっふっふっふっふっふっ
特に意味は無いです

14話 だから(悪い方の)フラグがたつんだよ…

円状の線を越え、屋敷の中へ入る俺達

「やっぱり・・・なかなか良いホラーの雰囲気が出てるな」
うん、この俺の言葉通り不気味な装飾だ

長年使っていないから埃もかぶっており暗い雰囲気が似合っている
そういえば、この屋敷は昔からかけられている強化の魔法で簡単には壊せないらしい

まあ…壊しても文句は言われないうだろう

「うわあゝ、なんでこんなにほつといたんだろうね」

まあ、使わなかったからじゃないですか。美月さん

使わないのに掃除するなんて普通ありあえないと思うよ。

だって…めんどくさいじゃん

「いつ…!!少し骨の回復具合が遅いな・・・」

和馬は方をグルグルと回しながらそんなことを言っていた
うむ、さすがは勇者。チートなのは変わらず・・・か

「雰囲気だけですんでくれると良いんだけどな」

なんだその発言は？瑞穂くん

めっちゃ意味深なこと言ってるんじゃないやねえですよあゝ

そんな事を言ってるから・・・

…ゴアアアアアアアアアアアアアア…!!

フラグがたつんだよ・・・

目の前には魔物、二つの足の上にはでかい胴体がありそこに大きな

顔がある

そして、その胴体が頭だかわからない所の横には左右に一本ずつの腕
その腕は体（または頭）と変わらないほど大きな拳がある
そんなやつがワラワラとわいている

「こいつは何だ？」

俺の疑問の声。こんなやつ情報は聞いたこと無いぞ？

「・・・魔法具だな」

和馬がそんなことを言いやがった

魔法具ってどういうことだ？

「へ？魔法具ってどういうこと？」

俺と同じ疑問を抱いた美月が質問した

その間にもデカブツ（魔物の事だ）は動き、俺にパンチを放つ

それをかわして、美月の疑問の返答を聞くことに

すると、瑞穂が口を開いた

「俺達が来た世界は魔王とは和平をし、人間と魔族の戦いではなく
人間と破族とかいう魔神と邪神に仕える一族との戦いになってるんだ
その世界では昔から勇者が何人も呼ばれてるわけで、それに合わせ
て技術が急上昇してるんだ。勇者が錬金術師達に多大な影響を与え
ているからな」

そこで瑞穂が言葉を切った。なぜなら魔物が殴りかかってきたので
それをハンマーで潰していたからだ
そしてまた再び話し始めた

「その結果が人工的に作られた魔物を自分の好きなように動かす事
ができるようになったんだ。それがこの魔物だな。この拳の威力は・

・
・
」

瑞穂の言葉の途中で、俺に飛びかかってきた魔物が居たので

その拳を受け止め、その体に拳を思いつきりぶち当てる

うわぁ・・・俺の腕が魔物を貫いちゃったよ・・・きもちわりい・・・

「・・・ダンプカーと衝突した時程はあるはずだったんだけどな・・・
はははっ」

俺の行動を見ていた瑞穂が呆れたような顔でそんなことを言った
ええ、確かに威力は結構凄かったけどね・・・ええええ

まあ、できたんだもん・・・別にいいじゃないか・・・

「・・・うん、徹夜だからな。気にしたら負けだよな

・・・というわけだ、思う存分やってくれ」

そんな感じで諦められました

・・・うん、俺も俺自身のことは諦めよう。ということで暴れさせて
もらおう

「・・・ハッ!!」

その言葉と共に美月が魔物を切り刻む

さすが美月、返り血にあたらないうように避けながらそんなことする
なんてね

・・・うん、さすがは美月だ。それしか言えねえZ E

まあ・・・俺も返り血は嫌だけど、そこまでは早くないからね・・・

「・・・ツ!!!?」

おっと、危ない。美月の事を気にしてたらいつの間にか魔物が近くに
いた

とりあえず殴られそうになっただけで避けるのに成功

「消えろ、このカスがアツ!!」

その言葉と共に俺を拳が魔物の顔面（または体）を捕らえる
後ろの魔物を巻き込みながら吹っ飛んで行った

「……なんだかね……この二人は、俺達以上にチートとは……」
「さすがは異世界に行かなくてもチートだった元祖チート達か……」
瑞穂はそんな事を言いながら、魔物の放った拳にハンマーをぶち当た
てる

すると、魔物の拳ごと相手を潰した

「……お前もダンプカーの衝突と同じ威力とやらの勝ってんじゃね
えか

「俺の場合はハンマーで威力倍増と、魔法の強化があつてのこれだ
からな

何も強化をしない、しかも素手で受け止めるとは違うんだよ」
それに対して瑞穂が答えた。というか俺の心を読むなし
そして違う人、つまり和馬のほうでは銃声が何回も響いている
……ただ、魔物を一匹も倒せていない

「……やはり実弾との相性は悪いか」

魔物たちの攻撃を避けながらそんな事を呟く和馬

結構相手は硬度があるからな、火薬の力だけじゃあ限界はあるよな

「ふむ……それじゃ違うのを使わせていただくかな」

その言葉と共に二丁の拳銃をしまい、その代わりに違う拳銃が二丁
握られていた

普通の拳銃だったのと比べると装飾がしてあり「うん、ファンタジ
ーだ」と言つていいものだった

そしてその拳銃の銃口から銃声も聞こえずに弾が飛び出た
それは魔力の塊だった

そしてその魔力の弾丸は魔物を打ち抜く、すると魔物の顔（または体）が吹っ飛びなくなり魔物は力なく倒れた

「やっぱり威力が違うな・・・代わりに魔力を結構使うのが悪い所だが・・・」

和馬がそんなことを言った

「なな、和馬。その拳銃だとなにか特別なことあるのか？」

俺が質問した。ファンタジーには特殊なものがつき物であるからしてやっぱり気になるものである

「まあ、属性を変えればいろいろとあるな・・・実演してやるか・・・

最初に風属性をやるぞ・・・」

そう言って和馬が撃つ、その弾丸は魔物達の間のスレスレのとおっていく

「あたつてないぞ・・・おッ!?!?」

そんなことを言った瞬間に変化はあった、弾丸に当たつてないはずの魔物たちは

まるで刃に切り裂かれたように細切れになった

「弾丸てのは回りながら飛んでいるわけだが、魔力の弾も同じように回っているんだ。当然肌のスレスレを通らない限り感じられるほどではないだろうが少しは周りに風を生み出す・・・風属性の魔力の弾丸、つまり風属性の魔弾はその風を増幅させ刃のように鋭くし、周りにいるものを切り刻む・・・うし、つぎは土属性だな」

その言葉と共にまたも引き金を引く

その魔弾は魔物を狙う軌道ではなくまわりの建物にぶつかるものだ

った

そしてその魔弾があたったところから・・・無数のトゲが飛び出し魔物たちを串刺しにする

「簡単だな、これも。魔弾があたったところを思い通りに操作して今のような攻撃が可能だ。・・・説明がめんどくさくなってきたな。・・・あとはお前の想像に任せた」

おい、めんどくさいからってやめんな
めっちゃ気になるだろ、このやろっつ！！

そして今気づいたのだが、いつのまにやら周りは魔物の死骸の山
いつの間にこんなに倒した。いや、俺は無意識に魔物を捻り潰して
ただね

だってそうしないと、和馬の言葉が聞けないんだもん

「最初からこれはめんどくさいなあ・・・」

俺の言葉

「いつ徹夜に抱きつくチャンスがやってくるか・・・楽しみ」
美月の言葉。うん、スルーしよう・・・ちなみに絶対に美月には抱
きつかせません

「でも、理由はわからんが墮勇が居ることはわかったな」

瑞穂の言葉。まあお前らの世界にある魔法具が使われてるんだから
あたりまえだな

「・・・ふう、銃はこんな狭い所だとやりづらいから、きついんだ
よな」

和馬の言葉だ・・・だったら違うの使え、お前懐にナイフ入れてあ
るだろ

とそんな感じで話し合いにもどろろつとしてるとき

…ガ…ア…ア…ガアアアアアアアアアア…！

！

そんな魔物の雄叫び

それはすぐ近くから聞こえた。そう、魔物の死骸の山

死んでると思っていたものが生きていたらしい

その魔物は床を思い切り殴りつける、それが最後の力だったように
死んだ

「あ？こいつ一体なにをしたか…ツ！！？」

…「…っただ？」と言いたかったのに言葉が途切れる

それは俺達が立ってる床が崩れ、無くなったことによるものだ

「…うわあああああッ！！？」「…」

そんな四人の悲鳴

何故だか知らんけどそれぞれ違う方向に落ちていき、分断された

14話 だから(悪い方の)フラグがたつんだよ…(後書き)

前書きの無駄な重さは気にしないでください
実験ですね

今回の話では、和馬くんの拳銃の説明を入れさせていただきました
実弾の拳銃と魔弾の拳銃、あわせて四丁の拳銃を持っています
まあ、実弾の方はともかく、魔弾のほうは玩具の様な見た目ですよ
なんとって「うん、ファンタジーだ」ですから

属性を変えることで多種多様な攻撃を繰り出せる和馬くん
いろいろと考えているのですが、説明がめんどくさいので
今回は二つ程度書かせていただきました

ふう〜、疲れたでござんす

誤字・脱字があればマジで御報告ください

15話 … 笑えるな（前書き）

主人公が凄いチートで『徹夜だからしょうがないか』みたいな強さのキャラを作りたかった

確かに『徹夜だからしょうがないか』というものになった

そう・・・『徹夜だから変人でもしょうがないな』というものになっ
てしまった

・・・悲しい

15話 … 笑えるな

俺は今落ちていた。どうかかしないとなあ……。
というわけで……

「よつと……ッ!!」

空中でどうにか一回転をして体勢を立て直し足から着地する
足にピリッ…と電気のような痛みが走るが足には特に異常は無いので
問題はない

「それにしても……なんだかよくわからない屋敷の構造で美月たちと分断されたぞ」

落ちた結果分断されるって……一体どんな構造なんだよ、この屋敷
そんな摩訶不思議屋敷の中を音をたてながら歩き始める俺

ああ、つまらんなあ……
ただでさえ微妙な所にきているのに周りに人がいなくなったら本当
につまらないよ

「話し相手が欲しいな」

…ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!

そんな雄叫び、そして目の前には……

「あ、お前達とは別に話し合いたくありません」
大量にいるためウツジャウジャウジャになってるZE
めんどくさいけど、掃除しますか……はあ……

「うおらアアッ!」

瑞穂のハンマが魔物たちをなぎ払う

「なんなんだろうか、この大量のウジャウジャは・・・」
そして違う声が聞こえた

どうやら瑞穂は運が良かったようで和馬もそこに居た

・・・美月、徹夜、瑞穂&和馬で別れたらしい

「他の二人はどうしてんだろうな...?」

「さあ・・・?どうせあの二人だから問題ないんじゃないか?」

そんな二人の会話の途中にも魔物が襲い掛かり、それを避けては確実に殺していく

無駄に数が多いので大変そうだ

「まあ、確かにそうだろうな」

「今はこの魔物たちを全滅させることを考える事が一番だと思うが、正直この数は多すぎるな・・・時間がかかるが全滅にはできる、ただそんな面倒な事をこいつらごとときにはやりたくはない・・・それが今の現状でいいよな、瑞穂?」

「ああ、ほぼ同じだ」

「・・・という事は」

「ああ、とりあえず逃げよう」
そんな結論にたどり着き、二人はきびすを返して走り出した
ただ、それも長くは続かなかつた
いきなり目の前の道の壁が横から壊されたのだ

それは今までのよりも巨大だった
見た目はほぼ同じ、違つのはさっきの魔物よりも一回りや二回りも
大きく

左右に一本ずつで合計二本だった腕は、左右に3本ずつで合計六本
になっていた
さっきの魔物の強化バージョンと言っておこう

「先制攻撃が大事だな・・・ッ!!」
その言葉と共に瑞穂がハンマーを振るう
ハンマーは魔物の体（または顔面）にぶち当たる、魔物は吹っ飛んだ
だが、一？吹っ飛んだだけで死んでいなかつた

「結構硬くできてんな・・・」
その様子に瑞穂がイラついた様子で呟いた

「瑞穂の腕力は勇者のステータスよりも少し低い位だからな、徹夜
みたいに力でねじ伏せるってことは難しいだろ」

「・・・徹夜はなんであんなに力があるんだろうな」

「さあ？」
とりあえずそんな会話をしながら強化された魔物の六本の腕の攻撃
を避ける

避けるのだがさすがは六本腕、手数が多くそして腕自体が大きいの

で避けるのがめんどくさい、そして魔物は瑞穂にとびかかった
魔物が六本の腕を振るう

「……『アイギス神に与えられた防具』! !」

その言葉と共に球状に瑞穂は透明な壁に覆われる

その壁に魔物が拳を放つが跳ね返される、何度も何度も魔物は拳を
放つ

だがビクともしない

「本来この魔法は時空属性の魔法で球状にこの場所を固定したため
の絶対防御だからな……お前の攻撃は通す筈は無いだよ……
だからこそ、なんで徹夜はこの壁を壊せたのかわからねえんだよな
) . . . 」

瑞穂の防衛魔法の秘密が明らかに、まさかの上位属性での防衛魔法
だった様子で

徹夜が壁を壊したときのことを思い出し疑問の言葉を口にする

その間も魔物は拳を放ちまくっている。やっぱり人間の言葉は通じ
ないようだ

そしてその時、魔物の横から爆発が起こった

そしてその爆発を起こしたのは和馬だ。火属性の魔弾が魔物にぶつ
かったのだろう

だが、それでも魔物は倒れない

それがかまわない、魔弾の目的は魔物を倒すためではなく動けない
状態に居た瑞穂を逃がすためにあった

その目的は達成され瑞穂は和馬の近くまで下がってきていた

「ここで思い切り戦って無駄に体力を消耗するのは嫌だな」

「ああ、堕勇がいるかもしれないんだ。無駄に体力を使いたくは無

いな」

そんな事を言いあつた後すぐさま動く二人
和馬は魔物の足元を実弾で狙い、相手の動きを封じる
そしてその間に瑞穂は近くに接近し、ハンマーを大きく上に振りか
ぶる

それを振り下ろすだけでは相手は死なない
それだけでは死なないので、それ以外に新しいモーションを入れた
ハンマーの後ろで爆発がおきた、それは和馬の放った火属性の魔弾

「おらアツ!!」

爆発の勢いもあり、凄い速さで振り下ろされたハンマーは魔物の硬
い体も物ともせずにはペシャンコにした

「ふう、これで最小限の体力ですんだな」

「ああ、楽に終つたな」

そう言つた二人のハイタツチの音が屋敷に響いた

「ああ、めんどくせえ・・・」

徹夜のそんな呟き、まわりには魔物の大量の死骸
その手には血のついた二本の剣、その剣で魔物たちを滅多切りした
のだから

「徹夜つ!!」

そんな声が後ろから聞こえたので徹夜が後ろを振り返ってみると

そこには美月が居た

「ああ、美月。どうやら近くに落ちていたみたいだな」
徹夜が美月に言う

「うん、そうみたい。少し他のみんなを探してたから時間がかかち
やったよ」

それに美月が返答した
どうやら美月も魔物には遭遇したらしく片手に持ったロングソード
には血がこびりついていて・・・あと服にもついている

「よし、じゃあ瑞穂たちにも合流するか」
徹夜が美月にそんなことを言い

「うん、そうしよ」
美月がそれに答えた

「ん、そういえば美月・・・」
徹夜が何かに気づいたような顔をして美月のほうを見る

「え？なに、てつ・・・や・・・ッ!？」
そんな美月の疑問の言葉、途中から言葉がおかしくなったのは何故か

それは徹夜が右手に持った紫色の刃がついた剣で美月を斬ったからだ
徹夜に斬られた美月の傷から大量の血が噴出し、美月は力なく倒れた

「なん・・・で・・・?」

美月が苦しそうな顔をしながら徹夜の顔を見上げるようにして声を絞り出す

その美月の目の前には・・・

冷たい表情で美月を見下ろしていた徹夜が居た

「・・・笑えるな」

徹夜のその言葉が静まり返った場に響いた

15話 … 笑えるな（後書き）

うむ、13話で書いたとおりこれは予約投稿
正直言つて書くことがなくなりました・・・
というわけでスラスラと短く書いて終わりにしようと思います

瑞穂くんのアイギスは時空属性の魔法です

周りの時間を固める事で絶対防御を造っている、というわけでござ
います。まあ、それを何で徹夜が壊せたかは多分話を進めていくつ
ちにわかっていきます

いいところで投稿がテストで切れて先になりましたね

まあ、ネタバレは嫌なので小説の徹夜などについての内容について
も語りません

次の投稿までにいろいろと考えてくださいなあ

ウフフ・・・（悪い笑み）

そういえば、サブタイトルのなづけ方を変えました

まあ、いろいろと変えてきたわけですが、説明させていただくと

1～31話がただ単純に内容を書いたものです

32～41話は内容なのですが「 と××と 」という感じです

42～50話は起こった出来事（？）みたいな感じですね

… などなどサブタイトルの決め方をどんどん変えてるわけです
今のサブタイトルのつけ方はキャラのコメントになっております
今回の話で言う徹夜くんの最後の言葉ですね

美月ちゃんという言葉がサブタイトルにしてる場合もあります

誤字・脱字があればマジで御報告ください

16話 しぶっ…ッ! (前書き)

もう、疲れたよ…パトラッ 《ピーーッ!》 シュ…

上の《ピーッ!》が無駄になってる気がするけど気にすんな
(《ピーッ!》をとってみると俺の書きたかったことがわかります)

「変身能力か？いや、それだと今のその傷を受けてる時点で生きることがは可笑しいしな・・・幻術って言う所か？」
それを気にせず話す徹夜

「そこまでお見通しですか」

そんなことを言いながら立ち上がる美月
血が大量に流れ、致命傷とほぼ変わらぬ傷を負った人間がむくりと立つ様子はとてもシユールだ

「なんでわかつたんですか？」

ニヤリと笑いながらこちらを見てくる

徹夜は正直に言うべきか少し考えた後に口を開いた

「いろいろとあつたわけだが、この場の状況といつまでも続く条件があるわけだ

まずこの場の状況での条件で言うなら、美月はこの屋敷に入る前に俺に抱きつくチャンスがあるかないかを考えていたからな、一回分断されて再開したときに抱きつかない女ではない、というものがある」

「・・・」

美月の顔が納得いかない、というものになった

まあ、どんな顔だかわからないけど相手もこんな感じの表情になったということだろう

「あとは、美月は汚れたくないようだから相手の返り血は全て避けるように徹底している。だから服についているというのはありえない、美月の速さはこの世界ではトップランクだしな」

「無駄なチートですね」

幻術で美月をまとっている誰かが言った
もう呆れている感じの表情だ

「これは結構続く条件だが、まずあいつは俺の不意打ちを軽く避ける奴だから

俺の攻撃を食らった時点で偽者なのは決定事項だ

あとは、他の人にはないものだけど、俺の『最悪だZ E センサー』に反応が無かったからな・・・。

俺のセンサーによると東南の方向に美月は居るとみえる。そしてめっっちゃ接近してきてる」

「・・・よくわかりませんが、騙せないと言う事ですね」
そして霧が晴れていくように美月の体が四散する

「へえ、遠距離から操るタイプの魔法具に幻術でカモフラージュさせて俺が油断しているときに殺そう、っていうわけか」

美月の幻術が晴れるとそこには目玉のついた棒人間のような人形があり

それがカタカタ...という音を立てながらぎこちなく動いている

「殺そうとするのはやっぱり無理ですかね」

その人形の上にはギョロギョロと動く目玉がある

多分カメラのような物だろう、そしてその目玉が音源のようだ

その棒の体にはほんの少しのかすり傷

「チツ・・・幻術に惑わされてたのは変わりなし・・・か、くそっ

...っざってエ」

「私だって頑張って幻術を高めましたからね。この方法も結構良かったと思うんですが、どうでした？」

「・・・まあ、良かったんじゃないか？でも、その方法じゃ俺には無理だろうな」

「あはは、そうですね・・・では、どうせ壊されるでしょうし」
棒人形は徹夜に手を振っている。どうやら今使ってる魔法具の末路を知っているようだ

「ああ、とりあえず次あえたら殺すからな」
その言葉と共に徹夜が棒人形に急接近して回し蹴りで粉碎した
壊れた棒人形の破片が空中を舞う

「ふむふむ、これが瑞穂たちが来た世界の魔法具か。技術が上がってんなく、この世界にはこういうの無かったぞ・・・あつたら面白そうだったのにな」
そんなことを言いながら歩き出す徹夜
すると・・・

「てつつやあゝ」
そんな声が後ろから聞こえて、徹夜は振り向きざまに剣を横一線に振る
完全にとらえたかと思った徹夜だったが剣は避けられたようで空を斬り
そして徹夜の体に衝撃が襲った

「ごふうっ!!?」
吹っ飛ばされる徹夜
ゴロゴロと転がり、やっと止まったと思いい体にひっついてるであろう物を見つめる

「てつつやあゝ 離れ離れになって寂しかったよゝゝゝ」
それはそんなことを言ってる美月だった
それに対して徹夜は

「俺の攻撃をかわしたってことは本物かゝゝ」
そんな事を呟いてる徹夜

「え？どういうこと？」
それに対して疑問の言葉をもらす美月

「いや、ちょっとお前の偽者が居てな、そいつを蹴りで粉々に粉砕したとこ」

「偽者と本物の区別がつかほど私の事を知ってくれてるなんて嬉し
いなあゝ」

そんな事を大声で言いながらさらに抱きついてくる美月
美月は徹夜が容赦なく美月の姿の誰かを攻撃した、という事実は考
えていないのだろう

「いい加減にそれをやめろ」

そっぴいながら美月を体から引き剥がす徹夜
なにやら最近ゝゝこういうのが多い気がする

ちなみに、美月は引き剥がされて少しむくれ気味である

「とりあえず瑞穂と和馬を捜しに行こうゝゝ」

「オツケー」

そんな事を徹夜と美月が言い合いながら
足を動かし屋敷の奥に入っつていった

徹夜のセンサーは美月に反応することはあっても瑞穂と和馬を捕ら

えることはできない、結構時間がかかりそうだ

そしてある場所では・・・

「なあ、和馬。この道さっき通らなかったか？」

「ん？瑞穂もそう思うか？」

「迷ったかもな・・・」

「・・・そうだな」

迷っていた二人のことは今回の話では置いておこう

16話 じぶう…ッ!! (後書き)

どうも、こんにちは

世界史のワークにナポレオンⅡボナパルトを書くところがあったのですが・・・そこに最初に思いついたのが「ナポレオン」ではなく「ボナパルト」だったことに驚きが隠せなかった焼き芋です

…はい、意味がわからない、のに加えてつまらないことを書いてみました。

このテスト期間はとても辛かったです。テストをして、家に帰り、ニコニコ動画を見て楽しんで…じゃなくて勉強をして、ご飯食べて親が隠しやがったジャンプを捜して・・・じゃなくて、勉強をして寝る。の日々でした

え？ニコニコ動画？・・・ナンノコトダカラカリマセン
え？ジャンプを何で捜してたか？テスト期間では親が俺に見せないように隠しやがるんです。え？もちろん見つけられましたよ、余裕です

ちなみに、俺が見つけたから親がもう一回ジャンプの隠し場所を変えたのですが・・・見つけてやりました、これまた余裕です
まあ、俺は良い性格なので(自分で言うなって話ですが・・・)見つけても読みませんでした。これは本当の話です

まあ、こんな感じで長々と書いてるわけですが、俺の今の気分は前書きの通り・・・疲れています・・・テストの後は疲れてます
どのぐらいかかっていうと後書きを書くのもめんどくさいくらいに、
(じゃあ、書くなって話ですけどね)です

犬が飼いてえなあ〜・・・俺、動物アレルギーあるかもしれないんだけど

(上の言葉は無視してくれて結構です)

さて、今回の本文についてのお話です

うん、やっぱり予想されたものの斜め上なんて行けねえや!!

(感想で予想を送ってくださった方がおります。ほぼ正解です)

まあ、この王道パターンを入れたいなあ、と思い書いてみたので予想されて当然でしょう

あえて言えば、変身能力か幻術かの違いだと思います

ふう・・・なんとというか俺・・・はあ・・・もう溜息しかつけません・・・

ふう・・・いや、なんか書くこと無いです

テストのせいか凄くだるいです。後書き書いてる途中に残り少なかつた元気エネルギー(?)が尽きました・・・ああ、4時間しか寝てないせいでしょうか・・・?いや、四時間は十分多いはずだ、やっぱりテストのせいだな・・・

テストが全てにおいて悪いんだア!!テスト勉強と深夜アニメのために睡眠時間を削ったからではないのだアアア!!

・・・とりあえず、こんなダルダルな後書きかいても皆さんをイラつかせてしまうだけだと思うのでここらでやめさせていただきます

誤字・脱字があれば御報告ください

すこし、書き溜めが少なくなってきたので投稿日の間隔を伸ばします
どうにか書いて行こうと思いまゝす。では
テストは体に悪いので気をつけてください（まあ、テストは卒業し
てる方もいるでしょうが・・・）

17話 偽者がツ!!!? (前書き)

白い空間に黒髪を後ろに縛っている少年がいた

「どうも、こんにちわ(又はこんばんわ)。徹夜でございませう
今回は焼き芋という名の焼き芋のきぐるみを着た高校生を夏の暑い
日差しの中、干し芋にしています。その間は少しだけ俺が書
こうと思います」

そんな言葉と共に黒髪の少年はペコリと一礼をした

「今回の話ではサブタイトル通り、ドキドキワクワクの偽者が本物
か・・・それともただの偽タイトルか・・・。今回の話もグダグダ、
ダメダメ、カスカスの三拍子。どうか焼き芋というダメ高校生を見
捨てないで見てやってください。

まあ、別に見捨ててくれてもかまいません。どうせクソ芋なので・
・では、ここら辺で本編に移らせていただきます。では、さよ～な
ら～」

黒髪の少年はこちらに向かって手を振り
そして、テレビの画面が切れたように白い空間が消えた

ぎゃくくくつっ！！いつもどおりのことなんだけど返り血がベチャくっついたら！！

右と左にわかれた魔物の体が俺を挟む感じで飛んでいったから血が大量にベチャくっついたらよお

うええ・・・汚いから嫌だ・・・

まあ、闇を展開して血だけ吸収すれば問題なし、というわけだが

「シャアアッ！！」

そんな声と共にもう一匹斬り伏せる俺

ん、正直なところさ・・・力があるよりも速さがあったほうが良いと思うんだよ

え？なんでかって・・・？それはさ・・・

「ハッ！！」

その声と共に美月が数匹の魔物間を凄く速さで走った

そして美月は止まったのだが、振られたと思われる剣には大量の血・・・その後、時間で魔物達から血が噴出し倒れた

当然、美月の服には返り血一つもついていない

「くそっ！！めっちゃかつこええええええええええええッ！！何この敗北感！！？」

そしてそれを見て悔しがる俺

だってさ！！ああいうのは男のロマンじゃない？

ひどすぎるよ、神様！！なんで俺に速さではなく力を与えたんだあ
く！！

（べつに『ひどすぎる』は誤字ではない）

『特に理由はない・・・あと神ではない、焼き芋だ』

・・・よし、今のコメントはなかったことにしよう

時々俺は神様・・・じゃなくてクソな焼き芋と交信ができるようだ

とてもいらぬ機能だ。ちなみにいつさい使うつもりは無い
もうこれ関連のコメントは徹底的に無視することに決めた

これに異論は無いだろ、みんな
ふむ、良かった異論は無いようだな、「みんな」てのが誰だか知ら
んけども・・・

まあ、そんな邪念が続いてるうちに複数の魔物が俺に襲い掛かって
きた

「よいしょつと・・・ッ!!」

先頭に居る魔物の拳を受け止めて後から来た奴に向かって投げる
すると、後ろに言われた奴は巻き込まれながら吹っ飛んでいった
そしてその吹っ飛んでいく魔物ですぐに見えなくなったのだが少し
見たときのある棒人形がロングソードを下に構えて立っていた
そして凄く速さで迫ってくる

「・・・ッ!!!?」

投げた後のモーションだったが、どうにか体を回して回し蹴りの体
勢に入り

迫ってきた棒人形を砕くために蹴りを放つ、それを砕いたように見
えた

その砕けた破片は霧のように薄れて消えていく

つまり・・・幻術だ。そして目の前にはロングソードを構えた棒人
形がいる

「・・・なッ!!!?」

まさかの不意打ち。こんな予想してなかったから本当にビックリだ
幻術を使う相手なんてあんまり戦った時ないから大変だな
そして棒人形の武器が動く。そこである声が響いた

「ハアツ!!」

それは美月で、俺を狙っていた棒人形を真正面から真っ二つに切り裂いた

「・・・せつかくうまいタイミングで不意打ちをしたっていうのに、邪魔されるとは」

そんな声が棒人形から聞こえた、そして爆発して消えていった
棒人形は一つじゃなかったのか・・・

「美月、ありがとな」

とりあえず礼を言っておこう

「どういたしまして」

そんな感じで嬉しそうにしている美月

その頭を少し撫でてみる事に・・・うん、なんか久しぶりに撫でた気がする

美月も嬉しそうな感じの表情をする

うわぁ、昔はこういうのやってたんだな・・・可愛い

・・・俺のさっきの「可愛い」っていう邪念は忘れてくれ、忘れなかつたらお前を吊るす

いや、誰を吊るすのかはよくわからんだけでも

「・・・はぁ、こっちは（道に迷って）大変だったのにお前らはイチャイチャしてるとは良いご身分だな・・・こんチクシヨウ」

横からのそんな言葉それは瑞穂の声だった

「しょうがないだろ、瑞穂。徹夜のお母さん曰くこの異世界の旅はやつらの新婚旅行だ

イチャイチャしないと意味が無い」

そして和馬の発言、多分・・・和馬は言葉でダイレクトには表してないが
すこし怒ってるな・・・こんなきつい発言をされたのは久しぶりだ
おい・・・てか「新婚旅行」てのは何のことだ？「徹夜の母さん」・
・俺の母親がどうしたんだ？・・・うむ、瑞穂くんや、少し詳しく話を聞かせてくれるかな？

まあ、今はそんな事聞けるわけないのでやめよう

「そ、そんなこと無いぞ、瑞穂？ちゃん」
とりあえず偽者が本物かを調べる
なので、わざと？ちゃん”を強調してみた

「だれが？ちゃん”だ、ゴルアア！！」
そんな叫びと共に俺にドロップキックをくらわせる瑞穂
それで俺は吹っ飛んでいった、壁に背中からぶつかって止まったの
だが

背中が超痛い。痛い、で終る所も俺らしいと思う

「やめろ、徹夜。美月はお前の彼女だろ。瑞穂まで狙うな
瑞穂は俺のかのじよ・・・」
たぶん「だ」とでも言おうとしたんだろう
だが、それを言い終わる前に瑞穂のドロップキックが和馬の脳天を
直撃し和馬は吹っ飛んでいった

「お前も調子にのんじゃねえ、和馬」
うん、最初は瑞穂だけ偽者がどうかを調べるために言ったんだけど
この状態だと和馬も本物だな、うん

「瑞穂ちゃん、徹夜は瑞穂ちゃんを本物かどうか調べるためにやっ

「ただよ」

「あ？どういうことだ？・・・あと美月も？ちゃん”づけはやめよ
うな」

そんな感じで聞かれたのでとりあえず説明した
すると・・・

「わりい、徹夜。そんなことがあったとは知らずに思いっきり蹴っ
ちまって・・・」
瑞穂が謝った・・・だとっ！！？

「偽者かッ！！？」
ズサササッ！！と音を立てながら下がる俺

「よし、少し待ってる。お望みどおり蹴り飛ばしてやんよ
・・・お前が吹っ飛ぶ先は地獄だけだ」
そんな処刑申告された

「と、とりあえず合流ということぞ」
俺はすこし苦笑いしながらも話をそらす。そう言いながら歩き出す
俺達
そして数分間歩き、ある部屋に着いた

「ん？広い部屋に着いたな・・・」
俺の発言

「怖い雰囲気なのはかわらないね」
美月の言葉

「まあ、ここだけ変わるってのも可笑しな話だけだな」
瑞穂の言葉

「それにしても、この屋敷はどこまで広いんだ？」
まあ、それは通路が凄く絡まってて広く感じるだけじゃないか？
そしてそんな事を言い合いながらその部屋を中心に向かっていく
すると屋敷の中なのに霧のようなものがたちこめてくる

「あ？どういことだ？」
俺の疑問の声で

「ん？私達に言われてもわかる訳無いんだけどね」
美月の言葉
まあ、そのとおりなので何もいえないなあ

「また、魔物が出てくるのか？」
瑞穂がそんな事を言っている。まあ妥当な線だろうな

「それもあるかも・・・な・・・？」
それに和馬が答えようとした所でバタリと倒れた
その様子を見て驚いた顔をする俺と美月と瑞穂
だが、なにも出来ずにいた。それは瑞穂も同じように倒れ
一秒もかからずに美月も倒れる

「どづいう・・・こと・・・だ・・・?」
そんな言葉を言ったと思ったら俺も力がなくなり倒れた
その場が静かになる

「やっとこの魔法具は効きましたか・・・」
その静寂を破る少年が徹夜たちの近くに居た
その少年は黒髪に肌色の肌・・・人間、つまり墮勇の一人だろう
肩には布に巻かれた何かを担いでいる
そして徹夜達が動かなくなった理由の物を手に持っていた
それはキーホルダーのようなもので小さいサイズのものだった
チエーンの前には水晶がついている

「ふう、誰も聞いてるわけじゃないのですがなんか説明しなくてはいけない気がするので説明させていただきますね。この魔法具は2?範囲内に入っている相手を魂から拘束するというものです、時間制限は30分・・・この場合だと余裕過ぎる時間ですね」
その少年は肩に担いでいた物の布をゆっくりと外し、その中の物を取り出す

それは槍と斧が合体したようなもの・・・つまりハルバードだった
「・・・そのまま担いでるとどうも落ち着かないのでいつも布で任せていただいています」
「またも誰も居るはずのないところでそんな説明を言う少年
そしてそのハルバードを構えた

「やはり最初に殺すべきなのは、この世界の勇者のどっちかですね。
・
・
ここはなんとなくの理由で女のほうにしましょう、あの速さは厄介
ですしね」

どうやらなにかで見ていたようで美月の速さとなんとかなくを理由に

そんなことを決めていた
そしてハルバードを上にも構え、振り下ろした

金属音が響いた、墮勇の少年が振り下ろしたハルバードを紫色の刃
が防いでいた

紫色の刃で思いつくのは徹夜かもしれないが・・・

「は？あんた…誰だ？」

そう少年が呟いた。・・・相手が何回かしゃべった事のある徹夜だ
ったらそんな事は言わないだろう

「そんなのは今関係ないわ、今重要なのはあなたが私の大事な宝物
を傷つけようとしたことよ」

そんな声が響いた

それは女性の声、美月でもなく瑞穂でもない

・・・瑞穂は一応男だ、だけどそんなのは気にするな。見た目が大
事である

・・・ふむ

話を戻すが、今までののは二人の声ではない
へそまで伸びた黒髪が広がり、白い肌が黒い肌へと変わっていく
この説明から少しはわかるとおり、それはリヤナさんだった

「あなた、少し死んでみようか」
そんな言葉と共に・・・

600年前の魔族のトップの女性と異世界から来た堕ちた勇者の少年の戦いが始まった

17話 偽者かッ!!? (後書き)

こんにちわ(又はこんばんわ)。干し芋・・・じゃなかった焼き芋です

なんか突然変な人物に襲われたせいで前書きが吹っ飛びましたが、そこは気にしないようにしようと思います。

さてさて、今回の話のことです

今回ではいつもどおり、徹夜の力と美月の速さですよ

美月の速さは正直、カッコイイとおもうわけです

力も十分いいのですが、速さだと居合い斬りとかそういうのがかっこいいわけですよ。まあ・・・そういうわけで今度美月に居合い斬りをしてもらいます

さてさて、またもや今回のお話です(なんでやり直したのかは自分でもわかりません)

今回ではリヤナさんが出てきました。こういう感じの話を書きたいなって思ってたので丁度良かったです。…というか、瑞穂たちの来た世界の魔法具ってある意味チートですよ。

さて、リヤナさんの話に戻りますが、リヤナさんのマジでの戦闘描写を書くのは初めてではないでしょうか?

そつえば、自分で少し気になったのですがリヤナと徹夜どっちが強いのかな?というものです

徹夜と前世のリヤナさんと徹夜のスペックでの勝利ということになるのですが、今のリヤナさんは徹夜と同スペックと言う事になるわけです。学校のケンカで鍛えた腕前の徹夜くん、幼い頃から専門の殺す業を学んできたリヤナさん。

これを考えるにリヤナさんの勝利になるわけです。それに戦闘では

リヤナさんは経験豊富ですしね。まあ、小説には書けてませんけど…
前書きも後書きも無駄に大量になってしまったので、そろそろ終
わりにしようと思います。

第二章のエンドは思い浮かんでも、それにつながるストーリーが見
つからずに苦戦しているの、前話の後書きに書いた通りできる
だけ投稿日の間隔を開けさせていただきます

誤字・脱字があれば御報告宜しく願います

18話 天下取りの第二の人生が始まる（前書き）

白い空間、そこにはある少女がいた

その少女には犬の耳、そして犬の尻尾が着いている。耳は上下に揺れて、尻尾は縦横無尽に揺れている

そして、その少女が口を開いた

「どうも、こんにちわ（又はこんばんわ）。ラウと言います。

今は学園で生徒をやっています。他の方々よりは歳は低いのですが第二学年の方を魔法で倒せるまで腕を上げています。さすがに剣術では無理ですけどね・・・クオ（黒い狼）は私の相棒として一緒にがんばっています」

ニツコリと笑う獣人の少女、

そして焼き芋のぬいぐるみを着た人からある紙を渡された。…そして焼き芋のきぐるみをきた人はすぐに画面から逃げるように去っていった

「今回、美月ちゃんより先に出してもらったのは焼き芋のぬいぐるみを着た人が「ごめんね…このストーリーだと出そうと思ってても出せないんだ。だから前書きだけでも出てくれ・・・」てな感じに言われたので出させて頂くことにしました」

獣人の少女はペコリと頭を下げた。そして紙を読み始めた

「さて、今回のお話は・・・天下取りとは一体なんなのか、そして第二の人生とは・・・っ！！？はたして主人公、徹夜はどうなるのか・・・そして天下とはなんの事なのか、いろいろとツッコミどころのあるタイトルだと思………いたいです。

では短い間でしたがみなさんにまた会えて（？）嬉しかったです。

…では、さようなら」

少女は手を振り、ゆっくりと微笑む

そして白い空間はテレビの画面が切られた時の様にプツリ…と消えた

18話 天下取りの第二の人生が始まる

剣が凄い速度で斜めに振られた、それは墮勇を殺すために動く

「・・・ッ!?!?」

それをハルバードでとっさに防御する少年

体は徹夜なので相当の力で振られた剣、それを防御した少年の足は地からはなれ数?後ろに飛んだ

どうにか体勢を立て直して着地する少年

私の手には少年が持っていた魔法具、すかさず奪ったものだ、楽勝
楽勝

とりあえずまだ壊さないようにしよう

「どういうことですかッ!?!?この屋敷のどこに居た!?!?」

その少年は異世界の魔法具を使い、屋敷の中を全て管理していたその魔法具の映像にはこの女性は居なかった。なので驚いている変態か、って話だけどそれは言わないで置く…相手を監視しておくのも戦いでは重要なことだからね

「えっと、確か魂を拘束するんだっけ?・・・でもそれはね、徹夜だけの魂を拘束しているだけなんだよ。私は徹夜とは一応一つだけだけど今は別の魂だからね、ノープロブレムなのですよ」

私は適当に説明した後少年に近づいていく
ふっふっふ、とりあえずあの魂を拘束する魔法具とやらを回収したし・・・

徹夜を拘束すれば私の天下取り(天下〓美月ちゃん)の第二の人生が始まる

「くそっ!?!」

そう毒づきながらハルバードで私に向かって突きを放ってくる
私は斧の部分に剣をひっかけてそれを止めた後、懐に潜り込んで下
から上に斬りつける
それを少年は後ろに跳んで避けた

「・・・くッ!!」

そこで相手は私ではなく他の三人を狙った
狙った相手は一番近くだった和馬という少年

「甘いなあ・・・」

その少年に向かって振り下ろされるハルバードに向かって私は右手
の剣を投げる

剣はハルバードにあたり見事に的を外させる

その間に私は墮勇の少年に近づき、剣を横一線に振るう
一応、剣は闇で自分の手までもってくる

「チツ・・・」

その声と共に少年はハルバードで防御して後ろに下がる

「ん・・・やっぱり放置しておくのは危険かな、精霊ちゃんた
ち美月ちゃん達をはこんどいてくれる？」

その声と共に二本の剣を横に投げると剣が廊下に落ちるのではなく
双子の子供が廊下に着地している。そして、いつのまにか黒髪の少
女が私の横に立っていた
なんか久しぶりの三人な気がする

「女のご主人よ、やることはそれだけか？」

黒髪の少女の形をした精霊・・・つまりクロが聞いてきた

「ええ、それだけ。後は好きにしてて良いわ」

ククの頭を撫でながら私はそう言った

「武器が」「なくて」「いいのですか?」「それと双子の精霊、フレとイムが質問をしてくる

「別に大丈夫、私製のすごいのがあるから」
「適当な返事をした

すると、少し納得がいかない感じもあつたが一人一人ずつで運んで
いってくれた

精霊なので見た目が力の強さに比例するわけではないので、子供が
運ぶことができるのか?みたいな疑問は考えなくて良いのである

「貴方のどこに武器があるのですか?」

私の言葉に不快そうにそんな事を言う墮勇
馬鹿にされてるでも思っているのだろう

「ふっふっん 貴方は知らないだろうけど私は600年間の間、黄
泉の世界を漂っていたわけだけでも・・・その間に私は何もして
いなかったわけじゃないんだよ」

その言葉と共に足元に黒い点ができた。それは当然のこと闇だ
黄泉の世界を漂っている間、私は魔力を集め続けた

その結果、徹夜という魂に変わるのに耐え私の魂が少しだけでも残
った

600年間という長い間貯めた魔力の量は莫大なものだ。しかし、
徹夜は無意識の内に魔力を制限して全てを引き出せていないし私が
引き出せないようにもしている

下手をしたら暴走をするかもしれないしね、美月ちゃんを危険な事
に巻き込むわけにはいかないのだよ

まあ、とりあえず・・・

「その100年間分の魔力と徹夜が無駄に集めた鋼を闇の中で分解、そのあと闇を混ぜながら再構成することによって一本の刀を造ったの……」

その足元の闇からズズズズ……！！という音を立てながら一本の刀が出てきた

黒い柄に黒い鞘の剣、すべてが真っ黒だった

そしてその刀を鞘から抜き出した

その刀身も黒、その刀身からは紫色のオーラのようなものが湧き出ている

「名前は『黒夜』、由来は……なんとなく」

なんとなく、の所にツツコミはしないで欲しい。

名前なんてテキトーが一番良いのだ

「……日本刀ですか」

その刀をみて少年が呟いている

この世界ではキョクトウという日本に似ている国はある

今まで書いては無かったが、その国では刀に似ている武器はあっても実用性のある所まではいつていない。

なので、使われているのはロングソードやバスタードソードなどの西洋の剣なのだ。

ということはこの世界にあるのは墮勇の泰斗という少年が持っていた物とリヤナが徹夜に黙って作っていたこの黒い日本刀だけだろう

「……よく言う転生者という奴ですか？」

そして少年が私に説明してきた

「ん、君達の世界から来たっていうわけじゃないけど、同じようなものかな」

この世界から君達の世界に行ったわけだしね、同じようなものだけど

いろいろと違うような気がするしそれと同じようなものだと思うな
くもないし・・・ん、よくわからないなあ・・・
徹夜たちの世界を見たときにはビックリしたな、鉄の塊（車）が
動いてるんだもの

まあ、徹夜が体の主導権を持っていたから、ただ覗く事しかできなかつたわけだけど

ゲームセンターとかで遊んでみたかったなあ・・・

「じゃあ、そろそろ死刑再開ね」

その言葉と共にダッシュする

私は右手に持った日本刀を下から上に向けて振るう。それをハルバードで防御する少年

・・・ただ、それは無意味だった

リヤナの日本刀がハルバードを真っ二つに切り裂いた

「なッ!!?」

それに驚きの声をあげる少年

そして、それとは逆に不敵な笑いを浮かべる私

間を空けずに刀を数回振るう、それに対して少年は受け止めることができないと判断したんだろう

日本刀の刃の切れ味は関係ない側面を二つになったハルバード・・・

つまりただの金属の棒と斧で叩き、刀の軌道をずらしてやっこのこととでかわしている

なかなか良い判断をした方だと言って良いだろう

「・・・ッ!!」

少年は後ろに思いつきり跳び、こちらに手を向けた
その手から世界の歪みのようなものが広がっていく

つまり、これは幻術だろう。やはりこの屋敷の周りを漂っている魔力はこの少年の幻術を底上げするためのやりやすい環境にした、と

いうことだ

まあ、そんな事簡単にはやれることではないのだが、そこはさすが勇者とだけ言っておこう・・・とりあえず幻術のスキルが高いことは間違いない

「高い技術の幻術だね・・・」

それを見て、私は余裕の態度で立ち止まる

そして刀を構え・・・

「でも、幻術如きじゃダメなんだな」

幻術を切り裂いた

「・・・っ!?!?」

息をのむ音が聞こえた、そちらを向くと墮勇の少年が立っている

「刀には『斬る』という働きがあるわけだけど、そこに徹夜の特別製の闇の『全てに干渉する力』を加えると『全てを切り裂く』という物になるわけなんだね・・・私が作った妖刀だよ、ただの刀で終るわけではないじゃない」

その言葉と共に少年に近づき、少しの量の魔力を流した刀を振るう少年はどうかそれ避ける

すると少年の後ろの屋敷が大きな音を立てながら切り裂かれたいくつもあつたはずの壁が切り裂かれ、その間にあつた部屋が見える。そして切り裂かれた所を見ると森が見える。

流した魔力の量は本当に少しだけだった。それに対してのこの威力には私自身驚きを隠せないでいるが・・・さすがは私、やっぱり私は天才だわ。という自画自賛をしながら考えるのをやめる

うん...自分で言うな、とかツッコまんで良いから、私でもそんなことわかってるから

「・・・くそっ!!」

そんな悪態を呟きながら少年がその切り裂かれ森が見えるようになった場所から逃げ出していく

「あっ!!まてッ!!」

そして私がそれを追いかけてよとしたところで誰かが突っ込んできた

「むむっ!!!?」

誰かは何本ものナイフを投げしてきた、それを刀で全て切り裂く・・・弾くのではなく切り裂くのだ・・・まあ、とりあえず話を戻そう

その誰かが手を上に掲げるとそこに鋼の剣ができあがった

「ぞい!!」

そんな掛け声と共に、振るわれる剣。ああ・・・この変な言葉は・・・

とりあえずその剣を私の刀で両断する

すると、誰かは・・・いや正直もう誰だかわかったけどさ

とりあえず、その誰かは後ろに跳んで距離をとり、また剣を作り出し片手で持った

「ギエルのクソジジイ・・・」

私の言葉

それに相手は驚いた表情をした、そして何かを思い出した顔に変わる

「・・・お前はリヤナのクソガキかッ!!!?・・・というか600年前に死んだはずでは・・・ッ!!!?・・・ぞい」

慌てて語尾に「ぞい」つけたのは多分・・・驚いてて忘れたんだろ
う

18話 天下取りの第二の人生が始まる（後書き）

今回ではリヤナさんの無双（？）

いろいろと・・・いや、特に何も無いんですけどね

今回では墮勇とリヤナさんの戦いでした

さすがはリヤナさん墮勇をあっさりと撃退です。まあ相手は幻術なのでリヤナさんが造っていた刀のように相性がよくなければ
そう簡単には行かないと思います。

そしてギエルとリヤナは昔あった様子です

それは今は落ちといて起きましよう、ギエルくんはさすがは長寿のハイエルフ、創造の魔法をめっちゃ使っております

よく思えば、イリルやイルリヤなどはあまり使わないのです。竜というもともと強大な力があるので使わなくても十分強いというわけですが・・・

では、話が180度変わります

・・・みなさん・・・

カンパンって美味しいと思いませんか？正直俺は大好きです

カンパンは賞味期限が長持ちするのですが、賞味期限がギリギリになったものを食べれるのでそのときが楽しみな俺です

まあ、今年あの地震では食べませんでした。両親がいなかったので食べていいのかわかりませんでしたしね。

・・・

まあ、関係ない話ですね。特にこの話をこれ以上広げられないので
こちらで終わりにさせていただきます

誤字・脱字があればマジで御報告ください

時々思うのですが、自分で書いた事に「あ？何意味不明なこと書いてるんだ？」と思うときがあります。どうにかしようと思意する自分がいいます

19話 ふっ…ハーレムか…（前書き）

白い空間にある少女がいた

「どうも、こんにちわ（又はこんばんわ）。美月といいます

今回の前書きでは私が出させていただきます。今回では焼き芋のきぐるみを着た人に徹夜の写真（レア級ベストショット）五枚を頂き、さらには焼き芋のぬいぐるみの写真立てまで頂きました。なので精一杯、前書きに登場させていただきます」

少女はペコリっ…と頭を下げた

そんほ少女にやきいものきぐるみを着た人が慌てて近づいていき、紙を渡し、そんな後すぐに逃げていった

「じゃあ、一仕事しようと思います。えっ…ごほんっごほんっ…ステス…では、言いますね…。その日はとても静かだった…。だが、その日で平和は終わり…。焼き芋の復習が始まる…。ん？この紙、違うんじゃないやありません？なんか第一章、最終回の後書きネタが入ってきましたよ？…あ、これが本当の紙ですか？いえいえ、別にいいですって気にしてませんよ、そんなに謝らなくていいですよ。」

焼き芋のきぐるみを着た人がペコペコと謝り、それを少女が許している。そして焼き芋を着た人は脱兎のごとく逃げていった。

「じゃあ、こっちが本当の紙ですね…。さてさて、今回のタイトルルの事です。この言葉は一体誰のものなのか、それは徹夜か瑞穂か和馬なのか、それともこの私の言葉なのか…。一体だれの言葉なのか、とても気になるタイトルだと思います…。追記：リヤナさんの説明が多少うざいです。頑張って読んでください by、焼き芋」

少女は読み終わり紙を折りたたんでポケットにしまう

「では、前書きはこの程度で終わらせていただきます。前書きでは名前の出てきたたくさんキャラクターが第二章（番外編も含め）が終るまで出てくるらしいです、一発キャラのあんな人や結構名前の出てくる人までいろんな人が出てくる筈です・・・では、ここらで終わらせていただきます。さようなら」

少女は右手を振り、左手には徹夜の写真（レア級ベストショット）五枚を嬉しそうに握っていた。
そして、テレビの電源が切れるようにプツリっ…と白い空間は消えていった。

ちなみに、焼き芋は写真の事で徹夜に『干し芋されちゃいました事件』が再び起こることはそう遠くはない物語だ

19話 ふっ…ハーレムか…

ある女性と子供がにらみ合っていた

「ギエルのクソジジイ…」

相手はハイエルフのガキだ。昔は大人の体だった

私の生前ではまだその姿だったためクソジジイと呼ぶのは生前の名残だ

ちなみにこのハイエルフと会ったのはリシと会う前

リシもこいつとは会ってみたいけどリシと一緒にこのクソジジイとは会うことは無かった

「リヤナのクソガキか…ぞおい」

そこで苦虫を噛み潰したような顔でギエルが言った

生前ではこいつとは戦ったわけであり、あまり仲が良いとは言えなかった

ちなみに何で戦ったかというと…

私が二代目勇者…つまり、リシを暗殺だなんだかんだで捜した時にある宿であったのだが、その時に…

その時に…私のデザートのパフェを取ろうとしたギエルのクソジジイが悪い

どうでもいい、とか言わないで私って甘党だったんだから

「どつちがガキだ、今だと私よりもちっちゃい癖に」
そんな私の言葉

「なっ…!」

それに凄いショックを受けている様子のギエルのクソ？ガキ”
ふっふっふっ・・・ガキが調子にのっちゃだめだな〜

「・・・ていうか、ガキのせいで墮勇を逃したんだけど」
少しの間忘れちゃってたけどね・・・

とりあえず言おう、そして謝らせよう。あの昔の大人だったギエルに謝らせるんだ

うん、絶対良い気分になる

「それなら魔族の現トップのリーシ・トルウマアとミーファが追っているぞい」

ちっ・・・謝らないのかよ

・・・ふむふむ、それなら大丈夫かな？∴む？その二人がおっていると言つ事は・・・

「お姉様ア~~~~」

そんな感じでこっちにもう接近してくるミルリヤ

「ミルウリヤア~~~~・・・ごふうッ!」

受け止め準備完了した末に吹っ飛ばされた

ごろごろと転がっていき、やっと止まると私に抱きついてきたミルリヤの頭を撫でる事に

ああ〜、やっぱり妹って最高だわ〜・・・（、*）

「・・・（ふっふっふっ、やはり体に乗っ取るっていうのは最高だわ）」

そんな感じのことを思ってる私

ミルリヤはムキユ〜てな感じでとても嬉しそうな笑顔で抱きついて
いる

「…で、お前はなんでいるんだぞい？」
そんな様子を眺めながら私に質問をしてくるギエル

「ふっふっふ … 私は輪廻転生の輪を超えて今この時に蘇ったのだ！！」

まあ、体の所有権は全て徹夜に取られちゃってるけどね…」
体の所有権が取られてるってところは悲しいよね」

前も言った気がするけど前の世界ではゲームセンターとか
とても凄い気になってるものばかりだったんだよね。ああ、やり
たかったなあ…」

「…なんと珍しい事を体験するな…ぞい」
いい加減無理矢理「ぞい」をつけるのをやめろって話です
まあ、その間にもミルリアを撫でる私、ああ、何故でしょう
何故こんなにも癒しをくれるんでしょうか…」

「もおう、たまらないいいいいいい！！可愛すぎ〜ッ！！」
そんな感じでさらにムギユ〜ッと抱きしめる私
と…そこでまたも私の空けた穴から二人が入ってきた
玄関から入ってくるという選択肢は無いのだろうか？

「逃げられてしまいました…」
リーシが報告をしてきた
まあ、幻術で惑わされたのだろう

「すみません…」
ミーフアというエルフも同じように言ってきた
それにしても森でエルフをまくとは…やっぱり相当技術の高い
幻術を使ってくるなあ」

ふむふむ・・・

「リーシちゃん、リーシちゃん」
とりあえず、リーシちゃんを手招きする

「リーシ？ちゃん」・・・？そんな呼ばれ方はじめてなんですが・・・」

そんなことを言いながらリーシちゃんはこっちに来てくれる
まあ、とりあえず来なさい

「はい、これ」

そう言つて鞘に収まつた黒い日本刀を渡す
私の作つた妖刀だ。

「え？これは・・・？」

「あなたへのプレゼント」

ふっふっふ・・・私つて太っ腹だね
ん？太つてるわけじゃないよ？え・・・君、吊るされたい？
まあ、とりあえずそれは置いておこう

「・・・でも、なんでですか？私は自分の武器を持つてるんですが」
どうやら理解が追いつけていけない様子ですね

「この刀はね：全てを切り裂く事もできるし、ある一定の弱さの人
だつたら自動で魔法強化をして強くする事もできる。そして、閻魔
性の精霊をどうにか100年分の魔力を使って造つてこの刀に宿し
たんだよ」。んでそれを君にあげるって」

まあ、リーシちゃんには魔法強化は意味は無いと思うけどね
ん？話が噛み合っていないって？気にしないで、前置きって言う奴だよ

理由を聞かれたのに理由を言っていない私ってなんだがうざい人だよねん？うざいつて・・・？君ってマゾ？吊るされたい系の人？とりあえずそれは置いておこう

「そんな強力な物を何で私に？」

そんな疑問を私に言ってくる…まあ、それは疑問に思うよねというか再び聞いてくれるリーシちゃんは良い子だと思います

「魔王が死んだでしょ？魔王っていう大きな壁があったから魔族が滅ぶ事もなかったけど、その壁がなくなっちゃった今、それなりに強力な物がなくちゃいけないのよね」

だからこの妖刀をあげるの、この刀は魔族を守るために使うものなの・・・。だから今のリーシちゃんに渡すのよ。ずっと使っても刃こぼれなんてしないし、錆もしないからね

ずっと使えるわけだから魔族をまとめるトップに受け継げばいいしね、ちなみに私利私欲のために使う場合は一時的に使えなくなっちゃうから」

うむ、私が持つても意味が無いからね

ちなみに精霊を宿した理由はこの刀の悪用を防ぐためです、精霊ちゃんには持ち主の悪意があるかどうかの判断をしてもらいます、もしある場合はなにも切れないなまくら刀のなるように仕込んであります

「・・・わかりました」

それをちゃんと受け取ってくれるリーシちゃん

ふむふむ、素直に受け取ってくれる子は良い子です！！

撫でてあげよう、てな感じで手を伸ばそうとしたら避けられました。悲しい・・・

「え、リーシだけずるい！！！！」

そんな事を言ってくるミルリア

「ミルリアはもう右腕に贈り物みたいなものがあるでしょ。あなただけの物だよ？」

うん、どうにか逃げよう。プレゼントなんて用意してないわ……。するとミルリアは右腕を一回見た後嬉しそうな顔をする。・・・

「えへへ」

うん、簡単に逃げられたぜ！！可愛い意！！でも・・・我が妹ながら単純な子・・・詐欺にひっかかりそうで心配だ・・・少し気をつけるように言っておかないと・・・

「・・・それで、そこで眠ってる三人はどうすれば起きるぞい？」
ギエルが美月、瑞穂、和馬を指差して私に質問してきた
それに対して私は水晶のついたキーホルダーのようなものをギエルに見えるようにする

「これは魔法具らしくて、魂から拘束してるみたいだよ
だからこれを壊せば起きると思うよ」

でも、まだ壊すつもりはないんだけどね・・・それに対してギエルのクソガキが・・・

「ふむ、では壊そう」

そう言っつて、私のもっていた魔法具を壊しやがった

…アア

ッ！！

まだ！！まだ美月ちゃんを愛でてないよ！！ミルリアは十分愛でた

けどもッ！！

《好き勝手やってくれましたなア〜・・・》

ぎゃあああああああつ！！な、ななな何だとう！！早すぎッ！！

と、とりあえずミルリアを私の体から引き剥がす

私に抱きつくことは良いとしても徹夜に抱きつかせることは嫌だ

・・・とかそんな感じのことを思っているうちに肌の色が白になっ
ていく

チツ・・・！！くそう、徹夜のバカあ〜！！

《・・・いつもどおり眠ってなさいな》

その言葉を言われると同時に体の所有権が再び徹夜に戻る

私はまだ天下取り（天下Ⅱ美月ちゃん）を諦めるわけには行かぬッ
！！

リシいい〜・・・

「ふう、やっと戻れた」

その声は完全に男のもの、肌は白いが黒髪は縛っていないので女性
に見える

「お主、リヤナじゃなかったのかぞい？」

「俺は徹夜だ、あいつは俺の前世らしい」

そんな感じに適当に質問をしてギエルとの会話するのをやめる

周りの人（魔族&エルフ）は俺の変わりようにビククリしているみ
たいだ

ミルリアやリーシもこの状態の俺を見るのは初めてだからな

まあ、ミルリアの場合は黒い肌の時はあっても白い肌の時はないか
らな

「んむ〜？よく寝たあ〜」

そんな感じの声をあげながら起き上がる美月

俺はリヤナの記憶を覗いたわけだけどもなかなか危なかっただろう

「なんで俺は眠ってたんだ？」

美月と同様に瑞穂も起きたようだ

「・・・こんな所で寝たらダメだな、風邪ひきそうだ」

そんな事を気にしてる所じゃないと思うぞ、和馬くん

あ〜、なんだかな、この三人は（俺も含め）間の抜けたのが多いと思う

「ん？お前誰だ？」

そこで和馬が俺を見て質問してきた

「は？景山 徹夜ですが何か？」

いい加減に皆のこの反応にはイラついてきた

俺がイライラ気味に答えると、和馬ではない人間が動いた

それは・・・

「お前も俺と同じ悩みがあったんだな〜！！」

瑞穂だった。

しかも相当嬉しそうな顔だった。なんというか・・・もおやだ・・・

「ふむ、俺以外は女性、しかも美人…ふっ…ハーレムか…」
そんな和馬のコメント

「オオラアア ツ！！」

俺と瑞穂のドロップキックが脳天と鳩尾に炸裂したことは言うまでもない

19話 ふっ…ハーレムか…（後書き）

こんにちわ〜（又はこんばんわ）。

何故こんなに早く投稿したかというのと、第二章がクライマックスに入る前に書き溜めではなく、書いて誤字チェックを二回程度したら投稿、という形にするためにこれから後三話程度は早めに投稿していきます。

今回ではほぼ会話だけだった・・・という話です

そして前書きで美月ちゃんにも言っていたのですが、リヤナさんの説明が作者の俺でもウザイ気がした（又は長いし、人の話を聞いていない様子だったからキモイ）ということでした。すべては俺のせいですね。正直、書いた後に「ああ・・・いつもウザイ小説だな、とは思ってたけどいつも以上にウザクね？」みたいな気分になりました。でも修正はしません。これ以外のストーリーが思いつきません

さて、今回の話では

リヤナさんがリーシに妖刀を渡していました、妖刀で魔剣と同じ物なんですね。魔剣などに関するものをウィキペディアで調べてたら魔剣＝妖刀てな感じのことが書いてあった・・・気がします

あえて言うなら、妖刀は魔族のトップが受け継ぐ特別な刀という物になっていくはずです。まあ、そんな事はこの小説には書けなさそうな気もするので後書きで書かせていただきました、第二章の最後に書く番外編に書いてみるのもアリかな？と思っています

ふう〜・・・高校で野球応援に行ったのですが、日焼けが凄いですね

白と言って良い俺の肌が、今では真っ赤、もう少ししたら真っ黒になるでしょう。中学では卓球なので屋内、高校では文化部なので日焼けすることがありません。なので、夏だなと思うような日焼けができてうれしくはありませんが、なんとなく「ほわあ〜」て思います。

さてさて、これから書くことに関してなのですが：正直「書いていいのかな〜？人の事を馬鹿にしてるようでダメなんじゃないかな〜？」と思い、2秒考えた末、「よし、書こう！！」と言う事になりました。

今日（投稿日の前日の）感想で、『一言：くさい』という物が届きました。これに対して俺はどんな返答を返せばいいのでしょうか？この感想を送って下さった方は小説を嗅覚として捕らえているのでしょうか？それとも俺のストーリー展開がくさかったのでしょうか？（ストーリー展開に「くさい」いうのも可笑しいと思うんですけどね）痛い展開だ、とかキモイ展開だ、とかならある気もするのですが（例に出した二つは全て俺の小説にあてはまります）・・・くさい展開だ、というものはない気がするので正直困りました。もしかしたら誤字の報告かもしれませんが、でも・・・これでどこに誤字があるかわかれというのかっ！！？

まあ・・・感想を送ってくださいった方の考えが読み取れなかったのは多分、俺の無知さが原因だと思うわけです。

なので教えてください、これはどう受け取ったら良いのでしょうかね？

・・・
・・・
まあ、とりあえずはそんな俺の疑問です

・・・正直、書く事がなくなりました。さっきの感想の話も後書きを

長くするためのものですしね。・・・例の感想を送ってくださった方・・・ごめんなさい！！m（|ー|）m
自分でこの感想を消すつもりはありません。イラツときた感想が前に一件あり、それは消したと時はあるのですが、この感想には「あゝ・・・？」てな感じの感想しかもてなかったので消すつもりはありません

では、さよなら〜（^・^）ノシ

ちなみに、写メは撮らせていただきました・・・え？嘘に決まってるじゃないですかア（´・`）*（ニヤニヤ
冗談なしに事実を言うつと撮ってません

誤字・脱字があればマジで御報告ください

20話 絶対につー！！（前書き）

白い空間、そこには三人の子供達がいた

「こんにちわ（又はこんばんわ）クロと言います。一応指輪の精霊です。」

黒い少女はこちらに一礼をする

「フレと」「イム」「です」「」

そして双子の子供達も自己紹介もする

「正直作者の話では私達の事を忘れているわけではないのだが、出す隙が無い。と言われました」
黒い少女が言った

「それは」「とっても」「ひどくないですか？」「」
そして双子の子供達が問う

「だから、いろいろと考えた末」

「・・・」「・・・」「ストライキをしようと思います！！」「」

そんなことを言いながら黒い少女は渡されていた紙をビリビリと破り

双子の子供達は布団を出して眠りだした

それにあわてて焼き芋のきぐるみを着た人が説得をしにいった

結果：無理でした

20話 絶対につ！！

まあ、とりあえずあれから三日たちました

二日はエルフの森の中でくつろいでいました

え？なんでかって？疲れたからです、それ以外にありません

まあ、こんな事をあなた方に言う必要ないですよ。言われても迷惑ですしね

・・・「あなた方」って誰の事だろうか？

それにしても、めんどくさいなあ・・・

まあ、とりあえずそれは無視しといて今はエルフの森を出たところだ

俺と美月と瑞穂と和馬にリーシとミルリア、そしてギエルとミーフ

アがこの場には居る

まあ、お別れという奴だ

短い間だけだったがギエルを怒らせるのはとても面白かった

やっぱりガキを怒らせると良い反応をしてくれるね

「うむ、なにか助けが必要なきがあつたらわしらにも言つと良いぞい。できる限りでだが手を貸してやるぞい」

「本当に短い間でしたがそれなりに面白かったです」

まあ、そんな感じの別れをした

言っているのかわからなかったから言わなかったが、正直言つと

ガキには手を借りたくない。なんか頭悪いこととして足手まといになりそう

まあ、俺も頭悪いけどね

そして歩き出す俺達

というかさ、今言つのもなんだけどさ

なんで俺の思考で今までズラ〜と書かれているわけ？

俺の考えだけで俺も美月も瑞穂に和馬でさえも全然しゃべってない
んだけど

これはどういうわけさ？

『NETAが無い。・・・YAK I芋でした』

はい、スルーしまあ〜す。

とりあえず、話さないのは可笑しい。ということでコメントを入れて
いきます

俺以外のですが

「てつつやあ〜」

・・・いつもどおり過ぎるのでスルーします

はい、次は瑞穂ちゃん

「おい・・・いま瑞穂？ちゃん”って言ったか？」

怖いのでスルーしようと思います

てか、俺の思考にまで入ってくんなし

「・・・フツ、瑞穂と美月はいつも可愛いな」

うん、スルー。瑞穂に蹴り飛ばされていたのも加えてスルーだ

どしよね〜。というか俺だけしゃべってないんだけどさ

ていうか、俺の思考はみんなスルーしてるな

「ん、あれは何だ？」

という瑞穂の言葉が聞こえた

瑞穂が何かを指差している。そちらの方向を見ると何かの大群が飛
んでいた

よく目を凝らしてみる

「ああ、あれはミラゲイルの竜騎士団だな」

俺の言ったとおりだ。やつとしゃべれたZ E

・・・という事はとりあえずおいといて説明しよう

「ミラゲイルは三つの大国の内の一つなんだが、レーゲンは『時の巫女』、サラスムは『勇者召喚』という特別なところがあるわけだがミラゲイルはそんな特別なものは無いからな、その上で大国になった理由は他の国よりも軍事力が強力、というわけなんだよな。その中でも強力なのが竜騎士団だ。竜と言っても小竜ワイバーンだけだな」

・・・まあ、そういうわけだ

ミラゲイルの土地には『小竜の谷』ワイバーンとか言う感じの小竜ワイバーンが集まる特別な場所があったはずだ。そのワイバーン達と使い魔契約した騎士達の集まった部隊だと覚えていてくれ

「こつちに向かってきてるね」

そんな美月の言葉。まあ、そのまま受け取ってくれ
こつちに向かってきている

・・・というかさ適当に考えてきたわけだけでもさ、俺って脳内で誰に話しかけているんだろうか？

まあ、それはとりあえずはほっとしておこう

まあ、とりあえず数分たち、ミラゲイルの竜騎士団が俺達の前に降り立ちました。と…

目の前には十数人の騎士達と十数匹の小竜ワイバーンだ

その先頭にいた一人が小竜ワイバーンから下りて近づいてきた

「勇者殿達と魔族のお嬢さん方…会議の時以来だね」

そんな話しかけ方をしてきたのは当然の事、ミラゲイルの騎士のザアク・オルライトだ
こんなキザでしたか？ふむ、作者がキャラの固定枠から外してしま
ったのか・・・
ん？作者ってなんだ？

『正直、この挨拶には自分でも困った…焼きI M Oでした』
うん、よくわからない天からのお言葉はスルーします
ていうか、この話で二回も出てくんな

「話」ていうのがよくわからんが言わなきゃいけない気がした

「こんにちわ、ザアクさん」

という俺の言葉から始まりどんどんと挨拶していく

「あれはなんですか？」

そんな美月の質問

それはザアクさん達がワーバーンでなにかを引いていた物を指して
いる

それは籠の様な物だった

「ああ、あれは黒髪黒目の少年を護送しているんだよ」
ふむ、それでこの竜騎士達の多さか

「ふむ、私達の所にいた少年も今はミラゲイル王都にいるぞ」
ちなみに、これはリーシの言葉。ふむふむ、頑張ってますなあ
大国ミラゲイルは…

「ちなみに、今は何人集まったんですか？」
これは瑞穂の質問

まあ、気になるわ。俺も気になってたもん

「この少年で12人目だな。この世界では黒髪黒目は目立っているから見つけるのはあまり苦労はしていないよ。大陸全体に黒髪黒目が居たら報告するようになるという情報を流してゐるんだが、何を勘違いしたからわからんが逃げる者もいれば、褒美がもらえろと思ひ髪を染めてまで来る者までいるよ」

うん、逃げる者の方はしょうがないが、髪を染めてまで来るってのはどうかと思うな

変な勘違いしてるね。正直笑えるわ

・・・俺って性格悪いな

「マスター、私は何をしていたら・・・？」

と：そんな時にある女性がザアクさんに話しかけて来ていた

それは20歳前半でロングヘアの女性だ。？マスター？・・・？

「ああ、ロザ。休憩してて良いんだぞ？」

それに答えるザアクさん。それにしても騎士達のほかにこの人って居たか？

むう・・・？てな感じの表情をしている俺、それを見たザアクさんが口を開いた

「ああ、こいつは私の使い魔、ワイバーン小竜のロザだよ

こんな姿だが一応、私より年上だな。…戦場では大分お世話になっている」

ワイバーンの使い魔か、ふむふむ・・・へえ・・・ほほ・・・

・・・

・・・別に羨ましいとか思ってないです

！！

「私はまだ休憩しなくても平気なんですがね・・・というかレディの事を説明するとき歳を言うなんてなんて失礼なんでしょうね、マスターはそれでも紳士ですか？」
そんなことを言っているロザ

「あつはつは・・・すまないね、まあ・・・私自身、紳士と言って誇ってるわけではないから何で今言われたかわからないが・・・とりあえず謝っておくよ」

そんな事を言っているザアクさん
それに対してロザは「気持ちが悪くてまっせ、マスター」と言いながら眉をしかめていて、それを見て苦笑いのザアクさん。なんというか・・・うん、なんでもないです

「それで君達は何してたんだい？」
こっちを向いて質問をしてくるザアクさん

「こっちはエルフの森に居た墮勇と殺りあってたんですよ
・・・まあ、僕達の知らない間に墮勇は逃げていたんですけどね・・・」

まあ、お前ら寝てたしな・・・俺もだけど
その言葉にビクリ…と肩を揺らすザアクさん、まあ今捜してる奴らを見つけて戦っていたのだから反応することは間違いないだろう

「なんで寝ていたんだい？そしてその間に何故墮勇は逃げたんだ？」
ザアクさんが質問してくる。それには俺が答える事にした

「魂を拘束するっていう魔法具を使われてしまって、その間に殺そうとしたんだけど、ある知り合いがどうにか墮勇を撃退したんです」
まあ、リヤナさんの事は言っても信じないと思うし言わないでおこ

う、ただでさえ変人なのにもっと変人と思われてしまうのは嫌だ
まあ…やっこのことじゃないと思うな、結構楽に撃退してた

「その魔法具はどうやって解除したんだい？」

またザアクさんが質問してきた。これには美月が答えてくれた

「壊したらしいです。ハイエルフが剣の柄で殴ったらしいです」

前話で詳しくは説明してなかったがそんな感じで壊されたらしい

…「前話」て何だ？

「…ふむ、そうか、面白い事を聞いた。では、ここでいつまでも話してるわけにはいかないな。私達の他にも頑張っているからな、お互いに頑張って行こうじゃないか

…では、私達も急ぐとしよう、さよならだね。良い方向に進む事を祈ろうじゃないか」

ザアクさんがそう言った。そう言って他の騎士達の方角に歩いていき
口ザが小竜に変化して飛んでいった

「ふむ、いつまでもキチツとしてんなあ…」

歩くお手本は揺るがないのだ

そして凄い音が聞こえると同時に雲の上から戦艦が下りてきた

魔族が乗っている戦艦のだが…それは俺の知っているもので
他のものと比べると二倍ぐらい大きい、そして底が見えないような
真っ黒の戦艦なのだ

つまり、俺が作った特別製の戦艦だ

正直使いどころがないので魔族にプレゼントした。戦争で戦艦壊れ、
勢力が大分削られていたので俺の気遣い、というやつだ

「ふむ、私達も迎えが来たようだしとりあえずお別れしよう」

そう言ったのがリーシだ

「・・・またお姉様に会うために来るからね」
お前はいつまでもリヤナさんだな・・・ロシアンを考えてやれよ。
・・・てか来るなよ

戦艦が着陸し、そこから数人降りてきた

ジールク・ライ、そしてその近くにルクライル・リーン
あとはこちらのミルリアに近づいて来ているのがロシアンだった
ミルリアを心配していたようだったがミルリアの幸せそうな顔を見
て一回止まる

「ミルリア様、何か良いことありましたか？」

「うん、リヤナお姉様に会えたっ！！」

「よかったですね、ミルリア様」

・・・と、そんな感じの会話をしていた。そして、もう一組の方は
何かを言いあっているようだった。ケンカかな・・・？ということ
でなんとなく聞いてみよう

悪ふざけで馬鹿にするネタが手に入るかもしれないしな

「いやいやいや、やっぱり俺にはこの色は似合わないと思うわけで・

・・・」

そんなジールクの言葉、ジールクの視線にはルクライルの持った複
数のいろいろな色の布

∴そして、ルクライルの声が聞こえてくる

「ジールクには何色でも似合う！！絶対につ！！」

・・・どんな理由でケンカしてんだよ。というかケンカか？あれか

…リア充か、チツ・・・別に舌打ちなんかしてないです。絶対にしてないです・・・チツ・・・

「いつもどおりの夫婦っぷりですね・・・」
そんなリーシの眩き

「そうだね・・・」
そしてそれにミルリアが答えていた

・・・まあ、とりあえずリーシ達、魔族とは別れた

20話 絶対につー!! (後書き)

こんちゃです!!

久しぶりの連日投稿ですが、書くことがありません
なので今日のあとがきはこの程度にしておきます
グッバイ!! (^ ^) ノシ

誤字・脱字があればマジで御報告お願いします

21話 ってなにぞ？（前書き）

白い空間に、The イケメン野朗の少年と自称男の少女がいた…

「誰が自称だゴラアツ！そして少女とか言うなヤア！！」

「こんにちわ（又はこんばんわ）、和馬です、上のコメントは瑞穂です。自分で自己紹介をしませんがそこは見逃してくださいと嬉しいです」

・・・イケメンの少年がそんな事を言い、横ではキレ気味のしょうzyo…じゃなかった少年がいた。そしてキレ気味の少年が口を開く

「今回の前書きでは俺と和馬が担当する事になった、宜しく・・・正直なところ最初から俺を怒らすようなことをしてくるとは思わなかった。あとで焼き芋きぐるみ野郎はシバくのは間違いなしとして今回もこんな駄小説を読んでくれてありがとな」

キレ気味少年は軽く頭を下げ、その後はイケメン少年が口を開く

「正直、俺達はまだ出て来たばかりなんだがすぐに前書きに出れるとは思わなかったよ、俺達は一応これから出まくるキャラだから早めに出しといたらしい。こんな浅はかな作者だが、見捨てないで・・・いや、見捨ててくれ。俺も徹夜と同様に作者はどうでもいい主義だ」

そこで焼き芋のきぐるみを着た人が出てきて、紙を渡す、そして逃げるように去っていった。というより、マジで逃げていたその紙を見てキレ気味少年が読み上げようとする

「え〜つと…今回は瑞穂ちゃん・・・？ちゃん”？・・・よし、吊るすか・・・」

INFO キレ気味少年が『白い空間』より退室しました

「・・・瑞穂が行ってしまったがとりあえずは俺が続けようと思う
そこでイケメン少年が紙を見る

「読み始めようと思う・・・今回は瑞穂ちゃん・・・じゃなくて
瑞穂くと俺は出てこない、正直四人の会話は疲れた。どうにか和
馬を消去・・・できな・・・いだろうか・・・？・・・ふむ・・・
オーケー、オーケー・・・瑞穂の手伝いをしなくてはいけないな」

INFO イケメン少年が『白い空間』より退室しました

白い空間には誰も居なくなつた。そして気のせいかどこかの焼き芋
の悲鳴が聞こえたような気がしたが…それは多分、気のせいだろう

21話 つてなにぞ？

「お久しぶりですなあ〜・・・」

そんな俺の呟き。今は前の話から2日たった

・・・「前の話」つてなにぞ？

「・・・ああ、そうだね。徹夜くん」

今は俺と美月、そして目の前にはラルドさんとライル

本当に久しぶりだな、この二人。多分一ヶ月ぐらい会わなかった気がするぞ

瑞穂たちは今、宿で休んでいる。これは今まで会えてなかったから会おうとしたわけだ。まあ、あつたのは本当に偶然なのだが・・・

「それにしても、君達はまた大きなことに巻き込まれてるんだって？」

金髪で背が高く、可愛いというわけではなく綺麗という感じの整った顔立ち

そして背には金色の剣が担がれている。それはエクスカリバーという名の聖剣

『聖剣』のラルドだ

「あれ？秘密裏に進んでるはずなんですけどね」

それに対して美月が首をかしげた、公式に走り回ってるわけでもないし

墮勇の事はできるだけ知られないように動いている。

無駄に知られてパニックになれるのは嫌だからだ

「・・・もう噂になっている。勇者の二人がいろいろと探ってる、つて」
それにライルが言った、あいかわらずの無口気味の言葉

黒い髪に白い肌、右が紅で左は黒の瞳。前と変わらない姿

この頃では火属性の魔法を乱用しているため『魔炎』のライルとか言われてるらしい

あと、他に聞いたときのあるのは『放火魔』だった。うん…気にしない

「裏側の方でも暴れたらしいじゃないか」

「あれは仕方が無くやっただですよ、別にストレス発散とかそういうわけじゃありません」

正直、否定はできないが…

まあ、自分でこんなことを言ったら怪しいよね…気にしないけどさ

「ふむ…そうか」

そんな事を言いながら、スパゲッティのようなものを口にしているラルドさん

ここはギルド『スカイ・バード空を飛ぶ鳥』の建物、そして食事を食べたり酒を飲んだり、などできる例の場所だ

「例の場所」と変な言い方をしたがそれはなんとなく、であり、特に意味は無い

「そつえばラルドさん、SSランクになったんですね。おめでとつございます」

そう、ラルドさんはSランクからSSランクになったのだ

俺と一緒に居た時はほぼ対人戦闘だったけど、俺と別れた後はちゃんと魔物との戦闘に戻っていったらしい

すると、すぐにSSランクへ昇進したらしい

「君達がSSランクの二人…まあ闇ギルドに墮ちた二人だったが、その二人を倒したから、さすがに減ったままではまずいと思ってい

たんだろう…私の力で上がったわけじゃなくて嫌なだけだね」
まあ、本人はあんな事を言っているが、ラルドさんはSSランクぐらいになる力は十分あったから俺達があの人を倒しても倒さなくても変わらなかつただろうに…

「…徹夜達はすぐにSランクに上がったね」
ライルがしゃべった

「あれは勇者だからってすぐにランクを上げられちゃったの」
それに美月が答えた

ちなみに、ライルも昇進してSランクだ。この一ヶ月程度でいろいろと変わっているわけである。良い事もあれば…墮勇とかいう面倒くさい悪い事もあるわけで、とても頭が痛くなるな…もオ！やだアア！めんどくさすぎるっ！！

「そつえば、私の妹がいろいろと騒いでたね…」
ラルドさんがそんなことを言う

「ラルチですか？何て言ってたんです？」
それに美月がたずねた

「いや…私はよくわからなかつたんだが、『フッフ、美月お姉様に頼られた…嬉しいなあ』や『あのクソな真つ黒男をどうにか排除して私が美月様の横に…』とか『さて…チャーハンもどきの中にはどんな毒を入れておきましょうか…苦しんで死ぬものが良いですね』などなどと言っていたね。」

…へ？

チャーハン…だと…っ！！？あれれ、俺が会議から三日たった宿の食事で…チャーハンもどきを食ったぞ…！！？えええええええ、知らないところで暗躍していたよ、あの娘っ！！？

出番が無いなあ、と思ってたけどまさかまさかの暗躍中でしたかッ！！？

こわっ！と恐れおののいた自分がいるのは言うまでもない

「いまの気になる噂は、勇者達が行つてること今回でも多数の国と多くのギルドが参戦するかもしれない。というものがあるよ」
そんなラルドさんの言葉が気になった
とつてもありえそうな話だから何にも否定できない俺である。・・・
やっぱり、めんどくさい、の一言に限ります

そこはある一つの部屋、中には5人の人がいた
明かりがついてなく、窓はカーテンがキツチリと閉められ中にいる
人の顔は見れない

「いつまで続けるつもりなんだ・・・」

その中で一人だけ口を開いた

その人も例外は無く顔は見えず、姿を見てわかるのは背の高い男で
キチツとした姿勢だったことだ。正直何もわからない

「それはこちらの求めるものが揃うまで...でしょうね」

そのうち一人が口を開いた、そいつは暗いですね・・・と呟き手から小さな光を生み出す。そいつは美男子と言える物で背中には白い翼が生えている。つまり墮天使だ

その言葉に最初に口を開いた男は苦虫を噛んだような表情になった
光はその男まで届かず、どんな人物なのかはわからない

「・・・俺達が求めるものは黒髪黒目の人間だ。ただそれだけ・・・
お前らが動いていれば問題はないだろう」

他の人間がしゃべった。そいつは黒髪黒目の少年で腰には日本刀を
さしている

泰斗とよばれた少年、墮勇の一人

「ああッ！イラつくなア、殴られた所がまだ痛むんだよ・・・
ただのケンカだったらすぐに治んのによ・・・やっぱり異世界での
は可笑しいもんだ。俺みたいな戦闘タイプじゃないんだ、忍者みた
いな裏で活躍するような能力を持っている奴には辛すぎんだよ」

そんなことを言っているのは泰斗と同じ黒髪黒目の少年
鞘に収まっているのはバスターソード。少し乱暴な口調と少し晴腫
れている頬は魔界の都市に潜入していた少年だ。

「あゝ・・・心が傷つきました、あんなにも無様に負けるとは思い
ませんでした・・・あゝ、もう自信がありません・・・僕のコレク
ションの魔法具が一つ奪われたし・・・幻術も破られたし・・・
なんですか、あの魔族の女性は・・・」

とても落ち込んだ言葉を言っているのはある少年
その少年の肩には布でぐるぐる巻きにされているハルバードがある。
その少年は墮勇の一人である。

そんな様子を見て顔のわからない男はさらに苦い顔をする

「なんでこんな奴らに従わなければいけないのだ・・・」
とても苦い声色で呟いた

「それは貴方が従わなければいけない状況にいるからでしょう？」
それに堕天使が返答する。その顔には余裕の笑みを浮かべていた
男はさらに顔が歪む

「・・・あんたらは仕事をしてくれていれば良い、いずれは解放する」

それに泰斗が答える

「ああ〜ツ！！モオ、イラつく〜ツ！！」
戦闘タイプではない少年が騒ぎ

「もぉ・・・自信がないです」

そして、幻術が得意いな少年がさらに落ち込んでいた

・・・それを見た男は溜息しかつげなかった

21話 つてなにぞ？（後書き）

こんちゃです〜

今回では〜、久しぶりに〜ラルドさんとライルちゃん現れました〜。ちよつと出番があるのでこちら辺で出てこないと、あれ？なんでこんなときにこの人出てきたの？という疑問が浮かんでくるので出させました〜

・・・正直、書くことないデ〜ス

最後がカタカナになってても気にしないです

墮勇のほうも怪しいことしてるみたいです。まあ・・・何もいえな
いですね。

誤字・脱字があればマジで御報告お願いします

・・・正直、一章の時に後書き頑張りすぎたせいで書くことが無くなり
ました。後先考えずにやると大変ですね

22話 え？7200秒？（前書き）

白い空間、そこには黄金の剣を担いだ金髪の少女と白い肌で黒髪、そして右目が赤だが左目は黒の少女が居た。

「こんにちは（又はこんばんわ）。私の名前はラルドですね。」

「……ライル」

それぞれが挨拶をして、金髪少女が口を開く

「今回の前書きでは私とライルが担当する事になった。前の異世界からの訪問者とは違い途中でいなくなることもなければ物に釣られてやってきたりしたわけではない」

金髪少女がそんなことを言う、そして黒髪少女が口を開いた

「……出番がこの頃なかったからやってきた」

その言葉に金髪少女が黒髪少女の頭を小突いている。どうやら余計な事を言っただけらしい。

そして、今回も現れる焼き芋のきぐるみを着た人、当然いつものように紙を渡すと逃げていくように去っていった。

「さて、今回の話の話をしようじゃないか。7200秒とは一体？意味あることなのか、それとただの作者の蛇足なのか、そんな気になることは本編で確認するように、……正直私は気にならないがね……」

「……訂正報告、前の話で私の異名が『炎魔』となっていました。が本当は『魔炎』にしようとして間違っただけらしい。……なので直したらしい。あと、書き溜めもこの話も含めて後二話らしい、今回

の話では急展開すぎるかもしれないけど、我慢して…作者が焦っちゃったらしい」

金髪少女と黒髪少女が紙に書いてあった事を言った
そして、もう手を振りはじめた

「他の人とは違い無駄なことはしないようにするつもりなので、今回はここらで終わりにするよ。じゃあね」

「……いつもどおり、私達はきちっとした感じでやる」

そんなことを言うと白い空間がまるでテレビの電源を切ったように
プツリ…と消えた

22話 え？7200秒？

それは四日後に起こった

最初は美月専門の情報網のラルチが情報を掴んできた

「ミラゲイルとレーゲンの国境の山脈にある廃れた要塞を墮勇達が使っているらしいです」

そんな情報

それと一緒に他の情報網から同じものが多数入る

それは俺達だけではなくイリルさんや魔族の魔界六柱（今は五人だけ）達とも自然に行動が一緒になった。∴他にも情報は入り、その要塞の周りには見た事の無い魔物が数キロ先から見るとまるで蟻の大群のように見えるほどの事、その事によりドラゲイルよりイリルさん含め数十匹の竜の群れが飛んできた

魔界よりは数十機の戦艦と当然、魔界六柱（今は五人だけでも）が来て、他の国々では大勢の兵士を出す準備がしており、それを魔界の戦艦とドラゲイルの竜達が運べるようにと配備されていた

さらには、前にラルドさんが言っていたように多くのギルドに大規模な依頼が出され魔王討伐のときの大戦のような大きさになってきている

そして、その問題の要塞はミラゲイルの物だ。ミラゲイルはこの世界の国の中でも一番の軍事力を誇っている。それは要塞の固さや使いやすさなどにも影響があり、要塞の中では一番落としにくい所だ

ろう。まあ、何でそんな所を使わないんだ、みたいな疑問が浮かぶだろうが、その要塞は長年使っていたため使えない状態にありとりあえずは修理しようと思つて修理してなかったらしい。それでも要塞の守りは十分高いのだが…

ちなみに王都『ミラゲイル』ではその要塞よりも落とすにくく造つてありそれこそ一部の実力者…SSランクや魔界六柱に勇者達などさらにはイリルさん等が出てこなければ数十日は持ち堪えるような物だ

「あれが例の要塞か…正直、面倒だな」

それが俺の感想だ、めんどくさい。でも早めに終らせないとめんどくさくなりそうだ。だから頑張ろうと思つた。

「本当に大量に居るね」

美月の言葉、その要塞の周りにはあの魔物がウジャウジャといて、中にも大量に居るようだった。

「あの魔物たちはいくらでも召喚可能だからな、魔力が尽きない限り多くなるだろうし相手は堕ちたと言つても勇者だからだな、俺は普通の人と同じ程度の量の魔力しか持つていないが…多くの魔力を持つてているのは当たり前だし、幻術使いと言ひ姿を隠す能力と言ひ大量に魔力を持つてるのは当たり前だろうな」

そんな事を言つてゐるのは和馬

つまりはとりあえず魔力が多い、ということなのか…ん？

和馬つて普通の人と同じぐらいしか魔力持つてないの？でも魔弾つて結構魔力使うんじゃないか？それでは何発も撃てるって可笑しくないか？

それを和馬に尋ねてみると「いろいろと裏技があるんだよ」と笑って答えていた。そもそも裏技を教えろってんだよ。この野郎

「まあ、どんなことにしても・・・面倒な量の魔物だつてことはかわりねえけどな」

そんな俺と同意見の事を言っているのは瑞穂だ
いつもどおりの瑞穂くん、やっぱり気が合うなあ・・・

「…なんで黒男はいつも美月様の隣に居るんですかね・・・まったく邪魔としか言いようがありません」

そんなことを言っただけで睨んできているのはラルチという少女、ちよつとした同性愛者というなの変態だ。ラルチは美月の後ろに立っていてその後ろには何故だか知らんけどもある一人を除いた昔の勇者一行である、ロイズ、マイル、サイスがいた

この三人はラルチに連れてこられたらしく、無口の女性には断られたいらしい。他に用事があったようだ

「何で私は連れてこられたのでしょうか？このメンツだと私達はいる意味がない気がするのですが・・・」
そんなことを言っているのはマイル

「・・・いやはや、意味がわからないな・・・確かにこの戦闘に参加するのは決まっていた事だが、わざわざあの忌々しい黒い奴のところに連れてこなくても」

そんなことを言っているのはとつても乙女なロイズくん

今思えばロイズ・ルーサニツヒというフルネームのだが、ルーサニツヒの部分がメッテルニヒを思い出させる。「ニヒ」て所が特に・

・
・

「ねえ、久しぶりに会ったわけだし、この後どこかで食事しない？」
そんな事を言っているのはサイスという少女。肩には大きな鎌を担いでいる

確か特殊な魔法陣で自分の魔法を強化することが得意だったはずだ

『さてさて、皆さん。準備もできたでしょうし、そろそろ侵攻を開始しようと思います。狙うのは敵のトップ4人の首です。相手とは一対一ではなく多対一で戦闘を行ってください。相当の実力の持ち主なので危ないものとなります』

そんな言葉が通信機から聞こえる、これはイリルさんの言葉だ
他ではもう空に竜や魔界の戦艦が飛んでいる、そしてイリルさんの一言により戦闘（もはや戦争と言えよう）が始まった

四本の腕を持った強化バージオンの魔物が宙を舞い、他の魔物たちを巻き込みながら吹っ飛んでいった。そしてそこには、いかにも「投げました」という俺の姿がある

まあ…姿を表現した言葉どおり俺が投げました
え？投げたら危ないって？大丈夫だよ周りを壊すためにやってるんだもの

今は要塞の中、思いつきり突っ込んでいきました。

俺の体には血がべつたりとついでるわけだが俺の闇ですぐに吸収する。まあ、すぐに返り血がついてしまうので無意味なのですが・・・

ちなみに、この場に居るのは俺だけではなく美月たちも居る

元勇者御一行は外で戦っている、正直に言つとついでこれなかった

全員なにも言わずに進んでいく、「言わず」というよりも「言えない」という状態だ。いつも以上に魔物がウジャウジャと居て、喋る隙が無い。

チクシヨオオ〜〜！！今回の話だけ超ダメダメになつちゃうじゃねえかよおお！！誰も話さないなんてとてもつまらねえよ〜

・・・正直「今回の話」てのがなんだかわからんのだけでもよオ〜〜！！

そして、要塞の中を結構走り回っていて、リヤナ達魔界六柱と要塞の中で会うこと7回、イリルさんと会うの5回、絵本を読んだり料理を食べたりなどしてサボっているイリリヤを見ること22回、イリルがイリリヤにお仕置きをしている光景を見ること100回。何が言いたいのかという・・・墮勇が全然見つからないのだ。いろいろと無駄なところがあった気もするがそこは気にしないで欲しいわけだ

これは絶対にありえない・・・だけでもとにかく捜しまくるしかない。だから頑張つて魔物を倒しながら探したわけだ

7200秒後

え？7200秒？つまりは二時間です。なんとなくめんどくさくしました
すみません

とりあえず話を戻すが、二時間で戦いは終わった

相手もそうとの数だったがこっちも相当の数だったことが良かったらしく、この時間で終わった。

…だが、問題があった

情報とは違い、墮勇が見つからなかったのだ、これにはさすがに危機感を覚えることは間違いない。相手は逃げたのか、それとも最初から居なかったのか。後者についてはさすがにヤバイと感じる

そして、それを裏づけするように事が起きた

最初に見えたのは黒い点だった。そしてそれは段々と近づいてきてそれがなんだかわかった。それは両手には、魔界に居た黒髪黒目の少年とヒドラと一緒に居た黒髪黒目の少女…ミイを抱えているヒドラだった

ヒドラは汗だくで長い間飛びまくってたようで疲れていた

「・・・裏切られたんだっ！！！」

ヒドラの一言。それに当然、意味がわからないという顔をする俺達

「本当は王都『ミラゲイル』で魔神の召喚が行われるんだよっ！！」

ヒドラの言葉、その言葉を証明するように後ろ・・・つまり王都『ミラゲイル』の方角で紫色のような光が天に届く柱を作り、強大な魔力が感じられた

22話 え？7200秒？（後書き）

んちゃっ！！

焼き芋でござア〜んすウ〜。

自分でも少し思つのですが急展開過ぎる出〜ぞんす〜。まあ、俺の駄小説だ。これぐらい普通でしょ！〜という理由で現実逃避をしてみたり・・・

んぎゃ〜〜ッ！！

・・・特に何もありません、すみません。無意味な事をして・・・

・・・んぼアア〜〜ッ！！

はい、以下省略です。すみませんでした

今回の話では〜

えつと〜、久しぶりの面子が出てきましたね、特に理由がありませんが出した感じですよ。もうこの頃だと昔のキャラが一切出てこないです。あるえ〜？〜？と思いました

まあ、ほぼ書くことがありません

誤字・脱字があればマジで御報告よろです

・・・イルリヤはイルルさんに怒られるが多すぎだと思っ

23話 大国『ミラゲイル』（前書き）

白い空間、そこにはある少女が居た。それは未来を見ることのできる少女だ

「どうも、こんにちわ（又はこんばんわ）カイラです。」
少女がこちらに向かって一礼した。

「今回では私が前書きに出させていただきました。私は結構最初のほうに出たのですが、やはりなかなか出番はありませんね。戦争などでは未来を見て相手の戦略を邪魔する、などという物がありますが、今は未来も見れませんので用なしですね」

その少女は完全に落ち込んでいた。焼き芋のきぐるみを着た人が出てきて、少女の肩を叩く。

少女は顔を上げて焼き芋の方を見た。すると焼き芋は手を差し伸べる。……台詞の紙を渡すために……。そして焼き芋は去っていった

「……なんか期待させるような事しておいてこれはひどいと思います。とりあえず今回の仕事をさせていただきます。やはり仕事は大切だと思いますので……。え、前の話でのラスト、そして今回の話。どんなことが起き、どういう風になり、どうしてヒドラは逃げてこれたか。全てにおいてこの話に詰め込まれています。その分文字数が多くなり普段は2000文字程度だったのですが今回では7000文字になっておりますが、どうか最後まで読んでくださると嬉しいですよ。」

少し納得がいかない場合もあるでしょうがそこはその広いお心で全て受け流してくれると嬉しいですよ。」
少女は紙を読み上げ、紙を折りたたむとこちらに手を振る

「では、皆様さようなら。お体にお気をつけてください。作者はこの頃では一日中頭痛に悩まされたらしいです。今は夏の季節なので熱中症もあると思いますので本当にお気をつけください」

そして、白い空間はまるでテレビの電源を切ったようにプツリ…と消えた。

23話 大国『ミラゲイル』

それはヒドラが徹夜たちに会う前の数時間前の話

衝撃的な言葉はまだ言われてるわけでもなく、徹夜たちはまだ要塞の前で準備しているだけで、要塞を攻めてはいない。そんな時間、つまりは過去のお話だ。

そして、問題の王都ミラゲイル。そこには騎士として有名な人間・ザアク・オルライトがいた。ザアク・オルライトはいつもとは違い軽装備の鎧を装備し、腰にはロングソードを下げ、背中には盾を担いでいる。城の中ではあまりそんな格好をしないザアクだったが、今は何かが違った。そしてザアクの周囲には部下でもあるほかの騎士達が数人いた。

「黒髪黒目の人間の捕獲数は13人。奴らが提示してきた数だ……」
ザアクが口を開いた。黒髪黒目の人間は13人……徹夜たちと会った日からもう一人見つけ、保護……いや、捕獲したのだ

「これから何が起こるのですか……？」
周囲にいた数人の騎士達の内、一人の青年が口を開く

「最悪の事態が待っていることは間違いない。……だから、私の指示通り動くんだ、作戦通りに行けば絶対にうまく行くはずだ」
その言葉に頷きあった騎士達は自分の仕事をするためにそれぞれ動き出す。それぞれが自分達を纏めているザアクを信じて疑わない表情で動いていく

「……（絶対に最悪の事態にはさせない。世界を壊すなどという

ふざけたことはさせるつもりなどない……どうにか繋げなければいけないのだ」

そしてザアクも歩き出す。それは自分のためではなく他の者のために動いている

そして数分の間、石でできた城の道をカツン…カツン…と音を立てながら歩いていく。すると、ある人たちに会った

「お父様!」

それはザアクの息子であるナイト・オルライトという8歳の少年だった。ちなみにナイトとは「騎士」ではなく「夜」という意味でつけたのだが、部下や国王などに笑われたのはとても悔しい事だった。そしてその少年の後ろにはある少女がいた。ミチル・ミラゲイルという少女、ザアクの主であるミラゲイル国王の娘。つまりはこの国の姫様、歳はザアクの息子のナイトと同じである。

「お父様、この頃ミチル様のお父様……王様の様子が可笑しいとミチル様から聞いております」

そんな事を言うナイト、そして後ろでは寂しそうにしているミチルという少女

王様はお体の調子が悪いだけですよね、と確認してくるナイト。そんな心配しているのはなぜだろうかが気になった。

すると、ミチルが口を開く

「わ、私が……お父様に嫌われてしまったんじゃないか心配で……」

その言葉に、ああ…と納得してしまったザアク。今の国王はある理由でほほ他の人間とは口が聞けない、それはザアクも例外ではなく、この頃ではただ黙って国王の横に立っていることが多い。

「大丈夫ですよ、ミチル様。国王は相当な親バカですから。将来、

あなたが国王を嫌いになったとして・・・そんなミチル様でも国王は愛し続けますから」
そう言つてミチルの不安を取り除く、するとミチルはホッ…としてる様子があった。

将来にミチルが国王を嫌いになる、という所にミチルとナイトが触れないのは何故だろうか、そんな疑問が浮かぶもののザアクは触れないで済んだ。

「・・・ナイト。お前はどんなことがあつてもミチル様をお守りするのだぞ」

そんなザアクの言葉。それに「はいっ」と力強く頷くナイト

「僕の目標はお父様のような騎士になることですからっ!!」

元氣よくいったその言葉、それにザアクは少し渋い顔をしてしまう。

…だが、ナイトはその様子には気づいていなかった。

そして、ミチルとナイトの後ろから走つてるような足音が聞こえ、数名の騎士達とある女性が二人走ってきていた。

それはこの国の王妃のフレイ・ミラゲイルとザアクの妻レア・オルライトという名の女性。どちらもザアクにとって大切な人物である

「ナイト、勝手に行つてしまつてはだめでしょう」

「ミチルもですよ!!」

その二人は子供達を叱っている。そしてこちらを見てくる。

それは心配そうな表情、ザアクはこれからやることを一部の部下達とこの女性達にはしゃべっていた。だからだろう、そんな表情でザアクを見たのは……。

ザアクはそれに対して一礼だけすると方向を変えて歩き出す。そして王妃と妻は子供達を連れ、数人の騎士達と違う方向へ歩き出した。

ザアクにはやる事があった。それをするためにも愛しい人たちのことを忘れただ歩くしかなかった。

そして、その場は同じくミラゲイル王都。その城の中に白い髪の少年の姿をしたヒドラがいた。そのヒドラの近くにはミィという少女がいて、ヒドラはミラゲイルに保護されたこの黒髪黒目の少女が原因でミラゲイルにいた。

そして、その少女とキャツキャとはしゃいで遊んでいるのが魔界にいた少年、名前はルウという少年だった。

「無駄にはしゃいで怪我しないでね、二人とも」

そんな事を注意するヒドラ、それに少年と少女は「は〜い」という返事をした。注意するヒドラは徹夜がヒドラに対しての印象を165度違うものにしていただろう。

そして、ヒドラは目の前においてあった知恵の輪を黙々と解こうと頑張っている。つまみに木の実を焼いたものをちまちまと一つずつ食べている。

知恵の輪という物は初代勇者が召喚された時、偶然持っていたものでそれが大流行にして一般的にも大量生産されて売られるようになったものだ。

ちなみに、ヒドラは頭がいいのか、それとも単にこつこつのが得意なのか、または偶然か…ヒドラの足元には大量の知恵の輪の山がある…しかもそれらがすべて解かれているのだから驚きだ。

「ねえ、こつち来て〜」

ミイの言葉が聞こえる。ルウという友達ができたおかげかこの頃では元気よくしゃべることが多くなってきてりう・・・あ、噛んでしまった・・・書き直そう。

ルウという友達ができたとおかげかこの頃では元気よくしゃべることが多くなってきている。・・・それに対してヒドラはただ微笑むだけだった。

ヒドラの見た目は少年だが、竜・・・しかも亜種の寿命はそれなりに長い、だから外見の年齢と精神年齢は当然違うのだ、普段はふざけていて外見と合っている感じなのだが・・・それは気にしないでおく。

とりあえずミイに呼ばれたので知恵の輪とおつまみを持ちながら、そつちに向けて歩いていく事にそれは今まで行った事のない道だった。

今までいろいろと城を探検していたがこつちだと仕事で大忙しで走り回っている兵士や騎士、あとはメイドさんなどがたくさんいるため行くことは無かったのだ。

ヒドラはミイとルウにひっぱられるがままに歩いていく。

そしてどんと進んでいく、そしてある大きな扉の前についたとき

「やった、解けたぞ」

ヒドラは手に持っていた知恵の輪が外れて二つになり、手を上げて喜んでいる。

すると・・・横の大きな扉からある声が聞こえてきた。

『黒・・・黒・・・の人間は・・・やつと・・・』

そんな声が聞こえ、ヒドラはなぜか気になったので少しだけ扉を開き、覗いてみた。

そこは王の間と呼ばれる場所だった。目の前にはイスに座った王様。ポーっとしていて心ここにあらず、という感じた。そして……

「……黒髪黒目の人間は13人集まった。これで完璧な魔神が召喚できる」

そんな言葉、そしてその言葉の主は日本刀を腰に下げている黒髪黒目の少年。つまりは墮勇の一人、ヒドラを襲った奴だ。

「……ッ!!!? (ミラゲイルが裏切った……?でも、どうして……?)」

それに驚くヒドラ。できるだけ声を出さないようにする。扉の中をよく見てみれば王様とその少年のほかに墮天使も居れば、黒髪黒目の少年が他にも二人いる。泰斗と呼ばれた少年としゃべっている様子を見ればやはりその二人も墮勇なのだろう、とヒドラは結論付ける。

……と、そんなときにヒドラの肩を叩かれた。

「……ッ!!!?」

慌てて後ろを振り返ればザアクという騎士の姿があった

あのポーっとしている王様の一番の部下である騎士、それを当然敵だと思っことは間違いではないだろう。だが、ヒドラが動くよりも先にザアクは右手の人差し指を口の前に持って行き、シゅっとな静かにするように合図をする。

そしてザアクはヒドラを少し扉から離れさせ、本当に小声でしゃべりだした

王の間の扉を開けた。王の間にはさっきまでいた墮勇たちはいなくなっていた。

王の間の床には召喚のための魔法陣が描かれている。黒髪黒目の人間達をここにつれてくるために居なくなったのだろう。

そんな場所に残されているのは国王である、ガイト・ミラゲイルという男性だ。

その国王にザアクは近づいていく。

「お前が人質として意味のわからない魔法具で動かなくなり、状況がさらに悪くなって行く・・・これでは一ヶ月前に勇者達に助力をしてもらっていたほうが良かっただろう」

墮勇は一ヶ月以上前にこの世界に来ていた。そして徹夜たちがミラゲイルの王と謁見した日も、今日から一ヶ月以上前。その時から墮勇はこの国を利用しようと決めていたのだろう

「最初は・・・お前の事を優先していたが、この状態だとお前のことは考えられないな。正直、俺達は気づくのに遅すぎたんだろう・・・悪いな、ガイト。俺達は国民を優先して動かなければならない・・・」

そんなザアクの言葉。そこに違う言葉が入ってきた。

「・・・あらあら、なにやら決意を口に出しているときに来てしまいましたね」

そんな言葉、その声は墮天使という男のものだった

その手にはエルフの屋敷で墮勇が持っていたものと似たものがあつた。違う所は前回のものよりも4倍程度大きくなり、さらには変な装飾がついている

それは空中に漂う魔力を自動的に吸収し半永久的に効果を發揮する、

という物だ

一応は幻術少年が改造して作ったものらしい。そして改造して半永久的に拘束できる代わりに寝るのではなくボクとしていただけ、と・
・その間は耳に聞いたものは本人にも聞こえている、という微妙な欠陥がある。

その魔法具とボーッと動かない王様、それからわかるとおりだ。

その魔法具で王様・・・ガイト・ミラゲイルは拘束されているのだ

「・・・人間はそういうものだ俺は思ってる」

そんな事を言ったのは墮勇の一人の泰斗という少年だ

その二人のほかには二匹の魔物が一緒に現れる、あの腕がでっかい奴だ

「そういえば、あの竜を逃がしたようですね。本当に厄介な事をしてくれませう」

墮天使がザアクの後ろに近づきながら言う、それでもザアクは振り向かない

「・・・しかも、黒髪黒目の人間を二人も連れて行ってしまった・
・。正直、完全の魔神を召喚するころはできないが、不完全な魔神なら召喚できるんだぞ？」

泰斗が言う、そしてザアクが口を開いた

「不完全ならば問題ない、完璧な魔神が絶対的な存在であるなら不完全な魔神なら倒す事も可能だろう・・・・ッ!!」

その言葉と共に、振り向きざまに鞘に収まったままのロングソードを振るう

「・・・ッ!!!?」

それに反応して墮天使が後ろに下がってよける。いくらあたって

しても鞘に収まっている状態では墮天使に傷は与えられなかっただろう、だがそれで問題はなかった。

ザアクが狙ったのは墮天使ではなく墮天使のもっていた魔法具だ。ザアクの攻撃は狙い通りに魔法具を打ち砕く。魔法具が破片を撒き散らしながら砕けた。

その様子を見た魔物がザアクに襲い掛かる。その一撃をザアクは背に担いでいた盾をすばやく持ち、それで防御する。すごい衝撃がザアクを襲うが魔法を何十にも重ねていたザアクは数？押されただけで踏み止まり、もう一方に持ったロングソードを鞘から抜き放ちながら魔物を切り伏せる。

もう一方ではもう一匹の魔物が拳を構えザアクに襲い掛かっていた。だが、ザアクはそちらを向かない、避けない、動こうともしない。ただ口の端が上がり、その顔は笑っていた

・・・そして、ザアクではない何者かによって襲い掛かって来た魔物が真つ二つに切り裂かれた。

「起きたばかりの俺に働かせるのか、ザアク」

それはこの頃ではしゃべる事のなかった男の声

この国の王、ガイト・ミラゲイルだ。その手には相当大きな大剣が握られている。

その大剣には魔物を切り殺したために血がベツトリとついていた。その大剣は昔からガイトが愛用していたもの、戦場で何回も振るい、何人・・・何匹もの命を殺してきた道具。戦いの中を生きてきた王にとってそれは必要なものだ。

普段は隠してあるが王の間で座ってる時にも近くにおいてあったのだ。

「お前が王になってからずっと座ったままの仕事だったから動きが鈍っているかと思ったが、まだそれなりに動けるじゃないか…ガイト」
それに対してザアクはニヤリと笑ってそう言った。

「ふん、正式に王になる前では戦場でお前と一緒に暴れてたんだ、そう簡単に動きが鈍ってたまるか」

王様口調ではなくただの男の口調に戻っているガイト。それは正式に王になってから無理矢理口調を変えてたからだ。

「・・・話を変えるが、この状況は一応理解できている、聞こえてたからな。それで俺はお前と一緒に何をすればいいんだ？」
ガイトがザアクにたずねた。

「一先ずは時間稼ぎ、あとは勇者に任せる。」
それにザアクが答えた

「・・・そういえば、国民のことはどうするのだ？・・・ん？ずいぶんの間ミチルやフレイと話が出来ていない気がするのだが、嫌われてはないのだろうか？」

「どちらも私が対処してある。国民は兵士と騎士達が避難させているし、私の妻と息子を含めお前の王妃と姫様も数人の騎士を護衛にして避難してもらおうとしている。王妃と私の妻には事情を説明してあるし、子供達だっていつかはきつと理解してくれる」

「ふむ、さすがはザアク。やることは徹底的にやるな。・・・子供達のところはすこし詰めが甘いか・・・」

「昔からお前の後処理をしてきたからな、この程度なら朝飯前だ。・
・まあ、子供達の方は気にするな」

そんな事を軽く言いあっている王と騎士。そして改めて武器を構える。

「・・・さて、ただの愚王で終るわけにもいかないな。親として子には何かを残さなければなるまい」

大剣を下段に構えている王、ガイト・ミラゲイル。

「ふん、親馬鹿が・・・、私は愚王の第一の部下なんで呼ばれるのは嫌だぞ。最後まで諦めずにやろうじゃないか・・・そういえばお前、徹夜くんの動きが見えなかったようだが大丈夫なのか？」

「お前も知ってるだろう？俺が身に着けているこの無駄に派手な服は魔法で体を強化する機能付きだ。もちろん動体視力だって上がってるから問題はない」

服を手で叩きながらそんなことを言うガイト。

「それだけでは私達には勝てないと思いますが・・・一応体の傷も全完治しましたしね、あのヒドラだって殺せます」
今まで黙ったままだった墮天使が口を開いた

「・・・お前は知らないだろうからそう言うだろうが…人は覚悟を決めたら死ぬと決まっただけでも立ち向かうものだ」
その墮天使の言葉に墮勇の少年が言った。

「ふむ、わかってるな少年・・・では『争王』ガイト・ミラゲイルと・・・」

争王・・・それは戦場の最前線で騎士達をおいていきながら大きな剣を振り回しながら暴れる事でいつの間にかつけられていた名前。

「『王剣』のザアク・オルライトが・・・」
王剣という名は、戦場で暴れる争王の横でいつも一人一緒に戦う騎士・・・それは、硬く鋭い剣、全てを切り殺す二本目の王の剣。そんな意味でつけられた名前。

「我等が命をこの剣にのせて、最後まで派手な時間稼ぎをしようじゃないか」

大国『ミラゲイル』の王と騎士の二人が、異世界から来た墮勇と天界から堕ちた天使の二人とぶつかり合う。

ヒドラは飛んでいた。それはミラゲイルから逃げるためにザアクに言われたのだ、それは今すぐに黒髪黒目の人間を連れて行けるだけ連れて逃げてくれ、というものだった。
それを信じ、とりあえずはミイとルウを連れて来た、他の黒髪黒目の人を連れて行こうとしたら墮勇たちが邪魔しに来て、逃げるしかなかった。

今は王都ミラゲイルの空、そして地上では建物の上を跳びながら追ってくる墮勇が二人。結構なスピードで跳んでるのだが墮ちたと言ってもさすがは勇者と言える様にびったりとついてきている

「チイツ・・・いつまでも追っつけてきてる・・・っ!!」

それに対してつい悪態をつくヒドラ、それほどまでに危ない状態だ。

そして、そこにある者達がそれに乱入してきた。

それは小竜ワイバーンにまたがった騎士達・・・つまり竜騎士団だ。

「ヒドラ殿、こやつらは我々が此処で食い止めますので勇者様にお伝えください!!」

十数人の騎士達の内の一人が叫んだ。その騎士はそれを言い終わるとすぐに墮勇に突っ込んでいく。

それと同様に突っ込んでいく竜騎士団の騎士達。

多分、ザアクという騎士の命令に従っているんだろうが、全ての騎士達が必死で騎士という名に恥じないものだった。

「・・・っ」

それを見たヒドラはただ飛ぶだけだった。勇者達の情報はザアクに聞いていた。めざすのはミラゲイルという国の端にある廃れた要塞。勇者達がそこにいるのを知っているのはその情報を墮勇に命令されて流したのはミラゲイルだからだ。だからこそ勇者達を呼べる。

場所を決して遠くも無く近くも無い要塞にした。その程度の距離ならヒドラは飛べる。

・・・だから、ザアクはヒドラに頼んだのだ

それらを全て考えたザアクは、騎士達を纏める者として相応しいとしか言いようが無かった。

23話 大国『ミラゲイル』（後書き）

ちや〜っ！！

今回では、ミラゲイルですた！！（誤字ではないです）

ふう〜・・・書き溜めもなくなり。次からが大変です。

投稿も遅れるかもしれませんが、そこはごめんなさいの一言です。

あ〜・・・、やっとここまでかけました〜。ずっと頑張り続けましたよ〜。

暑い日も寒くなって欲しい暑い日も、アイスを食べながらまったりと暮らしていた暑い日も、頑張ってキーボードをカチャカチャと鳴らしながら頑張りました。

チャットなんかしてないのに、親に「チャットはやめろ」と言われたほど頑張りました。

まあ、第一章の番外編の伏線は全て回収、というわけです。

あと第二章が終り次第、第一章から見直し誤字・脱字訂正&読みづらいたところを直そうと思います。今も十分読みづらいですが、まだ今の方がマシだと思えますので。

ふう、とりあえず書くことなくなりました。

こんなクソ小説ですが、どうか見捨てないで欲しいです

では〜（・・・）ノシ

誤字・脱字があればマジで御報告ください

高校の家庭科の授業で裁縫してたら待ち針を間違っておもいつきし
掴み掛かり指に刺さった・・・チヨーいてえ・・・

24話 真つ赤なゲームの始まりだ(前書き)

白い空間にある三人の魔族が居た。

「どうも、こんにちわ(又はこんばんわ)。ジールクだ」

「ルクライル・リーンだよ」

「部下でありながらも上司の二人と一緒に出させていただいています。メイトです」

それぞれが適当な挨拶をしていく。

「今回だとなぜか俺達を選ばれた。7割はテキトーに3割はふざけたやろうと思う」

放火魔少年がそんなことを言う

「それは全てまともにはやってないでしょ…」
それにツッコミをいれている酸性少女。

「…ルクライル様、ジールク様は人生そのものが遊びですので
そんな事を言った部下少年は放火魔少年に軽く殴られていた。それを慌てて酸性少女が止めに入っている。まあ、ふざけてる感じなので誰も怪我はしていない。

…と、そこに焼き芋のきぐるみを着た人が現れ、紙を渡す。そして逃げていった。

「あゝ、仕事だな。うん、仕事は大切にしなくちゃならん、どんな事よりもまずは仕事だから、とりあえずおふざけは終わりだ。…えゝ、真つ赤なゲームとは何なのか…ほら、ルクライル」

放火魔少年は途中まで読み酸性少女に紙を渡す

「はたして今回の話はどうなるのか、魔神の召喚とは……？ミラゲイルで一体何が起きるのか……はい、メイト」
酸性少女もそれを読み、最後に部下少年に渡した。

「…世界VS墮勇と墮天使、この結末はどうなるのか。…と、まあこんな感じですかね？」
部下少年が読み終わる。

「ああ、そうだな。さっさと帰るか」
それに放火魔少年が答える。

「うん、そうだね。帰ったら買い物行かない？ジールク」
酸性少女が口を開いた

「ん、ああ別に良いぞ」
それに放火魔少年が答えた。

「いつも仲の良い夫婦ですね、ジールク様とルクライル様は」
部下少年はそんなことを言う。酸性少女は顔を少しだけ赤くさせて、放火魔少年は部下少年を軽く殴っている。照れ隠しだろう
そして、部下少年が懐から魔法陣の書かれた紙を取り出し、その紙に火をつける。その紙が勢いよく燃えあたり一面が光で埋め尽くされる。そして三人は居なくなっていた。
さっきのは瞬間移動レポートの魔法陣の書かれた紙……魔法具だろう。

白い空間はパワレルワールド、ここでの会話は本編には関係はない。そんな世界がテレビの電気が切れたようにプツリ…と消えていった

24話 真つ赤なゲームの始まりだ

「・・・ああ、何でこうなっただかなア」

そんな俺の発言、目の前には王都『ミラゲイル』。

その王都の中心では紫色のような柱ができていて、その柱からもれているらしい膨大な量の魔力には恐れ入る。ヒドラの話によるとあの量の魔力を放出している魔神とやらはまだ完全な存在という訳じゃないのだから驚きだ。

こちらの状況を言うと、魔族も竜も他の国に配置していた戦力を完全にこの場に集めている。

王都付近の地形は、王都を中心に何キロメートルという平地が円状に続き、そしてそれを綺麗に山が囲んでいる感じだ。この地形で言うと敵の発見のしやすさを重視したらしい。王都ミラゲイルは難攻不落の都であり、ミラゲイルは他の大国や小国と比べても突飛した軍事力を有している。

他の大国は特別な存在（この場合で言う時の巫女）、または魔法（これは勇者召喚の魔法陣）が居る事、又はある事によりそれについていけている感じだ。

イリルさんの話によると、この魔神の魔力で考えてみるに中位の神であるらしい、本来の完璧な状態なら上位の神だろうと言っていた。上位の神の場合だとこの世界全部の戦力で挑んだ場合、勝てるか負けるかはわからないのだと言う。

不完全な魔神の場合は俺達の四人とイリルとイルリヤで挑んだ場合が五分五分程度に近いらしいのだが、どちらかというと負ける可能性のほうが高いらしい。神なのだからそう簡単には勝てるわけがな

いのだ。

なにやら不完全と完全のパワーバランスが可笑しくないか？と思うわけだがそれほどまでに不完全と完全の壁と言うものはでかいらしい。

「あゝ・・・この場合ってどうするわけ・・・？」
俺の疑問、

「・・・とりあえずは墮勇を倒す事じゃないかな？」
それに美月が返答した。まあ、それが今は第一というわけかな。あんな魔力の柱のどこに行つたって何もできそうにないしね。闇で魔力を吸収してみる、つてのも考えたけどあの量はさすがに吸収しきれないだろう。吸収しきれなかったエネルギーが俺にどんな影響を与えるかわからないから絶対にやるつもりはない。

「...それは当然の事として、どうやってあそこに行くんだ？」
それに対して瑞穂も言った。んんん・・・なんか皆、疑問符ばかりだな。

「んゝ・・・どうするべきか・・・」
そんな事を呟いているのは和馬だった。その手には実弾の入ってるほうの拳銃をクルクルと回していた、正直どうすればいいのかわからないから暇だ。
んゝ、まあ王都に入ることが大切だよなゝ・・・と、俺が思っているときに王都の方角を向いていた俺の視界に変化が起きる。
それは大きな変化、とても大きすぎる変化だ。

「どうなってんだ、これ・・・」
そんな俺の呟き。

そこは異様なオーラを放つ紫色の天まで届く柱。その柱の中に黒い一つの球状のものがあつた。
黒い球状の物は柱と同様に異様なオーラのようなものがある。いや
…あえて言うなら柱以上に異様なものだった。黒い球体は動かない、
ただ・・・何か声ではないような声のような曖昧なものが聞こえて
きた。

…ゼ…、…ツ…ボ、ウ…

それは途切れ途切れでちゃんと聞かないとわからない程度でのカタ
コトの一つの単語だった。そしてそれが段々と長くなっていき聞き
取れるようなものになつていく。

…ソ、レハ、死？…

ハッキリとその言葉が聞こえた。

…ゼ、ツボ ウ…ト、死 トハ、？…

… 生命ノ死、人ノ死、仲間ノ死、同種族ノ死 …

… シ ヌ リユ、ウハ ? …

… 撲殺、病死、餓死、刺殺、溺死、窒息死、戦死 …

他にも死ぬ原因が聞こえてくる。言葉は段々と声が大きくなっていく。

… ゼツボ、ウのノ、カオ? カン、ジ ヨウ? …

… ソ、レハ 俺ノ、 私ノ、 僕ノ、 我ノ …

そこでピシリ…球体にひびが入った。そのひびが大きくなっていき、大きな穴ができる。そしてそこから動物をいくつも合成したような異質な形の生き物、あえて言うならどこか虫を思わせる二足歩行で、背中には蠅のような羽の生えた黒い生物が這い出てきた。

… トツ、テモ…大ス、キ ナモ、ノ…

その生物の顔らしき所があきらかに笑っているように歪む。

…ヒ、トノ イキモ、ノ ノゼツボウ、は・・・俺が、私が、僕が、
我が・・・全部食らい尽くそう…

言葉の途中で、あきらかに何かがに変わった。

そして、その黒い生物の口のようなものがパツクリ…と開く。その口には鋭く小さな歯がズラリと並んでいた。

「 h i i h u h f s んヴお w o w w s w f 死 w 3 ほ 3 k 者 p b v @
あ d の h o w ツ ツ ツ ! ! ! 」

その口から意味のわからない雄叫びがあげられる。

そして変化が起きる、それは黒い生物にではない。青白い何かがこの王都を中心とした平地に集まってきている。

それは大陸…というよりもこの世界全土から集まってきているのかもしれない。

それらが全て集まっていく、そしてその青白い何かは形を変えた。

それはこの世界の生物だった。人間、魔族、魔物、竜人、いろいろな生物。その数は徹夜たちが集めた戦う者達の数よりも多かった。

そしてそれは、20匹のアクババの群れ、一匹のキマイラ、どこかの騎士だったと思われる十数名の人物達、魔族の300人程度の精鋭部隊に入ってたと思われる奴ら。

そんなどこかで見たときのあるような面子。

…俺の、私の、僕の、私の、軍隊を作ろう…

そこでまた笑う。完全になにかで遊んでいる感じた。その視線の先には人間、魔族、竜人などのさまざまな国、または種族の大軍があった。

…過去数百年の間に死んだ者を蘇らそう、縁がある者同士ならば再び会う事が、戦うことが、殺しあうことができる。…

…戦友、身内、友、愛人、部下、上司、ライバル、仲間、祖先…
因縁のある者達が、強い絆のある者達が…

…過去の友を殺し、過去の友に殺され。現在の仲間が殺され、過去の仲間を殺す。昔の…愛人が、友が、仲間が、同僚が、親しい知り合いが、自我を持ちながらも俺の、私の、僕の、私の、力によって無理に体を動かされ、襲い掛かっていく…

…自分の心を殺し、相手を殺すか。それとも…

…何もできずに、殺させるか…

黒い生物が口を大きく開け、声を出しながら不気味に笑う。よくわからない言葉で、他の生き物は恐怖してしまうような笑い声が響く。

…楽しみだ。ああ、生き物の顔の歪むさまが、生き物の悲鳴を上げる様子が、ゼツボウによって心が折れる様子が…

…とつても楽しい…

黒い生き物は笑う。ただ不気味に暗く、楽しんでいるように…。

…私を楽しませてくれ。俺が、私が、僕が、我が、動く前に…。
このとつても大きな遊びに飽きる前に、たくさん楽しませてくれ。…

…真つ赤なゲームの始まりだ…

そんな声のようなものが響いた。

「うん、さつきよりも何をどうしたらいいのかわからなくなった…」

俺のそんな呟き。目の前にはウジャウジャとした大群。その中にはちよつとした知ってる奴や生き物もいた。あえていうなら俺と別の魂であるあるお姉さんがキレて殺しまくった『魔隊』のやつらなどがいるのも偶然発見した。凄い確立の見つけ辛さなのによく見つけた、と俺を褒めてやりたい。

「ん〜、この場合は空を飛んで行く？」

美月の言葉、まあこれだったらやっぱり空しかないか…

「でも、どうやるんだ？」

瑞穂の言葉。まあ、確かにそれは疑問に思っわな。
すると和馬が口を開いた。

「…ごう、気合で」

馬鹿かお前。

まあ、うん、あれだな……。どうやって空を飛ぶのだったのは問題じゃないんだよ。これで問題なのがなんで俺が疲れることをしなきゃいけないのかって言う話だ。

「はあ…」

俺はそんな溜息をつくとき、闇を展開させる。イメージはドラゴン…大きなドラゴンで三人を乗せてもびくともしない物。そして俺は一人用がいいので、そのまま背中に翼を生やすイメージ。え？だってそっちのほうが好きでいいじゃないですか。

「おお、お前の黒いのってやっぱり便利だな」
それが瑞穂の感想だった。

「俺もこんなのがやってみたかったな」
そんな事を言ってるのは和馬。お前の増殖だって結構いいと思うけどな俺は。

「さすが徹夜」

それを見た美月が黒いドラゴンに乗るのではなく俺の背中にしがみついていた。

…なんぞ？

「いや…私的にはこっちのほうがいいなあ、って」
…怒っていいですか？

とりあえずは王都に向けて飛び立つ俺と美月と瑞穂と和馬である。

24話 真つ赤なゲームの始まりだ(後書き)

ぐぬうわあああああああああああああああああああッ！！

あああああああああッ！！なんかもおいやだアアアアアあつあ
あああああああああッ！！

魔神のところとか全然うまくかけないっすう！！何回やり直しても
うまくかけないので…もお！！諦めましたア！！

ニコニコ動画の実況を聞きながら…カチャカチャとキーボード
を鳴らし、つつい実況に笑ってしまい、つつい実況を次々と見
てしまう俺！！(ちなみにニコ動のデイリーランキングで結構上位
を取ってくる「きちくっ」が合言葉のマリオゲームの実況を見たり
しています。)

ぬうわあんか…もお…つかれたアアアアアアアアアアアア！！

ふう…とりあえず落ち着きます。

んで、…うん、なんにも…書くことが…ない

なんなんでしょうかね…このネタの無さは…

そういえば、もう少しで夏休みですね。無駄に暑い日が続きますね。

うん、話を広げようとしたけど何もできねえ(^ ^ ;)

まあ、とりあえず終了です。次回から本格的に戦闘が始まるとおも
つて良い…ですよね？

誤字・脱字があれば御報告ください

25話 … は笑う(前書き)

白い空間、そこにはある少女とある少年がいた。

「どうも、ミルリアです。魔王の娘、または魔族の上層部No.3、または第一ヤンヤンキャラとして作られ見事に変わってしまったらしいキャラです。ちなみにヤンヤンとはヤンデレとは違いたただひたすら病んでる感じです。よくわからないのですが焼き芋にそう言われました」

「こんにちわ(又はこんばんわ)、ミルリア様の部下として登場させていただいています。ロシアンです。宜しくお願いします」

電撃少女と第二の部下少年が挨拶をする。

電撃少女の手には紙が握られている。それは台詞の紙だった。

そしてロシアンの足の下には電撃かなにかで真っ黒こげにされた焼き芋が転がっている。

「ヤンヤンキャラとはなにか、と質問したら。「とりあえずは正常なキャラの敵、または俺の一番苦手な嫌いなキャラ」と言われたのでなんかイラついたのでブリッとしておきました。」

そんな説明をする電撃少女、雷属性の魔法が得意な彼女にとってこれは最高の攻撃だろう。

そして第二の部下少年が台詞の紙を見てしゃべりだす。

「タイトルの「……」とは誰なのか。そして徹夜たちはどうするか、黒い生物……魔神はどうなる？すべてが謎です」

そして電撃少年が紙を見てしゃべる。

「PS、なんかもうほとんどがワンパターンな感じになってしまっています。本当にごめんなさい。」

これからはどうにか改善したいのですが、第二章はどうか我慢してくれと嬉しいです」

読み終わると電撃少女は「じゃね〜」と手を振る。

第二の部下少年は綺麗に一礼をする。

白い空間はプツリ…と消えていった。

25話 … は笑う

空を飛んでいる。

竜の形をした黒い闇。その背には三人の人間。そして、その横では「ヒヤツハアアアツッ！ アイ、キヤーン、フラアアアーイー！！」とよくわからない事を叫びながら背中から翼の形をした闇を生やして空を飛んでいる俺。

今は、もう王都の上空だ。

いきなりもうこんな場面だが、そんな逐一状況を報告するのは疲れるのだ。なので一気にスキップしたわけである。正直誰に報告しているかわからない俺が居るのだけでもね。

「……んぐ、どこに行けばいいんだ？」

そんな俺の言葉、あの黒い生物は結構近くに居るのだがあれにはまだ関わらないほうがいいだろう。イリルさんの話じゃあ俺達四人だと無理そうだ。

「まずは墮勇と墮天使なんだろうけど、どこにいるかわからないし……」

それに美月が答える。まあ、確かにな。倒せるかどうかはさておいて、どうやって見つけるかが問題なわけだ。

「ん、誰と戦うのかも問題だと思うけどな、相性が悪いとボロボロになりそうだ」

瑞穂くんは負けるといふ考えはないのね。

そこで、和馬がどこかよくわからない場所を見ながら呟いた。

「……どうやらあっちから自分で来てくれたらしい。一人だけだ

「からここは俺に任せてもらおうか」

そんなことを言うと同時に、後ろに向かって跳ぶ、その方向には白い翼が生えた人間が居て、そいつの振るった剣と和馬の魔力を帯びた回し蹴りがぶつかり合っていた。

和馬は重力に従い落下し始め、墮天使は白い翼で空に浮かぶ。

「ああ、墮天使か・・・相性悪くないか？」

飛べるのは俺だから俺が相手したほうがよかったかもしれないんじゃないか？

すると、瑞穂が答えてくる。

「和馬が行くって言ったんだから別に良いじゃないか？簡単にやらねはしないだろう」

ふむ、瑞穂がそういうなら別に良いか・・・。なんか仲間なのに軽い気がするけどその分だけ信頼してる、って事だ・・・多分。

「じゃあ、とりあえず下りない？」

美月がそれを言った。とりあえずは城の近くに下りよう、城なら何人かはあるかもしれないからね。

じゃあ、レッツゴー！！

軽い感じだけど気にしないでね・・・

ある二人が会話をしている。

「さっきの魔神の念話の声、聞きましたか？」

「聞いたでおじゃるな」

「途中から声がかたこトじゃなくなりましたが…これは厄介なものになりましたね」

「ほんの一瞬でこの世界に馴染んだという訳でおじゃるな？」

どんな物にも慣れなどはある。徹夜たちのいう元の世界では、飛行機に乗り遠い国に行くと時差ボケなどがあるが、世界の間でもそういうものがある。

徹夜などというと勇者召喚の魔法陣などで、それを自動的に修正されるわけだが、ヒドラの話では13人必要な生贄の内、11人しか使われていない。

その時点で召喚の陣は不完全……なので、その自動的に修正される効果も無効になるのだ。

魔神は不完全なものに加え、時間をかけて世界に慣れる必要があった。だが、神というものは異常だった。ほんの数分のうちに世界に対応し動きやすいものになる。

「……我らは行かなくて良いのでおじゃるか？」

竜王女にその弟が質問した。

その弟：イルリヤの横には姉であるイルルが立っていた。

「あの魔神とやらはゲーム気分ですからね。私達があそこに行ってしまう気が変わってしまうかもしれません、なので墮勇は徹夜く

ん達にどうにかしてもらおうとして…気が変わった時に潰しにかかったほうが良いですね」

その答えにイルリヤはわかってるのかわからない感じに、ふむふむと頷いている。

そして…

「で、何故行かないのでおじゃるか？」

「・・・」

姉は溜息をつく。

その後「教育はもつと必要だったみたいですね」という呟きはイルリヤをガタガタ…ブルブル…と震わせるものだったらしい。

一ヶ月とちょっと前に受けた教育は相当トラウマに残るものだったのかもしれない。

それは過去を生きた者達と現在を生きている者達との戦場だった。

ある者は戦う事を拒否し逃げ、ある者はなにもできず相手に殺され、

ある者は泣きそうな顔をしながらも相手を殺す。

そんな戦場。その中でもある一部だけ何かが違った。

そのこの居るのは、ある魔族の一人の成人男性と一人の少年なのだが、成人男性を見たものは絶望という感情が湧き上がる。

その男性を知らないものは居ない、顔を知ってるものも居れば知らないものも居る。

ただ…その男性の呼ばれていた名前だけは全ての生き物が知っていた。

その魔族の成人男性を見て、ある五人組だけが挑む事を決心する。

……過去数百年の内に死んだものを全てを蘇らせる。

それはどんな物にも例外ではない。そう・・・魔王も例外ではないのだ。

「・・・人がせつかくあの世でくつろいでいれば、懐かしい場所に呼び出してくれるな。・・・まあ、この様子だと死んだのは最近の話だろうが・・・」

魔王が忌々しい、というような顔で黒い生物：魔神を睨んでいた。その横ではある少年が居た。

「魔王様・・・正直、死んだのは昨日のように思えますが、あの世というのはあるものなのですか？」

その少年の名前はクロイズル・リクトン。『魔界六柱』という魔族のトップの六人の内一人だった者。

No.2：そして『腐土』という名で呼ばれていた少年だ。

「ようは気分の問題だ」

そんな事をいう魔王。シリアスキャラは終わったのだ。・・・あ、いや、なんでもないです。

さっきのは忘れてください。

「まあ、呼び出されては従うしかないらしい・・・さて、少しだけ暴れるか」

そんな事を言いながら魔王は大軍へ手をかざす。

その手には魔力が集まっている。それが放たれば相当の命を奪う事になるだろう。

「…死ね」

そして、その魔力が放たれる。

…だが、誰も死ななかった。放った魔力は、ある刃によって切り裂かれた。

それは黒い刃の日本刀。そして、それを持っているのは魔族の女性だ。

「・・・魔王様、わざわざこんな時まで現れるのですか」

その女性・・・『漆黒』のリーシ・トルウマアがしゃべる。

「リーシか……。私が死んでお前が生きている。そして、私とお前が戦うと言う事は、人間と魔族は手を結んだ、というわけか？」

「まあ、そんな感じですね」

魔王の問いにリーシは軽く答える。

「……人間と手を結んだ所でいつかは裏切られるだけだということに……。そんな間違いは私が直してやる」

その言葉と共に攻撃を放とうとする魔王。

だが、これにも邪魔が入る。リーシではなかった。

魔王周りに上空から落ちてきたいくつもの電撃の槍が突き刺さる。それを魔王は軽くバックステップして全て避けた。

「お父様、死者は死者らしく黙って動かなければ良いのですよ？」
そんな言葉と共に軽い足音が聞こえる、その方向には『魔雷』のミルリアが居た。
右腕には変なマークがついていて、それが魔法の攻撃力を増加させる。

「……ミルリアか」

そんな魔王の呟き。

「何もしゃべらなくて良いですよ。そろそろ他の三人も来るでしょ

うしね」

そんなミルリアの言葉。その言葉と同時に魔王を三方向から火、水、風の三種類の属性の魔法が襲った。だが魔王は動かない。それらの三つの魔法は魔王に当たる前に腐るように消えていった。

「お前ら、魔王様に齒向かうとは……何回腐り殺されても文句はないでしょう?」

それらの魔法を消したのはクロイズル。名前のとおり自分の近くにあるものから腐らせる魔法を有している。

「お前も蘇ってたのか、その考え方からクソな野郎だな」

そんな言葉を言ったのはジールク・ライ。No.5の『死炎』。

「めんどくさいのがいるね」

ジールクの横に立っている人物がいる。それは赤い酸性の水を操るルクライル・リーン。

将来はルクライル・ライになるのか……?めっちゃ読み辛いぞ……。

…あ、忘れてくれ。

「ん、みんなキ決め台詞みたいなの言ってるのはいいのだが、俺の言う事がなくなってくるぞ……」

そんなことを言っているのはトールウ・マイラスだった。

魔王とクロイズルの二人を五人が囲む形になる。

だが、あまり良い状況とは言えない。魔王一人でさえ相当強いのにクロイズルは『魔界六柱』の中で二番目の実力を持っていた。

リーシなら一人で倒す事もできる。ミルリアなら一人で長い間戦う事もできる。

ただNo.4とNo.6の三人の場合、複数で戦わなければ確実に殺られてしまうだろう。

リーシかミルリアのどちらかをクロイズルに向けるとしても、魔王と戦うのにはよけいつらい状態となるのだ。

その状況にクロイズルはニヤリと笑い、魔王はその事なんて気にしていない。

ただ、その状況も『魔界六柱』の五人の他に、もう一人の乱入者によって話が変わってしまう。

乱入者の最初の行動は攻撃。そして、それは光の斬撃だった。

それはクロイズルに向かって突き進む。それをクロイズルは腐食の魔法を使い受け止めるが、消しきれずに吹き飛ばされ空中を舞い、空中でどうにか体勢を立て直し地面に着地する。

これにより魔界六柱の五人による魔王の包囲から離れる事になる。

「・・・『戦争』の時には魔法で拘束されて戦うことができませんでしたからね。丁度良いのでその男は私が預かりましょう」

その言葉と共に歩いて来たのは聖剣を背中に担いでいる女性。

『聖剣』のラルドだ。

黄金の剣は鞘から抜かれ金色の金属が輝いている。それを見たクロイズルは楽しそうに笑う。

「私に敵うとおもいますか？」

「さあ？わかりませんね。あなたの腐らせる魔法がどこまでのものはよくわかりませんので・・・ただ、私とこの聖剣を腐らせる事などできるとは思わないほうが良いですよ・・・ッ!!」
その言葉と共に放たれる光の斬撃。それをクロイズルはかわし反撃に移る。

・・・そして再び場所が戻る。

「・・・では、お父様。再びあの世に帰っていただきましようか」
パチパチと電機の弾ける音が聞こえる。それと同時に他のメンバーもそれぞれ臨戦態勢に移る。
それを見た魔王は創造属性の魔法で一本の剣を作り出し、右手で剣を掴む。

「自分の部下だった者の実力を、この身で体験してみるのも一興だな」
魔王は笑う。

『聖剣』のラルドと『腐土』のクロイズル。聖剣と腐食がぶつかり合い。

魔王という一人の魔族と魔王の部下であった『魔界六柱』という五

人の魔族が殺しあう。

そこは戦場。

縁のある者達が殺しあう。

上司、部下、魔族、人間、兵士、冒険者…それらが戦う場所。

25話 … は笑う（後書き）

投稿遅れてしまつてごめんなさい！！

ニコ動で動画を見ることがこの頃の習慣になつていまして、小説にまわす時間がなくなつてました。

しかも、この頃では手紙ブログで他の人の描いた絵に色塗りをする奴にはまつてしまい、無駄に時間がかかつてしまいます。

この頃では小説をうまく書く方法などが書いてあるのを見たのですが、もうザックザックと刺さつてきましたね。

でも、ここまで来ちゃうと大幅に直すというやる気が出ないんですよ。

・・・なので、この小説は読み辛さMAX状態は変わらず…と。違う小説を書いた場合は読みやすいように頑張りますが、この小説は読み辛いのは変わりませんね。

まあ、俺が書いてる時点で読み辛いだろうけど・・・

まあ、とりあえず本当にごめんなさい（汗

・・・書く事がなくなつたですな。

では、ここらで終了させていただきます。

誤字・脱字があればマジで御報告ください

26話 ナルシストですか、あなたは（前書き）

白い空間。そこにある女性がいた。

「どうも、こんにちわ（又はこんばんわ）、リーシです。

時々思うのですが、私の名前のリーシと二代目勇者の名前のリシって完全に似てますよね。というか「リ」と「シ」の間に伸ばす奴を入れただけです。

ですが、これでも作者は、そんな事に気づかずにはやっていたらしいです。

まあ、どちらかという私のほうが先に決められていた名前らしいので私にはなにも心配事もないですし、リシってもう死んでる設定ですからね。

この前書きにも出てこないはずなので気にしません。」
闇少女がそんな事をしゃべる。

そして焼き芋のきぐるみを着た人が台詞の紙を渡しに現れた。
紙を渡そうとしている。

「そういえば、リミですがね。とても可愛いんですよ。

一つ一つの行動も可愛いですし、前にケーキを食べたのですが私がリミを眺めていたらわざわざ私に一口あげる、って！！

もおう、可愛すぎるんですよ！！」

チヨンチヨンと闇少女の肩を焼き芋がつつく、台詞の紙を渡そうとしているのだ。

だが、闇少女は気にせずに預かった子供の事を嬉しそうにしゃべっている。

「それにですねッ！！私と散歩するだけでもとても嬉しそうな顔をしてくれましし！！もお、お着替えをさせてる時なんて、人形みた

いでもとても可愛いんですよッ!！」

焼き芋は肩をつつく。闇少女は嬉しそうにしゃべる。それが数分続く。そして……

「うるさいんですよ。このクソ芋がアアアアアッ!！」

焼き芋が宙を舞う。顔を殴られ、きぐるみの顔が歪む。そして、きぐるみのはずの焼き芋の目からはキラキラッと光る何か舞っている。

ちなみに、台詞の紙は丁度よくリーシの手の上に落ちる。

「あ、仕事だったんですか。だったら早く言ってくださいよ
あなたが聞いてなかっただけです。」

「ナルシストとは誰なのか、なぜシリアスなはずの内容のタイトルはこんなにもふざけているのか。そしてこのコメントをしたのは誰なのか。すべてが気になります。」

「……正直どうでもよくて気にならないのですが、表面上は気にしておきます。」

闇少女はペコリと一礼をして手を振る。

「では、みなさん。本編をご覧ください。どうか、焼き芋の事を考えて気分を害しないようにお願いします。」

正直なところ、私は焼き芋の事を見るとイラつきます
……では」

そして白い空間はプツリ……と消えていく。

焼き芋の気ぐるみを着た人の泣いてる声が聞こえたのは気のせいだ

26話 ナルシストですか、あなたは

ある少年が建物の屋根を跳び移る。

店だと思われる建物、民家だと思われるもの、ギルドの支部だったと思われるもの、それらの屋根を飛び移りながら相手に攻撃を放つ。相手は背中に白い翼をはやした男。つまりは墮天使だ。

そして放った攻撃は金属の弾丸。それは二丁の拳銃から放たれたもので、それを使っているのは和馬だ。

風を切りながら飛ぶ弾丸は墮天使の翼によって弾かれる。

「……さすがに実弾じゃあ、無理か」

和馬がポツリとつぶやく。その声には感情はこもっておらず予想できていたことのようにだ。

そして、和馬に向って風属性の魔法で貫通力の増した羽がいくつも発射された。

和馬は銃を連射して一つ一つ弾き飛ばす。それでも弾き飛ばせなかったものは体をひねってどうにかよける。

「どうしたんですか？ そんな攻撃じゃあ私を殺せませんよ？ それともそんな攻撃しかできないのですか？」

墮天使がニヤリと笑いながら口を開く。完全に挑発をしてきている。当然、和馬はそんな事は気にしてないという顔で銃の引き金を引く。その銃弾の行き先はすべて口の中。それを墮天使は翼ですべて弾く。

「あなた微妙に怒ってませんか？」

「全然」

「いや、でも……」

「…ただ、この世からイケメンはすべて消えてほしいと思っている」

「じゃあ、あなたも消えますね」

そんな会話をしている間にも両者の間では金属の弾丸と貫通力のある羽が飛び交っている。

空中の墮天使と建物の屋根を跳びながらの和馬。完全に有利なのは墮天使だ。

「それにしてもそんな金属の塊を打ち込んでくるよりも、魔法で私を狙ったほうが効率的だと思うんですが・・・」

「俺は不幸なことに魔力量が並の人と一緒にだからな。魔法でドンパチやることはあまり出来ないんだよ」

「それを私に教えてよかったですか？」

「ん？ その程度の情報は問題ないな」

「余裕ですね」

「ああ、余裕だな。…だが、さすがにこの攻撃が弾かれる状況は痛いところだ」

そんなことを言うと素早く二丁の銃をしまい、違う拳銃を取り出す。すぐに和馬は引き金を引く。

それをみた墮天使は当然、よくわからないという顔になるが、次の瞬間には焦ったものになる。

それは魔力の弾丸が墮天使の翼を貫いたからだ。

「…ッ！！？」

「悪いが、こつちも魔力で貫通力を高めさせてもらってる。その翼に魔力が流せたりするかどうかは知らんがそのままじゃあ、防御なんてできないぞ」
魔弾がいくつも風を切る。

「…チツ!!」

それに反応して墮天使は翼を使い空を飛びまわりよける。魔力を帯びた剣でよけきれなかったものはどうにか弾く。

実弾の場合は目に見えるわけではないので美月みたいに剣ではじくことはできず翼を前に広げて防御していたが、魔力の場合は魔法と同じで目で認識できるので剣で弾くことはそう難しくはないだろう。ちなみに、小さな穴のあいた翼だがその穴はもうふさがっている。基本的に翼は天使などにとっては魔力の塊だ。体そのものであり魔力の集合体である翼は、たとえ穴があいたり剣で切り裂かれたりしても治すことは可能だ。

「ただの魔力の塊だが、そこに属性を加える事でもっと凶悪になるから恐ろしいよな」

そんな和馬の声が聞こえた。

その次の瞬間には風属性の魔法の『加速』で速度が上がっている魔弾が右の翼の下を通過していった。
弾丸は風属性の魔弾だ。

「ツ!!!??」

墮天使は驚きの表情になる。

翼がいくつもの刃で切り裂かれたように粉々になったからだ。
だが、一蹴のうちで翼が修復される。

「今のは驚きましたが、翼を壊された程度では関係ありません」

堕天使は笑いながら口を開く。

「・・・そのようだな。じゃあ、本気で殺りに行くか」
いくつもの銃声と共に黄色の弾丸が飛ぶ。

「ダイク・アニマル 闇の動物」

その呪文と共に闇でできた黒い動物たちが現れる。
犬、コウモリ、猫、ワニ、タカなどいろいろな動物をかたどった闇が五人の魔族へと襲い掛かる。

そこは魔王と魔界六柱の面々の戦場。

「爆ぜろッ!!」

そんな男の言葉。

それと同時にその男へと向かっていたコウモリの大群が爆発で吹き飛ぶ。それに続いて何階もの爆発音が響き、一回目の爆発で壊しそこねたコウモリたちを完全に木っ端微塵にしていく。
コウモリは全て消滅させた。

だが、その下から十匹近い黒い犬が凄い速さで迫ってくる。

「・・・ッ!？」

それに反応しきれずに驚きの表情をする。

「ジールク、しっかりしなよっ!!」

そんな言葉と共に赤い水が前列の黒い犬を飲み込み、溶かしていく。

「悪いなッ!!」

その言葉と共にジールクは紫色の炎で残りの黒い犬を燃やしきる。魔王が使う実力者を相手にするときの魔法。1対2などではなく、1対3人以上の複数のときによくつかうものだ。それは当然ジールクとルクライルのほかにも襲い掛かっていく。

「……『^{ストーム}竜巻』!!」

その呪文と共に竜巻が黒く大きなワニを貫き、魔王に向かって突き進む。

だが、トラのような闇がそれを弾く。

そしてトールウに襲い掛かる。

「……チッ!!」

その様子にトールウは舌打ちしながら下がる。それと同時に複数の電撃が黒いトラを砕いた。

「お父様はさっさと眠ってくださいッ!!」

トラが砕かれ開いた道。そこを右手が電気を帯びたミルリアが走っていく。

狙うのは魔王の命だ。

「私がそう簡単に殺^やられるわけがないだろ?」

そんな言葉と共にミルリアが通過しようとした地面が盛り上がる。

「……なッ!!!?」

それに反応できずに、その場に足を踏み入れる。

その瞬間に闇でできてるであろう大きな黒いワームが飛び出してきた。
それはミルリアを飲み込むために口を開けながら空へ向かって一直線に上がっていく。
それにミルリアは巻き込まれた。

「くう・・・ッ!!」

ミルリアは半ば噛み付かれている感じだが、歯が体に刺さってるわけではなく少し食い込んでる感じだった。

とつさに体の表面に電気を流し相手の動きを麻痺させたおかげなのだが、いつまでもつかはわからない。

だが、次の瞬間にワームは根元からバツサリと切り裂かれ消滅した。そして、ワームの根元にいた影が動き、魔王の元へと一瞬でたどり着く。

「・・・殺れ^{ちゃ}」

それに反応した魔王は闇に指令を出す。

その人物に向かって黒いタカが突撃するも右手に持った黒い刀によって切り裂かれる。

そして、その人物の左手に持っているナイフが魔王を切り裂くために動く。

魔王はそれを剣で受け止め、ナイフと剣で押し合いの状態になる。

「さすが私の育てた部下達だ。チームで補ってる部分もあるがちゃんとついてきてるな」

笑いながら魔王はしゃべる。

「あなたに褒められても嬉しくくないですよ。魔王様」
それにナイフで魔王を切り裂こうとした人物が口を開く。

「いやいや、リーシ。要するに私の言いたい事はだな。・・・さすがは私だ、ということだ・・・ッ!!」
その言葉と共に魔王が力強くナイフを弾く、リーシはその力に対抗はせずに魔王の力によってできた勢いに体を任せて後ろに下がる。

「ナルシストですか、あなたは」
まだ空中を飛んでる状態のリーシがしゃべる。

「んむ??ナルシスト」とは・・・?」
それに魔王は疑問の顔になるも、闇でできた動物の三体に指示を飛ばし三方向からリーシを襲う。
次の瞬間には、その三体は雷の槍が上から突き刺さり地面に縫われた。

「要するに、自分がかっこいい、とかそんな感じのことを思ってる人ですよ。お父様。ちなみに、たこ焼きパーティーの時に黒い方に教えてもらいました」

それは魔王の後ろから聞こえた。
魔王は後ろを振り返らずに横に一步ずれると、魔王がさつきいた場所を拳が通過していった。

「・・・あれッ!??」

それにミルリアは驚き、目を見開く。
完璧に気配を隠していたつもりだったが失敗だったらしい。

「基本的に後ろにまわりこむのは良い考えだ。ただ相手に気づかれ
てたら意味は無いな、丁度良いカウンター決め所だ」
魔王は体を大きくひねり回し蹴りを放つ。

「ッ!!」

それをミルリアは腕をクロスさせて防御するも耐え切れずに吹っ飛んだ。

ミルリアは頭から地面に落ちそうになるが、地面に片手をつけると手で跳び空中で一回転して足で着地する。

「お前ら、私を殺すのだったらもう少し頑張ってみろ。じゃなきや、すぐにでも全員死ぬぞ」

魔王の楽しそうな声が五人の耳に響く。

26話 ナルシストですか、あなたは（後書き）

んちゃ〜ッ!!

今回は和馬くんと魔界六柱サイドを書かせていただきました。

もうすこし詰めようかな？と思ったのですが、文字数がいつも同じ程度だったですし、焦っても良いことはないと思ったのでこちらで終わりにさせていただきます。

そういえば、ある方の活動報告で「文体診断ロゴーン」というものを知り、この小説を診断してみました
読みやすさ「E」・・・ひくうッ!!

自分でも読み辛いだろうな、とも思っていました。Eとは・・・ッ!!
ちなみに、今書いている（投稿はしておりません）新小説の一話を診断してみたのですが、「C」でした。

上がってますね。上がってるのですが・・・微妙です。

うむ、俺が書いたらAにはならないのは確かですが、どうにかAにしてみたいです。

では、ここらで終了いたします。

誤字・脱字があれば御報告ください。

重要？

キャラ名前（名前がある者とは限っておりません）のまとめリストを活動報告に載せていただきました。

無駄に多いです。

時間をかけてもいいや、と思うのならば見てください。

第二章完結と共に修正して一話分として載せるつもりです。

27話 徹夜あゝ頑張れゝ（前書き）

白い空間。

そこには真つ白な服装・・・そして髪まで白の少女がいた。

「こんにちはわ（又はこんばんわ）、ハクです。」

氷少女はペコリと頭を下げた。

「この頃では昔なじみの吸血鬼の少女と旅をしています。

いやあゝ、昔と同じで良い子になって何よりです。

私の説教が聞いたのですかね？」

そんな事を氷少女がしゃべっていると焼き芋のきぐるみを着た人がえつちらほつちらと走ってきて台詞の紙を渡す。

すると逃げるように去ってい・・・こうとしてハクに氷漬けにされた。

「あなたごときが私に仕事をさせようとしてる時点で間違いなんだよ？」

ニッコリと笑いながらのその一言は、氷漬けにされてるはずの焼き芋を震わせるには十分だった。

そして氷は震えることによってキイイイン・・・！！というよくわからない音を響かせている。

「とりあえず、仕事をします。

この応援はなんなのか、前の話と同様でシリアスなはずの話なのにこのまつたりさはなんなのか・・・正直・・・気になりません。

では・・・」

氷少女は手を振る

そして白い空間はプツリ…と消えていった。

「じゃあ、氷で作った拷問道具を試そうかな？」

キイイイイイイイイイイイイ…！！

(氷が震える音)

とりあえずは、気にしない。

27話 徹夜あゝ頑張れゝ

そこはある騎士達や兵士達の訓練する場所・・・つまり訓練場だ。その場ではある者達が戦っていた。

「オオラアアツ！！」

瑞穂が大きなハンマーを振るい数人の影をなぎ払う。その影はまるで霧のように消えていく。

「チィ…ッ！！ ハズレかッ！！」

それに対して瑞穂はしかめっ面になり怒りを表す。

そして違う場所。そこは王の間と呼ばれていた場所。何か鋭いものがいくつも飛び出す。

それはある一人の少年を狙って放たれたものである。

「ヒヤッハー！！ 無駄無駄無駄無駄無駄無駄アアアアツ！！」

それを徹夜は両手に一本ずつ持った紫色の刃の剣で粉々に砕く。鋭い何かは砕かれ空中を舞い、キラキラと輝いている。

そして…

「徹夜あゝ、頑張れゝ」

美月はティーカップに入った紅茶のようなもの一口飲みながら徹夜を応援していた。

そして、お菓子として（徹夜が）持ってきていたクッキーをお皿から一枚手に取って口に運びポリポリと音をたてながら食べる。

・・・一人だけ、まったりしていた。

その十数分前。

徹夜・・・つまりは俺だが。

俺と美月と瑞穂は城の近くに下りた。当然城の中に入り、歩いていく。

ヒドラに知らされていたのだが、ザアクさんとかが城の召使などは避難されているので誰もいない。

そして、数分歩いていると、どこか見たときのある霧が立ち込めてきた。

「・・・これ、あれじゃね？」

俺の言葉。これは当然アレだ。

「じゃあ、離れないようにした方が良いよね。・・・ね、瑞穂」
美月が確認の質問を瑞穂に尋ねた。
だが、返答がない。

「んあ？ 瑞穂は？」
俺の言葉。これにも返答がない。

どうやら、王道パターンだ。
つまり瑞穂が、霧で俺達と分断された……。

「んむ？なあ、ここはどこだ？」
瑞穂の言葉。

瑞穂は徹夜たちと別れた事に気づかず一人で歩いていて。
そして瑞穂の質問に当然誰も返答することはない。

「え？ あれ？ なんで俺一人なんだっ！？」
気づいたのは5分後だった。

瑞穂は少しの間、考えると……。

「うん、あいつらは迷子になったみたいだな。俺一人で進んでいくか」

なにやら勘違いした回答にたどりつき、再び歩き出す。
そして歩いていると、ある広い空間にたどりつく。
そこは訓練場だった。

「ん……相性が悪いのと出会っちまったみたいだな」
瑞穂はそんな事を呟く。

それと同時に一部の霧が晴れハルバードを構えた黒髪の少年が現れ

る。

「こんにちわ。えっと・・・瑞穂さんでしたっけ？」

「ん、そうだな。・・・俺はお前の名前知らないけどな」

「いえいえ、私は名乗るほどの者じゃないですよ。ただの堕ちた勇者です」

「・・・じゃあ、倒さねえとなッ!!」

それと同時に瑞穂はハンマーを横に構えダツシュする。墮勇はハルバードを構えた姿のまま数人に分裂した。それは相手を惑わすために幻術でできた者だ。

「オオラアアッ!!」

瑞穂が大きなハンマーを振るい数人の影をなぎ払う。その影はまるで霧のように消えていく。

「チィッ!! ハズレかッ!!」

それに対して瑞穂はしかめっ面になり怒りを表す。

「さあて、どれが本物でしょうかね」

そして墮勇の少年の笑いが響く。

…そして、また場所は戻る。

俺と美月は前に一度だけ来た時のある王の間にたどりついた。

その王の間はボロボロに破壊されていた。

床の魔法陣の円の中だけ綺麗だった。そこだけは破壊されないように墮勇達は戦ったのだろう。

・・・部屋の端と玉座の近く。そこには、一人ずつ人間の男性が倒れていた。

「・・・あゝ」

俺は変な声を漏らしながら一人に近づいていく。

それはある大国で一番の騎士と呼ばれていた男性だった。

まだ息はある。

今にも止まりそうで、かすれた音をたてている呼吸。

「ん…？ ああ・・・て、つやくんた…ちか…」

ザアクさんは目を開けてるか開けてないかわからない程度にまぶたを持ち上げ、口を開いた。

その声は小さい。それらは今にも死にそうだ、という事だけがわかる。

ザアクさんの体には大きな穴が開いていた。

軽装の鎧といえど、それなりに攻撃は防ぐことはできるだろう。

だが、鎧ごと体を貫かれているようだった。

そして美月は他の一人の方・・・つまりは国王、ガイト・ミラゲイルを確認していたが、俺がそちらを向くと何も言わずに首を横に振る。

その倒れてる人間は血で赤くなっているが豪華であったであろう服装をしていて、その近くには半ばから折れた大剣が落ちていた。

「ほ、んと・・・すま・・・な、いな・・・」

ザアクさんの途切れ途切れの声。

「いえ、別にかまわないですよ。美月がいる限り面倒事にまきこまれるのが俺なんで」

後ろで黙ってつねってくる美月がいるが気にしない。

美月と離れたのに面倒事に巻き込まれ続けた俺の過去があるが気にしない。

絶対に気にしてなるものかっ!!

今更か・・・、とか思われるかもしれないけど俺は平凡な高校生なんだ!!

「ふ・・・ふっ・・・そ、うか。じゃあ・・・わるい、が...私た、ちのやったこ、との・・・あと、しま・・・つをしとい・・・てくれな、いか・・・」

ザアクさんが少し笑いながらしゃべる。

その一言一言をしゃべるごとに血が口の中から湧き出る。

「...めんどくさいので本当は嫌ですが、今回だけは頼まれてあげましょう」

俺がそう答えると、ザアクさんは苦笑いのような表情をしながらゆっくりと目を閉じた。

かすれた音をたてていた呼吸・・・それも聞こえなくなった。

そして・・・

「・・・その男達二人にはてこずった。おかげで不完全の召喚をするはめになったし、召喚に予定以上の時間がかかった」

俺達の入ってきたとは違う扉からそんな言葉が聞こえた。

そちらを見ると、鞘に収まった日本刀を腰にぶら下げている黒髪の

少年がいる。

「・・・都堂 泰斗だったな。・・・折角だから俺一人で相手してやるよ」

「え、でも徹夜。二人でやったほうが・・・」

「いやあ、楽しまなきゃ人生損だからな。面白そうな感じだし、俺一人でやらせていただこう」

俺の言葉に当然美月は意味のわからない、という顔になる。

「他の二人は姿を隠す魔法と幻術の魔法ってのは効果は大きいが、平凡な魔法だったからな。楽しめそうにないかと思ってたんだよ。ただ、このザアクさんの傷を見る限り、少しこいつは違うみたいだ。だから俺がやるうと思うわけだよ」

俺は不適に笑っている。

それを見た美月はやれやれ、という感じの顔になり後ろに下がる。美月にはテキストに闇に入っていた紅茶セットとクッキーを渡しておこう。

俺に譲ってくれたお礼だ。

「・・・別に俺は二人相手でも良かったんだが」
泰斗が口を開く。

「いやいや、俺が相手に感謝しろって。美月相手だと面倒な事になるぞ。

あえて言えば俺達二人が相手だったらお前に勝ち目があるわけがない」

「・・・じゃあ、感謝しよう」

素直だな、おい。

「じゃあ、さつさとはじめようか」

俺は剣を鞘から抜きながら口を開く。面倒だけど楽しまなきゃいけないもんな。

ハッハッハ・・・ぜってえに負かす。

「・・・ッ!」

ダッという音と共におもいつきりダッシュする。

それに反応して泰斗は刀を横なぎに振るう。

俺はしゃがんでよけて泰斗の懐に潜り、剣を下から上に振り上げる。

「くっ・・・!!」

泰斗はバックステップして避ける。

俺はそれを追撃するためにさらに前へと足を踏み込む。

すると、前方でパキパキ...という音が聞こえた。

泰斗は少しだけ口の端がつりあがり笑っていた。

それと同時に前方から透明な水晶の鋭い先端が俺の体突き刺すために生えてきた。

「むわ・・・ッ!？」

それを俺は体を大きくそらして避ける。

その後、2〜3回バックステップして泰斗から距離をとる。

「なんだ、それ・・・」

さつきも説明したとおりそれは水晶だった。

先端は鋭く金属をも貫くような勢いがある。多分、ザアクさんを鎧ごと貫いていたのはこれだったのだろう。

そして、その水晶は何もないところから生えてきている。

「・・・これが俺の力だ。面白いだろう?」
泰斗が手をかざす。その手の上ではパキパキ…という音をたてながら水晶が出来上がった。

透明だが、すこしばかり青みがあり光を反射していて綺麗な感じだ。

「・・・結構硬くて防御もできるが、前にあんたと会ったときに見せてくれた怪力だったらすぐに壊されてしまつかもな」
そんな言葉と共に例の音が俺の周りで響く。

そして、次の瞬間には俺目掛けて鋭い水晶が生えてきた。

「ヒヤツハー！ー！！ 無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アアアアアッ！！」

それを徹夜は両手に一本ずつ持った紫色の刃の剣で粉々に砕く。
鋭い何かは砕かれ空中を舞い、キラキラと輝いている。

俺、結構ハイな気分になってます。

「・・・ふむ、予想通りか」
それを見た泰斗は冷静にそんな事を言う。

「いや、なかなか面白い力が見れて良いね。
他の二人と何が違ってこう能力の方向が変わってるのかよくわからんが、楽しめそうで何よりだ」
そんな俺の言葉。

その瞬間には俺も泰斗もそれぞれ獲物を構えてダッシュしている。

そして、二本の剣と一本の刀がぶつかり合い。
甲高い金属音がその場に響いた。

27話 徹夜あゝ頑張れゝ（後書き）

んちゃっす!!

少し早めに投稿させていただきました。

八月には二章を終らせるつもりです。
がんばります。

うむ、書くことがないです。

では

誤字・脱字があればマジで御報告ください。

28話 死んだかな？（前書き）

白い空間、そこに一人の少女がいた。

それは外見と精神年齢の合わない少女だ。

「どうも、こんにちわ（又はこんばんわ）。イリルです。

なんか少ししかでてこないようなキャラでしかない私が前書きになれるとは思いませんでした。」

それもこれもチートキャラ設定のおかげでしょうか？」

竜王女は首をかしげながら、無駄にリアルなことを言っている。

そこに、焼き芋のきぐるみを着た人が走ってきて、台詞の紙を渡す。すると今までに無いほどの速さで逃げて行った。

今までのことですぐ逃げろ、という本能があるらしい

「みんなが焼き芋をいじめるから結構早く逃げるようになりましたね。まあ、私は興味ないので関係ないのですが・・・。」

イリルは焼き芋をすこし見た後に、カメラ目線に戻る。

「え〜と、この台詞の紙ってサブタイトルのことしか言ってないんですよね。」

こんなんで本当にいいのか、私は少し疑問に思うわけです、

もつと前の話のあらすじとかを考えて何かじれったい事を言うとか、いろいろあるわけですし、毎回気にならないことを、気になるだ、

なんだかんだ、書いてあり、とても内容が薄いですとね。

なので、少し焼き芋には教育が必要だと思えます。」

ちなみに、台詞の紙はイリルさんに握りつぶされている。

「ん、どうやら時間のようですね。さようなら」

竜王女はペコリと一礼をする。

そして、白い世界はプツリと消えていった。

28話 死んだかな？

そこは戦場。

「……………シッ!!」

金色の剣を横なぎに振るう。

それを相手の魔族の少年はしゃがんで避け、相手の顔面に向かって手を突き出す。

黄金の剣を持った女性……………つまりラルドだ。

ラルドはその手を避けるために横に横にずれて、剣を少年の腕を切断するために黄金の剣を縦に振るう。

「くっ……………!!」

魔族の少年……………クロイズルは慌てて手を引つ込めて剣の軌道から避ける。

「……………(相手の剣を受け止められる武器を持ってないのは少し辛いですね)」

クロイズルは腐食の魔法を使っているので、普段はほぼ素手と言って良い。

だが、相手は聖剣エクスカリバー。

腐らせられるか分からない剣を相手に手を突き出して試す勇氣はない。

成功した時には圧倒的優位にたてるが、失敗した際には最低でも片手は持っていていかれてしまう。

そんな賭けまでして、剣を腐らせようとは思わない。

だから、クロイズルは避ける。

「ハアツ！！」

そんな声と共に放たれる光の斬撃。それを後ろに大きく跳んで避ける。クロイズルの後ろでは兵士がいて、いきなり現れたクロイズルに驚きつつも後ろから剣で斬りかかる。

「あなたにその剣は必要ありませんね」

クロイズルがそんなことを言うと、兵士の手首を掴んで引つ張り自分の前方に持ってきて兵士の顔面を驚づかみして地面に兵士の後頭部を押し付ける。

「なので、その剣は私が使ってあげましょう」

クロイズルがそんなことを言うと同時に、兵士の掴まれている手首と顔面が腐り始める。

最初に手が完全に腐り、クロイズルの手には剣がおさまり、顔面が腐ることによって兵士を苦しませていた。

「・・・ッ！！」

それを見た瞬間にラルドがクロイズルに斬りかかる。

だが、それをクロイズルは兵士から奪った剣で受け止める。

「どうしたんですか？ そのしかめっ面は。雑魚がいくら死んだ所で私達には関係ないと思いますが」

「…下種な考え方の持ち主ですね」

「世の中では強い者が、正しいですからね。

権力でも、暴力でも、どちらでもいい。どっちかが強ければ下の者を好きに使っていい、これがこの世の決まりでしょう？

それは戦場でも同じですよ。強き者は弱き者を殺してもかまわない

ってね」

「私にとって無縁な事です」

「まあ、確かに冒険者には関係ありませんね・・・ツ!!」

その言葉と共に二人ともお互いに剣を強く弾き、後ろに跳んで距離をとる。

ラルドは後ろに跳びながらも、光の斬撃をいくつも放つ。

それをクロイズルは剣を持ってないほうの手で、自分に当たる斬撃だけを腐らせていく。

ラルドが乱入したときの斬撃と比べると、いくつも放ってきた斬撃は小さくクロイズルも腐らせることができた。

ラルドが着地すると同時にまわりから蘇ったであろう者達・・・農夫や子供などが武器を片手に持ちが襲い掛かってきた。

それを見た瞬間にクロイズルもこちらに向かってダッシュしてくる。

「・・・ツ!! 邪魔ツ!!」

襲ってくる者達を剣で横になぎ払う。

それによって、襲ってきた者達は今は違えど生前はただの一般人だった。

戦いなどには関係のない人達だったが、今は自分の剣によって下半身と上半身が別れていたり、腕が切り裂かれたりなどしている。

だが、今の状況でそれを気にしては自分が死んでしまう。

だから、ただ何の感情を感じずに相手を切り伏せる。

最初に襲って着た者達は切り伏せた。だが、他にも順番ずつに数人掛りで襲い掛かってくる。

黄金の剣が凄い速さでラルドの周りで動き、ラルドのまわりがキラキラと光ってるように見える。

そのエリアに入った者は一瞬の内に切り刻まれ粉々にされる。

「・・・ハアツ!!」

周りの者がいなくなり、黄金の剣を振り向きながらも大振りに振るう。

甲高い金属音が響き、ラルドさんの振るう黄金の剣をクロイズルが剣で防いでいた。

「なにやら随分辛そうな表情をしていますね」
クロイズルはニヤニヤと笑いながら口を開く。

「・・・お前には関係の無いことだ」

「まあ、確かにそうですねっ!!」

ラルドの黄金の剣が動き、クロイズルの物を腐らせる魔の手が狙う。

黄色の魔弾が飛ぶ。

それを墮天使が空中で翼をはばたかせて避けた。
魔弾はそのまま空に向かって消えていく

「本気で殺しに来るんじゃないんですか？　もしかして、あの程度の速度の魔弾で私を打ちぬくことができるんですか？　まあ、たしかにそれなりに魔力が込められた物でしたが・・・」
墮天使は和馬を挑発する。

「いやいや、別にそんなつもりはないさ。少しばかりの準備だよ」
和馬はそれに対して不敵に笑うだけである。

「・・・？」
それに対して墮天使は疑問の顔になるだけだ。

「上を見てみたらどうだ。たぶんわかるから」
和馬の言葉に墮天使は怪訝な顔をし、和馬からの攻撃に警戒しながら上を見る。

それは真つ黒の空。
説明するのは忘れていて申し訳ないのだが、空は魔神の召喚とともに分厚い黒い雲に覆われていた。

その真つ黒の雲の内部のところで黄色い光が見えた。
それと同時に昔から人を怖がらせる大きな音が聞こえる。

つまり雷の光と音である。
それはさっきまでの雲になかった変化だ。

「これは・・・」
それに墮天使は驚き、和馬のほうを見る。

「予想が当たってたりしてるかもな」
和馬はそれを言うと同時に引き金を引く。

それは今までの魔弾のスピードとは違い、一瞬の内に墮天使の翼を貫いた。

「・・・ッ!？」

それに驚きを表す墮天使。

墮天使は自分の体がかすかに痙攣している事に気づく、さっきの魔弾で貫かれたときに少しだけビリッとした感覚があったことを思い出す。

それに対して和馬はすこし不適に笑いながら喋る。

「風属性の魔法の加速でコーティングしてある。

まあ・・・あくまでコーティングしてあるだけでメインの魔弾の属性は雷・・・つまり、大きな攻撃を誘導するための小さな火種だよ」

「・・・ッ!？」

その言葉と共に轟音が響いた。

すると、墮天使は翼がコントロールできずに建物の中に墜落した。

墮天使は一瞬の内でもわからなかったかもしれないが、大きな黒い雲から雷が墮天使に落ちたのだ。

「死んだかな？」

和馬は屋根と屋根を飛び移りながら確認のために移動する。

そして墮天使が突っ込んでいった建物の屋根にたどりつく。

そこで和馬はふくむ、と呟いた後耳を済ませてみることにすると完全に音が聞こえ、次第に近づいてきている。

「おうわあッ!？」

慌てて後ろに跳ぶ様にして避ける。

それと同時に墮天使が屋根を切り裂き飛び出してきた。

そして、それに巻き込まれて魔弾を放つ銃が一つ切り刻まれて粉々になった。

「この程度で死んだと思ってもらうと困りますねっ!!」

そんなことを言う墮天使だったが、体はボロボロになり、少しだけ息も荒い。

さっきのは結構ダメージを負わせたみたいだ。

だが、墮天使は和馬の拳銃を一つ潰したと言う事とある弱点の事を考え不敵に笑う。

「・・・ですが、確か魔力はあなたは少ないはずですよ。今ので魔力も相当消費されたのではありませんか？」

墮天使は和馬の弱点である魔力の事を言う。

墮天使だって元は天使、相手の嘘を見抜くことだってできる。

和馬がその情報を言ったときの様子は完全に嘘はついていなかった、そう墮天使は確信している。

「ああ、確かに普通なら魔力はもう尽きはじめてるころだな」

「?普通”なら・・・?」

和馬の言い方に怪訝な顔をする墮天使。

「もう少しばかり隠しても良いと思ったんだが、可愛そうだからネタバラシしてやるよ」

「は・・・? 魔力が少ないって言うのは嘘とでも?」

「いや、嘘じゃないさ。」

まあ・・・俺は魔力を増やすことができるから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「いやいや、言ってなかったけど俺って『増殖』の魔法を使うからさ、元があれば何個でも増やせるわけだよ」

和馬はそう言いながら、一丁だけになった拳銃を増殖の魔法で増やし、再び二丁拳銃に戻る。

それをみた堕天使は完全に呆けた顔になる。

「俺の『増殖』の魔法って見えるものや個数で表すものだけを増やせるって言うわけじゃなく、俺の認識できるもの全てを増やせるんだよ。」

この世界では魔力ってのは全ての人に認識されてるだろ？当然俺も異世界ってので魔法使ったりして生きてりゃ自然に認めるわけだよ」

「ですが、そんな反則な魔法だったら増殖した際の消費する魔力は相当のものでは・・・？」

「あゝ、俺の増殖ってのは消費魔力よりも増殖量のほうが五倍は多いからな」

「なっ・・・・・・・・!？」

「まあ、つまりあれだよ。」

俺は勇者の誰よりも少ない魔力で、誰よりも多い魔力ってわけだ」
そこで和馬は拳銃を構える。

「まあ、こんな無駄話は終わりにして、そろそろこの戦闘も終わり

にしようか」

「ッ!!! こおんのオオオオオ!!!」

墮天使は凄いスピードで和馬に迫る。

一発の弾丸なら体を貫かれても再生はでき、その一発を我慢する事で和馬の首を切ろうという考えだった。

当然それを和馬は見抜いている。

その上で避けずに迎え撃つ。

「悪いな、俺の増殖は一つから二つになる、っていうわけじゃないんだ」

その言葉と共に右の拳銃からは火属性の魔弾が数十発、左の拳銃からは風属性の魔弾が数十発という数が発射された。

風属性の魔弾は墮天使の体中を貫き蜂の巣にする、そして火属性の魔弾は蜂の巣にされた墮天使の体にぶつかり、爆発してズタズタにする。

そして…もう、人間の姿もしていない肉の塊が地面に落ちてベチャッ…という生々しい音が聞こえた。

和馬は拳銃を懐にしまう。

「天国に帰ってな…いや、こいつの場合は地獄行きかな？」

そんな軽口を叩きながら、城の方向に歩き出す。

「うん…まあ、今日の目標であるモテ顔イケメンを一匹駆逐完了、と」

墮天使との戦闘の時に言っていた軽口は、どうやら本気のようにだった

28話 死んだかな？（後書き）

んちゃ〜

今回では和馬の戦闘終了。

あとの徹夜と瑞穂のほうも書かなければいけませんね。

ちょっとこの話を書いた後が暇だったので新しく小説を作りました。高校の帰りに隻腕の少年が異世界に行ったらどうなるんだろうなあ〜、と思い書いてみました。あいかわらずの駄文です。

ん〜、書くことがないのでそろそろ終わりにします。

この頃本当に書く事がなくなったけど、それは俺の人生が前より増して内容が薄くなったと言う事だろうか？という疑問は考えないようにはします。

誤字・脱字があれば御報告ください

29話 アイギスと蛇（前書き）

白い空間、そこに魔族の女性がいた。

「どうも、こんにちわ（又はこんばんわ）。リヤナです。今回では私が出てきました。正直今まで前書きを見てみたのですが、前書きの癖に無駄に長いこのやろう、っていう感想を持ちました。なのでこれからは少なくするらしいですよ」
魔族の女性は手を振る

「今回では、とくに何もいえません。報告もありません。文字数を少なくするために焼き芋は出しません。というかネタがないし、台詞の紙も渡す必要がないので出てこないだけです。ここらで終わりにしますね。
では、じゃあね〜」

という事で終わり。

29話 アイギスと蛇

……ある戦場。

そこには全身に浅い切り傷の付いた瑞穂がいた。

「チツ・・・本当に相性が悪すぎたな」

舌打ちをした瑞穂は目を鋭くしてまわりを見回す。

すると、左斜め後ろのほうからいきなり現れたハルバードが瑞穂を貫くために突き出された。

それを瑞穂は避けて、ハルバードの出たところに向けて思い切りハンマーを振るう。

だが、ハンマーは何にも当たらず空をきり、瑞穂は手ごたえの無さにさらに舌打ちをした。

全身の浅い切り傷は当然相手の攻撃で付いたものだ。

さっきのように何も無い所からハルバードの突きが放たれ、それを避けるのだが、避けきれずに斧の部分で服と肌を浅く切り裂かれたのだ。

基本的に瑞穂はパワーで押し切るタイプであり、こんな奴を相手にするのは得意ではないのだ。

「私にとって面白い玩具を手に入れたのと同様ですね」

音源のつかめない声が聞こえる。

当然、これは幻術使いの墮勇の少年の声だ。

「うつせえ、ぶつ潰すぞ」

瑞穂のイラついた声に墮勇はクツクツと笑っている。

ちなみに瑞穂は『感知』の魔法を活用して相手の攻撃時に一瞬だけ

出てくる反応で攻撃をかわしている。

そんな魔法があるのなら相手を見つけられるんじゃないか、という疑問もあるだろうが、その魔法に号撃時以外は反応は出ない。それほどまでに相手の幻術は強力なのだ。

「では、弱るまで騙し続けてあげましょう」

そんな墮勇の声と共に、瑞穂のまわりに何十というハルバードが現れる。

『感知』の魔法はまわり全部に反応してしまい使い物にならない。

いや、実際には周りに反応してはいないのかもしれない。

ただ、相手の幻術で自分が魔法が反応していると騙されているだけなのかもしれないのだ。

そして、その何十というハルバードが瑞穂に向かって迫る。

「……ッ！！」 『神アイキスに与えられし防具』

それに対して瑞穂は全方位の絶対防御の壁を展開するが、ハルバードを弾いた音は一つだけ、そのほかは弾かれたように見えるものの音は無かった。

瑞穂は完全に遊ばれているのだ。

「騙される人を見ると、とても愉快でたまりませんね」

またも墮勇の笑い声が聞こえる。

それに怒りが溜まりに溜まっている瑞穂。・・・舌打ちを凄く速度で連発していた。

「……こんなやつに？アレ」を使うのもどうかと思つが、やるしかなさそうだ」

瑞穂がなにやら決めた様子で呟く。

「アレ……、なッ!?」

墮勇が瑞穂の言葉に疑問の言葉を言おうとした瞬間に驚きで声に詰まる。

それは瑞穂のある行動によって驚いたのだ。

瑞穂の行動は、それほどまでに相手を混乱させるものだった。

瑞穂は懐から取り出したナイフで自分の腕を切り裂いた。

腕がプラン…とまるで糸が切れた操り人形のように垂れ下がっている。

「俺の本当の力を使うには、ある奴の気分をよくしなきゃならないんだよ……」

「それが自分の腕を使えなくするのにどう繋がるのか、よくわからないのですが……」

「そいつは俺を恨んでいるんだよ。だから俺がそいつの納得いくまで傷を受ければ、調子を良くして俺に力を貸すようになる。」

まあ、俺が死ねばそいつも死ぬからな、死なない程度にはしてるんだろっが……」

その言葉と共に、瑞穂の服の中から一匹の黒い蛇が出てきた。

それは瑞穂の肩辺りに上ったと思うと、あたりを見渡し始め、ある一点を見つめ始める。

「そこか……」

すると、瑞穂はその蛇の示す場所に一瞬で近づき、何かの胸倉辺りを片手で掴んで廊下に叩きつける。

そこには完全に手ごたえがあった。

「がはアツ!!!?」

完全に墮勇の姿が現れた。

そして瑞穂は胸倉を掴んだまま、墮勇の体を上から膝で押さえつける。

簡単に説明すると、蛇のビット器官を利用して見つけたのだ。

「くそっ・・・なにが・・・」

「神話でのアイギスと蛇の関係を考えてみる、それですぐわかるはずだぞ」

「まさか・・・」

「名前はメドゥーサ・・・体の中で、ずっと俺を恨んでるんだよ。

俺がアイギスを使ってるからって自分を殺した英雄とでも勘違いしてんのかもしれないが・・・」

まあ、元の世界の神話ではアイギスにメドゥーサの首をつけることで石化の能力を手に入れていた。」

瑞穂の目の色が段々と変わり、まるで蛇のような目になっていく。

「もともと俺の能力はこっちが本当のものだ。あえて言うならアイギスはそれを応用して造ったものなんだよ。そしたら、なんか余計な逆恨みがかつたせいで左腕をそいつにくれてやらなきゃ発動できなくなっちゃまった・・・」

ようするに、瑞穂の能力の元になっている奴が逆恨みしていて、一定以上の怪我をしないと力を使わせてくれないと言う事だ。

「まあ、とりあえずは・・・くらえや」

「このっ!!! くそっ!!!・・・ぐうっ」

墮勇の少年は体を揺らして逃げようとするが、瑞穂がうまくガツチリと拘束している。

そして瑞穂の顔を見てしまうと同時に体が固まった。

目を開けたまま動く事はない、呼吸ですら止まっている。

すると、瑞穂は拘束を緩め、自分の足で立つ。

「悪いな。もうお前の肉体と、この世の時は…永遠に交わることは無いんだよ」

瑞穂はハンマーを背中に担ぎなおし左腕の治療をしながら歩いていく。

「こんな奴にここまでされちまうとは・・・本当に相性が悪すぎだな・・・」

てか、最初からこの力が使えれば問題ねえんだよ!!!」

瑞穂は悪態と溜息混じりに重い足取りで歩いていく。

「せえいつ!!!」

徹夜・・・つまり、俺のそんな叫びと共に闇で造った球を相手に向かって投げつける。

それは相手……つまり泰斗の近くに到達すると爆発して周りに向かっていくつももの矢となり泰斗を狙う。

「……二重水晶っ！！」

そんな泰斗の言葉。

それと同時に泰斗の前に二重の水晶が壁となり闇の矢から身を守る。泰斗は身を守ると同時に空中に水晶を造りだす。それが落下してきた。

「うわっ！？」

水晶は城の石でできた廊下を砕く。

水晶は大中小とサイズがいろいろあり、大きいものと下の階まで突き抜けて行った。

それを避ける俺だったが、さすがによけきれない物はある。

だから、それは受け止める事にした。

正直、それなりに重かったがケルベロスの一撃よりは軽いので受け止めることはできた。

それを泰斗に向かって投げつけるが、あたる寸前で砕け散る。

「……俺で造ったものだからな、砕く事だっただけだ」

そんなことを言うと同時に、泰斗はダッシュし俺に向かって刀を振るう。

それを俺は二本の剣で受け止め、自慢(?)の馬鹿力で泰斗も刀ごと一緒に弾き飛ばす。

それを追撃するために走り、泰斗の横に移動する。

大振りでおもいきり横から蹴りを放ち、それを泰斗は刀の横……つまり斬れる刃ではないところで受け止める。

正直、刃のところ受けて止められてたら俺の足が切断されてたけど、相手はそこまで考えてる暇は無かったようだ。

というか、それを考えたら俺の戦いセンスってないよね。

まあ、ただの高校生だった俺にセンスがあったら逆に困るけどね。

「・・・くっ」

泰斗は俺の脚で弾き飛ばされ、数？後ろに着地する。

そこに俺は追撃をする。

「はアツ!!!」

魔力を手に集めて、手をかざすことでいっきに放つ。

「・・・三重水晶」

それと同時に防御する泰斗。

放った魔力は水晶にあたり四方に分散していった。

そして、水晶が砕け泰斗が居・・・なかった。

「・・・ふっ!!!」

そんな言葉が頭上で聞こえた。

危険しか感じなかったの、とっさに横に跳ぶと俺の首があった場所を刀が通過していった。

「・・・うらアツ!!!」

上にいた泰斗に向かって剣を振るおうとする。

だが、その前にパキパキ...という音が俺の周りであくさん聞こえた。

・・・ヤヴァアツ!!!

「おうわあああ!!!?」

俺が叫び声を上げて横に跳んで逃げるのと、俺を突き刺すために生えてきた水晶のトゲの山が現れるのはほぼ同時だった。

どうにか避けるのを成功し無傷な俺。
だが、それだけでは終らない。俺を追って水晶のトゲの山が次々と現れる。

俺は最初は転がった後にすぐに立ち上がり、走り出す。

「なんだこのゲームみたいな光景はッ!!?」

逃げゲーっばいよな、こういう展開。

とりあえずは逃げるために天井に向かってジャンプする。

結構高かったがちゃんと手を付く事ができ、そのままの勢いを利用して天井に足をつける。

そして天井を足場に思いつきり跳ぶ。

・・・まあ、天井から跳ぶって言う事は落ちるっていうことだけでも・・・。

とりあえず、狙いは泰斗。

泰斗はいくつも水晶で俺を狙ってくるが全て砕いて通る。

そして天井から跳んで勢いをつけた俺の剣と泰斗の刀がぶつかり合う。

「ハアッ!!」

二人ともおもいきり力を込めて弾く、そして二人とも吹き飛ばされる。

基本的に俺のほうが強いので泰斗のほうが大きく弾かれ吹き飛ばされていた。

その吹き飛ばされてる間にも二人は動き。

泰斗の水晶と俺の闇が俺達の間で攻防を繰り返す。

俺の闇が泰斗の水晶を砕き、泰斗の水晶が俺の闇を引きちぎる。

「あゝ、もお！！ めんどくさくなってきたッ！！」
ごめんね、俺・・・飽きやすいんだ。

「・・・じゃあ、勝負はこの一発に賭けさせてもらおう」
泰斗がそう言うのと複雑な造形の水晶がいくつもできる。
そして、そこに泰斗が魔力を流し込んでいく。

「・・・この水晶は魔力を反射することができる。だから魔力を一点に集中して強力な砲撃にする」
ふむふむ、そういうことですか。

「まあ、ありがとう。説明してくれて」
俺は右手に魔力を集めまくる。

魔力を集めた末にまるで湯気のような黒い魔力が手から出ているのだからカツコイイ。
俺みたいになかつこいい人だったらめっちゃ良さそうだ。
はい、すんませんでした。ナルシなこと言いました。別に本心ではありません。

てか俺は俺のことかつこいいとは思ってませんので。

「・・・時間制限などがなければ、基本的に平等な戦いがしたい」

「んじゃあ、決着をつけましょうかアツ！！」
俺がそんな事を大声で叫びながらダッシュし始める。

そして泰斗のほうでは魔力の弾は発射され、俺の魔力のこもった拳とぶつかった。

爆発音が響き、爆煙がまわりをつつむ。

そこを俺が突っ切って姿を現す。

「……ッ!？」

それに驚きの表情を表す泰斗。

「悪いな、俺の勝ちだアツ!！」

そして俺の拳が泰斗の腹に突き刺さった。

「……かはあっ」

そんな泰斗の声が聞こえると、泰斗がズルズルと倒れていった。気絶したようだな、うん。

「ふう、少し拳が痛かったな……」

魔力の弾に俺が拳で殴ったときの衝撃が結構痛かった。うむ？泰斗の髪で隠れてる後ろの首。

そこにはよくわからない魔法陣が書かれてある。むむむ？
なんだこれは…？

「まあ、気にしてもしょうがないか・・・自爆みたいな物騒な魔法陣じゃあ、なさそうだしな」

とりあえず考えんのやめます。考えても無意味なので・・・。

「徹夜、お疲れ」

そう言つて美月が俺に近づいてきた。

ふむ、クッキーは全部食べられてしまったようだな・・・ガツカリ
なんてしてないですっ！！

そんな感じで戦い終わつて俺が油断していた時・・・。

俺は横腹辺りに激痛が走る。

「・・・？」

俺の横腹辺りから剣の刃が生えていた。

背中の中のほうを見ると背中にも剣の持つ方が生えている・・・つまり
背中から突き刺され横腹から出たと言う事だ。

剣の刃が引き抜かれ足に力が入らないせいで支えをなくし、その場に倒れる俺。

「・・・徹夜あつ！！？」

俺の耳に美月の悲鳴にも似た声が聞こえた。

29話 アイギスと蛇（後書き）

こんにちわ（またはこんばんわ）

焼き芋です。このごろ〜・・・やっぱり〜

後書きに書くこと無いです。

とりあえず終了しておきますね。

誤字・脱字があればマジで御報告ください

30話 怒らせると本当の意味で怖い(前書き)

《INFO》白い空間は焼き芋の破片、または血などによりメンテナンスを行っております。

皆様に大変ご迷惑になりますが、今回の話では使う事ができません。

30話 怒らせると本当の意味で怖い

「徹夜あつ！！？」

美月は悲鳴のような声をあげる。

その目の前では徹夜が血溜まりに倒れていた。

「泰斗は俺達三人のオ中でも一番つえエからな。厄介な奴にやアまず最初に沈んでもらはないけねエって事だ」

そこには少年がいた。

姿を透明にし、気配でさえも断つことのできる墮勇の少年だ。

その姿は半透明だった。

「おおつと、いけねエ。だまんねエと完全には透明にはなれねエんだった」

そう言った墮勇の少年は黙りこくる。

すると、その姿がみるみる内に透明になっていく。

そして少年は次のターゲットである美月のほうを見た。

だが、そこに美月の姿は無かった。

少年がなにかを思う前に後ろから衝撃が襲った。

背中から吹っ飛ばされ、半ば頭から地面に突っ込みそうになるが、手を地面に引っ掛け体勢を変えることにより足から着地する。

そして、自分が吹っ飛ばされた所を見て相手の姿を見ようとすると、だが、そこには誰の姿もない。

その瞬間に後ろから自分の髪の毛を掴まれた感覚があった。

それを確認する前に思い切り床に顔面からおもいきり叩きつけられた。

「がア・・・っ！？」

それと同時になにか肉のようなものが潰れる生々しい音が聞こえ。墮勇の少年は鼻からは鼻血が出て、鼻は横に曲がっている。完全に鼻の骨を折られたみたいだ。そして上から圧力がかけられ身動きが取れないうちに何回も顔を叩きつけられる。

「こおんのちくしょオがアアツ!!」
少年は上から押さえつけられながらも片手にもっているバスタードソードをでたらめに振り回す。
すると、拘束が緩み少年は慌てて立ち上がる。
振り向きざまに剣を振るうが誰も居ない空を切る。

「・・・ハハハッ」
そんな笑い声が後ろから聞こえた。

「・・・ツ!!!?」
『インパクト 衝撃』!!」
振り向きざまに魔法を放つが手ごたえが一切無い。

「ハハハハハッ」
再びその声が後ろから聞こえ、少年は後ろの襟首を掴まれた感覚があり、大振りに振り回され投げられた。
少年は投げられたが、空中でどうにか体勢を整え、壁に着地する。
そして前を見た瞬間に美月が剣を構え、目の前に居た。

「なア・・・ツ!?!」
慌てて壁から跳び、美月の攻撃をよける。
それと同時にさっきまで少年が立っていた壁が横に切り裂かれた。
だが、そこで少年は動きを止めるわけには行かなかった。
ほぼ本能と言って良いだろう。

根拠も無ければ証拠も無い、ただ今すぐにしやがまなければいけない

いと思い、地を這い蹲るような体勢になる。

だが、それは命を救うことになった。

さっきまで立っていたところでは美月が胴体を二つに分けるように剣を振るっていたのだ。

よけなければ、上下に分かれていたことは間違いない。

そして慌てて立ち上がり、美月の姿を視認する。

さっきの変な笑い声でだいたいさっしがついていたが、その姿は異常だった。

美月はなにかが切れたようで、まるで理性のある生物とは思えない目をしていた。

それに寒気を覚え、慌ててバックステップをして距離をとる少年だったが、次の瞬間には美月を見失った。

「なア・・・っ!?!」

墮勇と言えど、元は勇者。

それなりにチートと呼ばれるようなスペックはもっている。

持っているはずなのに美月を視界で捕らえることができないのだ。

それは少年にとって異常としか言えなかった。

「ここは、逃げねエと殺^やられる・・・っ!?!」

少年は慌てて透明化の魔法を発動する。

それによって体がどんどん透明になっていく。

だが、完全に消える前に腹に衝撃が走り、体がくの字に折れ曲がる。

少年の腹に美月の膝蹴りが食い込んでいた。

「ぐうお・・・!?!」

透明になっていた体は、それにより魔法がキャンセルされ透明ではなくなる。

美月を相手にして少年は完全に透明になる隙ができない。

「私が、あなたを逃がすとおもってるのぉ……?」

その言葉と共に美月がクルリと回り、回し蹴りが炸裂した。

顔の横っ面を蹴られた少年は吹っ飛び、背中から壁に激突する。

肺の空気が押し出され、声が漏れそうになるがその前に右肩、左肩、右腕と左腕の肘辺り、そして左の横腹辺りに激痛が走る。

そこには一本ずつ光の剣が刺さり、少年は壁に縫い付けられていた。

「があああああああああああああああああッッ!」
少年の悲鳴の叫びをあげる。

「……『ライト・ソード光の剣』」

美月の周りには剣がいくつもあり、少年に向かって放った剣の余りだろう。

その剣は空気に溶けていく様になくなっていった。

そして、美月は少年に人差し指を向ける。

「『オール・ライト・ロード全ては光の通る道』」

人差し指から三つの光の光線が放たれる。

それは少年の体を貫き、少年の体に三つの穴を作る。

魔法は貫通性であり少年の体を貫いた後は城の壁を貫いていった。

そして、その魔法によって体に穴を開けられた墮勇の少年は口から血を吐き出すが、すぐに痛みによって気絶した。

「アハハハハハハハハ」

それでも、美月は止まらない。

剣を横に構えダッシュする。その剣は少年の首を狙っている。

「・・・終わりだ、美月」

それを徹夜が美月を後ろから羽交い絞めにする形で止められた。

「おうっ!?!」

徹夜は美月を後ろにほん投げようとしたが、自分の足が絡み、徹夜は美月もろとも転倒する。

そして、倒れてるときに美月を確認してみると、いつのまにか体の向いてる向きが変わり徹夜に抱きついていた。

「・・・よかった。徹夜が死んだかと思ったよお」

「あんな剣で俺が死ぬわけ無いだろ・・・美月」

そんな感じで、徹夜は美月を抱えて立ち上がる。

そして美月をちゃんと自分で立たせるのだが、美月は徹夜から離れない。

そして、美月の視線があるところで固まった。

「・・・徹夜」

「ん、なんだ？」

「なんで徹夜の足は生まれたばかりの小鹿のようにガクガクしてるの？」

美月が言ったとおり、徹夜の足は震え、立ってるのも辛そうな感じだった。

それに対して徹夜はケロツとした様子で・・・。

「まだ止血もしていないからな」

徹夜が横腹あたり服をまくると、そこからは血が流れ出ている。

「止血しなよー!!」

美月は半ば徹夜の足を払う形で転倒させ、床にねかせると魔法で横腹を治療し始める。

「なあ、美月」

「なに？」

「お前人の形をした生き物は殺した時はあるか？」

「いや、気絶させるだけで殺しては無いよ」

「じゃあ、そのまま誰も殺すな」

「え……でも結局、あの人出血多量で死んじゃうよ？」

それに徹夜は返答せずに少年のほうに闇の刃を飛ばす。

その刃は気絶している少年の首を斬り飛ばした。

「お前は殺してない……あれは俺が殺した。お前は誰も殺してないからこれからも殺すな。美月は今までどおり気絶で済ませ」

「……でも」

「それでいいんだよ」

「うん、わかった」

「んじゃあ、治療も終わったみたいだし・・・違う所行くか」

二人は立ち上がって、歩き出す。

「それにしても・・・本当の意味で美月を怒らすと怖いな。まあ、俺のことで怒ってくれたのは少し嬉しいが・・・」
徹夜がそんな事を呟くと、美月は恥ずかしそうで、もしくは拗ねたみたいにそっぽを向いた。

30話 怒らせると本当の意味で怖い（後書き）

こんにちわ。

今回では最後の美月と徹夜の会話のところ、操作ミスをし折角書いてあったものが一瞬の内に消えて無くなりました。

ちよくちよく保存しとけばよかった・・・と、さすがに思いましたねw

お昼には終了していたはずなのに、午後3時までやらなければいけないはめになりましたよ。

軽く辛かったです。

では、ここらで終了させていただきますしよう。

誤字・脱字があればマジで御報告ください

31話 イルリヤの使い方(前書き)

前書きに書くのやめようと思います。

もう、結構出したキャラは全員出したと思いますので……。

31話 イルリヤの使い方

王都『ドラゲイル』の空。

そこには黒くまるで二足で立つ虫のような姿をした神がいる。

それは魔神。

その魔神は王都の外で行われている戦争を見て楽しそうに笑っていた。

すると、ビクンと肩を揺らし下の王都を見た。

・・・俺を、私を、僕を、我を、召喚した五人の内、三人が死に一人が気絶した・・・

・・・ククク、そろそろ俺も、私も、僕も、我も、このゲームを楽しもうとしよう・・・

魔神は大口を開けて笑い始めると同時に凄いスピードで移動し始める。

最初に狙うのは外で戦う大勢の生き物達。

その魔神を見た二人の存在がいた。

「・・・動きましたね」

「うむ、じゃあ……そろそろ我らも動いていいでおじやるな？」

「ええ、では行きましようか」

そんな会話をすると、同時にその場には他の竜より巨大な黄金の竜と同じ大きさの灰色の竜が現れる。

その竜二頭は翼を広げ音も無く浮き上がる。

次の瞬間には、猛スピードで一直線に飛び。

魔神の真正面に移動していた。

「edfi jpdrsa？」

魔神のよくわからない声が聞こえるが、それにかまってる二頭ではなく。

黄金の竜が渾身の力で尻尾を振るい、魔神を王都に向かって吹き飛ばした。

「あの一撃でダメージが入ってないようなので困りますね」

「神とはやはり恐ろしいものでおじやる」

軽口を言いながら、移動し王都の上空を飛びまわる。

その大きな目は魔神の突っ込んだ所だけを見据えている。

だが、次の瞬間には飛んでいる二頭の間には魔神が居た。

二頭の竜に向けて魔神は手をかざす、それと同時にイリルとイルリヤが吹き飛ばされた。

「・・・なッ！？」

イリルは驚きの声をあげ。

「いたっ・・・でおじやる」

イルリヤは雰囲気を壊しながらも悲鳴のような声をあげる
二頭は吹き飛ばされ王都の建物を壊しならも倒れこんだ。
イルリヤはそのまま勢いが死ぬまで吹き飛ばされ、イルリヤはある場
所で急速に勢いが無くなり止った。

「……たく、いきなり吹っ飛ばされてこっちに飛んでくんよ……」
イルリヤのほうでは徹夜……つまり俺だ。
俺に向かってイルリヤが背中から吹っ飛んできたのでどうにか受け
止めた。

まあ、50?ぐらい押されたが問題はない。

『うう……マジで痛いでおじゃる。ホント悪いでおじゃる』

「……まあ、あんたには期待してないさ」

『ひどいでおじゃるなっ!!』

イルリヤは一回人間の姿になって立ち上がり、自分の服についてる
埃を叩き落としている。

「そつえば、勇者はどこいったでおじゃるか？」

「美月はお前が迫ってきたから違う所に行かしたよ。たぶん魔神の
攻撃に向けて空中に足場を作ってるんじゃないか？
というか、そろそろ俺も攻撃し始めたいんだよ。お前も付き合え」

「ふむ、勇者は準備しておるのでおじやるか。あんなのと戦うのか・
・・痛いのはいやでおじやるな」
黙って働けコノヤロー。

「じゃあ、俺が先に攻撃するから反対側から攻撃しろ」

「人の話し聞いて・・・いたっ、でおじやる」
何かを言おうとしてるところに結構力を入れてチョップする。

いいからやれや、俺だつて面倒だから嫌なんだよ。

まあ、とりあえずは注意をこっちに向けるためにも派手な攻撃がしたいわけだ。

だから、ちよつとだけ大きな道具を使おうかな。

イルリヤが何か言ってるのも聞かずに城の塔。

円柱状の塔で屋根は城のイメージにある円すいで尖っている。

その下の場所に俺がたどり着く。

「これでいいよな・・・よつと・・・」
剣を振るとそれにあわせて闇が動き、塔の根元をざっくりと切断する。

建物だし、城の塔だから結構太いんだけども、闇を使えばうまく切断できた。

地面と平行に斬ったおかげか、うまく倒れないで立っけてくれている。

「・・・あとは、空中の足場だな。『エアブロック空気物体』」
俺自身、魔法を使うのは久しぶりな気がする。

だいたい主に闇と自慢（なのか？）の馬鹿（頭が馬鹿ですが何か？）力を使っているからな。

それを跳び移って移動する。

結構上に移動して魔神のいる高さの少し下に居る。

「ぐふつふつふつふ〜・・・巨大な矢に貫かれて死ねば良いんだ！」

俺の手から片手に5本ずつの合計10本の鏃のついた鎖がさつき俺が根元を切断しといた城の塔に突き刺さる。
そして、その鎖をしつかりと掴み。

「わあっしょおおいつつ！！」

変な奇声をあげながら、おもいつきり引つ張る。
すると、徹夜の言葉通りに城の塔は巨大な矢と化し魔神を貫くために飛ぶ。

それと同時に魔神の反対側から人から竜の姿になったらしく、突然灰色の竜が口を大きく開けながら魔神に向かって突進していく。
その口には鋭い歯が何本も見えた。

巨大な矢と竜が挟み撃ちをする形で迫るが、魔神は楽しそうに笑っていた。

またも、イリルとイルリヤを吹っ飛ばした衝撃が放たれ、俺の放った矢は木っ端微塵に砕けていく。

「うおおわあっ！！？」

塔の先端からこっちに向けて徐々に砕けていくので、確実に俺に向かって衝撃が移動してきてる事がわかった。

・・・なので、背中に闇の翼を生やし慌てて横に飛んで避けた。

「痛いのは嫌じゃっ！！」

イルリヤは衝撃に向けて純粋な魔力だけのプレスを吐き、衝撃を相殺する。

そして、そのまま突っ切って魔神に向かう。

「うおらァ!!」

それに合わせて闇の翼で魔神の後ろに移動して、こちらも闇で大きな剣を造り上から下へと振り下ろす。

「……ojihih?」

魔神の声らしき物が聞こえたが全然理解できないのでそのまま攻撃は続行する。

だが、俺の振るった剣を魔神は片手で受け止め、そのまま振り回し投げられた。

「うおおおっ!?!」

地面にそのまま突っ込んだ俺。いたい……。そしてイルリヤのほうでは魔神をかみ殺そうと牙を振るうが、空振りし、いつのまに移動した魔神が背中に突撃した。

「くそっ……。でおじゃる」

吹き飛ばされながらも人間の姿に戻っていた。

そして空中で体勢を立て直すと竜の姿で着地する。

「ちくしょう、あの矢じゃ硬度がたりねえな……。もつと硬いもの……」

俺の目の前には悪竜……。のしっぱ。ちょうど俺の手に届く場所に……。

「イヤッホオオオオオオオオオオオ!!」

『ひぎゃああああああああああああああああああああああああ』

あああああ・・・でおじやるう〜」

俺はイルリヤの尻尾を持ち、そのまま振り回し巨大なモーニングスターの如く魔神へ振り下ろす。

『・・・ぐべつ・・・で・・・おじやる』

それは、当然のごとく魔神の衝撃によって跳ね返された。

「チツ・・・やっぱりダメだったか。予想はしていたけどな」

「だったら、やらないでほしいでおじやる」

人間の姿に戻ったイルリヤが何かを言っているが無視、無視そんな感じのときでイルリヤのことを無視していたときに、ある場所から数百は越すであろう光の剣が魔神に放たれる。

そしてある場所では、天にいくつかの黄色の点が登っていったと思つたら、雷が魔神に落ちたりなどみるからに誰かの攻撃が放たれた。それは今までどおり魔神の衝撃波によって全て防がれる。

『徹夜くん、そのまま攻撃をし続けてください』

そこに、イリルさんの声が頭に響いてくる。

あれか、前にドラゲイルに魔族の戦艦が迫ってきたときと同じ方法か。

『あれは、不完全な存在ですからあれが私達に攻撃をしたり、私達の攻撃を防御したりする分だけエネルギーは減っていきます。

なので、攻撃し続ける事が一番の道です』

ふむ、オーケーです。

『なので、さっきのような方法でイルリヤを使ってくれてもかまいません』

「ひどいでおじゃるっ!?!」

「よし、いっぱい攻撃するか!?!」

「なんでこっちに歩いてくるでおじゃるか? 痛めつける・・・じやなくてダメージを与えるのは我じゃなくて、魔神でおじゃるよ?」

頑張って殺りに行こうと思う・・・イルリヤを使って。

31話 イルリヤの使い方（後書き）

正直、これでいいのか？と思う話になってしまった。

あと、どうやら六人で一匹を相手に戦うのだが、俺がそれをちゃんとできるのかが不明。

正直、馬鹿なことをしたと思う。

この頃思ったのだが、この小説って中途半端なチートだと思う。

鍛えても無い人が鍛えてる人に勝つことはチートだと思うわけだが、他のと比べるとやっぱり中途半端としか言えない。

まあ、変えるつもりは無いのですが……。

誤字・脱字があれば御報告ください

32話 1対2の三組

「んラアアツ!!」

俺の闇の竜巻が魔神を狙う。

他の方角からも光の剣の大群や竜の息吹らしいエレネルギー砲のよ
うな物が放たれている。

「: s i f j j l s s」

だが、それも魔神によって跳ね返される。

まあ、今は相手のエネルギーを消費させる事が狙いだからまだ問題
はないだろう。

それより・・・

さっきの魔神は一体何をしゃべりたいんだろうか？

まあ、そんな小さな疑問は置いておくとして、どんどん攻めていか
なくては・・・。

「さて、俺はどうしたものか・・・?」

さっきの闇の攻撃も跳ね返されるし、少しばかりショックだ。

黙って食らうてくれれば良いんだけどね。

ちなみに、一緒に居たイルリヤは人間の姿になったから俺がおもい
つきり魔神のほうにぶん投げたら見事に跳ね返されてどこかに行っ
てしまった。

まったく、ちゃんと攻撃して欲しいものだ。

べ、別に俺は悪くないし、俺が悪いとかありえないから・・・。

まあ、そんなイルリヤなんてどうでもいいものはほつといて、次の攻撃に移らないとな。

どんな攻撃をすれば良いのか全然わからないんだけどね……。

……考え中……

よし!! いつもどおりに殴りに行くかっ!!

「……行動を思いついたらすぐに行動に移すべしっ!!」

再び闇の翼を背中に生やして、急接近する。

魔神が俺を認識すると同時に衝撃のようなものが放たれる。

闇を霧状にばらまいておけば、どうにか俺でも感覚で衝撃がどこまで来ているかわかる。

「シャアッ!!」

なので、闇で手を包みそれで思い切り殴りつける。

当然、殴る瞬間に闇を放ち、素の手で殴ることだけはやめる。

衝撃と闇が打ち消しあい、どうにか突破する俺。

「死ねイ!!」

そのまま魔神を殴りつける。

が、俺の拳は魔神の腕にがっしりと掴まれ顔を殴る事ができなかった。そして魔神は不適に笑う。

「虫のような外見の癖に、なんだその無駄なカツコ良さはッ!!!?!」
「虫如きがそのかっこよさはねえだろっ!!」

とりあえずは、手を掴まれてるのでそのまま蹴りを放つ。

それを魔神は軽く避けながら俺に向かって衝撃波を放つ。

「がアアアツ!!!」

手を掴まれてる状態なので逃げる事ができない俺。腹に衝撃が来て、胃液が喉にこみ上げる感覚がある。

「こおんの野郎ツ!!!」

俺の背中に生えてる闇の翼が動き、魔神の首を切り飛ばすために振るわれる。

だが、その翼も衝撃波で消し飛ばされた。

「徹夜つ!!!」

そこで魔神の後ろに美月が現れ、上から下に思いつきり踵落としを食らわせて下に吹っ飛ばした。

俺も思いつきりそれに巻き込まれそうだったので、魔神の腕をどうにか切断して逃れる。

「仕返しだ、んにやるオツ!!!」

闇をそのままレーザーみたいな感じで魔神に放つ。

「ハアツ!!!」

それに続いて美月は魔神に向けて光の剣の雨を降らせる。

そして視界の隅では和馬が魔神に向けて数十という弾丸を放っていた。

その近くに瑞穂もいたが、遠距離の攻撃が苦手らしくそのまま何もしていない。

どうやら、魔神の標的は一番近い和馬たちに移ったようだ。

落とされたところからまるでミサイルのように猛スピードで真っ直

ぐに和馬を狙っていた。
和馬は魔弾をいくつも放ち、それは魔神の体を貫通しているが魔神は気にせず突き進む。

「……ッ!!」

驚きの表情になる和馬に魔神が突き進むが、何かに気づいた魔神は後ろに少しだけ下がる。

それと同時に瑞穂のハンマーが魔神の前を通過して行った。

「チイ……ッ!!」

それに瑞穂が舌打ちをすると同時に、魔神は衝撃波を放つ。

「……『アイギス神に与えられし防具』!!」

瑞穂が絶対防御の魔法を発動させる、その中には和馬も同様に防御魔法で包まれている感じた。

防御魔法は衝撃波を弾いたのだが、その次の魔神の攻撃。

「……phuvhwo?」

今までの衝撃波とは違う高濃度の魔力が込められたタックルで防御魔法ごと吹き飛んだ。

防御魔法は壊されないうまま吹っ飛んでいったので多分、怪我はしてないだろう。

それに追撃をかけようとする魔神だったが、すぐに邪魔が入る。

「これでは、1対6ではなく1対2の三組でおじゃるな」

魔神が瑞穂たちに気をそらしているうちに人の姿のイルリヤが懐にもぐっている。

イルリヤがアッパーカットを放つが、魔神がギリギリで避け、そのまま衝撃波を放つ。

「何回も同じ攻撃は食らわないでおじやる」
それに反応して、イルリヤは口からいくつもの火の玉を吐き出し衝撃波と相殺させる。

イルリヤは、それに加えていくつもの魔力の塊を攻撃として放つ。それを魔神は手で弾きながら後ろに下がる。

「貴方にはホントに悪いのですが、二人で一組ですよ。目の前の愚弟に集中して周りを気にしないのはダメだと思いますよ」
魔神が後ろに下がった所では後ろからイルリヤが回し蹴りを放っていた。

魔神は大きく横に吹っ飛ばされ、建物をいくつもの突き抜けながら飛んでいく。

「いつまで我は愚弟と呼ばれるのでおじやるか？」

「ずっとです。」

それよりも追い討ちはかけておいたほうが良いでしょう」

「…うむ」

そんな軽い会話をする二人が魔神に向けて、さすがに魔神でもダメージは食らうであろう魔力の一撃を放った。

爆発音が響き、結構離れてる俺まで爆発の衝撃波が襲ってきた。

「これで、ダメージが食らってなかったらショックでおじやる」

「ええ、それで・・・なッ!？」

イルリヤがイルリヤの言葉に返答をしようとした時、天に大きな魔法陣が浮かぶ。

真つ黒の魔法陣。

そこから、空を埋め尽くすほどの量の紫色の玉が落ちてくる。

「一気に敵を消そうとしていますね。

イルリヤ、できるだけアレを消し飛ばしますよ」

「了解でおじゃるッ!」

二人の子供は次の瞬間に大きな竜の姿となり、空に向けていくつもの魔力の弾を放つ。

それは紫色の玉にぶつかり爆発するが、それでも全ては消しきれずにいくつもの玉が落ちる。

「とりあえずは受け身の態勢です! 他の四人なら簡単には死なないでしょう」

「オツケエでおじゃる!」

「おい、和馬! こっち来いッ!」

「え? ああ、まだ少しばかり痛いんだけどな」

ある二人は慌てて防御体勢に入り、片方が絶対防御の魔法を発動する。

「・・・徹夜ッ!!あれやばそうじゃない!!?」

「ああ、そうだな。・・・お前の光じゃあ、攻撃はできても防御はできないだろうから、俺がやるしかないな・・・防御の硬さだけじゃあ、砕かれそうだから吸収もしねえと・・・」

そして、俺達の方は完全に俺が防御係となり、美月と一緒に魔神の攻撃に備える。

紫色の玉が地面に落ちる。

その玉の一つ一つが城を吹き飛ばせるであろう威力で爆発し、王都・・・いや、それだけではなく王都の外の戦ってる奴らごと巻き込んで行った。

遠くから見たら爆発で大地が見えないほどのものだった。

32話 1 対 2の三組(後書き)

誤字・脱字があれば御報告ください

33話 『聖剣』 vs 『腐土』

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

二人の雄叫びが響き、剣と剣がぶつかり合う。

それは『聖剣』のラルドと『腐土』のクロイズル。

その二人がぶつかり合っていた。

何かに気づき、二人とも同時に後ろに下がる。

そして上を見上げた。

「これは・・・？」

「相当の量の魔力・・・これは腐らせきれませんね・・・」

その視線の先には紫色の玉と空に浮かぶ巨大な魔法陣。

魔神の攻撃魔法だ。

その感じられる魔力から即座に自分一人では玉を自分にダメージが食らわない程度に弱体化すら出来ないと認識した二人は行動に移す。

「ここは協力してやりましょう。その後にこの剣であなたの首をはねてあげます」

「私が貴方なんかに殺されることはありません。ただ、あれは相当やばいものですね。」

あれであなたが死ななかつたら私が腐り殺してあげましょう」

そんな事を言いながら、二人とも集中しラルドの場合は黄金の剣に、クロイズルの場合は自分の手に魔力を集め始めた。

そして次の瞬間には、自分達に降りかかるであろういくつかの玉に向かって攻撃を開始した。

「ハッ！！」
ラルドが黄金の剣を振るい。

「ふっ！！」
それをクロイズルは受け止め、返す刃でラルドの顔目掛けて腐らせるため手を突き出す。

当然ラルドはクロイズルからバックステップをして距離をとり、数発の光の斬撃を放つ。

「・・・ッ！！」
クロイズルは横に転がるようにして避けた後に、『腐針』を放つ。
前に徹夜との戦闘でも使われた魔法だ。

「・・・ッ！！ 無駄ッ！！」
それをラルドは全て剣で弾く。
針の横を叩くようにして、針は剣に刺さらないようにしていた。
クロイズルが自分の魔法でエクスカリバーを腐らせられるかはわからない、と同じ様に、ラルドはエクスカリバーがクロイズルの魔法で腐らせられるかもしれない、という心配がある。
なので、直接は攻撃を受けないようにしている。
この戦闘は徹夜のように闇や力でゴリ押しではなく、相手の隙をついて命を狙う戦いなのだ。

「・・・腐って死ね！！」
その言葉がラルドの上から聞こえ、とっさにラルドは横に転がると同時にラルドがさっきまで立っていたところにクロイズルの手が突き刺さり、地面を腐らせる。
腐食は周りにも広がっていくので、ラルドはすぐに起き上がり上に跳んで避ける。
そして着地すると剣を構える。

「いい加減に決着をつけさせていただきます」

「それは良いですね。私も良い加減に魔王様のところに行きたくなくなってきましたので・・・」

クロイズルも魔力を手に集めていく。

「・・・『エクスカリバー約束された勝利の剣』！！」
ラルドは紫の玉に向けて放ったのと同等の威力の光の斬撃を放つ。

「『バッドゴーレム悲鳴を上げる腐土人形』」
クロイズルの前に腐ったゴーレムが現れ、光の斬撃を受け止めようと手を前に突き出す。

二人の最大の攻撃、クロイズルの場合は自分の命を代償にして出す奥の手があるが、それは自分が負けた時のみ、最初から命を捨てるようなことはしない。

まあ、もう一回は死んだのだが・・・。

そして、光の斬撃と腐ったゴーレムはぶつかり合う。

腐ったゴーレムは光の斬撃を腐らし、光の斬撃は腐ったゴーレムを打ち砕く。

どちらの攻撃もお互いを打ち消しあった。

ただ：最大の攻撃を出す事だけが、戦闘ではない。

クロイズルは背後に気配を感じ、慌てて振り返りながら距離をとろうとするが、その前に胸から黄金の刃が飛び出した。

油断していたわけではない、ただ光の斬撃の後ろに隠れながら接近したラルドは、クロイズルの反応よりも速く黄金の剣を振るったの

だ。

普通の状況では、避けられていただろうが、この状況になることでやっとの事で剣を突き刺せた。

「…………ぐっつ」

クロイズルは口から血を流しながら、後ろの人物を忌々しそうに睨みつける。

「私の勝ちですね。『魔界六柱』No.2『腐土』のクロイズル・リクトン」

黄金の剣を握っているラルドがクロイズルの背後で口を開く。

「……確かに、あなたは私に勝ったでしょう。ですが、この私が、それだけで終るとでも、お思いですか？」

「ああ、君が徹夜くと戦ってるのはキツチリ見させてもらったからね。十分わかってるよ。

だから、その前に手をうたせて貰おう。…さよならだ」

ラルドはクロイズルが奥の手の魔法を放つ前に、突き刺した剣を力を込めて動かす。

その速さは自分の出せる最速のスピード。

ラルドの周りで黄金の剣が反射し、キラキラと輝いている。

そして、それにあわせたかのようにラルドの目の前の魔族は、細切れに刻まれ、細かくなって地面に転がった。

「魔界で私に戦闘をさせなかった屈辱は、ちゃんとはらさせていたかったですので……」

ラルドはジャリン…!!という甲高い金属音をたてながら、エクスカリバーを背中の中の鞘に収める。

「さて、魔王のほうは『魔界六柱』の五人が相手をしているでしょうし……適切な相手と戦ってますかね」
ラルドの目線の先は、どこかで見たときのある20匹ぐらいのアクババの群れ。

とりあえずは、狩りをしながら休憩をとろうと思ったラルドである。

33話 『聖剣』 VS 『腐土』 (後書き)

誤字・脱字があればマジで御報告ください。

34話 『魔王』 vs 『魔界六柱（-1）』

その場は、再び戦争。

ラルドとクロイズル、その二人が戦う所ではない場所。

そこは爆発に巻き込まれた後だった。

「・・・まったく、私が戦っているのに迷惑な事をしてくれる」
そんな言葉を漏らした男は魔神を忌々しそうに睨みつける。

その男は魔王と呼ばれていた男。その頭上には黒い盾が二枚展開されていて、それで魔神の攻撃魔法をどうにかしのいだ。

だが、最初は7枚展開していたのを考えれば、やはり魔神の攻撃は相当の威力だったのだろう。

そして、魔王の目の前では、それぞれ五人が協力して攻撃を防いでいる魔界六柱の面々がいた。

「さて、こつちに集中しなければな」

魔王がそんなことを言うと同時に、黒い衝撃波が放たれ、それを五人は四方にわかる形で避ける。

「むあゝ・・・」

「お前、魔力の使いすぎだぞっ!!」

ルクライルはぐでゝっ。と力なく、ジールクに抱きかかえられていた。

さっきの紫色の玉の際にはルクライルがほとんどの魔力を使って赤い水を展開していた。

それでも紫色の玉は消滅せずに落ちてきたので、後の四人でできるだけ魔力を使わずに消滅させた。

ルクライルが全力で魔法を使わなければ、それぞれが魔力を大きく

消費し戦いは、より困難になっていたはずである。

「うふふ〜・・・」

「なんで、こんなときに嬉しそうな顔してるんだッ!？」

「・・・なんでも」

そんな会話をしてる二人は置いといて、ほかの三人は魔王に攻撃を開始している。

ちなみに三人とも心の隅でジールクとルクライルに呆れてる感じがあるのだが、それを気にしていると魔王の攻撃を避けられなくなるだろうから無視することに決めているみたいだ。

「・・・シッ!」

魔王がいくつも放ってくる魔法を右手に持った黒い刀で切り裂いて、更に進む。

「その武器は魔剣か:??」

自分の攻撃を容易く切り裂くその刀を見て魔王が呟く。

それほどまでにリヤナが作った武器は強力な力を持っている。

「いえ、リヤナさんが言うには正しくは？妖刀」と言うらしいですよ・・・ッ!」

そんな事を聞きながら魔王は、手からまるでレーザーのような黒いものが五つ放ち、それが違う方向から一斉に襲ってきたのを、リーシは慌てて横に跳んで避ける。

「リーシだけに集中して下さい!こっちに気づかなければ、すぐ殺して差し上げますよ、お父様ッ!」

その声と同時に、雷でできた10?の長さの大剣が振るわれる。

それに魔王は反応して、魔力を手集中させて受け止めた。

「それぐらいで私が死ぬわけ無いだろう」

「じゃあ、これでどうだア!!」

不適に笑う魔王に対して違う男性の声があつてはいる。

その言葉と共にいくつもの風の刃が混ざった竜巻が魔王を包み込んだ。

風の刃は魔王の体を切り刻むために動くが、次の瞬間には魔王の放った魔力で吹き飛ばされた。

「効くかあ!!」

魔王が一瞬の内に動き、トールウの腹におもいきり蹴りを放つ。

それを避ける事ができずにトールウはうめき声を上げると同時に吹っ飛んでいった。

近くに居た現在の生存者や昔を生きた者達を巻き込みながら吹っ飛んで行き、ちょうどそこを通ろうとしていたジールクがルクライルを抱えてないほうの腕で受け止める。

「おまつ!? こつちに吹っ飛んでくんな!!」

「うつせえ!! こつちは好きで吹き飛ばされたわけじゃねえんだよ、お前みたいにイチャイチャしてるわけじゃないんだツ!!」

「「んなアツ!!!?」」

トールウの言葉に、ジールクと抱えられているルクライルが一気に顔をリングゴのように赤くしている。

ジールクは言い返そうとしているが、トールウはそれを無視して再び魔王のほうに走り始める。

「イチヤイチャ・・・ふおわ〜ッ!!」

そしてルクライルは少しの間は身悶えた後に、最初から疲れていたのに加えて余計に疲れ、最後にはプラーン…と力なく手と足が下がる。

ジールクは再び走り始めたので力の入っていないルクライルの足と手は、プラーン、プラーン…揺れている。

「くそっ、ツールウめ!調子に乗りやがって!!」

その言葉と共に炎のレーザーを手から放ち、魔王を襲う。当然それは魔王に避けられる。

「私を相手に余裕だな、お前ら」

魔王はそんなことを言うと同時に、手に魔力を集め始め。

地面に手をつけるのと口を開く。

「…『ダイク・インパクト闇の衝撃』!!」

魔王を中心に衝撃波が円状に広がっていく。

それはジールクと抱えられているルクライル、あとはツールウも吹き飛ばされる。

「うわっ!!!?!」

ミルリアはとつさに電撃を展開させて、地面に深い穴を作りそこに跳びこむ事により衝撃波から避けることにした。

「・・・ッ!!」

そして、リーシは黒い刀で切り裂くことにより、リーシの所は衝撃波が無くなった。

「んぐっ…」

吹き飛ばされながらもジールクはルクライルを抱えて、自分の背中

でルクライルが地面に激突する事を防ぐ。

「おわあああああつ!!！」

トールウはその横をゴロゴロと転がって行った。

「おいッ!! トールウ!!… 『極炎』!!！」

ジールクが立ち上がりながらそう叫ぶと共に、上に掲げた手から8?の高さはあるであろう炎が噴き出した。

「つう〜ッ、いてえッ!!うし、わかった!!… 『風魔』!!！」

それを見たトールウはその炎に向かって今までのものより2倍は大きいであろう竜巻が、ジールクの炎を巻き込み、魔王に放たれる。

それぞれが風と火を極めており、その二つは非常に相性が良い。

それにより、一人で出せないような威力の魔法を生み出した。そして、それは魔王に迫る。

「再び後ろ貫いッ!!！」

その魔法のほうを向いていた魔王の後ろでは、ミルリアが魔王を電撃を帯びた拳が貫こうとしている。

「…… 『ダイクネス・シールド最強の盾』」

その呪文と共に黒い闇の盾が発動して、ジールクとトールウの魔法への防御が出来上がり、余裕のある魔王はミルリアに回し蹴りを放つ。

「うぐつ…!!！」

それによりミルリアは吹き飛ばされ、地面に倒れる形になった。

前方では、闇の盾に火と風の魔法がぶつかり、闇の盾により弾かれた。

そして、火と風の魔法が弾かれなくなった瞬間に、魔王の目の前で盾が横に切り裂かれた。

「・・・なッ!?!」

その切り裂いたのはリーシで、もう既に盾を切り裂いたであろう黒い刀を目標を魔王にして振りかぶっている。

それに反応して慌てて後ろにバックステップして避けようとする魔王だったが、それを上から電撃の杭が降って来て地面に刺さり、行き先を無くす事により邪魔をした。

「・・・お父様には、ここで二度目の死を味わってもらおう!!」

それはまだ倒れたままのミルリアが、魔力を最大までに使って放ったものだった。

魔王はそれに対して、苦虫を噛み潰したような顔になるが、魔王の正面にいたリーシが刀を横に振るう。

魔王は剣で防御しようとするが、それさえも魔王の体と一緒に黒い刀は切り裂いた。

「ぐうあッ!?!?!」

「では、さようならっ!!」

リーシは剣を振った後の勢いを利用して、ダメージを受けて動きが鈍った瞬間に一回転して首を斬り飛ばした。

魔王の体には首から上が無くなり、胴体はゆっくりと倒れていった。

「・・・これで今の魔界にも魔王を倒す戦力はあるという証明になりましたね。

あなたを倒して、初めて自立できるんですよ。勇者というバックがいなくても他の国に舐められる事はなくなる」

リーシは黒い刀を鞘に収めながら、そんな事を呟く。

「さて、後の戦争はぱっぱと終わらせてリミが待つてる家に戻りますか」
そう言ったリーシは、黒い戦艦・・・つまり徹夜製の特にデカイ奴に向かって歩き出した。

「はぁ・・・やっと・・・倒せた・・・」

ミルリアはさっきの魔王からの一撃と最後の魔力を最大までに使った電撃で、相当疲れたらしく戦場なのだが肩を上下させて呼吸しながら地面に横になっている。

「ミルリア様、とりあえず休める所まで連れて行きましょうか？」
いつの間にかロシアンがミルリアのところまで来て、そんな事を尋ねる。

「ロシアンは本当に良い部下だと思つよ」

「ありがとうございます」
ロシアンはニコツとして、ミルリアをお姫様抱っこの形で抱える。それに対して、このロシアンの行動がミルリアの予想外だったらしく激しく動揺している。

「な、ななな何するのっ、ロシアンっ！！？」

「いえ、主人を戦艦までお連れするだけですが・・・？」

「何でそんなに嬉しそうなの～ッ！！？」

「ミルリアは初めてロシアンを異性として認識したかもしれない・・・あくまで、？かもしれない”だが・・・”

「うおお～・・・勝ったあ～・・・疲れたあ～・・・ダリイ・・・」
「トルウがそんな事を叫びながら、座り込む。」

「お前・・・一応ここは戦場だぞ・・・いつ死ぬかわからないんだぞ・・・」

「そう言ってるお前はルクライルとさっきからイチャイチャしゃが
つて」

「はああっ！！？」

そんな感じで、言い合ってる二人とは別にルクライルはジールクの体の傷をせつせとチェックしている。

ルクライルをかばって背中から地面に突っ込んだ時の奴などを申し訳なさそうに撫でている。

「ごめん、ジールク」

「んな事は気にすんな、ルクライル」
そんな彼女をジールクは頭を撫でながら返答している。

「はあく・・・よくそれで俺に戦場だなんだかんだ、と言えるもんだ」

「まったくですね」

トールウが思わず口から漏らした文句に、ロシア人と同様にいつの間にか来ていたメイトが答えていた。

その表情は、怪我はしていても死んでいない上司を見て嬉しそうだった。

「では、とりあえずはあの黒い戦艦に戻りましょう。どうやらリーシ様とミルリア様を抱えたロシアンは黒い戦艦に戻って行ったようです」

メイトがそう言うのと懐から定番の魔法陣が書かれた紙を取り出し、魔法で小さな火を出し、紙を燃やす。

すると、あたりを白い光が包み込み、光が収まるとその場には、ジールクとルクライルにトールウ、メイトの四人は居なくなっていた。

34話 『魔王』 VS 『魔界六柱』 - 1 (後書き)

誤字・脱字があれば御報告ください

最終回 第二章 本編はこれで……（・・）ノシ（前書き）

急いで書いたものなので、誤字・脱字が多いかもしれません。
本当にごめんなさい。

最終回 第二章 本編はこれで……ノシ

「……かはあッ!！」

俺の口から大量の血が吐き出された。

体に力が入らずフラフラと横に揺れた後に、右に倒れそうになるところを美月に支えられ、倒れなかった。

「徹夜、大丈夫っ!？」

「……ん、ああ……多分、大丈夫……」

そんな返事をしながらも体には力が入っていないので、美月にとっては説得力の無い言葉だろう。

この俺の状態はどういうことだ……？

あの紫色の玉が落ちてくる直前に闇を展開して吸収することにより防御した。

その結果、俺の体には目立つ傷も無いし、美月も怪我はしていない。それなのに、何故俺は血を吐いてるのがわからない。

《防御の仕方を間違えたね、徹夜》

そんな所に、リヤナさんの言葉が頭に響いてきた。

それは、どうということだ？

《闇は徹夜に感覚を教える事ができるでしょ》

ああ、うん、そうだね。

それを使ってジールクの塵気楼を見破ったりもしたからね。

《……ということは、闇と徹夜は繋がってる状態なんだよ。

だから、爆発的に膨らんだ魔力を闇で吸収しきれなかった場合、そ

れは徹夜の体に負荷を与え苦しめる事になったの。

あえて言えば、徹夜の体の中で魔神の魔力が暴れたと言う事だから、腹の中を棒か何かでかきまぜられたのと同じ事だと思ってほしいです。」

そんな例えはやめてほしい。そんなこと想像したくないです。

俺の体は大丈夫なのだろうか・・・？

《軽い治療魔法で戦える程度には楽になるから、大丈夫》

「徹夜、大丈夫？ 私は何をすれば良いのっ!？」

リヤナさんの言葉を聞いてると、横で美月が俺の耳元で叫んでくる。
・・・耳が痛いな。

「軽い治療魔法で治るらしいから、お願い」

俺・・・治療魔法って苦手なんだよね。

それに対して：わかった、と美月は答えると、俺の体に治療魔法をかけ始める。

すると、みるみる内に意識もハッキリとしてきて、体も楽になっていく。

リヤナさんって知識があって一応凄いな・・・ただの妹馬鹿かと・・・。

ちなみに、もう既に他の四人（その内二人は竜だけでも・・・）は魔神に攻撃し始めている。

そして、治療魔法が終ると、俺はしっかりとまっすぐ立てるようになった。

あまりにも治療魔法のかける前とかけた後では違うのだから不思議だ。

「美月、ありがとな」

「どういたしまして、じゃあ行こうか」

「・・・ああ、面倒だけどやってやるよ」

そんな軽い言葉を言い合った後に、俺も美月も攻撃の準備に入る。

美月は周りにいくつもの剣を浮かばせ、魔神の近くに移動し隙を突いて魔神に剣を突き刺すつもりでいる。

俺は前と同様考えなしに突っ込むだけ・・・あんなの相手に考える必要があるとは思えないのでね・・・。

「オオラツ!!」

「だらつしヤアツ!!」

俺と瑞穂が魔神を挟む形で、俺は拳、瑞穂がハンマーを放つ。

それは目に見えない壁に阻まれるが、俺は関係なく殴り続け、瑞穂は和馬と入れ替わり、和馬は一気に何十という魔弾を放つ。

「ぶち壊れるゴルアツ!!」

「結構硬い・・・ツ!!」

俺の言葉と和馬の言葉。

すると、見えない壁はパキパキという日々が入る音が聞こえたかと同時に碎け散る。

それを魔神は目を見開いて見ていたが、次の瞬間には面白そうに笑う。

『せえいつ・・・でおじゃる!!』

次の瞬間には、イルリヤの振り落とした尻尾が魔神を地面に叩きつけ、その後には一瞬で黄金の竜が現れたかと思うと相当の量の魔力

の塊を魔神に放っていた。

『ふう〜・・・一応、効きましたかね・・・まあ、さっきの魔法で相当エネルギーを失った事でしょうね・・・』

俺は言わないでおくとして、美月は無傷。

和馬と瑞穂は瑞穂の防御魔法でどうにか完璧に防げたらしく、ほぼ無傷に近い。

あとのイリルとイルリヤは、埃を所々かぶってるものの、大きな傷は無い。

次の瞬間に魔神がロケットのように真っ直ぐに凄いスピードで迫ってきた。

しかも・・・俺をターゲットにしていた・・・。

「何故に俺ッ!?!」

そんな声をあげるものの、反応ができずに魔神が体当たりのような感じで迫ってくる。

そして、俺に魔神が激突・・・というところで、美月が光の剣でそれを受け止めた。

「あなたはさっきも徹夜を傷つけたからねっ!! これ以上はやらせないッ!!!」

その、声と共に美月が力を込め、完全に受け止める。そして、少しばかり魔神を押し返すのだが、魔神は更に力を込め始める。

「oihasdjhо・・・?」

「うわっ!?!?」

「げぶっ!?!?」

美月が凄い勢いで押され始め、後ろにいた俺まで巻き添えを食らった。

俺は魔法で空中に造った足場に立っていたのだが、それによって足場から離れた。

「うわあああつ！！？ どうしよう徹夜ツ！？」

「…チイツ！！」

美月の言葉を聞くと同時に、俺は上にかざした手のところに闇で剣を造り、そのまま振り下ろし魔神の腕を切り落とした。

それによって魔神の動きは止まり、俺と美月はそのまま勢いが残っているので吹っ飛ばされる。

俺はどうにか美月を抱えて空中で体勢を建て直し地面に着地する。美月を下ろす。少し残念そうにしていたが、俺は気にしない。

そして、俺が何かを思う前に悲鳴のような声が聞こえた。

それは魔神の声だった。

「 h s o i u h v b j l s h v u o i h s l j v n l j s v o i s
j v n s o j h v o j s n j v h s j h b v i w e b b e s o i i
ツツ！！！」

「は・・・？」

そんな声が聞こえると同時に、魔神が迫ってくる。

美月も反応できずに、素通りされ俺の体を貫こうと魔神の手が突き進む。

「他の人間ばかりに気をそらすと死ぬでおじやるよツ！！！」

「いい加減に、この世界から消えなさいツ！！！」

そんな声が聞こえた。

それはイリルとイルリヤの声で、どうにか俺に手が突き刺さる前に阻止していた。

その次の瞬間には、攻撃に移っている。

人間の姿の二人は口を大きく開け、その口の前には魔法陣が展開されている。

「……『ファースト・ドラゴン・プレス 始まりの一撃』!!!」

その声が聞こえると同時に、二人は今まで放った竜の息吹や魔力の塊などよりも相当威力の高い一撃が放たれる。

それは二人に挟まれる形でいた魔神にぶつかる。

すぐには爆発はしなかった、魔神程度の体など紙の様に貫き、遠くの山にぶつかり爆発していた。

「くうあツ!!?」

それでも、魔神は死なず。

二人が大きく吹っ飛ばされ、俺からは見えないところまで行った。

「いい加減死ねツ!!」

体のいたるところがなくなり始めた魔神を瑞穂が後ろから掴み、地面に叩きつける。

その瑞穂の目はいつもと違う。

「お前の時だけ止まれツ!!」

瑞穂の目と魔神の目があった瞬間に、魔神の動きの速さがガクツと下がる。

だが、それだけでは止まらない。

次の瞬間には瑞穂が衝撃波で吹き飛ばされていた。

「……ツ!!」

それを見た瞬間に美月が魔力を帯びた剣を振り下ろすが、また見えない壁で阻まれる。

魔神はそれに対して衝撃波を美月に放つ。

「おっと・・・女性に乱暴はいけないだろう」

そんな声と同時に和馬が美月の位置をずらし、美月がよけたが和馬は吹き飛ばされる。

お前はどこまでアホなんだっ!?

「ハアアアアツ!!」

それでも、美月は剣を振り下ろし、壁に留められても魔力を更に多く流し込む。

「面倒なものはさつさと無くなれやアア!!」

そこに俺が闇の魔力を、おもいつきし込めた拳を振り下ろす。

その瞬間に見えない壁が砕け散り、俺の拳で勢いの増した美月の剣が振り下ろされた。

それは魔神の首を斬り飛ばした。

同時にまたも悲鳴のような声が聞こえ、魔神の体のはじけとんだ。

「終わったのかな・・・?」

美月の力の抜けた言葉。

「ん？ たぶん・・・？」
それに対して俺も疲れていてちゃんとした感じではなく疲れた感じの言葉でしかなかった。

その後は、俺達は楽だったが、他が大変だった。
魔神の攻撃魔法、魔神の復活させた生物による戦争、などなどにより怪我人も死亡数も多く。
いろいろと大変な事になっていた。

俺達が何で楽だったのか、それは対応するほうではなく対応されるほう・・・つまり怪我人として、楽にできたわけだ。

そして、ミラゲイルは、生き残ってる王妃や姫様などが臣下などと共にどうにか立て直すそうだ。

当然、これをチャンスと思い、他の国は領地を奪おうとしようとしたらしいが、美月がそれをさせなかった。これは魔王と同じように脅しのものだった。

いくら怪我をしているといっても、相手は勇者。

しかも、少し前に小国の政治が力技で一つ変えたという事実があり、それは国の動きを止めるには十分なものだ。

これには、魔界、サラスム、レーゲン、ドラゲイルにまたも手伝ってもらおうらしい。

そして、ミラゲイル王都では3人の死体が見つかる。

一人は原形のとどめていない肉の塊で、赤く染まった白い翼が周りに落ちていたことにより誰かはわかった。

後は、壁にぬいつけられた首の無い死体。

そして、死体と言って良いのかわからないが・・・外傷はないのに全ての体の動きが止まっているもの。

その三人は見つかった。

だが、気絶させられたであろう日本刀を使っていた少年だけが見つからなかった。

そして、魔神との戦いの後の報告は終わりとして・・・俺と美月も状況が再びもとの場所に戻ることになる。

少したけ面倒なことは増えるらしいが元の場所に戻れるのだ。

最終回 第二章 本編はこれで……ノシ(後書き)

親はゲーム類などを買ってくれない、ということでも月三千元のおこづかいをどうにか使わずに貯めて、PSPとモンハンを買った事により、小説の時間が減る事に……。

できるだけ早く投稿するつもりですが、投稿日の間隔が開く場合もあるかもしれないので、そこは宜しくお願いします。

すこしばかり、番外編を乗せるつもりです。

そして番外編の最後で第三章のステージに移る直前を書いて終了させていただきます。

今回の番外編ではいろいろな過去編など、ギャグなども入れたいな、と思っってます。

まあ、無理かもしれませんが……

誤字・脱字があれば御報告お願いします。

番外編 ある六人の過去（前書き）

第一章に乗せようと書いたけど、没にして消したものを再び書いた。まあ、今回ののは没にしない程度に満足に書けたと思う。

今回は徹夜は出てこない。

番外編 ある六人の過去

そこは魔界。

そして……時はさかのぼり、十数年前へと移動する。

ある場所、そこには一つの都市。

その都市は、ある一枚の大きな壁により外の住民と中の住民がいる。

壁の内側には、魔界でも有名な兵士を育て上げる学園があり、人間で言う貴族などの裕福な者達が住む場所。

警備もちゃんとしており治安がよく、その中に住んでいるだけで不満になるはずはない幸せに住んでいけるであろう場所。

そして、壁の外側。

そこでは治安が良い、なんとという言葉なんて絶対に呼べるわけがない場所。

服とも思えないような物を着ている者がいるし……人目のある場所、人目の無い場所、そんな物は一切関係が無く魔族が自分の生きるために同じ魔族を殺す事なんて普通の事。

そんな都市。

そこには、六歳程度のある一人の少女が走っていた。

別に壁の内側に居たわけではない、外側に居たのだ。

「こおんのつ、クソガキツ!!!」

その少女の後ろからは男性の野太い怒鳴り声が聞こえてくるが、少女はその小さな身体にはありえないと思うほどの運動神経でボロボ

口の建物の壁を登り、屋根に上ることで男性を撒く。

その少女は腕にいくつかのリンゴのような物を抱えており、それは今まで売られていたもの。

つまりは盗んだのだ。

「・・・」

少女は、安全であろう場所に到着すると黙ってリンゴを見つめた後、口を大きく開けてかぶりつく。

そのリンゴは丸く、大きく、真っ赤なリンゴ……というわけではなく、しおれていて水分は無く、少しばかり黒いリンゴだ。

その黒いリンゴを少女は、ゆっくりと食べ、食べ終わると辺りを見回し、他の魔族に見られないようにその場所から出る。

壁の外側で、一人で居る事は危険と言える。

自分のいる安全な寝る場所を知られれば、何かあるかは分からない。捕まれば奴隷商人に売られることは当たり前、自分のストレスの発散のために何時間も殴られ、蹴られ、最後には殺される事だってある。

少女は歩き出し、違う場所で再び何か食べるものを盗むために移動する。

さっきのリンゴは全部食べてしまった。

生きるためには再び食料を見つける必要がある。

壁の外と言っても、それなりに売っている店を経営してるところはある。

壁の内側と比べれば食べ物物の質は格段に落ちている、でもそんな物は少女に関係は無い。

少女は壁の外側で生まれた。

そんな食べ物を食べるのは普通の事だ。

泥棒をする事なんて、何年か前に死んだ母親がまた生きていた時か

らやっている。

こんな環境に生まれたら、何が良くて何が悪いかなんてわかるわけがない。

「見つけたぞ、このクソガキっ!!」

そんな所に、少女の頬に横から衝撃が走り自分が歩いていた道の横にある壁に背中からぶつかる。

「・・・っっ」

一瞬頭がくらくらするが横に頭を振ってから、そちらを見るとさっき撒いたはずである魔族の男と数人の魔族の男達が居た。

どうやら、撒いた後もずっと捜していたらしく運悪くあってしまったらしい。

「てめえのせいで俺はむかついてるんだよ、責任とってストレス発散に付き合ってくれや」

男がこちらに手を伸ばそうとして来る。

少女にとっては大きすぎる手。

その掌は次の瞬間には縦に浅く切り裂かれていた。

「ぐあああっ・・・クソツ!! いてえっ!!」

少女の手には、石を削って作った短いナイフが持たれていた。

それを見た魔族の男達はそれぞれが得物を持ち、凄い形相で睨んでくる。

「クソガキっ・・・・・・てめえ、ズタボロにして近くの森の魔物の餌にしてやるよ・・・」

掌を切られた男が怒りの感情と共にそんな言葉を言う。

少女はそれを聞いても動じない。

こんな所で住んでいれば、こんなことは何十回と遭遇する事態であ

る。

慣れてしまえば動じるわけがないし、何回も遭遇しているせいで自然と動きもよくなり、簡単には殺されなくなる、それに加えて逃げる瞬間も理解できている。

「・・・死ぬのは、あなた」

少女が相手に挑発の言葉を放つと、掌を切られた男が怒りで飛び出してくる。

丁度よく他の男達を置いてきぼりにする感じで突っ込んできた男は、得物を少女に向けて振るうが、少女はそれを軽く避けて首を一気に切り裂いた。

「あ・・・？」

首を切り裂かれた男は訳がわからないと言う声を漏らした後、次の瞬間には絶命し、地面に転がる。

それを見たほかの男達は一瞬怯んだように後ろに一歩下がるが、多対一の状況を思い出すと強気でこちらにジリジリと寄ってくる。

「・・・（そろそろ逃げ時かな）」

そんな様子を見た少女は、相手に気づかれないように周りを見て、逃げられる場所をいくつか見つけ出す。

そして、逃げ出そうとした所に後ろから衝撃が走り、前に大きく吹き飛ばされた。

地面を転がり、最後には仰向けに転がる。

「くう・・・」

倒れた状態でそちらを見ると嫌な笑みを浮かべた知らない魔族の男。つまり、一人だけ違う場所で見守っていたのだらう。

さっきの衝撃で石のナイフも落としてしまい、後ろからの衝撃がどうやら予想以上に体に来ているようで身動きが満足に取れない。

あと数秒すれば動けるだろうが、目の前男は金属のナイフを持って近づいてくる。

これでは間に合わない。

「子供相手だからって油断してるから死ぬんだよ、まったくアホなやつ……」

その男が近づいてくる……だが、言葉の途中でその男は後ろの壁と一緒に吹き飛ばされた。

その場所には真っ黒な大きい熊が居た。

熊の口には、さっきの男がくわえられていて、次の瞬間にいやな音と共に噛み砕かれ体の上下が二つに分かれた。

最初に説明したとおり、ここは治安などのことは考えられていない。だから、壁の外では魔物が出るのは当たり前。

何十年前では、大量の魔物によって何百という数の死人が出た、という過去まである。

そして、その魔物は少女にとって幸運なのか、男達をなぎ払った。

仰向けに倒れていた状態なので、ちょうど少女の上を通過していく形だったので鋭い爪に切り裂かれることは無かったが、少女の周りにいた男たちは一瞬の内に絶命して行った。

「……やばい」

少女はまだ動けずにいる。

その少女を黒い熊は発見し、口をあけて鋭い牙を見せ、ドロドロとした涎をたらしている。

それを見た少女はどうか熊のほうに手を向ける。

すると、その手には黒い何かが集まると同時に黒い熊の上半身を吹き飛ばした。

少女は今まで何回も危険な目にあっている。

そんな中で育ったのは、危険察知能力と運動神経、武器の扱い方、そして魔法だ。

その魔法は純粹な闇の魔法。十分な才能を持っていたことにより、使えるようになったものだろう。

だが、一発で終わり。

それ専門の魔族に教わったわけではなく、実戦で学んだつけやきば。そんな物を何発も撃つ事など不可能。

訓練をしていなければ魔力を正確に制御する事など不可能なのだ。

少女は肩を揺らして呼吸をしており、顔はベツトリと大粒の汗をかいている。

それほどまでに、今の少女にはきつい事なのだ。

「・・・ツ!!!?」

だが、そこまでで終らなかった。

魔物が死んだ所・・・つまり、壊れた壁から4匹ぐらいの同じ種類の魔物たちが現れる。

魔物たちは周りの魔族の男の死体、そしてさつき殺した魔物の死骸をむさぼり始めるのだが、大きな体に似合ってる速さで食べているのですぐにそれも無くなる。

熊の目線は少女に集まる。

そして……一匹の熊の魔物が少女に向かって噛み付こうとした。

「ほらな、カインズ。数匹の魔物を壁の外に放っておけば、一人は才能のある者が見つかるだろ？」

そんな声と共に四匹の魔物の体のはじけ飛び、まわりに魔物の血が飛び散った。

「……？」

その声のほうを向くと二人の魔族の男と自分より一つか二つ年下の少女が居た。

そして、二人の魔族の男で後ろに居るほうが口を開く。

「確かにそうですね、魔王様。純粋な闇の魔法を使っておりますので、これは大きな収穫だったと思います」

「……ッ!?!?」

魔族の言葉を聞いて少女は驚いた。

「魔王」という言葉は魔族にとつて重い存在である。

そしてカインズという名前にも聞き覚えがある、それは現在の『魔界六柱』No.1のカインズ・トルウマアである。

「少しばかり入学する時期は遅いが学園で育てれば、将来有望な兵士になることは間違いなしだ」

「ですが、あいにく学園では都市の壁の内側に住む者達が通つて
るため、寮は無いですが……」

「じゃあ、誰かが養子にでも取ればよいだろう」

うむむ……おい、カインズ……」

「……はい、なんででしょうか？」

「お前、妻は居たが子はいなかったはずだな？」

「……ハッキリとお申し付けください」

「こいつを養子にとれ・・・」

「正直溜息をつきたい所ですがどうか押し殺しましょう・・・魔王様の命とあれば・・・はあ」
結局溜息をついていた

倒れている少女を無視して話を進めていく二人、そして魔王とN.O.1の後ろにいる少女はその様子を見て何か別のことを考えていた。

「・・・（お父様は・・・力があれば、目を向けてくれるのですね）」

誰かも知らない少女を魔王は自分の兵士に育てるために、カインズに養子にさせて育てさせようとしている。

それは、少女にとって一瞬であれど、目を向けてもらえているという事実だと受け取っていた。

「・・・（学園に入れるのは6歳・・・まだ、入れない・・・でも、すぐに入れるようになったら・・・学ばないと、力の使い方を・・・）」
その少女・・・つまりミルリアは変な方向に考え方が歪んでいく。

「・・・（学んで、力をつけて、殺して、功績をあげて、私の力で地位を得れば、きつと・・・いや、絶対にお父様は私を見てくれるはず）」

少女は決意を固める。

いくらそれを実行にしたって意味も無い事を知らずに・・・

そして、そんな歪んだ考え方と共に時は進んでいく。

学園に入学し、訓練し、ロシアンという少年と出会い、軍に入り、昇進していく。

そして最後に600年前の姉にあった。

そんな少女の物語。

そして、再びミルリアではない少女に戻る。

魔王とカインズの話は勝手に進み、勝手に終る。

カインズは少女がまだ動けずに居るので、軽く片手で持ち上げて軽い治療魔法をかけることにより立たせることにする。

「お前の名前は？」

カインズが少女に向かって問うと、少女は戸惑いながらも答える。

「・・・私は、リーシ」

「そうか、リーシか。ふむ・・・では、これからリーシ・トルウマアと名乗るが良い。

お前はこれから今までのような辛いな生活は、絶対に無い生き方ができるだろう」

少女の生き方が変わった瞬間である。

それからの生活は、リーシにとって今までと違い、幸せなものだったといえる。

学園の訓練は相当辛いものだったが、壁の外に住んでいたリーシにとってそんな物は関係が無く。

子供がどうしてもできなかったカインズと、その妻である女性は壁の外に住んでいた自分の子ではないリーシでも、まるで自分の子供のように愛情を注いでいた。

そして場所は変わるが、同じ都市にある学園。

そこは兵士を育てるための学園で、裕福な家しか入学する事ができない学園だ。

「あつっ・・・!!」

ある少女が突き飛ばされて、派手に転んだ。

「落ちこぼれのお前が、ずっとこの学園に居る事、事態が間違ってるんだよ」

「ソーダ、ソーダ」

ある一人の少女を、10人単位の少年が囲んでいじめていた。

二人目のコメントがなんかある飲み物の名前に見えたかもしれないが「そうだ、そうだ」である。

この光景はもう何日も続いている。魔法の授業で少女が失敗したことで、ある少年の一団がずっと苛めており、それを周りの子供達は笑ってるものも居れば、見ないフリをするものも居るし、いじめの集団を見て不愉快そうな顔をしているものもいる。

この苛める少年たちの集団では、周りに自慢するために腰に剣を下げているまとめ役的な位置に居る少年が、それなりに成績もよく、学園の同い年の中では実力がトップの方にいるので止めようとする奴はいなかった。

それに対して少女は涙目になり、「やめて」というだけで反抗もできずにいる。

そんな所に、ある声が割り込んできた。

「見苦しいからやめろよ、近くに居るこっちがイライラするだろう」

「まったくだ……。落ちこぼれだなんだかんだと言っているが、今の時点では得意な属性の魔法を見つけれられてないだけだろうに……」

そんな二人の少年が、少女と少年の一団の間に割り込んできた。

それを見たまとめ役の少年は、その二人を忌々しそうに睨み、舌打ちをしている。

「なんだ？ そんなブスが好きなのかア？」

そんなことを言うのと回りの男子が笑い始め、少女はさらに涙をボロボロと流し始める。

まとめ役の少年の鼻に思い切り拳がめり込み、2?ぐらい吹っ飛ば

された。

「あああああああああつ!!！」

吹っ飛んだ少年は、鼻血をだしながら床をのた打ち回っている。

「・・・お前、馬鹿だろ？ 何、低レベルな事言ってるの？」

最初に発言したほうの少年が、まとめ役の少年を見下ろしながらそんな事を言う。

吹っ飛ばされた少年は怒ったのだろう。

「てめえ・・・!!！」

周りに自慢するために腰に下げていた剣を抜く。

そして、自分を殴った少年のほうに刃を向けるのだが、次の瞬間にその刃が炎で包まれ溶けて使えなくなる。

「お前の自慢の剣を使えなくしちゃったな、木で作った剣でもやるから許してくれよ。」

お前には金属の剣はもつたいないと思うぞ
使えなくなった剣を持っている少年はポカンとした後、すぐに自分と一緒に居る少年たちのほうを助けを求めるために向く。
だが、またもポカンとした顔になる少年。

「よいしょつと・・・うあゝ、めんどくせえ・・・」

そんな事を呟きながら、もう一人の少年が、自分の仲間だった少年たちを縄でグルグル巻きにしていたのだ。

「なにやってんだ・・・ツ!!！」

まとめ役の少年は使えなくなった剣を、投げつけるが途中で変な方向に曲がってUターンした後自分の足元に転がってきた。

その少年の周りには風が渦巻いていた。

「そろそろ、終わりにしようぜ。お前がほかの奴の事を「落ちこぼれ」なんて言えないよな・・・?」

まとめ役の少年の肩に手がポンツ…と置かれ、それにビクツと反応する。

「は、はいっ!!」

そんな大声で返事をすると共に慌てて逃げ始めるまとめ役の少年。

「あゝ・・・自分の仲間を置いていきやがった」

「お前が無駄に脅すからだろ、もっと優しくやってやれよ」
そんな軽口を叩きながら、少女のほうに近づいていく。

「俺はジールク・ライっていうんだ、ちなみに一応説明すると後ろに居るのはトールウ・マイラスだ。君は?」

「一応ってなんだ、一応って・・・」

「・・・ルクライル・リーン」

「じゃあ、ルクライル。ちょっとここを離れようぜ、無駄に視線集めちまつてる・・・」

「え、あ、うん・・・」

少女がまわりを見ると、少年の集団の無様なやられ方を笑ってるのも居れば、違う少女達ではキヤーキヤーうるさいのもいる。それらがすべてこっちに視線を集めているのだ。

「おい、ジールク。お前、ナンパしてんじゃねえよ。俺だって頑張

「つたんだぞ」

「この歳でナンパなんかしねえよっ!!」

「じゃあ、もう少し歳をとったらするんだな？」

「おい、コラ、トールウ。ちょっと面貸せや」

少女はクスツと笑う、それを知らないで大騒ぎしている二人はまたも少女の笑いを誘ったのだった。

それが三人の話。

「あの人たち、面白いなあ。あの人たちと居たら退屈しなさそう
だ」

それを見たある少年は、そんな事を呟く。

その少年は、メイトという名前の少年であった。

「魔王様、マジ最高。命かけられるわ」

まあ、今までの六人で出てきていない内の一人はこんな感じだった。
ちなみに名前はクロイズル・リクトンである。

あの丁寧な話し方には、これから変わっていくのであった。

・・・めんどくさいから書かなかったとか言わないで、純粹に思いつかなかっただけだから。

番外編 ある六人の過去（後書き）

番外編が思いつかなかつたら無理矢理終了にするかも……。クロイズル・リクトンでは、マジで思いつかなかつた。本当にすまないと思っている。

まあ、思いつかなくてもクロイズルだから良いと思ったのは嘘ではない。

誤字・脱字があればマジで御報告ください

番外編 六（・1）人の内のひとりの生活（前書き）

なかなか、番外編のアイデアが浮かばない件について・・・。

今回も徹夜の出番なし

番外編 六（・1）人の内のひとりの生活

ある昼の時間。

そこはまだ暗く、闇の一族達の国。

まあ、要するに魔界だが・・・。

「ただいま戻りました」

魔界のトップの実力を持つ魔族の女性・・・つまりリーシ・トルウマアが無駄に豪華な屋敷の中に入って最初に一言言った。

それに対して丁度そこに居た召使達が友達のように元気よく挨拶をし返していた。

リーシはもともとは偉い身分ではなかった。

それが関係してか召使達には、普通に接してくれるように言っている。これは普通の事である。

「母様は？」

近くにいた召使の女性に質問をすると、すぐに答えてくれる。

「リミ様と一緒に食事をとっております」

それに軽く返事をするリーシは歩き出し、召使も自分の仕事に戻っていく。

無駄に大きい屋敷はリーシが現『魔界六柱』のNo.1であるように、リーシの（義理のだが）父親であるカインズ・トルウマアは前『魔界六柱』のNo.1であったことを考えれば当然である。

「母様、今戻りました」

リーシの今の姿はまだ包帯や絆創膏のようなものが取れていない状態である。

魔王相手に戦った末、勝利はしたが、致命傷は受けられないようにした

ものの戦いの中でのかすり傷や打撲などのものはさすがに食らっていた。

そしてそれらの攻撃は全て魔王の攻撃なので、魔王の膨大な魔力が邪魔をして簡単には治療魔法でも完全には完治できていないのだ。なので、自然回復を待つことにした。

他の四人も同じ状態だが、無駄にタフな四人なんて気にする必要は無いだろう。

「あら、リーシ。遅かったのね」

ちなみに今はあの戦闘から数日はたっているが、この屋敷に戻ってくるのは始めてある。

魔王との戦闘時にはさりげなく気づかれないように肉体強化の魔法を使いまくっていたので、魔力を使いまくったせいもあり、数日間動けずにいたこともある。

ちなみに、リーシを笑顔で迎えてくれたのはカインズ・トルウマアの妻であるミリア・トルウマアである。

カインズは数年前に病気で死んでしまい、この屋敷では十数人の召使とリーシだけしかいなかったのだが、思わぬ所で一人加わった。

「・・・うわっ」

突然、リーシが驚きの声をあげたのは抱きついてきた小さな影があるからだ。

その加わった一人であるリミである。

リミの頭を撫でてあげると、抱きつきながらこっちを見上げていた顔が安心したような顔になる。

それを見たリーシは思わず笑みを浮かべてしまう。

「リーシも良い顔になっちゃって、なんだか寂しいわ」

「こんな顔ができるのも、母様達のおかげですよ」
いかにも寂しいという顔をしているミリアにリーシは、本当に感謝しているという心を込めた返答を返している。

「そう言われると、嬉しいわね。」

それにしても、そんな顔ができるんだったら、いい加減結婚してもらいたいわ。

あなたも、成人の女性なのを忘れてない？」

「魔族のトップで、実力も異様に高い、そんな女らしからぬ女なんて好きになる人もいませんよ」

リーシはそんな事を答えながらリミと並んでイスに座り、召使さんが持ってきてくれた紅茶を一口だけ飲む。

ミリアは食事は終わったのかりミを挟む形でイスに座り、リミを可愛がっている。

「でも、ミルリアちゃんなんてロシアンと良い雰囲気ばくない？」

「ミルリアのあれは鈍感の天然ですよ。ロシアンからは気があってもミルリアは全然気づいてませんよ。」

まあ、戦争の後は少し変わってるように見えましたか・・・」

「じゃあ、リーシも大丈夫よ。あなたは美人なんだから」

そんな事をしゃべりながら、ミリアもリーシもリミを可愛がるのをやめない。

それに、少しばかりきつそうにしているリミだが、その顔はとても嬉しそうである。

「私はそう思いませんけどね」

「リーシは知ってる？ リーシのファンクラブってあるのよ。まあ、『魔界六柱』全員にそれぞれが一つか二つはファンクラブがあるみたいなのよね。ジールクとルクライルの『恋を応援しようの会』というものもあったわ。」

ちなみに、少ない会員だけどジールクとトルウのもあったわ。正直、そういう趣味は理解できないんだけどもね」

「・・・へ？」

いきなりの重大発言に追いつけていけないリーシである。

一番追いつけていけない話題は、ジールクとトルウの場所であるが、そこはリーシは触れないことを瞬時に決意したので無視は決定である。

「でも、何故でしょうね？ クロイズルの場合だと性格が嫌だからってファンクラブが無いのよね。」

あの人を馬鹿にしたような目が嫌いらしいわ」

「ちょっと待ってください、母様。私のファンクラブってどういうわけですか・・・？」

「何故かね、恨む魔族も多いだろうに勇者ファンクラブまでできるから驚きよね。人（魔族だけでも）の対応能力って凄いわね」

「そつちも少し気になります、本当に待ってください。私のファンクラブってどういうわけですかッ！？」

リーシの動揺したような言葉に、ミリアは思い出したような言葉で告げた。

「ええ、あるわよ。ちなみにファンクラブNo.0002は私よ」

「おいッ！！ どういうことですか、それはッ！！」

「ちなみにN o , 0 0 0 1はカインズよ」

「言わないでほしかったッ！！ そんな事知る必要なかったのに、今まで同様ずっと隠しててほしかったですっ！！」

リーシにとってのカインズのイメージは、私生活では優しいが、訓練や私生活での叱る場所では厳しく、いつもスーツを着ているような（当然、着てないけどね）ビシッ…！！とした感じの男性だったのだ。

そして、魔王にもちゃんと意見してる所から、リーシにとっては十分に敬える人だったのだ。

それが、今…少しばかりひびが入った。

「ちなみに、各ファンクラブから二割ずつが『リーシとリミの姉妹愛』の会に移動しているわ」

「なんか姉妹って事になってますね…」

「一応は公では、私が養子にとったことにしてるもの」

「何故ですか…？」

「一応、リーシが養子にとったはずなのだが…」

「それで、リーシちゃんに彼氏ができなかつたら嫌じゃないっ！…
…まだまだ人生は長いのよっ！！」

それに対して、リーシはただ溜息をつくばかりである。

リーシも十年以上一緒に居るのだが、どうもこういうのには慣れないのであった。

番外編 六（・一）人の内のひとりの生活（後書き）

勇者ファンクラブ⇨美月ファンクラブ、です。

どうにか、夏休みが終る前にはあと2〜3話で終らせていただこう
と思っています。

どうにかあと五日程度で終らせませす。

夏休みももう終わり・・・辛いです。

誤字・脱字があれば御報告ください

番外編 魔界でのデー？（前書き）

今回はネタかな？

一応、徹夜も出場。

番外編 魔界でのデー？

またも魔界。

魔界ネタが多い気がするが、大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない。

…という、駄小説フラグはほつといて魔界の話に移ろうと思う。

これは前の話から数日たった話。

ある建物の壁に、ある奴らがいた。

その数は、五人。

まあ、名前を順に言つと・・・リーシ、ミルリア、ロシアン、トルウ、メイトである。

ちなみに、その日は上層部の魔族・・・つまり『魔界六柱』とその部下はお休みの日。

まあ、戦争で被害も大きかったので、全体的に機能していないという危機的状況のせいなのだが、他の兵士の前で魔王を倒したので、そう簡単にはちよっかいを出そうとしてくる奴はいない。

そして、その五人はある光景を見ていた。

「だあくッ！！ もっと近づけば良いだろうっ！！」

トルウの苛立ちが籠ってる声。

「いやいや、イチヤイチャされたらその分、見てることこっちが嫌な気分になりますよ」

それにリーシが答える。

「ああ、あの二人・・・見詰め合ってるね」
ミルリアがボケッツとしながら、そんな事を良い。

「ああいうの・・・いいなあ」

ロシアンは、その光景をミルリアと交互に見ながらそんなことを言っているが、ミルリアはただひたすらその光景を見ているだけなので気づかない。

「ああ、ジールク様もルクライル様も・・・少しばかりじれつたい気がしますね・・・戦闘時みたいに、もっとガッツリと行けないものですかね・・・」

そして、最後にメイトが握りこぶしを作り「頑張れ！」という感じでその光景を見ている。

メイトの発言でおわかりだろう。

その五人が『上層部の内部調査』という名目で行っている、ジールクとルクライルへのストーカー行為。

ジールクとルクライルは横に並んで、買い物などをしているのだが、どこかぎこちない距離が開いており、完全に「デ」で始まり、真ん中に「ー」が入り、最後に「ト」の三文字の言葉を意識していることは間違いないだろう。

「おお、どうやら食事を取るようですね」

その言葉と同様に、ジールクとルクライルはファミレスまがいの料理店に入っていく。

五人は人に紛れて店に入り、ジールクとルクライルの二人の視線から上手く逃れるポイントに座る。

基本的に戦闘以外にも潜伏などのものも学んでおり、それを活用しているので見つかりにくい。そして、こういう暗殺や潜入、追跡系に関しては一番リーシが得意なので、みんなリーシの陣取る場所についていくことにした。

店で働いている魔族が、身を隠して歩いてくるお偉いさんに驚きを見せるものの、リーシが人差し指を立て口元に当てる事で静かにするよつに合図をする。

「私は・・・このシチューとパンのセットで」

「俺は、このかぶりつき焼肉セットだな」

「私は、パンだけでいいわ」

「僕はコーヒーを一杯だけでいいですね」

「私はどうしましょうか・・・まあ、とりあえずは紅茶を下さい」
リーシ、トルウ、ミルリア、ロシアン、メイトの順で注文をしていく。

それを、この面子を見た店員は緊張気味でメモを書いた後、カクカクとした動作で進んでいく。

「ルクライル様・・・食事といたら定番の行動でしょうッ!!」
メイトが、ジールク達のほうを見て呟く。

まだジールク達のほうにもまだ料理は届いていないのだが、メイトは自分の主人の事に集中していて気にしていないのだ。

「ん？ 何この面白い感じは・・・俺も混ぜてもらって良い？」

「……………は？」

自分達の座ってるテーブルの下からいきなり声が割り込んできた。いつせいに下を覗き込むと、ぞくに言う体育座りで座っている黒髪をへそまで伸ばしていて一まとめに縛っている少年がいた。

その少年の髪は長いので、床にまで届いているのだが少年は気にし

ていない。
というより、床に座り込んでること事態を気にしていないので、別にどうでも良いのだろう。

「よいしょっと・・・」

その少年・・・つまり徹夜はテーブルから出てきて、一番奥の席に座る。

丁度良く、その席は7〜8人分だったので、問題なく座ることができた。

「なんで、黒いのが此処に？」

その様子にポカンとしながらリーシが疑問を問いかける。

すると、それを気にしない顔でジールク達の方を見ながら徹夜が答えた。

「美月から逃げてきた」

「・・・え？」

ミルリアがポカンとした声をあげる。

「いやな、俺がさ・・・美月と別行動で旅をしていたのは知っているだろ。」

そしたらさ、久しぶりに会ってから今までずっと思ってたんだけどさ。

・・・美月の羞恥心はどこに行ったんだろっかな？・・・ってさ。

まだ、最初は恥ずかしくて俺に抱きつこうなんていうのを他の人の前でなんてやるうとする子じゃなかったんだが・・・今じゃあ・・・
どういうわけだ・・・」

どこか、娘に置いていかれた父親を思わせるような言葉を重々しく言う徹夜。

「「「「「」」」」」」

「あれは……一体どうすれば治るんだろうな……」

「それは、黒いのがどうにか解決してください」

リーシが哲也に向かってそんなことを言う。

「そうだよ、徹夜。そこは徹夜がどうにかしなよ……今来たばかりだから何の話かわからないけど」

「「「「」」」」」

いつの間にか徹夜の向かいの席には美月が座っている。

それに徹夜は驚かないで、ただジールクの方を観察している。

「で、あの二人はどのような状況？」

美月がジールク達の方を指差すと、何かを話しながら食べているジールク達が居た。

未だこっちに気づいてはいない。

「デートじゃね？」

徹夜が普通にその言葉を言うと、ほほお〜…と美月は興味ありそうに目を細める。

「でもさ、デートと言ったらさ……あの『あ〜ん』っていう奴じゃない？」

「ですが、そんな事は普通恥ずかしくてやりませんよ？」
美月の言葉にリーシが答える。

「え〜でも、私は徹夜にやったよ？」

「おい、コラ、今の発言はなんだ？ 俺は全然身に覚えがないんだがッ！？」

徹夜はあからさまに驚き、周りの五人は「ほお〜・・・」という声を漏らしながら目を細めている。

徹夜はいきなりの発言と周りの様子で完全にダウンした。

ピクリとも動かない徹夜と嬉しそうな美月、そして徹夜たちを十分観察したと思つたほかの五人は再びジールク達へと観察対照を移そうとする。

「・・・おい」

移した先にはわずか1？以内の近さに、こちらを睨んでいるジールクが・・・。

「お前ら、何をしている・・・？」

「『・・・上層部の内部調査』」

徹夜はダウンし、美月は徹夜を見てニコニコしている。

なので、徹夜と美月以外の五人がいつせいに口をそろえて内容を言つた。

「最後に言い残すことはある・・・？」

その後ろからルクライルが顔を見せる。

その顔は無表情で体からは黒いオーラが出ている。・・・軽く怖い。

「じゃあ、最後に一言だけ・・・」

ミルリアが口を開き、息を吸った後で全員に聞こえるようにハッキリと言つた。

「解散つー!!」

その言葉と共に各自がバラバラに一齐に逃げ出し、ジールク達が反応する前に一瞬で居なくなる。

残ったのは関係がなさそうな徹夜と美月。

それにジールクが溜息をつくくと、ルクライルと一緒に料理店を出た。ちなみに、お金は全部・・・徹夜が払わされた。

そして、数分たち・・・違う場所では・・・。

「ねえ、ロシアン」

「なんででしょうか？ ミルリア様」

ミルリアに名前を呼ばれると、ロシアンは普通の様子で答えるのだが、何故かミルリアは少しばかりモジモジとして、顔が赤い。

「私、買い物行こうと思うんだけど良かったら一緒に行かない？」

「ミルリア様とだったら喜んで行きますよ」

その答えにミルリアは嬉しそうな顔をし、ロシアンは表情に出さないうように頑張っているが内心相当嬉しいみたいだ。

そして、二人で歩き出す。

そして・・・

「だあ〜ッ!! もっと近づけば良いだろうにっ!!」
「トルウの苛立ちが籠ってる声。」

「いやいや、イチヤイチャされたらその分、見てるこっちが嫌な気分になりますよ」
「それにリーシが答える。」

「ふっ、仕返しだな。ミルリアとロシアンに限らず他の奴にもどうにか仕返しはしたいが、なかなかこういうのはないからな」
「ジールクが呟く。」

「参考に行けるところはしないと・・・ッ!!」
「ルクライルが熱心に見ている・・・。」

「ミルリア様とロシアンもいつのまにかお互いに意識してますね」
「メイトが冷静な様子でそんなことを言う。」

最初の二人はどこかデジャブを感じさせた。

「くう・・・っ、私の妹があ〜ッ!!」

「あれッ!? いつの間にか徹夜からリヤナさんが変わってるッ!!」
「!」

そして、こちらでは最初から新しい二人が加わっていた。

ちなみに片方の男は、もう一つの魂である魔族の姉に根負けして体を奪われているのだった。

番外編 魔界でのデー？（後書き）

ジールクとルクライル、ミルリアとロシアン。
リーシヤとールウは一体どうなるのやら・・・。

誤字・脱字があれば御報告ください

番外編 第二章終了(前書き)

今回は、ほぼおふざけは無いと思う。

というか内容も薄くて、ダメだと思ったけどこの場合はしょうがない。

番外編 第二章終了

今はサラスム。

魔界に逃げ込んでから数日がたち、サラスムのところに来た。

サラスムに来た理由は特に無く、瑞穂と和馬がいるから来ただけだ。

この数日間では、少しばかり歩いて他の人たちに会っていた。

ラルドさんとライルの二人は、戦争の後も変わることなく冒険者として魔物討伐など、俺は一度も言ったときがないがダンジョンという神秘的な洞窟などに潜っているそうだ。

せつかくこんな世界に来たのだからダンジョンに潜る事がなかった事が悔やまれるが、今更どうしようもない。

そして、ハク達とも会ってみた。

ハクはあいかわらずだったが、さすがは俺と言えよう。投げる業は全然落ちていなかった。

ラウとエミリイとも会ったのだが、やはりラウは最高の癒しといえるだろう。

いつもどおりのあの笑顔はアニマルセラピーの名をほしいままにしている。

あと、問題児A&Bとも偶然会ったのだが、あまりケンカはしていなかったようだ。

闇ギルドの時からあまり喧嘩しなくなっただけらしい。

あと、イリルさんやルミなども会った。

あいかわらずな感じで良かったのだが、いい加減に納豆ドリアンのネタを引きずってくるあのクソ野郎はフルボッコにやってやった。

え？ 大丈夫です。あの様子だと死にはしないでしょ。

あと、カイラなどに会ってみた。

やはり何かを予知みたのだろう、とても悲しそうな顔をしていたが、最後には笑顔で別れの挨拶をした。

こういうときのあの能力は、相当辛いものなのだろう。

まあ、知り合いと合えなくなるのは、誰でも辛いものだ。

魔界のやつには、あの内部調査ことストーカー行為の次の日にゆっくりと話をしたので問題は無い。

まあ、楽しく話させてもらい。俺の言った内容ではミルリアが凄く悲しかった。

俺の中にいる姉というやつだろう。

俺は絶対に気にしないからな。

絶対に気にしないからなッ！……と決意を固めていたはずなのに、一日体を貸してしまった俺がいるのが悲しい所だ。

今まで、少しばかり迷惑をかけたなり、一緒に戦ったりなどとした人には会いに行つて、少しばかり話をした。
なかなか楽しかった。

「んで、どんな調子なんだ？」

俺は瑞穂と和馬に問う。

「ああ、これは時間の指定がされていないからお前と同じ年代に、その李氏っていう奴は生きてるかもしれないな」
瑞穂がサラスムの勇者召喚の魔法陣をジロジロと眺めながらそんなことを言う。

俺が日記で、疑問になった事だ。

あの日記では「なう」なんて書かれていた。

あれはツイッターの結構、定番にありそうな言葉ではなかったか？
…ということである。

瑞穂の言葉に、リヤナさんは喜んだが、どうせ李氏は召喚される前だものリヤナさんとは一切関係が無く、それはリヤナさんにとって悲しい事だけであった。

まあ、本人は李氏を見れるだけでも嬉しいらしい。

というか、元の世界では李氏と美月・・・どちらも同じ魂が二つ存在していたと言う事になるのだが、そこは誰にもわかるわけが無い人間である俺や美月や魔族のリヤナは、神の考えなんて分からないし、俺は神なんて信じちゃいないから関係ない。

「まあ、どうせこの部屋はサラスムの王族とレーゲンの神殿、あとはドラゲイルの竜王女が封印するから関係ないだろうね」
美月が言った通り、ここは封印される。

封印の鍵は三つあり、さっき言った王族、神殿、竜王女が一つずつ持つ。

これはそれぞれが勝手に動いて、勇者召喚をしないようにすることだ。

まあ、王族と神殿はよく分からないが、竜王女は絶対に悪用するわけは無いだろう。

「じゃあ、行くか」

和馬がそんな事を言うと瑞穂と一緒に歩き出し、俺と美月はそれについていく。

「徹夜、闇で竜を使って空を飛んでいこうぜ」
結局俺がお前らを運ぶのか……。

とりあえずは、竜を作り空を飛んでいく。

俺達が向かう先は、瑞穂たちが最初に来た時に、俺達が潰した（？）
と言える小国の馬鹿な王様と話したらしい場所。
そこに、ある物があり俺達はそれに用がある。

「もうちょっと速くでき……うおおわあっ!!?」

瑞穂が速くして欲しいそうなので、相当速さを変えた。

もう少ししたら目的の場所に到着するだろうな。

そして、何分か飛んで行き……。

「徹夜、ここだ」

和馬がそういつた瞬間に進むのを止め、地面に向かって降りていく。
そして、降りた後に竜を消し、少しばかり歩くと目的の場所が見え
た。

「おし、ここだな」

瑞穂がそういうと懐から何かの粉を取り出し、撒き散らすとある光
の線が現れる。

それは魔法陣の形になっていた。

「これが俺達が来たときに使った魔法陣だ」
和馬がそう言う。

つまりは、世界を渡る魔法陣。

来たときには使えた、ということ……戻ることにも使える。

「これで、元の世界に戻れるの？」

「いや、これは違う世界に通じている。
その世界に元の世界に通じている魔法陣があるから、言わば中継ポイントに向かって移動するだけだな」

「ふむ、わかった」

「じゃあ・・・帰るために移動しようか」

「ああ、わかった」

和馬がそういうと魔法陣に魔力を流し始める。
すると、魔法陣は光りだす。

「あとは、ただ歩けば良い」

そしたら、いつの間にか移動してるからな」

そう言つて瑞穂は歩き出し、魔法陣の中に消える。

それに続いて和馬が入って行き、美月が入っていく。

「なんか、また面倒な事になりそうだから嫌だな・・・」

そんな事を呟きながら俺は魔法陣から放たれている光の中に消えていった。

番外編 第二章終了（後書き）

最初に一言・・・総キャラ入れ替え宣言！！
時々、この世界に戻ってくるかもしれないが、ほぼキャラは出なくなるでしょう。

そして、第三章は、中継している世界・・・つまり、勇者と墮勇の争う世界です。

勇者も複数いますし、墮勇も複数います。

それなりに無駄なトリックキャラを作りたいなあ、とも思っています。

ひたすらウザイほどのダメ小説ですが、まだ付き合っていたけると嬉しいです。

あと、第二章ではあと一話だけ使い、キャラのまとめを投稿させていただきます。

第三章では高校に入り、落ち着いて・・・まだぼやけてる第三章のストーリーをハッキリさせてから書こうと思っています。

では、皆様。

そのときまで、さよならです。() () ()
まあ、すぐに書くと思いますが・・・。

誤字・脱字があれば御報告ください

第1〜2章 キャラまとめ（前書き）

キャラまとめです。

基本的にキャラ設定はネタバレシのような気がして作るつもりは無かったのですが、キャラがもう出てこないというのもあり、つくってみました

第1〜2章 キャラまとめ

活動報告に載せた奴だと、合計91名と書かれています。一つのキャラのところに、『フレとイム』って書いてあるんですよ。……つまり92人でした。

ホントすんません、フレとイムに本当に悪いと思っています。

《第一章・・・魔王編 始まりの物語》

景山 徹夜：一応はこの小説の主人公。闇とか無駄な馬鹿力とかを特徴にしてるつもりです。

二本の剣を持っているがほとんどが素手だ。前世はリヤナでいまだにリヤナの魂が残っていて時々乗っ取られる事がある。

内藤 美月：この小説での一応ヒロインだと思います。速さや光が特徴です。

ロングソードなどの剣を一本使い相手を刻むのが美月である。前世は二代目勇者の李氏

山本 李氏：二代目勇者。600年前の人物。戦い方不明。武器不明。魔法は精神系に特化。

リヤナ：600年前の人物。魔王にしたがっている魔族のトップだった者。魔王の娘でもある。『黒鬼』と呼ばれ恐れられていたらしい。

【サラスム編】（サラスムの時に出てきました）

ラウス：サラスムの第二王子。名前が出たのは一回だけで特に名前には覚えていない。
作者もこの名前は忘れてました。

グレイブ：腰のひん曲がった老人。サラスムで重要な役についてると思われる。

サラスム国王：名前は不明。王妃に弱い。

黙殺王妃：黙殺してくる王妃。レミアという名前があったことに作者気づかず。

クロ：黒い指輪の精霊。徹夜の力を引き出す役目を持っていた。今はほとんど出番なし。別に忘れてるわけではない。

ラウ：獣人の少女。奴隷になっていた所を主人公に救われ、よくわからない主人公の恥ずかしい言葉と一緒に旅する事に。現在は学園により日々強くなるため頑張っている。理由はルクライルの攻撃で徹夜にかばってもらった事にある。

ラルド：Sランクだった冒険者（現在では昇格）。聖剣エクスカリバーの使い手で二つ名の様なもので『聖剣』のラルドと呼ばれている。

ニッコリ笑顔は徹夜の天敵である。

ライル：魔族と人間のハーフ。火事により目の色の変化、それにより仲間の魔族と人間のハーフからも不気味がられた過去がある。

エミリイ：雷属性の魔法を使い、電気を糸のようにして使用することもある。

おちゃらけキャラを目指した末の脱落キャラ。あまり話しに混ぜられることもできなかったキャラ。

受付のお姉さん：受付のお姉さん。お弁当がうまい。

ギルドマスター：いつも咳き込んでるお爺さん。

グロウズ：もうすぐAランクのBランク冒険者。大柄な体系で徹夜の一発でK/O

【レーゲン編】（レーゲンの再登場。魔族は除こうと思います。）

宿のおっさん：一発キャラ。ラルドさんが常連になっている宿の主だ。

カイラ・ミラージュ：『時の巫女』としてのキャラ。神殿の外にはあまり出ることなく徹夜に連れ出してもらったことがある。ちなみに闇ギルドに命を狙われた経験あり。

今ではそれなりに外を出ることもできるようになり、散歩を満喫中。

ジヨイツ：時の巫女であるカイラの護衛をすることが仕事の騎士。黙って泣く事がある。

お偉い女性：神殿でのお偉い人。特に名前は出ていない

双子の火の精霊：フレとイム。二つの剣に入っている双子の精霊。独特なしゃべり方が作者と主人公である徹夜にめんどくさい、とうざがられています。

土人形：名前不明。Sランクだが弱い。一発の中の一発キャラ。

トゥルス・トーマン：青い剣というギルドのSランカー。水属性の魔法が得意。

トミー・キークソン：疾風の翼のギルドのSランカー。速さが高い事で有名なギルドに所属している。

クオ：黒い狼。今はラウの相棒として行動しているらしい。

徹夜になつたことは前の主人を裏切った事になり、前の主人は「裏切りの狼」とクオを恨んでいるのである。

【ドラゲイル編】

ルミ：白竜族の姫、一応大食いキャラのはずだ。竜の姿は白くスラ

リとして美しい感じがある。人間の姿のときとは大違いである。

イルリル：竜王女。創造、時空の属性を仕えて下級の神と同じ程度の力を所有する。あえて言ってしまうえば、魔王の横に並ぶ世界最強。

イルリヤ：イルリの愚弟。実力はイルリと同じ程度。語尾に『〜でおじゃる』と付き、雰囲気壊す。魔王、竜王女と同程度の力を持っているので世界最強。

ロイル：黒竜の竜人。ルミの護衛（男）・・・ドリアン納豆が大好き。一瞬だが、作者に「こいつホモかっ!？」と思わせる言動をした事で有名（有名じゃないです）。

マイア：赤竜の竜人。ルミの護衛（女）。完全なる常識人。ルミ様と呼ばうとしたところを間違えてマイア様と自分の事を読んでいたことに作者は大爆笑。（誤字です。ホント、恥ずかしいです。ごめんなさい）

ロム：猫の獣人。母親が病弱、薬を買うときに徹夜たちと出会う。ラウに好意を抱く。

結構出す予定だったのだが、全然出せずに終わった。

コウド・リアマー：ロムの父親、食堂を自営業。

ケイト：ロムの母親。病弱でよくドラマにいそそうな感じ。

クオイラス・ロイドロウ：闇ギルド『黒の十字架』の三人の幹部の一人。精神に干渉する魔法が得意で『食夢』という異名がある

【間話】

ハク：白の魔女。二代目勇者の仲間だった過去がある。この世界にはありえない氷属性の魔法を使い、いかなる武器も作り出し、相手を冷風で急速に体力を奪う事も可能。武器を作り出すことにより、だまし討ちなども可能。

三流錬金術師：正直、説明はいらん。

ミルダ：ある屋敷の召使を束ねる立場にいる女性。ほぼ一発キャラ。

サジ：召使の中の一人の女性。これまた一発キャラ。

テイヤ：徹夜（爆笑）

トール・ルクイズ：学園の学園長。『鉄槌』という二つ名がある。

ジーク：剣術が得意。魔法は苦手。学園の生徒

マーリン：魔法が得意、剣術は苦手。学園の生徒

デブ：名前不明。「黒の道化師」という闇ギルドの幹部の一人。相当の量の贅肉を溜め込んだデブです。独特な魔法が気持ち悪さをいっそう目立たせる。

変態女：名前不明。「黒の道化師」の幹部の一人。変態です。変態ゆえに変な負け方をした女性。

しゃべりまくる男：名前不明。「黒の道化師」の幹部の一人。ただひたすらしゃべりまくります。ロミルと戦った事により「無口」と「しゃべりまくる」の共演が成功。

道化師(?)：名前不明。「黒の道化師」のリーダー。美月を相手に多々kじゃツ田が特に何もできずに終わる。・・・すみません、途中から宇宙人と話してました。

えー、コホンツ・・・美月を相手に戦ったものの特に何もできずに終わる。

赤の吸血鬼：名前はキュラ、ハクと同様に二代目勇者御一行だった経験アリ。闇ギルド「黒の十字架」の幹部の一人。赤い矢を発射する弓を使用。

現在ハクと共に行動中。

スウアフル：「黒の十字架」の幹部の一人。魔剣ティルヴィングの使い手。「魔剣」のスウアフルと呼ばれている。

闇ギルド『黒の十字架』のリーダー；名前不明。変な本を持つ。基本的にキリスト教などを否定した感じで作っています。否定できてるかはわかりませんが・・・。

闇ギルド「黒の冒険者」の一人(ヒョロい感じ)：触った相手を無条件で切り傷だらけにする魔法を所有している。SSランカー。これには美月も痛手を追わされる

闇ギルド「黒の冒険者」の一人（ゴツい感じ）；触った相手の一部を無条件で爆発させる魔法を所有している。SSランカー。徹夜は一時的に右腕を使用不可能に……。

トミルズ：SSランカー。「糸殺」という異名持ち。鋭い糸で相手を切り刻む。金属も切り裂くことができ魔族の戦艦も切り刻んだ。

ハクの偽物：ハク…つまり『白の魔女』を名乗っていた女。正直無様だった。

徹夜のお母さん：名前は不明。徹夜が小学生の時から小学校の教師をやっている。仕事とプライベートでは完全に口調が違う。少しおかしい発言が目立つ。

ハゲのおじさん：クロ、フレ、イムが登録したギルドの受付のおじさん。名前はハゲルゲ、真ん中の「グル」をとると「ハゲ」になるということによりクロたちには「ハゲさん」と呼ばれていた。実際にもハゲている。

【魔界】

魔王：魔族の最強のトップ。力があればなんでも正しいと思っている。本名はクルズ・ミリアルズ・サイト・マラサイト。超テクニクに考えた

竜女王、悪竜、魔王と並ぶほどの力で世界最強の三人の内一人（現在死亡。徹夜と美月により撃破された。）

リーシ・トルウマア：現在の魔王に従う魔族でのトップ。『魔界六柱』のNo.1、『漆黑』。片手にロングソード、もう片方にはナイフを持っている。
作者としては凄腕の暗殺者をイメージして作られている。

ジールク・ライ：『魔界六柱』のNo.5『死炎』。紫色の炎を使い、この世界の中では一番の炎の魔法を使うはずだ。仕事を重要視

ミルリア：『魔界六柱』No.3『魔雷』。魔王の娘でリヤナの妹。ほぼ素手で戦っている。今では右腕に徹夜の闇での分解さらに構成の作用により変化し変なマークができており、それが魔法の威力を増加している。

ルクライル・リン：『魔界六柱』No.6『血水』。赤い水：つまり酸性の水を使う。ジールクと良い関係。

トルウ・マイラス：『魔界六柱』No.4『風刃』。風属性の魔法をマスターしており、風属性の魔法に関しては横に並ぶものは少ない。

クロイズル・リクトン：『魔界六柱』No.2『腐土』。よくわからない腐らせる魔法を使用していた。魔王が神というような思考で魔王のためなら死んでも役割を果たそうとする。（現在死亡。自滅）

ゴルド：魔族の精鋭達を集めた『魔隊』のリーダー。ミルリアを殺そうとした事により、その姉であるリヤナの怒りに触れる。リヤナ一人によりゴルド含め魔隊も全滅。魔隊全体の力は魔界六柱のNo.

6よりも低い。(現在死亡)

メイト：ジールクの部下。常に空間移動テレポートの魔法陣の書かれた紙……つまり魔法具を複数所有。

名前の由来は「召使」というものをイメージしてメイド（普通執事ですよね……）の「ド」を「ト」にしただけである。

ロシアン：ミルリアの部下。ミルリアに好意を抱いている。

名前自体は小説を書き始めた時から使いたいな、と思っていたものだ。

サイト・リズメリア：600年前の魔族。魔界六柱のNo.5。名前は二度は出てきていたが特に何か重要な人物ではない。

墮天使：戦争により魔王に放たれる。白い翼で整った美男子の顔。戦争時にイリルさんに吹き飛ばされるも悪魔を盾にして生き残る。

現在は第二章により墮勇と行動中。(現在死亡、和馬によって撃沈)

悪魔：戦争により魔王に放たれる。赤いコウモリのような翼を生やした男。荒い言葉などが特徴。イリルさんにより吹き飛ばされる。

(現在死亡)

カインズ・トルウマア：リーシの代の前『魔界六柱』No.1の男。なんかイメージ的に紳士を意識した。病気で死亡。

ミリア・トルウマア：カインズの妻であり、リーシの義理の母。リーシのファンクラブのNo.0002だ。

【勇者御一行】

マイル・トクルサー：女騎士、実力は高いほうといえる。まともな人だといえる。

サイス：魔術師なのだが杖ではなく鎌を振り回す。これもまともな人だ

ロイズ・ルーサニツヒ：騎士。美月に好意を抱いているが無意味に終る。ラルチとケンカするのが多い、でもなぜかコンビネーションは結構良い。

ラルチ：美月が大好きな女の子。同性愛者という名の変態。

ロイズとケンカが多数ある。勝負のさいにはロイズと一番コンビネーションが良い。

ロミル・トゥートニ：無口で実力はあり、ほとんどが謎である。あまり見せ場がなかったが実力は美月を除いた勇者御一行の中では一番といえる。

【???】

ヒドラ：竜の亜種。チャラ男なのかまじめな男なのかよくわからない。

ミイ：黒髪黒目の少女。ヒドラになついている。

ルウ：魔界で保護されていた黒髪黒目の少年。人間だ。

【ミラゲイル編】

ザアク・オルライト：大国ミラゲイル一の騎士。盾とロングソードを扱う。『王剣』と呼ばれ有名である。

ミラゲイル国王：ガイト・ミラゲイルという名前である。王になる前は戦場で暴れまわり『闘王』という名で呼ばれている。

ロザ：ザアクの使い魔のファイバーン小竜

ナイト・オルライト：ザアクの息子。将来は父のような立派な騎士なることが目標。

ミチル・ミラゲイル：ガイトの娘。少し気弱な正確

フレイ・ミラゲイル：王妃。ガイトの妻でありミチルの母。

レア・オルライト：ザアクの妻であり、ナイトの母親。

《第二章：墮勇と墮天の面倒事》

リミ：徹夜に救われた後に、リーシに預けられる。完全に甘やかされて育てられることは間違いない。

天竜 瑞穂：男なのに外見は女。気の強い性格であり、相手は選んで暴力を振るう。（例：徹夜に蹴りは放つても、美月にはいっさい攻撃はしない）

元の世界では徹夜のクラスメート。そして再び勇者として異世界で徹夜と会う。

普段はハンマーを使っている。

総帥 和馬：The イケメン野郎。元の世界では徹夜のクラスメート。瑞穂といつも行動していた。瑞穂と同時刻一緒に異世界で勇者として徹夜たちと会う。二丁の拳銃を扱い、普段は実弾、そして無理だと判断すると魔弾を出す拳銃を取り出す。

都堂 泰斗：墮勇の一人、基本的にいやな性格ではない設定。

水晶を作る力を持っており、形によってはその水晶は鎧をも砕く強度と鋭さを持つ。

そして魔力を反射する作用があり、魔力の攻撃の防御：または反射させ、一点に集めて撃つ攻撃ができる

武器は日本刀を使っている。

幻術の墮勇：少年、詳しい歳は不明（徹夜たちと同じ程度）、名前不明。基本的に丁寧口調、幻術は最高の技。だまし討ちなどをする事に特化。ハルバードを使う。（現在死亡、瑞穂により撃沈）

透明の墮勇：少年、歳不明、名前不明。「攻撃タイプではない」が口調のめんどくさがりやだ。

バスタードソードを使う。（現在死亡、美月に追い詰められ気絶、そこを徹夜によって首をはねられる）

【エルフの森】

ギエル・ハイエルフで創造の魔法が使える。語尾の「・・・ぞい」が特徴。エルフのなかでの王族。エルフの中では最強である。何百年も生きており、600年前に生きてたリヤナとも会っていた過去がある。ちなみにその時の姿は大人である。姿は大人であったが精神は子供だったらしく、リヤナのデザートを盗み食いついてケンカになつたみたいだ。

ミーファ：エルフの女性。ギエルのやる気を引き出すことが得意。森の種族。エルフ自体は美男美女。当然ミーファもそのなかに入る。エルフ全体がそうだが、森に入ることにより一時的に戦闘力UP。年は不明。

……以上。

【名前のあるキャラorそれなりに喋ったキャラ 計92名】でした。

キャラが多いですね。これじゃあ、いくらキャラをかぶらないようにしても無理です。

では、ここらで終了させていただきます。

焼き芋：こいつは死ねばいいキャラ b y、徹夜

(現在死亡。徹夜によって暑い日差しの中を物干し竿で干されて水分がなくなり息を引き取る)

第1～2章 キャラまとめ(後書き)

誤字・脱字があれば御報告ください

プロローグ ある世界の過去（前書き）

ほぼシリアス。

徹夜は出てこない。

徹夜などには直接的には関係は無く、ストーリー的には少しばかり重要。

なので、書いてみた。

プロローグ ある世界の過去

ある一人の黒髪の少年が居た。
全てが平凡。

今まで進んできた人生でも、今の暮らしでも、そして将来も……
だが。

その少年は、ある時から人生が変わる。

違う世界で異世界からの訪問者……つまり勇者が召喚された。

そう……その黒髪の少年が召喚されたのだ。

最初は戸惑いしかなかった。

何も考える事ができなかった。

普通の人間は、こんな時に余裕があるなんて事はありえない。

戸惑い、混乱し、何も考えられない。

その状況に流されていってしまう。……それは少年も例外では
なく。

「魔王を討伐して欲しいのです」

そんな言葉を、言われた。

それでも少年は混乱し、何も言う事ができない。

だが、それは相手にとって思うつぼ。

相手に勢いで押し切られ、流れるままに訓練し、流れるまでに旅に
出た。

勇者になることで運動神経が上がるらしい、勇者になることで特別
な力が手に入るらしい、勇者になることで人々に称えられるらしい……

勇者になることで……辛い思いをするらしい。

ただ：普通の人生を送るはずだった少年は、知らない人の都合で普通以下の生活を送る事になる。
元の世界のために頑張った。

初めて、剣を手を持った。

初めて、大量の血を見た。

初めて、死の瞬間を見た。

初めて、生き物を殺した。

初めて、生きた人を殺した。

少年は辛い旅をした。

仲間が居た？ いや、仲間というよりも監視だった。

休む日があった？ 休む日なんて一日も無かった。

人にお礼を言われた？ 言われた。……でも、無理矢理やらされて
いては喜べるような事ではなかった。

そんな少年の旅は、どんどん進んでいく。

辛い思いをした、泣きたくなるような事をした、人を殺した、そして
自分の心を殺した。

そんな少年の旅に一つだけ、小さな光が見れた。

それは、一人の女性だった。

女性は子供の頃から『殺し』を教育され、自由が無く、自分を殺そうとしていた。

それは旅の中である一つの国の大きな損になることをしてしまい、恨まれ、刺客として送り込まれたのが彼女だった。

その国はどうにか潰した。

女性は自由になった。…でも、行き場所が無かった。

だから、仲間になった。最初から居た監視役達は良い顔をしなかった。

そこは少年が、押し通した。

監視役達は、少年が普段より頑張らせるためには使えらと思ったのだろう。

少年は頑張った。

彼女が生きる世界を平和にしたかった。

擦り傷をつくった、切り傷をつくった、骨折をした、死にそうになった。

でも、休まなかった。

女性に心配された。

でも、その顔を見るとより一層頑張る事ができた。

…自分のことなんて考えることなんてできなかった。

そして、そんな日々は続き。

魔王と戦う日が来た。

それは、今まで以上に辛かった。

監視役の人たちは、おびえて何もできなかった。

少年にとって大切な女性は、少年が造った結界の中で、外に出る事ができなかった。

事実上一人での決戦。

何時間も戦い続けた。

何回も死にそうになった。

でも、自分の能力で傷は数秒で自然と治り、倒れることを許さなかった。

魔力が削られていく、体力が削られていく、気力が削られていく。

魔力は特別な薬を飲んで補った。

体力も特別な薬を飲んで補った。

気力は大切な人の顔を見ることで補う事ができた。

そして、魔王は倒せた。

女性は少年に対して非常に怒っていたが、少年はとても嬉しかった。女性の世界を守れた事が嬉しかったのだ。

そして、勇者を召喚した国に戻り、報告した。

元の世界に帰る事ができないと言われた。

だが、そんなことはもう少年にとって関係が無く。

女性と共にその国から姿を消した。

それからの少年の生活は辛い事もあっただろうが、今までとは違っても幸せなものだっただろう。

その生活は十数年続く。

子供ができた、幸せな生活ができた、守るべき物が増えた。

女性と子供と、もう少年とは言えなくなってしまうた歳の少年は、気分転換に旅行に出た。

それはあの国だった。

自分を召喚した国の王都に行った。

少年にとって、もう国なんてどうでもよく復讐ふくしゅうなんてものは考えても無いし、関係なかった。

それなのに、勘違いされた。

觀光気分だった少年たちは、いきなり襲われた。

いきなりでも、少年は一応勇者。

返り討ちにすることは簡単だった。

強者が何十にも襲い掛かってきた。

だが、唐突な事過ぎて反応するのが間に合わず…最初に女性が殺された。

それは心の大切な支えを失った瞬間だった。

目の前が真っ暗になり、気づいたときには刺客を全員殺していた。

残ったのは今はもう体温の無くなった女性と、泣いている少年と少年と女性との間に生まれた子供。

「絶対に潰す。何年かけても、何十年かけても…絶対にこの国を潰してやるッ!!」

怒りに満ちた瞳と、その声。

そして、子供の泣き声だけがその場に響いていた。

プロローグ ある世界の過去（後書き）

いきなり変な話を書いてしまい、本当にごめんなさい。
プロローグを書いてみようかな、と思い書いてみた。
前書きに書いたとおり徹夜たちには直接関係はしていません。
でも、ストーリー的には関係があるような気がします。

次こそは徹夜などを出しますので、宜しく願います。

親に予備校に行かされることになりました。

平日五日間の内、二日間があり、家への帰宅は10時以降決定、い
え〜い

・・・超めんどくさいです。

なので、投稿日もより一層、遅れますので・・・まあ、やだよ・・・。

誤字・脱字があれば御報告ください。

ちなみに面倒になって誤字・脱字のチェックはまともしていない。

1話 途中からだるくなった(前書き)

タイトル・・・それは作者の現状であるからして・・・。
ごめんなさい。

説明ばかりの文にだるくなりました。そして、内容もだるくなりました。
した。

本当にごめんなさい。

1話 途中からだるくなった

どうも、景山 徹夜だ。

この頃では、「徹夜」や「黒いの」としか呼ばれないのでどうにも苗字を忘れてしまう日々が続いている徹夜です。

・・・まあ、こんなどうでも良いことはほっといて状況説明に行こうじゃないか。

俺は歩き続ける。

周りは白く、俺以外の三人は見る事ができない。

ただ歩き続けるだけ。

なんか俺だけおいて行かれてんじゃね？と、少しばかり心配になっ
てしまいが、めんどくさいのでとりあえずは歩き続ける事に決めた
俺である。

「むう〜…暇だな〜」

…と、そんな事をぼやいてしまうと同時に、視界に変化があり、今
までの白とは違う普通の光が俺の目の前を埋め尽くした。

正直な所、「普通の光」っていうのが意味わからないけど、そこは
ご想像に任せようと思った俺である。

まあ、とりあえず風景描写に戻るが……そこは、一つの部屋だった。
俺が出てきたのは、白い光で埋め尽くされて行く先が見えないが豪
華な装飾の扉だった。

「あらあら？ 瑞穂殿、和馬殿、やっとのご帰還ですかニヤ？」
そして、その扉の前には一匹の黒い猫が居た。しかも、喋ってる。
もしかして…ア ルー？（もしくはメ ルー）

「おう、タベ。やっと戻れたんだよ」

それに瑞穂が答えている。
タベ……って名前ですか？

「そちらの方々はどなたですかニヤ？」

「俺達が行った世界の勇者の男のほう景山 徹夜で、女のほう内藤 美月だよ。ちなみに元の世界で俺達のクラスメートだったな」
タベの質問に和馬が答えた。

「ほうほう、おめでとうございますニヤ。この世界を中継として元の世界に戻れますのニヤ。」

ちなみにボクは限りなく猫に近い猫族の獣人である、タベ・ルラーユなのニヤ。」

以後お見知りおきをなのニヤ」
タベ・ルラーユ……？ うん……？ 食べるラー油……か？

「ちなみに、あなた方の世界でブームになったらしい物とは違うのニヤ。全部偶然の産物なのニヤ。」

元の世界に戻ってからこつちに来た時に、お土産としてボクにくれなくていいのニヤ、もう100以上はもらってるのニヤ。ちなみに残り98なのニヤ」

全然食べてねえじゃねえか。

むう、お土産……俺もやってみるか……んむ？またこちらの世界に来る？

「またこつちの世界に来る？」

俺の疑問を美月が代わりに言ってくれる。

「んニヤ？ 瑞穂殿たちは説明して無いのかニヤ？」

「ああ、全然してないな」

「んニヤ、面倒だからって説明しないなんてひどいですニヤ。いつも、ボクに説明させるんだからひどすぎるのニヤ」

そんなことを言いながらタベは、立ち上がり二本足で部屋から出て行き、十秒もしないで本を二冊抱えて、歩いてきた。

一冊ずつ美月と俺に渡す。どうやら何かの説明書のようだ。

「この世界の歴史と法律、あとタベが進める美味しい料理なのニヤ。あとで見とくといいのニヤ。」

そして、あなた方にはこの世界で戦ってもらうのニヤ」

最後の料理は余計じゃないか？

「・・・誰とだ？」

なんか見当はついていないけど一応聞いてみることにした。

「もちろん墮勇とですニヤ。」

まあ、後の説明はカントクに任せるからいいですニヤ。ボクに押し付けられたものは全てカントクに押し付けるのが決まりニヤ」

結局お前は、楽しんでんじゃねえか。

「一応、ボクはいつもここに居るのニヤ。ここの番人・・・いや、番猫だからニヤ。」

じゃあ、また会いましょうニヤ。美月殿と徹夜殿」

猫は俺と美月に手を振り、それに美月は笑顔で手を振りかえしているが、瑞穂たちが移動していくのでそれについていくことになった。そして瑞穂たちと簡単な話をしながら進んでいくわけだが、ある一つの部屋に入っていた。

「ただいま戻りましたよ、カントク」

和馬がその部屋に居た男性に、そんな事を言う。

「おお、戻ったのか二人とも・・・うん？ その二人は？」

その男性は30〜40代らしい。

スーツを着ていて、ビシツとしたイメージだ。

「俺達が行った世界の勇者です」

「景山 徹夜です」

「内藤 美月です」

それぞれ名前を言ってみることに、ああ・・・なんかもう不安しかねえわ。

当然、これからの事に・・・だけでも。

「ようこそ、新しき勇者様。

私は勘島^{かんじま}得^{とく}。略してカントクって呼ばれている。一応、勇者6人をまとめている役職についている人間だ」

六人だと・・・っ！！？

まあ、別にどうでも良いんだけどね。

「これから二人には、他の方々と同じく墮勇などを相手に戦ってもらう事になるだろうね。

そして、元の世界に戻った時の話だが、私達の高校に通ってもらった事になるだろう」

「高校・・・？」

てか、俺らって三ヶ月と十日以上ぐらい居なかったらしいけど、この場合はどうなってるんだ？

いろいろとめんどくさがりの俺だけど、そういうことは度胸も無く

てサボらないし、高校の事なんてあまり興味なかったから全然知らないからな。

「ああ、君達は長期間でも短期間でも殺し合いをする世界に居ただろう。」

だから、それは私が校長として居る高校に転校してもらい、一から教育し直す事になる。」

まあ、勇者と言う事はいろいろと補正がかかっている状態なので一回聞けば覚えられるし勉強も簡単だろうしね」

「・・・あとは元の世界で私達が犯罪を犯さないようにと、監視とということですかね？」

それに美月は付け足している。

まあ、要するにそう言う事だ。戻ってきた勇者と言っても、不良になれば相当やばくなる。

何十人相手に一人で立ち向かえるような子供をほっておけば何が起こるか分からないからな。

まあ、当然の処置をしているのだろう。

「・・・まあ、そんな所だ。」

悪くは思わないで欲しい。異常な人間が居ればいろいろと混乱をつくるだけだし、勇者だなんだかんだなんて、世界に公にすることなんてありえない、それを人に言った所で可笑しな目で見られるだけだからね」

「まあ、この二人の運動神経やらなんやらは元からですけど」
瑞穂がそんな事を言う。

「元から、とは・・・？」

「異世界なんて物は関係なく、チートな二人だったんですよ」
失礼な。

なんか今更遅いけど俺は平凡な高校生だ。
最初の平凡というのがもう意味を無くしてしまっている今日この頃。
だけでも、俺は諦めない。
絶対に平凡な高校生なのだ。

「ふむ…では、元の世界での力の制御なども既に分かってるだろうから、しつこくは言わないようにしよう」
制御なんてしてなかったけどね。

「今は夏休みの終了、十日前だ。
学校の開始までには転校の手続きをしておこう。それまでは家で休んでくれると良い。
では、瑞穂君たちにはこの国の今居る王都を含め、世界を渡る扉までの案内などを頼もう」

そう言い終わると、和馬も瑞穂もテキトーな返事をして出て行く。
それに俺達も付いて行くわけだが、本当に面倒だ。
なにがって？ そりゃあれだよ、これからのことについてだよ。
そして、どうやらそこは城だったらしく、外に出ると王都の光景が目に入る。

「うわあ、なんか凄いね」

美月がそう言うのかもしれないだろう。

今までの魔法を抜けば中世ヨーロッパ的なものではなく、限りなく近代のものに近い。

浮いている自転車などもあったりなど、いろいろと凄いのだ。

「勇者が何十人も召喚されてきた事によって、この王都は他の国に比べて進歩が断然早い。」

まあ、昔は違う国が勇者を召喚していたらしいが、ある時唐突に滅んだらしい。その時の資料は残っていないから、今も詳細不明だけだな」

そんなことを言いながら俺達は観光をしていく。いろいろと今までとは違い、とても面白い。

前の世界での魔族のカラクリが少しばかり進歩していて、魔法の力が大いに使われている。

どうやら科学と魔法の混合は難しくらしく簡単には俺の故郷のような世界にするのは難しいらしい。

そして、数時間歩き。

次は城にある扉の前に来た。

それは、元の世界に戻る扉らしく、再び扉に入る。

さて・・・本当にどうなるんだろうな・・・。

なんか長い間居なくなってしまったけど親に怒られるかな・・・？
うーむ、なんか養子とかとってそうで怖い。

できたら弟が良いです。

1話 途中からだるくなった（後書き）

食べるラー油、ブームでなくなったけど・・・いつ食べてもうまし。次は、家に帰る場面です・・・あと、別に養子を取ってるとかは確定ではないわけです。

ストーリーですか？

考えてないですよ。俺の場合は大雑把に考えてから本番で細かく書いていく派です。

最初は考えてから書いてたんですけどね。めんどくさくなっちゃったんですよ。

誤字・脱字があれば御報告ください。

2話 ただいま(前書き)

今回は最後まで、気持ちを保ったまま書けました。
まあ、gggggですけど。。。。

結構前話との間を空けてしまいすみマセンでした。

2話 ただいま

むう……。

あ、いや、なんでもないですよ。

「こつちだな」

そう言った瑞穂の後についていく。

和馬は用事があるらしく、近代化した異世界の王都の中に消えていった。

できたら、あのイケメン野郎にはこの世からも消えてほしいが、さすがにそれはありえないと思うので、諦めよう。

「む……正直、実感がわかねえわな」

元の世界に戻るなんて、あまり実感がわかないものですよ。

最初は、定番的に帰れないものだと思ってたわけですからね。

ちくしょお、これだったら手紙を送んなくても良かったんじゃないかねえか？

あゝ、早とちりしたなゝ、めっちゃ恥ずかしいやんけ。

「帰れるとは思ってなかったもんね」

俺の言葉に、美月が返答する。

俺は聞かないで城を出たのだが、美月の場合は第二王子さんに聞いていたらしいからね。

「ああ、そうだな」

美月とそんな軽口を叩きながら、瑞穂の後について歩いていく。

「それにしても……魔族やら、魔物やら、人やらを叩きのめしてきたわけだが、正直な所……日本に帰ったら、罪人だよな、まあ……異世界のことなんて関係ないんだけども」
いろいろとヤヴァい訳ですね。

「……まあね、それはもう状況的にしょうがないんじゃない、かな？」

齒切れの悪い美月の返答。

これは確かにしょうがない、としか言いようが無い。

「私達はあの状況で生きることだけを考えることしかできるわけがないんだから……」

「……そおだな」

生死が付きまとう場所にいるのだから、しょうがない。

そう……自分に言い聞かせるしかないわけだ。

他には何にもしない……というより、できるわけがないのだ。

いろいろと余裕な感じだったが、あんな状況でも基本的俺はチキン。そこに飛び込める決意をすることはできるが、正直なところで言うところの元の世界で「殺せ」なんて言われても、絶対にやることはできないだろう。

まあ、売られたケンカは買いますが、絶対に殺しはしませんね。

あの世界では、戦いが普通。

殺す事が普通なわけだ。俺はそれに対応して生きていたわけであるから（まあ、殺すのは少なかったが）、元の世界では絶対にやらない。

それが普通なのであり、あっちの世界で生き物を殺してきたからって元の世界で異常な奴というわけではないのだ。人間、誰でも正常

に生きていきたいのだからさ。

「まあ、俺は召喚される前と同じような生活に戻るだけだ」

「まあ、そうするしかないだろうけど・・・」

「俺の場合は食べて、食って、寝て、また寝て、そして寝る。それだけだからな」

「それは食べすぎだし、寝すぎだよ」

そんな美月の言葉は無視しよう。

睡眠は、人生での唯一の救いなのだから。・・・んむ？ この言葉は小学生のときに言ったような気がするぞ？

でも、正直覚えてないんだけど・・・。

まあ、小学生のときの俺は常時寝ぼけていたからな。……あまり覚えていないんだよね。

ん、俺ってそんな感じの事言わなかったっけ？

「うん、たぶん気のせいだ」

「なにが・・・？」

「いや、なんでもない。俺が台詞を使い回しするわけ無いもんな・・・」

「うん」

「????」

美月が疑問の表情を浮かべているが、俺は勝手に納得して、その話題を終了させる。

こんな話をしたって意味は無いだろうし、美月は記憶力がハンパないから正確な答えをしてくれるわけだ。

俺が台詞の使いまわしをしていたなんてショックで、死にたくなるよ……。

「よし、ついたぞ」

その瑞穂の言葉。

目の前には、扉がある。

瑞穂が扉を上げると、前の扉と同様に先は見えない。

瑞穂が黙って入っていくので、俺達も特に話さずに入っていく。

それから先も同様だった。…とりあえずは歩くだけ。

そして、またも変な空間を出た。

そこはある一室だった。

特に変哲も無い部屋。瑞穂はこつちだ、と言い…扉に向かう。

その扉を向かうと、なにやら廊下に出た。

そして、廊下側からの扉は『関係者以外の立ち入りを禁ずる』と書かれている。

「ここはカントクが言ってた、高校の中だ。この部屋には高校教師も一部しか入れなくせに、ほんの一部…まあ、例の六人の生徒は自由に入ることができる。謎の多い部屋だといわれているな。

まあ、徹夜と美月もそこに入ることになるだろうから、実質8人になるわけだ」

まあ、確かにそうだろうな。

ふむ、つまり勇者のための一室というわけか……。

「ふむ、ちなみにこの高校の場所は、前の高校の駅から何駅ぐらい違うんだ？」

「ん…確か、5位だったかな」

うあ、めんどくさ。

前の学校は近所だったから時間ギリギリでもよかつたんだけどな。

そんな会話をしながら、高校から外に出て駅までの道を歩く。

まあ、道ぐらいなら一回通れば簡単に覚えられるだろうから、もう大丈夫だろう。

ちなみに、今の時間は19時。

結構、暗いのだが、やはり元の世界だね。夜でも凄く明るいぜ。

まあ、とりあえずは切符を買い、電車を時間まで待ち、乗り込む。

瑞穂は電車には乗らずに高校に戻るそうだ。あのカントクというオジサンに、前の世界での報告をしなくてはいけならしい。

あゝ、いろいろとめんどくさそうだな……。

そして、今は人が他に一人ぐらいしかいない電車の中。

「……スウ……スウ……」

「……うむ？」

隣から聞こえた睡眠時に定番の吐息の音。

そちらを見ると美月が、首を上下にコクコクと揺らしながら寝ていた。

「美月にしては珍しい……」

つまりは元の世界に戻ってきて、それほどまでに安心して言う事か……。

俺の場合はいろいろと巻き込まれて行ったわけだが……美月の場合は、勇者として旅をしていたわけだからな……。

休憩は何回もしていただろうが、本当に気を休める事なんてなかつ

たのдарろう。

俺は、美月の顔を優しく撫でる。

「美月……ご苦労様」

そんな俺の眩きは、寝ている美月には聞こえるはずがない。

おい、今…嬉しそうな笑みにならなかったか？

…そんな俺の疑問は、多分気のせいだろう。

「え〜っと、確か……こんばんわ〜っ!」

扉の横にあるインターホンのボタンを一回押しながら聞こえるように声を張り上げる。

こんな遅い時間にごめんなさい。

ちなみに、美月は俺におんぶされていても、まだ寝ている。

『どなた様ですか?』

インターホンから、声が聞こえる。

これはカメラなどはないので言葉で確認する必要があるのだ。

この声は、カメラで声が変わってるものの……美月に一人だけいる中学生の弟か……。

「えつと〜…宅配便です」

何故そこで嘘をついた。

『こんな時間に?』

「ええ、緊急のお届け物です」

『うーん、一応、怪しいから聞こうかな……。お届け物の品はなんですか?』

とりあえずは俺に聞こえるように怪しいと言っな。

「お前の姉です」

『は……?』

うむ、当然の反応だな。

そんな言葉が聞こえると、ドタドタと急いでるような足音が聞こえ、次の瞬間にはドアが開いた。

「美月姉……ッ!?!?」

現れたのは中学生……。たしか二学年だったかな?

「そして、テツ兄だっ!?!」

なんだ、お前のその言葉は……。ちなみに、小さい頃からこいつとは知り合いだったわけですし、自然に『テツ兄』と呼ばれるようになってしまった。

こいつを俺の立場から見ている限りだと……一人っ子の俺だが「弟って良いなあ」と思うわけである。

「ほれ……。えっと、確か冬日ふゆかだったよな……。?」

「……。まだ、俺の名前を覚えてないんだ……。まあ、こんな女っばい名前を覚えられるのも嫌だけど」

「じゃあ、フユ。俺帰るから」
ちなみに、俺はいつも「フユ」と呼んでいた。

「うん、じゃあね」

その言葉と共に、冬日は美月を抱えて家に入って行き、次の瞬間には美月の親などの声が聞こえた。

ふむ・・・とても嬉しそうな声ですね。

うん、他の人を見るのはいいんだが、自分の場合だと、どうなるか分からないから困るな。

「・・・・・・・・んむう」

『美月ちゃんの家から電話があったんだもの、徹夜はもうすぐ帰ってくるわよ!!』

『確かにそうだが・・・遅すぎないか?』

俺は家のドアの前に立っていて、他の二つの言葉は家の内部。完全に、待ちかまえられている・・・。

「・・・・・・・・(さて、どうしようか)」

小声でそんなことを言う俺。

なんでだろう、なんで俺の親達は入り辛い雰囲気を出すんだろうか・・・。

『なんで帰ってこないのよっ!?!?』

『知らんっ!?!じゃあ、確認しに行けば良いだろうっ!?!』
その瞬間にドアが開いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ

「・・・・・・・・え?」

俺の声と、両親の疑問の声。

「居るんだったら、。ぱっぱと入って来いっ!! こおんの、親不孝者がアッ!!」

声を荒げたのは我が父・・・名前は武^{たけし}。

なんかゴツイ体のサラリーマンだ。ちなみに、太い腕で首根っこを掴まれ家の中に投げ込まれた。

「つと、と・・・」

空中で上手く体勢を建て直し、トンツ...という、軽い音をたてて着地する。

そして、反論をどうにかしようとした瞬間に、母親に抱きつかれた。

「今まで、どこに居たのかは知らないけれど、心配したのよ?」

.....ああ、何も言えなくなった。

「じゅめん。...そして、ただいま」

「おかえり」

両親とも声がハモっていた。
やっこのことで、母のハグから解放される俺。

「……景山さん、どうしたんですか？」
そんな声が聞こえた。

そこには俺の知らない中学生ぐらいの少女……。

「……どなた様ですか？」
その女子と、俺の言葉がハモっていた。

「ああ、徹夜が居なくなっただけ寂しかったから、養子とったの
母の発言。」

「どうだ？ 可愛い子だろう？」
変態親父はほっておくとして……。

「……あなたが三ヶ月間も居なくなっていた親不孝者の徹夜さん
ですか。どうも、この方々に養子にとられて。この家の娘……つ
まりはあなたの義妹やることになりました。
かげやま 景山 しおり 菜です。どうか、宜しくお願いします」

ハアアアアア…ッ!!!?

2話 ただいま(後書き)

実は美月ちゃんには弟がいたり・・・徹夜の予想は少し違う感じで当たっていたり・・・義妹ちゃんは徹夜のことをよく思っていないかったり・・・。

この小説、俺が書き始めたときのルールがあつたのです。

・あとがきは書くとしても短く、無駄に多くしない。

・小説の本文内に「焼き芋」または「作者」などは書かない。

なのですが、破ってしまいました。軽く忘れてましたね。

なので、これから再び守ろうと思います。(後書きのルールは、今回の見逃して下さい、あと小説についての連絡のときも見逃して下さい)

誤字・脱字があれば御報告宜しく願います。

3話 十日後の朝

むう…、一応10日間が経った。
なんかもう、いろいろと疲れた。

俺の予想通り養子なんだかんだ…、まあ、ある意味予想外だ
けども…。

「うむ、作るのは久しぶりだから…少しばかり不恰好になるかも
な…。まあ、少しの揺れでグチャグチャになることは間違いない
だな」

朝早くキッチンに立ち、包丁やら菜箸などを片手に悩みながらも作
業を進めていく。

まあ、あえて言うとな、弁当を作っている。

前は基本的に、弁当は俺が作っているため、いつも朝早くにおきて
いるわけだ。

「…景山さん、おはようございます」
そんな声。

それはキッチンの横にあるリビングでコーヒーを飲んでる母に対し
て、今起きてきたばかりであろう、景山 栞の朝の挨拶。

景山 栞は挨拶をした後に俺を見て、ビックリしているようだ。

「おはよう、栞ちゃん」

それに対して、母はニッコリと笑いながら挨拶を返す。

「うむ、無駄な中世ヨーロッパ生活が長かったせいか…冷凍
食品の扱い方の詳細がわからん…」

他の二人には聞こえない程度で、俺はブツブツ言ってるわけであり、
冷凍食品の裏に書いてある説明などを見ている。

ちなみに、父である景山 武は今日は特に速く出勤して行き、昼飯はコンビニで買うそうだ。
なので、作る数は三つ。

俺と母と景山 栞である。

どうやら、景山 栞は俺に対してよくは思っていないらしく、10日たった今でもなかなか打ち解けることはできない。
まあ、そこは少しずつ段々といけば良いだろう。

「景山さん、あれは・・・？」

「むう、呼び方は「景山さん」のままかあ…普通に「お母さん」とでも呼んでくれたら嬉しいのになあ…。。。
あゝ、あれはね。弁当を作ってるのよ」

「なんで、あの人が作ってるんですか？」

景山 栞は、前半に対しては苦笑いをするにとどめて、後半に対して質問する。

ちなみに、説明をする事が遅れたが景山 栞の通っているのは中学校。
その中学校では、給食は出ず、自分で弁当などの昼ごはんを持っていく必要がある。

ちなみに、内藤 冬日・・・つまり、美月の弟であるフユも当然同じ中学校である。

「徹夜は小学校高学年の時に自然に作ってくれるようになったわよ？
一応、徹夜はケーキとか作れるんだけど……あれはね、面白そうだったからって理由をつけて私に手作りのケーキを食べさせたくなったから練習したんですもの」
ケーキの話題は、徹夜に聞こえないように小声でしゃべる母。

「・・・なんか、俺の恥ずかしい過去が暴露されているような？」
そんな感じで、疑問の表情を浮かべる俺。
こういうときは、正直なところ母が怪しいが、とりあえずは弁当に集中しないと・・・。

「親不孝なのに親思いなんですね」
その事に、驚いた表情になる栞だが、すぐにその表情は消える。
ハッキリ言ってしまうえば、栞にとってそんなことは関係ないのだから。

「おし、完成」

そんな感じのことを言うと、俺は手を洗って終わりにする。
弁当はご飯を冷やしておかないと水蒸気でご飯が水っぽくなってしまうので少しばかり放置しておかないと・・・。

「今の時間は6:30か・・・電車の時間は7:25だから、余裕だな」

15分前に家を出るので実質7:10なのだが、なんかその前に例の幼馴染が来そうなので怖い。

高校では転校と言う事で、前の学校からは変わり、制服だったのが私服登校になった。

・・・なので、服は基本的に気にしない俺なので、ほとんどの準備が終了している。

俺は階段を登り、自分の部屋に入る。

自分の部屋のドアの向い側に、栞の部屋があるのだが、この状況ではただ気まずいだけである。

いやあ、めんどくさいことになった。

ちなみに、俺の部屋の中は平凡としか言えない。

ベットが一つあり、本棚や机がある。机の横には小さいテレビが置いてあり、その下には定番のように何回踏みそうになった事が分からないビデオゲームが置いてある。あとは収納スペースもそれなりにあるだけで、特に目立つところはない。

「少し寝るかな」

まあ、俺は二度寝が好きなのだから・・・。

「ああ・・・そういえば、充電し終わったかな？」

そういえば、忘れていたのだが俺が異世界に行く前に家に忘れていたケータイだ。

そのケータイの充電が終ってるかどうかを確認した後に、充電のためのケーブルをケータイから引き抜く。

電池の表示は三本・・・充電は完璧である。

「はあ・・・こつちに戻ってきたのは良いとして、学校とか面倒だな」

今の学生なら（学校大好き学生は除く）一回は思うことはあるだろう言葉を口に出す。

とりあえずは、ケータイをポケットのなかに入れて少しばかり準備の確認をする。

いつも思っのだが学校で忘れ物をする悲惨だと思っ。

まあ、美月みたいに一回聞けば覚えられるような人なら問題はないんだろうが、俺は前からも言っている通り馬鹿なのである。

まあ、覚えられないとは言っていないが・・・。

「ご主人、これはなんなのだ？」

いつの間にか現れていたクロが俺に質問をしてきた。

その目線には携帯ゲーム機。

「あゝ、俺は今忙しいから説明は後でな」
テキストな理由をつけて、断ることにした。

「嘘だつ！！ 今二度寝しようとしていたじゃないかー！」
あゝ、知らない知らない。
言ってることがわからなあゝいゝ。

俺は携帯ゲーム機をクロの手の届かない所にしまつと、クロはピヨ
ンピヨン飛び跳ねて取るうとする訳だが、絶対に届かない。
多分、闇を使うという考えは浮かんでこないのだろう。

それをただボーと長い時間の間、眺めている俺。
そんなものがずっと続き、時計を確認してみると7:00。

「結構時間経つてたな……」
そんな事を呟くと……。

『徹夜あゝ、美月ちゃんが来たわよ』
やっぱり来たか……。少しばかりゆっくりしたいわ……。
俺はバックを持ち、弁当のふたを閉め、詰め込んだ後に玄関に向か
った。

そして玄関を出ると、見慣れた顔の人物……。つまりは美月がいる。

「おはよゝ、徹夜」

「ああ、おはよう」

そんな感じで一日が始まる。

3話 十日後の朝（後書き）

内容が相当薄いです。本当にごめんなさい。

まだまだ、ストーリーが完全に考えられていないのに無理矢理投稿した結果です。

次の話は高校なので、それなりに大丈夫かな？ と思います

誤字・脱字があれば御報告ください

4話 高校

「・・・朝飯を食べるの忘れたんだよ」

俺はコンビニで買ったおにぎりをムシヤムシヤと食べながら、そんなことを言うわけである。

お弁当に集中しすぎた・・・。

なんで残りの時間をクロを眺めて終わったのだろうか？ 本当に後悔している。

「徹夜あゝ、電車来ちゃうよ」

美月がそんなことを言うので、慌てて走っていく。

電車に乗れないと、次の電車を待たなくてはいけない。そんな面倒なことはしたくないわけだ。

とりあえずスイカ（発音が大事。間違えると食べ物の方になってしまう）を、専用の機械に押し当てて、ピッ…という機械音になると同時に駅のホームに入っていく。

「朝食忘れるなんて、何してたの？」

「いやあ、弁当を作った後にボーっとしてて・・・」

「徹夜らしいと言えば、徹夜らしい・・・」

そんな感じの会話をしながら電車が来るのを待つわけだ。

「美月は帰ってきて、何か変化はあったか？」

「ん〜……、両親と弟が、より一層心配性になっていることかな」

まあ、一回居なくなったら心配になることは当たり前だな。

「そこは、徹夜と一緒に居るから大丈夫」って言うと、許してくれるんだけどね」
「なんで、そこで俺が出てきた。」

「あとは、今行く高校から突然連絡が来たから、親が驚いてたってことぐらいかな」

まあ、電話で連絡が来たわけだ。

その高校は、私立の高校でそれなりに学力がある生徒が集まり有名な学校なわけだが、いきなりそこから三ヶ月も行方不明になっていた人物に転校して来てほしい、という連絡が来たら誰でも驚くだろう。

「徹夜の周りでは？」

「なんか義理の妹ができた」

「……徹夜って冗談が上手いね」
いや、冗談じゃないから。

「冗談じゃないからな。なんか俺の母さんが寂しいからって養子とつたんだとさ……」

「あの徹夜のお母さんだったら、ありえそつだね……」

「まあ、ありえたわけだしな」

……と、まあ、そんな感じの会話をしていると、電車が来たので乗り込む。

「なあくんか、俺のことが気にくわないらしい」

「・・・なんで？」

「さあ？」

それからはなんか無駄に思い、俺の義理の妹さんの話はやめてテキトーに話をしていた。

まあ、無駄にその話題を続ける必要も無いわけだしね。

とりあえずはそんな感じで時間は進み。

電車を降りた後、歩き、例の高校にまで来た。

そして今は、高校の責任者であるカントクに連れられて、教室の前に来ている。

この高校では1組、2組とかではなく、A～Gの七組らしい。ちなみに、俺達は2年A組に入るらしい。

夏休みが終った二日後に俺達は来ているわけなので、面倒な集まりなどはなしだ。

そして自己紹介の場面になり・・・。

「これからお前らと同じ教室で勉強する二人だ」

先生らしき人が、俺達を紹介していて・・・。

「内藤 美月です」

うむ、男がめつちや騒いでいるな。

当然の事か、やっぱり美月は男子に人気ですなあ。・・・女子にも人気だが・・・。

「景山 徹夜だ」

俺達は、この頃多いなあ・・・と思う自己紹介をした。

「二人は教室は2年A組だが、基本的には2年S組に入ってること

になる。これは他の六人と同じだからな」
そんな意味のわからないことを先生が言つと、生徒達はざわざわと騒ぎ始めた。

他の六人・・・？ つまり、例の勇者つて所か・・・？

ある中学生の一日

「・・・」

ここは中学校。

徹夜や、美月なども通っていた中学校で、今では美月の弟である冬日ふゆひが通っている中学校。

そして、景山かげやま 栞しおりが通っている学校でもあった。

景山 栞は40近くある席の内、窓際の一つに座っており、外の青い空を眺めている状態でもある。

ちなみに、今は授業中。

教科は、数学で夏休み前にやった場所を復習として、短い時間でもう一度勉強をしている。

「・・・つまんない」

ボソリと誰にも聞こえない声で呟いた。

勉強が好き、という人ではない限り一度は思うことだが、何故だか他にもあるような雰囲気がある。

景山 栞はただ青い空を見ているだけだ。

そんな感じだが、授業は進む。

授業が終わり、授業と授業の間の10分程度の休み時間になるのだが、景山 栞は空を見ているだけ……他の人に話しかけなければ、他の人も話しかけない。

この中学校には養子にとられると同時に、通うことになった。

短い期間ということもあるのか、親しい人はいない。

いや、短い期間というよりも景山 栞にはどことなく人が寄りつらい雰囲気があり、近づこうとする者はいない。

それは、何時間も続き、お昼休みまで行く。

「・・・」

一人ポツンと座っている景山 栞が見ているのは、弁当。

上と下の二つに分けられる二段式のピンク色の小さいお弁当。その中身にはおかずとご飯が詰まっている。

白いご飯には、シャケフレークが一面にまかれていて、おかずでは定番の卵焼きにウィンナー、あとはブロッコリーや冷凍食品のスパゲッティ、などと普通としか言いようがないものだ。

その弁当をまじまじと眺めていた景山 栞は静かにふたを閉じる。

そして、バックから表紙が真っ白のよく分からない本を取り出すと、そのまま読み始める。

そんな彼女の時間はどんどん進んで行き。
中学校が終ると、部活に入っていない景山 栞の放課後はただの帰宅になる。

その帰宅の途中。

コンビニの前で景山 栞が立っている。
目の前にはゴミ箱があり、手には弁当を持っていた。

「……………私は、あいつが嫌いだ」
そんな事を呟くと同時に、ゴミ箱に弁当の中身をぶち込んだ。
景山 栞は弁当のふたを閉めると、自分のバックにしまいこむ。

そして彼女は、自分の部屋に向かって歩き出す。

時間が少しばかり戻り

「2年S組は六人しか居ないんだけど、もう君も分かってるとおり特別なんだよ」

その説明を言っているのは、同じくS組らしい、同い年の少年。
神沢 かみざわ 炎 えん という、男だ。

今はお昼で持ってきた弁当などを食事中なのだが、学校ではなく異

世界……つまりは、元の世界に戻るときに中継ポイントとした世界に居る。

S組……それは今では8人だが、その少数だけの組で、その組は授業を受けなくても良いという、特別なものだ。

授業を抜けて異世界でいろいろと仕事……勇者の仕事をするらしい。

勇者の仕事というのは墮勇などと戦ったりなど、異様に強い魔物の討伐などがあるらしい。

自己紹介は、簡単に済み。

一応、瑞穂と和馬を除くほかの四人の名前も顔も覚えた。

この場には、他の四人がいるのでそいつがしゃべったら説明をしようと思う。

「それにしても、同じ世界に二人も同時に召喚されるだなんて、聞いたことがないわね」

そんなことを言ったのはポニーテールの小柄な少女。菜川なかわ 要かなめ。

彼女の足の上には猫が丸まって居て、肩には黄色の小鳥が小さくピョンピョンと跳ねている。

これで少しは分かるかもしれないが、彼女は『モンスターテイマー 獣使い』だ。

「前の高校で瑞穂くんや和馬くん達の同級生だったんでしょ？ 面白そうな人たちが増えて、ボク的には嬉しいなあ〜」

一人称を『ボク』と言っているが、この人は女性。名前は最堂さいどう 奈菜なな。

勇者の六人の中では、一番強いらしい人だ。戦い方が可笑しいらしく、俺的には正直どんな戦い方が気になるんだが、「自分で見るまで内緒」とごまかされていて、教えてくれない。

「私的には、こんな事より仕事をしたいんだけども……」
特に表情を変えることなくそんなことを言う女性。名前は古道^{こどう} 里^り稲^{いな}。
勇者の中では一番仕事熱心と言える。実力ではトップ2らしく、奈菜とは違い、俺が聞いてみると、実践してくれた。

それは植物を生やし、コントロールするもので、最大で100?以上の高さの大木を生やすことが可能らしい。

それが、瑞穂と和馬のほかの四人の勇者だ。

「んじゃ、俺、ちよつと女性と用があるからさ、ここで失礼するね。これから一緒に頑張ろうな」

炎がそんなことを言うのと、手を振りながら走っていく。

ふむ……チャラ男(?)か……。

「私も仕事があるから……これからよろしく」
そして里稲も炎とは違うほうに歩いていく。

「まあ、ちよつとばかりボクが説明してあげようか」
それを見た奈菜が、少しだけ笑った後に話をつなげていく。
ちなみに、和馬と瑞穂はそれぞれ他にやることがあるらしく、ここには居ない。

「まあ、最初は君達のほかの勇者たちの話をしようかな。
他の人たちの長所のネタバラシになっちゃうんだけど、口止めされてるわけでもないから言っちゃうね」。

こつち側の六人の情報を言っちゃうとね。えつと『蛇姫』 『増殖者』 『獣の主』 『世界樹』 『火竜』^{サラマンダー} 『武器庫』 っていう異名つけられてるんだよね」

うん、なんか分かる奴らが数人いるな。その内の二人はどっちがど

つちだかわからんけども。

てか、多分…和馬であるう異名が超微妙だな。

「あとね、墮勇のことなんだけど、三種類の墮勇がいるんだよ」

「三種類って？」

それに美月が質問している。

「墮勇になる過程のことなんだけど、最初からあつちで召喚された墮勇と、こつち側に居ただけど自分の意思で墮勇に墮ちた者、あとは魔法で洗脳されて操られている者がいるんだよね。」

基本的にあつちで召喚されたのこつちで召喚されたのでは質がちがくてね。あつちで召喚されたのは魔法が特別強力だったりするだけで、こつちで召喚されたのは特別になんかの力が使える人が多いんだよ。

だから、こつちで召喚された人を洗脳して仲間にしよつとするわけ」

「洗脳ってどういうことだ？」

「墮勇をまとめている老人がいるんだけど、その老人の強力な魔法で洗脳されちゃうんだよね。」

まあ、心の際につけこんで…ていうものだから、気をつけておけば防げるんだけど、一回洗脳されちゃうと自分の力では脱出できないんだ。

君の報告で言ってた、泰斗くんは洗脳されてる人だね。確か首に変なマークがあったらしいけど、それを壊せば洗脳は解けるんだよ。まあ、呪いのような物だから物理的には破壊できないけどね」

あゝ、勇者から洗脳されて墮勇になったから、瑞穂たちと知り合いだったわけか。

他の奴らは名前自体は知らなかったみたいだしな。

「まあ、墮勇は約15人ぐらいかな？」

まあ、強くて有名な墮勇の異名をあげるね。洗脳されてる人だと『狼王』『竜人』『魔眼』、あとは徹夜くんが倒したって言う泰斗くん……つまり『水晶』の四人あたりで、自分の意思で墮ちたのは『冥土』と『蟲女』の二人かな？　ん〜と…あつちで召喚されて特別強いのは『魔道書』と『妖刀』だね。

あとは、特に目立つ力はないだろうから、別にいいとして。一番厄介なのは墮勇をまとめている老人なんだよね。

いくつものクセのある墮勇たちをまとめてるんだから、あたりまえなんだろうけど……」

ふむふむ、めんどくさそうなのが結構多いな。

「まあ、少しだけ付け加えると、あつちで召喚される人って少しばかり心に傷があったり、可笑しかったりする訳なんだ。

心に傷があるほうは説明はしなくても大体は予想はつくだろうけど、可笑しいって言うのは殺人衝動があったりする人だよ〜。

さっき言った人たちではないけど、現に一人は元の世界で犯罪を犯して少年院にいた人も確認されているしね」

うわあ、本当にめんどくさそうだ……。

4話 高校（後書き）

なんか景山 栞のところが微妙に思えたけど、もういいや、いろいろと・・・。

新キャラがいつぱいだー！たぶん、まだまだ増えていくけどー！

テストも近いので、より一層投稿速度が遅くなります。

誤字・脱字があれば御報告ください。

5話 マオウ（前書き）

柿^①ピーを食って、口の中を切った。
はみがきしたら歯^②ブラシが真っ赤になった。ビビッタ……。。

5話 マオウ

「あ〜？ これは食べたのか？」

俺の目の前には、一つの弁当。

その弁当の箸は汚れてはなく、綺麗なままなのだ。完全におかしい。食べたのなら、汚れることは決定事項。

「……………まったく、食べ物をお粗末にしちゃいけません、つてな〜」

そんな感じのことを呟きながら俺や母のを含め三人分の弁当箱を洗つていく。

キッチンに一人の俺。

父はまだ帰ってきておらず、母はテレビでいつも見ている家の問題をリフォームして取り除き、なおかつとても住み心地の良いものにする番組を見ている。

問題の義理の妹さんは、自分の部屋にいるみたいだ。

「それにしても……………いきなり帰ってきたとは言え、なんで俺は嫌われてるんだろうか？」
んむう、よくわからん。

正直、こんなことをされるまで嫌われてて良いのか、これ？

どうにかしないとダメかな？ 正直な所、こういうものを解決しようとするのは、面倒だから考えたくもないし、行動に移りたくもないんだけど……………。

でもさ〜、同じ家で生活をしているのに、ずう〜つといやな雰囲気
で居るのは嫌なんだよね〜。

俺がずっと生活していて、休める唯一(?)の場所なのに、その場所
でさえも休めなくなってしまうのは嫌なわけである。

「・・・ふむ、まあ・・・保留でいいか」
面倒なことは、とりあえず保留。

別に今すぐやらなきゃいけない、っていうことじゃないしな。
なので、とりあえずは後回しだ。今はとりあえず今の環境に対応して
いこうと思うわけですよ。

今の生活、そして高校、あとは今の世界に、面倒事がたくさん詰ま
った異世界。

まだまだいろんな物がたくさんあるが、それら一つ一つに10割じ
やなくてもいい、7割程度ぐらいは対応していかなければいけない
だろう。

「・・・本当に面倒な事が多い気がするな」

美月に会わなかった幼稚園生時代に戻りたい。

・・・そんな俺の願いは、神に届くわけではない。

「時空属性の魔法でどうにかできないか？」

そんな事を思った俺だが、とりあえずはもう考えることをやめよう。

美月と俺は、学校に登校し、もう決定事項のように異世界に来てい
た。

「んじゃあ、とりあえずは実力を見せて欲しいんだよね」
そんな事を言ったのは最堂さいどう 奈菜ななだ。

「・・・実力を見せるって何をするんだ？」

「ん、元々居た勇者の六人と戦わせようかな、……と思った居ただけど、正直、ボク的にはそれだけじゃ、つまらないかな、……とも思っただよ。

「ただ、あまり良い案がないんだよね」
うん、と、唸っている最堂。

「じゃあ、我が良い案でも出そうか？ ナナ サイドー」
そんな女性の声。

そちらを見ると、黒髪を床まで伸ばしている、雪よりも白いんじゃないかと思うほどの白い肌の女性。

「あれ？ 魔王のあなたがここに居るなんて報告されてないんですけど……ルル・サターニア」
魔王ですとっ！！？

「最堂……魔王って？」

俺は普通にいるこの人物の事を最堂に聞いてみることに……。

「徹夜くんも美月ちゃんも、私の呼び方はナナでいいよ。
この人は、この世界での魔王のルル・サターニアちゃん。ちなみに、徹夜くん達のいた世界でも魔族は黒い肌で黒い髪だったらしいけど、この世界も同じだよ」

「じゃあ、なんでルルさんは白い肌？」
美月が疑問に思ったことを聞く。

「それは、我が魔族と人間のハーフだからだ。新しい勇者様・・・
名前は、ミツキ ナイトウにテツヤ カゲヤマで良いはずだったな」

「ふむ、ハーフか・・・こっちでも、白い肌になるんだな」

前の世界での、赤い瞳と黒い瞳を持つ魔族の少女を思い出したのだ
が：まあ、それは今は関係ないだろう。

「ちなみに、母が前の代の魔族の王・・・つまりは魔王で父が人間
だ。まあ、人間と言っても勇者なんだけどな。

とりあえずは宜しく。これから、一緒に戦っていく仲間だ」

こんな感じで、お互いに挨拶をした。

むう、魔王つて言ったら敵というイメージしかないのだが、どうやら
こちらでは仲間らしい。

あと、付け足すとすれば：本来の魔王の強さというものは、下位の
神に届くはずがないらしい。

それを考えれば、前の世界は質が高く、魔王を含め竜王女などは相
当、上位の存在なのだ。

普通の世界では、魔王は勇者の二歩上か、同等の強さ程度らしい
のだ。俺達は、ある意味ハズレくじを引いたと言っ事だろう。

「それで、ルル。その良い案って？」

奈菜がルルに質問をしている。うむ・・・どっちも名前が同じ文字
の二連続だけか・・・。

「場所は、私の納める魔界。

その中のある土地に、ほぼ未開の森があることは知っているだろう

？」

「たしか、入ったものは重傷を負って帰ってきたり、最悪の場合死んだりする恐ろしい地域らしいね。」

えつと、『魔の森』って呼ばれて恐れられているらしい所だと思っただけど……。」

ええつ、何か恐ろしい所だけでも、そこで何をさせる気ですか？

「その森の奥に、忘れ物をしてしまったな。だから、取って来て欲しいんだよ。」

おい……。完全に自分で行くのが面倒だから人に任せようとしてるだろっ！！

「……勇者だし、あの森で死ぬことはないかな？」

うん……。それは面白そうだねっ。実力も分かるし、あの森だから楽しめるだろうしね。」

あとは六人の勇者の内、何人かにも入ってもらって、森の中で出会ったら戦闘、とか面白そうだね。」

「おお、それは面白いっ。我も参加させてもらっぞ！！」
だったら、自分で取りに行け、コノヤロー。」

なんなんだ、この二人は……。なんで勝手に、盛り上がってるんだよ……。」

「なんか、私は置いて行かれてる気がするよ……？」
美月の疑問の呟き。

「大丈夫だ、心配するな。俺も置いて行かれてる気がする」
そんな二人を置いて、もう一方の二人は、地図で『魔の森』を見ながら、ワイワイと騒いでいる。

「ん、落とし物はどこ辺りに置いたの？」

「ここ辺りだな。では、ルートを決めて行かせるか？」

「それだと、少しつまらないかな？ その人の運も試そうかな、って思ったんだけど・・・」

「では、監視のための魔法をかけた水晶を用意して、それでこちら側の勇者の近い者を移動させ、戦わせるなんてどうだ？」

あれ・・・？ 戦うのって決定事項？ いえか、運が関係なくなったぞ？

「それはいいね。とりあえず、水晶の設置はこっちがやるね。設置には一日もあればできると思う。」

監視はカントクに手伝ってもらおうかな？」

「ふむ、それがいいだろうな」

「じゃあ、これで決定かな？」

「ああ、これで決定だな。やる日は二日後で、移動手段はこっちが用意しよう」

すると、奈菜とルルはハイタッチをした。

「じゃあ、けつてえい」

楽しそうに笑う奈菜と・・・。

「ふふっ、二日後が楽しみだ・・・」
不適に笑うルル。

なんで、めんどくさそうなのが増えていくんだ・・・。

5話 マオウ（後書き）

テストがああ、近い・・・。

前書きに書いたことに特は意味は無いです。何か書こうかな？と思
った末の結果なので、残念な俺です。

誤字・脱字があれば御報告ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5428q/>

俺は闇、幼馴染は光の勇者様

2011年9月30日01時46分発行